ブルトンの騎士候補生

英国孝太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブルトンの騎士候補生

【Ｎコード】
Ｎ５３６７Ｖ

【作者名】
英国孝太郎

【あらすじ】
孤児から騎士へ、騎士から大貴族へと成り上がる美少女物語。ヨーロッパ最後の騎士の国と呼ばれるブルターニュ地方、騎士団社交界アッパータウンで騎士候補生となったナオミ・ニトが円卓の騎士の末裔たちと織りなす、剣と魔法の学園的聖剣ファンタジー。１３歳の美少女は騎士社会の存在を根底から揺るがす、黒き陰謀の渦に巻き込まれる【深夜更新】

【改稿中】プロローグ

【東日本大震災で被災された皆様へ】
このたびの東日本大震災において、
お亡くなりになられた方々に対しまして心よりお悔やみ申し上げますとともに、
被災された方々には心よりお見舞い申し上げます。

現在、プロローグは改稿中のためもうしばらくお待ちください。

＞ｉ３１６２３―３９８８＜

【語句説明】
ＭＭＯＲＰＧ（マッシブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲーム）
一般的に「多人数同時参加型オンラインＲＰＧ」などと訳され、オンラインゲームの一種でコンピューターＲＰＧをモチーフとしたものを指す。
（Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ　フリー百科事典引用）

第1話　星読みの予言【1】<推敲中>

第1話

――ビクッと鳥肌が立つとともに、ナオミはわれに返った。
（今さっき自分は一瞬だけ夢をみていた、また新渡勇人（ニト・ユージン）という少年の夢を――）

今はまわりをみなくては。現実逃避をしちゃいけない。でもこの非現実的な光景を、どうやって受け入れたらいいのだろう。居候をしている宿主の命令で、近くの森に水汲みに来ていた少女は、自分にそう言い聞かせた。

黒髪のボブカットが激しく揺れる。少女の丸い眼鏡には、この森では見慣れない異形な生き物が映っている。白くて大きな何か。あれは白狼だ、まるで雪のように純白で美しい。

霧に包まれた森から逃げ出そうとする者に容赦なく、大人を丸呑みできる程の大きな狼の群れが襲いかかった。木の枝をバギバギと折る音、ナオミの耳に悲鳴とともにヒトを味わうベチャグチャッという嫌な音が聞こえた。

季節は十二月、凍てつく寒さから吐く息は、白く濁り外気を吸い込めば肺がにわかに痛い。きしゃな体のナオミにとって、色褪せたデニムのジーンズに糸のほつれたウールのカーディガンと毛糸のセーター、汚れた木綿のエプロンだけでは、真冬の早朝の寒さに身も心もとても耐えられない。

ナオミの鼻に血のにおいがツーンッと届く。
水汲みにきていた人間に数匹の獣が群がっている。身体の上に小

山ができ、少し離れたところに泉ですれ違った男の首だけが、身体から分離して不思議そうにこちらを見つめていた。

ナオミは心が麻痺し、現実を呑みこめないでいる。

前には巨大な白狼が七匹。後ろには五匹、うち四匹はヒトを喰っている。ナオミは恐怖のあまり木陰のなかに身を潜め、前かがみにギュッと小さくなった。パキッと少女が踏んだ小枝に白い狼はピクッと耳をたてた。

ヤバイ！　ガルルルッーと狼どもの唸り声が聞こえ、白い吐息が見えた。

ペチャッと涎が聞こえる。狼と自分を隔てているのはこの木陰だけだ。身体を動かせばパキッとまた小枝を踏んだ音がした。一瞬、白狼と目があった気がしないでもない。その目は血走っている。すでにナオミは目で噛み殺されたといってもよい。

（もう、だめだ！、こんな巨大な狼なんて今まで見たことないよぉ）

ナオミが瞳を閉じれば、狼は雄叫びをあげて、ナオミが身を潜めている木陰を飛び越えた。すぐに「うわああー！」という耳をつんざく悲鳴が木々の間を木霊した。またベチャグチャッとヒトを味わう嫌な音が聞こえてきた。

獣と目が合ったのは、きっと気のせいだ。早くここから離れよう。

ナオミが恐るおそる瞳を開けた――その瞬間、目の前に一匹の巨大な白狼が少女を凝視していた。その白き悪魔は唸り声をあげ、牙を剥きだしている。獣の口には先ほど喰らった、人の顔の一部が残っていた。

白狼が大きく口を開けた瞬間、ナオミはぐっと瞳を閉じた。

＞ｉ３１５０６―３９８８＜

同時にキャン、キャンッと狼の鳴き声が聞こえた。ナオミが白狼に目をやれば、狼は口に剣を突き刺されたらしく、血泡を吹いて無残に死んでいた。

「おい、生きているか?」と低い声が少女に呼びかける。

ナオミは、怯えた目を細めながら恐る恐る声がする方向へ視線を向けた。そこには、顔におぞましい刺青がはいっている男がいた。左耳にはラインストーンの埋め込まれた象牙の飾りがついたピアスをしている。身なりといえば、黒革の丈夫そうなフロックコートに、この凍てつく寒さから顔を守るためにウールの黒いマフラーを巻き、焦げ茶の髪に黒い山高帽の黒一色の不気味な男だ。

その黒ずくめの男は「大丈夫か?」とナオミにそっと手を差しだすと、少女は震える手で彼の大きな手を握りしめた。同時に恐怖のあまり、ナオミの頬からぽろぽろと涙がこぼれ落ちた。

「た、助けてくれてありがとう。」

ナオミは黒ずくめの男の後ろをみて、目を大きく見開いた。男は少女の恐怖にせまった目をみて、警戒を怠らないように静かに振り返った。黒ずくめの男の後ろには、尋常ではない巨大な狼の群れが唸り、待ち構えていた。

まだあの嫌な音が聞こえる。

ガツガツと嫌な音、ベチャグチャッとヒトを味わう音だ。

黒ずくめの男は外套を襲ってきた白狼にかぶせ、瞬時に隠しもっていた剣で狼を左右に切り捨て、道を拓いた。にぶい感触と生温いものががしぶいて二人の顔を汚した。首筋を伝って、小さな胸に滴り落ちる感触にナオミは震えた。多勢に無勢だ。

「子連れだと不利だ、たしか近くに水汲み場があったな。助かりたければ、そこまでついて来い、あそこだと聖水の魔法が使える」

「聖水の魔法ってッ！」

この男、荒くれ者の無頼漢のようだが、一体何者なんだろう？

一人で逃げるよりも、今はこの男の言うとおりにした方が助かるかもしれない。ナオミを襲おうとした狼の死骸をみながら少女は思う。

＞ｉ３１５５２―３９８８＜

刺青の男はナオミの手を握り、小走りに水汲み場として使われている泉へと駆けだした。

狼の群れは、あばら骨と肉の塊となった一分前までは、人間と呼ばれた死体を喰い捨て、彼女たちに襲いかかってきた。鼻先も牙も赤く染まっている獣を斬り退け、水飛沫をあげて泉に駆けこんだ刺青の男は、ぶつぶつと何やら呟きはじめた。瞬間、泉全体に光の六芒星の円陣が現われ、ナオミたちを太陽のような光で包みこんだ。なにか神々しい力を感じる。その薄いヴェールのような光は波打ち、ナオミの肌にまとわりつきながら天空へと昇っていった。

「聖水の魔法陣、『守護聖人イヴの護り』だ！　お前は、そこにいろ！　魔獣どもは魔法陣には踏みこめん。いま泉は、守護聖人イヴが降臨している。フェンリルがそこに触れた途端、その汚れた魂とともに連中は聖人イヴの力により跡形もなく消滅する」

セイスイノマホウジン、シュゴセイジンイブノマモリ？

そういえば、今日はクリスマスイヴだけど、そのイブノマモリと何か関係が？

それとマジュウってなに？　聖水の魔法ってコレなの？

＞ｉ３１５３１―３９８８＜

巨大な白狼たちが泉のまわりをぐるぐるとまわること数分、殺気

がナオミの肌にびんびんと伝わってくる。
「やはり退いてはくれないか。狙いは俺か、それとも――」
黒ずくめの男はナオミに目をやった。

狙いは私？　そんな馬鹿なことがあるもんか！
「私、狙われる理由なんてどこにもないわ！私は、ただ水汲みに来ただけなのに！」
ナオミは思わず声を荒げた。
黒ずくめの男は、少女の耳元で説き伏せるように囁いた。
「連中はフェンリル狼、北欧神話に登場する邪悪な神々の末裔。今は迷いの森に住みつく白い悪魔と呼ばれている白狼だ」

北欧神話に登場する邪悪な神々の末裔？

男は淡々と白き悪魔の知識をナオミに教えてくれる。
「フェンリル狼ってのは、野晴らしで生きているわけじゃない。飼い主に餌付けされて育つ。連中が厄介なのは精霊使いに命じられたことは、死ぬまで遂行する習性があるということだ。この森のどこかに飼い主である精霊使いがいるはず、そいつを半殺しにすれば全てがわかる。このわん公どもを手懐けるほどだ。相当のてだれに違いねえがな」
ナオミは怯えながら「精霊使い？」と男の言葉を繰り返した。男は苦笑しながら「一昔前までは魔道士と呼ばれ、自分の影に数十匹もの魔物を棲ませている連中のことだ。そいつが迷いの森からこの森へ、獣どもを魔法で呼び寄せたんだ」

セイレイツカイ。マドウシ。マホウ。

「どっちにしろ戦わねばならんようだな。これは私と運命との戦い。お前は一歩もここから出るな」

と男は意味深に呟くと、狼の群れへと斬りこんだ。
ナオミの心は空っぽだった。瞳に映るものが現実として理解できていない。男は全身血まみれに狼をなぎ倒していく。右ふくらはぎを深く噛まれ、膝をつく黒ずくめの男。狼の群れが前屈みになって頭を低く垂れるのを見てとり、男は柄を握りなおす。
「うおおお――おぉ！」
跳躍してきた最後の一匹にむかって、剣を振り上げる。
勢いあまって前のめりにと倒れつつも、剣は白い毛皮を切り裂いた。狼の身体は痙攣を起こしていた。立ち上がったと思えば頭がゴロッと落ちたが――まだ意識はある。血泡を吹きつつも、その目玉はナオミにむけられていた。これは仲間を殺され、黒き炎の憎しみが宿った眼だ。

＞ｉ３１５３２―３９８８＜

男は、なえた手で何とか柄を握りなおし、剣を地に突き立て体重をささえていた。声をあげて息をすれば肺が痛い、脇腹など焼けつくように痛い。
「さっさとでるんだ！　一人で帰れるか？　魔獣は全部始末した。私は精霊使いを探しに行く。なぜそこまでして俺の命を狙うのか、その理由を知る必要があるからな」
男はナオミを睨み据えた。

サッサトデルンダ？　嫌だ。怖い、ここから一歩もでたくない。

「――さあ！」
語気強くいわれ、脅されるように殺戮の現場に足を踏みいれた瞬間、頭だけの白い狼は昆虫のように這うようにして、鋭き牙をむきだし、ナオミと男に喰らいついた。少女の意識が薄らいでいくなか、男の「しまった！」という声が聞こえてきた。

チィッ！　まだ首だけ生きていやがった。フェンリル狼の首は力尽きたのか、瞳に光がなくなると、二人を牙に挟んだまま動かなくなった。

――ザクッ、近くの藪から土を踏む音が聞こえた。

森の木陰から現われた男の姿をみて、黒ずくめの男はそのまま狼の飢えた舌に顔を落とした。

――謀られた。奴が獣の飼い主なのか？　牙に挟まれて体が動けん！　こんなに近くにいたなんて。気づけなかった。絶望のあまり顔をあげることができない。

いや待て、あの制服には見覚えがある。そうだ、かつて私が着ていた制服、確かにそうだ。襟元に金の糸で刺繍された騎士団の紋章と私のイニシャル。それに公国で一つしかない大鷲の銀のカフスボタン。あれは私の制服だ。まさかあの男が。

「――きさま！」

黒ずくめの男は、顔を狼の牙に挟まれながら、声を荒げた。

藪からでてきた謎の男は、ほくそ笑んでいる。どうやら刺青男と面識があるようだ。

「やはりきさまかぁっ！」

まさかお前とは思わなかった、刺青の男は腹の底から叫んだ。

間違いない、奴なら魔獣を召喚できても不思議じゃない。間近に足音が聞こえ、顔をあげた瞬間、不敵な笑みを浮かべ、謎の男は刺青の男に向けて拳銃を二発、容赦なく撃ちこんだ。撃たれた男の頭から無言の血が流れ、脳みその破片がナオミの顔にへばりついた。

殺しを終えた男は息が絶えたえの少女にも銃口を向けた。

オネガイ、タスケテ！　と擦れた声で命乞いしようとも、男は首を横にふる。

怖い、と心の底から思った。死ぬのは怖い、他人に殺されるのはもっと怖い。誰かが男の声をつかって「運命を変えてみせろ、ヒトの子よ」と呟いたようにも思えたが、きっと気のせいだろう。

――ああ、意識が遠のく。

これが死ぬってことかな。これでお別れだね、サヨナラ。

薄れゆく意識のなか、ドンッと鈍い音ともにカンペールの森で、羽を休めていた青い鳥の群れは羽ばたいた。そのうち一匹は古き都ヴァンヌの方角へ飛び去った。

＞i３１７３９―３９８８＜

第2話　星読みの予言【2】<推敲中>

第２話

悪夢にうなされるようにして、ナオミは目を開けた。

体中を触ってみても、痛くはない。傷もない。少女は自分の右掌を握りしめながら、その感触を再確認するかのように「なんだ、またなの。でもこれで五回目。嫌な夢だわ」と声にだすのは、これは夢なんだぞ！　と自分に言い聞かせるためだ。

最近になってよくみる光景なのだが、しょせん夢は夢でしかない。ただナオミは、どうもそれがただの悪夢には思えなかった。

少女は丸い眼鏡をかけながら、ここ最近、自分は夢の中でさらに夢をみている。

新渡勇人（ニト・ユージン）という自分と同じ姓の、しかも生意気そうな少年の夢を何度もみるのだ。その夢は変わっている。なんたって二〇一一年、ずっと先の、そう日本という国の未来の出来事なのだから。なんだか変てこな気分だ。

（えっと何だっけ？　僕はデブじゃない、ぽっちゃりだっけ？）

寝不足と疲労のなか、少女はうずくまりながら、今までみていた悪夢を懸命に思いだそうとしていたとき、屋根裏部屋のドアが「ミシッ」ときしんだ。ナオミがドアの外に耳をすませば、ドシドシと誰かが屋根裏部屋へ続く階段をあがってくる足音が聞こえる。

十九世紀中期に起きた産業革命は、全ヨーロッパの人々に英知と技術を与え、魔法の時代から油の時代へと思想を変化させた。とりわけ蒸気機関の発明は、人々の生活様式さえも１８０度の方向転換をせしめた。だがフランス西部、ブルターニュ地方のフィニステール県南部にあっては、産業革命の風なんて一陣も吹かなかった。オデ川下流の美しい小さな村カンペールは、相変わらず古い時代のま

まだ。

＞ｉ３１５５９―３９８８＜

今日はこの町もクリスマスイヴとあって、少しばかりにぎやかだ。町に一歩、足を踏みいれてみれば、花崗岩でできた古い家並みがとても美しいこと。車の乗り入れが禁止された旧市街には、中世の面影を残す美しい家並みが続いており、みているだけで楽しくなってしまう。

そっと耳を澄ませば、家の広い庭にはキャッキャッと子どもたちの遊び声が聞こえてくる。大聖堂の荘厳な尖塔を望む、レオン通りや美しい家々が並ぶフレロン通りといった商店街は、そぞろ歩きにはぴったりの小道だ。村のバター広場をすぎて、ゆっくりと目にはいるのはサン・コランタン大聖堂だ。

村の交差点、目抜き通りには古びた旅籠がある。交差点のホテルの名はジジ亭、町に二軒しかないホテルのうちの一軒だ。

＞ｉ３１５６２―３９８８＜

町の人々の多くがすでに目を覚ましているように、ホテルの屋根裏部屋の埃くさいベッドのなかで、ナオミは目に強い酸味、痛みを感じて目を覚ましていた。慌てて何度も瞬きをしてようやく深い息をした。

いつもどおりドシドシと足音が近づいてくる。

「おい、野良！　いつまで寝てるんだい！　この居候娘！」

声の主は、宿の女将ヤドリギだ。人相といえば、肌は青白く顔はごぼうのように細長い、鼻は鉤鼻だ。髪形は、高く高く編み上げ、まるで玉ねぎのようだ。見るからにケチで性悪そうな女だ。ナオミは目をつぶって、眠っているふりをした。

「さっさと水をくんでこないか」

ヤドリギ夫人はナオミの体を蹴り飛ばしていった。
「もう起きています、奥様」しぶしぶナオミは寝返りをうった。
これも起きる時間を一分でものばそうという彼女の作戦だ。でも夫人がパッとうすい毛布をはらいのけたので、ナオミが生まれた頃から枕のかわりにしてあるダックスフンド、彼女はこれをジョジョと呼んでいるのだが、彼を抱いて寝ていたナオミもさすがに寝床からはね起きた。

ナオミはヤドリギ夫人のまえに寝起き顔でたった。
「今度、寝坊したら朝飯ぬきだからね。この野良犬め！」
間髪入れずに夫人の右手がナオミにとび、ナオミは小さな声でうめいた。
「お前は孤児、私たち親子がしかたなく育ててやっているんだ！」
そんなこと耳にタコができるほど聞かされている。
自分は孤児、身寄りのない親なしだ。父の遠縁のヤドリギがどんな理由でか知らないけれど、親に捨てられた自分を嫌々ながら引き取ってくれた。当然、ここで住まわせてもらっているかわりに働くことが条件なのだが。

＞i３１６０５―３９８８＜

「帰りにいつものパンを買ってくるんだ。ほらっ、十フランだ」
ナオミは何もいわずにお金を受けとると、とても憂鬱そうにのろのろと起きあがり、どんよりとした暗い気持をおさえながら、すじばった細長い足というか、膝小僧が目立ってきている足をジーンズにとおし、お世辞にもきれいとはいえない古びたエプロンを着た。おかみから受け取ったお金はエプロンの小さなポケットのなかに忍ばせた。

その頃、旅籠の主人ヤドリギといえば大あくび、うーんと背筋を

のばし、ナオミと同じ年の息子ハレルヤはそんな親父を蹴飛ばして、よだれをたらしてまだ寝ていた。ナオミはもじゃもじゃの栗色の髪をなでつけると、どことなくあどけない顔をごしごしこすった。

ああ、そうだ。今日はジョジョ・ダックスフンドを連れて行こう。

突然、女将の怒鳴り声が聞こえてきた。

「さっさといきな！　この親なし、ろくでなし！」

少女は桶をひっさげると逃げるように、一目散に階段を下り外に出た。空にはひとつの星もなく、まだ真っ暗だった。

第3話　星読みの予言【3】

第3話

カンペールの西はずれには古森がある。

年中霧につつまれた不気味な森だ。足を踏み入れれば夜泣きふくろうやカッコーの鳴き声が、朝方になっても聞こえてくる。本格的な冬がはじまりつつあるカンペールの十二月は、いやはや肌寒いどころではない。

最近のナオミの朝の始まりは、この森の泉に水汲みにいくことだ。しかも朝晩と日課、というのもジジ亭の水道管が冬の寒さのため、破裂してしまったためだ。水道管修復の工事はあと二週間、それまで彼女が森の泉に水汲みにいくことが取り決められた。クリスマス前夜祭といっても、彼女の日課は変わらない。

＞i31604—39888＜

ナオミが目指す森は墓地をぬけたところだ。そこは夢にもでてきた場所。

「このあたりって幽霊がでるらしいよ」

「はいはい、聞き飽きましたよ。耳たれダックスフンドちゃん」

ジョジョ・ダックスフンド、この黒色のミニチュア・ダックスフンドとナオミは小さいときから一緒にいるせいか、二人だけの会話ができる。

水汲みは十二歳の女の子にとってきつい仕事であり、かわってくれるものならかわってほしいぐらいなほど、かなり骨の折れる仕事だ。ナオミは弱音こそはかないが、両手両足は血豆だらけでカサカサ、いつも血がにじみでていた。しかも冬の季節は慢性的なしもやけに悩まされているほど。

途中、水汲みにきている男の人とすれ違った。
そうこれは男の人の仕事なのだ。一瞬、脳裏に衝撃が奔った。
あの人は、どこで見覚えがある。そうだ、夢の人だ。夢のなかで白い狼に食べられていた人だ。でも所詮、夢は夢にすぎない。第一、あんな巨大な狼なんてこの世にいるはずがない。

＞ｉ３１６２１―３９８８＜

泉は坂を下ったところに湧きでていたため、行きはそれほどでもないが、帰りは木の桶に水を汲んでいるわけだから、これが一仕事なのだ。なれないうちは何度も転んで泣きながらやり直したものだ。今だって転んでやり直すことはしばしば。
水汲みが遅ければ、ヤドリギ夫妻の罵倒とせっかんが待っていた。夫妻がなぜ自分を虐めるのかはわからない。ヤドリギは「さっさと白状するんだ！」というが、一体全体、自分は何を白状すればいいんだろう？　一度、彼らの虐めがやむものならと、あのことを白状したことがある。

そう、あの魔法のことだ――村のはずれに住んでいる、ダ・カーポという知り合いの魔女にヤドリギ夫妻を呪い殺す呪文を教えてもらい、日々練習中だと白状したら、往復ビンタが容赦なく少女の頬にとんだ。
こんな奴隷のような生活が嫌で逃げだしても、口ではでていけと口汚く罵られても、何度も連れ戻される始末。きっとヤドリギはナオミから何かの秘密を聞きだすため、彼女をそばにおいているのだ――でもそんな秘密などナオミは知らない。

以来、少女は黙って彼らの虐めに耐え忍んでいた。
ナオミはこのような夫婦の間で洗濯や掃除、使い走りなどにこき使われ、ひ弱い体をぼろ雑巾のようにくたくたにしていた。そんな

野良犬のような姿からつけられた名前が野良、だがこの家でナオミの存在は野良犬どころか、犬の糞扱いだった。

少女は上体をかたむけ、自分の体と同じぐらいの桶を水のなかにいれた。そのとき胸ポケットから十フランがすべり落ちたことに少女は気づかず、水がたっぷりとはいった桶を力いっぱいひきあげ、その場にしゃがみこんだ。そして大きく息を吸いこんで一休みすると、両手で水が溢れださんとばかりの桶をもったものの、数歩ほど歩いては休み、歩いては休みの繰り返しだ。

白くて細い腕は重い桶にひっぱられ、ガチガチになった。あかぎれの手からは、たえず血がにじみでていた。ナオミはあえぎ、肩で苦しそうに息をしていた。すすり泣きがこみあげ、喉が思わずつまった。

「ああ、そんな！」

道が悪かったのだろう、昨夜から積もった新雪でナオミは転んでしまった。服もびしょぬれのなか、少女は黙々とくみ直しのため泉にむかった。ときどき口に両手をあて、温めながら瞳にうっすらと涙をためながら、少女を水を汲むのだ。

坂を登りきったと思いきや、また新雪のせいで、ゴロンッと勢いよく転んでしまった。今日はなんて運がついてないのだろうと唇を噛みしめて、木の桶をみた。だが水はこぼれていない。一本の太い手が桶の柄を握っていたからだ。

少女は頭を上げた。

「手伝おう」黒ずくめの男の低くて太い声。

見知らぬ紳士が桶の柄をしっかりと持ってくれていた。

「一人でもって歩けます」ナオミは心にもないことをいった。

よっぽどの物好きなのか、少女がお礼をいい、木の桶を受け取ろ

うとしても男はそれを拒み、自分が運ぶといいはる。少女のあかぎれの両手をみ、麗しいほどの大きな瞳、カサカサの唇をみて紳士はふかく山高帽をかぶった。

「おじさん、どうして手伝ってくれるの？」

「きっと誘拐するつもりだよ」ジョジョはボソボソと呟いた。

「道に迷ってしまってね、森に迷いこんでしまったんだ」

「村まで案内します、ムッシュ」

ナオミは怖がりながら、黒ずくめの男にいった。

「ああ、それは助かる。で、どこにもっていけばいいのかね？」

「ジジ亭、村の古い旅籠です」

「それはちょうどいい。私は今夜、そこに泊まる予定だったんだよ。いやジジ亭に会わなきゃならん人がいてね、部屋は空いているかね？」

「ええ、たくさん！」

ナオミは目のまえの男がジジ亭の泊まり客とわかって一安心。

ジョジョは（いいかい？　油断しちゃだめだぞ、人さらいかもしれないから）とボソボソ。ダックスフンドの忠告、まさにそのとおりだ。きっとヤドリギの友人か何かに違いない。それなら尚更、油断大敵だ。

木の桶を返してといっても、これは女の子の仕事じゃないよ、と入り口まで自分が運ぶといいはる。こんな変わったお客は初めてだ。

＞ｉ３１７３６―３９８８＜

男と森を歩くなか、ナオミはふと今朝見た夢を思いだした。

この人は白い狼から自分を護ってくれる、例の黒ずくめの男の人に違いない。チラッと顔をのぞいてみれば顔には見覚えのある刺青、やはり今日が運命の執行日――ナオミはそう思うと震えあがった。

突然、ジョジョが何かの気配を感じた。

「ねえ、あそこに大きな狼の群れがいる」とジョジョ。
「……！」
やはり、そうだ。夢は今、現実のものとなろうとしている。
どうしよう！　どうすればいいんだろう！　膝がガクガクしてきた。

刺青の男の人は魔法が使えるようだった、いやきっと彼は魔法使いに違いない。こうなればこの人が戦っているうちに逃げるしかない。ひ弱な自分が助かる方法はそれしかない。そう思うと、緊張しておしっこがしたくなってきた。
ジョジョが狼の群れにむかって吠えれば、狼たちも吼え返した。
「おじさん、あそこに迷いの森のフェンリルがいるの！」
やはり間違いない、今日は運命の執行日なのだ。
男に背をむけ、ナオミはいつでも逃げる準備ができている。黒ずくめの男は少女がなぜフェンリルを知っているのか、疑問に思いつつも、外套から剣をとりだし、勢いよく地面に突きさした。
呪文を唱えると剣の宝飾がにぶく光り、空間が歪んだ。
間髪いれず、悪夢のような白い狼たちが襲い掛かってきた。が、白い悪魔たちは少女の三歩手前で何かに遮られ、前に進めないようだ。唸り声だけが一人歩きしている。
「守護聖人イヴの封印だ」
シュゴセイジンイブノフウイン？

不思議だ、夢ではイブノマモリだったのに。
男が「イブの名の許に汝らをこの地に封ずる」と呪文を終わらせれば、空間の歪みは狭まり、獰猛な狼たちを丸い水晶のように包み込み、狼の群れは地面に沈んだ。逃げる機会を失ったものの、命は助かったようだ。
「…す、すごい！」
ダ・カーポの影響もあって、ナオミは魔法を信じている。多少の

ことでは驚かない。でもこんなすごい魔法を目にしたのは初めてだ。興奮とともに驚きを隠せない。

白き狼が封ずられてまもなく、森に隠れていた男は舌打ちとともに姿を消した。こうしてカンペールの森は何もなかったように静けさを取りもどし、狼に喰われて死ぬべきだった男とも挨拶をかわした。

魔獣は千年、この森の守護精霊（ガーディアン）となるだろうと男はいった。だから今の時代にあってもカンペールの森に夜々、狼の遠吠えが聞こえてくるのはこのせいである。

「君のおかげで助かった、あと三秒遅ければ――」

いうもおよばず、悪夢と同じような現実になっていただろう。

着実にナオミの運命はかわりつつあった。何事も問題がわかれば対応はできよう。問題なのは、多くの人々がその問題そのものがわからないという点。

確かにナオミは違った。悪夢を現実のものにしまいと犬を連れてきた。それがちょっぴり人の行動を変えた。小さな行動の連続が人々のつながりを生み、運命を変えるうねりとなった。彼女の新しい運命の歯車は今、小さな音をたててまわった。

「フェンリルを知っているということは、君はブルトン人か？」

ブルトンジンッテナニ？　あの狼は夢でみただけだよ。でもここは「うん」と頷いておくのがいいかもしれない。大人の世界、子どもには分からないのだから。

町の教会が見えはじめた頃、ナオミはジョジョに狼と何を話していたのか尋ねた。

「同族は喰う趣味はない、お前だけ生かしてやろう」と狼たちがほざいていたそうだが、イヌ科であるだけで仲間と呼ばれ、生かしてくれるなら食物連鎖は成り立たない。それにジョジョはどこからみ

ても真っ黒だ。白い狼とは思えない。それに小さい、真っ黒黒すけのチビだ。

「へん、そんなこと知ってらあ」

ジョジョは舌をだらーんと垂らしている。

古森にいた青い鳥は「ヒトの子の運命は開かれた」と囁き、彼方へ飛び去った。

第４話　父の友人【１】

――午前六時三十分。

そろそろ教会の鐘の音が鳴り、村が息を吹き返す頃だ。

ナオミはドアベルを何度も鳴らしたが、誰もでてこない。彼女たちが暖炉の間にいくとジジ亭の主人ヤドリギは、朝のラジオを聞きながら朝刊を読んでいた。夫人は朝食の支度でてんやわんやと大慌て、ハレルヤは目をこすりながら牛乳をごくごくと飲んでいるところだった。

自分がそこにいることを知らせるためにも、少女はドアをかるくノックした。犬の糞扱いを、誰もこの家では家族の一員とは認めていなかった。これはヤドリギの弟や妹、それから父や母といった親戚全員がそうだった。こんな自分の立場を不思議に思ってその昔、ナオミも「なぜ私にはお父さんとお母さんがいないの」と質問したことがあった。

「そんなこと、あたしが知るもんか」これが夫人の答えで、ヤドリギの答えは「お前は犬の糞なんだぞ！」だった。最後にハレルヤ少年の答えといえば「召使い一号」という感じだ。

それ以来、ナオミはヤドリギ家で自分のおかれた立場というものが自然とわかったらしく、この日もおどおどした感じで、何かに脅えるようにどもっていた。

「…あ、あの。ヤドリギおじさん…」

ヤドリギは返事のかわりに彼女をチラリッと見た。

「お、お客様がいらしています」

ジジ亭の主人は今度もチラリッとナオミと紳士を見た。
黒ずくめの男は帽子に手をあてている。
金持ちらしい紳士のいでたちだが、どこかうさんくささが残っていた。ヤドリギはおかみと目配せして、つじつまを合わせるようにと合図をおくった。

「旦那、残念ながらご予約がいっぱいでしてね」
ヤドリギは商売上手とあって手をもみもみしていた。客など数えるしかいないことは少女の会話で確認済みでありながらも、黒ずくめの男は間髪入れずにいった。
「手間賃なら払う、なんとか部屋を都合してくれ」
男は札束がずっしりとはいった、山羊革の黒財布をわざとヤドリギ夫妻にみせた。たちまちヤドリギ氏は猫声になった。大人は子どもに強くて、お金に弱いのだ。

「お名前を頂戴してよろしいでしょうか、ムッシュ…」
ヤドリギは宿泊名簿に名前を求めたので、男は右手ですらすらっと「ルレスエロ・ジェラール」という名を、職業欄の中には音楽家と書き、前金として百フランを目の前の男に手渡した。ヤドリギは百フランを嬉しそうに帳簿財布にしまいこむと（音楽家？　そんなふうにみえんがな）と鼻の穴を大きくした。

「野良、はやくお客様をお部屋にご案内しなさい」
「ご亭主、朝食は少なめでいい。私の部屋に運んでくれ」
亭主は頷くと少女に瞬きを三回した。これが意味するところは「お客の朝食はお前が運びなさい」というものだ。これがナオミと彼らが会話を交すときのやりかたでもある。
部屋へと向かう階段は歴史をただよわせる、大きくすりにすりへった螺旋階段。角がすりへり、歩くたびにきしむ音がどこか重々しさを感じさせた。

お客は暖炉のある上客専門の部屋に通された。
黒ずくめの男が荷物をほどきはじめた頃、子どもの量ほどの朝食が運ばれてきた。ナオミが部屋をでようとしたとき、男は「お嬢さん、これは君の朝食だよ」と声をかけた。
「朝食はまだだろう？」
だからなに？
「今朝のことは誰にもしゃべっちゃいけないよ」
偽善者かと思えば口止め料だった。
ここは素直に「うん」と頷くべきだ。あんな狼の群れをみたといえ、腹はすくものだ。いわれるがまま、すすめられるがまま少女はお客の朝食に手をつけた。
朝食のメニューはほくほくのハッシュドポテト、こんがりやけた塩味のガレット数枚、それと目玉焼きとローストポークに挽きたての熱々のコーヒーだ。少女はおとものジョジョと一緒に遠慮がちに食べた。それにしてもこのお客はどうして、こうも自分に親切にしてくれるのだろう。

そのあいだジェラールなる黒紳士は、ナオミをじっと見つめていた。紳士の観察眼は確かなもので、ナオミは四方八方どこから見ても、誰が見ても本当に汚かった。痩せているし、顔色はどことなく青白い。実際は十二歳なのに、十歳ぐらいにみえる。落ちくぼんだ大きな瞳、麗しいというか、彼女の容姿には胸をうたれる何かがあった。
身につけているものといえば、冬だというのに使いまわされた古着一枚だけだ。おかみに打たれたと思われる青や黒のあざがところどころにあった。小さな手はあかぎれだらけだ。靴もぼろぼろだから、足はきっと赤ぎれだらけに違いない。その痩せ細った体は何とも痛々しい。
「君に渡すものがある」

靴音とともにジェラールは、少女に近づいてきた。
男は百フラン札を二枚、そっと握らせた。今まで握ったことのないけっこうな大金だ。
どうしてこんな大金を自分にくれるのだろう？
ジョジョは「ネコババしちゃえ！」と小声で囁き、犬のくせにネコるものの、やはりそうもいかない。少女はお金を受けとる理由がないと拒むものの、男はここまで案内してくれたお礼だといいはった。
「ところで君は、ナオミ・ニトって女の子を知っているかい？」
心が飛び上がった。大金をもらっただけでも衝撃的だったのに、今度は自分の名前を聞かされ、少女の心は小刻みに震えた。
――なんでこの人は自分の名前を知っているんだろう？
ジョジョは知らないといっちゃえ、と目で合図する。
親代わりの言葉に従うかのようにナオミは「知らない」とわざと嘘をついた。ルレスエロ・ジェラールの落胆した顔が脳裏に焼きついた。やはり嘘はいけない。
少女が真実をいおうとした、そのときだった。
「野良！　野良！」
朝食（モーニング）の時間とあって忙しいらしい。自分を呼んでいる夫人の声が聞こえた。ナオミはかるく会釈をして、急いで螺旋階段をおりていった。台所のカウンターにはずらりとお客たちの朝食が並んでいた。
夫人はナオミの顔をみるやいなや、いきなり険しい顔になった。
「ところでぐずの泣き虫の甘ったれや、お前はいつから人様の朝食を横取りするようになったんだ、え？」と彼女につめ寄った。
なんでわかったんだろう？　ナオミは答えようがなく黙っていた。
「フンッ！　いいわけはよしな、お前のほっぺたに食べかすがついているんだ！」

「…あのお客様が食べていいって…」
「お前が物欲しそうな顔をしていたんだろ！」ジジ亭のおかみは右手をあげ、いきおいよくふり落とされようとした瞬間、コホンッと小さな咳払いがおかみの耳に届いた。

目を周囲にやれば、あの黒ずくめの男ジェラールが立っていた。
「これは失礼、食器の後片付けでもと――――思いましたね」
黒ずくめの男はおかみの右手を凝視したので、夫人はとっさに右手を少女の頭にやってなでるふりをした。
なんともぎこちないしぐさと緊張が台所に奔った。
「ご迷惑でしたかな？」
ジェラールのさぐるような声だ。
「お客様、困りますわ。この子にそんなことをされては。まるで私たちがこの子に何も食べさせてないみたいじゃありませんか」
事実なのだが、ジジ亭のおかみは体裁をつくろうので必死だ。
「この甘ったれのチビは、少しでも甘やかすと図にのるんですよ」
甘ったれのチビ、この家でのナオミのもうひとつの名前だ。
「それで頼んでおいたパンはどこいったんだい？」
「あのパン屋は、あの…」
ナオミはパンのことをすっかり忘れていた。
「すいませんね、パン屋にいくところを私が声をかけてしまって」
どもる少女にジェラールが助け舟をだした。
「それなら、まあ、いたしかたないことですわね。おい、ともかく十フラン返しな」
ナオミはエプロンのポケットに手をつっこんだが、そこにあるべきものがない。少女の顔がとっさに青ざめた。十フランのお金がどこにもないのだ。

かわりに男からもらった百フラン札を手渡すのは愚か者がすることだ。

少女は恐怖にさいなまれた顔でポケットをひっくり返したが、十フラン銀貨はどこにも見当たらない。ナオミがゆっくりと顔をあげれば、鼻の穴を大きくしたおかみは鬼のように見える。いやこれは本物（リアル）な鬼だ。

「盗むなんていい度胸だ」

ジジ亭のおかみのうなり声だ。今朝の狼より怖い。

「まったく育ちが悪くていやになるねえ。きな！」

おかみは少女の手をとった。

するとすかさず「ごめんなさい、おかみさん！」とナオミの悲鳴が聞こえ、その場にしゃがみこんだ。おかみが少女を無理矢理ひきずるなか、黒ずくめの男が声をかけた。

「その十フラン、これですか？」

男はおかみに一枚の銀貨を手渡した。

「先ほどお嬢さんが会釈したときに落ちましてね」

「…それなら…まあ、それでいい…ですがね」

おかみさんは歯切れが悪そうだ。

「心優しいお人に出会えて感謝しな。愚図の甘ったれ！　次はないからね！」とおかみは鼻息を荒くしていった。

少女はこの不思議な男をじっーと見つめていた。

銀貨はきっと水汲みのときにでもなくしたに違いない、それなのにこの男の人はどういう理由かは知らないが、わざわざ自分をかばってくれる。少女の大きな目には驚きとともにこれまでにない、男への信頼感ともいえる表情がにじみでていた。

「さて私は調べものがあるので、ここで失礼する」

ルレスエロ・ジェラールはわざと話題を変えたようだ。

さっそくチェックインを済ませると、二階の自分の部屋へと戻っていった。

「よろしいのですの、あなた？」
「かまわんよ」ヤドリギ氏は新聞を読みながらいった。
「今日はクリスマスイブだ、わしも一年に一度は気前よくなってもいい日じゃないか」
「九年前、そのあなたの年に一度の気前さがアイツをこの家に招きいれたのですわ」
「やれやれ、またその話か…」
ヤドリギ氏のうんざりした口調が聞こえてきた。
会話をさえぎるように牛乳を飲み終わったハレルヤが大きなゲップをした。ハレルヤは十二歳だというのにヤドリギにそっくりだ。黒い髪と瞳、豚面は小ヤドリギ、いや彼はまるでしゃべるブタのようだ。
ハレルヤの友だちのお母さんたちは「さすが名門のお家柄のお子さんだわ、とても賢そうな顔をしているわ」というのだが、ナオミはどこからみても小ブタにしか見えなかった。

そうこの日、村はクリスマスイブとあってにぎやかだ。
夜には村の名士たちがジジ亭に集まることになっていた。居間にはハレルヤが目玉焼きの皿に顔をつっこんで、髪をくしゃくしゃにして寝ていた。食べながら寝ている姿は、もうどこからみても立派な小ブタだ。ハレルヤは潰れた黄身を顔にどっぷりとつけて満足そうだ。よだれが黄身に混ざる――――気持ち悪い。
ヤドリギは「さすが私の息子、ダイナミックな寝方だ」だと、そんなわが子を横目でみながら、ある記事にあった。

『東洋騎士（サムライ）の腹切りルーツはここにある？』

農場経営者M氏が、ペットのヤギに一万フランの紙幣を、ちょっと目をはなした隙に全部食べられてしまうというハプニングがあっ

た。百フラン札を百枚用意、テーブルのうえに置いていたそうである。

電話が鳴ったので彼は現金をそのままにして、ダイニングキッチンからでた。五分ほど電話で話したあと、キッチンに戻ってみると、あろうことか雌ヤギのミシェルが今まさに、最後の新札を食べ終わるところであった。M氏は即座に獣医を呼び、ヤギの緊急開腹手術を依頼した。

「お金のほとんどは取りもどせましたよ、ミシェルにとっても辛い教訓だったがね」

獣医は手術代として、ヤギのお腹から出てきた湿ってグチャグチャになったお札のうち、五枚を差し引いたという。

我々も笑いごとではない。ブルターニュ地方・ふくろう党では温暖化対策のための予算確保の最有力手段として、新聞の廃品回収事業の撤退を要求している。来年の今頃、人々は一家に一匹、ヤギを飼わなくてはならなくなりそうだ

追伸　三日前にモン・サン・ミッシェルから脱獄した、サンチョ・ボブスリーは当局の捜査をくぐり抜け、今だ捕まらず。用心にこうしたことはないと思われる。

ヤドリギはうーんとうなり、悪態を思いつくだけいうと新聞を鞄にいれて、仕事の用意をしはじめた。廊下の柱時計からはポッポー、ポッポーと鳩時計が聞こえてきた。

午前八時の合図のようだ。

「町の連中どものところにイヴの挨拶にいってくるよ」

ヤドリギは夫人の頬に朝のキスをし、ちょっと目玉焼きの味がするハレルヤの頬にもキスをした。ナオミには「へらへらするんじゃない、目障りだ！　あっちへ行け！」とキスのかわりに一喝した。

別に慣れてるからへっちゃらだ。

（それにしてもあの黒ずくめの男、どこかでみた気がするがどうも思いだせない）

ヤドリギは腑に落ちないまま、我が家をあとにした。

夫人は化粧のために二階の寝室へ、なんと一時間と二十分もかけて化粧をする。それがまたものすごい厚化粧のため、ナオミはお面をつけているかのように思えたが、夫人の往復ビンタが恐いというのか、痛いので言葉にだすことはない。

化粧をすませたヤドリギ夫人は、汚物を相手にするかのように、キッと睨みながらナオミにいった。

「私は美容院にいってくるからね、帰ってくるまでに部屋を片づけておくんだ。それから洗濯物もほして、床掃除と皿洗いもしておくんだよ」一思いにそれだけいうと、ヤドリギ夫人は近所の美容院へでかけてしまった。

ナオミが床掃除を終わらせ、部屋をでようとした瞬間だった。ドサッ、誰かが窓に雪だんごを打つけた。どこの誰だ、ガラスが割れたら、おかみに怒鳴られるじゃないか。

窓の外には厚着をした、少年が手をふっていた。少年の名前はテル・ウォ・アボカド、ナオミの親友だ。犬以外の。

サラサラした茶髪、美しい緑の瞳。そしてバカ正直な性格、わがままなところがたまに傷なのだが、ちょっぴり頼れる同じ歳の少年だ。自分に想いをよせていることは女の子だから、すぐにわかるものの、テルは彼女にとってただの男の子にすぎない。

そんなテルもジョジョと会話ができる。

ジョジョと会話を交わすことができるということは、お互いが心許せる仲であるという何よりの証拠だと思っていい。どんな用事かと思えばダ・カーポから電話をもらった、と少年は胸をはった。

ダ・カーポ、村人の間では魔女として知られる。

ついでにあの黒ずくめの男が彼女の知り合いかどうかも訊いてみよう。

「で、アイツは誰だい？」

テルは二階の窓際から自分たちをみている、例の男をみて、うさんくさそうに少女に尋ねた。ナオミのかわりに「人さらい」とダックスフンドが返事をした。

第5話　父の友人【2】

第5話

考古学者ダ・カーポは大変人見知りが激しいことで知られる。彼女と会いたい人は、五年前から予約を入れないと無理といわれるほど。彼女が六年前に出版した『古代魔法のすすめ』がミリオンセラーになったのがきっかけで、彼女の引きこもり癖はさらに悪化したからだ。二人と一匹がそんなダ・カーポに呼ばれているなんて世界の考古学者たちが知れば、いったいどんな顔をするだろう。

ところでダ・カーポの屋敷には、二人と一匹だけの秘密の近道がある。それは偶然、ナオミとテルが西はずれにある、古森を探検していたときに発見していたものだ。

今から二年前だったと思うが、森のなかを冒険していたとき、野犬に遭遇した二人と一匹は、必死の思いで森のなかを逃げまわり、古びた水車小屋に命からがら逃げこんだ。

それが秘密のはじまりだった。水車小屋の扉をあけて、部屋のなかに一歩踏みだした瞬間、ナオミは悲鳴をあげた。

「どうしたんだい？」テルの声だ。

「う、うん。なにか…いる、私のお尻の下に…」

ナオミは何か大きなベチャッ、としたものを踏んでしまったようだ。一体全体なんだ？　少女はぷるぷるとふるえている。

とすぐにお尻の下から「…そ、それは私ダ・カーポですわ……お二人さん」と彼女の苦しそうな声が聞こえてきた。いやはや大きくてベチャッとしたものはダ・カーポ、その人だった。

二人は大慌てで、考古学者の背中から飛びおりた。

「な、なんでこんなところに先生が？」

「ノンノン！」ダ・カーポは人さし指をたてていった。

考古学者はパンパンッと身なりを整えながら、すぐ後ろの扉を指さした。よくみると内扉は金装飾が美しい重厚な赤い扉だ。この扉は外側と内側と居場所が異なる「開かずの扉」という魔法の扉らしい。しかもこの豪華な赤い扉にはかけ札があって、こんなことが書いてあった。

「『開かずの扉』Ｎｏ．２８９８７６５４９」

ブルターニュ地方
フィニステール県南部　カンペール
西のはずれ、古森の泉、水車小屋

思いっきり怪しいものの、窓からみえる風景に二人と一匹はなぜか見覚えがあった。あそこにあるとんがり屋根の教会、歴史を感じさせる中世の旧市街、美しい家々が並ぶフレロン通り。

間違いない。ここはカンペールのダ・カーポの屋敷だ。ナオミは何がどうなっているのかわからず、きょとんとしていた。そう水車小屋は、ダ・カーポの部屋と空間移動魔法でつながっているのだ。

彼女の説明によれば、ここのすべての部屋は扉文字のところにつながっており、そんな摩訶不思議な部屋がざっと五十部屋、禁断の扉が十五部屋ほどあるらしい。

この空間移動魔法はダ・カーポが復活させた古代魔法だ。うっかり開けるものなら、帰れなくなる場合があるので注意が必要だとか。まだ実験段階中のため、学会にも発表はしていない。これが考古学者ダ・カーポと二人と一匹の最初の出会いであり、この日から彼らはダ・カーポの良き実験相手（モルモット）となった。

ナオミたちが部屋にはいると、みるみるうちに真っ暗な廊下に明かりが灯された。廊下には赤い絨毯がどこまでもひかれており、その先がまったくみえない。

五歩ごとに同じような赤い扉があって、各々のかけ札には「ミスリル鉱山の炭坑扉」とか書いてあった。クリスマス前夜祭とあって、扉と扉の境目には樅の木が飾られていた。赤いキャンドルにゆらりと小さな聖なる火が灯され、おなじみの黄金の鐘と華やかなイルミネーションの飾り。

「今度はどんな実験かしら?」とナオミはひそかに脅えた。

最近の魔法実験といえば、ヤドリギ夫妻を呪い殺す呪文を教えてもらう代わりに、禁じられた黒魔法『カメレオン』という魔法の再現だった。互いの心と記憶を入れ替えるという魔法で、数分だけナオミとテルの身体が入れ替わる禁じ手だ。実際に身体が入れ替わってみれば、テルは女の子の身体に戸惑い、ナオミは何だか、股間に違和感を感じた。

噂のダ・カーポはせかせかと忙しそうだ。

「ノンノン! 今回は実験じゃなくて、飾りつけのお手伝いよ」

緑といえば赤、赤といえばリンゴ。大昔からクリスマスツリーにはリンゴが不可欠、でも今年は良質の赤いリンゴが手にはいらないそうだ。やっぱりアメリカ風のポップコーンではいまいち、しっくりこないとか。高級なアルザス産の樅の木には、やはりそれに似合った飾りが必要だと、考古学者はこだわる。

「もうまったく! 肝心なときにかぎって、助手のエンガチョがいないんだから!」

「僕はポップコーンでもいいよ」とテルはクリスマスツリーに飾ってあった、一週間前のパサパサのポップコーンを食べていた。

ジョジョもクリスマスツリーにしがみつく。

「ですが、それも解決済みですのよ」とダ・カーポのあきれ顔。

ダ・カーポの解決済みというのは、三日前に町の競売で競り落とした錬金術で練成したリンゴが今日届いたそうだ。出品者の『ロベルト・パパティーノ』は、新進気鋭の錬金術師で知られ、その作品群は収集家たちのなかで大変人気があるそうだ。

そんな矢先、ナオミは赤い扉がきしむ音を聞いた。

誰かが自分の手をひっぱっているようだ。

「ねえ、テル。なに？」

「なんのことだよ」

確かに誰かが彼女の手をぐいぐいってひっぱっている。

テルじゃなければ誰だろう？　と後ろにふりむけば、扉のすきまからいくつもの目がみえ、そこから手が伸び、ナオミの手をひっぱっているではないか。思わず少女は悲鳴をあげた。

ジョジョは低い唸り声をあげて、爪と牙をむきだしで飛びかかり、ダ・カーポは「エンガチョの閉め忘れですわ」とすぐさまは扉を閉めた。テルといえば腰がぬけてしまったらしい。まったく動けなかっただけでなく、情けないことに半べそ状態だ。

ナオミはぶるぶると震えがとまらずにいた。今朝の狼に続いて二回目だ。

「カーボネック城のゴーストたちのいたずらですわ」

ダ・カーポは息づかいを荒くした。この赤い扉にはブルターニュ地方、森のアルゴート、アッパータウン、迷いの森のカーボネック城と記されていた。

そんな二人と一匹におかまいなく、自分は調べものがあるからと「ナント／ブルターニュ大公城跡、ナント歴史博物館への扉」という扉に手をかけ、奥の扉へとゆらりと姿を消してしまった。

「ダ・カーポさんの用事って何だったのかしら？」

「父ちゃんがいうには、考古学者は昔から変人とバカが多いってさ」

とテルにいわれては世話がない。そのすぐ直後、先ほどの扉が勢いよく開いた。

ダ・カーポだ、すでに彼女の腕にはぎっしりと何十冊もの本が積まれてあった。悪口が聞こえたのだろうか――すると考古学者のような本、本のような考古学者は二人に話しかけてきた。

「そうそう忘れるところでしたわ」

二人と一匹をわざわざ呼びだしての緊急の用事というものは、このアルザス産のクリスマスツリーの飾りつけを手伝ってほしいとのこと。

「お二人さん、アップルパイは嫌いじゃなかったですわよね？」

「僕らをアップルパイで買収するきだな」

飾りつけがのリンゴの将来は、まっすぐアップルパイになる運命にあるようだ。二日後とみていいかもしれない。テルはそんなものでは絶対に手伝わないといわんばかり。

「テル・ウォ・アボカド、誰が賢いですって？」

「アップルパイです」

「はい、素直でよろしい」

考古学者はリンゴは居間にあるからというと、とすぐに扉を閉めた。

二人は唖然としていた。テルはアップルパイで妥協した自分が悔しくてたまらないかのようだ。ジョジョは静かにしっぽをぱたんっとふっていた。

第6話　父の友人【3】

第6話

ジジ亭と真向かいにある、生粋のブルトン人ニコレット氏が経営する『山荒し（ハリネズミ）』は、歴史あるブルトンパブだ。連日わいわいと村の人々、ブルトン人たちがここにブルトン語を求めてやってくる。

そんなことはじつはどうでもよくて、酒場にはいろんな噂が飛びかった。店員もペチャクチャと噂話。店の主人もペチャクチャと噂話。お客さんもペチャクチャと噂話。でも誰かが本当のことを聞きたいときは、この店にはこないのだった。

薄暗い石造りのパブは、隅のほうでワイナリーの農夫たちがおいしそうに塩味のガレットをつまみにして、シードルを静かにちびちび飲んでいた。カウンター席では人のよさそうな大きな男の人がこの店の看板娘と話をしていた。

ちょっと離れたカウンター席ではパイプをゆったりと吹かしながら、日刊新聞「毎日ブルトン新聞」を得意そうに読んでいる老人がいた。暗闇に隠れてシードルを飲んでいるのは今朝一番で、この村にやってきたジジ亭に宿泊している例の黒紳士だ。

ナオミとテルが店にはいると、とたんに会話は静まった。

パブの皆はテルを知っているようだ。なかにはニタッと無気味な笑いをうかべる者たちもいた。少女をみて看板娘のサンタマルタは、グラスに手をのばして「二人とも、牛乳でいいかしら」とからかった。

突然、店内に爆笑が沸いた。

サンタマルタはとても心がきれいな村娘だ。この人も自分で同じで親がいない。彼女はナオミにニコッと微笑だあと、二人に甘酸っぱいアップルサイダーを作ってあげた。

「で、今日は絵描きのグッドウィルとは会わないのかい？」

看板娘に太った男はさりげなく、話の続きをはじめた。

「絵のモデルは明日よ、エンガチョ」

サンタマルタはどこか嬉しそうだ。

「フンッ！　クリスマスデートかい！」

クリスマスといえばサンタクローズだ。彼女には毎月、決まってミスリル金貨三十枚を送ってくれる足長おじさんがいる。そのおかげで生活には困ってはいない。同じ親なしといえども、ナオミとは根本的にそこが違っていた――彼女は親の愛情に恵まれてはいないものの、貧乏ではないということだ。

「あの人はたぶん、君のことが好きだと思うんだな」

「うーん、どうかしらね。でもとっても優しい人よ」

「そうかい、俺っちは大嫌いだな。この人参もだけど…」

エンガチョは本当にグッドウィルという人が小憎らしいという感じだ。だけどナオミはこんなとこで、仕事をサボっているエンガチョが小憎らしい。太っちょのエンガチョは鼻を鳴らし、バター葉巻きを注文した。

「おい、わん公。人参でも食うか？」

（いらないよ）とジョジョはプイッと横をむいた。

サンタマルタは「二フランよ」といって、エンガチョにバター葉巻きを手渡せば、彼はさっそくそれをぷかぷかとうまそうに吸いだした。まわりはバターのいい香りがただよってくる。テルも父親からの頼まれごとを思い出したらしく、エンガチョの吸っているバター葉巻きを三本注文した。

「まだ未成年なんだから吸っちゃだめよ」
バター葉巻きを三本手渡しながら、サンタマルタは憂う。
「吸わないよ、たぶん。それでいくら？」
「五フランでいいわ」
「でも黒犬が吸うかも。このダックスフンド、不良だからね」
（…鼻でもかじってやろうか？）とジョジョはボソボソ呟いた。

ちょうどそのときカウンター席の今では昔懐かしい、オークでできた高級ゴシック電話機が皆の注目をあびた。電話はやかましい音をたてる。
「はい、こちら『山荒し』です。ええ、息子さんのテルくんですか？」
サンタマルタはチラリッと少年に目をやった。
「うちの父ちゃんだ。帰りが遅いから怒っているんだ！」

テルの顔は青ざめた。
「いいえ、もう帰りましたよ。お金を忘れてるって？　ご心配なく葉巻代はいつもどおりつけておきましたわ。あれっ、電話が切れちゃってるわ。すぐにアボカドさんは都合の悪い話になったら電話を切るんだから」
看板娘サンタマルタはぷりぷり怒っている。
「俺が払ってやるよ、テル。ほれ、五フランだ。先生のおもり代なんだな。どうせ恒例のリンゴの飾りつけだろ？　お前たち素晴らしい社会経験ができてよかったな。俺に感謝しろよ」

――やはりそれが嫌で、この男はパブで仕事をサボっていたのか。

確信犯エンガチョはテルのかわりに代金を支払ってやると、わが恋敵とばかりに、グッドウィル画伯の文句をぶつぶついいながら山荒しをあとにした。

――ポッポー、ポッポー、ポッポー。

鳩時計が真夜中の十一時を告げた頃、支配人（オーナー）でバーテンのニコレット氏がぬっとでてきた。男は「十一時だぞ！」とテルをギロリッとするどく睨みつけた。

「さあ、帰った、帰った。子どもの時間は終わりだぞ！」

まったくそのとおりだ、ヤドリギ夫人に知れたら往復ビンタどころじゃない。うたた寝していたダックスフンドは、めんどくさそうによれよれと、二人についていった。

子どもたちがいなくなると店内の雰囲気はがらりと変わり、さびれた感じになった。

「…あの子たちはブルトン人だろ？　どうしてでかけない？」

声の主は黒紳士ジェラールだ。

「でかけるっていうと、その…騎士の見習いですかい？」

ニコレット氏はぼやいた。

「それがブルトン人の伝統じゃないか」

騎士の古いしきたりで騎士になる子は、十三歳の誕生日までに騎士の従者として独り立ちしなければならない。でもその年での独り立ちは今の世の中にあわず、年々その伝統は廃れつつあった。ブルトン人の世の中も変わりつつあった。

ブルターニュの人々が働く場所が、ブルターニュ地方株式会社。

それは名前を変えた白の公国ブルターニュといってもいい。社長のアーサー・ブルトン歴代公爵といっても、世襲で本人が名乗っているだけにすぎないものの、ブルトン人においては大きな意味をもっていた。

ブルトン人とは『アーサー王と円卓の騎士団』を先祖に持つ、フ

ランス人のことだ。彼らがフランス西部に白の公国ブルターニュを建国したのは一千年前といわれ、歴史的にブルターニュ地方は、フランスとは違う独自の文化を育んできた。

ブルトン人は先祖の遺産として受け継いだケルト伝統の音楽と文化、そして『アーサー王と円卓の騎士団』の社会秩序を誇りにしている。

その領土は常にイギリス王国とフランス王国に狙われ、十六世紀には公国としてフランスに併合された。隣国に併合され、国としての地位は奪われても、白きブルターニュ公国の領土と歴史は、その子孫たちに脈々と受け継がれていった。

やがて時代は大きく転換した。フランスに革命が起きた。俗にいうフランス大革命である。革命後、フランスが王制から共和制へと変わっていくなかで、フランス国王がその領土と身分を失ったように、ブルターニュ公爵もその領土と身分を失うはめとなった。もはや公爵とは名ばかりにすぎず、公爵領などはなから存在しない没落貴族となった。

そんな滅亡の危機にあった公爵家を救ったのが、現公爵の祖父アーサー・ブルトン十六世だ。青年実業家でもあった公爵は人々に呼びかけて、一風変わった名前の不動産会社をつくった。それがブルターニュ地方株式会社。

ブルトン人たちは公爵の呼びかけで、ブルターニュ地方株式会社に自分たちの土地を預けた。とくに大きな土地を預けた領主たちはその大きさから市長、町長、村長とよばれる領地、土地の経営者となった。また彼らも公爵を見習って、自分たちの領地を株式会社にした。

こうしてブルターニュには多くの株式市町村が誕生し、ブルターニュ地方株式会社はブルターニュ地方のほとんどの土地を所有する大手不動産会社、財閥となったのである。彼らはいち早く古い国家

概念を捨て去った、新しい国家を作ったともいえよう。
これに伴ってフランス語が彼らの公用語となった。民族の言葉「ブルトン語」は野蛮な過去の象徴として、フランス政府から捨て去るべきものとされた。
ニコレット氏はグラスをキュッキュッと磨きながらいった。

「今じゃねえ、お客さん。危険だからといって見習いをやらさない親もいるんですよ。最近の子どもはブルトン語もろくに喋れなくなってますしね」

ブルトン語は自分たちにとって文化と歴史そのもの。
またブルトンの騎士道は自分たちの社会秩序そのものだ。現在、ブルトン語を喋れるブルトン人は二百万人、そのうちブルトン人社会で生きることを選んだのは五十万人だとか。
「ブルトン語を失えば、我々はすべてを失う。このままでは百年後、ブルトン人がブルトン語を喋れない世界がやってくるだろう。まったく世も廃れたもんだ」
ジェラールは世の不条理を呪うように、吐き捨てた。
「で、お客さん。お探しの女の子は見つかったんで?」
男は目をうっすらと細め、「…手遅れだった」と意味深に呟くといなや、ブルトンパブ『山荒し』をこれまたうさんくさそうにでていった。
このうさんくさい男とわずかに擦れ違いにトランクケースを右手にもった、威圧感ある中年紳士がヤドリギとともに扉の鐘をカランッと鳴らして、店のカウンター席にすわった。
二人はバーテンにハイボールを頼み、何やらボソボソと喋りはじめた。紳士はヤドリギに「毎日ブルトン新聞」のある記事を声にだして読んだ。

『ポニーからロドへ、正義の鐘は誰がために鳴る』

愛するブルターニュの民衆よ。
新しい王は我らの敵、世を欺く者だ。
黒伯爵、黒子爵、黒男爵は諸君の仲間だ。

私は真実のために、正義を貫く。

悪を打ち砕くための聖なる力は、
旅立ちの都に懐かしき友とともにある。
我とわが友よ、ロアゾンとともにあれ。

ヤドリギは困惑した表情で紳士に聞いた。
「ムッシュ、このちんぷんかんな記事がどうかしたですかい？」
「これはサンチョ・ボブスリーの部屋にあった紙切れだ」
このちんぷんかんぷんな記事は脱獄不可能と称された孤島の監獄モン・サン・ミシェルの脱獄に成功した、今、ブルトンの世を騒がしているサンチョ・ボブスリーの部屋から発見された紙切れの一文だ。

迷いの森の特別捜査官たちが夜通しで彼を追っているなか、男は見事に今も逃げきっていた。結果、先ほど当局より賞金がかけられたとのことだ。
「変装しているようだが、すでに目星はついている」
長年培われた捜査官の感というものだろうか、さすがだ。
「どうしてヤツがカンペールにいると？」
「私の目は節穴ではない」
「…先ほどすれ違った男がそうとでも？」
ヤドリギはまわりをみまわし、さらに捜査官に小声で訊いた。
「パパティーノにそう聞けといわれたのか？」

鋭い、さすが迷いの森の特別捜査官次官だけはある。その男の名がでると、ジジ亭の亭主は黙りこくった。

「……　…　……」

何もしゃべらない。まるで巨顔石像（モアイ）のようだ。

山荒しの主人は二人のまえに、ハイボールを置くと蓄音機に手をかけた。

微妙な間を音楽でごまかすかのように。

迷いの森の首席捜査官は、サンチョ・ボブスリーはニト夫妻暗殺の主犯格だ。もはや生かすも殺すも自由の賞金首になった今、九年前の仇討ちにはもってこいだ、と唸る。

「軍警察に感謝しなきゃならんな、アイツは殺されても文句はいえない…」

ホワイト次官は冷たい眼差しで冷笑した。

「で、殺っちまうんですかい？」

異様な殺気、血生臭さというべきものを感じたらしい。

ホワイト次官には、軍警察特別捜査官としての守秘義務がある。警察は市民の安全を守るのが役目であれば、軍隊は国外の脅威から国内社会の治安を守るのが役目だ。もともと武力を行使する主体にかわりなく、軍警察とは警察と軍隊の組織を合わせもつ、ブルトン政府唯一の武装組織。別名を「国家憲兵隊」とも呼ばれる。

「酒の肴にすぎん、忘れろ」

ホワイトはハイボールをほどよく飲んだ。

また再びゴシック電話がジリリリーッ、とやかましい音をたてる。ダ・カーポからの電話とあって、ニコレット氏はホワイトのほうをチラリッ。特別捜査官次官はめんどくさそうに「フランス人の電話は耳が痛くてかなわん」と、町一番の変わり者の声を聞くためにカウンター席をたった。

考古学者は先ほど、祖父トモロヲ・ブドリから伝言を預かったという。その伝言の内容が信じられない内容だったので、ホワイトは彼女の言葉を四回目も聞き直してしまったほどだ。

「ホワイト次官、知っていますの？」

「何も知りたくないね」男はぶっきらぼうにいった。

人が他人を嫌って、その存在を認めたくないとき、その存在を見る人の瞳というものは恐ろしいほど冷たくなる。それはブルトン人も変わらない。だけどこの世に生まれて独りぼっちということは絶対にない。

「もうすぐ十三歳よ」

「フンッ、それがどうした？」

「あの子もブルトンの社交界を知ってもいい年頃よ」

返事に困ったホワイト次官は、飲みかけのグラスに目をやった。

思えば九年前、サンチョ・ボブスリーに殺された、ナオキ・ニト夫妻は自分のかけがえのない親友の一人だった。氏は親友としてあの子のその後を見届ける義務がある。だが何年間たってもトモロヲ・ブドリは何も教えなかった。

あの子を迎えにこようとさえしなかった。

ナオミはこれからもずっとフランス人として、これからも生きていくのだろうと、これがあの人の意志だと自分はふんだという。

「アッパータウンには、あの子を迎えてくれる仲間がいますわ」

あの子がブルトン人にもどるのが正しいのか、間違っているのか、おそらくその答えはアッパータウンにあるのだろう。ナオミがアッパータウンに行こうが行くまいが、自分はサンチョ逮捕に全力を尽くすだけだ、という。

「あの子の未来は、運命の女神が決めることだ」

特別捜査官次官は勢いよく電話をきった。意味深な言葉だ。

カウンター席に腹立だしそうにもどるや、男は運命の女神とやらの板挟みを呪うように店一番の度数が高いブランデーを頼み、直で

喉に流しいれた。その仕草は喉を潤すというよりもやけ酒といったほうがよい。大人はときにそういうことを仕出かす生き物だ。原点は子ども時代の一気飲みだろう。誰が教えたのか、きっと酒の神バッカスあたりだな。

第7話　ブルトンの騎士候補生【1】

第7話

ジジ亭は集まった村の名士たちでにぎわっていた。
冬のカンペールのなかにあって、遠くから眺めてもその華やかさは町一番だ。例の黒ずくめの男は、この地に足を踏みいれることになった、ある星読みの言葉をグラスのなかに思い浮かべていた。グラスの中は氷と顔、光で混沌としている。
「だがヒトは違う。運命を変えるために行動することができる――」
ある星読みの言葉を復唱する黒紳士。

――運命の女神に戦いを挑み、自分は見事に敗れた？

ナオミはブルターニュワインをすすめようと深刻な顔の男に近づいた。名士たちへの振るまいにおかみは忙しく、ナオミがぼんやりとしているものなら「さっさと仕事を片付けないか！」と怒鳴りつける。
ジェラールは椅子に座ったまま、ヤドリギ夫人にふりむいた。
「おかみ、働かせすぎじゃないかね？」
男の言葉遣いにはみすぼらしい服装のなかにも、紳士らしさがかいまみえた。夫人は児童労働をさせているかのように思われたことがよっぽど悔しく、何もしないぐうたらを食べさせるわけにはいかないと言い放った。
「お客様とは違って、あの子には乳搾りがありますの。チーズづくりのためのね」
おかみの不快な顔をみて、さらに少女の皹（あかぎれ）だらけの手をみて男は静かに唸った。
「そのチーズはいくらの値で売れるのかね？」

うっとしい男だ、ふっかけてやれ！

「二十フラン！」

「よろしい、では百フランで買いましょう」

この言葉に前夜祭に招かれていた、ハレルヤの個人教授をしている家庭教師のピックル・タナカは思わず目を点にした――――変てこな客だな、ここのチーズは本当は二フランだぞ。皆の視線をあびるなか男は百フラン札を皿の下にそっといれ、ナオミを優しくみつめた。

「これで君は自由だ、ほんの数時間だけだが…」

どうやら男が買ったものはチーズではなく、彼女の時間だったようだ。

ジジ亭の亭主は（この男、何者だろう？）と目を細めて、豚のような顔つきで用心深くながめていた。おかみは返す言葉がなく、自分の考えをまっこうから否定された人間が体験する、あの感覚におちていた。唇を噛みしめ、その顔つきにはゾッとする憎しみが感じられた。

ナオミは休んでよいか、恐るおそる夫人に訊いた。

「フンッ！」

おかみの鼻の穴がいつもより二倍ふくらんだ。

「あ、ありがとうございます」

ナオミはおかみのほうをむかって、心はジェラールにいった。

ヤドリギは名士たちの会話にまじりながらも、目だけは黒紳士ルレスエロ・ジェラールを凝視、おかみはそんな彼にそっと耳打ちした。

「ねえ、あの黒ずくめ、何者かねえ？」

「フンッ！」とおかみと同じように亭主も鼻を鳴らすと「わしが思うにだな、世間知らずの若造か…」さらにもったいぶって「暇つぶしの音楽家だな。だが金はもっている。いいか、どんどん酒を飲ませろ」とジジ亭の亭主は金持ちに対する、この旅籠の掟を教えてや

ろうと囁いた。

「先生（マエストロ）、一曲弾いてもらえませんか？」

男に声をかけてきたのはピックル・タナカだ。

「失礼ながら、おかみさんからあなたのお名前がルレスエロ・ジェラール先生とお伺いしたので…」

「以下にも」

「ではやはり、あの有名な音楽家の――――」

「今じゃ誰も知らない、しがないオルガン弾きだよ」

「ですがルレスエロ・ジェラール先生といえば…」

タナカがあまりにもせがむので、男はガタッと席を立った。

コツッ、コツーッと床に音をたてて、黒ずくめの男が向かったのは部屋の端にある、埃がつもったオルガンだ。

音楽家はフーッと一息かけたあと、オルガンの蓋をあけると勢いよく、ダダダ、ダーンッと弾きはじめた。最初はベートーヴェンの『運命』を弾き、すぐに美しいバラードへと曲目はうつり、数分後には会場は拍手喝采となった。

さすがかつて有名な音楽家だっただけはある。

「先生、今の曲名は？」

「ロホルトへのソナタ、私の人生の師が作曲したバラードだ」

愛想もなく、これで気がすんだろう――――と男はテーブル席にもどった。まだナオミは男が奏でた、美しいメロディの虜になっているかのようだ。

夢心地でそっと深々と雪降る、窓の外をぼんやりと眺めていた。

するとフロックコートを深く着た、いかめしい顔つきの男が部屋のなかを鋭く凝視しており、少女は思わずギョッとよろめいた。もう一度、窓い目をやれば、もうそこには誰もいない。

疲れから幻影を見たのだろうか。いやそんなはずはない。確かに

つい先ほどまで窓の外で誰かが、この部屋を覗いていた。そんな少女におかみは悪態をつき、ジェラールは「疲れているんだろう」と少女を守った。

おかみは男のテーブルまでくると、腰をおろした。

「…ねえ、ジェラール大先生…」

うわ、気持ち悪い。猫なで声だ。

黒紳士はブルターニュワインを飲むのを一瞬ためらった。

「その…いやねえ、私だってあの子に幻をみさせるほど、せかせか働かさせているわけじゃありませんわ。でもねえ、野良はハレルヤとは身分が違いますの」

おかみは自分の面子をたもつだけで精一杯だ。

「身分が違うとは？」

男はナオミにチラッと目をやった。

「あの子は孤児（みなしご）なんですの、おわかりになりまして？」

暖炉近くの名士たちは酔いがまわり、楽しい気分になっていた。

男はただ黙ってワインを一口飲み、さりげなく窓の外に目をやった。するとナオミと同じように男もギョッとよろめいた。おかみもつられて窓の外に目をやったが、窓の外はクリスマスの前夜祭にふさわしい雪降る夜だ。

第8話　ブルトンの騎士候補生【2】

――ボーン、ボーン、ボーン。

暖炉の間の古い時計の振り子が、静かに午前零時を打った。

「旦那、大旦那。宴会はもう終わっちまいましたぞ」

猫なで声の亭主、まったく夫婦そろって気持ち悪い。金に媚びた人間も同じだ。

酒が身体全体にまわったらしく、男は自分の部屋に戻ろうと席をたった瞬間、床に倒れこんでしまった。いわんこっちゃない。そんな男の仕草をみて、ヤドリギ夫妻は不適な笑みを浮かべ、亭主のヤドリギ氏は自分の出番だと直感したようだ。亭主はいくらふっかけてやろうか、勘定のことで頭がいっぱいだ。金亡者と名を変えればいいのに。

「野良、肩をかしてやれ！　こいつは酒が入るとてんでだめだな」

何が彼をここまで追いこんだのか。

ジェラールは窓の外に何を見たのだろうか。

朝方、狼をフウインした男とは、てんで別人になった黒ずくめの男を二階の部屋まで運んでやった。途中、螺旋階段で大きく転んで無意識ながらに、黒紳士は気になることを呟いた。その言葉はやはり「ナオミ」だった。

冷たい水を飲んで頭を冷やしたのか、正気にもどった男は椅子にもたれかかり、少女に礼をいった。小さな子どもを一人の人格者として、感謝をのべる男にナオミは思いきって訊いてみた。疑問は考えていても埒があかない、やっぱり訊いてみるのが一番だ。

「なぜおじさんはナオミ・ニトを捜しているの？」

たちまち男の顔が険しくなった。

いや、やっぱり訊いてはいけないことだったようだ。やばい、ば

い。バイバイだ。ここは謝っちゃえ。子どもだから許してくれるよ。
「君はナオミ・ニトを知っているのか？」
黒ずくめの男はチラッとナオミをみた。少しでも手がかりがほしいかのようだ。
嘘に嘘を塗り固めてできるのはせいぜい耳糞か、鼻糞ぐらいなものだ。真実をこしらえることなんてできっこない。だって真実は嘘からは生まれないのだから。ナオミは正直になることを選んだ。
それは彼女の運命の針をカチリッ――と確かに動かした。

――――たぶん五分は進んだと思う。

男は自分がカンペールにやってきた目的を語った。
その内容は彼女にとって衝撃的なものだった。この黒ずくめの男はナオミ・ニトという女の子に会いにきたものの、ジジ亭の亭主がいうには少女はつい最近、行方不明になったそうだ。この手の行方不明はたいがい何者かに殺されている場合が多く、生存説はまったく期待できないと聞かされたとか。

行方不明？　そんなバカなことがあるもんか！

毎度の嘘ながら、慣れているとはいえ、あきれてものがいえない。朝方、確かに死にそうになったけど――――自分は運命を変えて生き残ったのだ。
「死んだなんて嘘に決まっているわ。だ、だってその子は……」
大人は何でこうも嘘をつきたがるのだろう。あの大人たちはすぐに嘘をつくから、これから彼らの名前は嘘八百にしよう。
「だってその子は？」
ナオミは胸が高鳴った。心臓が今にも飛びだしそうなほどだ。
「あなたの目の前にいるんですもの！」
ナオミ・ニトは男の目をみて、厳正にいった。

いきなり何ともいえない震えが襲いかかった。いや電撃かもしれない。

心に斧を打ち込まれたような衝撃といってもよく、男は声にならない声でうめいた。そうこれは感嘆の声だ。黒ずくめの男は少女にもう一度尋ねた。彼女の口からでた言葉、それは男が捜していた名前そのものだった。

その名前を聞いて男の胸に激震が奔った。

「君がナオミ・ニト！」

少女は自分の名を呼ばれ、静かにコクッと頷いた。

野良という名前はヤドリギ夫妻によって名付けられた名前だ。確かにその日からナオミは長い年月、自分を取りもどすことなく、行方不明になっていた。

冷静さを取りもどすために男は、冷たい水をもう一杯を飲んだ。

「俺は君を連れ去りにきたんだ」

その言葉を訊いて少女は驚き、ジョジョは（やっぱり人さらいだったんだ）と警戒の体勢をとった。だがただの人さらいではない、きっと何かわけありの人さらいだ。

「君をアッパータウンに連れていきたい」

男の言葉に胸がドクンッと鳴った。

「…ア、アッパータウン？」

ナオミの声はにわかに震えていた。

「君をアッパータウン、俺たちのブルトン人の社交界に招待したいと思っている。君は騎士候補生となって、ブルトンの歴史を学びにいくんだ」

黒ずくめの男はブルターニュ地方株式会社の理を少女に教えてやった。

騎士候補生、つまり騎士見習いは母なる白き公国、ブルターニュ地方株式会社の『円卓の騎士団』のなかで騎士や騎士候補生たちと団体生活とともにブルトン人の社交界を学ぶ。ナオミの場合は爵位の関係で、その社交界がアッパータウンだという。

ナオミは困惑して黒ずくめの男に尋ねた。

「私、騎士にはなれないと思う。だって女の子ですもの」

「はじめに言葉ありきほどあてにならん。ブルトンの社交界に性別などまったく関係ない。はじめに行動ありきかどうかだ」

そもそも騎士とはなんであるのか。従者（従士）として領主に仕え、心身ともに通過儀礼を受ける者たちのことだ。中世末にはその軍事的意義は低下し、騎士の称号は重要な功績をあげた人々に栄誉として与えられるようになった。

現代の英国（イギリス）では騎士の称号は男女を問わず、卓越した業績をあげた者に君主が与え、騎士に叙任された者は姓ではなく名前の前に男性はサー、女性はデイムという敬称をつけて呼ばれる。同じくブルターニュ地方株式会社も社会秩序、ブルトン人の成人教育にすぎない。

こんなつまらない話にダックスフンドはうたた寝をしていた。

「ブルトン人は十三歳になれば、一人立ちをしなくちゃいけない。騎士への学びは誰人も邪魔はできない。君が望むなら連中もそうせざるえない。『円卓の騎士団』はブルトンの子どもたちのためにあるのだから」

連中、あのヤドリギ親子のことだ。

男がいう円卓の騎士団の意味は分からないけど、確かに今の生活を続けていても先は知れている。

「君は騎士の証をたてること、意味はいまいち分からない。でも唯一分かっていることは騎士になれば、ヤドリギ親子から解放されるとい

うこと、未来が拓けるということだ。
「やめときなってば！」とジョジョ。

うまい話には必ず裏がある――そうかもしれない。

「なぜおじさんは私を連れていこうとするの？」
ナオミは高鳴る胸のドキドキをおさえながらいった。
「…なぜ？　知れたことだ。運命の女神が私にそうしろと命令するからだ！」
この人は運命の何なんだ？
もしかして運命の使者か？　ただ音楽家のように見えるけど。
「それに君には、アッパータウンに行かねばならない理由がある」

キミニハ、アッパータウンニイカネバナラナイ、リユウガアル。

「君は騎士となり、ご両親の爵位を受け継ぐ必要がある」
ご両親の爵位？　爵位ってどういう意味なんだろう――にしてもこの人は両親のことを知っているようだ。誰かが両親のことを語るとき、いつも少女の声は小刻みに震える。興味深い、じつに興味深い。もっと話がしたい。

コノヒトハ、ワタシノリョウシンヲシッテイル。

胸が高鳴り、ドックンと鼓動が激しく脈打つのがわかった。
「君のご両親とはアッパータウンでともに学んだ仲だ。私とは白馬の友だった」
竹馬の友の間違いじゃないのか？　でも今は言い間違えなどどうでもいい。
「君はご両親のことも――両親がなぜいないのかも知らない」
いや何も知らなすぎる、知らないというのは恥ずかしいことでは

ないが、知ろうとしないことは恥ずかしいことだ。また知らないということは恐怖でもある。無知は臆病であり腰抜けだ。だから人は恐怖を払いのけるために知らねばならない。それが自分にとってどんな災いをもたらせようとも。

男はナオミに自分のこと、両親のことをどこまで知っているのか問いかけた。

少女は何も答えることができなかった。当然だ、だって何も知らないのだから。

「アッパータウンに君の歴史はある」

黒ずくめの男の言葉が胸奥深く、ズサッと剣が突きささった。

彼女にとってこの九年は空白の九年といってもいい。ナオミの空白の歴史、両親の歴史を知る鍵はアッパータウンにある。もはやアッパータウンにいくことは、ナオミにとって自分の生い立ちを知ることに他ならない。

「あ、あの…、ジェラールさんは、その…えっと…」

少女は今まで感じたことのない、胸のときめきを感じている。

「…ジェラールは偽名だ、俺の本当の名は……いずれわかる」

今は急がねばならない、自分はわけあって追われている身。窓の外に自分を追いかけているヤツの姿をみた。そうだ、君がみた同じフロックコートの男だ。事情なら、おいおい説明する。とにかく今は急がねば。

「ヤドリギおじさんが――許してくれない」

扉越しにゴトッという物音が聞こえた。ジョジョは僕じゃないよ、という目つき。明らかに誰かが聞き耳をたてていた？　犯人はなんとなくわかる。きっとあのブタだ。

やはりだめだ、あの大人たちが許してくれるものか。

こんな下女のような生活が嫌で逃げだしても、口ではでていけと口汚く罵られても、何度も連れ戻されているではないか。運命を変えることなど、そう容易くはない。

「だから何だ？」

男は短く言った。

苛立っているようだが、短期は損気だ。

「ヤドリギおじさんが――」とナオミが同じことを言おうとしたとき、男も興奮するブタの鼻息を感じたらしい。立ち上がり、つかつかとドアのほうへ歩いていく。ドンッと勢いよくドアを開ければ、階段を慌てふためいて下りていく、ジジ亭の亭主の丸いでっぷりした無様なブタの背中が見えた。

「運命に挑むことを決して忘れるな。運命に挑むことを恐れれば、やがて過酷な運命のあまり人を怨み生きることになる」

ナオミはジェラールの顔をみて、驚愕した。

男の髪の毛が蛇になり、顔も険しくなっていく。顔から膿がで、ミミズのような生き物がはいでている。まるで伝説に謳われる蛇女のようだ。その姿はおぞましく、とてつもなく恐ろしい。

「蛇女（ゴルゴン）の呪いだ。俺は運命を呪い、人を怨んだからこうなった」

運命を呪うということは、そういうことなのかもしれない。

ジェラールの怒りがおさまれば、その呪いも次第にひいていく。どうやら蛇女の呪いとやらは、怒りと連動しているようだ。

「いいか、ナオミ。君の人生は君のものだ、ヤドリギのもんじゃない。君の運命は君のものだ、もちろん君の運命を拓くのもヤドリギじゃない」

じゃあ、誰が拓くの？

「君だ！」と男にいわれ、ナオミは目の裏が痛くなってきた。

運命を拓くのは痛みが伴うのかもしれない。少女は運命の針がさらに七分進んだ、そんな気がした。かわりに目がゴリゴリと痛くなってきた。きっと脳が活性化しているんだ。

「ナオミ・ニト、運命の傍観者になるな。いつも運命の挑戦者でいろ！　運命は中立だ、その中立に傍観するか、挑戦してみるかの差で君の人生は大きく変わる」

第9話　ブルトンの騎士候補生【3】

第9話

「なんてこった！」

ヤドリギ氏は顔色を真っ青にして、階段から駆け下りてきた。

宿屋の亭主の感というべきか、男は黒ずくめの男の話を盗み聞きをしていた。ヤドリギはすぐさまホワイトに連絡をとり、指名手配の男を見つけたことを報告した。先ほどの会話の内容からしてみて、間違いないと確信したかのようだ。

「本当に指名手配の男ですか？」

ハレルヤの顧問家庭教師のタナカは、皆にかくも冷静につとめるよう促した。

「間違いない。わしはヤツと同窓の友だったんだ。これが十何年前にヤツと一緒に撮った写真だ。何だって？　顔が違うだと？　今の世の中、顔なんぞ変装すれば何とかなるもんだ。ふん、これで賞金はわしのもんだ」

噂をすれば何とやらだ。例の男は昼間の冷静さを取りもどし、荷物をまとめて少女とともに下りてきた。男はヤドリギ氏を軽蔑した眼差しで言い放った。

「野良を？　ご冗談を…」

「この子の名前はナオミ・ニトだ」

黒ずくめの男は不機嫌にいった。

「同じでしょうに」

「違う！　名前を失うことは自分を失うことだ！」

ヤドリギ氏に一喝したあと、男はナオミの手を握りしめた。

フロックコートから百フラン札を五、六枚とりだして宿をあとにしようとした瞬間、居間には雪でずぶぬれになった男たちが数名、雪

崩込んできた。

男たちは黒ずくめの男を取りかこんでいる。ヤドリギ氏は努力が水の泡にきえず、報われたことに綻び、大きな顔がさらに大きく見えた。

みるたびにますますでかく見える。

「信用すべきは捜査官の感だな、サンチョ・ボブスリー」

強面の男たちを従えているらしい、やりての男が一歩抜きでて、睨み見据えるようにいった。特別捜査官次官ホワイトの第一声だ。それは間違いなく、ナオミとわけあってジェラールと名乗る男が窓の外でみた男だった。

「…本当に指名手配の男なんですか？」

タナカ先生は情けないほどオドオドしていた。

確かに新聞に載ってあるサンチョ・ボブスリーとは顔が似てもにつかない。

居間の客人もざわめいたが、ホワイトは「変装薬で顔を変えているんだろう、数時間後には顔がもとに戻るはずだ」といい、部下にトランクケースを開けさせた。

「半日とはいえ、満喫したか？　ジジ亭はお前にはもったいない」

人々がさらにざわめいた。革張りのトランクケースには、地下へと続いている階段に地下室があった。ホワイトはまったく気にもしない様子だ。このトランクケース、空間魔法によって持ち運びができる携帯牢獄だ。

「モン・サン・ミッシェルまで、ひとまずこの牢獄がお前の宿だ」

なるほど。ジェラールなる人物の本当の名は、サンチョ・ボブスリーというのか。

でも何だか、何だか変だぞ！

朝から起こっている出来事にしても、この変てこな革張りの荷物入れにしても、そう何かがいつもと違う。気になるのはこの人が犯罪者なのか――そうには見えないけど。

「おこしいただけますかな?」

ホワイトはシュボッと葉巻きに火をつけていった。

「くたばりやがれ!」

サンチョ・ボブスリーは間髪いれず唸った。

蛇女の呪いが顔中に広がり、その姿に皆が驚愕している。

「きさまらの妄想や寝言は、孤島の牢獄でたんまり聞いてやる!」

黒紳士サンチョ・ボブスリーはニト夫妻の一人娘、ナオミ・ニトをアッパータウンへと連れていくのだ、と言い放った。

「きさまが? この子をアッパータウンへと連れていくだと?」

九年前、ニト夫妻を殺した犯人として、監獄にぶちこまれたサンチョ・ボブスリーは自分の罪を特別捜査官次官に指摘されても、とくに否定しなかった。いやこの事実にボブスリーは人生を呪うがように自嘲気味にいった。

「――政府の犬どもめ!」

彼らの会話にナオミは動揺した。

落ち着け、持ちつけ、深呼吸だ。一、二、三。

そしてよく考えよう。いやだめだ、それでも動揺は隠せない。

「こ、殺されたって?」

数分たって、よくやく飛びだした悲鳴にも似た驚きの声だ。

ナオミは目のまえが真っ白になった。こうも親切に自分を助けてくれた男があろうことか、いやはや自分の両親を殺した犯人だというのだから。

ワタシハ、ヨンサイノトキニオヤニステラレタ、トキイテイタ。

おぼろげながらヤドリギ氏に預けられた記憶がある。両親の顔は覚えていないけど。

「捏造(つく)られた記憶だ、君の両親は『迷いの森の一味』に殺された」

「そうだ、お前に殺された」

ホワイトは葉巻をぷかぷかと吹かしながらいった。

「違う！　俺は無実だ」

無実の男はナオミをじっと見据えた。

「ナオキは私の無二の親友だった。君はヤドリギからすべてを聞いていると思っていた、私が冤罪で刑に服していることも。だがそうではなかった……」

ボブスリーが物凄い形相でナオミの育ての親、ヤドリギ夫妻を鋭く睨んだので、夫妻はビクッとすくみあがった。明らかに顔には恐怖感がににじみでていた。この夫妻は真実を捻じ伏せていた、本当の大嘘つきなのだ。

「さっさとこの男をぶちこんでくれ！」

ヤドリギは胸くそ悪そうにいった。

ボブスリーのこめかみには太い青筋がくっきりとみえた。あと一分ぐらいで堪忍袋の緒がブッチンと切れてしまうのではないか、ナオミはハラハラした。

「ブルトンの恥さらしが！」

「恥さらしはお前のほうだ、ボブスリー！」

ホワイト次官は大声で怒鳴った。

ボブスリーを取りかこんでいる、特別捜査官たちはピストルをかまえている。

抵抗することは得策ではない。男は大人しく特別捜査官次官の言

葉に従い、敷居に片足を踏みいれていた。ボブスリーはトランクへと収納される今、そっとナオミのほうに目をやったものの、少女はさりげなく目をそらしてしまった。

「ボブスリー、一つ教えてやる。その子はきさまが連れていかなくともアッパータウンへと行くことになっている。ブルトン政府『ふくろう党』とトモロヲ・ブドリの決定だ。皮肉なもんだな」

ホワイトは手荒な真似をせずにすんだお礼とばかりにいった。

――――フクロウトウ。トモロヲ・ブドリ。

朝から聞いた覚えのない名前ばかり、不思議だ。

さらに腑におちないことがあるのか、特別捜査官次官は葉巻きを数回ふかすと、ほとぼりがさめるまで、なぜ誰も知らないところに身を隠さず、わざわざ人目はばかるこの町にやってきたのかが理解に苦しむと唸った。

その言葉を聞いてか、脱獄囚はピタッと、地下階段に一歩下りたところで両足を揃えた。

「なぜ俺が命を絶たなかったのか？　知れたことだ」

ボブスリーの言葉に皆が耳をたてた。

「…ジェラール・ルレスエロという人が俺に教えてくれたんだ…」

「お前が名乗っている、その偽名の男がなにを教えてくれたんだ？」

「自分のためじゃなく、人のために生きることをだ」

そう人のためだから、今まで自分は生きてこられたんだ、と男は昔を振り返る。

「百歩譲ってそうだとしても、なぜそこまでして生にこだわる？」

「死んだ友との約束を守るためだ」

この言葉がホワイトをさらに唸らせた。

九年間、ボブスリーは自分は無実だと言い続けてきた。自分ならぬれぎぬであれども、あそこにいるぐらいなら、とうに命は絶っている。脱獄の機会に恵まれたとはいえ、そうまでしてお前が生きてはたしたい、仲間たちの約束とは一体何なんだと。

「約束は守ってこそ約束だ！」

サンチョ・ボブスリーは厳かにいった。

俺に友の誓いに見切りをつける権利がどこにある？

死んだ友との誓いはニト夫妻に何かあれば、ナオミの後見人になることだ。今まで無実の罪で牢獄につながれ、必要なときに会いにいけなかった無責任な自分を、彼らが許してくれるとは思わないが自分勝手な誓いをたて、声も届かないところから約束を守れずにごめんじゃすまされない。そうボブスリーにとって守るべきものは、ナオミではなく、友との約束だったのだ。

――――やっぱりこの人は自分の味方なんだ。両親の友人なんだ。

今さっき冤罪で刑に服していたともいっていた。きっと本当に何かの手違いなのだ、私はこの人を信じる。いやこの人を信じたい、心の底から。

「ナオミ！」

男の声にうつむいていた少女は顔をあげた。

「『ロアゾン』とともに！」

ボブスリーは右手を左胸に拳をあてる。

「くだらん！」

と、またホワイトは唸る。

「そんなことをやるから獄につながれるんだ！」

ロアゾンとともに？　ロアゾンって何だ？　獄につながれる？

どういう意味かは知らないけど、彼女も無意識に同じように拳を胸にあてた。

サンチョ・ボブスリーの姿がトランクケースから見えなくなると、ホワイトはしっかりとふたを閉め、ヤドリギにことの詳細を見ていた者たち、とくに非ブルトン人に少し渋めの忘れ薬を飲ますよう命じた。

この忘れ薬、一さじでも飲むと、液体の濃さも関係あることさながら、暗示をかけることにより、すっかり当時の記憶を忘れさせてしまう、ブルトン人の伝統ある秘薬だ。古より彼らブルトン人は門外不出の剣と魔法の文化を守ってきた。

第１０話　アッパータウンへの旅立ち【１】

第１０話

「ナオミ、かけたまえ」
ホワイト氏が暖炉のそばの椅子を示した。
ここはジジ亭で年に数回使うか使わないかの最高級の部屋だ。暖炉に火がはぜ、部屋は騎士物語のタペストリーや飾り盾に剣などがおかれ、豪華という言葉が似合う。ホワイト氏は落ちつきはらって、ナオミの向かいに腰をおろした。
「私は迷いの森の首席特別捜査官ムッシュ・ホワイト」
ナオミはコクッと頷いた。
変わった名前だが先ほどの一連の動きからしてみれば、刑事というか捜査官であることは確かなようだ。数人の部下を従えていることから、責任ある立場に違いない。

軍警察は捜査部門、警察部門、軍部門の大きく三つに分かれる。
捜査部門は諜報活動や犯罪捜査が担当であり、迷いの森の特別捜査官はこの捜査部門の人々のことを指す。ホワイトは特別捜査官三百名を率いる捜査部門の最高責任者「首席特別捜査官」であり、正式には次官という階級に属する。これは警察部門、軍部門も同じである。これら三人の次官を統括するのが軍警察の長官であり、最高司令官ブルトン歴代公爵だ。

――ところでナオミ、君は…。

ホワイトの声が少しずつ遠のいていく。
ん、ここはどこだろう？　ナオミは自分が図書館らしき場所に一人立っていたことに気づいた。身体はジジ亭、しかし精神は違うと

ころにあった。

ここは瞳に封じこめられた少女の過去。九年の時をへて、記憶は目を醒ます。

「…これがその、ナオミの記憶の写しですか…」

「…うむ…」

「結局、事件の真相は……」

老人は記憶の本と呼ばれる、分厚い本をパタッと静かに閉じた。図書館らしき館の一郭には老人と家宰らしき女性が立っていた。何かを見ていたようだが、ナオミは何もわからない。記憶の写しとかいっているけど。

本のなかに記憶を閉じこめる、そんなこと今まで聞いたことがない。でも事実だっていうことはわかる。きっとこれもブルトン人の魔法文化なんだ。

「目撃者がいたそうです」

殺しの目撃者はロエスレル・ドラゴンヌ。

「知っておる」

キラッと光っている白色のあご髭の老人がいった。

この老人の名はトモロヲ・ブドリ宮中伯。ブルターニュ地方株式会社の株式市町村のひとつ、アッパータウンを任せられている老齢の領主。あご髭がモップのように地面に垂れている。

「…コ・クーボは今だ逃亡中だとか…」

家宰のクーデンホーフ。

コクーン・コ・クーボは名高い子爵の次男。家督と爵位をめぐり、兄ピエモンテ・コ・クーボ夫妻を殺したとかで一ヶ月前から指名手配になっていた。ニト夫妻とは無二の親友だった。

トモロヲ・ブドリは神妙な顔つきでいった。

「この件にコ・クーボは関係あるまい。本質からそれてはいかん」

トモロヲ・ブドリのいうとおりだ。

この事件の本質はサンチョ・ボブスリーが本当にニト夫妻を手にかけたかどうかだ。その場にいたから犯人になるのであれば、この国に裁判というものはいらない。

ナオキ・ニトは首席特別捜査官という立場にあった。ホワイトは彼の後釜だ。

今回の事件はそれに関係するものに違いない。夫妻を殺されなければならないほどの重大な秘密。ボスを殺された特別捜査官たちは血眼になって、捜査に当たった。彼らが行き着いた先、それがあのサンチョ・ボブスリーだった。偶然、その場にいた夫妻の友人、ロエスレル・ドラゴンヌの証言により、夫妻を手にかけたのは間違いない。

サンチョ・ボブスリーはニト夫妻を殺したのは「サンチョ・ボブスリー」だ、すなわち自分だといい、ヤツは迷いの森の辺境伯の手下だった、と他人事のように自分の犯行を自供した。

捜査部門のなかでは狂ってしまったという噂もあるが、そもそも友人を殺すような人間は、最初から狂っているのかもしれない。かくしてこの事件は男の自白によって、学友の告発と証言、一人の学友が行方不明のまま幕を閉じた。

深い悲しみにさいなまれるなか、部屋のはじっこの黄金の巣でうたた寝をしていた、色とりどりの数匹の九官鳥たちがペラペラと何かを喋りだした。赤色や青色、黄色など色とりどりの数匹の九官鳥たちが「ルンルン、ルンルン。ルンルン」といきなり電話のベルの音の真似をはじめたのだ。いやはやそのうち赤色の九官鳥が「電話、電話。ジリリン、ジリリーン」と喚きたてていた。

トモロヲ・ブドリが赤い九官鳥に近づいて、ぺこっと嘴をあけた。

「ムッシュ・ホワイト次官補どのが到着しました」ユトレヒト執事の急ぎの声。
「クーデンホーフ、聞いてのとおりじゃ。わしらは真実を受けとめねばならん。不幸は突然やってくるもの、だがそれを受け止める度胸があればたいしたことではない」

事件の「真相を知る男」は、執事のユトレヒトに連れられて領主の間にやってきた。男は毛布にくるまれた、小さな何かを大事そうに抱きかかえていた。
「ムッシュ・ホワイト、ご苦労じゃったね」
「ナオミの記憶の入れ替えは成功しましたが、副作用として視力がだいぶんおちました。いずれ封印補強の眼鏡が必要になるでしょう」と男の憔悴しきった声。
「案じておこう、顔は変わったかね？」

――顔が変わる？　自分は幼いときに顔面神経麻痺にでもあったのか？

「顔は多少、瞳は緑から黒になりました、呪いを開放をすればもとに戻りますが――」
「…いや、けっこう」
二人は毛布のなかのナオミをみた。少女は傷ついているものの、すやすやと気持ちよさそうに眠りこんでいた。そばには黒犬の赤ちゃんが弱々しい声で鳴いていた。

「本当の記憶を取り戻すことは？」とトモロヲ・ブドリ。
「ニト家伝統のフェンリルフンドが記憶の守り人です」
フェンリルフンド、フェンリルとダックスフンドの混血。
フェンリルの従兄弟みたいなものだ。別名をホワイトダックスフンド。ジョジョが黒くてチビなのは、ダックスフンドの血、長生き

なのはきっとフェンリルの血が色濃くでているせいなんだ。なんか胸のつっかえがとれた気がする。

記憶のなかのホワイトはこの犬が主人に忠誠を尽くすかぎり、強力な呪いで瞳のなかに隠したナオミの記憶がよみがえることは、彼女が自分の運命を知ろうとしないかぎり、ありえないと保証した。ブドリは満足そうに瞳を閉じた。

「今回の事件は気心知れた者たちの不幸でした」

次官補の苦渋にみちた表情に老人は頷いてみせた。

「ところでサー、本当にニト夫妻は……」

「ニト夫妻は死んだのじゃ」

クーデンホーフの疑惑にトモロヲ・ブドリはきっぱり答える。

この言葉に家宰の顔が引きつった。受け入れがたい現実だが、受け入れざるえない現実なのだと老人の口調は優しいながらも、目はいつもより鋭い。

「あの子はヴァンヌのロートレック孤児院にでも?」

家宰はしゃくりあげながら、チーンと二度も鼻をかんだ。

「心配無用じゃ、クーデンホーフ。縁戚のサー・ヤドリギが彼女を是非とも引きとると申しでておってな、この子はそこに預けようと思っておる」

彼女の目の痛み、運命を開くとともに記憶の封印が紐解かれつつあった。

自分の記憶が瞳に封印されていたことは驚きだったが、ようやく本当の自分を取り戻せた気がする。瞳とともにすっきりした気分がどこか心地よい。それは頬にとめどなく流れる涙のせいだけじゃない。

ナオミの瞳の色が群青色へと変わっていく。

「…ナオミ・ニト、君の未来と運命を祝福する…」

少女は涙を拭いて、首席特別捜査官の言葉に頷いた。
亭主のヤドリギ氏は、紅茶とクランペット菓子をホワイト氏とナオミの間にあるテーブルの盆に置くと、ドアをゆっくりと閉めて部屋を出ていった。
「で、ヤツからどこまで聞いたかね？」
ムッシュ・ホワイトは紅茶を注ぎながらいった。
「あー、アッパータウンについてだが。まあ、そのう、なんだ。もう知っていると思うがこの国には二つの政府がある。ひとつはフランス人の政府、もうひとつは我々ブルトン人の政府だ」
国際社会では領土なき国家ゆえに非公式の政府だ。
剣と魔法の社会を産業革命の油の時代のなかで守っている騎士の政府。その存在はマルタ騎士団とさほどかわらない、ときに株式政府と呼ばれることもある。

「ブルトン人はブルトン政府の方針に従わねばならない。十三歳になればフランス人とは違う教育を受けねばならんのだよ。ブルトン人である君も例外はない。まあ、昨今では教育の自由ということで選べるようになったんだがね」
ホワイト氏は紅茶を一口飲むと、クランペットをナオミのほうに押してよこした。
「君には運命を選択する権利がある」
今の生活を続けていても自由はない。未来は拓けない。
「また君には爵位継承権が認められている」
「爵位って？」少女は瞳を大きく見開いていった。
そういえば、サンチョ・ボブスリーも同じことをいっていた。

部屋は静まり返った。暖炉の火が音のみ、虚しく聞こえてくる。
「なぜヤドリギ夫妻が君を憎むのかわかるかね？」
ナオミはそれがわかっていたら、苦労はしないと顔つきだ。
「君がナオキ・ニト夫妻の娘だからだよ」

ホワイトの言葉にわが耳を疑った。

今から十三年前まで、ヤドリギ家はアッパータウンの、とある子爵の家柄だった。

一方、ニト家は子爵家に仕える執事の家柄だったそうだ。先代子爵死後、誰もがヤドリギ夫妻がその爵位と領地を相続する者と思っていたが、先代の遺言状を読み上げれば驚愕すべきことが書かれていた。

「君のお父さんは、先代ヤドリギ卿と執事ニト女史との間にできた子だった」

先代はヤドリギ夫妻よりも、ニト夫妻を溺愛していた。

家督は当然、ニト夫妻に相続させると書かれていた。ヤドリギ夫妻に与えらえたのはカンペールの別荘『ジジ邸』、ヤドリギ氏はそれを旅籠「ジジ亭」に改装し、何とか生活の糧としてきた。

そうか、だから下僕のように自分に接してきたのか。

子爵、伯爵の子飼いという意味。元々は副伯と称される伯爵の補佐役である。

アッパータウンには伯爵を長として、補佐役の子爵が六人いる。また子爵一人に対して男爵一人が補佐役につく。ナオミはその六人の子爵のうちの一人といってもよい。彼女は幼くして子爵の身分にあるものの、正式にはまだ子爵ではない。彼女は幼くして子爵の身分にあるものの、正式にはまだ子爵ではない。現在、ナオミの子爵の位は彼女が騎士になるまで、公爵預かりとなっている。

「あ、あの…子爵になればどうなるの？」

「君が望むがままの自由な生活を謳歌できる、それが貴族になるということだ」

食うことにも困らず、着る物にも困らず、金にも困らず、自由な生

活。ナオミが望んでいた生活が男の言葉にはあった。本当にこんな下女のような生活が大きく変わるなら、この誘いをのってみる価値はある。

「捜査部門の内部情報だが、ヤドリギ夫妻は復爵を願いでている。その条件として、公爵陛下は『あるモノ』を見つけてくるように命じているそうだ」

ホワイトもそのあるモノの正体は知らないという。

それだけ聞けば十分だ。要するにヤドリギが『あるモノ』を見つけ、子爵の位に返り咲くのが早いか、自分が騎士となって父の爵位を受け継ぐのが早いか――の問題だ。ナオミは昔の怨恨には一切興味はない。

今、彼女の興味があることはただ一つ。

「私、アッパータウンに行きます。自分の運命を拓くために」

その言葉と瞳には並々ならぬ決意が感じられた。彼女は自ら運命の針を動かした。

「君の選択を誇りに思う」とホワイトは彼女に右手をさしだすと、ナオミは彼の太い右手を力いっぱいに握った。

第11話　アッパータウンへの旅立ち【2】

第11話

パチッと暖炉のなかの炎が静かにはぜた。男は落ち着いた口調がナオミの耳に心地よく響く。

「旅立ちの費用はアッパータウン伯が肩代わりするから、安心したまえ」

どうして？　とホワイトに質問すれば、ナオミは爵位継承権が認められているものの、資産等は皆無にふさわしい。つまり貧乏ということだ。そういう騎士候補生のためにあるのが奨学金制度だ。もちろん返済の義務はない。

「見習い期間中は週に一回、青い鳥が君に金貨を一枚運んでくる」

話に割りこむように突然、特別捜査官のフロックコートから聞こえた。

「ムッシュ。先ほど電話を頂いたんですが。あれ、いないんですかい？　ちえっ」

誰かの舌打ちする声が聞こえて、声はツゥー、ツゥーと途切れた。

（コートが喋った！）とナオミはびっくりした。

ホワイトは慌ててフロックコートの内ポケットから大きな石を取りだした。それは紅玉（ルビー）と呼ばれるコランダムの変種で、声を電波させることができる電話石（モバイルビー）と呼ばれるものだ。

ホワイトが「五十五番、エンガチョ」と長方形の宝石に問いかけると、ピ、ポ、パ、ピ、ポ、と音を鳴らしはじめた。すると電話がかかったらしく、石はひそかにビリビリと放電する。

「ああ、ホワイト次官閣下ですかい？　それであの子は？」

「エンガチョ、彼女はブルトンの道を選んだ。問題は集合場所まで誰が連れていくかなんだが、私はヤツを孤島の牢獄まで送り届ける責任がある」

「だったら明日にでもお伺いさせていただきますぜ、ムッシュ」

ガチャッ！　という音とともに共鳴はやんだ。声の主はダ・カーポの助手だ。

ムッシュ・ホワイトは、その変わった電話をよれよれのフロックコートにいれた。まるで現代人が携帯電話をしまいこむかのように。ナオミはその素晴らしい宝石に瞳を輝かした。

「そういうわけだ、ご亭主」

ホワイトはドアに厳しい目をやった。

ヤドリギ氏は顔を赤らめて、恥ずかしさを隠すように「どういうわけで？」としらを切りとおして姿を現した。自分は盗み聞きではなく、偶然とおりかかったかのように装う、その姿にはどうしても無理があった。そもそも悪党に誇りなどない。

「この子をアッパータウンへと連れていくことになった」

「承服しかねる！」

「それとも君らには、ナオミ・ニトを連れていかれては困る理由があるのかね？」

「きさまには関係ないことだ！」ヤドリギは声を荒げ、ジジ亭の亭主は怒り狂った。

なんて分かりやすい男なんだろう。

「わしはこいつの九年間の保護者だ、他人ごときに身内のことをどうこういわれる筋合いはなかろう。こいつを渡すのなら、こいつの両親の署名がはいった書類をもってきた者のみだ。あんたに子どもを渡してほしいといった内容をしたためた書類だ」

ナオミは呻いた、そんな書類などどこに存在しようか。
ホワイトは何も答えず、フロックコートをゴソゴソさぐった。そしてボロボロになった羊皮紙の巻き紙をとりだすと、ジジ亭の亭主に突きつけた。
「もっともだ。さあ、これを読みたまえ」
ヤドリギ氏は羊皮紙を受けとり、その内容を読んだ。

『誓　約　書』

我ら夫婦、ブルトンの騎士道に誓う。我らの身に何かあれば、この書類をもつ者にわが子の親権のすべてを委ね、娘ナオミの後見人であることを。我ら夫婦はここに誓う。

誓約者　ナオキ・ニト　アリス・ニト
立会人　ヤドリ・ヤドリギ

「この署名に見覚えはあるだろう?」男は静かにいった。
これは十数年前、自分が子爵子息の身分にあった頃、ニトの子どもが生まれたおり、夫妻とともに立ち会った後見人に関する誓約書だ。ヤドリギは口惜しくもそれを認めざるえなかった。

誓約の魔法で嘘をつけば呪い殺されるからだ。さすがの大嘘つきのヤドリギもこの誓約には逆らえないとみえる。この誓約書は一時間前の取り調べまでは、サンチョ・ボブスリーの手のなかにあったものだが、彼は牢獄に送り返される運命であり、今は自分が誓約書にある後見人にあたるとつけくわえた。
「いまいましい、くそったれめ!」
完全に打ちのめされていたヤドリギは、ナオミの姿をみるやいな

や「おい、何時だと思っているんだ。さっさと寝床にいけ！」と八つ当たりしたが、ナオミは生まれてはじめて「まだ聞きたいことがあるの！」とヤドリギの言葉に逆らった。

――運命の針は動き出したら、もう止まらない。

これだけはどうしても聞いておく必要があった、そう先ほど逮捕されたサンチョ・ボブスリーのことだ。少女の小さな抵抗にかつての保護者は目を点にしていた。よもや二人の視線は、革張りの真っ黒なトランクケースにうつっていた。

記憶を司る脳の一部に海馬というものがある。

ナオミの場合、瞳にも海馬がある。目の前にいる男によって封じこめられた記憶だ。少女は九年前の記憶がすべてではないものの、記憶再現（フラッシュバック）されていた。

「…あ、あの、ホワイトさんはどう思っていますか？」

本当にサンチョ・ボブスリーが自分の両親を殺したのかの問いかけに、ホワイトの紅茶を口に運ぶ手がにわかに震えた。迷いの森の首席特別捜査官が一瞬、ほんの一瞬だけピクッ、と眉を動かしたのを少女は見逃さなかった。

「君に私の個人的見解を知る権利はない」

もしかして犯人は別にいるのかもしれない。

四歳のとき、自分はヤドリギ夫妻に預けられた。四歳までの記憶はまったく思い出せないものの、確かなことは四歳のときまで私には両親がいた、という事実。

おぼろげに憶えている両親の声と顔――記憶が醒め始めるとともにナオミの顔はしっかりとした顔つき、髪の毛は黒色から栗色に変わりつつあった。

遠い昔になくしていた大事なもの、人には必ず一個はある。
大抵は記憶とともに忘れてしまう大事な何か。人は記憶とともに歩んできたからこそ、勘違いしてその記憶が大事だと思うけれど、本質はそうではない。大事なのは記憶のなかにある人たちとのつながりだ。まったく記憶というのは、そのうえで厄介な代物だ。

「眼鏡を調整しないといけないな、視力が合わないだろう？」
ナオミは眼鏡を外して、首を静かによこにふる。
「封印の眼鏡は……もう必要ありません」
この魔法の眼鏡を通してみる世界は思いどおりにならず、ときに見るのも辛い世の中をみせる。それは魔法ではなく、じつにナオミの心だった。心に眼鏡はいらない。レンズを通して、まわりの顔色ばかりを気にしていた自分とは今日でおさらばだ。
「トモロヲ・ブドリに良い報告ができそうだ」

第１２話　アッパータウンへの旅立ち【３】

第１２話

それは人々が寝静まった真夜中に起こった。
いつもどおりダックスフンドのジョジョはナオミのそばで規則正しい寝息をたてて、ときおり耳をパタパタさせていた。何か空気の淀みを感じとったらしく、ふと目を覚ました。
すると男がナオミをじっと見つめているではないか。

男はぐっすり眠りこんでいる娘を凝視していた。ナオミは服を着たまま寝ていた。カンペールの冬はとても厳しいのだ。少しでも寒くないようにと冬は服をぬがないで寝るのが習慣だった。
ナオミはジョジョをしっかりと抱いていた。
古びたベッドのそばには、これまたボロボロの革靴しかない。ナオミの寝どころは物置だ。その先には宿の客人たちと共有の居間があった。かなり大きな部屋なのだが、その先に二つの扉がある。きっとヤドリギ夫妻の部屋か、ハレルヤ少年の部屋にちがいない。

男が何か呟こうとしたとき、居間の大きな古びた暖炉にそっと目がとまった。
暖炉は小さな火がはぜていた。そこにかわいらしい男の靴が片方だけあった。クリスマスの前夜に暖炉に靴を置いておくと、親切な老人が素晴らしい贈り物をくれるという、あのサンタクローズの話を男はふと思い出した。男の靴にはお洒落な箱の贈り物がつめこまれていた。暖炉のそばには宴会の名士たちからもらった贈り物がどっさり、山のように積まれていた。

男は物音をたてないように身を起こした。

そのときクリスマスツリーの端っこに申しわけなさそうにしなびれた、何かが置いてあるのに気がついた。目を凝らしてみればそれは片方の革靴だった。ところどころに修繕の痕があった。泥にまみれ、大切にはいてきたのだろう。ナオミの革靴であることは疑う余地がなかった。その革靴には何もはいっていなかった。それどころかハレルヤ少年の仕業だろうか、打ち捨てられるように居間に転がっていた。

男は古びたコートのなかを静かにさぐった。

数秒後、しわくちゃだらけの一枚の写真をとりだして、ナオミの革靴のなかにいれた。いや入れたのは　写真だけじゃない。卵のようなかたちをした赤い宝石もだ。宝石にむかって呟いたのか、何やらぶつぶつと呪文を唱えたと思いきや、次の瞬間、男の姿はどこにもなかった。冷たい空気のなかに男がいた痕跡、よどみだけが残っている。ジョジョは寝ぼけていたのだろう、とまぶたを閉じた。

翌朝、旅籠ジジ亭は大騒動だった。

世が明けるまでまだ二時間もある暗いうちから、ヤドリギはぶつぶつ呟き、暖炉の間を行ったり来たりしていた。ホワイト率いる迷いの森の特別捜査官たちは一言も口をきかなかった。聞こえてくるのはナオミが部屋掃除をしている音だけだ。

「つまりだ、次官閣下とあろうお方が殺人犯にまんまと逃げられたわけですな」

ヤドリギはいやみたらたらでいった。

「しかもヤツが逃亡したおり、腕利きの捜査官何人かが返り討ちにあったと？」

「共犯者がいた可能性もある」

「次官たるお方が言い訳などおこがましいですな」

「外からトランクの鍵が壊されていた」

ホワイト次官はコーヒーを飲みながらいった。

しかもどこか嬉しそうだ。きっとこの人もサンチョ・ボブスリーはもしかしたら、無実ではないかと疑っている一人なのかもしれないと、少女はひそかに思う。

ナオミは生まれてこのかた、不思議な感覚におちいっていた。というのも少女は目をさますと暖炉へ革靴を探しはじめた。毎年、何もはいっていないというのはわかっていながら（去年はヒキガエルがはいっていた。一昨年は馬糞だ、すべてハレルヤのしわざだった）、やはり靴のなかをみた。

彼女はそのなかに一枚の古びた写真と宝石をみた。

写真の裏には『ナオミ・ニト夫妻とともに』と添え書きがしてあった。一緒に写っている男の人はとてもハンサムだ、男の人が腰に手をまわしている女の人も美しい。美人という言葉はこの女の人のためにあるといってもよい。初めて両親の顔をみて、彼女は一瞬、自分の運命の扉が開くのを感じた――と同時に、太陽のフレアのような輝きがある宝石にも目がいった。

こんな美しいものは生まれて初めて目にする。きっとものすごく高価なものに違いない。言葉記憶の魔法というものだろうか。赤味がかかった宝石には、あの男の声が宿っていた。

「これは火蛋白石（ファイアーオパール）、君が運命に挑むのなら君を守るだろう」

ハレルヤが目を擦りながら、自分に贈られてきたプレゼントの中身を確認しようとやってきたので、ナオミは大急ぎで写真とともにポケットのなかにしまいこんだ。

誰がこの素敵な贈り物をしてくれたかはすぐに察した。体中が喜びに震えた。

思えば森で偶然出会ったあのときから、そうあの桶を太い手で持ってくれたあのときから、彼女の運命の歯車は大きく回転し始めていた。物心がついた頃から、ナオミはヤドリギ親子への従僕すべき立場と孤独のなかを懸命に生き抜いてきたのだが、今は少し違った。自分のことを真摯に思ってくれる人が一人でもいれば、人は生きる理由が生まれる。そう人一倍強くなれる。

床掃除が終わったナオミは二階のはずれにある、今まで彼女が足を踏みいれたことのない古びた部屋へいくよう、ヤドリギに命じられた。ヤドリギしか使うことが許されていない亭主の間だが、部屋のなかにはいってみれば、ただの書庫だった。

埃にまみれた古びた本がどっさりと山のように積まれていた。

「おじさんは私をアッパータウンにいかせないつもりよ」

ジョジョは昨夜のことを思いだしていたが、どうもしっくりこない。夢幻を語り、主人を怖がらせるならともかく、今はそういうときではない。

一階に耳を澄ませば怒鳴り声が聞こえてくる。

「今すぐナオミを呼んできたまえ」と「あんたにそんな権限はない！」との怒鳴り声。

首席特別捜査官とジジ亭の亭主との言い争いのようだ。

やがてコツコツと革靴の音が聞こえてきた。明らかに自分の部屋に近づいている。話の決着がついたらしい。下の階で怒鳴っていた二人のうち一人が自分を迎えにやってきたのだ——あと数歩だ、もうすぐで自分の運命の扉が開く。

第１３話　開かずの扉【１】

「おお！　なんでこんなとこにナオミがいるんだ、え？　髪の色が変だけど……」
黄ばんだ大声で、可愛らしいペットの黒ヤギを連れた男は唸った。

彼女のまえに立っていた男は、首席特別捜査官でも、ジジ亭の亭主でもなかった。
ナオミはその男に見覚えがあった。彼の名はダ・カーポのところで助手をしているエンガチョだ。少女は昨夜、ホワイトがエンガチョに自分をアッパータウンへと連れていくために電話していたのをにわかに思いだした。
「うんにゃ、今からいくとこだった」と彼は胸をはる。
「ここはジジ亭の二階よ」
「へん、『ここはジジ亭の二階よ』だと？」
エンガチョは、真顔でここはダ・カーポの屋敷の図書館の書庫だといってのけた。
「ここは先生が集めた、禁断の書物が置いてある重要文庫だ」
ナオミは一瞬、自分の頭がおかしくなったのか、と思った。でもまずは深呼吸だ。

――――一、二、三。大きく息を吸い込もう。

少女は自分がここにきた経緯をエンガチョに話して聞かせた。
すると男は重要文庫がなくなれば、いつも自分が古本屋に売り飛ばしているのだろう、とダ・カーポに非難されていたことを打ち明けた。

「これでスッキリしたぞ、犯人はヤドリギだったんだな。ヤツの二階の部屋はあかずの扉だったわけだ。しかも片方だけの入りの扉のみだ。だがヤツはどうして先生の部屋に盗みにはいる必要があるんだ。小遣い稼ぎじゃあるまいし、え？」

時々、ヤドリギ氏がこの部屋にはいっていく姿は覚えている。コソコソ人目をはばかって、しかも真夜中に。理由はなんとなくわかった。例のあるモノを捜しているのだ。

「この空間移動魔法は上級魔法だ。ヤツごときが使えるはずがない」

開かずの扉の魔法は、ペア同士の鏡なら移動することができるという古代魔法をもとに復活させた魔法だ。魔法の鏡は現在も存在するが、同じように扉に古代魔法をかけて復活させようとしたヤツはなんぞ……そういえば過去に一人いた、とエンガチョは唸る。

ダ・カーポと同じことを考えるなんて、一体どんな変わった人なんだろう？

「先代ヤドリギ卿だ、ダ・カーポ先生の屋敷も昔はその人のもんだった。先生の考古学の師匠はあの人だったからな」

遺言状で研究のたしにと、この屋敷を子爵から譲り受けたのは十三年前だ。

「まあ、俺っちの無実をだ。先生に報告したくともだ……そのう、なんだ――――やれやれ、まったく」

書庫の本をむしゃむしゃと食べている黒ヤギをじっーと眺めた。

「当の本人は自分のコレクションを食いもんにしちょる」

彼女は驚きのあまりもう一度、ゆっくりと先ほどの言葉を聞きなおしただが、やはりエンガチョは黒ヤギをダ・カーポと呼ぶ。黒ヤギはナオミのところにやってくると、彼女の頬をペロペロッと舐め

ると、かわいらしい鳴き声をあげた。
「さよう、この黒ヤギはあのダ・カーポ大先生なんだな。昨夜、いつもどおり俺っちが『山荒し』で一杯ひっかけてから、屋敷に戻ったときには大先生はこうなっていたんだな。そして近くにはこれが転がっていた」

エンガチョは涙声になって、グスッと手の甲で涙をぬぐうと、ジャケットからしょぼしょぼに干涸びた黄金のリンゴをみせた。それはそれは美しいリンゴだったのだが、生ものらしく腐っていた。食べた者をヤギに変えるというジンクスをもっている『黄金のリンゴ』はギリシャ神話所縁のものだ。アップルパイをごちそうになれば、かわりに自分たちがこうなっていたと思えば、ナオミは言葉がでてこない。

ジョジョは黒犬から黒ヤギになるなんて、どんな気分だろうと子どものように無邪気にはしゃぐ。
「骨董品屋の競売（オークション）は危ないと俺っちは注意したんだ。ロベルト・パパティーノ、そもそも名前からして危ない。パパティーノ家末席の者のしわざかもしれん」

パパティーノ家といえば高名な犯罪学者の弟子だとか。悪名高い『迷いの森の一味』であって、今回の出来事は『迷いの森の辺境伯』がらみだと、そう自分はにらんでいるとのことだった。
「その矢先にお前さんの『ここはジジ亭の二階よ』だ」
エンガチョは神妙な顔つきでいった。
もしかして今回のこの事件、ヤドリギがからんでいる可能性も否めない、男はそういいたげだった。だがむやみに人を憶測だけで疑うことは愚かなことだ。しょせん憶測は憶測なのだから。

エンガチョは黒ヤギが食べようとしていた本を取りあげ、近くに

落ちていた老人の肖像が描かれた切手を拾いながら、困った顔つきでぼやいた。

「この騎士切手はいずれ歴史的価値がでる。この騎士の名前はトモロヲ・ブドリ」

エンガチョは手の親指と人差し指のなかで、ペラペラしている切手をみせた。

「トモロヲ・ブドリ？」

ムッシュ・ホワイトがその名前をいっていた気がする。

「アッパータウン始まって以来のへっぽこにして、ダ・カーポ先生の大祖父（グランドファーザー）なんだな」

ナオミは騎士切手をみつめた。地面にもつきそうなそれは長い銀色のあごひげに髪、きりっとした鼻とすらりと背が高い。間違いない、あの記憶の中の老人だ。騎士切手のふちにはベリー・グッドウィルというどこかで聞いたことのあるような、またないような肖像画家の名前が署名されていた。

ナオミから切手を受けとったエンガチョは先ほど拾い上げた、黒い本をペラペラとめくりながら「…トモロヲ・ブドリ、トモロヲ・ブドリ、いかれたへっぽこ爺さん…」と呟くと、探していたページがみつかったらしい。男は切手の裏をペロリッと舐め、小さな枠のところに貼りつけた。

エンガチョはそのページをナオミにみせた。

騎士殿堂歴代十二位

氏名　トモロヲ・ブドリ・アッパータウン卿

性別　男性

年齢　一三八年と五ヵ月

職業　アッパータウン代表取締役市長
公職　宮中伯（アッパータウン伯）
爵位　伯爵
賞罰　円卓の騎士勲章・勲一等騎士
　　十字軍アッパータウン師団　最高司令官

住所　ブルターニュ地方株式会社（通称：白の公国ブルターニュ）
　　アッパータウン市株式会社
　　キング・アーサー騎士団一丁目一二三番地
　　アッパータウン・オブ・ギルウェル領主館　最上階

アッパータウン領主であるブドリ伯爵。近代史において彼ほど勇敢な騎士は存在しないといわれている。また伯爵は伝説のアイスランド人サンタクローズの友人であったことは大変有名だが、世間からはへっぽこ爺さんで知られるほうが有名。

ナオミがページを読み終えたころ、騎士切手が隙あらば逃げ出してやろうとばかりにモソモソと動きだした。
「騎士の護衛魔法だ。手紙や書類を送るときに貼るんだ」
ゴエイマホウ。なんと素敵な発音だろう。

トモロヲ・ブドリの騎士切手がペロッと手帳からはがれたので、エンガチョは親指でぐっと力強くおさえた。男の小言によれば、切手に描かれた絵柄の騎士が手紙を守ってくれるそうだ。ひと昔前まではカタツムリポストを使っていたそうだが、フランス人にエスカルゴと間違えられ、食べられるようになってから、この郵便方法を使うようになったとか。

第１４話　開かずの扉【２】

埃まみれの書庫には窓はなく、あれから時間がどれほどすぎたのかわからない。壁には古びた西洋ランプがかかげられ、部屋をうっすらと黄色く照らしていた。

ホワイトから電話がかかってきたらしく、エンガチョは唸った。

「ナオミなら一緒だ。あ？　兄貴はそんなことしねえよ」

エンガチョは半分怒っているようだ。顔を真っ赤にしている。

「ナオミがどこにいるかって？　兄貴を悪党扱いするヤツにゃ、教えねえよ。エーデルの酒場によれだと？　フンッ、いわれんでもよるさ。エーデルがあの子に会いたがっているからなあ」

――――エーデルが私に会いたがっている？　エーデルって誰だろう？

自分を見つめるナオミの顔をチラッとみて、エンガチョは本題にはいった。

「ヴァンヌにいかねばならん」

男はナオミにその格好ではまずい、アッパータウンにいくまえに、身支度を整えなければならないという。騎士には騎士にふさわしい格好があるらしい。ヴァンヌはブルトン人とフランス人が暮らす中世の面影を色濃く残す町だ。カンペールの二倍ほどの大きな町だ、と学校の地理の授業で習った気がする。

エンガチョとともに書庫をでれば、あの扉がいくつもある不思議

な廊下にでた。
クリスマスツリーが扉ごとに飾られ、十二月二十四日という聖なる日を祝福しているかのように荘厳で素晴らしかった。エンガチョはチラチラと少女をみては、ふーと大きなため息をついた。
「お前さんは自分の生い立ち、白の公国ブルターニュの歴史を詳しく知りたいかね？」
大男の問いにかけに少女はコクッと頷いた。

それこそナオミが一番聞きたくてならなかった心のモヤモヤであり、アッパータウンにいく理由そのものなのだ。瞳の記憶だけではあやふやすぎる。もちろん生い立ちを知ったからといって、アッパータウン行きをやめるわけではない。暗い未来をさける唯一の方法は脅威を知ることである。身支度を整えるまえに、それ相応の覚悟も必要なのだ。

エンガチョは腕を組んで、遠い瞳になって語りだした。
「受け入れる準備ができているなら……よかろう、聞かしてやろう」

まずブルターニュ地方は表向きはフランス領であるものの、じつはブルターニュ地方株式会社がすべての領土を保有しており、この地方には某社が出資する市や町、村が一千あまりある。つまるところ株式市町村としてブルターニュ地方株式会社の傘下にあるというのだ。とくにアッパータウン市株式会社は某社が出資する株式会社のなかで、最も繁栄を謳歌する株式市町村といえよう。

ブルターニュ地方株式会社は公爵を社長とし、領土をもって仕える貴族たちによって構成されている、元領主たちの組合みたいなものだ。白の公国ブルターニュが株式会社になったといえども元封建領主である貴族たちは、その領土内において強い自治権、君主大権を持っている。

よっていかに公爵といえども、それらの領土を勝手に分割したり、他者に与えたりすることはできない。視点を変えれば公爵とは株式国家ブルターニュにおいて、もっとも勢力の強い、経営者であるとみなしてよい。

領地を経営する騎士はその社会的特権から爵位を持っている。新しく領地を得るということは、誰かの領地を奪うということでもある。そう領地には限りがある。よって現在、新しい爵位は認められておらず、だいたいは世襲として一門を率いる実力者に受け継がれていく。

また爵位は候伯子男に大別されている。領地の経営規模、いや経営責任の大きさから爵位は異なる。首都経営は公爵、都市経営は伯爵、町経営は子爵、村経営は男爵の仕事なのだが、男爵や子爵は必ずどこかの伯爵の領地に属している。

すなわちブルターニュの一千あまりの市町村は、町経営者の子爵、村経営者の男爵、これらを統括する市経営者の伯爵、つまり株式国家ブルターニュは一千あまりの貴族たちの領地経営、株の持ち合いによって成り立っているのだ。

「最近じゃ、子爵が伯爵になるケースも増えとる」

エンガチョは由々しき事だと嘆く。

下克上というらしい。ある伯爵領では子爵が伯爵領の株の過半数を握り、自分が伯爵となったそうだ。伯爵の身分を奪われた前領主は、自ら命を絶ったという。東部のほうでは株式市町村を離脱して、その土地をフランスに差し出している輩もいるそうだ。

経営責任の大きさから町経営者の子爵、村経営者の男爵は都市経営の伯爵に属していることから考えれば、一千あまりいる貴族とはいえ、ブルターニュ地方株式会社を構成しているのは一五〇名もの

都市経営者の伯爵たちだ。

伯爵は当然、国政にも参加する。誰がどの役職につくかは、株式市町村の運営実績の結果しだいだ。公爵を補佐するのが伯爵の務め、分かりやすくいえば大臣だ。そして一五〇名もの伯爵の意見を集約し、実行するのが宮廷だ。

この宮廷を統括するのが宮中伯、宮廷を取り締まる伯爵だ。大臣の長といえる立場、つまり宰相という身分にある。現在、その地位にあるのがトモロヲ・ブドリだ。ちなみに宮廷では全伯爵に公職や大臣職が与えられている。

公職が世襲されることはまずないといえようが、いかに大臣たちがいても、最終的には公爵の決定が絶対となる。専制政治をすれば伯爵たちの不満を買い、反乱を招く。大臣たちの意向をどこまで無視できるかというのは、公爵と伯爵たちの力比べに帰する問題だ。

「対立が深まれば、モンテカルロ党のようなことになるんだな」
「モンテカルロ党？」
「希代の大悪党モンテカルロが設立した伯爵同盟だ」
「……」

――――希代の大悪党？　モンテカルロって誰だ？

「その昔、護国卿と呼ばれておった男だ。そして公爵の元後見人だ」
男が護国卿の任にあった――そんなある日、男はアーサー・ブルトン歴代公爵の玉座を奪おうとしたが、未遂に終わった。

非合法政変（クーデター）の失敗により、お尋ね者になった護国卿が命からがら逃げこんだ先が迷いの森だ。この森は古くからエルフ族の所領、彼らはブルトン人やフランス人とも手を結ぶことはない中立の人種、

かの迷いの森が未開拓地域（フロンティア）と称される所以でもある。

その地で男は名を捨て、自らをモンテカルロ辺境伯と改めた。

モンテカルロはふくろう党に対抗する組織を作った。それが自分の名を冠するモンテカルロ党だ。このモンテカルロ党にはブルターニュ地方株式会社の主要株主、名立たる伯爵たち数十名も参加した。そして現在、ブルターニュ地方株式会社は二つの派閥によって二分されている。

アーサー・ブルトン公爵家及び伯爵連合率いるふくろう党、残りは反公爵の伯爵同盟モンテカルロ党だ。

ふくろう党の資金源は伯爵たちによる、軍需、石油などの国家を越えた多国籍企業群によって支えられている。一方、モンテカルロ党に至っては西欧王室（ロイヤルファミリー）たちの資金援助によって支えられているというが、大半の意見が王室を脅しているか、もしくは王室の表にできない裏家業によって得た報酬だとのこと。

「有力貴族が二つにわれ、ブルターニュ中が乱れた。敵味方を見分けるため、ヤツの名には高名な魔法使いが呪いをかけた。その名を語る者に災いが起こるように。だから俺たちはあの男のことを『迷いの森の辺境伯』と呼んでおるんだな」

迷いの森の森に住む、エルフの歴代君主がヤツに臣下の礼をとったのが名の由来だ。

辺境伯といえば侯爵という意味であり、公爵の次に地位がある。すなわち世継ぎのいない公爵の正統後継者ともいえる立場にあった。なぜ永世中立のエルフの歴代君主が、あの男に臣下の礼をとったのかは、未だにわからないという。ちなみにモンテカルロ党のことを、今では『迷いの森の一味』と呼ぶ。

そう、この二大勢力が実質、ブルターニュを支配している。

その頂点に君臨するのがブルターニュの支配者『聖王ブルターニュ（通称：白の公爵）』の称号を有する者だ。伝統的には歴代公爵が襲名することになっている聖王の称号だが、モンテカルロ党の反発もあり、強引に宣言すれば、内乱が起こりえないとのことで現在、その席は空位となっている。

「聖王宣言は運命の女神が公爵陛下の聖剣（エクスカリバーン）を受け取り、そしてそれを返すことによって認められる。女神が聖剣を受け返す、つまり政権を委ねるってことだ。まあ、俺っちにしてみれば強引にでも公爵陛下は、聖王への戴冠式に望まれるべきだと思うんだな」

エンガチョは話を淡々と続ける。

「やがて血で血を洗う、暗黒時代は終焉を迎えた。四回目のアーサー・ブルトン歴代公爵の暗殺未遂、ついに一人の偉大な騎士がヤツを呪われた、孤島の牢獄モン・サン・ミッシェルにぶちこんだ。その騎士の名前は……」

「そ、その騎士の名は？」

ナオミはゴクリッと生唾を呑んだ。

「ナオキ・ニト、お前さんのお父さんなんだな」

だが平穏な日々はそう長くは続かなかった。

というのも今から九年前、迷いの森の辺境伯は脱獄に成功した。まず手始めに辺境伯は自分を牢獄にぶちこんだナオキ・ニトに刺客を放った。エンガチョは二、三分前からうつむき、拳をギュッと握りしめた。

黒ヤギがなぐさめるように近くによってきたので、エンガチョは

「まったくすまねえ、大先生」と呟き、自動車の急ブレーキをかけたような騒音を響かせ、鼻をずるずるとかんだ。黒ヤギはそのまま気絶してしまった。

男はナオミの顔色をうかがうように話をすすめた。
「その刺客がサンチョ・ボブスリー…」

ナオミは瞳を閉じた。まぶたに顔に刺青をしたサンチョのいかつい顔が浮かぶ。サンチョ・ボブスリーが父と母を殺害したのかは分からない。だが暗殺命令をだしたのが迷いの森の辺境伯と知り、ナオミは唇をギュッと噛みしめた。
「で、俺っちの兄貴でもある」

エンガチョの告白は衝撃だった、言葉が声にならない。
「俺が憎いか？　俺もアイツが憎いんだな」

アイツって誰？

「あの場所に居合わせたのは兄貴一人だけじゃない」
瞳の記憶によれば、それがコクーン・コ・クーボ。
男は子爵家の家督をめぐって、兄のピエモンテ夫妻を殺して指名手配となった。コクーン本人は「これは陰謀だ」と身の潔白を訴え、ニト夫妻に匿われていたそうだ。その彼も現在、彼は行方不明となっている。
「無実であれば、なぜ逃げる必要があるんだ、え？」
まったくそのとおりだ。

兄貴には身の証を立てる権利があるんだ、と弟は唸る。
確かに彼のいうとおりコクーン・コ・クーボが無実であれば、どうして逃げる必要があろう。しかしながら記憶のなかのサンチョは

自分が犯人だと自白していた。これではわけがわからない。

ナオミは胸苦しそうに聞いてみた。

「あ、あの…『迷いの森の辺境伯』はどうなったの？」

ナオキ・ニト夫妻暗殺後、仲間の裏切りにあって死んだそうだ。

現在、彼の墓は迷いの森の中にある。エンガチョは一味の中で、迷いの森の辺境伯を裏切り、攻め滅ぼせる力があった者といえば、今では小モンテカルロと呼ばれ、ヤツの腹心だったジョルジョ・パパティーノぐらいなもんだとさらに唸る。

「…ジョルジョ・パパティーノ？」

「ああ、パパティーノ家は冥界の王『冥王』を輩出する、邪悪な家系なんだな」

冥界？　冥界の王？　ナオミは顔をしかめた。

「まあ、お前には縁もゆかりもない世界だ。知らんでもええ」

エンガチョはしまった、という顔つきだ。

「俺っちが思うには大先生のことだ、おそらく連中につながる重大な情報をつかみ、その口封じのために……くそったれ！」

男は話題をわざと一コマほど戻していった。

ナオミはすっかり黒ヤギになった、考古学者にチラリッと目をやった。

「モンテカルロは確かに死んだ。だがヤツに忠誠を誓った腹黒き貴族どもは死んではおらん。それに今でさえ、時々だが連中の息がかかったヤツが公爵陛下のお命を狙っておる。つい最近も暗殺未遂があったほどだ」

迷いの森の辺境伯に忠誠を誓った貴族たちは黒伯爵、黒子爵、黒男爵と爵位の前に裏切りの意味である『黒』をつける。反対に歴代公爵派は『白』をつける。

今回の事件は黒と白との争いの始まり、いや九年のときをへて、昔の勢力を取り戻した連中の陰謀の始まりかもしれない――――エンガチョはいかにもそういいたげだ。

十五分後、赤い扉についた。そこにはこう書かれていた。

「『開かずの扉』Ｎｏ．２８９８７６５７８」

ブルターニュ地域圏　モルビアン県
ヴァンヌ郡ヴァンヌ市（元　白の公国ブルターニュの都）
ヴァンヌ旧市街、路地裏、エーデルの酒場兼宿屋、奥扉

「この開かずの扉をあければ、お前さんの運命は大きく変わる。心の準備はできとるか？」

扉のむこうからはうっすらと光と人のざわめきが漏れていた。エンガチョは黒ヤギを脇に抱え、扉をぐいっと勢いよく開けた。

第１５話　旅立ちの宿エーデルの酒場【１】

第１５話

部屋のなかはツーンとカビくさいにおいがした。
太陽の光があたっていないだけあって、暗くてみすぼらしい店だ。だけど店内は信じられないことに、かなりの人々でガヤガヤとにぎわっていた。

店のすみでは黒マントの怪しい男が壁に背をもたれて新聞を読んでいたり、数人の吟遊詩人が武勲詩を声高らかに歌っていたり、荒れくれ男が黒ビールをごくごくと飲んでいたり、ポーカーで賭け事をしていた。そのうち一人は葉巻きをぷかぷかと吹かしていた。小柄なほっそりとした山高帽をかぶった男が親しそうに酒場のママと話をしていた。彼女は金髪の長い髪をうしろに束ねていて、ちょっと素敵な若奥様という感じだ。

ナオミとエンガチョが店にはいると、店の客たちはこの小さなお客、そのうち数人はジョジョと黒ヤギを珍しそうに見つめた。
「エドガー・ボブスリー、この子が電話で話していた……アリスの娘なの？」
「ああ、エーデル。アリス・ニトの娘ナオミ・ニトだ」

エンガチョの本名がエドガーということにナオミはきょとんとしていた。最初は誰のことを話しているのかわからなかった。エドガー・ボブスリー、まったく外見とは似てもにつかない立派な名前じゃないか。
「そんなに驚くこともないだろうに、エンガチョっていうあだ名はお前さんの父さんがつけてくれた名前なんだぞ」とエンガチョは誇

らしげに唸った。
男の説明によれば、この人は母アリスのアッパータウンの親友だとか。
エーデルはナオミのほうをじっーとしばらく見つめていた。彼女の沈黙とともに店内のガヤガヤ声はいつのまにかやんでいた。何ともいいようのない静かさが店内に流れたと思いきや、いきなり店は歓声につつまれた。

「ようこそ、旅立ちの宿エーデルの酒場へ」
酒場のママはニコッと微笑んだ。
「あなたのご両親もこの酒場から新しい冒険へと旅立ち、アッパータウンで数多くの伝説を作ったの、それはすごい伝説だったわ。その一人娘がこの酒場にやってくるなんてね、これはきっと新しい伝説の始まりよ」
ナオミは何といっていいのかわからなかった。
酒場のママは急いでカウンターからでてきて、瞳に涙をぐっとうかべてナオミを力いっぱいに抱きしめた。女性ならではの母の甘い香り、胸のふくらみに少女のこわばった心は安らいでいく。銀のロザリオが顔に頬に当たって、少し痛いけど。

「で、どこのどいつだ。ホワイトのかわりってのは?」
「僕ですよ」
店のすみのテーブルに座っていた、山高帽の男は少女にそっと一礼した。

(えっと誰だっけ。ああ、ナカタ先生だったっけ?)
ナオミはうっすら思いだしたようだが、なぜか若い男はククックッと苦笑していた。
「タナカ、ピックル・タナカです」と若い男はいった。
彼は優秀さが認められ、かの町で代理教師として採用されたそう

だ。

「タナカ先生はブルトン人だったの？」

「ええ、君と同じ日系ブルトン人ですがね」

ピックル・タナカは優しく笑みをこぼしていた。

「そうそうエンガチョから、護衛の話は聞いているかね？」

ナオミは顔をくもらせ、エンガチョは聞こえなかったふりをしたので、ピックル・タナカは酒場のママにあきれ顔をみせ、首席特別捜査官から託された、ある言葉を伝えた。

ホワイト次官からの伝言。

――暗殺者（ヒットマン）が君の命を狙っている、気をつけたまえ。

その筋の話では暗殺者とは、小モンテカルロとの噂だ。

小モンテカルロ、ジョルジョ・パパティーノ。エンガチョの話によれば、黒伯爵たちの間では、迷いの森の辺境伯の後継者とも謳われる悪党だ。ダ・カーポを黒ヤギにさせたのもロベルト・パパティーノ、パパティーノ家の末席の仕業だとか。

「な、なんで…私が。何も悪いことしていないのに…」

「ヤツの目的は正直分からん。恐けりゃ、アッパータウン行きを辞めちまえばいい」

いや同じことだ。昨日はカンペールの古森でフェンリルに襲われた。どこにあっても命を狙われるなら、騎士たちがたくさんいる、アッパータウンのほうがかえって安全かもしれない。

「まあ、そうともいえるな。だが用心にこしたことはない」

エンガチョはそういうと、ナオミに服の上から自分の腹と胸を触らせた。

「エ、エンガチョ！　これって…」

男の身体には抉られてた痕がたくさんあった。

「これが迷いの森の一味のやり方だ、残忍極まりない。いいな、連

中には用心しろ」
もしかして昨日の狼の群れはパパティーノが放ったものか？
サンチョ・ボブスリーはそんな自分を助けてくれたのか、いやきっとそうに違いない。今はどこにいるのかわからないが、どうか無事でいてほしい。

殺し屋からナオミを守るため、迷いの森の特別捜査官たちはタナカをアッパータウンまで同行させることにしたという。
「僕はこれでも魔法剣の使い手なんだぞ」
てんで弱そうに見えるが、法螺でないことを信じたい。
皆が自分を見ている。じっと見られることが、こんなに恥ずかしいこととは思いもしなかった。吟遊詩人なんかは驚きのあまり口をぽかーんっとあけている。いい加減、もうしめればいいのに。自分が歌っていた武勲詩の続きを忘れてしまっているかのようだ。
エンガチョは誇らしげにナオミを見ていた。
「やはりお前さんは英雄の娘だ、皆が誇りに思っている」
やっと曲を思い出したらしく、吟遊詩人が少女を称える賛美歌を歌いだした。

頃合をみはからい、エンガチョがカウンター席へと大きな体で人ごみをかきわけていく。ナオミとジョジョは後ろにくっついていきさえすればよかった。
「よっこらっしょっと」
エンガチョが椅子に座ると、誰かが声をかけてきた。
（…あっ、ほうき人間だ…）とダックスフンド。
ジョジョの言葉どおり、ほうきのような頭が話しかけてきた。
「聞いたぜ、エド。お前の兄弟（ブラザー）の脱走には共犯者がいたって、もっぱらの噂だぜ」
「いつもの迷いの森のアホどもの戯言（ゴシック）だ」

エンガチョとほうき頭はバター葉巻きを吸いながら世間話をしていた。景気がどうやこうや、最近はどうやこうや、末っ子のテルがアッパータウン行きが決まったという話だ。テルという言葉で思いだしたらしく、エンガチョはほうき男が旨そうに吸っている、バター葉巻きをみて得意げにいった。

「その息子とやらは今日はみかけないな?」

「せがれは店をみてまわっているよ、なんせもうすぐ騎士候補生だからな」と噂の少年テルが見物から戻ってきた。

(…あっ、今度はほうき人間の子どもだ…)とダックスフンド。

「父ちゃん、アルマーオの親爺さんが、仕入代のツケを払えってさ」

少年はナオミの雰囲気が少しかわった——正確には大人びいたことに戸惑いつつも、彼女との再会に喜び沸いた。

「じゃあ、僕と同じなんだね。君もアッパータウンにいくんだ!」

二人の出会いを遮るように電話石が喧しく鳴った。

エンガチョは勢いをよく電話をとったと思いきや、すぐに声が聞きとれないぐらいに小さくなった。キョロキョロと挙動不審になって、まわりを気にするように電話の主とボソボソと話を終わらせると、フンッと鼻を鳴らした。

「五分後に人と会うことになっちまった、そのまえにお前さんに渡すもんがある」

男はナオミに何やら分厚い、重い、黄色みがかかった羊皮紙の封筒を渡した。

少女が震える手で封筒を裏返してみると、剣と盾の紋章が刻まれた、白い蝋によって封印されてあった。封筒のなかにはラテン語?

いや正確にはブルトン語で書かれた何かの権利書がはいっていた。

「アッパータウン伯からの贈り物だ。ミスリル金貨三十万分の株券なんだな」

ナオミはしっくりこない表情で、エンガチョの言葉をそのままま

りかえした。
「エンガチョ、ミスリル金貨って？」
「俺たちブルトンの通貨、ミスリルだ。アッパータウンではフランは使えん」

紀元前一世紀初め、ブルトン人はギリシャ・ローマの金貨を真似て、ミスリル銀から特徴的な合金製ブルトン硬貨を造った。彼らの硬貨の蓄えの多くは、一八三五年六月に発見されたアマンリの財宝、一九四一年二月に発掘されたサン＝ジャック・ド・ラ・ランドの財宝として見つかった。

またブルトン人の統一通貨ミスリルは、フランスの通貨フランと五分五分で交換できるらしい。

子爵の爵位継承権は公爵預かりとなっているものの、ナオミには両親が残した株主という資産がある。いわゆるアッパータウンの株主だ。この資産は現在、ナオミが成人になるまでトモロヲ・ブドリが預かっていたが、彼女がアッパータウン行きを選んだこともあって、伯爵は彼女にその立場というか、株主としての責任を担わせることにしたそうだ。

「俺たちの国は株式会社だ、というのは先ほど説明したとおり。アッパータウンもブルターニュ地方株式会社のなかにある都市の名前なんだが、これも株式会社になっておる。お前さんの母上はそのアッパータウンの主要株主なんだな」

ブルトン人は国家や市町村を株式会社化することによって、物事を戦争で解決しなくなった。役人も働くようになったし、特権意識もなくなった。業績をあげるために身分や学歴に関係なく、才能ある人間が登用されるようになった。自分たちの地位や名誉、保身ばかり考える高齢者よりも、若者に力を与えることによって、まず未来が開けた。

どの時代においても青年は時代と未来を拓く、熱と力である。

ブルトン人は国をもたず、会社を国とする民。株式国家（カントニー）ゆえに領土の拡大や他民族の支配、どっかの国みたいに世界の覇権を争う野望など彼らにはない。独占されていた役人業務も民間に解放され、二重行政や予算の無駄遣いも減った。

さらに領地を株式会社化して、互いが株式を持ち合うことによって領地紛争もなくなった。領民が株主であるため、役人たちは必死に働き、領民に利益を還元し、領地とともに領民は豊かになってきたという。これこそ新しい時代における、国家のあるべき本来の姿なのかもしれない。

エンガチョのちんぷんかんな話にナオミはめまいがしてきた。

「お前さんは奨学生とも聞いておる。まあ、買い物したときはお前さんのサインだけで事足りる。あとからトモロヲ・ブドリのほうに請求書がいくことになっておる。もう一つ、お前さんに渡すもんがあるじゃねえのか。なあ、エーデル？」

エンガチョの視線にエーデルは、あの預かり物を思い出したかのようだ。

「ああ、ごめんなさいね。そうそうあなたに渡すものがあるの、ちょっと待っててね」

エーデルがゴソゴソッとしたと思えば、カウンターから取り出したのは白布で包まれた長細いものだ。「開けてごらんなさい」との言葉のまま、白い布からでてきたのは赤い鞘の立派な剣――羊皮紙の添え書きが床にペラッとおちた。

ジョジョが咥え、ナオミはそっと拾い読み上げた。

「これはかつてお父上の剣でもあった。生前、わしが彼に贈ったものだ。お父上亡きあとは形見としてわしが預かっておったんじゃが、君がアッパータウン行きを決めたことを祝福して、この剣を君に贈りたい。トモロヲ・ブドリ宮中伯…」

少女は父ともに生きた長剣をギュッと握りしめた。
アッパータウンの旅立ち、自分はいろんな人に祝福されているんだと思えば、言い表せない嬉しさがこみ上げてくる。ジョジョは「殺し屋には祝福されていないけどね」とせっかくの気持ちに水をさすけれども。
旅支度に必要なことはエーデルに聞けばいい。ダ・カーポはアッパータウンの呪い解放の第一人者シャルル・パリオリという錬金術師にみてもらってくれ、それだけいうとエドガー・ボブスリーは忙しさのあまり、小銭入れをカウンターに置き忘れて、どたばたと店をでていった。

ナオミはエンガチョが置き忘れた小銭入れを手にとるやいなや、悲鳴をあげた。なんと小銭入れと思っていたのは、ガマガエルだった。
「ガマグチガエルっていうんだ、お金を守るのが役目さ」
手紙を守る騎士切手と同族だと、テルは当たり前のようにいってのけた。エンガチョのガマグチガエルは炎のようなバラ色だ。カエルといわれなければ、四角いエナメル財布に見間違えてもおかしくない。おそらくブルトン人にとって、彼らにとって、ガマグチガエルは常識なんだろう。
少女はエンガチョに会ったら渡そうと、この一風変わった小銭入れをしまいこんだ。
「ねえ、ナオミ。宿は決めているの？」
ナオミは首を横にふった。
「じゃあ、今夜の泊まる場所はうちで決まりね！　うちは宿屋もかねているのよ」とエーデルの笑顔が夏の太陽のようにまぶしい。今は冬だけど。

第１６話　旅立ちの宿エーデルの酒場【２】

酒場の外は人という人でにぎわっていた。ブルトン語で『小さな海』を意味する、モルビアン湾の付け根に建設された都市ヴァンヌ。一世紀にローマ帝国支配下にあった頃、湾に面した都市ロクマリアケールを滅ぼし、ブルトン人たちはフランス南部に都を築いた。そうこの地はブルトン人の公国発祥の地であり、白の公国ブルターニュ滅びの地。

ブルトン人しかはいれない、せまい旧市街。

潮の香りにわかに漂うヴァンヌの旧市街には、武器屋や防具屋、地図屋や紋章屋、それから錠前屋や宝石店、五百年も続いている魔女の宅急便屋や乾燥薬草の老舗などナオミがみたことも聞いたこともないお店がたくさんあった。また不死鳥の羽根、一角獣の角などを売っている怪しげなお店や木の実の専門店。「只今都合により使用不可」のかけ札がかけてある、なぜかこんなところにもあるダ・カーポの開かずの扉。

「あった、ここだ！」

テルは「一級星占い師ウォーレン、エルフ館」の看板をあごでさした。

館内はどことなく薄暗い感じがした。埃くさいといってもよく、神聖な感じがただよってくる。ナオミは妙なことにまるで規律の厳しい図書館にきているような感じがした。それもそのはず、ここはブルトン人の古代図書館なのだから。

「…あの、誰もいないのですか？」

ナオミの不安そうな声が館内に響いた。

天井まである大きな本棚、あそこをみても本棚、こちらをみても本棚。まるで本棚の迷路みたいだ、円卓の机には赤や黒の羊皮紙の本がどっさりと積まれている。

ここは古い物語や知識がたくさん眠っている素敵な部屋、この建物のなかはまるで時計が止まっているかのようだ。少女は瞳を輝かしてまわりをみてまわった。不思議なことに通路にはプラネタリウムみたいに星座が浮かんでいた。ナオミの目の前をさそり座がゆったりと通っていった。

あそこには獅子座流星群といった流れ星、さらに奥深くにはアンドロメダ星雲もみえる。銀河系のあらゆるもの、青くて美しい地球、そして白くて小さな月。

とても神秘的な回廊の端っこに司書らしい、耳がとがったお爺さんが白いソファーに腰かけて、本をゆったり読んでいるのを二人はみかけた。本のそばには青い鳥が老人の本をめくる手伝いをしていた。老人は耳が自分たちより長い。

「…ほらっ、エルフだよ…」

ナオミの心の声をテルが小声で代弁した。

肘掛け長椅子の近くには大きな鏡があった。自分たちの姿がくっきりとうつっているのがわかる。二人の存在に気づいたお爺さんは老眼鏡をはずして「こんにちわ」とにっこり顔をあげていった。

「これは鏡なのだよ。じゃがただの鏡ではない。この鏡はね、地上世界で最も残酷な生き物を映すことができる『魔法の鏡』。はたしてお嬢さんたちには何が見えたかね？」

「僕は『迷いの森の辺境伯』が見えました！」

大きな声でテルは自信満々でいった。少年の言葉に老人はニコッと微笑み、「なるほど、ではお嬢さんは？」とナオミにそっと視線をなげかけた。

戸惑いながらも、ナオミは小さな声で呟いた。
「私は自分の姿が見えました」
――そう嘘はいけない。
「なるほど、見えるものはしかたあるまい」老人はさらに頷いた。「私がいったことは間違ってはいないはずだよ。でも自分の姿を見たと正直にいったのは君だけだよ、大抵ヒトは嘘をつく」
一級星占い師ウォーレンは少女の瞳をじっと見つめた。
「あの男のおかげで君の運命はかわったようじゃな、めでたい」
小説に登場するエルフと同じく、予言と魔法の種族だけあって、意味深な呟きだ。
「君たち従騎士（スクワイヤー）の借り教科書はまがって右の棚のところ。返却日は一年半後。素晴らしい本に出会えることを願っておる。ゲーテのファウストは必須書籍じゃよ」
ナオミはエーデルから手渡された羊皮紙、買い物目録に目をやりながら、教科書を選びにいく。それにしても何もか見透れているような老人の緑色の瞳、この老人には嘘がつけない瞬時に少女は思った。テルは平気で嘘をついたが。
（きっと根性がまがっているんだよ）とダックスフンドはぼやく。
本だらけの館内は天井までぎっしりと本の山だ。
図書館のなかに本があるのか、本のなかに図書館があるのかわからないぐらい本だらけ。皮製本の古文書から新聞紙のような薄い雑誌本などいろいろある。確かなことは一生かかっても読みきれそうにない、大量の本がここにはあるということだ。
図書館のなかはたくさんの人で、静かながらにぎわっている。
「君たちは始まりの従騎士かい？」
テルの横で本を選んでいる男の子は、ナオミに話しかけてきた。

男の子は無理やりナオミのなかに割り込もうとしたので、テルは彼の足をどさくさにまぎれて踏みつけた。
「イタッ！」男の子がうめいた。
「石ころかと思った、ごめんよ」
テルは心がこもっていない声で謝った。
「僕はアッパータウン在籍一年の従騎士さ」
いやはや男の子はなんとも人を見下したような話し方をする。
男の子の隣にいる女の子に目をやれば、彼女は男の子によく似ていて、とても意地悪そうでそばかすだらけの女の子だ。男の子の隣にいることから、少年のガールフレンドか何かだろうか――。

男の子はナオミの視線に気づいたようだ。
「僕はマルコ・パパティーノ、この子は妹のリサだ」
パパティーノ、ナオミはこの名前にちょこっと用心した。
この一族は迷いの森の辺境伯と関係があるとかないとか、エンガチョにいわれたからだ。冗談半分にテルが「へえ、スパゲティみたいな変てこな名前だな」といったのがよほど気にくわなかったらしい。このいかすかない少年マルコ・パパティーノは眉毛をピクリッと動かした。
「世間知らずの田舎ブルトン、君の名は？」
「僕はテル・ウォ・アボカドだ」とテルは冷たくあしらった。
「ウォ・アスパラガス……」
「お兄様、ウォ・アスパラですわ」
リサは誰もが知っている常識という感じでいった。
「ウォ・アボカドだ！」テルは拳をギュッとかためていった。
「これは失礼、ウォ・アボカド家。君がパパと一緒にタッグを組んで、いつも冒険のたびにパパの足を引っぱってたというエロール・ウォ・アボカドの息子か」

マルコは劣等生を相手にするかにのような反応だ。

それよりも悪い。ゴミが犬の糞にみえるかのような目つきだ。むしろ犬の糞だ、泥と思って踏んでしまった犬の糞を、地面になすりつけるような卑下したような目だった。

「君たち絶対に驚くぜ」

アッパータウンには百階建ての家がわんさかあって、それにものすごい広いから誰かが特別いそぐ場合は、郵便局にいってすぐに箱につめてもらう。それを大砲に入れてぶっぱなすと、その人が行きたいと思うところにいけるらしい。質屋では脳みそを質にいれておけばね、学歴にもよるけどミスリル金貨百枚は貸してくれる。最近のブルトン人は二十四時間だけ、脳みそとプリンを入れかえるだけで生きられるから――とマルコは、こんなごたくを並べる。

「そんなたわけた話をする、君の脳みそはプリンなんだな」とテル。

「君の名は？」

マルコは犬の糞を無視して、ナオミに握手を求めてきた。

少年の人を軽蔑する視線にナオミは頑張って無視した。ジョジョも同じように頑張って無視した。噂というのは口と尊と書いて噂と書くのだが、今では相反して大半は悪意や恐ろしさ、嫉妬による尾ひれがついている。噂が評判どおりの？ウワサ？である確率は歩いている人がバナナですべって転んで死ぬ確率とどっこいどっこいだ。

「この子はナオミ・ニトだ、彼女に何かようかい？」

自己紹介をかってでたのはピックル・タナカ、ナオミの護衛だ。

「へえ、こりゃ、たまげた」

マルコは興味深く、じっとナオミを見つめた。

少年が何かいおうとしたとき、遠くでマルコ！　リサ！　と叫ぶ声が聞こえてきた。

「あっ！　父さんと執事のカトニグレが僕らを呼んでいる、もういかなくちゃ！　僕たちは忙しいんだ、アホどもの相手はしていられない。だって今日はカンペールの友人と落ち合うことになっている

からね」
パパティーノ兄妹は呼び声のところへ駆けていった。

第17話　聖家族【1】

第17話

「ものすごく嫌なヤツだったな」

テルが少年に聞こえるようにいった。すぐさま分厚い本がテルの頭を直撃した。犯人はマルコ・パパティーノだ、彼は遠くからあっかんべえをしている。なんと本当にいやな少年のことか。

二人と一匹のあとをついてまわる、ピックル・タナカにナオミは先ほどの件を尋ねた。

「従騎士というのは騎士候補生って意味だよ。始まりの従騎士というのは新人（ルーキー）という意味だ。よく上級生がつかう言葉さ」

「ふーん。やっぱり嫌なヤツ！」

テルの言葉に一人と一匹はそろって頷いた。

また騎士になるには親方騎士の従騎士になって、社交界の礼儀とやらを数年間みっちりと学ぶとか。

「…親、親方騎士（マスターナイツ）って？」とナオミ。

「君たちの後見人だ、親方とともにいろんな冒険をするのさ。騎士になるまではその親の家に寝泊まりして、騎士の儀礼を学ぶことがブルトンの習慣だ」

タナカの説明によると、まず騎士として認められるには従騎士、すなわち騎士候補生として、他の騎士や諸侯のもとに仕えなければならないらしい。これは古ゲルマン人の習慣とやらで従士制度といわれるものだとか。この制度は自由民の子どもたちが名士のもとで、衣食や武器、仕事を与えられて教養と保護を受けながら、一人前の騎士に育てあげてもらうというもの。

親方は後継人として騎士候補生の行動に責任をもち、騎士として

の儀礼などを伝授する義務がある。騎士として認められるには領主の推薦を必要とする。それを成しえたとき初めて、二年に一度に行われる叙勲式にて、ブルターニュ歴代公爵アーサー・ブルトン自らが叙勲者の肩を聖剣で軽く叩くことによって、騎士に叙勲されるそうだ。

「でもその聖剣だが、複製（レプリカ）という話もあります。迷いの森の辺境伯の戦いのおりに行方不明になったって専らの噂。まあ、本当に偽物だったらどえらい話ですが。聖剣は即位に必要な証、王冠よりも大切なものですからね」

「だけどそれが偽物だったらおもしろいよな」とテル。

「そういう者にかぎって、なぜか無惨な死にかたをしています」

タナカの真面目な言葉にテルはピクッと顔をひきつらせた。無惨な死にかた、暗殺や任務中による不自然な事故死だ。聖剣を偽物と疑う輩にはこういう罰があたる。

「私たち優しい親方に出会えたらいいのにね、テル」とナオミ。

「残念なことに君たちは、どの親方の従士になるかは選ぶことはできません。親方も君たちを選べなくてね。すべては先輩から後輩へと『引き継ぎ』儀式で、住みこむ地区も親方も決められてしまう。そうそう地区というのは縄張り、元領地のことです」

ところであの少年は最後に気になることをいった。

カンペールの友人、自分たち以外にアッパータウンにいく予定の子どもたちなどいただろうか。まったく見覚えがない。今はそんなことより旅支度を楽しむべきだろう。ナオミははぐれないようにテルの服をギュッと握りしめながら、図書館の外にでた。

次に二人がむかったのは『ヨハネス・ハウルの薬局』だ。

思わずラクダの唾液と二週間ぐらい洗濯していない、靴下のようなにおいに二人は鼻をおさえた。鼻呼吸から口呼吸へと呼吸方法をかえても、それでもまったく苦にならないほど面白いものが陳列し

てあった。
（…ねえ、僕、なんだか腐りそうだよ…）
（シッ、聞こえるじゃないの、ジョジョ）
（…あと五分もいたら、たぶん耳から腐りだすよ、きっと…）

木の棚に置いてある小瓶には紫色の液体に漬けこんであるトカゲやイモリ、なかには人間の手みたいなものさえある。
天井には毒消し草や乾燥薬草、干し肉や人の耳のような乾物などが糸に通してぶらさがっていた。壁からは松の木が生えていたり、見たことのない動物の剥製がたくさんあった。そのほかに人のかたちをした植物マンドレイク、しかもその近くにはからからに干物化（ミイラ）したドーベルマンがあった。
「うわあ。あれ、犬だよ」とジョジョ。
「きっと餌をもらえなかったのよ」とナオミ。
「しかも干乾びちゃっているじゃないか」

すると薬剤師のヨハネス・ハウルがチッ、チッ、チッと人差し指をたてて怪しそうにやってきた。
「いいえ、お客様。これはナス科の多年草マンドレイク、どうやってできるのかといいますとモン・サン・ミッシェルの死刑囚の血や体液から生まれるのです。こいつから抽出されるアルカロイドは即効性の痺れ薬でして暗殺専用です、フフフ。
うまく使えば貴重な薬となりまして、根を乾燥させてブドウ酒で煮詰めたり、根の外皮を潰して汁をとり、はちみつ水に混ぜれば睡眠薬、麻酔や麻薬になります。そのほかに目薬や鎮痛薬などその効果は幅広い。鎮痛薬の使用量の三倍の量にて、切開のときの全身麻酔にも使えます。また黒魔術の材料としても使われたりと万能薬なんです」
ハウルの説明によれば、万能薬ゆえマンドレイクの採取には危険が伴うとか。この植物の表面には猛毒があり、触れればたちどころ

に死んでしまう。さらに引きぬくときは恐ろしい悲鳴をあげるらしい。そしてこれを聞いた者は死んでしまうか、あるいは発狂してしまうとか。

「そのため魔術師（ヴィザード）のあいだでは自分は耳栓をつけて、犬にこの植物を抜かせるという方法が取られたのです。もちろん犬は知らずに引き抜いたあと、死んでしまいます。ですから死んだ犬がついたマンドレイク、これは本物を意味するのです、フフフ」

有名な話ではギリシャ神話の怪物スキュラは、魔女キケロがマンドレイクを材料に作った魔法の液体によって、美しいから醜い怪物になった。それゆえ魔女薬草（キルカエア）と呼ばれ、マンドレイクを持っていることは魔女の証拠として、所持者は処刑された。かの聖処女ジャンヌ・ダルクもマンドレイクを使用して、人民を惑わしたというのが直接の処刑理由になっているとか。

「死んじゃうって、何秒で死んじゃうの？」とテル。

「…フフフ、およそ三秒です。どうでしょう、お客様。私にその犬を火トカゲと交換してくれませんかね？　もうあれ一つだけになっちゃって、困っているところなんですよ」

ハウルはニヤリッ、と無気味な目つきでジョジョを見つめた。

「ごめんなさい。私、イモリ大っ嫌いなの」

「フフフ。トカゲですよ、しかも珍しい襟巻き」

「なんなら黒ヤギでもいいですが…」

ピックル・タナカは冗談も休みやすみいえ、とぼやく。

ジョジョは「僕、アイツ嫌いだな」と呟き、ナオミもヨハネス・ハウルという人はあまり好きになれない、たぶん友だちにはなれないだろうと思った。ナオミたちはミスリル銀貨一枚分の乾燥薬草を買うと、早々とこの店から立ち去った。

ポリー・スミスのお洒落な防具屋では色白の肌、鼻がすらっと高

く、髪を女の子のように伸ばした、黒毛の男の子が大きな鏡のまえに立っていた。黒い毛虫が少年の腕や腰のまわりを動きまわっている。

その子はナオミと比べると、首もとには彫刻が美しい純銀の指輪のような首飾り（ペンダント）をしており、どことなく上品な感じがして大人びていた。この少年は確か『路地裏』のカウンター席に座っていた男の子だ。

一瞬、少年と目があえばドキッ！　と胸をときめかせたことは否定できない。

いやはやテルと比べれば天地雲泥の差、少年と青年の差、いやむしろハムとウィンナーの差だといえる。

ジョジョは「テルをハムに例えるなんてハムに失礼だろ」とぼやくけれど、透きとおる男らしい声が、さらに男前を際立たせていよう。どうしてだろう？　なぜか胸が痛い。自分はこの少年に惚れたのかな。

恋の女神に心を鷲づかみにされているかのようだ――きっとこれが一目惚れというものなんだ。

「制帽とブーツ、肩掛けベルトはあそこにあるから好きなデザインのものを選んでちょうだいね。シャツブラウス、ネクタイ、ハイソックスはあそこね。さてとまずは丈を測らせてもらうわ、驚かないでちょうだいね」

レディ・ポリー・スミスはナオミとテルにそろって大きな鏡のまえに立たせると、内ポケットから黒い毛虫を取りだした。黒い毛虫はウニョウニョと身体をまげながら胸やら腰やら、三人の身体を動きまわっている。

ナオミはもうすぐで悲鳴をあげそうになった。

「もしかして君も騎士候補生かい？」と突然、例の少年がナオミに声をかけてきた。
「う、うん。でも今年から入団するの」
ナオミは少しづつ声を小さくしていった。
「じゃあ、君とは同期の仲ってことだな。よろしく」
男の子の顔が幾分か和らぎ、初めて同士は自分たちの名前をお互いに交わしあった。この子とはパパティーノ兄妹とは違って、仲良くなれそうだ。

「俺はロミオ・ロートレック。皆からは『ロロ』と呼ばれている」
「僕はテル・ウォ・アボカド。ナオミの友だちだ」とテルが二人の会話に割り込んできた。
「そうか。じゃあ、三人そろって聖家族（なかま）の握手をしよう」
テルもこの感じのいい少年が気に入ったらしかった。しばらくいろんな話をしていくうちに三人はすぐさま親友のように仲良くなった。子どもは誰とでも仲良くなる才能を秘めている。これが子どもというもので、おそらくこれこそ子どもの特権というものだろう。そもそも友情に人種や言語の垣根は存在しないのである。

「ねえ、ロロはどうしてアッパータウンにいくの？　私は自分探しの旅にいくの」
「俺は…」ロロは口ごもってその先をいおうとしない。
人は誰しも心の闇というものを胸に抱いているものだ。
「ご、ごめん。いいたくないことだった？」
「人探しをしているんだ」
「人探し？」
「ああ、俺って孤児なんだ」
男の子はこの町のロートレック孤児院出身だという。
二週間前ぐらいに自分宛に手紙が届いた。その手紙には自分がブルトン人であり、アッパータウン行きの手続きはすでに済ませたと

いうものだった。ロロは羊皮紙の手紙を大切そうに内ポケットから取りだし、ナオミに恥ずかしそうに、また嬉しそうにみせた。

さて看板には『ポリー・スミスのお洒落な防具屋』とあるが、実際のところ彼女の店は防具屋というより、ちょっとした高級ブティックといったほうが素敵かもしれない。ヨーロッパのファッションリーダーの一人、ナポレオン三世の影響はもちろんのこと、騎士といえども、昔のように全身に鎧をまとうわけではなく、現在のフランス共和国親衛隊、国家憲兵隊のような軍服が主流だ。

「さあ、終わりましたよ。お疲れさまでした」

テルの丈を測っていた毛虫がぶるぶるとふるえ、銀色の糸をお尻からぷるぷるだして小さなまゆになった。ポリー・スミスはまゆを手に取り、ナオミたちも終わったとあって三人の名前を改めて聞くと、各々のまゆに名前を書き記していていた。何とも不思議な光景なのだが、ナオミはもう慣れっこだ。

「あと一時間もするとまゆから『服の職人虫』がでてくるのよ」

「『服の職人虫』？」

ナオミとテル、ロロは声をそろえていった。

「人のかたちをした、とってもかわいらしい虫の妖精でね、お嬢ちゃんたちにそれは素晴らしい白いマントを作ってくれるのよ。白いマントをつくったあとは毛虫にもどっちゃうけど」とおばさんはいった。ともあれ出来上がったマントは後日もらいにいくことにして、三人は金のバックルつきの黒靴を買った。

お店をでたナオミたちは、もときた道へと歩きはじめた。

帰り道は全員なぜか無言だった。新しき友人ロロことロミオ・ロートレックは今夜、泊まる場所は『路地裏』に予約してあるとのことだ。ロロとジョジョは買い物疲れのために黙っていたが、ナオミとテルは旅立ちへの期待と不安が胸を苦しめていた。タナカはそん

な彼らを後ろから、黒ヤギとともに静かに見守っていた。

あのあたりの街角だっただろうか。

まるでこの世の者とは思えない絶世の美女にナオミは声をかけられた。銀髪に耳元から顎、首筋にかけて美しいシャープな線がくっきりわかる。青い瞳に透きとおる肌、銀髪が優雅にたれて、どことなく聖なる品格、威厳に満ちている。本当に美しい人だ。

ジョジョは警戒の態勢をとるが、こんな美しい人が暗殺者のわけがない。

「あ、あの…私になにかようですか？」

ナオミはドギマギして女の人に尋ねた。

「…希望に満ちた瞳、あなたなら私が科した苦難を乗り越えれそうです。信じてみましょう、あなたを。自ら『開かずの扉』を開けたあなたの勇気を…」

意味深な女の人の言葉にナオミは何も言い返せない。

「一言だけいっておきます。私は一切手加減はしません。覚えておきなさい」

その言葉にナオミはブルッと鳥肌がたった。もしかしてこの人が…、この人が。

「ナオミ！　なに、ぼーっとしてんだよ。おいていっちまうぞ！」

テルの声がナオミを現実にもどした。少年に今さっき、あそこに女の人がいたといえば、テルは「最初から誰もいなかったよ、きっと疲れてんだよ」と声を荒げた。ロロもタナカもテルの言葉に頷く。どうやら彼らのいうとおりらしい。

そうか、頭が混乱しているんだ。非現実な現実（シュール）を体験して――。

「ふーん、でもあの女の人、綺麗だったね」とジョジョのぼやきが少し気になるが。

すでに路地裏は人気がなくて静まり返っている。
そんななかエーデルは眠たいところを我慢して、自分たちの帰りをわざわざ待っていてくれた。冷めているとはいえ、食事も用意してくれていたことにナオミはつい目頭が熱くなってしまった。

「あら、あなたは…えっと」
「ロミオ・ロートレックです、宿泊の予約をしていた者です」
「そうだったわね。あなたたち、さっそくお友だちになったのね」
エーデルはロミオ・ロートレックを歓迎した。
「四人とも、お疲れ様でしたわね。さあ、食事の準備ができていますよ」
食事を食べ終わった四人は、彼女のあとについて奥部屋から二階への階段をあがっていった。彼女のランプを先頭にせまい通路をナオミたちは一列に進み、やがて小部屋にたどりついた。
エーデルが部屋にはいるやいなや、暖炉の火がボッと勢いよく燃えあがった。
「ここはテルとロロ、タナカさんが泊まる部屋ね。ナオミ、あなたは隣の部屋よ」

第１８話　聖家族【２】

三日ぐらいは旅立ちの準備とやらで忙しかった。
ポリー・スミスのお洒落な防具店で仕立てた、制服や紋章入れしたマントなどをとりにいったり、また三人は買い忘れがあったことに気づいた。

馬はもちろん、魔法を使うための魔法宝飾の二点だ。
騎士はアッパータウンでの社会秩序と聞いたけれど、やはり騎士には馬がつきもの。テルは餌をあげるのが面倒だとか、今はあんまり馬に乗って移動しないとか、もし馬が必要になったら、アッパータウンの賃り馬に乗ればいいというけれど、ナオミはどうしても自分の馬がほしかった。

結局のところ頑固なテルを説得したのはナオミだった。
「だって厩舎にいったら自分の馬がいるのよ、が。今どきの騎士は馬に乗らないっていうけれど、散歩ぐらいしてもいいじゃない？」
「散歩用なら、そこのダックスフンドがいるじゃないか！」
ジョジョは舌をだらーんとしたまま、今の言葉を聞かなかったことにした。
「馬は自転車とか自動車とかよりもすぐれているんだから。ねえ、ロロだってそう思うでしょ？」
「…そうだな、馬は女の子の憧れだもんな」

「でも馬は犬のように糞（ウンコ）をするよ、しかもでっかいし…」
テルはチラッとジョジョに目をやれば、ダックスフンドは糞をして悪いかよ、と顔をテルを見上げつつも、馬を買うぐらいなら自分

の餌代をあげてくれと主張するほうだ。
「じゃあね、多数決で決めましょうよ」とナオミ。
――結果は賛成二票、反対一票、無効一票。
（…ちえっ…）とダックスフンドは寝そべった。

ここはブルトン王朝文化が香る、高級宝飾店『ザック』だ。
ナオミたちは店内できらめく指輪のショーケースに目がいった。
宝石商アルマーオがいうには魔法使いたちは、廃れてゆく魔法の知識に危機感を抱いて、魔法を誰でも使えようにその魔力を宝石や書物に封じこめたという。

残念なことに魔法の本はブルトン人の反乱を恐れたフランスの歴代国王によって、禁書や悪魔の書として大半が燃やされたものの、指輪だけはパリ五大宝飾店（グランサンク）の庇護のもと、なんとか生き残ったそうだ。
「魔法は魔法石に封じこめられています」
魔法を封じこめるといえば、考古学の権威ダ・カーポが扉に空間移動魔法を封じこめたという開かずの扉は記憶に新しい。大半の魔法は自然現象で自然に生まれたものか、魔法使いたちによって、宝石に封じこめられたものだ。
「剣の柄とか、鞘とかに埋め込むこともあれば――今の流行は指輪ですかね」

そういえば、サンチョ・ボブスリーの剣にも柄のあたりに魔法石があった気もしないでもない。

「あ、あの…守護聖人イヴの魔法って…」
宝石商アルマーオはナオミから、その名を聞いて驚いていた。
「イヴナイトは名のとおり、守護魔法の最高魔法石です」

値段は半端なく高い。
テルは「僕の家が二軒買えるじゃん」とぼやいている。

ナオミはミスリルの金銀細工に目をやりながらも、アルマーオの話に耳を傾けた。魔法石は誕生石と同じで相性がある。たくさんの魔法を使いたいからといって、初心者（ビギナー）が魔法石の指輪をいくつも買っていく者もいるが、最初の使い慣れないうちはせいぜい三個が妥当だとか。

「まあ、従騎士は一個で十分だよ。で、どの指輪にしますか？」

テルは金剛石（ダイヤモンド）と相性がいいらしく、青から緑へと色が変わる変色（カメレ）性金剛石（オンダイヤモンド）の指輪を奮発して買った。ロロはオーダーメイドも可能だといわれたので、自分の首飾りに月長石（ムーンストーン）を石留めしてもらった。

ナオミは鳩血的紅玉（ピジョンブラッドルビー）の指輪を買おうと思ったが、さりげなくポケットに手をやればボブスリーから贈られた、あの火蛋白石（ファイアーオパール）が指にコツンッと当たった。男にみてもらえば「…ふーむむ！　これは珍しい、まったくもって珍しい…」と呟く。

何が珍しいんだろう？　まさかとても高級なものなのかも。

ルーペで火蛋白石を見る、アルマーオの巨大化した瞳が反対側にいたナオミを瞬間的にとらえた。
男によればこの石は活火山から生まれた、炎の魔法系に属する火蛋白石だとか。さほど珍しくもないのだが、そこで何が珍しいのかといえば、石自体から鼓動のようなものが脈打ち、石が生きていることが珍しいというのだ。

「新種かもしれませんね。しかも魔法力（スピリチュアル）が半端ない」

ピンセットでつかんでいるものの、火蛋白石は色鮮やかな炎で包まれている。威嚇だけなので直接触っても熱くも何ともない。炎がおさまりきれず石から溢れでているんだろう、とアルマーオは興奮した口調でいう。

ナオミの火蛋白石は小一時間もすれば、アルマーオの熟練された職人技によって、石留めされた立派な指輪になった。

「どうやって魔法を使うのさ？」

テルは指輪をはめた手を宙にぶんぶんふってみせた。

「魔法力は使い手の『心の強さ』と比例します」

魔法は伝導性が認められる超物理エネルギーだ。つまり物に伝道させ、その秘めたるエネルギーを発動させる。テルは自分の剣を握りしめた。彼の心に呼応して剣をおさめる鞘に雷が奔った。

変色金剛石は神の裁きを封じこめたものだ。雷鳴や雷撃、落雷と呼ばれる聖電撃（サンダーボルト）を剣に通して、発動させることができる。

ロロの場合、首飾りをギュッと握りしめたものの、残念ながら何も起こらなかった。そんな少年を目の前にして、テルが嬉しそうに「…かわいそうに…」とボソボソ声で呟けば「目障りだ」とロロは鼻を鳴らした。そんな二人をなだめるのは、いつのまにかナオミの役目になっていた。

「いやよくみてごらん、治癒（ヒーリング）の魔法が彼を包んでいる」

アルマーオの指摘はもっともだ。

ロロのまわりには七色光（オーロラ）が纏わりついていた。月長石は心を癒す魔法石だが、ロロの首飾りの地金は聖金属（オリハルコン）という傷を癒す希少金属（レアメタル）のため、癒しの化学反応が起きているようだ。

「おお、やはり新種だけあって素晴らしい」
アルマーオの驚嘆の声が今も耳からはなれない。

ナオミが鞘から剣を抜き、「炎よ、いでよ」と念じれば剣に炎が纏わりついた。
ただの炎じゃない。炎のなかに何かが見える。大きな目だ。ナオミと目があってもその瞳は優しく微笑む。石の鼓動とやらはコイツのものかもしれない。炎は鳥の姿をしている。

――火の鳥　蛋白石（オパール）、と命名したと興奮気味のアルマーオ。
勝手に命名するなよ、とぼやくジョジョ。
どっちでもいいと思うナオミ。
「…生きている炎、火の鳥か。じつに興味深い…」
火の鳥、伝説では不死の炎の鳥だ。

第１９話　聖家族【３】

第１９話

旅立ちの日の前日、酒場の外はパラパラと小雨が降っていた。
ロミオ・ロートレックといえば教科書を読むだけであきたらず、一階の酒場で社交界に必要な予習とやらを黙々とやっていた。
「ねえ、ジョジョ。私たち、旅立つときってどんな気分だと思う？」
「ナオミは絶対に泣くよ。僕の毛、二本賭けてもいいよ」
「やだあ、泣いたりしないわ」
彼らの会話と裏腹にロロの勉強姿をみて、テルは呻(うめ)いた。
「だからガリ勉は大嫌いなんだよ、アッパータウンでの勉強は社交界なんだぞ。社交界それそのものこそ勉強なんだ。そりゃ、ちょっとは勉強するかもしれないけどさ、ロロのは異常だよ」
「お前さ、このままだと絶対に万年候補生だぜ」
「万年ガリ勉よりはましだと思うけどな」
テルが無邪気にいった。

翌朝、ナオミもテルも、またロロも興奮と緊張で目がさえてしまって、一睡も眠れなかったようだ。
三人はずっしりと重たい鮮やかなキャリーバッグ（これは鞄屋で購入したものだ。最近の旅行鞄は宝石箱のような頑丈でお洒落なものが多い）をもって、下の階の酒場に集まっていた。もう三人はどこからみても、ピカピカの騎士候補生だった。

――外はパラパラと小雨が降っていた。

「あらっ、寂しくなるわね」
エーデルの別れを惜しむ声、ナオミの純粋(ピュア)な心に何かが響く。

少女はエーデルの顔をみずに酒場の扉を開けた。するとどういうことか、店の前には吟遊詩人やバグパイプ演奏者、ちょっと太っている中年夫妻や老紳士といった人々、顔見知りの人々がナオミたちを見送りにきてくれていた。酒場の常連客たちが、少女たちの旅立ちを祝福してくれていた。

パチパチッという拍手に三人は顔を赤らめた。

「ブルターニュの守護聖人、聖イヴのご加護があらんことを！」

ナオミは戸惑いながらエーデルのほうにふり返った。

「驚いたかしら？　だって旅立ちに誰も見送りにこないなんて寂しいでしょ！」

この言葉に少女はいてもたってもいられず、エーデルの胸に思いっきり飛びこんでしまった。ナオミはお世話になったことのお礼をいおうにも、いやはやどういうわけか言葉が声にならない。そんな少女にエーデルは優しく、そして力強く「いってらっしゃい」と笑顔をみせた。

「…こ、これは？」ナオミの声は戸惑っていた。

エーデルは首にかけていたロザリオを、そっとまるで母親のように優しくナオミの首にかけてやった。

「あなたのお母さんが九年前、私にくれたの。でもこれは本来、娘のあなたが持つべきものだと思うの。だってあなたはアリス・ニトの娘ナオミ・ニトなのだから」

ナオミは母の形見を右手でギュッと握りしめた。

第２０話　飛空艇ナヴァグリオ【１】

第２０話

三人と一匹は大勢の人に見送られ、エーデルの酒場をあとにした。ナオミは何度もなんどもふり返っては「さよなら」の言葉をなげかけ、エーデルの顔を見つめていた。

もうすぐで泣きだしそうなナオミ、そんな彼女などどうでもいいかのようにテルは「僕、飛行船って初めて乗るんだ」と宙に向かって拳をぶんぶん振り回し、一人ではしゃいでいた。

アッパータウンは迷いの森の平野に築かれた都だ。

迷いの森はブルトン人であれ、フランス人であれ、足を踏みいれる者を道に迷わせてしまうエルフの魔法がかかっている。これがこの森の名の由来でもあるのだが、つまりアッパータウンへ行くには天空からしか行けないのだ。

突然、広場が暗くなったのがわかった。そんな広場にはたくさんの見物客や送迎客、自動車でごった返していた。ウォオオー！ッと歓声をあげている者さえいる。

「あれが飛空艇ナヴァグリオです」

タナカは町の広場真上に浮かんでいる、飛行船を指さした。

広場の混雑の理由がわかった。彼らは飛空艇ナヴァグリオを見にきた野次馬だ。飛空艇の高度は町で一番高い建物を遥かに凌いでいる。今、ヴァンヌで一番高い建物は何だといえば、間違いなく飛空艇ナヴァグリオと人々は答えるだろう。

「うわあ！　すっごい！」

ナオミも思わず感嘆の声をあげた。

「カッコイイや！」テルは拳をふりまわす速度が加速した。

通常、飛行船はピーナッツの種のかたちをした、浮力となるガス袋「気嚢（きのう）」の下に、乗務員や旅客を乗せる旅客室（ゴンドラ）がついているものだが、飛空艇ナヴァグリオは違う。浮力となる気嚢が木製なのだ。これは気嚢というよりも木嚢（きのう）と呼ぶほうが正しい。

タナカの説明では魔法で浮力をもたせた、浮木を骨組みにして船大工が張り合わせて作り上げたものだとか。木造船体ともいえる飛空艇ナヴァグリオの装飾は黒と金色で統一され、文句のつけようのないほど立派だ。いや立派を通りすぎて、もはや高級感（ハイグレード）という言葉が似合う。

ちなみにこの飛行船の推進原動力は、永久機関である。

永久機関、十八世紀の科学者や技術者が実現すべく、精力的に研究を行ったものの、最終的には実現不可能とされた科学エネルギーだ。残念ながら人類にとって夢のようなエネルギーであれども、ブルトン人にとって永久機関は日常生活の科学技術。なぜなら永久機関は魔法を原動力とするからだ。

木嚢の船尾には左右にいかめしい、プロペラがついている。

空飛ぶガレオン船といってもよく、木造のガス袋は職人技が光っている。あの中には修理用の浮木材が積みこまれているだけでなく魔法力をシリンダに導いて、ピストンを動かして往復運動させ、飛空艇を動かす永久機関室がある。

永久機関式飛空艇ナヴァグリオ、さすがに威圧感は半端ない。

ナヴァグリオの乗客室からは、縄梯子が地上へと降ろされている。その先には女の子が一生懸命、登っている姿が点のようにして見える。耳を澄ませばその点にむかって、声を張り上げる女の人の声も

聞こえる。

どこかの国の大統領夫人（ファーストレディ）のように派手ないでたちだ。

「コクリコ！　アッパータウンについたら便りをちゃんとよこしなさいよ。ケンカしたからってうちに帰ってきたりしたらだめですからね」

コクリコと呼ばれた女の子は、「わかってるって！」と片手を母親にふった。

次に縄梯子にギュッと足をかけるのは、大人びた赤毛の少年だ。

「ロレンツォ、あなた、従姉妹なんだからお願いね！」

「心配ご無用、若奥様（マダム）！」

ロレンツォと呼ばれた少年は生意気そうにいった。

「コクリコに伝えてちょうだい。何よりもほかの人にむかって、お母さんみたいに生意気な口を叩くんじゃないわよって」

大統領夫人は声を張り上げた。

「ねえ、どうやってあそこまで登るの？」

タナカは黙って、親指を女の人と赤毛の少年ロレンツォにむけた。

ナオミは鳥肌がたつのがわかった。彼らに習えというのだ。客室乗務員（フライトアテンダント）の女二人が縄梯子の左右にたって、風に煽られる縄梯子をおさえつけている。

赤毛はすらすらと縄梯子を登り、乗客室へと姿を消した。

「どうやら僕らが最後のようだね」

受付の乗船名簿の〇×欄をみて、タナカは暗に急げと彼女たちをせかす。ナオミは襲いかかる恐怖を押しのけて、ジョジョを胸のなかに仕舞いこむと、縄に足をかけた。

――――ギュッ！　ギュッ！という軋む音が足から脳へと直接伝わってきた。

こんなことで脅えていたら笑いの種だ。「勇気をだせ！　お前は英雄の娘なんでしょ！」とナオミは自分の心に発破をかけ、下を見ずに縄梯子を登っていく。

強風が吹いて、縄梯子がぐいっと弓形にまがれば、野次馬は悲鳴をあげる。そんな強風を二、三回乗り越えて、ようやく最期の縄に手をかけた。何とか登りきったと満足感からか、それとも達成感からか地上を見下ろした瞬間、その高さからナオミはめまいを起こし両手を縄からはずしてしまった。

「きゃあああ――――！」

地上の野次馬たちが悲鳴をあげた。

観客のうち数名が顔を両手で覆った。

が、悲鳴はすぐさま歓声へと変わった。ロレンツォが彼女の右手を握り、コクリコが左手を握りしめ、二人はナオミを乗客室へと引き上げてやった。

「あ、ありがとう」ナオミは蒼白な顔でいった。

ジョジョは白目をむけて、身体がコチコチになっていた。

「最初はみんな、こうなるんだ。慣れていないからね」

赤毛の少年は笑いながらいった。続いてテル、ロロが登ってきた。タナカが黒ヤギを抱いて登ってきて数分後、地上にいた二人の客室乗務員も登ってきた。縄梯子を客室へと巻きあげている姿から、出発は真近のようだ。

ナオミは三人と一匹がそろって座ることができる、コンパートメントを探したけれどもやはりどこもいっぱいだった。そのとき誰かが叫んだ。

「ねえ、君たちここに座りなよ！」と赤毛のロレンツォ。

ナオミは先ほどのお礼をもう一度いい、少年の横に座った。

おやっ、タナカの姿がみえない。彼もここまでくれば、さすがに彼女にべったりではないようだ。

「君たちは始まりの従騎士だね。僕は生徒会書記のロレンツォだ、よろしく！」

少年の名はロレンツォ・テオ・ランゴバルト。

騎士候補生徒会の書記だ。騎士候補生徒会というのは騎士候補生の最高議決機関であり、親方騎士（マスターナイツ）たちに対する候補生の不満や待遇改善を生徒会の名で領主や親方騎士たちに進言し、待遇改善を求める組織だ。

少年は確かに責任ある立場にあるらしいが、パパティーノ兄妹のように威張ってはいない。なんだか好感がもてそうだ。隣に座っている金髪の少女コクリコ・サクラダは、猫目がお洒落可愛い（チャーミング）と自分で思っている女の子だ。そういう彼女のあだ名はココ、そして書記の補佐役（デンコーチ）だ。

続いてナオミは自分たちを紹介した。

「……」

生徒会書記と補佐役はきょとんとしている。

「もう一度、君の名前をいってくれ」

「ナオミ・ニトよ」

「わお！　辺境伯をぶちこんだ、英雄の子に会えるなんて光栄だ！」

赤毛は彼女に握手を求めてきた。ナオミは思わぬ対応に顔を赤らめた。

第２１話　飛空艇ナヴァグリオ【２】

第２１話

「お前たち、乗り遅れはいないな？」
と乗務員に男らしい声で点呼の確認をとるのは、先ほど操舵室からでてきたナヴァグリオの船長サラ・レッドブルだ。腰まであるカールがかかった美しい金髪、銀色の口紅できめたたらこ唇、さらにアイシャドーが彼女の大きな瞳を引き立たせる。
歩き方などは優美という言葉に尽きよう。この絶世の美女を包みこむ、雄牛の紋章（エンブレム）がはいった赤いマントに派手ないでたちは、よほどでなければ記憶に残る。

――――男勝りってまさにこの人のことをいうんだろうな、とナオミ。

ナオミが座っている席までくると、彼女はナオミをじっーと見つめ、「目はアイツにそっくりだな」と嬉しそうに呟く。テルは彼女の巨乳をみて、ゴクッと生唾を呑んだ。

サラ・レッドブルはナオミの父のことを知っているかのようだ。
そりゃそうだ、父にだって知り合いの一人や二人ぐらいはいるだろう。一人の人間が人生のなかで出会う人の数は、すれ違った人々も含めて数万人といわれる――多忙な船長がわざわざ見廻りにきたのは、自分に会うためだったのかもしれない。

「よし、出発してくれ！」
サラの大きな声とともに、汽笛の音が鳴らした。

永久機関式飛空艇ナヴァグリオはどんどん高度をあげた。
ヴァンヌの町が雲で見えなくなったぐらいの高さまでくると、木嚢の後尾にあった大きな左右にあるプロペラが勢いよく、ゴッ、ゴッ、ゴ、ゴ――――とまわりだした。プロペラが加速するとともにナヴァグリオは、ゆっくりとスピードをあげた。それほど早くはない、速力は二十ノット。つまり時速三十七キロが限界だ。

ロレンツォとココとは、すぐに仲良くなった。
彼らの話でわかったことは、自分の父が人々から尊敬されていることだ。ココはじっと座ったまま、ナオミを尊敬の念をもって眺めていた。子どもにとって英雄の子は英雄なのだが、だいたい人の噂と同じく、ハズレが多い。

親の七光りだってことは自分でもわかっている。だからこんな自分がやっていけるかどうか心配なのだ。皆、勘違いしているだけにすぎない。英雄主義の思いこみにすぎないのだ。せめてビリだけには、ならないよう気をつけよう。
「私、きっと騎士団でビリから二番目だと思うの」

「ビリから二番目？」
ココは不思議そうにいった。
「へえ、だったらビリは誰なのさ？」とテル。
「さあ、誰だろうな、テル？」
「まったくだよ、その子の顔をみてみたいぜ」
少年の言葉にロロはぷっと吹きだし、ジョジョはあいかわらず耳がたれていた。

第２２話　アルモリカン山地ミスリル鉱脈【１】

第２２話

今はアルモリカン山脈を付近を運航中だよ、とロレンツォ。
小一時間もすれば子どもたちは喋り疲れ、うとうとしはじめていた。
彼らの眠りを突然、一気に覚ますような激震が起こった。

――――ゴロォガラァアアアアア――ッ！！！！

何だ？　一体全体何が起こったんだ？
推測する暇もなく、コツッ…コツッ…コツと硬い金属のような音が近づいてきた。ナオミのところで音が止まったと思えば、ガラァラァ――――と勢いよくコンパートメントのドアが開いた。

ま、まさか！　自分の命を狙っている暗殺者（ヒットマン）か？

少女は生唾をゴクッと呑んだ。
「ドワーフの襲撃に遭った。停戦ラインを超えたんだよ」
足音の主はピックル・タナカ、ナオミの護衛だ。
とはいえ、ドワーフの襲撃に遭った――――穏やかな話ではない。

アルモリカン山地のどこかにあるという、鉄鋼の町ドワーフベルク手前のミスリル鉱脈はドワーフ族とブルトン人が三百年、おのが領地と主張してゆずらない紛争の地だ。小さな巨人族ドワーフ、頑健な種族で知られる。鍛冶の民族にして、ミスリルの鍛冶職人。そしてミスリル鉱脈の番人であり、勇敢なる戦士でもある。

ブルターニュの領地のなかで森はエルフ、山はドワーフの実行支

配地域だ。一時はミスリル銀をめぐってブルトン人と争ったものの、今は停戦合意に基づいて休戦中だ。だが停戦ラインを超えて、領地に侵入してくるものなら、彼らは容赦ない。

――――ズドドオオオオオ――――ンッ！！！！

砲撃は相変わらず激しい。

パラパラッと木嚢が崩れ、地上に落ちていくのがわかる。

攻撃されっぱなしじゃないか、このままでは、このままでは――――。

「僕ら、死んじゃうな」と他人事のようなジョジョ。

「お前たち、二階にあがれ！」

船長は木嚢にあがり、戦闘の手助けをしろ！　と偉そうだ。

ジョジョは前途多難の冒険の始まりに「飛び降り自殺なんて痛そうだよ」とため息をつく。そんなジョジョを連れて、木嚢への階段をあがってみれば、驚きの光景がナオミの目に飛び込んできた。

もはやそこはピーナッツの種ではない。

「うわあ、ゲホッ、ゲホッ。青空が見えるよ」

空気がうすいらしい、テルは息苦しそうにぼやく。

木嚢は度重なる砲撃に次ぐ砲撃で、ところどころに大きな穴があいている。当然、木の浮力で浮いているわけだから、穴があいた木嚢は徐々にバランスを崩しているのがわかる。床には修理用の材木が無残に転がっている。

「撃てえーい！」

ナヴァグリオの船長サラの第一声が聞こえたと思えば、木嚢に備え付けられていた数台のガトリング砲と大砲が火を吐いた。狙いは

目下に見える山城だ。船長の指揮のもと山城のいくつかの見張り小屋は破壊できたものの、多勢に無勢だ。
砲撃に耐えきれず、永久機関式飛空艇ナヴァグリオは徐々に高度を下げはじめた。
「よーし、お前たち！　やられた分はやりかえしたな。これより本艦は戦闘を離脱する！」
血の気の多いサラ船長らしい、勇敢な言葉だ。
「お前たち、しがみつけよ！　不時着の準備にはいるぞ！」
飛行船はアルモリカン山地の丘陵地に勢いよく突入した。

――――ゴゴゴゴォオオ――　バキバキバキ！

船体が荒々しい岩で擦れにこすれる。
岩という岩、木という木にぶつかって、崖に覆い隠されるようにしてナヴァグリオは平原のなかにとまった。今まで戦闘を繰り広げてきただけあって、どことなく周辺は硝煙臭い。埃まみれのナオミはテル、ロロ、ジョジョ、そしてロレンツォとココの無事を確認すると、ようやく安堵した。
「動ける者は点呼をとれ！　おい、そこの優男！　お前のことだ、バカモノ！」
サラ・レッドブルはタナカに向かって叫んだ。

第２３話　アルモリカン山地ミスリル鉱脈【２】

第２３話

――今は三十分の休憩だ。

「ねえ、テル。あの、そのう…騎士ってね、何する人たちなの？」

「サラリーマンとＯＬだよ」とテル。

ナオミが思っていたものとは違う、思わぬ答え。正しくは任務につくという。祖国が株式会社のブルトン人にとって、民間人とか公務員とかそういった身分の区別は一切ない。

経営者というべき立場の者も、その下で働く者たちも、責任の大きさこそ違いはあるが、仕事の大小は関係ない。トイレ掃除も立派な仕事のうちなのだ。でも一生トイレ掃除というのはごめんだな、テルは喜びそうだけど。

ナオミはテルのほうに視線をうつしながら、今回の襲撃への応戦もサラリーマンとＯＬの仕事のうちといえば、彼女は疑問に思わざるえない。

それにしても三十分の休憩といいながら、かれこれ一時間が過ぎようとしていた。常駐の船大工たちはナヴァグリオの風穴が空いた部分の応急処置に取りかかり、タナカも愚痴をこぼしながらも、彼らを手伝う。さすがの彼も、男勝りのサラ・レッドブル船長には勝てないとみえる。

「命を書けるって？　そりゃ、書けるよ」

テルの問いかけにロレンツォはふざけてみた。

「君はバカか。命を書けるじゃなくて、命を賭ける……、というかそれでも君は生徒会書記か。命を賭けるを命を書けるって――君はダックスフンド以下だぞ。それに命を書いてどうするんだ？　教え

てくれよ」
テルの言葉にジョジョは（いつか隙あれば、お前の鼻をかじってやる）と意思が固い。

「そう僕に食ってかかってくるな」
イラついているのは君だけじゃないんだ、とロレンツォはテルに謝った。テルが命を賭けると皆の前でいったのは、すぐそこの丘で炭鉱への入り口を見つけたのだ、少年はそこで図体のでかい人影を目撃したという。噂のドワーフかもしれない。
「ああ、間違いない、僕は見たんだ」

テルの真剣さに推され、ナオミたちはこっそりナヴァグリオを抜けだした。
確かに丘陵に四角い穴があいている。間違いない、炭鉱への入り口だ。通路は階段とカンテラで灯されているものの、奥は深そうだ。三十メートルほど降りていけば、急激に温度が下がるのがわかった。岩からは水がしみでて滑りやすい。

――誰もいない。やはり勘違いのようだ。

「…帰ろうっか…」
ナオミが皆に問いかけた瞬間、物凄い地響きが起きた。
「危ないッ！　ナオミッ――――――！」テルは叫んだ。

――――ゴロォガラァアアアアア――――ッ！！！！

落盤だ。とっさの判断で奥の通路に避難したおかげで、少女たちは命からがら助かったものの、もう後戻りはできない。テルは癇癪を起こし、ナオミは冷静につとめるよう皆をまとめあげた。不時着のおりに岩盤が揺らいでいたのかもしれない。

「必ず希望はあるわ、最後まであきらめないで！」
彼女の一言に皆はどれだけ勇気づけられたことか。
三十分ほど歩いた頃、先のほうに明かりが見えた。明かりは鍾乳洞のなかを反射し、ときおり話し声が聞こえる。何かを鋳造しているらしく金属を叩く音がやかましい。むんむんとした熱気も感じとれる。

「おい、さっさとしろ！　このうすのろ！」
醜いゴブリンは相方を乱暴に罵る。
「フンッ！　リンゴの腐った顔みたいなお前にいわれたくねえな」
リンゴの腐った顔？　どんな顔なんだろう。一度みてみたい。
「そりゃ、てめえも同じじゃねえか！」
「なんだとてめえ、殺してやる！」
ナオミは物音をたてないように、恐るおそる会話が聞こえる先を覗いてみた。開いた口が閉まらなかった。ナオミが目撃した光景、それは大規模な金属の鋳造場だった。地下にこんな大きな鋳造場があるなんて驚き以外になんでもない。

――――ガチャン、ガチャンと鳴る金属音、ジュワッと金属が水に冷やされる音が耳に痛い。そこで働いている者たちは人間らしさなどなく、おぞましい怪物だ。これがドワーフという種族なのだろうか。ざっと数えて三百はいる。

連中は気にくわなければどちらかがくたばるまで喧嘩をする。これは人殺しという言葉よりも惨殺（ざんさつ）と表現すべきだ。
「彼らはドワーフじゃないわ、ゴブリンよ」
ココは小さな声でぼやく。

――――ゴブリン？　ゴブリンって何だ？

確か一級星占い師ウォーレンの図書館から借りてきた本には、悪魔崇拝に魂を売ったドワーフのなれのはて、と書いてある。

鋳造場は穴からでてきた赤い岩を積んだ、多くのトロッコ滑車が行き交う。

トロッコはゴブリンどものところまで岩を運ぶと、数多のゴブリンが岩をハンマーで打ち砕き、さらにそれを高炉で溶かしている。さらに真っ黒な永久機関みたいなのが、ガチャンッと金属を圧縮（プレス）し、型押しされた金属はベルトコンベヤーで運ばれ、泉のなかにジュワッ、という音をたてて次々と沈められていく。

好奇心旺盛なテルがよく見ようとして、炎と罵声、熱気が飛び交う、蒸し暑い鋳造場に体をせりだしたのがいけなかった。子どもたちの姿が蒸気機関に映えたらしく、ゴブリンの一匹がわめきたてた。瞬く間に鋳造場はサイレンが鳴り響いた。

ゴブリンたちは斧や剣をもって、獰猛さをさらけだし、潮のごとくナオミに襲いかかった。

「あいつらを喰うのは俺だぞ！」

「骨まで噛み砕いてやる！」

ゴブリンのおぞましい声にナオミたちは逃げだした。

が、どうしても人数に無理がある。途中、ココが勢いよく転んだ。彼女の右足をゴブリンの四本指がギュッと握ってはなさない。イボイボだらけの、変色した皮膚は不気味という言葉に尽きる。

「君たちは逃げろ！」とロレンツォは鞘から剣を抜き、従姉妹の右足を握っているゴブリンの腕を斬りおとした。まるで虫を殺すかのようだ。

いかに戦い慣れたロレンツォやココでも、血に飢えた襲いかかるゴブリンには無理がある。

ナオミやテルたちが加勢しようとも数には勝てない。まず桁が違

う。夏場の蚊のように雲霞のごとく湧いてくる。生きて出られたら、これから連中を『蚊』と呼ぶことにしようか。

次第にナオミたちはマグマ溜りに追いやられていく。

「あと三歩、下がったら骨まで溶けちゃうよ」

ジョジョはよだれを垂らし、近寄ってくるゴブリンを前にしてぼやく。ナオミとテル、ロロは剣に魔法を宿らせ、戦ってみるものの魔法力を使いはたして息があがっている。何よりも素人剣法だ。ただ剣を振りかざしているだけにすぎない。剣術という代物ではない。

「あきらめなければ道は拓けるわ」

ナオミは最期まであきらめない、運命に足掻こうとしている。

そうだ、死ぬ勇気があれば何でもできる。それがよかったのかもしれない。彼女が自分に襲い掛かるゴブリンを斬り、道なき道を拓こうとしたときだった。

――――ウォオオオ！

クジラの鳴き声にも似た声が聞こえてきた。

ズッシーンッ、ズッシーンッと足音が聞こえてくる。その音は確実に自分たちのほうに近づいてきている。音がやんだと思えば威圧感溢れんばかりの、理科の実験室にある人体標本のような怪物がこちらを睨んでいる。裸にちかいといってもよい、性別は体つきからして男のようだ。

腹がぽっこりとでた男たち、身長は十五メートルもある文字どおり『巨人』の言葉が似合う。皮膚がほとんどなく、筋肉が剥き出しの状態だ。巨人はゴブリンとナオミたちを見ると、不気味にニヤッと笑い、その大きな手でゴブリンを鷲づかみにした。

助けてくれた――――とナオミは胸を撫でおろした瞬間、少女は

わが目を疑った。

バキボギ、ボギバギッと音をたて、巨人たちがゴブリンを食べている。うまいのかどうかは分からないが、ニヤッと笑えばその歯はどす黒い赤で染まり、ツゥーッとよだれのかわり赤い血が滴り落ちた。

バグッバグッ、と勢いよくゴブリンを食べ、口のなかではゴブリンの手足がぐちゃぐちゃになったのが見える。ゴブリンを喰う姿は捕食といえる。とにかく腹が空いているのだろう、巨人は理性を失ったかのようにゴブリンを食べにたべる。目の前にいる動く者を捕食する、そういったところだ。まるでピーナッツを食べるかのように。

「……」

この衝撃的な場面にナオミは「おえっ」と吐いた。

一瞬、巨人の一人と目があった。巨大な頭に生気がない目玉、死んだ魚のようだ。唸り声をあげながら、不気味にニヤッと笑うと今度はナオミたちのほうに手をやる。幸いなことに巨人は図体がでかいわりには脳が小さいらしい。巨人に敵味方を見分ける判断能力はないようだ。子どもたちは彼らの手をするすると潜りぬけるも、やはり捕まるのは時間の問題だ。

息があがったナオミたちは望もうが望むまいが、マグマ溜りに追い込まれてしまった。

今度はゴブリンじゃなく、巨人にだ。

「死ぬ時間が少し延びただけだったね」

ジョジョの覚悟を決めたぼやきが耳に痛い。

巨人が彼女を捕まえようと手を伸ばした瞬間、黒い影がナオミの後ろから現われ、巨人の両目を右から左へ、横一文字で斬った。視力を失った巨人は、耳をつんざく悲鳴とともにマグマ溜りに勢いよ

く倒れこみ、そのまま溶岩に呑みこまれて消えた。
黒い影の正体にナオミは驚いて声がでない。ナオミと影はしばらく見つめ合った。
「…行け！」
影の名はサンチョ・ボブスリー、未来を拓いてくれた人だ。
「…早く行け…」と蛇女の呪いが顔中に広がり、瞬く間に男はおぞましい姿となった。
「ありがとう、サンチョさん！」
ナオミたちは男にお礼を述べると、我武者羅に駆けだした。

第２４話　アルモリカン山地ミスリル鉱脈【３】

「ねえ、アイツは…モン・サン・ミッシェル脱獄犯の…」
ロレンツォとココがゴクッと喉を鳴らした。
「ええ、サンチョ・ボブスリーよ」
ナオミはこの際だから、自分に未来を拓いてくれたサンチョ・ボブスリーとの出会い、そして自分がアッパータウンに行くことになった経緯を彼らに話した。また自分がパパティーノに命を狙われていることも。
「さすが英雄の子だよ」とロレンツォとココは瞳を輝かした。
子どもたちのあとを、唸りながら追いかけようとする巨人の群れ、それを阻止するサンチョ・ボブスリー。運命は自分たちに味方したようだ。そんななか、自分の名前を呼ぶ声がした。どことなくその声は聞き覚えのある声だ。
テルは気のせいだ、と唸った。
「僕らの声が木霊しているんだよ」

いや違う！　また声が聞こえる。よく耳を澄ませてみよう！

「ふーむ。なんでお前さんがここにいるんだ、え？」
やはり自分を呼ぶ声だ、ナオミは声のする方向へ振り返った。
「エンガチョ！」
聞き覚えのある声はエンガチョではないか。ナオミにいわせればエンガチョこそ、なぜこんなところにいるのか不思議でならなかった。
「…あ、ああ。そ、そのう、なんだ。ダ・カーポ大先生の開かずの扉がここにもあってな。それに俺っちはここの地下鉱山の管理も任

せられておってな。あ？　ドワーフの砲撃にあっただと？」
「ゴブリンに襲われたの！」
ナオミは息絶えたえでいった。ついでにあの巨人のことも。
「ゴブリン？　筋肉モリモリの巨人（ジャイアント）？　安心するんだな。ここはブルトン人の成金がドワーフ王から買い上げた鉱山だ。そんなもんはおらん」
エンガチョの目が左右に泳いでいる。明らかに嘘をいっているのがわかる。

「あの巨人は人造人間（ホムンクルス）ってヤツだろう？」
ロロはゲーテ著の『ファウスト』に記されている、と唸る。
「……まあ、そういうもんだ。ゴブリンを喰っていた？　命を補充しておったんだろう。連中は他者の生命を体内に取り組み、自分の命にせにゃ、生きられんからな」
それ以上のことは男は何も語らない、いや語ろうとしない。きっと何か重大な秘密をうちに秘めているに違いない。男のキョロキョロする瞳、そして先ほどの出来事がそのことを物語っている。

「まあ、そこの野ブタに感謝するんだな！」
そこの野ブタに感謝？　とナオミが不思議そうに首をかしげた。なるほど……。野ブタに似た可愛らしい少年がエンガチョのそばで、ぶるぶると小さくなって震えていた。
エンガチョがいうには、この少年はナオミたちのあとをついていったそうだが、途中で迷子になり、先ほど自分が保護したばかりだといった。その少年の供述が少なからずも、自分たちとエンガチョをこうして出会わせてくれたことは否めない。今は大いに感謝すべきだろう。
テルは少年を変わった子だな、としばらく見つめていた。

「僕の顔に何かついているの？」

「鼻の穴から脳みそがたれでているぜ、迷子ッ！」
迷子の少年は黄緑色の鼻水をずるずる音をたててかんだ。
「それから鼻と口が一つ、群青色の目と眉毛が二つね、へっぽこ」
「へっぽこじゃないよ。僕はマイケル・コービーっていうんだ」
マイケル・コービーの頼りない声。

エンガチョはナオミたちを開かずの扉の中へ案内する。扉の中はエンガチョの実験室のようだ。試験管やら理科の実験さながらの実験道具がてんこもりだ。
「なんだと？　俺っちの兄貴がすぐそこにいただと？　なんでそれを早くいわん」とエンガチョは勢いよく外にでたが、顔色を変えてすぐ戻ってきた。
「ど、どうしたの？」
ナオミはサンチョに何かあったのだろう、と心配そうだ。
「お前たちの勘違いだ。兄貴なぞおらんかったが、巨人どもが共食いをしておる。死んだ巨人どもの目玉を食らっておるわ。まあ、いい。ほれ、これを飲むんだ」

――――とだされたのは紫色の液体だ。これはまずそうだ。

「忘れ薬だ」とテルのぼやきが聞こえてきた。
テルはつい一週間前、父親のへそくりを見つけてしまい、父エロールに忘れ薬を飲まされたことをナオミに打ち明けた。おかげでへそくりの居場所、肝心なところを思い出せないとか。そういうナオミもジジ亭でフランス人のお客さんたちが、ヤドリギにこの液体を飲まされていたのを覚えている。
ナオミはお互いに飲むふりをしようと目で合図した。
「よし、いい子だ。炭鉱出口につく頃には、ここでの悪い夢は全部忘れているんだな」
ゲップ！　おやっ、マイケル・コービーだけ素直に忘れ薬を飲ん

でしまったようだ。よほど喉が渇いていたのだろう。

第４話

ミスリル鉱山、あいかわらずそこは無気味なところだった。
そもそもミスリル鉱山そのものが、無気味なのだからしかたがない。ところどころに生き絶えた、ドワーフ族のような大きな骨さえ見受けられた。
「あのさ。ミスリル鉱山はドワーフの地下迷宮、ときに極悪人を幽閉する果てなき牢獄って、本に書いてあったぜ」
ゆえに炭鉱出口は一部のドワーフにしか分からない。
ロロは怪しそうに男を見た。まったく少年のいうとおりだ、もしかしてエンガチョは、先ほどのゴブリンと何らかの関係があるのかもしれない。第一、なんでエンガチョがここにいるのかもナオミは納得していない。
「そもそも俺っちはそのドワーフ族だ」
どうりで大きく、毛もくじゃらなはずだとナオミは思った。
テルが炭鉱入り口付近でみかけたというドワーフ、きっとエンガチョに違いない。外が騒がしいので、様子でもみにきていたんだろう。そのときにコービー少年と出会い、少年の証言で自分たちと出会い、今こうして会話をしている。

ゴブリンが襲ってきた経緯をエンガチョに説明するも、男はナオミたちの声に真摯に耳を傾けようとしない。エンガチョは黒ヤギを脇に抱えこみ、ただ黙々と鍾乳洞を歩いていくだけだ。子どもたちも次第に黙りこみ、ゆらめくカンテラについていった。
一行は大きな鍾乳洞のなかをつまずきながら、ときどき吸血コウモリの群れに襲われながらもついていった。マグマの湖、そしてそ

の湖に架けられた、今にも崩れそうな鍾乳洞の橋、もし落ちてしまえばそれこそ一貫の終わりという危険なところもハラハラ、ドキドキしながら渡った。

「ひゃぁあああっ」テルとジョジョは情けない声をだす。

地獄という言葉にふさわしい場所も何度かみることもできた。

ドワーフの地下迷宮は迷いの森以上といわれるほど、一度迷ってしまえば生きてはでられないといわれる迷宮だ。そのなかでナオミたちは古びたドラゴンの骨、岩に彫ったと思われる歴代ドワーフの王たちの墓標らしき彫刻など、たくさんの遺跡をみることができた。黙々と歩いていくこと数時間後、やがて鍾乳洞は終わりを迎えつつあった。

丘陵地では船大工たちの木嚢修復も終わり、ナヴァグリオの後尾のプロペラが勢いよく風を切っている音が聞こえてくる。

ナオミたちの姿をみかけると、ピックル・タナカが「どこにいっていたんだ！　ものすごく捜したんだぞ！」と心配して駆けつけてきた。エンガチョの姿をみると、不思議そうに「なんであんたがここにいるんですか？」と質問攻めだ。

ドワーフは優男の質問を堂々と無視した。

「そんなことより、お前たち、停戦（ボーダー）ラインを超えたろ？」

エンガチョは船長は一体どこのどいつだ？　と唸る。

「私だ、何か文句があるのか？　エドガー・ボブスリー」

サラ・レッドブル船長の姿をみると、ドワーフはヒューッと口笛を鳴らした。

第２５話　聖なる騎士の都【１】

第２５話

サラ・レッドブルはエンガチョと同期の仲だ。
「城伯の出世道から転げ落ちて、このざまか。レッドブル少将」
城伯とは城塞の司令官を意味する軍役職、分かりやすくいえば警備長官だ。この女は数年前まで、孤島の牢獄モン・サン・ミッシェルの警備長官だったが、とある子爵の讒言によってその地位を奪われ、今は国境警備部隊の隊長だ。いわゆる体のいい左遷と思ってよい。
サラ・レッドブルは青筋をたてている。
「将来の軍部次官になる女をつかまえておいて、お前は敬語を知らんとみえる」
よほど触れてほしくない過去だったようだ。
「お前、停戦ラインをわざと越えただろ？」

同胞を攻撃され、腹が立っているエンガチョにサラは「国境警備隊が国境警備をしてどこが悪いんだ！」と腰に引っさげていた剣を男にむけた。
「お前、あそこでパパティーノを見なかったか？」
彼女のエンガチョを探る目つきはさすがだ。どうやら彼女の停戦ライン越え、パパティーノという男が原因らしい。
「…き、気のせいじゃないのか…」
「ではお前があそこにいたのは、私の気のせいではあるまい！」
さすが軍部出身だけはある、サラ・レッドブルは肝心なところを見逃してはいない。
「エンガチョ、お前には聞きたいことがある。ついでにあそこで何をしていたかも洗いざらい話してもらおうか」

――三時間後、レッドブルは機関室で両腕と両足を組み、いらだっていた。

時計に目をやれば時刻は午後三時だ。エンガチョはレッドブル少将の脅しに屈することなく、あそこにいた秘密を守り倒したようだ。顔中の青たんがそれを物語る。

今、ナヴァグリオは迷いの森のなかを低空飛行にはいっている。

「おーい、従騎士（スクワィヤー）たち！」

得意げなエンガチョの声が聞こえた。

「あの森をぬければ、聖なる騎士の都アッパータウンだ！」

十歩先には四角いかたちの光がかすかにみえた。

「うわぁ、すっごーい」と騎士候補生たちは歓声をあげた。

ナオミたちは飛行船の窓から顔をのりだし、巨大の森のなかに突然出現した、古い時代のアムステルダムのような町に感嘆の声をあげた。ナオミもこれはとても素敵な冒険の始まりなのだ、と胸をドキドキさせた。

頭上には底抜けに明るい、真っ青な空が広がっていた。

四方を迷いの森に囲まれ、森のなかに拓かれた広大なる都アッパータウン。赤い三角屋根の中世の町といえども、やはり産業革命の恩恵は受けているらしく、町は赤煉瓦の落ち着いた小さなビル群が建ちならび、自動車やガス灯がところどころにあった。

大きくも小さくもないこの町はナオミが住んでいたカンペールの田舎町と見比べれば、確かに小さいながらも「都市」という名前が似合う。

永久機関式飛空艇は、町の東の方角にある牧場に無事着陸した。

数分後、迎えの黒色のリムジンバスが到着。バスからは執事のユ

トレヒトが忙しそうに現われ、「時間がない、『引継ぎ式』の時間が予定より遅れているんだ」と急かされるままにナオミたちはリムジンバスへと乗りこんでいく。ユトレヒトはサラ・レッドブル船長の姿を見つけると、彼女に最敬礼した。

「任務、ご苦労様であります！」

サラは「任務完了に伴い、国境警備にもどる」とすかした態度だ。

彼女の任務、いわずと知れようナオミたちをアッパータウンに送り届けることだ。

「ナオミ・ニト！」とサラの呼びかけにナオミは浮遊しつつある、ナヴァグリオを見上げた。

「『ロアゾン』とともに！」

サラ・レッドブルは、客室扉の前で、剣を杖にして左胸に拳をあてている。上昇気流のなか、彼女の赤い雄牛のマントとともにその髪も風になびく。だけど目だけは真剣だ。その真剣さに心打たれ、ナオミも右手を左胸に手をやった。

ロアゾンとともに――――この人もサンチョ・ボブスリーと同じことをいっている。

サンチョにしろ、サラにしろ、二人とも生前の父を知っている人だ。この「ロアゾンとともに」という言葉は、もしかして父と関係ある言葉かもしれない――――ジョジョは「ビギナーズラックっていう意味だよ」とぼやくけれど。

疑惑の渦中の人、エンガチョはアッパータウンに用事があるらしい。

浮遊しはじめた飛行船から飛び降りた。レッドブル少将は「まだ訊きたいことがあったんだがな」と舌打ちした。

エンガチョは何やらモゴモゴと電話中だ。

例の電話石（モバイルビー）で「えー、『剣と盾』という宿屋ですか。俺っちはあ

まり話をすることはないですがね？　あんたのせいで女ギツネにしょっぴかれそうになったし」と彼なりの敬語らしい俺語をつかっていた。するとユトレヒトは懐かしい顔に出会ったのか、とても嬉しそうに叫んだ。

「エドガー！　エドガー・ボブスリーじゃないか！　ああっ、こんなところで会えるなんてなつかしいな。いつからお前さんはダ・カーポ先生の助手を辞めたんだね？」

「…ええ、とにかくあとで行きますよ…」

エンガチョは深々とお辞儀をしながら電話をきった。

意味深な電話の会話、ピックル・タナカは横目でチラリッ、と盗み聞きをしていた。

「まったくどこのどいつだ、電話の邪魔をする気狂いは？」

エンガチョは不機嫌そうに声の主を捜した。

「ユトレヒトだよ」噂のバトラーは葉巻（パンチ）を吹かしていった。

「ああ、あんたか。その顔は一度みたら忘れねえや！」

二人は久しぶりの再会に沸いた。

再会もまもなく、執事がバスに乗り込むと、運転手が車のエンジンをかけた。エンガチョはその様子を何となく寂しげに見ていたものの、ナオミの姿を最後席に見つけると、大声で少女の名前を呼んだ。

名前を呼ばれた本人はそっと後ろを振り返った。

「ナオミ、ビギナーズラック！」

エンガチョが大きな拳に親指をたてれば、ナオミも同じように親指をたてかえした。

黒ヤギのダ・カーポは可愛らしい声で鳴き、テルはうるさいとぼやいた。ジョジョはガマグチガエルを返すのを忘れている、と呟いた。

――ロアゾンとともに、どうやらビギナーズラックという意味ではなさそうだ。

第２６話　聖なる騎士の都【２】

第２６話

アッパータウンが株式市町村となった、経緯はこうだ。

かつてアッパータウンは貴族たちの領地の集合体だった。一人の伯爵、六人の子爵、六人の男爵たちの領地が入りにいり混じっていた。ときおり領地をめぐって、血を血で洗う骨肉の争いが繰り広げられていた。その度に騎士たちは戦場に駆りだされ、罪のない多くの騎士たちの命が失われた。

そんな悲劇に終止符を打ったのがトモロヲ・ブドリ伯爵、三十五歳のときだった。

エルフの歴代君主からアッパータウン統一を促され、星読みの言葉に従うかのようにトモロヲ・ブドリはアッパータウンを統一。統一後は時代の流れから、アッパータウンを株式会社化した。

伯爵はまず邸宅のみを残して、自分の領地をすべて放棄。

そして広大なる領地を六地区に分けた。つまり六つの町にわけ、町の中にある村の統治もふくめ、一つの町に一人の子爵を赴任させ、補佐役に男爵一人を任命した。かつての領主たちを町や村の経営者にさせたのだ。いわゆるアッパータウンの取締役に任命し、自分は代表取締役となった。

領主時代とまったく変わらない強い自治権と君主大権を与えることによって、貴族同士の領地をめぐる争いはなくなった。そうこの都は一人の伯爵とそれを支える六人の子爵、そして彼ら子爵を支える六人の男爵、合計十三人の貴族の領地経営で成り立っているのだ。

執事のユトレヒトは声を張りあげた。

「従騎士の皆さん、いいですか。北はランスロット地区、南にはガ

ラハッド地区。あとはまあ、みてのとおりですね。そして皆さんがいるところが、アッパータウンの中央区、キング・アーサー地区なのです」

キング・アーサー地区は数階建て、騙し絵の赤煉瓦ビルが建ちならぶビル街だ。

よく瞳をこらしてみれば、絵のような急勾配の屋根の連なりがある町は、まるで歴史の重さを物語る落ちついた感じがする。

ビルの上から見下ろせば、この町の道は迷路のようでとても細くて複雑だ。ちなみにこのキング・アーサーの町は七つの通り（昔は村といっていたが、今は通りといったほうが無難だろう）で成り立っている。

リムジンバスから降りた騎士候補生一行は、丘の上に建てられた中世の古城らしき壮大なる豪華な屋敷をみあげた。その壮大なるつらがまえに、ユトレヒトはコホンッと誇らしげに言った。

「あれがアッパータウン・オブ・ギルウェル領主館といいまして、このアッパータウンを経営なされておられるトモロヲ・ブドリ伯爵閣下のお屋敷。まずここで暮らすには、このお方の許可がいるのです」

英国の首都ロンドンにあるビッグ・ベンの愛称で知られる、ウェストミンスター宮殿のようなアッパータウン・オブ・ギルウェル領主館。天空まで突き抜ける、万年時計塔が素晴らしい。領主館は迎賓館シャトー・ブルトンホテルでも知られる。

領主トモロヲ・ブドリの居住はこのホテルの一室だ。

ユトレヒトに連れられながらも、騎士候補生たちはその大きな時計塔と屋敷の荘厳さに驚きのあまり声がでなかった。ナオミたちはブルトンホテルの長い玄関階段を登ると、どこぞの画家が描いたと思われる、色鮮やかな樫の樹の扉絵にみとれていた。

「この絵を描いたのは絵画王ベリー・グッドウィル画伯。いいかい、

ここからは礼儀正しくするんだよ。礼法は騎士のたしなみだからね」
というと「レディ・クーデンホーフ、連れて参りました」と真鍮で
できた、一角獣（ユニコーン）の把っ手を三回ほど叩いた。

第２７話　引継ぎ式【１】

第２７話

――扉はなんとも無気味な音をたてて、皆を迎えいれた。

ナオミたちの前には赤い絨毯、その先には螺旋階段が見えた。

赤い絨毯の左右には、数人の執事がナオミたちを出迎えにきていた。総執事のユトレヒトにつれられ、歩いていくと傍に控えていた音楽隊がトランペットをいきなり吹き、ビクッとナオミたちを驚かせた。ジョジョは毛が逆立った。

玄関は美術館のように大きな大広間だ。

天井を見上げれば螺旋階段にともなって、何百という部屋がぐるぐると果てしなく続いている。螺旋階段の始まりの小間には電気で動く、豪華な装飾の赤い扉のエレベーターがあった。ナオミたちが驚きのあまり声がでず、みとれること数分、コホンッと誰かの咳払いが聞こえた。

すっと咳払いのほうに目をやれば、鼻眼鏡をかけた厳格そうな女の人が立っていた。この人はこの領主館ではそれなりの地位にある人に違いない――――ナオミの女の直感だ。そして自分はこの人をにわかに知っている、ただ話したことはないけれど。

「こちらが伯爵家の家宰、デイム・クーデンホーフだ」

家宰とは家長に代わり、家政を取りしきる重役のことだ。

「デイム、皆さんは思っていたよりも元気ですよ。ええ、こちらが今年の騎士候補生です」

「ドワーフの砲撃に遭ったと聞いておりましたが――無事でなによりです」

クーデンホーフはホッと胸をなでおろすと、ゆっくり鼻眼鏡をか

け直した。
「お迎えのほどご苦労様でしたね、ユトレヒト。ここからは私が引き継ぎましょう、あなたは下がってよろしいですわ」
クーデンホーフはパンパンッと手を叩けばピタッ！　と音楽隊の演奏がやんだ。
「さあ、ついていらっしゃい」とクーデンホーフは右の大きな廊下を大またで歩いていく。いわれるがままに家宰についていく騎士候補生たち。騎士の回廊という廊下では、歴代の騎士たちの肖像画がみられた。
「どうして魔術師マーリンの肖像画があるんだろう？」
声の主はテル。騎士でもないのにどういうわけか、ここに魔術師マーリンの肖像画があることに一同は不思議に思った。杖をついた長髭の老魔術師マーリン、威厳のある肖像画だ。ちなみにマーリンの肖像画は、ほかの騎士たちよりも豪華な額で飾られていた。

――魔術師マーリン。

その碑には「魔法使いにして予言者、アーサー王とその父ユーサー王のよき相談者。聖女が夢魔との間に身篭った呪われた子ども。僧院で生まれ、生後すぐに洗礼を受けたので魔界に堕ちることをまぬがれた」と記されていた。
マーリンといえば予言や透視（クリアボヤンス）などの魔術にたけており、姿も自由に変えられることでも知られる。幼少のおり、砦を築くための人柱に引きだされるが、アーサー王の出現を予言して、自分はその王の後継人であるとして、自らの命を救ったことは有名な話だ。
悪魔との混血児のため、祓魔師（エクソシスト）などその強大な魔力をもった血を求める輩に、何度もなんども命を狙われたという。泉の聖女ニミュエを溺愛したため、最後は彼女の計略にかかり、湖の樹のうろに閉じこめられてしまった。湖の樹のうろ、やがて人々はその場所に墓碑の意味もこめた修道院を建立した。現在、そこはモン・サン・ミ

ッシェルと呼ばれている。

「それが現在に続く、モン・サン・ミッシェルの歴史（クロニクル）なの」

ココの言葉にサンチョ・ボブスリーの顔が思い浮かんだ。

泉にかこまれた館に住んでいたという、泉の貴婦人ニミュエ。

ときに彼女はヴィヴィアンという称号で呼ばれていた。円卓の騎士物語では、アーサー王の腹心である聖騎士（パラディン）ランスロットの育ての親であり、かのアーサー王に聖水から作りだした聖剣（エクスカリバーン）を授けた魔女だとか。彼女は魔術師マーリンの弟子であり、マーリンが愛する世界でただ一人の女性でもあった。

「なぜニミュエはマーリンを幽閉したの？」

さすがにココもこれはわからない、と首をかしげた。するとクーデンホーフがコホンッと、また咳払いをしたので、ナオミはビクッと飛びあがった。

「身代わりだと先生は聞いています。物語には書かれていませんがあそこにアーサー王が逆臣たちの企みにより、幽閉されていたそうですの。国王を助けるためにマーリンは身代わりになったと伝えられています。しかし可哀想なことにニミュエはマーリンの子どもを身篭っていたのです。そこで彼女はその子のため、アーサー王の側近であった、円卓の騎士ペレアスに自分を愛する魔法をかけて、彼と結婚しましたの」

――なんと悲しい恋愛物語（ロマンス）のことか。

「マーリンとニミュエは愛しあっていたのね」

幽閉されたマーリンがどうやって生きながらえたのかは分からないが、百年後にモン・サン・ミッシェルから逃げだした。しかし脱獄のおりに魔力を失い、アルデリスの戦いとやらに遭遇して命を落としたといわれる。

「ブルトンの文献にも記されていると思いますが――――まあ、今の世のなかを騒がしている、あの脱獄者サンチョ・ボブスリーもそうあればいいのですが」

第２８話　引継ぎ式【２】

領主館の家宰は、奥にある大きな扉のところまで連れていくと、そこでピタッと足をとめた。彼女の厳格な声が聞こえ、一同は背筋をのばした。どうやらその先は、引継ぎ式の会場のようだ。重圧で心が痛い。緊張のあまり、おしっこがしたくなってきた。

「補佐役（デンコーチ）はここにいますか？」

ココが前に歩みでた。ロレンツォの従姉妹だ。

「ドワーフの砲撃、大惨事だと聞いています。幸い死者はでなかったそうですが、こうして無事を共に喜びあえるのは補佐役がいたればこそ。さすが生徒会役員、キング・アーサー地区の補佐役だけあります」

クーデンホーフはゴソゴソしたと思えば、小さなメダルを三枚ほど取りだして「コクリコ・サクラダにメダル三枚」とわけのわからないことを呟いた。

ココは家宰から小さなメダルを受け取った。

「騎士メダルっていうの」とココ。

「騎士メダル？」とナオミ。

騎士に叙勲されるには、条件として騎士メダルを三〇〇枚集めないといけいない。

メダルが三〇〇枚に達すればときの領主の推薦をもって、公爵より正式に騎士勲章を叙勲される。すなわち騎士メダルとは自身の名誉の証なのだ。騎士候補生が親方騎士（マスターナイツ）に仕えるのはそのメダルを集めるためでもある。もちろんメダルは悪いことをすれば没収されるし、逆に名誉のかわりにメダルを賭けて物事を治めることもできる。

「ふーん、それで？」

興味のないテルの声が聞こえてきた。

「三〇〇枚に達した人から騎士になっていくの。でも三〇〇枚に達していない人はずーっと騎士候補生のままなの。最長で騎士になるのに二十年かかった候補生もいたぐらいよ」とココはとても恐ろしいことをいった。

その言葉にナオミとテルは顔をものすごく青ざめてしまった。

騎士になるには、騎士候補生一人ひとりが、この町の人々から騎士メダルを集めなければならない。自動的に繰りあがるものでも何らかの試験に合格すれば、なれるものではないのだ。日々の良き行いが騎士メダルの数になり、それが騎士の道へと直結する。また騎士メダルはたえず、誰にあげたとか日々報告されるので不正はできない。

「あ、そうそう。騎士メダルの数は領主館に貼りだされるから」

学校の成績みたいに掲示板に貼りだされるのか。

「僕はマイナスにならないように頑張るよ」

テルは声を落として、ほどほどにいった。

「コクリコ・サクラダ、生徒会はもう席についていますわよ」

クーデンホーフの言葉に在団生たちはコクッと頷くと、そろりとおしあいへしあいながら、左右の廊下の非常扉から会場へとはいっていく。

ココも「またあとでね」と右の廊下へと姿を消した。

ピックル・タナカも一年間の代理教師として、候補生と顔合わせしておく必要があるとのことで、家宰の言葉に従って、彼らのあとについていく。

耳を澄ませば扉の内側では、彼らの無事を友人たちがヒソヒソと喜び合っていた。

「入団生の皆さん、ようこそアッパータウンへ」

クーデンホーフはナオミたちにニコッと微笑んだ。

「あと五分足らずで、騎士候補生の入卒団式が始まります」

まもなく騎士候補生の入卒団式が始まるとのことだ、式場の踊り場で待機するナオミたちに緊張が奔った。入卒団式、ロロが本から得た知識によれば、自分たちが入団すると同時に見習期間を卒団する騎士たちといれかわりに入団する、とか。

「へえ、知ったかぶりも役に立つときがあるんだな」

テルの小さなぼやきに、すかさずロロの拳が少年の脇腹にくいこんだ。「ウゲッ！」とテルの悲鳴とともに、クーデンホーフは社交界の理をナオミたちに説明した。

「新人の皆さんは先輩たちから、配属される地区の引き継ぎを受けなければなりません。地区の引き継ぎはアッパータウンの伝統。地区での生活こそが皆さんの社交界ですの」

地区、響きよくいえば町というそうだ。

子爵が経営する領地のことだ。ここで自分たちは様々な人々と出会い、彼らから学び、彼らと一緒に寝食をともにすることによって、人間として大切なものを得るのだという。

地区には円卓の騎士の名前が冠されている。

キング・アーサー、ランスロット、ガウェイン、ガラハッド、トリスタン、モードレッド。この六騎士の名前がアッパータウンの六地区の名前にして、この都を形成している六つの町の名前だ。

また各地区には、生徒会から補佐役に任命されている騎士候補生がいる。ココがその一人、キング・アーサー地区の補佐役だ。この六人の補佐役の意見をまとめるのが書記の仕事で、現在その大役を担っているのがロレンツォだ。その書記がまとめた意見を生徒会を代表して、領主や親方に掛け合うのが生徒会長だとか。

「その昔、偉大な騎士たちがここで生活して卒団式を迎えました。騎士候補生のあいだ、どの地区で過ごすにしても、皆さん一人ひとりの騎士（エッダ）伝説をつくってくださいね」

「…私たち一人ひとりの騎士伝説…」
ナオミは父と母がどんな伝説をつくったのだろうか、と静かに思った。
「どういうふうに引き継ぐのかしら?」
ナオミは控えめなヒソヒソ声でテルに訊いてみる。
「…たぶん…」とすぐにテルは自分の右手にペッと唾を吐き、それをクーデンホーフに気づかれないようにそっと扉につけて「お互いに唾のついた手で握手じゃないかな。昔はそうだったって、父ちゃんがいってたんだけど」と呟いた。
「それって不潔だな」とロロ。
「だからヴァンヌ育ちは大嫌いなんだ。なんでも汚いとかいうし、すかしてるし…」

すかしていることは関係ないが、ナオミはなんだかハラハラしてきた。地区を引き継ぐといわれても、一体全体どうすればいいのかさえわからない。
はたしてテルがいったようなものでいいのだろうか――――それにこんな自分にちゃんと引き継がせてもらえるのか、資格がないとかいわれないだろうか。
ナオミがそっとあたりをみまわせば、テルの言葉を信じたのか、ほかの入団生たちはしきりに右手をハンカチで拭いていた。ミスリル地下鉱山で知り合ったマイケル・コービーは眠たいのか、コックリと立ちながら寝ている。この変わった少年はのんびりとしているせいか、緊張しないのだろう。まったくうらやましい。

そんな彼女たちをさらに驚かせたのは毛のまばらなジャックウサギの群れだった。よくみるとグレムリンと呼ばれる妖精だ。このグレムリン、機械に悪戯をする妖精とされ、ゴブリンの遠い親戚にあたるそうだ。かつては人間に発明の手がかりを与えたり職人達の手引きをしていた。

あの発明の父エジソンが助手にしていたことは大変有名だ。
エジソンがいうには、どの家庭にもグレムリンの一匹や二匹、住みついているという。彼らは好物のチューインガムをクチャクチャさせて、そのあたりを走りまわっていた。
まるで彼らはウサギのぬいぐるみのようだ。
彼らはしきりに大広間を走りまわり、ナオミたちの頭などにのぼってきたりした。興奮のあまりお互いにぶつかりあい、気絶する者もいた。グレムリンたちが時間に追いやられるかのように壁のなかへ逃げこんだ頃、スゥーとエレベーターから五名ほどの騎士たちが降りてきた。

あのヤドリギのようにブタのようにでっぷりと太ったのやら、ヤドリギ夫人のようにごぼうのようなのやら、短足や足長やらいろんなのがいた。彼らは入団生たちをみると「今年も元気そうなのがいっぱいじゃねえかよ」とか「まったく、まったく」とお互いに話ながら、玄関扉のほうへ歩いていった。
彼らはぶつぶつと彼らの仲間内のことについて、しきりに議論していた。

「あいつは親方失格だぜ。候補生は従者だぞ。それをマルボロときたら、まるで丁稚奉行人みたいに扱っていたそうじゃないか。食事もろくに与えやしねえから、もうすぐで餓死寸前だったとか。この俺にいわせればだな、今すぐあのクズから騎士の地位を剥奪すべきだと思うんだ」
「リンドバーグ、パン屋のお前に俺の何がわかる？」
「ティソ親方、アニタ・ジブリ・パリの皆は、少なくてもお前の味方ってことだよ」
リンドバーグと呼ばれた、スラッと足の長い騎士は入団生の視線に気がついたらしい。いきなり大また歩きで彼らのほうへ近づいて

いくと、怖そうな声で話しかけた。もちろん誰も返事などするものはいない。

「…君たちは入団生だね？　引継ぎ式はもう決まったのかい？」

リンドバーグをなだめていた、優しそうなもう一人の騎士が彼らに話しかけた。

「あの…今からです…」とナオミ。

「おお、そうか。握手のコツは心の声に従うことだ」

心の声に従うこと？　どういう意味だろう？

「心の声に従うといってもな、君たち。キング・アーサー地区のマルボロの従者になることだけはやめておけ。それならパン屋の俺のところにこい」と足長の騎士は入団生たちに忠告した。

ナオミはマルボロの従者になるよりも、この人の従者だけはなりたくないなとひそかに思った。だって乱暴そうだからだ。それは入団生、皆の意見でもあった。

「親方、挨拶はあとからにしてもらえませんか」

苛立ちながら、しきりに懐中時計に目をやるクーデンホーフ。

「時間がないんだね、すまないな。それでは騎士候補生の諸君、キング・アーサー地区でお会いしましょう」と家宰にせかされ、親方騎士たちはその場を立ち去った。

あとになって分かったことだが、騎士の身分と職業は違うのだ。

騎士とは中世のように騎馬で戦う軍人階級のことではなく、ブルトン社会における成人を意味する言葉だ。騎士は『勲爵士』とも呼ばれ、ブルトンの伝統教育を受けた身分証明に他ならない。爵位についても同じだ。昔は地主身分だったが、国が株式会社となった今では、その土地の運営を担う経営者格にすぎない。

騎士や爵位を授爵されようとも、ブルトン人には職業がある。

だからあのときテルが騎士は卒業後、サラリーマンやＯＬになる

といったことは少なからずも間違ってはいない。そもそも『円卓の騎士団』に軍事的機能はなく、騎士訓練所というべき教育機関なのだ。軍事的機能を求めるなら、彼らには軍警察がある。

十三歳までブルトン人がフランス人と一緒に暮らしているのも、フランス社会の一般常識を心得るためだ。十三歳になったあとはブルトン人として、ブルトン社会のなかで生きねばならない。そのための基礎魔法教育組織が円卓の騎士団というわけだ。そしてここは某騎士団のアッパータウン校、いわゆる分校だ。

「おしゃべりはそこまでです」

家宰は七秒間のあいだに身なりを整えるようにいった。

「二列になって準備はよろしい？　さあ、私のあとについてきてください」とクーデンホーフはコホンッと咳払い、鼻眼鏡をかけ直すと大客間の扉を開けたのはよかったのだが、すぐに「誰です、こんなところに唾をつけたのは！」とベトベトした手を見て、顔をしかめた。

第２９話　引継ぎ式【３】

扉の向こうはちょっとした小間があり、さらに扉があった。
その扉の左右にはナオミの何倍もの大きな大理石の彫刻が飾られていた。家宰によればこの彫刻はアーサー王とモードレッドの一騎討ち、カムランの戦いとやらを再現した彫刻だとか。クーデンホーフはくるりとふり返り、「よろしいわね？」と総勢四十九名の騎士候補生に目をやった。

扉を開けて、大客間へとはいっていった。
クーデンホーフの姿がみえたとたん、大客間にものすごい拍手が鳴り響いた。その拍手は卒団生や在団生たちの拍手ではなく、何百という白い紳士手袋がパチッ、パチッと出迎えながらに拍手をしているのだから、奇妙といえば奇妙だ。
大客間はナオミが見たことのない、それは素晴らしい二階建ての広間だ。
どことなくどこかの国のオペラハウスに似ている。天井の大きな星座盤には春夏秋冬の星座が黄金色で描かれ、ゆっくりと天体のようにまわっていた。それはとても幻想的だった。三本立てキャンドルがステンドガラスの窓をうっすらと照らしだすなか、大客間の真んなかには教会のように階段のうえに赤い絨毯が敷かれてあった。

赤い絨毯を左右にわって、十二人がけの長椅子が三十ほどあり、各々の騎士団の紋章入りの旗槍がかかげられていた。長椅子にはナオミたちの先輩たちが着席しているのだろうが、ところどころに空席も目だっていた。最前列の長椅子には生徒会たちの席、ココとロレンツォが、まるで別人のようにかしこまって着席しているのが見

えた。二階には卒団生のご両親たちの顔が見える。

大きな円卓の絵が描かれているところでは、自分たちとちょっと違った服装をした騎士候補生たちが跪いていた。彼らの制服はふちが金レースで飾られ、金の肩章もついてあるダブルボタン式の立襟の黒い服装だ。

「あれは騎士の正装、舞踏会とか冠婚葬祭のときの公式の制服だぜ。あいつらは卒団生だな、俺たちの数年後だ。でもお前は卒業できるかどうかさえ怪しいな」

「またはじまった、知ったかぶりのぶりぶり百科事典の自慢が――」

ロロの言葉にテルはうんざりしていった。

ウォ・アボカド家は騎士血族のなかでも落ちこぼれを襲名するほどの一族だ。対するロートレック家といえば、ヴァンヌのロートレック孤児院出身に与えられる姓名だが、この名前の出身者は努力家と天才が多いことで知られ、歴史的にみてもエリート騎士が名を連ねる。

とくにヴァンヌ・ロートレック家の本家筋にあたる、南仏（プロヴァンス）のトゥールズ・ロートレック伯爵家の先祖は、九世紀の古代フランス・ドイツ・イタリアの王、シャルルマーニュ大帝時代までさかのぼることできるほど由緒正しい。

孤児院出身の英雄といえば、ドラゴンヌ孤児院のロエスレル・ドラゴンヌ（今では臆病風に吹かれた腰抜けと名高い）が有名だ。そしてその人はナオミの父の友人でもある。機会があれば、是非会っておきたい人だ。

「孤児院出身は人の痛みがわかる分、偉大な仕事を成し遂げるんだ」

確かにロロのいうとおりかもしれない。

少年には早くも天才騎士の風格がにじみでている。逆立ちしてもハンサムと天才には勝てないことがわかっているからこそ、テルは歯痒くてしかたがない。子どもには目の前の人間が何者かを一瞬で

見抜く神通力、いや眼力があるのだ。

もうちょっと先に目をやれば、教壇のうえにはミスリル製の剣と盾、王冠の紋章がはいった豪華な台座が一つ、それを取りかこむ、たくさんの椅子には先生方らしき騎士たちが座っていた。ピックル・タナカも静かにそこに座っていた。クーデンホーフは卒団生たちの後ろにナオミたちを跪かせた。長椅子の空席は彼らが座るべきところのようだ。

「さてとクーデンホーフ女史、準備はよろしいかのう?」

「はい、始めていただいて結構ですわ。サー・トモロヲ・ブドリ」

トモロヲ・ブドリ、この言葉にナオミは胸が踊ってしまい、じっと老人を見つめた。

少女の眼差しに気がついたらしく、トモロヲ・ブドリが少女ににわかに微笑んだので、ナオミは思わず顔を赤らめてしまった。

「只今より『円卓の騎士団』アッパータウン校・卒団式を始めます」

式の進行役は召使いのユトレヒトだ。

「在団生、卒団生のために最敬礼!」というと今まで座っていた、在団生たちは一斉に立ちあがり、鞘から剣を取りだして、自分たちの顔に近づけて剣をたてた。しかもそれは炎のように波打っている変てこな長剣だった。

この剣はフランベルジュといわれる、儀式用の剣だ。

「知ったかぶりはちょっとは黙っていろよな」

「俺はお前のためを思って、わざわざ説明してやってるんだぜ」

しばらくして音楽隊がファンファーレの演奏を始めた。

それからすぐに「六地区の卒団生代表、まえへ」というユトレヒトの厳粛な声が聞こえたと思えば、五十名ほどの卒団生たちのなかから、各地区から一人ずつ、計六名の騎士候補生が壇上へとあがり、トモロヲ・ブドリの前に跪いた。

「卒団証書ならびに記念品授与!」

ユトレヒトの声とともに先生方も立ち上がり、両手をまえに組んでいた。

トモロヲ・ブドリは見習証書を読みあげたあと、卒団生の代表者たちに「ご卒団、おめでとう」と握手をガッチリッと組みかわし、フランス共和国親衛隊（ギャルド・レピュブリケーヌ）のような黄金の兜を六地区の代表者にかぶせた。最後に円卓の騎士団の紋章がはいった内側が赤色、外側が黒色という騎士のマントをかけてやった。

音楽隊の演奏とともに、拍手が鳴り止まない。

「ご出席の皆様、どうぞご静粛に！　ご静粛に！　ご静粛に！」

頃合とともに、ユトレヒトは式を進行に務める。

「ご領主祝辞。サー・トモロヲ・ブドリ、我らの宮中伯」

その名がでると、水を打ったように場は静まり返った。

「…コホンッ」

トモロヲ・ブドリはナオミのほうを見ながら、優しくいった。

「過日、サーの称号を許されし五十名の候補生諸君、わしはしみじみした話が大嫌いなのはご存じのとおり。そこでいきなりじゃが点呼をとりたいと思う。えーっ、騎士らしく大きな声で返事をすること――――ではさっそく、アンナ・ハイネノハイネ！　ユリウス・ベドウィン！　ピピン・マクベス……」

「はい！」

「はい、はーい」と次々と元気な声が聞こえてきた。

「ユリウス・ベドウィン！　『はい』は一回でよろしい」

五十名すべての卒団生の名前を呼び終えたあと、トモロヲ・ブドリはそのくるりっとしたお茶目な瞳を輝かせて「皆、元気でよろしい」とすぐに「ええ、ついでじゃから今度は入団生、アイウエオ順でいくからのう。小さな声での返事でもよし、大きな声ならさらによし。読み方を間違えれば返事しなくてよし――――ではさっそく、テル・ウォ・アスパラガス！　ヴィクトル・イエファ！　マリアン・ウォルト……ナオミ・ニト…」

ナオミの小さな返事の声は、ざわめきでかき消されてしまった。
「ナオミ・ニトだって？」
「うん、今さっきトモロヲ・ブドリがそう呼んでいたよ」
「ついにあの英雄の子が、僕らの円卓の騎士団に入団するんだ」
大客間の視線はすぐさまナオミ一人に注がれてしまった。
ナオミは顔を真っ赤にしてもじもじしながら、トモロヲ・ブドリに助けてと――――見つめていた。いやはやトモロヲ・ブドリにしてみれば良きことだと思って、彼女をわざと紹介したことが、ナオミにとってはた迷惑なことだったらしい。
「皆さん、厳粛に！　厳粛に！」
ユトレヒトは場を鎮めようととあたふた。

「ふーむ、これは明らかに騎士メダル百枚、没収じゃな」
トモロヲ・ブドリの言葉に候補生たちは瞬時に静まりかえった。
「…わしの…」とポツリッと呟けば、誰かがぷっと笑いをこらえる音がした。
「誰か屁をしたな。いや責めんよ、よくあることじゃからのう」
さらにこの言葉に大客間は大爆笑。
お腹をかかえて大笑いする者、瞳に涙をうっすらとうかべて笑いをこらえる者、すでに笑いすぎて呼吸困難になっている者、ナオミはこの人は自分の味方だとわかったらしい。
「ねえ、テル。返事した？」
「するわけないじゃないか、だってアスパラガスだぞ！」
テルの言葉にロロが大爆笑。
「あはっはっは、テル・ウォ・アスパラガス！」
「…黙れ！　知ったかぶり！」
自分の名字を間違えられてテルはムッとしているようだ。
ナオミはいい雰囲気にしようとトモロヲ・ブドリのことを必死にかばえば、テルは「トモロヲ・ブドリは変人だよ」と嫌そうな顔で

こういう。

「静かにしろ！　腹をかかえて笑うな！　転げまわるのはやめろ！」

そう声を張りあげるユトレヒトの必死の努力のすえ、式場はやっと静まり返った。

「うむ、話は以上で終わり。ともあれ見習諸君、卒団おめでとう！　これより諸君は紳士淑女としての教育を立派におえた。しからば社会に貢献して、よりよい人間になることを心から望む。君らはまったくもって若い、歩みたくない無理な道を選ぶことはない。好きに生き、好きに死んでかまわん。ただし大切な人を守ることだけは、どんな道に生きようとも忘れてはいかんぞ」

「大切な人って？」

アンナ・ハイネノハイネは瞳を丸くしていった。

「心から慕い、愛している者のことじゃよ。君たちにはそういう人がおるかね？」

卒団生たちは両親や恋人、友だちのことを思い、テルはナオミのことを見つめ、ナオミはチラッとロロのことを見つめた。また彼女は自分の父と母のことを想い、二人は自分を愛していたんだと、心からそう思えることに誇りを感じ、もしかして自分にそのことを教えるためにトモロヲ・ブドリはそんなことをいったんじゃないのか、と思った。

「伯爵にもそんな人がいますか？」

アンナ・ハイネノハイネは恐縮しながら、皆の意見をいった。

「わしは――――」

老人の身内といえば孫娘のダ・カーポだ。今は黒ヤギだけど。

「わしはこの町で暮らしている――――」

一瞬、会場は水を打ったように静まりかえった。

「すべての者たちじゃ」

ユトレヒトは尊敬の眼差しで老人を見つめた。

「とにかくご卒団、まことにおめでとう！」
もうこれ以上ないほどの笑顔のトモロヲ・ブドリ。卒団生たちは自分がかぶっていた制帽を「わあっー」と天井高く投げた。
式場が騒がしくなったこともあってか、ユトレヒトの太い青筋が額にうっすらみえた。在団生たちが自分の席を立とうとしたので、ブドリは彼らに自粛を求めた。
「卒団生は引継ぎ式の準備にとりかかりなさい」
冷静さを取りもどすためユトレヒトは、大きく深呼吸をした。
「コホンッ、只今より第二部『円卓の騎士団』アッパータウン校、騎士見習いの入団式並びに卒団生による引継ぎ式を始めます。一同、厳粛にお願いしますよ。いいですか、無断におしゃべりした人はメダル五枚没収ですよ」

第２９話　引継ぎ式【３】（後書き）

【語句説明】

フランベルジェ

フランベルジェには、大型で両手持ちの長剣ツヴァイヘンダーから細身の片手剣まで様々なものが知られている。その特殊な刀身が肉を引き裂き、止血しにくくするため、一般に殺傷能力が高い。衛生事情が現代と比べ物にならなかった時代には破傷風などに感染して死ぬ例が多かったという。

治りづらい傷を作るため、「死よりも苦痛を与える剣」として知られる。。前線の兵士が敵の馬上の騎士の槍先を切り落とすのに都合がよい、敵の剣による攻撃を受け流すのに都合がよい、などの利点もあるという。叙事詩に登場するカール大帝につかえたとされる騎士ルノー・ド・モントーバンがこの剣を愛用していた。銃器が開発され、剣は日の目を見なくなったが、それでもこの剣は美術的評価と共に生産されつづけた。

（Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ　フリー百科事典引用）

第３０話　引継ぎ式【４】

第３０話

トモロヲ・ブドリの準備はよいか、とクーデンホーフにパチンッと目配せした。

彼女は入団生たちを床に大きな円卓の魔法陣が描かれているところまで引率すると、彼らをアイウエオ順に並ばせた。まずテル・ウォ・アボカドが一番最初にやや緊張した顔つきで、魔法陣の中心に立たされた。

「…一番最初って、けっこう何事も失敗するんだよな」

テルの呟きが聞こえる。

どうやって引き継ぐのかな、もしかして底がぬけるんじゃないかと思いながら、入団生たちは不安げに彼をみており、また在団生たちはドキドキ、ワクワクしてテルを興味深々にみていた。

ココとロレンツォは、どの子がどの先輩の騎士団や親方を引き継ぐのか、ボソボソと喋っていた。ナオミのほうを指さして、友だちに彼女のことを話していたのがにわかにわかった。そのうち一人が「はじめまして、よろしくね！」とナオミにそっと手をふったのもわかった。

「コラッ！　そこ、入団生に手をふらないように！」

総執事（マスターバトラー）のユトレヒトのカリカリした声が大広間をクスクスと小笑わせた。

光をおびた魔法陣からぬっとでてきたのは、赤い布で包まれた大きな何か。赤いビロードの天幕が外され、騎士候補生たちの目の前に現われたのは大きな四角い鏡だった。

ナオミたちは驚いて声もでない。壁のような大きな鏡にラッパを拭いている天使たちの黄金の彫刻装飾、匠の業というべき素晴らし

さがある。
「これは魔法の鏡です」
クーデンホーフの声色がやや緊張しているのがわかる。
「引継ぎは『心』に従いなさい、すでに卒団生は鏡のなかで待機しています」
鏡は真実を映しだす、ヴァンヌの星読(エルフ)みがそんなことをいっていた気がする。でも人間が鏡のなかにはいれるなんて、今まで聞いたことがない。でもこれは真実、ブルトンの魔法文化なのだ。
「鏡の中だってさ。きっとチクチクして痛いと思うな」
テルは皆を代表していうも、ユトレヒトは時間がないと暗にトモロヲ・ブドリのほうに目をやった。
「諸君が己の弱き心に打ち勝つことを切に願う」
トモロヲ・ブドリの言葉が耳に残った。
「では先頭の騎士候補生から、鏡に身を委ねなさい」
テルはやや緊張した顔つきで、鏡に手をいれてみた。
次に頭と身体をいれ、ついに少年は鏡の中に姿を消した。普通に姿を消せばいいものを、テルはわざと右手をだして宙でぐるぐるまわして「チクチクする！」と姿を消すときに呟くものだから、外で待機する騎士候補生たちの恐怖心をやたら駆りたてたことはいうまでもない。
次々に鏡の中に子どもたちは身を委ねる。
ナオミの番だ、そろりっと指をいれてみれば痛くはないものの、鏡の中は山の麓の清流みたいにヒヤッと冷たい。まるで水が絶えず流れているかのようだ。他の子どもたちが鏡の中にはいっていくたびに「キャッ！」という悲鳴をあげたのも頷(うなず)ける。
――――騎士候補生全員が鏡のなかに姿を消して五分が過ぎた。

鏡のなかから何かが、いや誰かが、男の子と女の子が歩いてくるのがわかる。鏡に映っているのはテルとアンナ・ハイネノハイネだ。アンナとテルが仲良く鏡からでてくると、在団生たちは「うおぉーっ」と歓声をあげた。

クーデンホーフもとても嬉しそうに「キング・アーサー！」とテルの引継ぎを声をあげた。赤毛のロレンツォなんかは、一番最初にキング・アーサー地区の名前が呼ばれるなんて三年ぶりだ、と騒いでいた。

「キング・アーサーの席はあそこ、左から二番目があなたの席よ」

テルを引率するアンナはココの横の席を指差した。

次々と鏡から先輩とでてくる騎士候補生。クーデンホーフは入団生の名前がかかれた、長い羊皮紙の巻紙を読み、引継ぎのペアの名の声をあげるも、なぜか式場からはため息が漏れてくるのがわかった。

まだあの名前が呼ばれていないからだ。彼らが最も期待しているあの名前、そうナオミ・ニトだ。彼女の名前が呼ばれていないことに入団生、在団生、卒団生、教諭たちまでやきもきしていた。

――――ナオミが鏡のなかにはいって七分がすぎた。

鏡の中は冷たい世界だ。光も何もない暗黒が支配する世界といってもよい。

卒団生らしい黒い影が自分と握手しようと求めてきたものの、ナオミはこれという人がいない。そのうち卒団生たちの一人が何かを語りだせば、次々と卒団生が声をそろえて同じ言葉を繰り返していた。きっと騎士の誓いの言葉かなんかだろう。

物事の是非は騎士道に問うがよい

いばらの道こそが　おのが騎士道に通ずると知れ
かよわき者はその楯でつつみ
邪悪なものには正義の鉄槌をくだせ

『誠実さ』『優しさ』『勇敢さ』『公平さ』
そして『献身さ』『名誉』『清らかさ』『慎み深さ』
騎士見習いはこの「八つの徳」と「名声」を重んぜられよ

「ナオミ・ニト」と突然、低い声が聞こえてきた。
冷徹な声はナオミの心に直接語りかけてくるようだ。
さらにその声は「お前にふさわしい地区は、父王を討った黒騎士モードレッドだ。さあ、わが手を握るのだ。さすればお前は皆から迎えいれられ、恐れられよう」と呟いてくる。

声の主は『迷いの森の辺境伯』だった。
騎士切手でみたから間違いない。なんて冷淡な声なんだ。耳障りな声といってもいい。でも彼は九年前、仲間の裏切りにあって死んだはずだ――――となれば目の前の男はどこの誰なんだ？　トモロヲ・ブドリは弱き心に打ち勝つことを切に願うといっていた。じゃあ、コイツは私の心なのか？　いや違う。私の心はこんなに汚れてはいない。
「何を戸惑う？　今更自分の心に嘘をついてどうする？」
男は冷淡な声で自分に語りかけてくる。
「「黙れ！　だまれ！」
「大抵ヒトは嘘をつく」
どこかで聞いた言葉だと思えば、ヴァンヌの星読みの言葉だ。
あのとき自分は正直に「鏡には自分が見える」といった。

――――じゃ、じゃあ、コイツは自分の心。

なんて醜いんだ。いや言い訳はよそう。

弱き心は迷いを生み出すものだ。そうコイツは自分の心の迷いなのだ。

「そうだ、鏡は真実の自分を映しだす。私はお前の心なのだ。さあ、わが手を握れ。お前の未来は私が決めてやろう。ともに悪道に堕ちようぞ」

「く、来るな！　これ以上、近寄ればお前を斬る！」

ナオミは剣を抜こうにも、なぜか剣が鞘から抜けない。魔法で封印されているようだ。

落ちつけ、落ちつくんだ！　怒りに身を任せてはいけない。目の前にいる男は本物の辺境伯ではなく卒団生なのだ。自分の感情、弱い心に負けてはならない。

「いったであろう、私はお前の『心』であると。さあ、我とともに行こうぞ！」

「ち、違う！　私はそんなこと思ってなんか……」

「…きさまの心に嘘をついてどうするというのだ？　自分に正直になれ、ナオミ・ニト…」

彼女は必死に辺境伯に言い訳をするものの、そのたびに男はヤドリギ家のこと、彼らを自分に跪かそうなどと少女を誘惑してきた。辺境伯の言い分も一理ある――――ひどく後ろめたい気がするものの、ナオミは興味がないわけでもなかった。

――――いくじなし？　違う。勇気をだすときがなかっただけだ。

ナオミは必死に抵抗しつつも、いくじなしでないなら、辺境伯は自分を受け入れよと迫ってくるではないか。

自分の心と口論して一分後、悪に染まるのもそう悪くはないのか

もしれないと、ナオミは辺境伯の声に従うかのように、その手を握ろうとした瞬間、別の声が聞こえた。

「自分の弱い心に打ち勝つのです、ナオミ！」

意志が強そうな女の人の声だ。聞いているだけで心地よい。

「人の言葉であなたの価値は決まらない、あなたの価値はあなたが決めるもの」

ナオミは何も答えることができなかった。

「自分を信じること、それはとても勇気がいることです」

女の人は今こそ勇気をだすときだ、と少女に問いかけてくる。

さあ、わが手を握れとばかりに迷いの森の辺境伯。

その右隣には聖母のような女の人が手を差しだしていた。ナオミはぐっと目をつぶり、『迷いの森の辺境伯』の手を握ろうとしたが、途中でそれをギュッと握りつぶし、女の人の手を握った。

女の人はとてもよく頑張った、と微笑みをうかべていた。

ナオミは女の人をじっと見つめた。

銀髪の女性だ。耳元から顎、首筋にかけて美しいシャープな線がくっきりわかる。青い瞳に透きとおる肌、銀髪が優雅にたれて、どことなく聖なる品格、威厳に満ちている。本当に美しい人だ。そして自分はこの人をにわかに知っている。

ヴァンヌでの旅立ちの支度初日、夕暮れ時にエーデルの酒場に向かおうとしたときに出会った。

テルやロロ、タナカは疲れで幻影を見たんだといっていたが、やはりあれは幻影じゃなかったんだ。確かな現実だったんだ。ナオミと目が合うやいなや、彼女はニコッと微笑み、出口に案内するから自分についてきなさいという。

「勇気をもって自分を信じること。今、あなたはそれを学びましたね。そう自分の弱い心に打ち勝つためには、自分を信じる勇気しか

ありません。そして勇気は自分の胸のなかにあるのです。これだけは忘れてはいけません」

「…は、はい。あ、あのう。お父さんとお母さんって……どこの地区だったの？」と会話の途中、出口らしい四角い光が自分たちを優しく迎えいれる。

「キング・アーサー！」

突然、クーデンホーフの声が聞こえ、ナオミはビクッと背筋が震えた。

気がつけばあの冷たい鏡の世界は霧のように晴れて、自分は拍手喝采の広間にいた。なかにはあまりの嬉しさからか、立ち上がって万歳をする者もいた。自分を引率している人をみれば、その人はユリウス・ベドウィンという男の子だ。

ナオミはわけがわからず、きょとんとしていた。女の人と思っていた人が五秒後には、男の子になっているのだから、仕方がないといえば仕方がない。やはりあれは幻影だったのだろうか。赤毛のロレンツォは「伝説が帰ってきた、伝説が帰ってきた」と歓声をあげた。トモロヲ・ブドリをさりげなく見つめてみれば、とても嬉しそうだ。

「やはり英雄ニトの血ですかね？」とクーデンホーフ。

「いやこれから始まるのだよ。彼らの時代、彼らの伝説（レジェント）がね」

新しい伝説が古い伝説を終わらせるのは、物事の道理なのかもしれない。

第３１話　引継ぎ式【５】

「あーっ、よかった。僕、祖父ちゃんの手を握ってさ」とテルの安堵の声、少年によれば握手を求めてきたのが、自分の父親だったとか。彼はテルに「お前は俺の息子、だからモードレッド地区にすべきだ」といったそうだ。

「で、どうしたの？」

ナオミのとても不安そうな声。

「うん、僕は『モードレッドは絶対にいやだ！』っていったのさ。それで夏休みに家に帰ったらぶん殴ってやるといったら、そばにいた死んだ祖父ちゃんが感激して、僕に握手を求めてきたんだ。祖父ちゃんはウォ・アボカド家始まって以来、初めてのキング・アーサーだったからね」

自分の場合はそれがあの女の人だった。

それにしてもあの人は一体誰だろう？　なぜか気になる。

ココロヨワミという幻覚魔法だとココはいう。すべては嘘幻、自分の心の声。人はいざとなったときに自分の心の声を聞くもの。だから引き継ぎには、その者の心の声がそのまま住み込むこととなる地区になるとか。ナオミの場合は『迷いの森の辺境伯』への恐怖が心に表れたのだろう。やはりあの女の人は幻影なのか。まったく不思議なことがあるもんだ。

キング・アーサー地区の異名は「勇気」だ。勇気にもさまざまな勇気があるが、ナオミの勇気は自分を信じるという、一番大切な勇気なのかもしれない。

「モードレッド！」

家宰の厳格な声が聞こえると、マルコ・パパティーノはヒューッと口笛を吹いた。
「ナオミ・ニトがモードレッド地区じゃなくて残念だよ」
ナオミはマルコの視線を無視した。
かわりにテルが右手の親指を下にむけて、彼女の返事とした。
「あの地区はね、別名『憎しみ』というのよ」とコクリコ・サクラダはいう。なるほど『迷いの森の辺境伯』の幻がなぜ見えたのか、ナオミはひそかに納得した。

クーデンホーフは次々に名前をすらすらと読みあげていった。
その度にトリスタンやガウェイン、ガラハッドなど各地区で歓声がわき起こった。鏡のなかで残っている生徒もごくわずかになってきたと思えば、やっと聞き覚えのある名前ロミオ・ロートレックという名前が呼ばれた。
「アイツはモードレッドだな、知ったかぶりだから」とテル。
「なんでそんなことというの、私たち仲間じゃないの！」
ナオミはぷりぷりしてテルを本気で怒った。
もちろんロミオ・ロートレックはナオミたちと同じキング・アーサー地区だった。ナオミはとても嬉しそうだったけれど、なぜかテルは舌打ちした。
「最後の一人、この子は転校生のハレルヤ・ヤドリギ」
クーデンホーフのその言葉にナオミとテルは度肝を抜いた。

少年はナヴァグリオに乗り損ねたので、別の方法でこの町にやってきていた。もちろんハレルヤは二人の期待を裏切らなかった、見事にモードレッド地区入りをはたした。
いやはやそれにしてもマルコ・パパティーノと握手をする光景ほど最悪なものはなかった。マルコがヴァンヌでカンペールの友人を待っているといったのは、このハレルヤのことだったのだ。
「君がいれば鬼に金棒だな、ハレルヤ！」

「僕らがタッグを組めば、キング・アーサーなんて毎日血祭りだよ」
少年はナオミと目が会うと、ニタッと不気味に微笑んだ。
ナオミは、きっと例のアレとやらを見つけるため、ヤドリギは自分を監視させるために少年をよこしたに違いない。あの嘘八百は何がなんでも、昔の栄華を取り戻したいのだ、とハレルヤを見つめながら思う。

クーデンホーフが「以上で終わりですわね」と魔法の鏡の天幕をはずしたとき、赤いビロード生地のなかでモゴモゴと「助けて！」と誰かが必死に動いている。悲鳴の正体はへっぽこ少年マイケル・コービーだった。
「まだ終わりじゃにないよ、僕を忘れないで！」
意外なことに彼はキング・アーサー地区の配属となった。
コービーは嬉しそうに右側の長椅子にかけだしたのはいいもの、誰かがさりげなく彼に足をかけた。そのせいでコービー少年は皆のまえですってん！　とこけてしまい、在団生たちは大爆笑した。
コービー少年は「…てへっ、こけちゃった…」と苦笑い、しかも少年が腰かけた長椅子はモードレッド地区の席だったため、彼らに悪態をつかれながらトボトボと恥ずかしそうに、キング・アーサー地区の席を探すはめになった。
コービー少年を最後に入団式と引き継ぎ式は無事に終わった。

各地区の入団生数はキング・アーサー八名、ランスロット八名、ガウェイン七名、ガラハッド七名、トリスタン七名、モードレッド十二人の合計四十九名だ。
「以上にて入団式と引き継ぎ式は終わります。卒団生退場！」
ユトレヒトの厳格な声が大広間に響いた。卒団生たちは大きな花束を渡され、入団生と在団生たちの拍手、今流行の吟遊詩人の歌に見送られ、大広間をあとにした。
トモロヲ・ブドリの祝辞、二回目とあって疲れているようだ。

「初めにアッパータウンへようこそ、入団生の諸君。次に大きくご入団、誠におめでとうと申しあげたい。今日は天気がよいことから、外で諸君の歓迎会をしようと思う。では皆さん、領主館のまえで会いましょうぞ」

「コホンッ、途中欠席は騎士メダル三枚没収だぞ！」

すかさずユトレヒトは声を張り上げた。

第３２話　ジョルジョ・パパティーノ副伯【１】

第３２話

領主館のまえはサッカー球場ほどの石畳の中庭だ。
彼らがここを通ったときはただの広場だったのに、戻ってくると赤い絨毯が敷かれ、百十数もの円卓が置いてあった。円卓にはシルクのテーブルクラスが敷かれ、真んなかにはずっしりと置いてある高級ヴェネチアンガラス――――赤や青、緑や黄など色とりどりの花々が生けられていた。領主館にはこの町の旗と紋章、そして各地区の紋章旗がかかげられて、玄関ホールにいた音楽隊もそばに控えており、まるでどこぞの舞踏会のようだ。

すでに歓迎会は始まっているようだ。
クリスマスもまもない冬の季節、広場は暖炉の魔法がかけられ、やわらかい蒔きストーブのような温かさがあった。社交ダンスを躍っている者や会話を楽しんでいる者、食べることに夢中になっている者、領主館前広場は騎士候補生たちで、わいわいがやがやとにぎわっていた。
「ねえ、ここ席が空いてるわよ」
声の主は猫目の女の子コクリコ・サクラダだ。ロレンツォも横に座っている。
「ようこそ、キング・アーサーは君たちを心から祝福するよ」
ナオミはロレンツォと改めて握手をかわした。

大人しくしているとギャルソンたちが、次々と銀色の大皿に料理を運んできた。とくに一番驚いたのは広場の真んなかにある大きな鉄板にのっけてある、野ばらダックの丸焼き入りというこの町の名物料理。

銀皿にはラムチョップからミートローフ、荒びきソーセージ、カモのフォアグラのココット仕立て、イベリコブタの煮込みトリュフ添え、うす焼きクッキーのキャビアのせ、ロブスターの姿焼き、ミートパイ、ホットドッグ、マッシュポテト、温野菜などざっと品目は五百種類はこえていた。

ナオミとテル、ロロはみたことのないご馳走に興奮のあまり、生唾を呑んだ。

ジョジョ・ダックスフンドは円卓の下で、尻尾をふりふりしている。いつまでたっても肉がこないので、ジョジョは主人に荒びきソーセージやスペアリブをとってよ、とナオミの靴をバシバシと前足で叩いていた。

円卓の下にはすでにジョジョが食い散らかした、肉の骨が十五本は転がっている。

明らかに肉の食べすぎだ。それでもジョジョは肉を要求するので、彼の健康を心配したナオミは銀皿にてんこ盛りにされた温野菜を円卓の下に置いてやった。ジョジョはムカッとしたらしい、温野菜の皿をそのまま返してきた。

「…だから僕はチビのままなんだ…」とダックスフンドはぼやく。

先生たちの来賓席は自分たちの円卓とは違って、豪華な長テーブルだ。

おしりから金の糸をだすという黄金蚕（ゴールド・ボンビュクス）のまゆで作られた、金銀のテーブルクロスは真昼の太陽を燦燦と反射して、とてもまぶゆいほど。そのなかで召使いのユトレヒトは途中欠席したものがいなかなど羊皮紙の名簿をみながら、いちいち人さし指で人数を数え、ぶつぶつと名簿と照らしあわせていた。

ピックル・タナカはこういう食事会は慣れているらしい——紳士らしく、首もとに柄つきナプキンをつけて、とても上品に食事をしていた。ときどき右肩にとまっている黒カラスにパンくずをあげて

いた。

長テーブルの真んなかには、威風堂々とした豪華な領主の椅子がある。椅子なのに威厳があるといってもよいぐらいだ。この町の領主トモロヲ・ブドリの椅子だろう――――だが領主館のまえで会いましょうといいながら、老伯爵の姿はどこにもみあたらない。

テルは急いで食べるあまり「をぉっっふぉ、おほ、おほ」と咳きこみ、皆から同情された。

そんな少年の言い訳は「僕は食道と気管が細いんだ」で、ジョジョは「ただ食い意地がはってるだけだ」とぼやいた。

「落ちついて味わって食べなさい、誰もとりはせん」

声の主はものすごい高いシェフ帽子をかぶった老人だった。

シェフと目があえば、ナオミたちは「あっ！」と驚きの声をあげた。それもそのはず、この老人はコックのようだが、じつは領主トモロヲ・ブドリその人だった。

「わしは美食家でのう、料理がちょっとした趣味なんじゃ。いや畏(かしこ)まった挨拶はいらん、無礼講じゃ。ほらっ、君たちは料理がまるで魔法みたいだと思わんかね？　怒った人や悲しい人、それから寂しい人も美味しいものを食べれば、素敵な笑顔になる。とても優しくなれる」

「なあ、伯爵」

ロロが二人の会話に割ってはいってきた。

「騎士メダルを集めるだけで、本当に騎士になれるのか？」

無礼講とはいえ、年上への敬語を知らないとみえる。

「むしろ騎士としての教育のほうが必要不可欠といえよう」

伯爵は騎士メダルが規定枚数に達していなくても、儀典特例として騎士に叙勲されることがあるという。メダルはあくまでも社交界でどれだけの人々と交流してきたかを問うものであって、ただの数

字にすぎない。

社交界とは上流階級や芸術家などの人々が集まり、交遊する場のことだ。ときに知的で洗練された会話や振る舞いをすることが求められる。ちなみに宮廷や貴族の邸宅を舞台にした社交界をサロンと呼ぶ。

「各サロンでは騎士の心得を学んでもらう」

領主館を仰ぎ見て、少年は唸る。

「残念じゃがそこは領主館であって、サロンではないのう」

「じゃあ、だったらどこがサロンなんだよ?」

ロロは少しイラッときている。

「ここがサロン、君たちの社交場じゃよ」

ロロはこの人のいうことがさっぱりだった。この領主館が社交場なのかと聞いてみればそこは領主館だという。さらに社交場はどこにあるのかと尋ねてみれば、ここが社交場だというのだから。

「この町そのものが君たちのサロンだよ。君たちはこの町から学ぶのじゃ、この町で生きている人々から紳士淑女に必要なことを学ぶ。小さな建物のなかで本から学ぶんじゃなくてね」

「だったら僕らは勉強しなくていいんだね!」

テルはとても嬉しそうな顔つきでいった。

「君のお父上も同じことをいっておったな、ウォ・アボカド」

さすが親子、血は争えんとトモロヲ・ブドリは優しく微笑む。

騎士候補生にとって町の人すべてが学びの対象だ。ブルトン人は一般世間のように一人の教師が三十人とか、四十人の生徒に教えるようなナンセンスなことはしない。人を教え、人を育てるからこそ常に一対一と向き合う。人格をもって人格を育てる、そこに子どもや大人というものは一切関係ない。それが俗にいう師弟教育、人間教育というものだ。

「わしらはこの方法を見習いと呼ぶ。生きかたを見て、そして習えとな」

そもそもナオミたちは見習い、親方の仕事を手伝うのが役目だ。

突然、テルがものすごい大きな声で叫んだ。

「仕事だって！　僕たち働くの？　それ、児童労働ってヤツだぞ！」

「町のところどころに文化人、芸術家、学者たちが住んでおる、学びたいときに名士宅（マエストロ）を訪ねればよいだけのことじゃ。諸君はすれ違う人々を教師と思いなさい」

ナオミはこれがブルトンの社交界なんだ、と今更ながら理解していた。

「引継ぎとは親方が住んでいる地区を引き継ぐことじゃ。君らの衣食住は親方が保証してくれるはずじゃ。騎士に叙勲されたら見習いは終了。では、頑張りたまえ」

円卓の騎士団とは基礎魔法教育組織の名前、実質的に教育を受ける場所は各貴族の領地なのだ。

アッパータウンというのは、アッパータウンの人々から騎士としての生き方を余すことなく学ぶところ、勉強したいときに勉強するのが本来、勉強っていうものかもしれない。

町そのものが大きな校舎だと思えばいいだけのこと、ロロはしぶしぶ納得できたようだった。町そのものが社交界であり、町の人々すべてが教師であるとは、いやはやブルトンの人間教育もたいしたものだ。この教育に学歴など無意味である。

第３３話　ジョルジョ・パパティーノ副伯【２】

第３３話

話が終わったトモロヲ・ブドリは、ナオミのそばにまん丸になって、スヤスヤと気持ちよさそうにうたた寝をしている黒ヤギを見て「報告は受けておる。孫娘はわしが預かろうかのう。ここまで連れてきてくれてありがとう。君たちに騎士メダル五枚！」と黒ヤギを抱きかかえて、右隣の円卓へと料理の評価を聞きにいった。

ロロは黒ヤギがテルのペットだとずっと思っていたらしく、驚いていた。

「あの、誰を探しているの？」

「ああ、アンナ・ハイネノハイネの仕事を引き継いだ男の子の見習いだよ、どんな子か知りたくてね」

食後のスイーツを運んできたギャルソンは、テルを探しているようだ。

「アスパラガスっていう名前らしいんだ。まさにシェフの従騎士（スクワイヤー）の名にふさわしい」

テル以外、皆が爆笑した。

「ウォ・アボカドならあっちの円卓にいたよ」

テルはムスッとして、ギャルソンに嘘をついた。

「もしかして君がテル・ウォ・メキャベツかい？」

「アボカドだよ…、っていうかメキャベツとアボカドをどうやって間違えるんだよ。同じ野菜なのはわかるけどさ、メキャベツって明らかに字体が違うじゃんか。テル・ウォ・メキャベツ、どんなにロールキャベツが好きなんだよ」

「まあ、次の子は冗談が通じなさそうだけど、素直そうだな」

ギャルソンは腕を組むとうんうんと頷いてみせた。
「ちなみに僕はキャベツが大嫌いなんだけどね」
目の前の少年がアンナ・ハイネノハイネの仕事を引き継いだことがわかったらしい。テルはギャルソンの隙をみて、銀の盆にあるリンゴをひとかじりして、そっともどした。
彼なりの報復とみてよさそうだ。

「ねえ、アンナ・ハイネノハイネの仕事って？」
少年はさりげなく聞いた。
「シャトー・ブルトンホテルの厨房での皿洗いやおつかいだよ」
（テルにぴったりな仕事じゃんか）と円卓の下のジョジョ・ダックスフンド。
「じゃあ、ウォ・アボカド。厨房で会おう！」
ギャルソンはテルと握手を交わすと、陽気な口笛を吹きながら、モードレッド地区の円卓にスイーツの銀の盆を運んでいった。
しばらくして「このリンゴ、誰かの歯形がついているよ」とマルコ・パパティーノの怒りの声が聞こえてきた。ナオミたちは笑いをこらえるのが必死、もうすぐで笑い死にそうだった。テルは口をもぐもぐさせながら（僕は作るよりも、食べるほうが好きなんだけどな）とボソボソと呟いた。

歓迎会も終わりに近づきつつあるようだ。
ナオミがアイスクリームを食べているとき、親方の話題になった。
「私は新聞記者の従騎士なの」とちょっぴり自慢げなココ。
「ロレンツォはどうなのさ？」テルが聞いた。
「僕は時計職人の従騎士だよ。そういう君はシェフの従騎士だったな。なんだか僕、お腹が痛くなってきちゃったみたいだぞ」
「うーん、私も毒をもられたみたい」とコクリコ・サクラダ。
「ふん、へんてこ生徒会のパッパラパーめ！」
テルは鼻を鳴らした。

食後の安らぎ、アールグレイの紅茶がギャルソンたちによって運ばれてきた。ナオミはなんだか眠たくなってきた。

来賓席ではホットワイン、夕焼け色に輝いているものを美味しそうに飲んでいた。ピックル・タナカは何回もおかわり、彼は黒カラスに好かれているらしくて、数羽のカラスが彼に群がっていた。ユトレヒトといえば英国王室調の顎髭を生やした、狐顔の金髪の男の人とおびえるように会話をしていた。

するどい視線、ビクッと思わずナオミは震えた。

顎髭を生やした狐顔の金髪の男がこちらを見つめたときだ、彼女は何といっていいものやら、言葉にならない果てしない憎しみ、いや憎悪をその人から感じた。殺意といっても過言ではない。あの目はお前がニト夫妻の娘か！　という目つきだった。

「ねえ、あの人は誰かしら？」

ナオミはロレンツォに彼のことを訊いてみた。

あの男はモードレッド地区子爵ジョルジョ・パパティーノ。パパティーノ兄妹がいばっていられるのは、あの親父のおかげだ。

「…あの人が小さな辺境伯、小モンテカルロ…」ナオミは呟いた。

自分の命を狙っている噂の暗殺者だ。

そして六人いる子爵のうちの一人にして、子爵の筆頭格だ。

仮に伯爵の身に何かあれば、彼が副領主としてアッパータウンを引率する。そもそも副領主は伯爵家の家政を取り仕切っている家宰が担うものだ。以前までこの地位にあった者は、ランスロット地区子爵のクーデンホーフだった。

「株券の問題で交代になったんだよ」

正確には株主序列の問題だ。

確かに数ヶ月前までアッパータウンの主要株主はブドリ伯爵、次

は家宰、その次はふくろう党だったが、誰も気がつかないうちにパパティーノは株をどんどん買占め、皆が気づく頃にはトモロヲ・ブドリに次ぐ大株主第二位にまで成り上がっていた。

その結果、株主序列により彼は副領主の座を手に入れた。

「それに息子のマルコはモードレッド地区の補佐役（デンコーチ）だしね」

マルコ・パパティーノが補佐役というのは驚きだ。

補佐役は生徒会長が直接指名するものだが、モードレッド地区の場合、親父が地区子爵だったこともあって、その息子マルコ・パパティーノが生徒会長のかわりに子爵自らの指名によって、補佐役に任命されたらしい。

「生徒会長もアイツの手下の呪いにかかって、今療養中だし」

キング・アーサー地区の補佐役ココの言葉だ。

生徒会がパパティーノの担当授業『悪魔祓いのいわれ』があまりに邪悪で、必要以上のことを皆に講義している、とトモロヲ・ブドリに告発したことを根にもっているとか。そのせいで生徒会長が病気に伏せているとは。

難しいことはナオミにはよくわからない。ただエンガチョのパパティーノの名前には要注意だ、という言葉が脳裏にかすんだ――そのときだった。

突然、ナオミの背後で憎しみがこもった声がした。いや頭の中からかもしれない。恐るおそる振り返ったものの、そこは自分の影しかない。

「もう一度、お前と会うなんぞ、思ってもみなかった！」

少女はカチン！　と固まった。

空耳？　まわりを見渡せば、誰もその声に気づいていない。

「いずれお前を殺す！」

憎しみがこもった声、男の人の声がまた聞こえてきた。

――――自分の声？　心の声か？

ナオミは両耳を両手で塞いで、ぎゅっと目を閉じた。すると声は止んだ。やはり空耳なのかしれない。

「きっと疲れているんだよ」ジョジョが気休めにぼやく。

でもこの声、聞き覚えがある。そうあの男、サンチョ・ボブスリーの声だ。

皆が紅茶を飲み終わる頃合をみはからい、シェフ姿のトモロヲ・ブドリが満足そうに声を張り上げた。その厳格な声に、石畳の中庭は一瞬で静まり返った。

「ここで町の新しい人事を発表させてもらう」

待ってましたばかりに赤毛のロレンツォをはじめ、皆が大きく拍手をした。

「サー・ピックル・タナカ、前任のパパティーノ子爵からの引き継ぎにより、悪魔祓いのいわれを担当してもらうことになった。パパティーノ子爵は副領主兼任のため、ご自分が経営されるカジノ経営に専念してもらう」

すぐさま騎士候補生たちの喜びの拍手が聞こえてきた。

ただマルコとリサ・パパティーノ兄妹がいる、モードレッド地区からは「この泥棒野郎！」とか「この町から去れ！」などの野次が飛びにとんだ。

「ほらっ、パパティーノをみてみてよ」とココのヒソヒソ声だ。

ジョルジョ・パパティーノ子爵は悪魔のような形相だ。

ピックル・タナカ先生に今にでも決闘を申し込むぞという感じで睨んでいた。以前は彼が悪魔祓いのいわれを担当していたのだが、あまりにも専門的に教えるため、いや正しくは生徒会の言い分を重

視したトモロヲ・ブドリは男の副領主の地位を立てにして、波風がたたないように担当を解任したようにみえる。

「最後に町壁をこえて、どうやって町壁をこえておるかは知らんが、迷いの森に無断に立ちいらぬことじゃ。迷いの森は禁断の森、あそこは死者の墓場――――幽霊の仲間になりたい人はどうぞご自由に。とくに赤毛の生徒会書記……」

トモロヲ・ブドリはお茶目な瞳で赤毛のロレンツォを見つめた。

「馬屋番のヨセフさんから、馬を勝手に持ちださないで下さいとのお願いがありましたぞ。自分の馬を持ちだすときはヨセフさんに必ず一声かけてくださいね。

それから入団生の皆さんの馬もすでに届いておるそうじゃ。落ちついたら見にきてくださいとのこと、また武器は兵舎の武器庫ロッカーへ、それ以外はつめこまないように。毎年決まって猫や犬など干物（ミイラ）とのご対面はごめんですぞ。入団生の皆さんは親方との顔合わせがあるので、最後まで残っておいてください」

ココは新聞記者の従騎士、聞くからにとても素敵で楽しそうな仕事だ。

自分は一体全体どんな素敵な仕事と出会えるのか、そんなナオミにテルは「きっと牛乳配達だぜ」と気分を台無しにする。

「校歌とともに解散」とトモロヲ・ブドリの声。

領主館前にひかえていた音楽隊は彼の合図とともに校歌を演奏、騎士候補生たちは校歌を口ずさみながら、ちょぼちょぼと石畳の大広間からいなくなった。

マイケル・コービーなんかは、自分は校歌を覚えてきたぞといわんばかりに大声で歌っていたので、テルは彼に「目立ちたがり」というあだ名をつけくわえた。

「そこの音痴の君、やめたまえ！」

ユトレヒトはつい口ずさみ、コービー少年は顔を真っ赤にした。そんな少年をブドリは「うむ、なかなか勇気がある」と反対に大きく褒めた。

「あとのことは副伯、頼みましたぞ」とトモロヲ・ブドリ。

副領主の座にある筆頭子爵を、副伯爵という意味合いから副伯と形式的に呼ぶ。子爵が伯爵の領地を下克上する場合、だいたい副伯による謀反の場合が多いとか。

「ええ。ご心配は不要ですぞ…」

ジョルジョ・パパティーノは野心家らしく、不気味に微笑んだ。

第３４話　ジョルジョ・パパティーノ副伯【３】

第３４話

数十名の入団生を迎えにきたのは腰抜けだった。
腰抜けの名はサー・ロエスレル・ドラゴンヌ。うっすらと不精髭を生やし、体型はすらっとしている黒髪の騎士だ。その昔はロドというあだ名で皆から、尊敬されていたものの、九年前から臆病風に吹かれ、いつかしらか腰抜けと呼ばれていた。
そんな彼もナオキ・ニトの親友の一人だ。
「…副伯閣下、場所は『剣と盾』でよろしかったですね？」
「そうだ、あとは内密にはこびたまえ」とパパティーノ副伯。
ドラゴンヌは何かにおびえたような口調だった。
男前なのだが、どこか頼りない。彼はパパティーノ子爵から小さな袋を受けとるやいなや、引継ぎがある新入団生四十九名のうち、ナオミたちキング・アーサー地区の総勢八名の騎士候補生を引き連れて、ごみごみした町のなかへと消えた。

アッパータウンは本当に美しい町だ。大きなまるい広場、荷馬車の露店商、それから路地を馬で散歩して歩く人々、大きな大聖堂もみえた。キング・アーサー地区教会と呼ばれ、キング・アーサー地区の人々の集会所だとか。
「ドルイド教の教会でもあります」
「ドルイド教って？」ナオミは首をかしげた。
それは一般世間に忘れられた、滅びかけたブルトン人の伝統ある宗教だ。ドルイド教の神官は樫の木の賢者という称号で呼ばれ、社会的最高地位にあって、賢者にして預言者、天文学者にして神官という立場にある。
またドルイド教の名の由来はそこからきている。

ドルイドの社会的役割は宗教的指導者にとどまらず、政治的な指導をしたり、公私を問わず争いごとを調停したりと、ブルトン社会におけるさまざまな局面で重要な役割を果たしていた。

ローマの将軍カエサル・シーザーが記した歴史書によれば、ドルイドの社会的影響力はかなり大きなものだったようである。必要があれば公然と裁判を開き、人々に賠償や罰金を課するという裁判長の役も担った。ドルイドは祭事を司り、政治の指導者でもある立法者だ。この政務や祭事を助けるのがウァテスと呼ばれる助手。ときにドルイドの代弁者も兼ねる。

「これらは現在、領主と副領主の仕事です」

「パパティーノが公平に人を裁けるのか、疑問だな」

テルがナオミたちの心を代弁した。

「パパティーノ卿はアグリッパ教徒ですから、関係ありませんよ」

副領主のパパティーノが唯一、興味を示さなかった役職だ。

そのおかげで家宰のクーデンホーフが変わりなく今もその地位にある。ドラゴンヌはブルトン社会にはドルイド教と非公式のアグリッパ教、この二つの宗教があるという。

ブルトン社会ではドルイド教を『聖教』と呼び、信仰者を聖教徒と呼ぶ。対するアグリッパ教は『悪魔教』と呼ばれ、聖教徒は彼らのことを悪魔教徒と呼ぶ。双方とも信じる者は神と悪魔と相反している。

ドラゴンヌの意外な言葉にナオミたちは言葉を失った。

「…あ、あのう。アグリッパ教ってどんなことするんですか？」

「悪魔崇拝ですかね」

なるほどアグリッパ教、非公式になるわけだ。

ブルトンホテル大通りではオープンカフェとかで、お洒落なテーブルや長椅子が所狭しと並べられており、紳士や婦人たちが腰かけ

てペチャクチャと会話を楽しんでいた。お洒落なパン屋や西洋菓子のお店など商店がずらりと立ち並ぶ。

「ねえ、先生。ちょっと見てもいいですか？」

やはりナオミも女の子だ。

「だめだ」といわれても、彼女は見たこともない風景に思わず立ちどまってしまう。ナオミとテルはドラゴンヌに何度も怒鳴られても、やはりその素晴らしい風景に足をとめているばかり。一歩歩くたびに何か新しい発見と出会いがあるのだからしかたがない。

この先の煉瓦大通りでは、きらびやかな軍服の騎士たちが隊列をつくり、馬とともに行進してきた。ナオミたちは通りからはずれた、せまい横丁へとはいった。

横丁では賑やかに昼市が開かれていた。

「今夜の夕食にどうだい！」

「お姉さん、美人だからまけとくよ。犬も一緒だからさらに値引きだ」と値引き対象とあって、ジョジョは「失礼なおっさんだ」とぼやいていた。

市場は野菜や豚肉、鳥肉を売っている屋台でひしめきあっている。どこの町にも市場をお祭りと勘違いしている、近所迷惑な連中がお客のなかには必ずいるものだ。ここにもそんなはた迷惑な連中がいた。酒に酔ったならず者が決闘を挑んでいた。

「やっちまえ、ジョージ！」

「てやんでい、負けるな。ヘンリー！」

こんな野次が飛びかうなか、決闘者たちは相手に一礼、つかつかとその場から十二歩ほど静かに離れた。決闘の武器は片手ピストルだ。介添人らしい男が「いいね？　一発かぎりの勝負だぞ」と呟くと、双方とも黙って頷く。

あれれ？　野次馬のせいでいつのまにかドラゴンヌと別れてしまったぞ。

路地裏は見物客でいっぱいだ。決闘というものは人目にふれないところで、夜明けに行うものが通例であるのだが、若さゆえの愚かさ、成りゆきでこうなったのだろう。しかし後先考えない若さなど、愚かさ以外なんでもない。

男たちは位置につくと、もう一礼した。

「若さというものは恐れを知らない。ある意味、愚かな罪だ。で、君らはその彼らの決闘をおもしろおかしく書き立てるわけだ。売文主義は社会のゴミだよ」と町医者らしい、決闘の介添人は隣の男に嘆いていた。

「ホーエンハイム先生。それが新聞というものです」

「というがね、悲しい記事など誰も読みたいとは思わんよ」

野次馬で声が消され、ボソボソ声で介添人とこんな会話をしているのは、この町に本社がある出版最大手の毎日ブルトン新聞社の記者の一人だ。記者から医者と呼ばれた介添人は、ナオミの肩にそっと手をおいた。

「お嬢さんたち、決闘という人を傷つける愚かな行為をよくみておきなさい。人が人を殺そうとすることが、どんなことなのかを心に留めるために」

「は、はい」

ナオミの返事が終わるのを待っていたのかのように、すぐさまあたりにドーンッ！　というピストルの音が鳴り響いた。ヘンリーと呼ばれた男が「…グフッ…」と路地裏に無言のまま倒れこんだ。

「キャ――――ッ」すぐさま悲鳴が飛びかう。

周囲が騒然となるなか、介添人はすぐに近寄り、どこを撃たれたのかを訊いていた。外科医らしいこの介添人は「腹部かね、うーむ。全治三ヶ月」と診断。

すぐに「誰かこの愚か者を私の診断所に運んできてくれないかね？」と大声で救援を頼んだ。何人かの男たちが名乗りでてくれたので、ナオミはホッと胸をなでおろした。

「ねえ、ドラゴンがこっちを見ているよ」

ジョジョが興奮冷めきれない声でナオミにいった。

「もーう。ドラゴンヌよ」とナオミが「ヌ」をつけくわえた男は、野次馬をかきわけ、ずんずんとやってきた。

「決闘なんて子どもが見るものじゃない、『剣と盾』じゃ、君たちがくるのを皆、首をながくして待っているんだぞ」とは三人の手をギュッと強くつかむ、と市場のにぎわいや人ごみからひっぱりだした。

四人と一匹は市場の裏通りを寂しく歩いていく。

裏通りには市で売るための商品を運んできた、荷馬車がいくつかみうけられ、古びた一日預かりの馬屋からは馬のいななきが聞こえてきた。

薄汚れた路地、ところどころにある水たまりからはポチャンッと魚がとびはねた。狭い横丁にはいれば、それはほかの横丁とは違って、昼間だというのにうす暗い。下町というか、どことなく不衛生で不気味だ。テルがロロの後ろにそっとまわって「わっ！」と声をあげた。

「ウゲェ！」

瞬時にテルの悲鳴が聞こえた。

ロロの拳が少年の脇腹に容赦なく食い込んだのだ。いつもすましているロロでさえ、緊張してこのザマだ。ナオミは大声に驚いてロロに抱きついたし、ジョジョなんかはもうすぐで逃げだしそうにな

った。

ドラゴンヌは文字通り腰が抜けそうになった。

「悪ふざけもほどほどにしなさい。君から騎士メダル一枚没収だ」

テルの舌打ちが聞こえた。二、三分ほど歩いたところで不精髭のドラゴンヌは「さあ、ついたよ。このなかにはいるんだ」と低い声でいった。

古びた戸口のうえにあるカボチャのランタンが、蔦の葉にまみれた看板を照らしだし、看板には『剣と盾』という消えかかった、文字がうっすらと書かれている。そよ風とともにカサカサッと揺れる蔦の葉――――これらが『剣と盾』の不気味と陰鬱さを物語っているといよう。

円窓からは温かそうな光がにわかに優しくもれている。

ドラゴンヌが戸口を勢いよく、咳き込むように激しく、ドンッ、ドンッと叩けば、キィッーと木戸は古びた音をたてて、そっともの静かに開いた。そして色の黒いいかにも悪党顔の男がぬっと顔をだした。

「最後の三人を連れてきた、市場見物していたんだ」

「それはご苦労さんだったね」と男はそれだけいうとナオミとテル、ロロを家のなかへ手招きした。

恐怖のあまりすくみあがった三人、その背中に「どうした、さっさと入りなさい」と腰抜けが声をかけた。三人は押しこまれるようにして、足を一歩づつ踏みだす。それにしても『剣と盾』は黒い霧の香り、危ない香りがする。

彼らがはいったところは狭苦しい殺風景な宿屋だ。奥にはカウンター席と粗末な円卓、長椅子だけしかない。一瞬、ナオミは空き家かと思ったほどだ。

「そうびくびくなさんな。我らのサー・ロド、偉大なる白銀…」

円卓に腰かけて、ラム酒をちびちび飲んでいた数人の男はゲラゲラと大笑い。

「…あ…ああ。か、からかうのはよせ…、普通の名前で呼べ…」

かつての自分のあだ名であったことを忘れたような、言葉の響きだ。人はきっと腰抜けになると昔の栄光を忘れてしまうのかもしれない。昔の栄光にしがみつくのも情けない話だが、自分の歴史を忘れるのも悲しい話だ。

歴史は、歴史だから歴史なのだ。忘れてはいけない。

「…ところで聞いていると思うが――――これは例のものだ…」

ロエスレルはパパティーノから預かった小袋を男に手渡した。荒男は小袋のなかから、一枚のミスリル金貨を取りだして、そのはしっこをガキッと勢いよく噛んだ。

「……」

「申し分ない、まえよりも精巧な造りだ」

「親方が迎えにくるまで、それまで大人しくしておくんだよ」

ナオミは用事が済み、急いで外にでようとするドラゴンヌを呼び止めた。

「まだ僕に何かようかい？」

サンチョとサラの右胸に拳をあてる行為を思いだしたのだ。

父の友人に共通するものといえばあの言葉だ。ナオミが「『ロアゾン』とともに」と右手を左胸にやれば、ドラゴンヌは見てはいけないものをみてしまったと顔色を真っ青にして、『剣と盾』からひょろひょろとでていった。

一体全体どうしたというのだろう？　あのかわり具合は異常だ。

「きっとお腹が痛くなる『呪い』の言葉かなんかだよ」

ジョジョの言葉はあまり当てにならない。

「さあ、お前らついてくるんだ」そういうと男は立ちあがり、右手

に鍵の束、左手にカンテラをもって奥の部屋へとのっしのっしと歩いていった。

宿屋の主人は力をいれて、落とし戸を持ち上げた。

なかは真っ黒な地下室のようだ、左右の壁には魔法によって、キノコが電球のようにうっすらと鈍く光っている。いやぼんやりとなかを照らしている。

男は親指をたてて「なかへはいれ！」という合図をした。

「…ガキども、さっさと階段をおりろ！」

「あ、あの…。暗くて何にも見えないんですけど」とナオミ。

地下室への階段を躊躇しているナオミに、宿屋の主人は険しい顔になった。

「そのうち目がなれてくる。おい、さっさとしろ！」

男は甲高い声をあげ、つりあがった瞳をギロリッ、と眉間によせた。何とおぞましい顔つきなことか。きっとこんな面を悪党面と呼ぶんだろう。大人気なくも右手には拳銃（ピストル）をちらつかせている。これ以上、この男を怒らすことは得策じゃない。

三人と一匹は慌てて階段をおりた。テルなんかは途中で思いっきり転んでしまったようだ。それからすぐにガチャン！　と扉がしまる音が三人の耳に聞こえた。暗闇に目がなれてくると、白い目玉がギョロギョロと動いているのがわかった。

暗闇のなか、子どもたちはお互いによりそっていた。

なかには不安げにあたりをみまわす子、しくしくと泣きだす子もいた。その頼りない声には聞き覚えがある。きっとマイケル・コービーに違いない。

「拳銃で子どもを脅すなんて信じられないよ」

抵抗するにも抵抗できない、とテルの不満が聞こえてきた。

不安なあまりナオミがロロにすりよれば、ロロは彼女の腰にさり

げなく手をまわす。テルは気づいていないようだ。ロロの温もりが、体と心が冷たくなったナオミにじーんと伝わってきた。

ナオミはそっと顔を赤らめた。

自分は一体なにを期待しているのだろう？

するとジョジョがまぜてとばかりに、二人のなかに割りこんできた。

「…ねえ、ナオミ…」

少女は黙んまりを決めこんでいる。

「僕、一日もここにいればモグラになっちゃうよ」とジョジョ。

「ジョジョ、あんたっていつもこうなのね」ナオミのあきれ顔。

犬といえども親代わり、さすが侮れない。

第３５話　親方騎士【１】

第３５話

「マイケル・コービー似って自慢になるじゃん！」
理科の実験でヒキガエルを解剖しているときだった。
親友の秋山亨（あきやまとおる）が去年、赴任してきた米国（アメリカ）人英語教師のマイケル・コービーに似ているっていわれ、（そういえばそうだな）と思う。
新渡勇人（ユージン・ニト）は声をあげたときに力がはいったのか、ヒキガエルの後ろ足をメスで切り落としてしまい、それを隣の班の桜田香織に背中に投げ入れたのが、いけなかった。

「ユージンなんか死ねばいいのに！」と桜田香織は半泣きで騒ぐものだから、勇人はすぐにクラスの女の子の敵になってしまった。
「ほんと！　全世界の女の敵よ」
勇人も負けずに言い返した。
「そんなことというヤツには、ウシガエルをランドセルに入れてやる。授業中にガトゴトッ、ランドセルが動くんだぜ。先生なんかポルターガイストだ！　って叫んでいたな」
「やっぱりそうなのね！　犯人はあんただったのね！」
「ユージンって嫌なヤツ！」
また夢を見ている――――新渡勇人の。一五〇年後の未来の夢、何だか不思議な感覚だ。アレ？　誰だろう。くすぐったい。誰だ、自分の頬を舐めるのは。

「…ねえ、ねえってば！」
ジョジョのざらざらした舌のおかげで、ナオミは悪夢から目を覚ました。正直、吐きそうな気分だ。新渡勇人という名の少年、自分

とどんな関係があるのか分からないが、何とも目覚めの悪い夢のことか。ウシガエルをランドセルってなかに入れてやるって、本当に最低なヤツだ。

あれからどのくらいの時間がたっただろうか。そっと耳を澄ませばボーン、ボーンと遠くから鐘の音が聞こえてくる。

「ここにきて十二時間もたつよ。あとちょっとで僕、モグラになりそうだよ」

ジョジョは黒い犬だから、いつの間にか身体は暗闇にまぎれて、目だけがギョロギョロと不気味に動く。ちょっと怖い。

一度、起きてもなんせまわりが暗いがため、また長旅の疲れが残っていたのか、すぐにもう一度寝入ってしまったのだ。ジョジョのいうとおり半日はすぎたはず。それにしてもいつになったら親方たちは迎えにくるのだろう――――とナオミが思った頃、地下室に明るい光がさしこんできた。

ついでに太い男の声が聞こえてきた。

「犬の声がしたぞ！　おい！　ここに誰かいるぞ！」

「おい、君たち！　騎士候補生かい？」

立て続けに声が聞こえてきた。ようやく迎えがきた！　と思ってよさそうだ。

ナオミの「そうです」との寝ぼけた声に、声の主はホッと胸をなでおろしたように「あがってこれるかい？」といった。男の声に導かれて、ナオミたちは順番に地下室からでてきた。するとそこにいた大きな男たち十数名は「うわあー」と歓声をあげた。幾人かは万歳をしていた。ナオミたちは何がなんだか分からず、ただ呆然と突っ立っていた。

「まったく騒がしい連中だな」とロロ。

「うーん。ここどこだっけ？」テルは寝ぼけているようだ。

ナオミはこの歓迎ムードはなんだろう？　と遠慮がちに訊いてみた。

「あ、あの…。ど、どうかしたんですか？」

「『どうかしたんですか』だって？」

思わず大きな男たちは驚きの声をあげた。

「君たちは誘拐されていたんだぞ」と険しい声。

「誘拐だって！」

大きな男たちは身分証をみせたあと、自分たちはこの町の刑事、アッパータウン警察署の者だと説明した。

ことのはじまりは作日の今頃、サー・ドラゴンヌが親方との顔合わせのため『剣と盾』という宿屋に、自分たち騎士候補生を連れていったときからだという。宿主に自分たちを預けると、彼はせかせかと出ていってしまった。それからちょっと遅れで親方たちが顔合わせのため、領主館前の広場にやってきたものの、入団生は誰ひとりいない。

「副伯、引継ぎの騎士候補生が誰一人いないんだがね？」

親方の一人リンドバーグが唸った。

「寝ぼけるのいい加減にしろ、パン屋。顔合わせは各地区とも場所を指定していたはずだが？　お忘れか？」

パパティーノによれば、キング・アーサー地区の騎士候補生の顔合わせは、『剣と盾』で行うと事前に報告していたとか。

親方たちはそんなことは聞いていないと抗議をしつつも、急いでその宿屋へとやってきた。だがそこでもナオミたち、キング・アーサー地区の騎士候補生の姿はみあたらない。そもそも『剣と盾』という宿屋は三十年ほどまえに潰れてしまい、今では立派な空家になっていた。

「それからすぐに領主館宛てに、『黒猫』の名前で誘拐の手紙が送られてきたんだ」

「黒猫？」
ナオミは首をよこにかしげた。
身代金は金貨一千万枚、小さな町が買えるほどの大金だ。
トモロヲ・ブドリはどこからかその大金を用意して、犯人たちと交渉した。半日ほどたって、領主館宛てに手紙が送られてきたという。その手紙にはナオミたちの居場所が記され、身代金の金貨一千万枚は気が変わったからいらないと記されていたか。

「まったく君たちのおかげで、今の今まででてんやわんやだったんだが、誘拐犯も気まぐれなヤツだよ。自分で身代金を要求しておいて、半日後にはもういらない。人質も解放するから迎えにこいだ。ただあそこにいた怪しい男が一人、先ほど重要参考人として当局が連行したそうだがね」
そこにいた男が誘拐犯かどうかはわからない。
刑事たちは「愉快犯的な犯行なんぞに時間はさけない。この事件はおそらく迷宮（おくら）入り入りするだろう」と唸る。
「きっと途中でビビっちゃったんだよ」テルの声だ。
「あっ、それってテルにそっくりじゃんか」とジョジョの声だ。
「黙れ、ダックスフンド！」

騎士候補生たちが宿屋『剣と盾』をでれば、たくさんの人々が待ち構えていた。
毎日ブルトン新聞社の記者も幾人か見受けられ、ナオミたちはいろんな取材を受け、たくさんの写真も撮られた。テルは「僕たち新聞に載るんだ」とはしゃぎ、野次馬のなかにはロエスレル・ドラゴンヌやピックル・タナカの姿も見えた。ドラゴンヌは彼女たちが自分に気がつくと逃げるようにこの場を去り、それを追いかけるようにピックル・タナカもあっというまに姿を消した。
「きっと心配して見にきたんだ」
すると男がナオミに声をかけてきた。

「君がココがいっていた、ナオミ・ニトだね？」

ナオミが「はい」と小声で返事をすれば、男は「ヒューッ」と口笛を吹いた。この人は決闘のとき、町医者と世間話をしていた毎日ブルトン新聞社の記者だ。新聞記者は今まで親方たちの取材をしていたらしく、シャトー・ブルトンホテルの酒場に親方たちがいると、わざわざ教えてくれた。

「ああ、この先のアッパータウン証券取引所を右に曲がったところだ。え？　なんで僕がココを知っているかって？　彼女は僕の従騎士だからだよ」

記者がいうには一日遅れの親方たちと顔合わせとのこと。

でも今はそんなところではない。つま先立ちで彼らを一目みようとしたり、「もう新聞読みました？　身代金一千万金貨ですってね」とか、「まったく今年の入団生は問題児だらけだな」との囁きの声が聞こえた。いてもたってもいられず、ナオミたちは野次馬をかきわけて「それっ、逃げろ！」とその場からかけ足で逃げだした。

途中、アッパータウン証券取引所と書いてある威厳ある建物からでてきた、三人のサラリーマンたちの会話にナオミの耳がピクッと反応した。

一体全体どんな会話といえば、こんな会話だった。

「トモロヲ・ブドリ伯が用意した金貨一千万枚、あれはこの町の有価証券を売ってこしらえた金貨、買い手はパパティーノ卿だ。これであの副伯閣下は筆頭株主のトモロヲ・ブドリとほぼ肩を並べたわけだな。一番目になるにはあと五十万株、ミスリル金貨百万枚ほど足りなかったとか」

「前々からパパティーノ卿が伯爵の座を狙っていたのは有名だよ」

「もしあの人が一番目にでもなってみろよ、この都はあの人のもんになっちまう」

「いやはやそうなればすぐに引っ越しせねば……」

筆頭株主が入れかわるってことは領主が入れかわるってこと、領主が入れかわるってことは市の経営者が入れかわるってこと。そうなればモードレッド地区のように治安が悪くなってしまうとか。それならいっそのこと、思い切って倒産させてしまえばいいとか――そういう難しい話だった。

「パパティーノ卿は株券を買えるほど金持ちだったかね？」

「あそこはカジノが地場産業だと聞いたがな。うーん、偽金でもつくっているんじゃないのかね、あの人ならやりそうなことじゃないか。でも株券を購入した金貨は正真正銘、本物のミスリル金貨だったよ」

「それもきっとイカサマして、こしらえた汚れた金なんだろうよ」

第３６話　親方騎士【２】

第３６話

木枯らしとともに冬の寒さが身にしみる。

ナオミたちの影法師が長くのびる。あちらこちらで小さな明かりが灯り、建物からもれでた明かりはアッパータウン全体が幻想的な光に包みこんでいる。空を見上げれば一番星がいつのまに輝いていた。

シャトー・ブルトンホテルはその名にふさわしい豪華なホテルと酒場、町の名士たちが集まる社交場だ。ナオミたちを最初に迎えたのはドアマンだった。

「ああ、君たちは――無事だったんだね。そりゃ、よかった。親方たちは手前の酒場のほうで一杯、酌み交わしているところだ」とわざわざ彼らを酒場まで案内してくれた。酒場ではドアマンに誰一人振り向こうとはしなかったが、ナオミたちの姿が見えると、ぴたりと親方たちは喋るのをやめた。

「おーい、みんな。下宿人がやってきたぞ！」

赤鼻の親方が酔っぱらいながらいった。

「どれどれ！」

「ほう、元気そうなのがいっぱいじゃねえか！」

「あらっ、本当ですわね」

「あのミニチュア・ダックスフンド、生意気そうよ」

キング・アーサー地区の新しい引継ぎは合計八人だ。

親方たちは品定めでもするようにもう一度、ナオミたちを見つめた。そしてすぐに紙切れを取りだして、自分たちが面倒をみなければならない、騎士候補生たちの名前を呼びはじめた。

マイケル・コービーは牛乳配達の親方だったので、テルは「ぷぷ

ぷ、君にお似合いじゃないか」と吹きだしてしまった。そういうテルは料理職人の親方、ロロは呪術師の親方だった。

ナオミの親方はまだきていない。

（もしかしたら、もう違う子どもに手伝ってもらっているから、君は間に合っているといわれるんじゃないか？　もしそういわれたらどうしよう）

彼女の思いとは違って、ナオミたちが見つかったという噂を聞いて、続々とブルトンホテルの酒場に親方たちが集まってきた。

美しい女の人から二枚目の男の人、大きい人から小さい人、意地悪そうな人からとても優しそうな人、その数ざっと八名だ。どの親方も仕事帰りや仕事の途中らしい、皆各々の仕事のにおいがした。

油くさい人や砂糖のかおりがする人、シャンプーのにおいがする人、香ばしいかおりがする人、いろいろのにおいが混ざりあい、ナオミはちょっぴり気分が悪くなった。鼻がもげるじゃんか、とジョジョもぼやいた。

一人の親方が息をきらして酒場にかけこんできた。

「おーい、こっちだ、こっち！」酒場の主人は元気よく手招きする。

この人は土と花のかおりがする。男はすらりっと痩せていて、鼻眼鏡をかけ、顔の大部分を覆うような髭、カストロ髭を生やしていた。どことなく人がよさそうな感じがする。

「ああ、ティソ親方か。あんたが一番最後の親方だよ」

「…こ、これでも急いできたつもりさ」

ゼェッ、ゼェッ、と肩呼吸をする息苦しいそうなティソ親方。

酒場の主人は顔いっぱいに笑みを浮かべて、常連客にがっしりと握手をした。

「ナオミ・ニトって女の子はいるかね？」

「親方の目の前にいる子だよ」

酒場の主人はナオミを親指でさした。
この人は見覚えがある――――引継ぎ式のとき、広間で自分たちに話しかけてきた人だ。
するといきなりティソ親方はナオミの身体をべたべた触ったので、少女はつい親方に「スケベ！」と平手打ちをかましてしまった。ティソ親方は「なるほど元気そうでなによりだ」と打たれた頬をなでながらいった。
「よし、合格だ。こんなに元気なら問題はない」
「俺もこいつのほうがいい、このガキと取りかえようぜ」
ピーター・ティソ親方にナオミとロロを取りかえてくれ、と頼んできたのは呪術師の親方マルボロ。彼はナオミの腕をギュッとつかんではなそうとはしない。
「冗談はてめえの顔だけにしろ」と不愉快そうなティソ親方。
「そうだよ、バーンズ。その子はティソ親方が面倒みることになっているんだぞ」
「こんなすかしたガキはいらねえ。どうせ歯向かうのは目にみえているからな」

マルボロ親方の顔は悪魔のようで、おぞましい人相だ。
バナナのような細くて、えらがはっている。呪術師というだけあって、顔の右半分は焼きただれ、右目を眼帯で覆い隠している。もしかして呪い負けしたのかもしれない。そんな悪魔のような顔が嫌がるナオミを引きよせるものなら、ジョジョが今にも噛みつくぞ、とばかりに唸りだした。
「わん公！　唸ってもだめだぞ、こいつは俺のもんだ！」
「あきらめも肝心だぞ！」とティソ親方。

するとマルボロはコホンッと咳払い、ロロをチラッと見て、とばけた声でいった。
「こんなもやしみたいなガキなんぞ、お前のとこの役たたずのへの

へのもへじで十分だといっているんだ。そうそう、てめえの息子はまだ生きてんのか？」

「バーンズ・マルボロ！」

ティソ親方の叫び声が酒場中に響く。

「あ、あの子をあんな身体にしやがって！」

リンドバーグは事情を知っているらしく、悲しそうに床に目を伏せた。

「証拠は何もねえんだ。それにあれは事故だ。裁判でもそう判決がでただろーが！」

「悪魔転生の人体実験だと聞いたがな！　このくされ外道が！」

「ほーう、いってくれるじゃねえか」

たちまち二人は睨みあい、緊迫した空気が流れた。

「おい、親父。こいつの家のそばに住んでやがる、藪医者を今すぐに呼んでこい！」

いきなりマルボロが腰から剣を抜いた。

「それにはおよばんよ」と酒場の主人がいい終わるまえに、酒場に集まっていた親方たちはそろって剣をぬき、マルボロを取りかこむように剣の先を彼にむけていた。

酒場は一瞬にして静まりかえった。

「…いつからてめらはヤツの手先になったんだ、え？」

緊張した雰囲気のなか、ナオミたちは事の成り行きを静かに見守っている。

「手先になった覚えはないが、お前の味方にもなったつもりねえ。ただお前のこういうやりかたには、もううんざりってのが皆の意見だ。どうしてもっていうなら、皆でお前を串刺しにするしかねえな」

ぷんぷんと香ばしいかおりがする親方が皆を代表していった。

「くそったれ、パン屋のくせにでしゃばりやがって！」

呪術師の親方バーンズ・マルボロはぶつぶついいながら、剣を鞘

におさめた。
「ふん、そもそもお前がすかしてやがるから悪いんだ！」
その言葉にロロがキッと睨めば、マルボロは少年の頬を思いっきり殴った。八つ当たり以外になんでもない――――ナオミは一瞬、ヤドリギ夫妻を思い出した。
「さあ、親方ども！　早く従騎士（スクワイヤー）の契りを結んでくれや！」
酒場の親父の言葉に騎士親方たちは「そうだった」と互いに頷いた。

騎士候補生たちは、お互いに背中を向けて円陣を組まされた。そのまわりを親方騎士たちが囲みはじめた。頃合を見計らって酒場の明かりが一気に消えたと思いきや、親方たちが一斉に同じ文言を呪文を唱えはじめた。

我ら親方騎士（マスターナイツ）、汝らの守護者（ガーディアン）とならん。
汝らよ、誓いたまえ。我らの忠実な従者であらんことを。

我らは汝らに誓いをたてん。

呪文、いや誓いを立てた瞬間、親方たちは人差し指と中指をピッと立てて、自分が面倒をみる騎士候補生の額にそれぞれが指をあてた。
その瞬間、ナオミたちの周りに光の神聖文字（ルーン）が頭に円を描くように浮かび上がり、親方たちが「我ら一同、ここに誓わん」と声をそろえたとき、騎士候補生それぞれの額に光が奔った。額には十字剣の痣がうっすらと刻まれた。
「…汝らの従騎士契約は無事に交わされた」
酒場の親父の説明によれば、これは契約の魔法だとか。

騎士候補生が一方的に契約を反故にした場合、もしくは親方に逆らったり、親方のもとから逃げ出した場合、額の十字剣が熱を帯び、その者を苦しめるとか。

「元々は奴隷や囚人に使う、脱獄防止のための黒魔法なんだがね。まあ、これで君たちは騎士に任命されるまで、親方に忠誠を誓わざるえないし、親方は君たちの後見人になったわけだ」

「へえっ、犬の首輪みたいじゃん」とジョジョはぼやく。

体よくいえばそうかもしれない。

さて店に光がもどれば、酒場の親父は「今日は入団生諸君との初めてとの出会い、祝い酒だ」と静まりかえった酒場の雰囲気を盛りあげた。数分後には酒場はわいわいがやがやとにぎわってきた。

酒場の主人は親方たちにせっせと酒をふるまい、忙しそうだ。マルボロは酒とともに愚痴を飲むように心がけているようだが、やはりどことなく不満とあって、ぶつぶつと愚痴がこぼれていた。彼の右隣はパン屋、このパン屋は領主館で出会った足長の親父と呼ばれていた人だ。

その隣はピーター・ティソ親方だ。親方は気分を悪くしたのか、一杯だけ黄金色のぶどう酒をひっかけ、急いでいるとばかりにカウンターに酒代をおいて席をたった。

「タダ酒は俺の口に合わなくていけねえや」

「まあ、そういわずにティソ親方。せっかくリンドバーグ親方のおごりなんですから」

「どうりでパンの味がするわけだ」というと、テーブル席で酒を飲んでいる親方たちに手をふり、カウンター席の後ろに立たせていたナオミに「来るんだ！」と声をかけた。

「あいつはへそ曲がりやだからな」とパン屋の親方。

ナオミはテルやロロのほうをみた。

ロロは青ざめた顔つきで、呪術師の親方バーンズ・マルボロの傍でつったっていた。ナオミはこんなロロの悲しそうな顔を今までみたことがなかった。まるで逃げられない、逃げ場がどこにもないことを悟った奴隷のようだ。絶望という名が彼に襲いかかる。

二人はしばらくのあいだ、じっとお互いの瞳を見つめていた。じわりっと涙がにじみでてくるのが何となく分かった。お互いに涙をこらえているのだろう。それを粉砕するかのように麦酒をちびちび飲んでいる、マルボロはいった。

「ここをでちまえばすぐにサヨナラさ、もうお前たちと二度と会うことはねえ、たんまり別れを惜しんでおくんだな」

「そんなことないもん。だって勉強しなきゃ、いけないもの」

「ケッ、勉強なんてもんは死んでからすればいい！」

ナオミはムッとしながらも怒りをおさえて、彼の住所を訊いた。

「さびれ横丁って？」

「それぐらい自分で探すんだな」

マルボロは意地悪そうな目つきでナオミを睨んでいた。

酒場の主人はこれ以上、ピーター・ティソ親方を戸口のところで待たせているのは、申しわけないと思っただろう。彼はナオミにボソボソと呟いた。

「こいつが住んでいるのはキング・アーサー地区の墓地通りにある、さびれ横丁という文字どおりさびれたところだ。でもあのあたりは幽霊のたまり場だから物騒なところだ。悪いことはいわない、夜はあまり出歩かないほうが身のためだよ」

戸口のところに立っているティソ親方は短気者らしく、「早くしろ、俺はとんまが大嫌いなんだ」とナオミを大声で呼んでいた。

彼女は酒場の主人にお礼をのべて、ロロとテルにおぼろげながらに手をふると、シャトー・ブルトンホテルをあとにした。彼らのあ

とをのそのそとダックスフンドがついていく。
「ねえ、ジョジョ。あのとき助けてくれてありがとうね」
「もしあいつの腕を僕がかじっていたら、今頃は僕、ハンバーグ用ミンチになっていたと思う。だってあいつの目、相当ヤバそうだったもん」

第３７話　親方騎士【３】

第３７話

カストロ髭の親方はゆっくりと歩きだしていた。
ナオミは親方と一緒にならび、ダックスフンドはその後ろをトボトボとついていく。大きな影と小さな影、さらに小さな影が寂しくなった通りに映える。
息を吸うたびに肺が痛くなる。急激に冷えこんでいるだけあって耳も痛い。いや痛いのは肺や耳だけじゃない、なぜか心も痛い。これは寒さが原因じゃない、原因はわかっている。きっとロロとテルとの別れかもしれない。ジョジョは気のせいだとぼやくけれど。

アッパータウンは小高い丘の都だ。
五百ものぼり階段やくだり階段があり、大小あわせて二百もの小路、五十もの大通りがあった。袋小路なんかはゆうに百を越え、通りの名前を知らせてくれる、標識がわりの壁に顔がついた「嘆きの壁」などは数え切れない。
彼らは壁画職人の手によって生まれるそうだが、この壁は目のまえを行き交う人々をキョロキョロとみている大人しい壁だ。もの静かに瞳をとじて、眠っているときなどは本当にただの壁にしかみえない。ティソ親方によれば、道に迷ったときなどこの壁に尋ねれば自分のいる住所を教えてくれるとか。また厄介なことにこの壁のそばで人の噂話や悪口をいうものなら、三日にしてそれが町中に広がってしまうらしい。
「こいつには気をつけるんだ」
「どうして？」
「ときどき嘘をつくときがあるし、夜など一人で歩いていたら脅かすんだ。それぐらいならかわいいもんだが、夜警の手下だから悪さ

をするもんなら、すぐに大声をだしてヤツらを呼ぶんだ」と歩きながらピーター・ティソは町のあれこれを説明してくれた。おやっ、どこからかボソボソ声が聞こえてきた。

声の主は噂の嘆きの壁だった。

「カストロ髭！　誘拐は犯罪だぞ！」

「黙れ、嘆きの壁！　顔にペンキでも塗られたいのか、本気だぞ！」

「ほーう、落書きは罰金、銀貨十二枚。夜警にいいつけてやる」

ティソ親方は嘆きの壁の口にポイッとごみを捨てた。

「ポイ捨て禁止だぞ！」

嘆きの壁など無視して、親方はまっすぐブルトンホテル大通りを右にまがった。

ダックスフンドは縄張りづけのために、さっそく嘆きの壁ににおいづけをすれば、「あっちの壁でしろ！」と壁は怒鳴った。

「ここからはキング・アーサー地区だ、よく覚えておくんだぞ」

ナオミは何度も何度も足をとめては、隣町からの荷物を運んでいるトラックに瞳を輝かした。つばの長い黒ハットをかぶった夜警たちの姿、ひきずるほどの長いスカートをはいたマダムたち、子どもたちが「わあー」とかん高い声をあげて、そこらじゅうを走りまわっていた。キョロキョロしては立ちどまる、そんな少女にティソ親方は「これじゃ、いつまでたっても、家につかないじゃないか！」と何度もせきたてるほどだ。

「今度、キョロキョロしたらダックスフンドを蹴飛ばすからな！」

「そんなことしたら噛みつくわ、きっと」

「噛みつかんていどに蹴りとばすさ」

ティソ親方の言葉がよほど面白ったらしく、ナオミはクスクスと小笑い。このピーター・ティソ親方って、もしかして本当はとっても優しい人かも。

ナオミたちは大きな大通りをいくつか横切り、この町で一番大き

な大図書館へやってきた。なかからでてきたっぽい男の人や女の人たちと入れかわりに、ティソ親方はナオミをつれて、ナオミはジョジョをつれて大図書館にはいっていった。

看板には「盲導犬以外は立ち入り禁止です」とあったので、受付の女の人にばれないようにジョジョは盲導犬のふりをせねばならなかった。

（ねえ、盲導犬ってさ、いつも気取っている犬のことでしょ？）

（うーんとね、たぶん。わからなかったら、じっと動かないでいればいいのよ）

（…それ、盲導犬っていうよりぬいぐるみじゃんか…）

ティソ親方が彼らをキッと睨んだので、ナオミは静かにした。

ジョジョはダックスフンドのぬいぐるみのふりをして、ピンッと動かない。ぬいぐるみは息もしないことから、ジョジョは息もとめていたようだ。ホールを通りぬけ、裏の扉からティソ親方が外にでると、ジョジョの顔色は真っ青になっていた。

「この『古き洋館大通り』のちょっと先が、俺の家だ」

しばらく歩いていくと、長方形の広場に面したL字型の立派な建物が見えてきた。広場は路面電車の駅も兼ねているようだ。親方はL字型の赤煉瓦造りの建物を指さして「俺はあそこに住んでいるんだ」と得意げにいった。彼の話によればこの建物は、洋館を少し改装した高級商店街だ。アニタ・ジブリという人が支配人を務めているとか。

普段は自分たちは二階と三階に住み、一階は親方たちが経営する専門店。二階と三階の居住区はホテルのようなものかと思えばそうではなく、一階から二階へ続く螺旋階段をあがってみれば、そこは小さな家が軒を連ねる。城のなかに家があるといってもいいのかもしれない。ただ食事はこの商店街アニタ・ジブリ・パリの支配人、アニタ・ジブリ邸の台所で顔をあわして一緒にとる。

そんな高級商店街（アニタ・ジブリ・パリ）に軒をつらねているのは鍛冶屋やパン屋、家具屋から医者の診療所、帽子職人や靴職人、さっぱり売れない絵描きなどざっと二十軒ほどだ。

「とっても素敵なおうちね、親方」

「最初はみんな、そういうんだ」とため息まじりのティソ親方。

「独り者のアニタ婆さんにいじめられて、ここをでていっちまった子どもなんざ、星の数ほどいるんだ。まあ、アニタ婆さんは大の犬嫌いだから、お前さんがいじめれることはないと思うがね」とさらに「だがハナコには気をつけなきゃいけねえ」とぼやく。

自分の存在価値が認められて、ジョジョはどこか嬉しそうだ。

「ハナコって？」とナオミ。

「俺たちの料理番のゴーストだよ。アイツは生きているヤツが憎たらしいんだ、そもそもアイツは長生きしすぎなんだよ」

「僕はゴーストよりも、狂犬病の注射のほうがこわいけどね」

ジョジョは上機嫌で鼻をクンクンッさせながらぼやいた。

数分後、二人と一匹は商店街の裏門へとやってきた。

錆びた大きな鉄の扉は無気味な音がする。裏通りでは家具職人のかなづちの音、最近できたパン屋からはぷーんと香ばしい香りがただよってきた。帽子屋からは親方が弟子を怒鳴っている声が聞こえてくる。　それでもここの商店街の人々はとても仲がよいらしい。

すぐに店から店、工房から工房へと冗談や笑い声が響いてくるほどだ。ティソ親方の姿をみるなり、皆がわいわいと気軽に声をかけてきた。一番最初に彼に声をかけてきたのは、年老いた帽子屋の親方だった。

「ほーう、今度は女の子かね？」

親方は（ダックスフンドもいるよ）とジョジョに目をやった。

「そういやあ、お前さんの仕事は女の子向きかもしれんな」
「まあ、かわいい女の子ね」
今度は女の人が膝をまげて、ナオミを見つめていた。
「こ、こんばんは」と少女はやや緊張気味に、女の人に頭を下げた。
医者の診療所のまえを通りすぎようとしたとき、診療所から包帯だらけの男と付き添いの女の人がでてきた。男は「この姿はまるでじゃないか。この包帯はやりすぎってもんだ、さすがもぐりのホーエンハイム大先生だよ」と呟いていた。
「ヘンリー、もう私をめぐって決闘なんかしないでよ」
(ねえ、ジョジョ。あの人って決闘で負けた人よね?)
(死にかけていたヤツだよ)
このヒソヒソ声がよほど気になったらしい、包帯だらけのヘンリーは「ほらっ、あの子だってあやしいって噂しているじゃんか」とぼやく。

「さあ、ここが俺、カストロ髭の店だ」
ナオミとジョジョは一度たちどまって、ゆっくりと深呼吸して、ティソ親方のお店を仰ぎ見た。なんか花がいっぱい置いてあってとてもお洒落な感じがする。お店は女の子っぽいと表現すればいいだろうか。
ティソ親方は扉をあけると、玄関のなかへとはいっていった。
二、三分ほどすぎたとき、ためらう少女に親方の太い手だけがでてきて「早くこいよ」とナオミを手招きした。
(…ねえ、あの先は地獄の三丁目だったりして…)
(やだっ、ジョジョったら!)

恐るおそるはいってみたティソ親方のお店は、とても素敵なお店だった。
「え! なにこれ! とっても素敵!」
ナオミはものすごく、ものすごく瞳を輝かせた。

ティソ親方のお店は顔に似合わない、とても素敵な花屋さんだ。
店のなかはいろんな花々の香りが漂っている。まるで小さな花園にいるかな錯覚におちいる。お洒落な花瓶に生けてあるラベンダーや青バラ、色鮮やかなチューリップの香りにつられ、店内にはチョウチョがふわふわとはいりこんでいた。
「くっちゅん！」
鼻の先にとまったチョウチョに、ジョジョはくしゃみで応えた。

店棚には花言葉専用とかかれた花の種、季節の花から搾りとった香水、ウエディングブーケなどが陳列してあった。店の外には二匹の青い鳥がこちらをのぞいている。
「ねえ、連れてきたの？」
元気そうなおかみさんの声がした。
「ああ、元気な女の子だよ。ダックスフンドもおまけ付きだ」
ナオミは今、まさに（自分のことを話しているんだ）と思いながら、玄関に立っていた。

少女は玄関鏡をみながら、髪の毛や身なりをパンパンッと整えて、それを黙って見つめていたダックスフンドに（ねえ、どうかしら？）と囁いた。ジョジョはしっぽをぱたんっとふり、（さっきより、ちょっぴりかわいくなった気がするよ）と気休めにいった。
「で、どこにいるの。ピーター？」
親方はナオミをひっぱってくると、少女の肩を両手でパンッと叩いた。

「このお嬢様だよ、アリサ」
「へえー」おかみさんは花柄のエプロンをした声のとおりの人だ。
ちょっぴりぽっちゃりしていて、赤いリボンにポニーテールが似合う茶髪の女の人だ。彼女は小さな赤ちゃんを肩に抱いていた。この小さな赤ちゃんはとてもやんちゃな坊やらしく、お母さんのポニ

ーテールをひっぱっていた。
「あ、あの…はじめまして。私、ナオミ・ニト、この子はジョジョ・ダックスフンドといいます。あの、そのう…これからよろしくお願いします」とナオミはペコリッとお辞儀をした、ジョジョもしっぽをぱたんっとふった。

「やだあ、そんなに畏まらないでちょうだい。私はアリサ、この子はジャン、みてのとおりここはお花屋さんなの。特別な日に特別なお花をお届けするのがお仕事、でもあなたみたいな女の子が来てくれて、本当によかったわ」
「……」

――――どういう意味なんだろう？

「ほらっ、まえの子ってね。ハンサムな男の子だったのよ。だからあの子を目当てにうちの花を買いにくる女の子がたくさんいたのよね、でも『女ごころ』というのが全然わからなくてね。見ていてこっちがかわいそうだったわ。もしかして今度はあなた目当てに男の子たちが花を買いにきてくれるかもよ、ウフフフ」
ナオミは顔を赤らめ、思わず下をむいてしまった。
アリサはそんなナオミの顎に手をそっとあてて、「足もとには何も落ちてないわよ、ナオミ。それに何もうつむくことなんてないでしょ！　ほらっ、こういうときはね。素直に笑顔をみせるものよ」とうえをむかせ、パチッと片目をつぶった。
（その子ってテルみたい。今頃、テル……どうしているかな？）
（たぶんつまみ食いして、手を百回ぐらいたたかれているよ）とダックスフンド。

第３８話　アニタ・ジブリ・パリの人々【１】

第３８話

「ねえ、うきうきするわね、ジョジョ？」とナオミはティソ親方のお店の看板をみるたび、独り言のように呟いた。
「うん、そうさ。新しいことを始めるのはいつもうきうきさ」とジョジョ・ダックスフンドはナオミを元気つけた。それにしてもティソ親方のお店の看板はこんなことが書いてあった。

誰にもいえないあなたの言葉を花言葉（メッセージ）にどうぞ
『ピーター・ティソのお花屋（通称カストロ髭の花屋）』

お電話一本で町のはてからはてまで
新鮮でピチピチ、できたてホヤホヤをお届けします。

注意事項：あまり長ったらしい言葉はお花にできず、
ご自分でお伝えくださることになりますので
どうぞほどほどにお願いします。

ピーター・ティソのお花屋の明かりが、古き時代大通りにぽわんっとまるくひろがっていた。お店のなかは、ぞろぞろと仕事帰りのお客さんでいっぱいだ。ナオミは大急ぎで何をしていいのかわからないけど、ティソ親方夫妻の手伝いをせかせかと一生懸命、自分なりに手伝ってみた。騎士見習いとしての初仕事だ。
「ありがたいわ、このお客さんにチューリップの花を三本、包んでさしあげて。色は赤色と黄色、それから青色よ」とアリサはナオミ

の顔をみながらいった。
「うーん、そうね。ジョジョはジャンの子守りね、できるかしら？」
「大丈夫だよ、この耳たれは賢そうだし」
ティソ親方はジョジョをなでながらいった。
期待に応えるかのように、ジョジョはしっぽをふった。
一歳になったばかりのジャンは、てくてくとおぼつかない足どりで「…わんわん。わんわん」とダックスフンドをみると、べっとりとよだれをつけた小さな口をニヤッとさせながら、嬉しそうに走りよってきた。

「でも気をつけてね。ジャンったら最近、すぐに何でもかんでもよだれをなすりつけるから。しかもべっとり、牛乳くさいし。それから何でもギュゥ～ッと握るくせもあるから。私のポニーテールもそう、本物のポニーのしっぽと勘ちがいしちゃってね」
おかみさんのせっかくの忠告は遅かった。
ジャンは「うきゃあっ」と喜びの声とともに、ダックスフンドにべっとりとよだれをこすりつけていた。逃げようもんなら、容赦なくしっぽをギュゥ～ッと握り、ジョジョの毛を力のかぎりむしりとるほどだ。
痛いからやめて！　なんて声はジャンには届かない。すでにジャンの手には、ジョジョの毛がいっぱい握られていた。

――――ガブリ！　どうだ！　とジョジョはジャンの鼻をかじった。

うわ～ん！　と店内にはジャンの大きな泣き声が響く。
「もーう、ジョジョったら！　坊や、痛くなかったかな？」
ナオミはジャンを抱き起こしていった。
「私の忠告が遅かったのよ、ごめんなさいね。耳たれちゃん」
ジョジョは「赤ん坊だと思って油断した」とぼやき、ナオミの足もとに逃げこんだ。

おかみさんはナオミの手から、ジャンを抱きとっては苦笑い。
先ほどまで大声で泣いていたジャンは、おかみさんのポニーテールをギュゥ～ッとひっぱり、きゃははははっともう泣きやんでいた。
「ありがとうの花が育ったって聞いたんですけど？」
そういったのは、サラリーマン姿の三枚目の中年おじさんだ。
「はい、赤いカーネション、見事に咲きましたわ。何本さしあげましょうか？」
「そうだね、せっかくだから花束でもらえますかね」
おじさんはジャラジャラとミスリル金貨と銀貨、銅貨を「ひい、ふう、みい…」と手のひらで数えて、おつりがないようにわざわざ計算してから、おかみさんに手渡した。するとアリサ夫人も白紙に包まれ、赤いリボンをした花束を紳士に心をこめて渡した。最後にひときわ大きな赤いカーネションを一本、花束のなかにいれた。

おかみさんはニコッと嬉しそうに微笑み、「これは私からの『ありがとう』ですわ」といえば紳士は帽子をそっととり、静かに店の小さなベルをカランッと鳴らして、外にでていった。続けて男の人と男の子の親子連れが店にやってきた。
「あのう。ありがとうのお花、ありますか？」
少年は右手を握りしめて、緊張した声でいった。
「いくつご用意したらいいのかな？」

アリサ夫人の言葉に少年はもじもじしながら、「…あの一本…」と恥ずかしそうにいった。その言葉にアリサ夫人はとても嬉しそうに「そう。でもその一本にはきっと坊やの気持ちがいっぱい詰まっているわね。おばさんはそう思ちゃった」と微笑んで、心をこめてラッピングした、一本のありがとうの花を少年に手渡した。
少年は手に握りしめていた、一枚のミスリル銀貨をナオミに手渡した。銀貨は彼の手汗と一緒に輝いていた。おそらく家からこの店

までかたときも離さず、握りしめていたのだろう。

それはまるで少年の心そのものといってもよい、お金なのにほのかに温かかった。ナオミの心もほのかに温かく、とても優しい気持ちになった。親子連れの姿がみえなくなると、ナオミはボソッとアリサに聞いた。

「ありがとうの花って？」

「赤いカーネションの花言葉よ」

男は『ありがとう』っていう言葉をなかなかいえない生き物だ。だからこうして男の人は花屋で『ありがとう』を買っていく。日頃の感謝の気持ちをこめて。

「…でも受け取った人が花言葉を知らなかったら？」

「――――もーう、ナオミったら、おかしいんだから」とクスクス笑いだすアリサ夫人。

花は言葉から生まれる。町中のいろんな言葉は花の種だ。

お客さんはそれを自分たちに預ける。

花の女神フローラの魔法で瞬時に花咲かす場合もあれば、表の花壇で大事に育てて、お花になったときにお客さんに知らせて、お客さんは花になった言葉を買っていく。だからたとえ受け取った人が花言葉を知らなくても、心は通じあえる――なんて素敵の仕事なんだろう。

「花ってこの子によく似ているのよ。シャンソンを歌ってあげたり、音楽を聴かせてあげたり、言葉をなげかてあげたり、とっても大変なのよ」

おかみさんは人さし指をたてていった。

（へえっ、ジャンって僕よりも世話がやけるんだ）

むしりとられた毛のところをペロペロ――ッなめながら、ジョジョはぼやく。

第３９話　アニタ・ジブリ・パリの人々【２】

第３９話

ティソ親方は「もう八時三十分か、まだ食事に間に合うかな」とナオミの手をひっぱり、裏路地にでていった。ナオミがどこへ行くのかと訊けば、親方は「アニタ・ジブリの食堂だよ」と疲れた声でいう。

ナオミはあとをてくてくとついていった。

商店街の二階は親方たちの居住区だ。通路をへだてて、左右に煉瓦造りの家々が建ち並んでいる。ティソ親方のお花屋もそうだけど城の中に家があるなんて素敵だ。そのなかでも一際大きな家があった。古びた樫の木の扉がたちはばかり、それをゆっくりとあけると共同の炊事洗濯の場所がみえた。台所か何かに違いない。長テーブルが一つだけ置いてあり、そのうえには三本たてろうそく台が席ごとにおいてあった。

――――台所には自分たち以外、誰もいないようだ。

上座にはほかの椅子とくらべて豪華な玉座、そこに偉そうに座っているのがティソ親方がいっていた、アニタ・ジブリっていう支配人だろう。みるところアニタは銀色の髪をおだんご頭にして、きれいに束ねている老女だ。大きなの耳飾りをぶらさげている福耳、両手両指の指輪、数カラットはありそうな一粒大の、つまり成り金。これが老婆に対するナオミの第一印象だ。

待ちくたびれたのか、アニタ婆さんはコホンッとわざとらしい、大きく咳払いして、二人の注意を自分にむかせた。

「ピーター、その青びょうたんが新しい子かい？」

「ああ、いい子だよ」

ティソ親方はずっけんどんでいった。
「ほーう、自己紹介もできんガキのどこが、一体全体いい子なんだかね。ピーター、教えてくれないか、え?」
「ご、ごめんなさい。私はナオミ・ニトといいます」
アニタ・ジブリはパチンッと手で炎をつけて、タバコを一服。
「お前のようなひょろひょろに何ができる?」
アニタ・ジブリはナオミに息を吹きかけていった。その臭ささにナオミが気絶したものならば、老婆は少女の頬を軽くペシペシッとたたき、目を覚まさせた。

「ふん! こんなことで気を失うなんざ、先が知れてるね! 見るからにぐずで甘ったれで泣き虫じゃないか。こんなニトの生き残りに、あんたの仕事がつとまるもんかい」
「婆さん、やってみるまえに結論をだすな。人には無限の可能性があるんだから」
ピーター・ティソはナオミをかばってくれた。

目の前の厚化粧の老婆アニタ。この人は父と母のどちらかを知っているかのようだ。
とはいえ、いきなり顔つきがかわり、おぞましい怪物のようなアニタにナオミは近親感よりも恐怖感を覚えた。老女は口を大きくあけ、針のような鋭い牙をむきだした。顔つきが変わると、一緒に頭もいくぶんか巨大化したようだ。彼女は半尺ほど伸びている、赤い爪をぷるぷると震える、少女の顎に突きたてていった。
「あたしゃ、アニタ・ジブリ。この地区のご意見番だ」
その姿は言葉ではいい表せないほど、このうえなく恐ろしいものがあった。ジョジョは彼女の鋭くなった牙みたいな歯を見て「ちゃんと歯磨きしろよ」とぼやく。
「いいかい、ぐずで甘ったれで泣き虫!」
アニタ・ジブリはじっとはナオミをみ、ジョジョにはシッシッと

汚物をみるかのように手をやる。

「食堂のラストオーダーは二十時半、門限は二十三時だ。二十三時をすぎれば商店街の守衛ハナコ・ゴーストが、すべての店舗の戸締りの確認にむかう。二十三時以降の帰宅は野宿を覚悟しな。もちろん悪いことをすれば地下の独房に容赦なくぶちこむ。それとあたしに犬を近づけるんじゃない、いいね？」

ナオミがジブリの言葉に頷こうとしたとき、一瞬だけ少女の声が聞こえた。空耳だろうか？　ナオミがジョジョに目をやれば「僕も聞いたよ」と唸る。

「イヒヒヒヒ！　イヒヒヒヒ！」

いや空耳ではないようだ。確かに少女の不気味な声が聞こえる。

ゆっくりと台所をみまわしても、声の主は見当たらない。台所には大きな暖炉と炉端、小さいながらにタペストリーやキルト、どっかで見た覚えがある有名画家の複製画が飾られていた。煉瓦壁には松明が青い炎をパチパチッと笑い声をたてていた。

めらめらと燃える炎のうえには銅の鍋がおいてあり、不思議なこともあるもので、まな板と包丁がふらふらと空中に浮かんでいた。

ヒッ！　とナオミは一瞬、たじろいだ。

「ハナコだよ」ティソ親方がナオミに囁いた。

「ハナコ・ゴースト、この家に住みつく女の子の悪霊だよ」

まな板から玉ねぎ、人参、ジャガイモが鍋にボトボトッと落ちる音がした。

「イヒヒヒヒ、またいじめがいのある女の子がきたわね。いじめていじめて、あんたの顔を涙でグシャクシャにしてあげる」

うっすらと姿をみせた彼女は、とても陰気そうな顔つきの女の子だった。

彼女は二重顎、目は蛙のようにギョロギョロ、しかも柳の木のように髪の毛はだらだら、顔はそばかすだらけだった。

ゴーストだから半透明なのはしかたがない。ゴーストはモノをつかめるけど、逆にナオミたちからゴーストはつかめない。確かにちょっと彼女に触ってみれば、いやはや絶対零度という言葉が似合うほど、ヒヤッとする。

ハナコはアニタがそうであったように、じろじろとナオミをみたあと、最初はニヤニヤと無気味な笑みを浮かべていたが、ナオミがキッと彼女を睨み返すと、少女はナオミの近くまでやってきた。

「ゴーストは人間が好物なんだぞ！」といきなり大きな口をあけ、彼女を食べようとしたので、ナオミはこの世のものとは思えない悲鳴をあげ、床に腰をついた。ジョジョは何もできず、カッチンとそのまま固まっていた。

「なーんてね、嘘よ」とナオミよりいくぶんか背の高いハナコは、明らかに彼女を見下した声でボソボソ。いきなり料理鍋をぐいっともちあげた。

「食事はあとあんただけさ、さっさとすませちまいな」

ハナコはナオミの姿をみるなり「おい、そこの居候。なにぼっーとしてんのよ、これを持っていってちょうだい」と怒鳴りちらした。

腰がひけそうなほど鍋はどっしりと重たい。

――――ギックリ腰になりそうだ。

ナオミは鍋を持ちあげながら、ゆっくりとまた台所をみまわした。台所には干し肉や玉ねぎなどが紐に吊るされ、果物や野菜も木箱に入っていた。野菜の太陽と土の香りがどことなく懐かしい気がする。

赤煉瓦の壁には包丁やまな板、フライパンなどがかけてある。食器棚には陶製や木製のお皿やコップ、スプーンやフォーク、ナイフ

などが一式そろっている。長テーブルのうえには白パン、乾燥ベーコン、一枚の皿、わきには木製スプーンがおかれ、あとはこの鍋を置くだけのようだ。

「皿が一つ、足りないんじゃないのか？」

「アリサは一時間前にもう食事をすませちまったよ」

「いやその…この子だよ。あとダックスフンドのぶんもな」

アニタ婆さんはダックスフンドと聞いて、ほんの一瞬、顔をひきつった。

「いちいち勘にさわることをいうね。働かざる者、食うべからずってのが今も昔もここのルール、例外は一切認めないよ。どうしてもっていうなら、ティソ親方、あんたの食いぶちをやりな」

会話の途中、タイミングよくナオミの腹の虫がぐるぐるとなった。恥ずかしさのあまり少女は顔が真っ赤になり、ジョジョは（ダックスフンドのお腹の音だっていいなよ）と少女を懸命にかばおうと必死だ。

「あの、その…私たち、丸一日、何も食べてないの」

「それとこれとは話がべつだよ」アニタ婆さんはするどい目つきでいった。

ハナコは皿をとってくると今、長テーブルに鍋をおこうとしているナオミを目のまえにして、「ハナコ・ゴースト特製シチューよ」とお腹がすいている彼女に無理にその香りをにおわせた。

「ナオミ、ここに座れ、婆さんのことは気にするな」

「おやっ、まあ。涙ぐるしいことですわね、ティソ親方」

ナオミが椅子に腰かけようとしたとき、ハナコ・ゴーストは少女が座ろうとしていた椅子にそっと忍びより、静かに椅子を自分のほうへ引きよせた。しばらくしてゴツンという音が台所に響いた。あるはずの椅子が突然なくなって、体をくずしたナオミが床に頭を打つけた音だった。

ナオミは唇を噛みしめ、ジョジョは吠えた。

ハナコが足をばたつかせ、キャッキャッと嬉しそうにお腹を抱きかえて、ナオミの失態を大笑いした。アニタ・ジブリは陰気さながらに呟いた。

「炉端へおいき、この椅子はあんたのための椅子じゃないんだ」

いわれたがまま頭をたれ、唇を噛みしめ、ナオミはとぼとぼと炉端へと歩いていく。

「婆さん、腹がへったら明日の仕事はできねえというけどな?」

ティソ親方は見てみぬふりはできない人のようだ。

「…明日の仕事ねえ…」

アニタ婆さんの「やれやれ、仕方がないね」と呟く声が聞こえてきた。彼女は炉端のところで足をまげて、おむすびのように三角形になっているナオミに黒パンを投げてやった。岩のようにかたい黒パン、しかもこの黒パンには青かびがうっすらと生えていた。

お腹がすいて死にそうなナオミ、食べものを選んでいるときではない。少女はティソ親方に背中をみせて、まるでハムスターのようにぼりぼりと黒パンを貪った。ジョジョは歓迎会のとき、お肉をもっと食べていればよかった、とぼやく。

ハナコ・ゴーストは戸棚から一枚の皿をとりだすと、彼女の特製シチューをよそおい、自分の席に座った。ハナコのわざとらしさにもほどがある。

「お前は死んでいるんだ、そもそも食事をする必要があるのか?」

「まあ、失礼ね、ティソ親方」ナオミの様子をじっーとうかがっているハナコ。

彼女は皿をわきによせるといきなり立ちあがり、炉端のところまでスウッーと皿をもっていく。ティソ親方は怪訝そうにハナコをみていた。

「あの子にあげるのかい?」

「うん、そうよ」猫声のハナコはぶすっと答えた。

彼女はてくてくと炉端のほうへ、ニタァーッと怪しい笑みを浮かべて歩いていった。とそのときガシャンッ――――という音が台所に響いた。

ナオミはキャッと小さな悲鳴をあげた。

ハナコがつまずいたのだ、同時に彼女がもっていた皿の中身は炉端に散らばった。大半はナオミの上半身にへばりついていた。

「あ、ごめん。あんた、まだこんなとこにいたの？」

ハナコはナオミのそんな姿をみて、腹をかかえて嘲笑っていた。

「お前がそんなところにいるから、こうなっちまったんだよ。せっかくの特製シチューがもったいない。あんた、それどうするのさ？」とアニタ婆さん。

ナオミは悔しくて、何も言い返すことができない。

炉端へと追いやったのは誰か、アニタ婆さんは自分のことを棚にあげて、ナオミを責めたてるばかり。ハナコは目玉を大きくして、おぞましい顔つきで嬉しそうに笑った。

「…やっぱり、あんたにはぜーたい、あげなーい。なーいもんね！」

「俺の見習いをいじめるのはそれぐらいにしろ！」

ティソ親方はぷるぷると額に青い筋を奔らせていた。

ナオミは黙っていたが、さすがに空腹には勝てなかったらしい。腹をすかせた少女は炉端にはいつくばると猫背になって、皿にシチューを拾い集め、汚れたシチューを動物のようにガツガツとむさぼり食べはじめた。ジョジョも一緒にシチューを食べた。

「世のなかには餓えて死んじまう子どもが五万といるんだ。お腹が空いているのに食えるものを食えないとかいうバカは、本当に飢えたことのない大バカ者さ」

アニタ婆さんはこれぽっちも同情の色をみせない。

ハナコの塩気がちょっとたりないシチュー、それを塩辛いと感じたのは少女とジョジョの二人だけだったのかもしれない。ティソ親方はシチューを食べおわると、自慢の髭をふいて、ホットワインを一杯飲むと「さあ、もう就寝時間だ。明日は五時起きだぞ」とナオミの手を引っぱった。

「どこにいくの？」

「お前の部屋、見習部屋だよ」

ナオミは意地悪なアニタ婆さんとハナコ・ゴーストから離れられると思うと、心からホッとして、嬉しそうにティソ親方の後ろについていった。

「ちょっとお待ち！」

間髪入れずにアニタ婆さんは二人を呼びとめた。

「ナオミとかいったね。あんた、なかなか見込みがある」

老婆はゴソゴソしはじめたと思えば、光る硬いものを投げた。

「とっときな、騎士メダルだ」

しかも一枚ではない、どういうわけか二枚もある。

「…あ、ありがとうございます、アニタさん…」と戸惑う少女。

「一枚はあんたの食べ物を粗末にしなかった当たりまえに一枚、もう一枚はうちのバカたれハナコがしでかしたことへの償いさ。食べ物も食べ物になるまえは必死に生きていたんだ。

パンにも水にも、ひとかけらの砂糖にも生命は宿っているんだ。いいかい、このアニタ・ジブリ・パリでは当たりまえのことを学んでもらう。一日もはやく当たりまえが当りまえにできるよう努力するこった。さあ、さっさとお行き」

第４０話　アニタ・ジブリ・パリの人々【3】

第４０話

ティソ親方に案内されたのはつい最近までパン屋に貸していた、三階の屋根裏だ。

「お前の寝室は三階だ。三日前まで粉置場だったんだが――――まあ、当分は黒犬が白犬になるぐらいは覚悟してくれ。自分たちが住む部屋だ。好きに使っていい。もちろん掃除は君らの仕事だぞ」

ジョジョは嫌そうな顔でティソ親方をみる。

親方の規則はこうだ。仕事は平日、土日祝は定休日。仕事さえしてくれれば見習い生が何時まで、外で遊んでいようが、夜更かしをしようが文句は一切言わない。ただどんなに忙しくても各教室（サロン）には顔をだすことだけは忘れるな、とか。

見習部屋への途中、屋根裏部屋の階段近くの奥部屋から「ねえ、新しい子はどんな子なの？」とかすれた弱々しい声がした。ティソ親方が声のした小部屋へ、そっとはいっていった。

「元気のいい女の子さ」

「ふーん、今度は女の子なんだ」

「ああ、とてもかわいらしい女の子だよ」

「それだけじゃ、わからないよ。ちょっとだけでいいからその子とお話させて」とティソ親方が呼ぶまでもなく、ナオミは部屋のまえにつったっていた。

奥部屋は太陽のやわらかな光があたるテラスとなっており、ステンドグラスが窓をおおっていた。奥部屋は横長く、左手は小さな薪ストーブ、壁においては鳩時計や絵画が飾られ、本棚にはダ・カー

ポ著の『古代魔法のすすめ』やA・アグリ著『宮廷医師ホーエンハイム家は本当に悪魔崇拝者なのか?』、『名探偵エイブラハム・アグリの事件簿』シリーズ本が陳列されている。

部屋奥は古き洋館大通りを一望できるバルコニーだ。

ティソ親方がそばにつき添っているベッドには、大きなくまのぬいぐるみがてんこもりなのだが、ぬいぐるみに埋もれるようにして青白い少年がいた。

青白い透きとおるような透明感ある肌、灰色をおびたちりちりの長い髪の毛、そして藍玉（サファイア）のように青くて大きな瞳――――ナオミはどういうわけか、少年が男の子なのに（まあ、なんてきれいな男の子なの）と思ったものの、ジョジョは（…もやしみたい…）とひそかに思った。

「息子のライアンだよ。半年前から体を壊しちまってね」とティソ親方はライアンの青白い手を握りしめがら、悲しそうに呟いた。

「僕もダックスフンドのぬいぐるみ、もっているよ」

「これ、ぬいぐるみじゃないよ」

「へえ」ライアンの顔はほこらんだ。

「本物なの、ジョジョ・ダックスフンド…」

ジョジョも「自分は本物だぞ!」とライアンの頬をペロリッと舐める。

「わーお、くすぐったいや!　ところで君の名は?」

「私はナオミ・ニト…」

「おお!　僕は小さな獅子（ライオン）、ライアン・ティソ。よろし…」

男の子は風邪をこじらせているのか、ゴホゴホッと大きく咳き込み、落ちつくとライアンはナオミに優しく微笑んた。天使のような安らかな微笑みにつられ、彼女もニコッと微笑んだ。

「ごめんね、ちょっと興奮しちゃったんだ。だって君の名字ってナ

オキ・ニト、僕らの英雄と同じ名前だったからね」
「あ、あの…それ、たぶん私のお父さんの名前だと思うの…」
「わーお、すごいや！　伝説が帰ってきたぞ、伝説が帰ってきたぞ」
ライアンはナオミをよく見ようとして体をぐいっと起こした。

少年はナオミが思ったとおりの女の子だったのか、ものすごく顔をほころばせた。
「君、アニタ婆さんにどやされた？」
「…うん、わかる？」
「そりゃ、わかるよ。だって顔がこわばっているもん、僕も昔はそうだった。今度、僕が元気になったら一緒にあの糞婆に仕返ししないかい？」と頬を赤らめるライアン少年。

ナオミはふふふっと笑った。

「この町はなれたかい？」
「ううん、まだ」
「君、絶対に好きになるよ、この町。僕の親方は呪術師なんだ、みてのとおり今は病気だから実家にいるんだ。ここのカストロ髭の親方は息子の僕がいうのもなんだけど、いい親方だよ。君はきっと大丈夫、うまくやれるよ、まえの子みたいに」
「……そうかなあ？」
「ねえ、君。僕と握手してくれるかい？」
ライアンが羽根ふとんから手をだすと、ナオミはその青白さにびっくりした。少年の手は顔よりもはるかに白く、青い血管がうっすらと透きとってみえた。

ジョジョなんかは（やっぱりもやしだ）としっぽをぱたんっとさせた。ライアンは息苦しいのか、息づかいが荒く、じんわりと額から汗がにじみでていた。

「大丈夫か、あまり無理をするな」ティソ親方は心配そうだ。
ナオミはライアンの手をギュッと握った。その手もやっぱり汗だらけだった。

（…うわあ、すごい汗と熱…）

「ちょっと熱があるんだ。隣に住んでいるホーエンハイム先生がいうにはね、この熱さえひけばこの町を走れまわれるほど元気になれるんだって」
「だったらはやく寝なさい、ライアン」とジャンを寝かしつけたらしい、アリサ夫人の声が彼らの後ろから聞こえてきた。おかみさんは両手に腰をあてて、とてもあきれているようだ。親方は申しわけなさそうにコソコソと逃げだした。

「怒らないで、母さん。新しい子に挨拶したかったんだ」
ライアンは顔を赤らめがらいった。
「まずはあなたが元気になることが先でしょ！」
「ふん、僕は生徒会長なんだぞ！」
おかみさんは「誰かさんに似てて、やんちゃで困っちゃうわ」と苦笑い。ナオミも少年がロレンツォがいっていた病気に伏せた生徒会長だったことに驚きを隠せない。

「ナオミ、話は聞いたわよ。大変だったわね？」
「う、うん」もうちょっとで泣きだしそうなナオミ。
「歓迎されると思っていた？」
ナオミとジョジョはコクッと頷いた。
「うーん、私なんてね、もっと意地悪されちゃったんだから。それでついカッとしちゃって、アニタ婆さんを蹴飛ばしちゃったの。初日なんてそんなもんよ。それにあれがあの人たちの歓迎のやりかたなの。ほらっ、『ありがとうの花』と同じ、わかるかしら？」

素直になれないだけかもしれない、素直に歓迎できないだけかもしれない。ふとナオミはそんなことが脳裏に浮かんだ。

ただこの目のまえにいるおかみさんとティソ親方、病に伏せるライアン少年、そしてジャン坊やだけは自分を好いてくれている。ヤドリギ親子と比べればよっぽど待遇はいい。

「さあ、明日は見習い初日。たくさん覚えることがあるからね」

おかみさんはナオミたちを部屋から追いだした。

すでにティソ親方は洗面所のところで顔を洗い、安眠帽子をかぶっていた。ナオミは親方と夜の挨拶をかわしたあと、屋根裏部屋にかけあがれば、香りのよい白い粉が舞い上がった。

粉くささでゴホコホッと咳きこむものの、ナオミはこれからお世話になる部屋をざっと見回した。粉置場はどこもかしこも、うっすらと粉のせいで白くみえた。

天井には石炭のようなヒカリダケがいれられた、西洋ランプが吊るされ、暗やみに目が慣れてくると壁にそって、分厚い本や置物など古いものがいっぱい並んでいる。空気がかすかにゆれているようにさえみえた。ほんのうっすらとだが勉強机とからっぽの宝箱、古びた薪ストーブがひっそりとあった。その先には小さな埃まみれのベッドが一つ。

二人はもぞもぞとベッドにもぐった。

「思ったより歓迎されなかったね?」とジョジョの声。

「ジジ亭よりはましだと思うの。お花屋のティソ一家は、私とジョジョのこと、何だか気にいってくれたじゃない。アニタお婆さんもそんなに悪い人じゃなさそうだし」

「問題はハナコだよな、アイツには気をつけないといけないよ」

それだけいうとジョジョは毛虫のようにまるまって、スヤスヤと眠っていた。出会いは何かと人を元気にさせるものだ。誰かと出会

うということほど、自分の心をはつらつと明るく、元気にさせるものはない。

（ティソ親方の息子ライアン、小さな獅子（ライオン））

何度か、心のなかでナオミは男の子の名前をくり返した。

第1話　錬金術師ロベルト・パパティーノ【1】

第1話

ナオミがティソ親方の従騎士になって一週間あまり。
「デンワダヨ、デンワダヨ、ハヤクトッテ！」
オウムが朝早くから喚きたてる。オウムの嘴をパカッと開けば会話ができる、これがブルトン人の電話『オウム電話』だ。生きているから餌やりがめんどくさいがペットにもなるので、皆からは重宝されている。

「はい、ありがとうございます。こちら『ピーター・ティソのお花屋』です」
こんな電話のやりとりをしたのはナオミ。これでお客さんとの電話は十五回目、ようやく慣れてきた。最初の一回目なんかは本当にひどかった。
「ごめんなさい、間違い電話です！」と相手がしゃべるまえに電話をガチャンッてきってしまったのだから。これにはティソ親方、アリサ夫人は大爆笑。ジャンなんかきゃっきゃっと両手をたたくという始末。
「絵描きのキャサリン・ハイネと申しますが、もう育ちました？」
「ええっと昨日、ご依頼されたシルクハットですよね」
電話主は右隣に住んでいる、女性の絵描きからのようだ。
「あのお花なら、みごとに咲いていますよ」
「あー、よかったわ。とにかく急いでアトリエにきてくれます？」
（急いでってすぐ隣じゃん）
ジョジョはうたた寝しながらいった。

ナオミは「シルクハットを植木鉢にする、変わったヤツのところ

には行きたくないよ」とぐずるダックスフンドを連れて、すぐ右隣の扉をトントンッとかるくノックした。

「すみませーん、『ピーター・ティソのお花屋』です」

アトリエから「待っていたわ、はいりなさい」という声がした。

遠慮がちにアトリエに入ってみれば、油絵具のにおいがつーんとした部屋だ。イーゼルにおかれた描きかけのカンヴァス、デッサン専用の凛々しい戦士ブルータスなどの石像、いろんなものがいっぱいあった。どれこもこれも素敵なものばかりだ。

アトリエには画学生たちが絵を習いにきていた。

「適当に座ってちょうだいな」とちょうどキャサリン・ハイネは、画学生の絵を手直ししている最中だ。

「そこの額がはいった絵があるでしょ？　ほらっ、野菜のヤツ…」

絵描きはカンヴァスに絵筆を奔らせながらいった。

「これですね」

ナオミは金縁額がつけられたカンヴァスに目をやった。

その絵は一本のアスパラガスが描かれた、どこか南仏の田舎の家の台所を思わせる、素晴らしい静物画だった。よく描けた絵だったのかジョジョは「テル・ウォ・アボカドに贈ってあげれば、きっと喜ぶよ」とぼやき、床で爪をとごうとしたので、ナオミは彼の耳をひっぱった。

アスパラガスの絵はそれほど大きくはない。六号ぐらいだ。

「この絵をお客様のシルクハットと一緒にね、あのお屋敷まで届けてほしいのよ」

ナオミはシルクハットのなかに咲いている、一輪のピンクのカスミ草をさりげなく見つめたあと、絵描きが指差した出窓の向こうの町並みを見た。丘の上に立派な煉瓦造りの洋館がそびえている。

「もし何かいわれてたら、『このカスミ草にキャサリン・ハイネの

メッセージがはいっています』といえば、わかってくれるかしらね」

シルクハットを植木鉢にするなんて、確かに変わっている。

「お届け先はなんていうの？」

「サー・シャルル・パリオリ子爵。騎士団教育の『錬金薬』担当騎士です。お住みになっているところは丘のうえ大通りの二丁目。錬金術に興味があるなら、是非顔見知りになっておくことをおすすめしますわ」

正直、錬金術には興味はないが、その人の名前には興味がある。エンガチョがその人にダ・カーポを診てもらってくれ、といっていた気がしないでもない。

絵描きはカンヴァスにむかって、また絵筆を奔らせた。

「そうそうあなた、絵はお好きかしら？」

ナオミはコクッと頷いた。

「ここは美術サロンなのよ。どんなことをするかのといえば自由、好きな絵を描けばそれでいいの。なによりも絵が大好きなことが第一条件ですわ、ほらっ、絵をお友だちに贈れる女の人って素敵だと思わない？　ここではその素敵を習うのよ」

趣味で絵を描く人もいれば、画家になりたくて絵を習いにくる人もいる。素敵な女の人になるためのたしなみとして、習いにくる人もいる。ともあれ美術教室ではこんな素敵を習うのだが、素敵を習うなんてこれまた素敵だと少女は思った。

第2話　錬金術師ロベルト・パパティーノ【2】

第2話

「いい？　花言葉のお届けですっていうのよ？」
アリサ夫人はジャンを抱きかかえながらいった。
ジャンはダックスフンドをみると、「うきゃあ」と嬉しそうな声をあげた。ジョジョは一週間前のことを思いだして、毛が逆立ってしまった。
「ジョジョ。ダ・カーポさん、もう人間にもどっているかな？」
「もうあのままでいいんじゃないかな」
ジョジョは天敵ジャンを警戒することで頭がいっぱいのようだ。
シルクハットは真っ白の化粧箱に入れ、ピンクの紙でラッピングされていた。大きな赤いリボンが印象的な、とてもかわいらしい女の子らしいラッピングだ。ジョジョは「ラッピングだけ一人前だね」と彼女を茶化す。

「一人で運べるかい？」と心配そうなティソ親方。
「もーう、あなたったらあまいんだから。ナオミはこの町を探索しなくちゃいけないの」
「だったら表につないである俺の馬をつかってもいいよ」
「あんな大きな馬、子どもには無理ですよ」
二人の会話がおもしろく、ナオミはクスクス笑ってしまった。
「そうそう昨日、馬屋番のヨセフ爺さんから電話があってね。ナオミのポニーがヴァンヌからやっと届いたそうだ」
馬屋番のヨセフ、キング・アーサー地区に住んでいる馬預かりの老人だ。
「じゃ、じゃあ…ついでにポニーの様子を見にいってきます」

「うーん、そうだな…」
ナオミはティソ親方をじっと見つめる。
「ウォッホン」と親方は咳払い。

息子しかいない彼にとって、ティソ親方は自分を嬉しそうに見つめる、ナオミにがらにもなく照れてしまう。娘のような女の子にどう接すればいいのかわからないのだ。もちろん乱暴に接することはできない。
「今日はこのおつかいで手伝いは終わりにしよう。これが終わったら、サロンの担当騎士をまわりなさい。そうそう領主館からナオミ宛ての荷物が届いているから、帰ったら整理しておくのを忘れるんじゃないぞ」
それだけいうと親方はすたすたと顔を赤らめて、恥ずかしそうに店の奥へとひっこんでしまった。そんなティソ親方にかわって、アリサ夫人は嬉しそうに「あの人、みてのとおりぶっきらぼうだけど、あなたのことが心配なのよ」と微笑んだ。

剣と魔法が織りなす都アッパータウンはとても複雑だ。
あっちやこっちにいくにしても、馬に乗っていなければ歩き疲れてしまう。キング・アーサー地区なんかは迷路のようだし、ついさっきまでのぼり階段だったと思えば、くだり階段だったり、すぐに行き止まりにあったり。

嘆きの壁も素直なものやひねくれたもの、嘘つきものなど性格はまばらだ。なんど彼らに騙され、同じ大通りをぐるぐるとまわったことか。嘆きの壁よりも大変なのがゴーストであることはいうまでもない。
彼らはこの町のところどころに住みつき、この町の人々に意地悪をするというのだから、はっきりいえば大迷惑だった。彼らには地区びいきというものはない、どんな地区であれ生きている者を懲ら

しめるときが、彼らの至福のときだとか。

あれやこれやで、馬屋番のヨセフ爺さんの馬屋にたどりついたのは、ティソ親方の花屋をでてから一時間後のことだ。アッパータウン領主館近くにあるヨセフ爺さんの馬屋は、石畳の厩舎で高級感あふれるものだった。

一人の老人が休憩所のところで優雅にパイプを吹かしていた。

「あの――――あなたがヨセフさんですか？」

老人はチラッとナオミをみた。

「あんたのポニーの種類と特徴、名前をいいなさい」

どうやらこの人が、馬屋番のヨセフ爺さんと思ってよさそうだ。

「シェトランド・ポニー、芦毛で金の鬣、名前はマレンゴ…」

「キング・アーサー地区配属、騎士候補生ナオミ・ニトだね？」と老人のかすれた声。

ナオミがそうだと頷けば、ヨセフ爺さんはめんどくさそうによれよれと立ちあがり、これまたよれよれとどこかへ姿を消したと思えば、どこからかよれよれとシェトランド・ポニーの手綱をひっぱりながら、頼りなさそうに姿を現わした。すでにマレンゴには馬場鞍などの馬具が取りつけられ、申しぶんなかった。

馬の種類をいうだけで持ち主がわかるなんて、さすが馬屋番。

「ケガをしないためにも、『乗馬術』担当騎士のサー・テムズのところにいって、正しい乗馬方法を学んでから乗るんだぞ。ちなみにこの仔は黒人参が大好きらしい」

「黒人参が大好きって、お爺さんはマレンゴとお話ができるの？」

ヨセフ爺さんは彼女の質問には答えようとせず、すぐに「一週間に一回はここにもどすこと。ただし夜はだめ、わかったね？」と早口でいう。さらに「わしは質問されることが嫌いでね」とボソボソ

呟いた。
（きっとみの虫のひとみしりなんだよ）とジョジョ。
（ふう、みの虫のひとみしりね）

第3話　錬金術師ロベルト・パパティーノ【3】

第3話

シャルル・パリオリ子爵が住んでいる丘のうえ大通りは、その名のとおり、こんもりとした丘のうえに多くの赤煉瓦の家々が築かれていた。ナオミは預かった絵を手に持ち、もう一つの手には手綱をもち、ジョジョは彼女のかわりにマレンゴに乗り、口には化粧箱にいれられた、シルクハットのカスミ草を大事そうにくわえていた。

「ねえ、ちょっとだけ乗ってみなってば」

「だめよう」

ナオミは首を横にふった。

「…はじめての乗馬は場所を選ばなきゃ…」

「マレンゴのうえは最高だよ、ちょっと馬酔いするけどさ」

「ほらっ、おしゃべりばかりしないの。たぶんあの大きな家じゃないかしら？」

家のまえには「パリオリ錬金薬局」という看板、扉には「錬金薬担当騎士／騎士候補生の薬学教室はこちら」と黄金のプレートがはってあった。駐馬場にはたくさんのポニーがいるから間違いない、一部ロバがいるけど。

ナオミは大きな扉のまえにたち、大きく深呼吸をして、扉の把っ手をトン、トン、トンッと三回ほど叩いた。

「すみませーん、『ピーター・ティソのお花屋』です。花言葉のお届けに来ました。誰かいっらしゃいますかぁ？」

扉が遠慮がちにかすれた音をたてて、こっそりと開いた。

「誰かね？」

扉からでてきたのは「変人だ」とジョジョはいうが、変人みたい

な博士のような姿をした若い男だった。両手にはビーカーを持っている。ビーカーの中の液体は赤色だ、しかもボコボコッと大きな泡をたてて沸騰している。

「…あ、あのう。お花を届けにきたんですけど…」

「んんん？　いやはや、こんなものは頼んだ覚えはないが？」

ナオミは博士の姿に戸惑いながらも、大慌てで「このカスミ草にキャサリン・ハイネの花言葉（メッセージ）が言葉が入っています」と画家の言伝をそのままいった。

「あーあ、あの変わった絵描きさんのお使いか…」

そういうお前もだいぶん変わっているけどな、とジョジョ。

「あいにく両手がふさがっていてね、申し訳ないが奥の部屋まで運んでくれたまえ。そうだ、今日は騎士候補生がきているから、彼らに手伝わせよう」

ナオミはようやく花を届けることができて、胸をホッとなでおろした。と変人、いや失礼。男に呼ばれてやってきたのはテルとロロの二名だった。一週間ぶりの再会に三人は喜びあい、ジョジョは犬らしくしっぽをふった。

「なんだ、君も騎士候補生か。じゃあ、ついでに僕のサロンによっていきなさい」

仕事を終わらせたナオミが案内された部屋は実験室のようだ。タマゴの腐ったにおいがただよう。ナオミは夢でみた新渡勇人の理科室の騒動を一瞬、思い出した。

（…うえっ…）とジョジョ。

「適当に空いている席に座りなさい」

ナオミはちょこんと後ろの席に座った。まわりをみわたせば三十人ほどの騎士候補生たちが席に座り、そのなかにはテルとロロの姿もある。ナオミはロロにチラッと目をやり、テルは嬉しそうに彼女に手をふった。

教壇のまえには黒ヤギがごろんとうたた寝をしていた。

「あの人、もう人間だった頃を忘れているよ、きっと」

ジョジョはうたた寝する黒ヤギをみて、間違いないと唸る。

ちょうど講演がはじまる寸前だったらしく、シャルル・パリオリ講師はまず一人ひとりの出席をとったあと、皆に騎士メダルを一枚配った。講演に出席したら騎士メダルを獲得できるというのが、騎士団教育のルールだ。

男から騎士メダルをもらって、現在メダルの総数は二十一枚だ。

「このサロンでは錬金術の医学と科学を学びます。騎士といえば乗馬と剣というのが君たちが抱いている印象かもしれません。だが今の時代、馬は車、剣は拳銃に取って代わられており、騎士は馬を自転車がわりにしか用いておらず、剣はただの飾りになっているのが今日の現状。よって馬や剣など扱えなくてもよろしい。僕が教えるのは錬金術、ミスリル鉱石の発見によって、銅や鉄を黄金に変えることを禁じられた今日、錬金術は医学的発展を遂げました」

彼のこんな話にテルは呻き声をあげ、ロロはいつもどおりすかしている。ナオミは胸をわくわくさせていたが、あの音痴のマイケル・コービー少年は今朝配達してきた、牛乳の残りをごくごくと喉をならして飲んでいたため、「君は騎士メダル三枚没収だ」とシャルル・パリオリの顰蹙をかった。

パリオリはコクーン・コ・クーボ著の「錬金術」を開いた。

「誰か、その次を読んでくれますか？」

彼の言葉は実験室は一瞬で静かにさせた。

「よし、今日は一月の十一日だから、うーん…そうだな」

誰もが一月十一日生まれの子どもか、一列目の十一番目の席に座

っているロロが当てられると思った。テルは知ったかぶりがどこまで知ったかぶりなのか、確かめてやろうと嬉しそうだ。
「そういうわけでそこの黒犬の女の子！」と彼はナオミを指名した。「第一の質問だ。両性具有の怪物モンストゥルム・ヘルマフロディトゥスの正体とは何か？」

ナオミは目が点になった。
本を読むにしても荷物は今日、届いたばかりなのだ。ロロからは四角に折りたたんだ質問の答えがまわってきたのだが、「これはルール違反だよ」とパリオリに没収されてしまった。
「…あの…その、先生。ごめんなさい…」とナオミの小さな声。
「わからないのならわからない、正直にいえばいい。知らないくせに知ったかぶりをする子のほうが僕は恥ずかしいと思う」
博士の言葉にロロは顔を赤らめ、テルはぷーっと吹きだした。
「…知ったかぶり…」
テルは嬉しそうにロロにむかってぼやく。

「ではそこの少年、エリクシャーとは何かね？」
「はい、エルクとシャーのことです」テルは三秒で答えた。
この教室はガウェイン地区にあるのだが、もちろんどの地区の子でも年齢に関係なく学べる。そこにはモードレッド地区のパパティーノ兄妹やハレルヤもいた。マルコとハレルヤはテルの答えにもうすぐで今朝、食べたものを吹きだしそうだった。
「おい、コラッ、牛乳瓶の少年！　難しいからといって居眠りしない。罰として錬金術の秘儀と教義、今までの質問のすべてを答えなさい。答えられなければ、さらに君の騎士メダル二枚没収だ」

牛乳瓶の少年マイケル・コービーはわからないと唸る。
パリオリはロロに名誉挽回の機会を与えた。コービーの代弁を許可したのだ。彼は皆の注目をあびるなか、襟をただしてしゃべりは

じめた。

皆の視線がロミオ・ロートレックに集まった。

「…錬金術の秘儀とは不老不死のことだ。錬金術とは文字通り『黄金をつくる』術。錬金術とは不健康な状態にある卑金属、これを健康な金属である金（貴金属）に昇華させる技術でもある。つまり健康な金属である黄金は、化学的に安定した鉱物特性を持つため、永遠に錆びることや変質することはない。これを俺たちに当てはめた場合、病気や老化することのない不死の肉体を得ることになり、これが錬金術の教義だ」

少年の言葉に教室中の皆が「うおぉー」と驚きの声をあげ、キング・アーサー騎士団の子どもたちは拍手喝采だ。

ナオミはロロにうっとり、そんなナオミにテルは地団駄をふみ、ロロは「できて当たり前だ」と相変わらずすかしている。もちろん少年の完璧といえる、見事な錬金術の教義説明にシャルル・パリオリ本人も驚きを隠せなかった。

「素晴らしいそのとおり！　続けたまえ！」

パリオリにほめられても、ロロは顔色一つかえない。

「水銀はほかの金属と容易に結びつき、アマルガム合金をつくりだす。そうした合金の多くはもとの金属よりも頑丈になり、熱に強くなり、さらには別の特性を帯びる。

つまり両性具有の怪物モンストゥルム・ヘルマフロディトゥスとは、液体である水銀が金属という相反する特性を融合させることからつけられた、いわゆる錬金術界における水銀の別称。ちなみに水銀はこの世に存在する、すべての金属の構成要素であり、錬金術になくてはならない材料ともいえる。

この水銀をもとにして作られるのが賢者の石。この石は他のあら

ゆる鉱物よりも純粋であるため、わずかな量があれば鉄や鉛などを黄金に変えることができる。

また水銀はその賢者の石をつくるための重要な材料だ。最後にエリクシャーはエリクシールとか、一般にエリクサの名で知られ、賢者の石と並んで錬金術の秘法、つまりは錬金薬。

賢者の石は大エリクシャーと呼ばれており、錬金薬の最高級品。賢者の石の効力が黄金なら、エリクサの効力は不老不死、またその効能は、姿形を変えられた者や呪いをかけられた人をもとの姿にもどしたり、あらゆる万病に効果を発揮する」

「素晴らしい、申し分ない。君に騎士メダル五枚をあげよう」

思わずシャルル・パリオリはロロの手を握った。

第４話　錬金術師ロベルト・パパティーノ【４】

薬学教室では受講料としてミスリル銀貨一枚で、実技も体験できる。パリオリの錬金術の実技は三人一組で賢者の石を砕き、金箔とまんべんなく混ぜ合わせるというものだ。

ナオミとロロは手際よくこなしていたため、パリオリから騎士メダル一枚をひそかに受け取っていた。テルはあいかわらず舌打ちをしていた。

「ちぇ、先生。炎のなかにトカゲがみえるよ」

「こいつは温度計みたいもんだから、気にしなくていい」

このトカゲは錬金術師パラケルススの四大元素の火、水、風、土のうちの火を司る精霊サラマンダーだとか。火を焚き、それが一定の温度になれば、その炎のなかに現れるトカゲだそうだ。

「ドロドロになったら火をとめて、型に流しこめば金の延棒の出来上がりだ」

そのときだった。大きな悲鳴がナオミの隣から聞こえた。

パパティーノ兄妹とハレルヤの班だが、黄金色になるはずの液体が今や銅色になり、とても焦げくさかった。それだけならよかったのだが、銅色の液体からいきなり悪魔のようなものがぬっとでてきたのだ。

「…欲望に身を任せる愚か者よ、我とともに冥界にまいろうか…」

悪魔は少年たちに手を差しだす。

「……」パパティーノ兄妹とハレルヤは青白い顔をしていた。

「モンストゥルム・ヘルマフロディトゥス、両性具有の怪物。黄金

の練成に失敗すれば、水銀から生まれるという悪魔。練成に失敗したものを冥界に引きづりこみ、賢者の石にしてしまう失敗のいわれです。これが水銀の別称の名のいわれ」

「サー・パリオリ。はやく退治しろよ！」

マルコの命令口調に「君にいわれなくても、今からそうするよ」とパリオリは三角フラスコにたっぷりとはいった、聖水を鍋のなかに注ぎこんだ。

「賢者の石は、欲望と物体をかけあわすためのつなぎ――なんだ」

聖水、赤ん坊のよだれから精製したといわれる邪念のない清らかな水だ。パリオリはその水をもって、邪な想いから生まれた悪魔を中和する。聖水を注ぎこまれるとともに、鍋から悪魔のおびただしい悲鳴と叫び声が聞こえてきた。

ウキャキャアアア――――――！

悪魔を中和した聖水、いや欲望を中和した聖水は黄色のどこか懐かしい、においがする液体にかわった。

「賢者の石は人間の欲望を増幅させ、ときにその欲望は悪魔を生みだします。皆さんがつくった黄金は欲望の塊であって、本当の黄金ではない。誰よりも豊かになりたいと思う、歪んだ人間が生みだした欲望の塊にすぎない。その欲望を打ち砕くのが鍛えられた人間性だ。はい、これで僕の講義は終わり」

値打ちなどまったくない、とパリオリは出来上がった金の延棒をパキッと二つに折ってみせた。なるほど中身はただの赤い岩だ。この赤い岩、どこかで見たことがある。一体どこだろう？　いまひとつ思いだせない。

テルは黄色くなった、異臭を放つ聖水をじっとみている。

「飲んでみなよ」
テルが真顔でジョジョに囁く。
「僕なら遠慮するね、だってこれはアンモニア水だよ」
パリオリの言葉が正しいなら、これは別名『おしっこ』と呼ばれるものだ。
「…へえ。だったら尚更、飲んでみなよ」とテルがまた真顔でジョジョに囁く。

人は日々、欲望のなかを生きている。
毎日、トイレで尿をだすのは欲望を外に逃がしているのだとパリオリはさりげなくナオミたちに説明した。ジョジョは「だったらジャンは口から聖水をだして、尿からは欲望をだすんだな。変わってらあ」と唸った。
十五分後、この地下牢のような教室からはナオミたちをのぞいて、誰もいなくなった。恐怖をあじわったパパティーノ兄妹は「絶対に父上にいいつけてやる！」と捨て台詞を吐いて、教室をすたすたと逃げるように去った。

ナオミたちが黒ヤギになったダ・カーポのことを話せば、パリオリは「それは考古学者をヤギにした、ロベルト先生本人に直接聞いてもらうしかないよ」とせせら笑っていた。
「ロベルトって、あのまさか…」
ナオミたちはゴクッと喉をならした。
「ロベルト・パパティーノ、僕の錬金術の師匠だよ」

「嘘でしょ！」ナオミは一瞬、パニックに陥りそうになった。
「君たちに嘘をついても仕方ないじゃないか」とパリオリは小笑いしながら、コクーン・コ・クーボ著の『錬金術』という本を片手に持っている。

ロベルト・パパティーノなる人物は『迷いの森の一味』と噂され、あの考古学者ダ・カーポを黒ヤギにしたという張本人だ。その張本人がシャルル・パリオリの錬金術の師匠というのだから、これは驚かずにいられない。彼の説明によればロベルト・パパティーノはあのパパティーノ家とは関係ないそうだが。

「そもそもパパティーノ姓は、そんなに珍しい苗字じゃないしね」

「…あ、あの、その人は今どこに？」

「奥の部屋にいる。今、黒ヤギの呪いに頭を悩ましているところだ」

ナオミたちはさらに驚いた。

「会ってみるかい？」

ナオミがコクッと頷くとともに、パリオリが奥の部屋を遠慮がちにノックしてみれば「シャルル、今はだめなんだ」という声が聞こえてきた。

「その言葉、すっかり先生の口癖ですよね」

パリオリのすすめで奥部屋にはいってみれば、そこは一部屋だけの小さなアトリエ。例の男は毎日ブルトン新聞を読みながら、アールグレイを優雅に飲んでいた。

「先生、今のどこがだめなんですか？」とあきれ顔のパリオリ。

「今は休憩中だよ、これも僕の仕事のうちだ」

休憩も仕事！　なんて素晴らしい言葉の響きか。

「それよりもお客さんですよ」

ロベルト・パパティーノはパサッと新聞を机においた。

噂の男は紅茶をぐいっと一飲みして、ダ・カーポが黒ヤギになった経緯を話し始めた。

「なるほど、君たちはダ・カーポ博士の友人なのか…」

「…友人というほどでも…」

正確には古代魔法の実験体（モルモット）というべきかもしれない。

ナオミの話をさえぎりながら「じつはね、ダ・カーポ博士には本当に悪いことをしたと思っている」というがロベルト・パパティーノに反省の色はない。というのもダ・カーポがナオミたちの魔法実験に失敗したときの、あのときの瞳と同じだからだ。

類は類を呼ぶ、眷属は眷属ということかもしれない。

リンゴのように黄金をガブリッと食べられたら、どんなに素晴らしいだろうか。あの黄金を食べたいと思っている人は、この世のなかにはたくさんいるはずだ。

きらめく黄金をガブリッ！　なんて、まさに究極の贅沢。

きっとバカ売れするに違いない――との思いつきから作ったのが試作品「黄金のリンゴ」だ。限定販売したところすべてを買いたいという人が現われた。

「…その人が考古学者ダ・カーポ先生…」

「僕、その気持ち分かるなあ」と茶目っ気いっぱいのテル。

「この芸術が理解できるのか！　君は将来、必ず偉くなるぞ！」

ロベルト・パパティーノは自分の芸術の理解者がまた一人、見つかったことに大喜びだ。あとになってわかってことが、黄金とリンゴを混ぜ合わすとき、一本のヤギの毛が混じっていたという。

その結果、黄金のリンゴは見事に完成したものの、副産物（ふくさよう）として食べた者をヤギにするという呪いがついてしまったとか。それが新聞で何やかんやと騒がれ、世間を騒がしてしまったそうだ。

「いやあ、まったく申しわけない、どうだね、クッキーでも？」

やはり男に反省の色はない、ロベルト・パパティーノは毎日ブルトン新聞を指差した。ナオミたちは毎日ブルトン新聞の記事に目をとおしながら、クッキーをポリポリとさりげなく食べていたが、ある記事のところで目がとまった。

その記事にはこんなことが書かれてあった。

『サンチョ・ボブスリー、いまだに逃亡中』

輝かしいキャリアをもっている、迷いの森の特別捜査官たちによれば、脱獄犯サンチョ・ボブスリーは追跡の手を逃れ、逃亡中だそうだ。泣く子もだまる、あの特別捜査官次官ムッシュ・ホワイトは「我々もサンチョ・ボブスリーの再逮捕に全力にあたっている」とのことだが、彼の言葉はどっかの国の政治家のようにあてにならない。

毎日ブルトン新聞記者クラブの当局筋によれば、迷いの森の捜査本部及び特別捜査官たちは今日になって「サンチョ・ボブスリーがジェラール老人に入れかわり、脱獄したのはご存じのとおり。我々は貴重な情報を手に入れることに成功した。彼がアッパータウンに潜伏している可能性が高いこと」との談話を発表した。

ちなみに余談だが、宮中の報告によれば歴代公爵アーサー・ブルトン陛下が迷いの森の一味にまた御命を狙われたとのこと。これで四回目だ。幸い陛下は無事だったが、幾人かの側近が犠牲になったそうだ。犯行道具は捜査本部が現在、確認中とのこと。

呪いをかけられた人間をもどすエリクサは『アルカヘスト』という燃える水だ。あらゆるものを融合させる液、賢者の石の材料のひとつ。この水は万物融化液、医師にして伝説の錬金術師パラケルススが万能薬として認めた代物。

残念ながらアルカヘストの製法や扱いかたなど、この秘法が後世に伝えられることはなかった。油の時代へと移り変わる十九世紀中期以降、近代錬金術の世界では実在しなかったのではないかという

声さえあがっているほどだ。

「アルカヘストは一子相伝の秘薬、確かに存在はするよ。錬金術師パラケルスス一世は医者の家系でね。宮廷医のパラケルスス十六世が悪魔崇拝の罪で、モン・サン・ミッシェルに投獄されてから残念ながらアルカヘストは世にでまわらなくなった」

「じゃあ、もうアルカヘストは…」

ナオミの悲嘆にくれる声だ。

「まあ、その息子がこの町に住んでいるとか、いないとかの噂を聞くがね。その人物ならもしかして、アルカヘストの製法を知っているかもしれない。ただ変わり者っていう噂だよ」とロベルト・パパティーノにいわれては世話がない。

つまりその人物を捜しだす必要があるのか――どうやら先は長いようだ。ダ・カーポには申し訳ないが、もうちょっと黒ヤギ生活を楽しんでもらう必要があるだろう。そんなナオミを横目にジョジョは「欲に目がくらめば、痛い目に遭う。人生の教訓だよ」とぼやいていた。

――――時刻は午後一時。鳩時計が静かに時を告げる。

第5話　錬金術師ロベルト・パパティーノ【5】

第5話

「うーん、同じような絵は二枚もいらないんだけどなあ」
一本のアスパラガスの絵画をみて、男は顎に手をやって唸っていた。

錬金術師パリオリによれば、この絵とは別に居間に飾るためにキャサリン・ハイネからアスパラガスの束になった絵を買ったらしい。ただ彼女は初めて絵が売れたとあって、しかもびっくりするほどの値段だったようだ。
それが燕尾服（テールコート）及びモーニングコート着用時に用いる、第一正礼装用のシルクハットの植木鉢となった。相手に帽子を贈るということは感謝を表するということ、画家らしい心遣いだ。

「…シルクハットを植木鉢にするなんて、お洒落な人だなあ…」
パリオリは花を瞬時に枯らせるための水、枯れ水をシルクハットにジョボジョボと音をたててそそぐと、カスミ草はペシャッとへなへなになり、茶色くカサカサになった。するとキャサリン・ハイネの声が聞こえてきた。
「…サー・シャルル・パリオリ＝ガウェイン卿閣下。一週間前に買って頂いたアスパラガスの束から、一本のアスパラガスが私のアトリエに抜け落ちていましたので、お届けさせて頂きます――ではあしからず…」
彼女の言葉にロロはテルをみ、「アホ。何度も言わせるな、僕はアボカドだ」と少年は舌打ちした。

「おお、なんとエレガントな！」

パリオリはさすが芸術家、ウイットに富んだ発想だと唸る。

一週間前に買った、あのアスパラガスの束の絵から、あの束から一本抜け落ちていたというのだ。そういえばこの絵は八百ミスリルしたが、パリオリは「この絵はそれ以上の価値がある！」といって、一千ミスリルの代金を支払った。

そのお礼に彼女は、シルクハットの花と一本のアスパラガスを贈ってきたのだ。感謝には感謝をもって伝える。お金とは感謝の心の表れだと画家の作品は物語っていよう。

その感謝の心と相反するものが欲望、その欲望から生まれるのがあの両性具有の怪物モンストゥルム・ヘルマフロディトゥスだ。授業では欲望という悪魔を打ち砕くには鍛えられた人間性が必要だ、とパリオリはいっていた。

鍛えられた人間性、それは人に対する感謝の心かもしれない。

要約すれば「ありがとう」という言葉だといえる。ナオミはふとアリサ夫人の赤いカーネーション、ありがとうの花のいわれを思いだした。

テルはアスパラガスの絵をみて、気に入らないと唸る。

テルの絵という言葉で、ロベルト・パパティーノは何かを思いだしたようだ。

「そうだ、君たち。今、この町では絵画王ベリー・グッドウェル画伯の展覧会が美術館で催されているんだが、もしよければいってみないか？」

その言葉でナオミとテル、ジョジョは故郷カンペールを思いだした。

生粋のブルトン人パブ『山荒し（ハリネズミ）』の看板娘サンタマリアが、その人の絵のモデルをしている、とエンガチョと話をしていた気がする。

しかもその人はサンタマリアに気があるやないやらで、エンガチョがパブディナーを食べながら、ボソボソぼやいていたような気もしないでもない。

そもそも絵画王とロベルト・パパティーノとは古い付き合いらしい。

グッドウェル画伯が絵画王と称される、以前からのだったことから、入場券を二枚ほど送ってきたそうだ。自分はあまりにも多忙のため、展覧会に足を運ぶことができないため、ナオミたちに入場券を譲るとか。

「ダ・カーポ博士の呪い解放の研究が、あまりにも複雑で多忙極まるのだ」

これは自業自得だといえる――――にも関わらず、ナオミが断わるなか無理やり「いい勉強になるから、是非行っておきなさい」と男はチケットを握らせる。そんな少女にテルは「家に帰ったらちゃんと手を洗うんだぞ、ヤギになるかもしれないから」と迷惑千万とばかりにボソボソ呟いた。

少年の言葉に誇りを傷つけられた、ロベルト・パパティーノは絵を眺めていった。

「シャルル。このアボカドの絵は大変素晴らしい、君はいい買い物をしたね！　さすが私の弟子だ」

「先生、アスパラガスの絵ですよ」と苦笑するパリオリ。

第6話　騎士団社交界のとある教室【1】

第6話

駐馬場にでてみれば、自分たち三頭の馬しかいなかった。
時刻は午後二時だ。これから二人はどうするのかと聞けば、テルはおつかいの途中らしいが、今日はサボるとのこと。ロロは親方が二日酔いのため仕事が休みらしい。三人そろっての社交界めぐりは初めてだ。
「じゃあ、今日はみんなで社交界めぐりしよっか」
ナオミはどことなく嬉しそうだ。

「サロンならロロに訊けよ、けっこう詳しいからさ」
この一週間程度でテルとロロは少し仲良くなったようだ。
「めんどくさいことは、すぐこっちにふるなよ」
ロロは錬金術に関してかなり詳しかったことから、きっと何回かパリオリのサロンに顔をだしているに違いない。もう社交界慣れしているかのようにもみえる。

三人はああやこうやとペチャクチャと話しながら、人気がある教室をまわった。教室めぐりは本当に小さいながらの探険だった。古びた蔦の葉だらけの洋館のなかをとおったり、ゴーストたちの集会所を通り抜けたりしたときは本当にドキドキした。
「あっ、ここ。あのちょび髭の教室だぜ、よってみるかい？」
「…くだらない雑学だよ、この教室は…」
くだらない雑学、サー・エドモンド担当の「豆知識及び雑学」教室のことだ。ロロは時間の無駄だといっていたが、本当に時間の無駄だった気もしないでもない。

サー・エドモンドは頭が鳥の巣、ちょび髭を生やした肥満親父、いわゆるデブだ。

彼は本屋の主人なのだが、知識を講義することより本を売ることに一生懸命、彼にいわせるところ「本を読めばすべてがわかる」とか。そんなサー・エドモンドも、トリスタン地区子爵という知識の名門一族だ。

「ええ、魔法にはざっと二種類あります」といって、本屋の主人は魔法の種類という本をナオミに買わせようとする。

商売熱心はいいのだが質問の答えに本を買わせるなんて、いやはや困ったものだ。テルなんかは「いらない」と拒むも、モンスター大図鑑を買わされてしまった。

少年がもう二度とこないぞ！　と唸ったのが効果覿面だった。

「では特別に講義致しましょう」とお客が減っては困ると、エドモンドは折れた。

魔法には白魔法と黒魔法がある。

白魔法というのは聖教、すなわちドルイド教公認の魔法のことだ。逆に黒魔法は聖教に認められなかった魔法のことで、いわゆる禁断魔法、封印された知識だと――――エドモンドは渋々、ナオミの質問に答えた。

「先生、アグリッパ教はなぜ『悪魔教』と呼ばれているんですか？」

「白魔法ではなく、黒魔法を崇めるからです」

白魔法を崇めるドルイド教、彼らと相反する黒魔法を崇めるアグリッパ教。彼らは千年もの間、己が教義を争ってきたことはいうまでもない。こうして聖教対悪魔教、白魔法対黒魔法の対立構図が出来上がった。以後、現在までその対立は続いている。

「君たちが復習に書籍を買ってくれることを期待します」

属性鑑定という雑学では、騎士の属性について学んだ。ナオミは

攻撃系というよりも白騎士と呼ばれる、治療専門の騎士というのが、エドモンド先生の見解だ。

「はい、白騎士のなかでも『聖騎士（パラディン）』と称される騎士たちは、医学（ヒーリング）の超専門家（プロフィッショナル）です。ミス、ニト。私は魔法の治療薬の本の購入も、おすすめしますよ」

騎士の職業はだいたい属性によって区別され、ナオミの場合は医師や看護士などの医療の仕事につくことが有望だとか。

ロロの場合は邪念が多いことから黒騎士（アサシン）と呼ばれ、密偵や暗殺といった、いわゆる悪事に手を染める仕事が相応しいと属性鑑定され、「S専門、陰気な拷問の仕方。初心者用」という本をすすめられた。

テルは攻撃専門の狂戦士（バーサーカー）の気があるといわれ、「人を殴りたくなったら、まず深呼吸！」という本をすすめられた。

第7話　騎士団社交界のとある教室【2】

第7話

「レディ・ナオは素晴らしい騎士になるでしょう！」

ナオミのことをナオと呼ぶのは、剣術指南役のサー・アルフレド・ガルニエだ。彼は現役の軍警察、軍部の人間だ。両サイドをピンッと立たせた、皇帝のような雰囲気の皇帝髭（カイザル）が特徴な魔法剣担当騎士でもある。

軍は別名『十字軍（レッドクロス）』と呼ばれ、伯爵の領地ごとに十字軍が駐屯している。アッパータウンの場合はアッパータウン十字軍、もしくはアッパータウン師団と呼ばれている。

領地内の十字軍の最高指令官はもちろん各伯爵だが、地方の十字軍には必ず『城伯』が一人いる。彼らは軍部次官から派遣された伯爵の監視役にして、有事の際は各伯爵の副官として、伯爵を助ける責任がある。城伯は伯爵の位と相当する軍役職だ。あの永久機関式飛行艇ナヴァグリオの船長サラ・レッドブルが以前、その地位にあったことが記憶に新しい。

城伯は主要な城塞警備と伯爵の監視を任せられており、これらを統括するのが軍部次官だ。

軍部次官は各地域の十字軍師団を動かす権限、つまり歴代公爵から元帥としての地位を任されている。従って軍部次官とは有能な城伯から任命されるといってもよい。ちなみにガルニエはこのアッパータウンの城伯である。

ガルニエのところでは戦略の講義、団体戦の心得、剣の実技を学ぶ。一対一となって相手と立ち会ったり、軍略やらの実践に最初に

根をあげたのは根性なしのテルだ。ロロにボコボコにされ、機嫌が悪いとはいえ、少年は科学技術が発達した現代にあって、剣など旧時代の産物だと生意気にぼやく。そういうテルはガルニエと気が会うのか、この剣術教室に毎日通っている。

「ガド！」

この先生は親しみをこめて、生徒の一番最後の名前を呼ぶ。

「ぼやくまえにビーと立会いなさい。昨日、教えた電撃の魔法剣を使ってもいい」

テルはロロならともかく、マイケル相手なら負ける気がまったくしないと「死んでも恨みっこなしだぜ、コービー。本気でいくぞ」と剣をかまえた。

「…ぼ、僕は絶対に君に勝ってみせる！　決意はできてるんだ！…」

言葉とは裏腹に少年は足が恐ろしいとばかりにぶるぶると震えている。ガルニエは何かをひらめいたようだ。マイケルに「充電、よろしく」と自分の電話石（モバイルビー）を投げ渡した。

「ウリャ！」とテルの剣は少年をとらえるも、コービーも負けてはいない。

少年たちの攻防は十五分もかかった。剣と剣が激しく火花を散らす。両者とも息があがろうが、相手を攻める覇気にかわりはない。

「やれやれ、そこだ！」観客が彼らをさらにけしかける。

「一気に攻めろ！　そこだ！」

ナオミは固唾を呑んで二人を見守る。

「これでカタをつける！」

テルは剣を地面に突きさして覇気をこめた。

彼の覇気に連動するかのように、マイケルの真上に暗雲がゴロゴロッと唸るように立ちこめた。

ピカッーと雷鳴とともに激しい地鳴りが轟く。

――――ゴロォガラァアアアアア――ッ！！！！

「アスガルドの神トールの裁き、雷帝の聖電撃（サンダーボルト）！」

テルの雷寄（らいよ）せの呪文だ。少年の魔法力に呼応したのか、テルの剣に雷が嵐のごとく、矢のごとく、雷鳴が降りそそいだ。

「これでお前はビリビリだぞ！」

テルは呼び寄せた雷とともにマイケルに襲いかかる。

マイケルがテルの剣を受け止めた瞬間、周囲にものすごい電撃と放電が奔り、地面が衝撃波でえぐれた。辺りは焼き焦げ、砂煙が舞い、二人の姿はわからない。そよ風が砂煙を東の方向へといざなってくれる。誰もがマイケルの負けだと思った。

「…僕の負けだ、降参する…」

と、声を荒げたのはテル・ウォ・アボカドだった。

砂煙が晴れると、マイケルがテルの首もとに剣を突きつけている。少年が持っていた電話石が避雷針のかわりになったらしく、ビリビリと放電している。最後に勝ったのはテルを必死に攻め抜いたマイケルだ、これには皆が驚いた。

「はい、そこまで！　勝者マイケル・コービーッ！！」

アルフレド・ガルニエの右手があがった。

「あ、あの牛乳瓶コービーが？」

「雷撃のテル・ウォ・アボカドを打ち負かしたって？」

ざわつくナオミたちをガルニエがパンパンッ、と両手を叩いて静かにさせた。

「いいかい、ガド。電撃の弱みは放電物質、つまり電子の吸引物質に弱いということだ、覚えておきなさい」
アルフレド・ガルニエは、マイケルから電話石を返してもらうと「愛しのエリー」と呟けば、講義中にも関わらず、ガルニエは恋人とイチャイチャな電話をかわした。皆がガルニエを白い目でみるなか十五分、コホンッと小さく咳払いした。

「いや失礼。まさに『必死の一平卒は百人の大将軍に勝る』、とはこのことだね」
「僕は軍人になるつもりはないから、弱くてもいいんだ！」とテル。
ガルニエはとても満足げに微笑んだ。
「ガド、どうしてビーに負けたかわかるかね？」

テルは持久力の問題だといえば、ガルニエは「いや忍耐力ともいうがね」と付けくわえた。
勝つということは負けないことでもある。負けないことが勝利するということ、勝つことよりも負けなければ、あとは相手がテルみたいにへばる。
「結論を言おう、ガド。中途半端な決意で挑んだから君はビーに負けたんだ」
「中途半端な決意だって？　僕はいつも本気さ！」
テルは声を荒げた。
「どうかな、ビーは心の底から君に勝ちたい！と決意できたから、戦闘能力・魔法力ともに勝っている君に勝てたんだ。決意ができたら半分は勝てたんだ。これは奇跡でもなんでもない。ビーは勝つべくして勝ったんだよ」
例えば相手が自分よりも強い。魔法力もある。経験もあれば、剣の腕もたつ。
「こりゃ、勝てないな。無理だな」そう思ったら、その時点で決着はついている。

「魔法力がない。じゃあ、修行して魔法力を高めよう！」もしくは「経験がない。じゃあ、経験を積めばいい」「魔法力もない、経験もない。じゃあ相手がへばるまで待とう！」「相手がへばるにはどうすればいいのか？　それなら知恵を使えばいい」

これがマイケルがテルに勝った要因ともいえる。

「大事なのは勝つと決めた者が勝つということだ」とガルニエ先生。

テルはいまいち納得いかない様子だったが、ナオミとロロは正論だと頷く。尻をつき、へばっているテルに「それにテル、人の人生はどう転ぶかわからんもんだ」とガルニエは右手を差しだしながら少年を立ち上がらせた。

「そうそう野ばらダックの丸焼き香草（ハーブ）入りを、こんがり焼く時間は約二時間だ。それ以上焼けば真っ黒の墨になるし、それ以下は生焼けだ。いいか、先輩からのアドバイスだぞ」

アッパータウンの城伯で知られるアルフレッド・ガルニエ。

そんな彼にもシャトー・ブルトンホテルの親方に従事した、騎士候補生時代があったことはいうまでもない。騎士候補生時代での仕事が、そのまま未来の仕事になるのはごく稀な例だ。

騎士の定義を要約すれば義務教育といえる。

そう騎士は職業ではない、ブルトン社会の義務教育を卒業した者に与えられる地位だ。その後、銀行家や法律家、医者や教育者、どんな職業についても、命がけに相手に挑んでいかねばならないときがある。自分が正しいのならば、何がなんでも勝たねばならないときがある。

人生において、こういう決断はしばしばあるものだ。

ときに数多くの辛く苦しいことにも出会うかもしれない。そのとき「もうだめだ！」と負けてはならない。絶望のなかの絶望、生き

るのさえも辛いときもあるだろう。呼吸をするのも辛いときもあるだろう。身に覚えのない非難中傷のなかにあっても、勇気を与えてくれるものがある。それが胸に抱いた「自分が思い描く夢」である。

そして物事において苦しいと思うときが、だいたい頂上の場合が多い。おのが山を制覇、絶景を眺めるかどうかは紙一重といえよう。平たくいえば、あきらめなければ道は拓くということだ。

人生は常に弱い自分との戦いともいえる。

人は状況や物事、出会いによって心が揺れ動く。だが突き止めていえば、自分の心を動かして他ならぬ自分である。目的を達成できる自分になれるのか、現実に流されて後悔する自分になるのか、それは結局、自分自身で決まるといってもよい。自身の理想を実現していくためには、まず自己の厳しい対決に勝っていくことが必要だ。

「僕の剣術教室で学ぶことはただ一つだけだよ。そう、いざとなったときの『負けじ魂』だ。全身全霊をもって、今、自身のやるべきことに有らんかぎりの大情熱を傾けていくことこそ、諸君がよりよい未来をつくる第一歩だと私は信じる」

そのうえで剣術は心の鍛錬、執念を培うものだとガルニエはいう。科学技術が発達した現代でも、最終的には人間の意志の強さが、勝敗を決するということを私たちは忘れてはいけない。

第8話　騎士団社交界のとある教室【3】

第8話

次に探索した場所は、ランスロット地区の裏通りにある教室だ。
テル・ウォ・アボカドが期待していた「悪魔祓い」では転生術について学んだ。
転生術は黒魔術とも呼ばれ、文字どおりヒトを悪魔に変える禁じられた魔法。狼男や吸血鬼に噛まれた場合にそう呼ばれるそうだ。
だがもっと恐ろしいのは、他人転生『カメレオン』だ。
密偵（スパイ）行為に用いられる魔法である。限定的にだが、自分と他人の心と記憶を入れ替えることができる。大抵は捜査対象の近親者に用いるのが常套手段だ。ただこの魔術は長時間使用すれば、もとに戻らなくなるという副作用がみつかったため、発明した年にすぐに黒魔術として禁じ手とされた。
「発明者は迷いの森の辺境伯モンテカルロです」

希代の大悪党の名は、瞬時にまわりの空気が重たくさせた。
講義終了後、ピックル・タナカにナオミたちが『剣と盾』の誘拐事件のおり、どうして逃げるように立ちさったのかと聞けば、彼は「何のことかね」と言葉を濁す。

ナオミはじっとタナカを見つめた。
「俺は狂騎士なんだぞ！」一瞬、テルの剣に雷が迸った。
ジョジョが「人を殴りたくなったら、まず深呼吸！」とすぐさま相打ち。
「わかった、わかった！　白状するよ。あそこにいたのはドラゴンヌにサインをもらおうと思って、彼のあとをつけていたんだ。九年前まで、あの人の名声は大変素晴らしいものだったからね」とタナ

カは彼女たちの厳しい追求に観念したらしく、「騎士メダル五枚あげるから、皆には黙っててくれ」といってきた。

ドラゴンヌは昔はチヤホヤされたかもしれないが、今はただの腰抜けだ。

それにしてもこのピックル・タナカ、いつも黒カラスに群がられ、大半の騎士候補生たちからは気持ち悪がられていた。

テルがいうには「僕の父ちゃんがいうには『黒カラスがたかっているヤツには気をつけろ』っていうんだ。だって死んだ『迷いの森の辺境伯』のまわりには、黒カラスがいつも飛びかっていたって噂だからね」と胸をはる。

「アイツ、ぜったい怪しいぜ」

騎士メダル五枚を握りしめて、テルは確信ありげにいった。

現在、ナオミのメダルの総数は二十六枚だ。

キング・アーサー地区の表通りに住んでいる、英雄伝説教室のドラゴンヌは的外れだった――――彼は立派な人物というよりも、やはり腰抜けだ。彼が住んでいる家は立派なのだが。タナカもこんな腰抜けのファンだなんて、いやはや残念な大人だ。

「レディ・ニトの質問に答えられる人はいますか?」

不精髭の元英雄は騎士候補生たちの誰かが何かを質問すれば、すぐに誰かをあてて、騎士メダルと交換に自分のかわりに答えをいわせるのが常套手段だ。

「先生、これは先生しかわからないことだと思いますけど…」

ナオミに自分の父母とどうやって、知り合ったのかの核心に迫られれば「今朝、シャトー・ブルトンホテルで食べた、焦げたフレンチトーストが原因らしい」といきなり腹痛を訴え、解毒剤をもらってくると外へと飛びだした。

テルなんかは「焦げたフレンチトースト、それって僕が作ったや

つだよ、たぶん」と誇らしげにいった。偶然、この教室にきていた
マイケル・コービーは尊敬の眼差しで少年を見つめていた。

第9話　一角獣【1】

第9話

――――時刻は午後四時。

万年時計塔の鐘の音が心地よく、耳に響く時間帯だ。

ナオミたちは各教室の授業を思い出しながら、キング・アーサー地区の東のはずれを歩いていく。ロロのいうとおり『ハズレ』の教室も確かにあったが、思い出すだけで名士たちの教室の多くは素敵だったといえる。

「ねえ、次はどこにいく？」

ナオミは壁の案内所を見ながらいった。

「ウシガエルの解剖教室って、きっと面白いと思うよ」

テルは瞳を爛々と輝かしていったが、ナオミは聞かなかったことにした。ウシガエルの解剖といえば、新渡勇人（ニト・ユージン）の夢が少女の脳裏にかすんだ。最近、あの悪夢は見なくなっている。

「じゃあ、乗馬教室にいってみましょうか。すぐそこだし――――」

噂のデビット・テムズの乗馬教室は町の郊外にある。

東のはずれから数分後、目の前の視界がいきなり拓けた。目に飛び込んでくるのはなだらかな丘、そして辺り一面の芝生に覆われる広大な牧草地だ。

「あれがアッパータウン牧場だよ」

噂の牧場は中世の面影が色濃く残っていた。

アッパータウン牧場には羊や牛、ガチョウなどいろんな家畜がいた。赤い屋根と石造りの中世ヨーロッパの面影を残している家並みがとても素敵な牧場だ。

近くには大運河からひいてきた小川が太陽の光に反射してキラキ

ラとまぶしく、ガッコンバッコンという音がする水車小屋がナオミたちの心を踊らせた。

中庭のある赤屋根の家畜小屋、ポンプで水を汲んでいる女の人、近くの池ではアヒル親子連れ、正方形の塀にかこまれたブタ、とここは時間がのんびりと流れている。それにしてもこの牧場はとても広く、牧場を二つにわけるかのように大きなあぜ道は、両脇に立派な赤い屋根の厩舎がずらりと立ちならんでいた。

「ひっろ――――い」

ナオミの感嘆とは裏腹に突然、テルが顔をしかめた。

「げっ、あの兄妹がいるぜ。どうする、やっぱり帰る？」

テルの嫌そうな顔から連想するところ――彼がいうあの兄妹とはパパティーノ兄妹のことだろう。

パパティーノいるところハレルヤもいる。ナオミはハレルヤよりも嫌なヤツなど、今までみたことがいなかったが、そのハレルヤが今ではパパティーノ兄妹の小間使い（パシリ）ではないか。兄妹はあのハレルヤよりもやり手の悪党なのだ。

「おい、ヤドリギ！　テムズを呼んでこいよ」

「……」

舌打ちが聞こえたのは気のせいではない。

太っちょのハレルヤはゆっさゆっさと身体を揺らして、厩舎に駆けていく。マルコ・パパティーノがあのハレルヤを顎でこきつかう姿は、なんだか爽快だ。

「…しゃくれが野ブタをこきつかってる…」とジョジョはぼやく。

騎士団社交界では騎士候補生が自由に教室を選べる。

教室をもっている担当騎士だって、この町には少なくとも百人はいるので、パパティーノ兄妹とはそれほど出会うことはない。でも

でも乗馬教室だけはこの町に一つしかないから、仕方がない。
「ほらっ、僕の馬、ロバだぜ。きっと笑いの種になるのがおちだよ。一度、パリオリのところでバカにされているからね」

テルはナオミとロロのポニーをみて、自信なさそうだった。
パリオリの駐車場のときに「変てこな馬だな」と思っていたが、どうやらテルの馬は馬ではなく、ロバのようだ。どうりで変てこなわけだ。
マルコ・パパティーノはよく乗馬の話をした。
自分の館の厩舎にはサラブレッドが七頭もいるとか、そのうち一頭は自分の馬だとか、それなのに今さら乗馬初心者用のポニーに乗るなんて恥ずかしい、といっていた気もしないではない。
しかもロバ、これは馬であることさえ怪しい、こんなのに乗るヤツはバカだと歓迎会の広場でいっていた。マルコの嫌味はきっと父親ゆずりだろう。
由緒正しいブルトン人出身の騎士候補生たちは、歓迎会の広場でもそうだが、よくチェスゲームの話をしていた。チェスゲームは団体騎馬戦――――ナオミはそこまでしか分からない。

牧場の芝生は青々としげり、風がとおりぬけるとフワッと波立った。馬たちは美味しそうに草をむしゃむしゃと食べていた。アッパータウン牧場の先には、迷いの森と町をへだてている町壁と町の門がみえた。
ナオミたちの姿を見つけたらしい。
マルコたちが「えっへん！　どけ、副伯子息のお通りだぞ！」と胸を張って傍にやってきた。少年の馬は威張るだけある。彼の馬は栗毛のアンダルシアンというスペイン王国産の素晴らしいポニーだった。
「馬は素晴らしくても、乗り手は馬糞みたいなヤツだけどね」
テルの言葉が耳に届いたらしい、マルコは不適な笑みを浮かべて

近づいてくる。

「おやっ、ナオミさん、君の馬はシェトランド島産だね。とっても似合っているよ、ところでその汚らしいロバは誰の馬かな？　おっと失礼、テル・ウォ・メキャベツの駄馬だった」

（そらきた、お望みどおりの答えだ）

テルはマルコの言葉が聞こえないふりするのが精一杯だ。

「僕の馬は西国（スペイン）アンダルシアン地方産の血統馬さ。この馬はチェスゲーム用に父上が買ってくれた名馬、どこぞの駄馬とは血統がちがうのさ、ふふん」

「僕のロバ『王様の耳はロバの耳』は駄馬じゃないぞ」

「へえ、へんてこな名前だな。それ、まさかこのロバの名前かい？」

テルはぐっと顔を赤らめ、「あの皇帝ナポレオン一世がアルプス越えのときに乗ったのは、じつはロバなんだぞ！」とロバの功績を称える。

ヨセフ爺さんが連れてきた馬をみて、ナオミは歓迎会のときコクリコ・サクラダの愚痴を思い出していた。老人の後ろからは「みんな、待ちくたびれている」とハレルヤに呼ばれ、テムズ先生が急かされてやってきた。

人参をやらないとすわりこんだままの馬、歩きながら常に馬糞ばかりする馬、ストレスがたまって円形脱毛症になった馬、馬屋番のヨセフ爺さんが、馬を持っていない子どもたちのために、わざわざ引き連れてきた馬はそんな馬だった。

「ほんと変な馬ばっかり…」

ナオミの言葉にテルがジョジョを見た。

「僕は犬だぞ、勘違いするな。それに変てこでもない」

ジョジョは失敬だとしっぽをふった。

頃合をみはからってテムズ先生は、両手をパンパンッと叩いた。
「まず馬を一列に整列させよう」

五分後には先生にむかって馬は横一列になった。
「さあ、今度は鞍に跨ってください。ほらっ、こういうふうに」
サー・デビット・テムズはキング・アーサー地区の男爵。金髪の細いシャープなしなやかな身体が印象的な二枚目だ。元騎手にして現在は調教師だ。
テムズ先生は鞍にすらりと跨ってみせ、騎士候補生たちの乗馬姿勢が間違っていないか、一人づつ見てまわった。
マイケル・コービーの馬は少年が近づくだけで頭をふっていやいやをするし、何度跨っても、後ろむきに跨ってしまう。無理やりに跨るので、すぐにマイケルを路上にふり落としてしまう。
「マイケル、僕の『王様の耳はロバの耳』と交換してやろうか?」
テルは息をきらす、マイケルを横目でチラリ。
「ロバはいいよ」マイケルの言葉にテルは舌打ちした。
ロバも耳をピクッと動かし、少年のほうに近寄ると草と間違えたのか、マイケルの髪をパクッとかじった。乗り手が乗り手なら馬も馬である。周囲に悲鳴と笑い声が響いた。

テムズ先生は笑いをこらえながら、また両手をパンパンッと叩いた。
「では皆さん、私の真似をしてついてきてください。進め、止まれの合図はすべて馬の腹部をブーツで軽く叩くだけですよ。決して手綱を強く引っ張ったり、余計なことは一切してはいけません。まず牧場のまわりを散歩(ウォーク)、常足でゆっくりと歩きますから僕のあとについてきてください。一、二、一、二!」

第１０話　一角獣【２】

今は七分の小休憩中だ。マイケルが馬酔いして、地面にへばっていた。

そんな少年のために馬屋番のヨセフは、牧場の東にあるボルゴウッドの森にある泉から、わざわざ冷たい水を運んできてくれた。

老人は水差しで少年の顔に水をパッとかけた。

「ひや、ちゅべたい！　でも生き返るよ」マイケルは顔をしかめた。

「あの森に湧いとる泉は迷いの森バラントンの泉が源泉。馬酔いによう効くんじゃ」

バラントンの泉、アーサー王伝説に謳われる泉だ。

泉の聖女ニムエと大魔法使いマーリンが恋に落ちた場所で知られる。

「そうそう男爵、一角獣（ユニコーン）が水浴びにきておったよ」

ヨセフがテムズにボソボソ囁いた。

「そうか、よし！」テムズは一角獣と聞いて、ナオミたちに「君たちは運がいい」と微笑んだ。

「今日の練習はここまでだ。残りの三十分はボルゴウッドの一角獣見学にしよう」

彼の言葉に皆が沸きたった。

「一角獣を見られるなんて幸運だわ！」

マルコ・パパティーノの妹リサは感嘆していった。

「じゃあ、五分後に森のまえで集合だ。一角獣を興奮させないためにも、馬は厩舎に置いてくるように、いいね？」

夜空は青紫色、一番星が輝く、時刻は夕方六時三十分。

テムズ先生のボルゴウッドの歴史話は、大変興味深いものがあった。

どんな歴史話かといえば、こんな話だ。かつてボルゴウッドの森は『迷いの森』と人々から呼ばれていたという。その所以はこうだ。アッパータウンは迷いの森の中にある。

当然、森の魔物どもの侵入を防ぐため、町のまわりには大きな石塀が築かれた。アッパータウン牧場の東にある、ボルゴウッドの森はこうして石塀によって、迷いの森から分離した。元迷いの森だけあって、ボルゴウッドの森は太古の原生林の姿を今も尚、とどめている古き森だ。

どこかでみた青い鳥が数匹、羽を休めている。

「さあ、あれが一角獣だ！」

テムズが指さしたところは、大きな原生林が朽ち果ててできた泉だった。そして泉のなかには水浴びをする、美しい馬がいた。

「おおおぉ――――！」

ナオミたちはその優美な姿に声をあげた。

美しい金の鬣、銀の毛並み、額には自分たちの剣よりも長い角が印象的だ。目は深い群青色だ。ただ非常に警戒心が強く、近づくものなら容赦なく、角がむけられる。

水浴びをしていた一角獣は彼らの姿に気がついたのか、ゆっくりとこちらに近づいてくる。不思議なことがあるもんだ。馬は泉の上、水の上をゆっくりと歩いて近づいてくる。一歩蹄が踏み出すたび、水滴のように泉に静かに波紋が広がった。

聖なる馬はナオミに角をむけた、威嚇しているのではない。

「…あなたを待っていました、私を解放する運命の者よ…」

――――不思議だ、一角獣が心に静かに問いかけてくる。

「私が？」ナオミは心のなかで、そう呟いた。

そうだとばかりに一瞬、一角獣と目が合った。優しい瞳だ。

偉大なる芸術に魂が触れた瞬間、人は感動の渦に巻きこまれるように聖なる馬との出会いは鳥肌となって、ナオミたちを襲った。

数分間、大いなる感動とともに一角獣は、ナオミのすぐ傍を静かに通りすぎると、どこかへと姿を消した。少女の心と耳に一角獣のあの意味深な言葉が何度も木霊してくる。

私を解放する運命の者？　どういう意味だろう？

「ねえってば！　ねえってば！」

ナオミが顔をしかめてジョジョの顔をみた。

「もーう、なによ。お腹がすいたなら、親方の家まで我慢しなさい」

ナオミは感動で心とお腹がいっぱいのようだ。

「ここどこ？」

ジョジョはナオミの言葉を無視して、辺りを見まわした。

「……」

本当だ、ここはどこだろう？　ナオミは言葉を失った。

どうやら一角獣のあの意味深な言葉を考えているうちに、ナオミとジョジョはテムズの一行と離れてしまったようだ。ボルゴウッドの森は元迷いの森といえども、けっこう深くて不気味な森だ。

「アレじゃないかな？」

ジョジョがテムズらしき人影を鼻でさしていった。

「さすがジョジョ、鼻が利くわね」

木陰に隠れているようだが、確かにアレは人の影だ。

が、人影はテムズでもロロでも、テルでもなかった。木陰で待ちかまえていたのは血に飢えた白き狼フェンリルの群れだった。

「フェンリル！　白き悪魔の申し子がなぜ！」
悪魔の申し子はざっと数えて六頭の群れだ。この空気のよどみはあのときと同じだ。あのカンペールの古森と同じ感覚だ。ナオミは既視感（デジャビュー）を感じた。
――――これはもしかして謀られた？　一体誰に？
もちろん犯人は分かっている。自分の命を狙っている暗殺者（ヒットマン）にじゃないか。確かにアレは人影だった――――気がしないでもない。
「でもあのときは違うよ…」
ジョジョがたじろいながらいった。
そうだ、あのときはサンチョ・ボブスリーが傍にいてくれた。
今は「あのときとは違う…」ナオミはジョジョの言葉を無意識に復唱した。
「そうだ、あのときとは違う。君は運命に挑むことを知っている」
自分の後ろから聞こえてくる太い声が突然、聞こえてきた。
いやあのときと同じだ。
聞き覚えのあるこの声、間違いない。男はナオミと背中合わせで立っている。男の名はサンチョ・ボブスリー。一体どこから現われたのだろう？　一角獣も不思議だが、この男も不思議な存在だ。
男は剣を抜き、白き狼の群れを凝視している。髪の毛が蛇になり、顔は厳めしくなっていく。
白き群れは円陣を組むように、自分たちとの間合いをはかりはじめた。
「魔法剣は習ったか？」
ナオミがコクッと頷いたと同時に、フェンリルの一匹がサンチョ・

ボブスリーに襲いかかってきた。男は見事な太刀さばきで襲ってきた狼の喉を突き刺す。ナオミも襲ってくるフェンリルに炎の魔法剣をもって、対峙した。

ガルルルッーと唸るフェンリルの声、辺りは焦げた臭いが漂う。剣にはぜる炎はナオミを守る火の衣だ、近づくものなら火の鳥が襲いかかる。戦況は互角、そう互角だ。戦いが長引くのは得策じゃない――――と判断したのだろうか。

ドンッ！　と森の木陰から閃光が放たれたのがわかった。

グホッ、と突然、ボブスリーが右脇腹に手をあてて、ガクッと膝をついた。銃弾が当たったようだ。さらに肉体に撃ちこまれた銃弾はボーンッと炸裂した。剣に魔法を宿すように弾に魔法を宿らせた魔法弾というものかもしれない。

周囲に肉片が飛び散り、男は口から血をオエェッと吐くと、怒りの形相で銃弾が飛んできた方向を睨んだ。確かに黒い影がチラッとみえた。

次の瞬間、フェンリルが男の右腕に勢いよく食らいついた。

「…くそったれ！」

ゴリゴリッと上顎と下顎で骨が砕かれる、あの嫌な音が聞こえる。男が身動きとれないことを逆手に白き狼の一頭が大きな口をあけて、滴り落ちるよだれとともにナオミに襲いかかった。男の右腕は狼の牙のなかだ。

男は自分の腕丸ごと、狼の脳へと剣を突き刺した。

剣が下顎から上顎を突き抜けた衝撃にともなって、狼の瞳孔がガッと開いた。狼の痙攣やむことを待たず、ボブスリーは勢いよく剣を抜いた。左手で狼の口を無理やり抉じ開ければ、ドッと血反吐がからまった、骨が砕けた右腕が垂れ下がり、狼はドサッと静かに地

に沈んだ。

まだ戦える――――ボブスリーはナオミを襲う白き狼に剣をむけた。

その瞬間、死にきれなかったのか、地面に沈んだはずの狼が、最期の力をふりしぼってボブスリーの左腕を喰らった。

「グワアアァァ――――！」左腕をブチンッと食いちぎられ、男は悲鳴をあげた。

男は前のめりに倒れ、苦痛に耐えている。

男の髪、顔から蛇女（ゴルゴン）の呪いが次第にひいていくのがわかる。きっと意識が遠退いているんだ。ナオミはフェンリルの大きな口を剣で防ぐので精一杯だ。助けにはいけない。万事休すとはこういうことだ。

残りの四頭が一斉にナオミに襲いかかってきた。

――――もう、だめか！

一秒たった、二秒たった、三秒たった。アレ？　痛くないぞ？

恐るおそるナオミが瞳を開けてみれば、彼女の目に飛び込んできたのは、自分たちの剣と同じぐらいの鋭い角が、一匹のフェンリルの喉を貫いている姿だった。喉を貫かれた一匹は痙攣こそしているものの、おそらく即死に違いない。

ナオミをフェンリルの群れから守ってくれているのは、あの一角獣だった。ブルルーッと荒い鼻息とともに、一角獣は角に突き刺さった、フェンリルの死体を投げ捨てた。

聖なる馬はボブスリーを角で持ち上げ、自分の背中に乗せると、ナオミにも背中に乗れと瞳で合図した。少女はボブスリーの腕を食いちぎった、狼の口に手をいれた。そして血塗れになった男の手から、ボブスリーの剣を取りもどすと一角獣に跨った。

ジョジョは馬とともに駆け、三頭の白き狼が、聖なる馬を左と右ではさむように追いかけてくる。

「不利だ、泉にもどるんだ！」

意識が朦朧とするなか、ボブスリーはナオミに小声で囁く。

アレ？　この言葉どっかで聞いたぞ。そうだ、あの夢だ。

まさかあの夢はカンペールじゃなくて、このボルゴウッドの森の出来事だったのか。いや違う。運命は明らかに現在のほうが困難だといえる。

第11話　一角獣【3】

第3話

一角獣は原生林の泉へと辿りつくと、水飛沫をあげて、泉に勢いよく駆けこんだ。数秒遅れでフェンリル三頭が泉に辿りついた。

ここでやるべきことはわかっている。ナオミはボブスリーの剣の柄を両手でもち、刃を泉に浸すと「運命を変えてみせる！」と強く念じた。

「聖イヴよ、汝の尊き聖なる守護をもって我らを守りたまえ」

ナオミの言葉に剣に埋め込まれた、イブの魔法石が鈍く光った。

「聖水の魔法陣、守護聖人イヴの護り」

瞬間、泉に光の六芒星の円陣が現われ、ナオミたちを光で包みこんだ。ボブスリーの剣を泉に突きさすと、彼女は勢いよく父の剣を抜いた。「運命を変えてみせる」とまた心に念じれば、剣に炎が唸るように宿った。

ボブスリーとナオミとでは魔法力（スピリチュアル）の強さが違う。

三頭の白き狼は守護魔法に苦しみながらも、ナオミに襲いかかってきた。運命を変えようとするナオミは、全身血まみれにして狼を次々となぎ倒していく。

右ふくらはぎを深く噛まれ、膝をつこうが関係ない。狼の群れが前屈みになって頭を低く垂れるのを見てとり、ナオミは柄を握りなおす。

「うおおお――――おぉ！」

跳躍してきた最後の一匹にむかって、剣を振り上げる。

勢いあまって前のめりにと倒れつつも、剣は白い毛皮を切り裂いた。狼の身体は痙攣を起こしていた。立ち上がったと思えば、頭が

ゴロッと落ちたが――――まだ意識はある。血泡を吹きつつも、その目玉はナオミにむけられていた。これは仲間を殺され、黒き炎の憎しみが宿った眼だ。

力尽きたのか、瞳に光がなくなると、少女はなえた手で何とか手を握りなおし、剣を地に突き立て、体重をささえていた。声をあげて息をすれば肺が痛い、脇腹など焼けつくように痛い――――夢でみた、ボブスリーの姿が自分と重なってみえる。

――――ザクッ、土を踏む音が聞こえた。

ナオミは疲れた表情で顔をあげた。

森の木陰から現われた男たちの姿をみて、そのまま狼の死体に顔を落とした。森の木陰から現われた男には見覚えがあった。やっぱりコイツが首席特別捜査官ホワイトがいう、自分の命を狙っている殺し屋だったのか。

「――――きさま！」

ナオミは狼の死体に顔をうずめたまま、声を荒げた。

「やはりきさまかぁっ！」

ナオミは腹の底から、憎しみがこもった声で叫んだ。

間近に足音が聞こえ、顔をあげた瞬間、不敵な笑みをうかべ、暗闇から現れた男は拳銃を自分に向けた。ナオミはグッと瞳を閉じた。

――――バンッ、バンッ！

二発の銃弾が容赦なく、容赦なく、瀕死の状態のフェンリルの頭に撃ち込まれた。白い悪魔の瞳から命の炎が消えた。フェンリルの脳みその破片がベチャッとナオミの顔にへばりついた。

夢とは異なる運命が彼女のまえに拓けていた。

「誰が『きさま』だ。お前は目上に対する敬語も知らんのか。さすがニトの娘だな」

声の主の意外な行動にナオミは戸惑った。
「…なぜここに?」とナオミは唖然として男をみた、やはり運命の悪戯に戸惑いを隠せない。
「小モンテカルロだよ」

ジョジョにいわれずとも、そんなことはわかっている。
目の前にいる男の名はジョルジョ・パパティーノ。マルコとリサの親父だ。自分の命を狙っている男だ。その男が自分を助けてくれた、どうも合点がいかない。
「サー・テムズに感謝するんだな」

ボルゴウッドの森でナオミと黒犬(ペット)が行方不明になった、至急、近くにいる騎士たちは彼女を探索してほしい、とテムズから電話石(モバイルビー)で連絡があったそうだ。
「カトニグレ。ニトのガキが見つかったと報告してやれ」
「御意、副伯閣下!」とパパティーノの後ろから姿をみせるのはガンダルフ・カトニグレ男爵。カトニグレ家は代々パパティーノ家の執事の家柄だ。迷いの森の辺境伯の腹心がパパティーノであったように、カトニグレはパパティーノの腹心中の腹心だ。

副伯は葉巻を吸いながら、泉をぐるっと見渡すと、森の木陰にもバンッと一発、銃弾をはなった――――ボブスリーを撃ったヤツでも目撃したのだろうか。
「フン! 逃げたか、小癪なヤツだ」
もしかして殺し屋はこの男ではないのかもしれない。
「それにしてもフェンリル相手に一人で立ち向かうとは――――まあ、褒めてやる」
パパティーノはゴミくずを見るかのように、ナオミを睨んだ。

ヤバイ! サンチョ・ボブスリーの姿が――――と顔を青ざめて、

後ろを振りかえれば、例の顔に刺青をしたモン・サン・ミッシェル脱獄犯の姿はどこにも見当たらない。ナオミの目の前に飛び込んできたのは一角獣と黒犬だけだ。

一角獣はナオミにすり寄り、彼女の心に直接に訴えてくる。

「安心しなさい、あの男のことは大丈夫です」

「…で、でも、なぜどうして…」

ナオミはホッと胸をなでおろした。

無事ならそれでいい。生きていてくれたらそれでいい、彼女の率直な想いだ。一角獣はナオミを背中に乗せると、ボブスリーも自分も、ナオミを助けるのは運命の女神がそうしろと命じたのだ、と静かに呟く。

――――運命の女神がそうしろと？

古より一角獣は運命の女神の使者と伝えられているが、考えてもわかるはずがない。一角獣は力尽きたナオミを乗せ、パパティーノはナオミたちを出口まで引率する。

「閣下、この指輪はどうす…」

「フン、盗み聞きした罰だ。そのへんにでも捨てておけ！」と男は執事の掌にある、小汚い指輪にチラッと目をやった。

盗み聞きした罰？　指輪に人の話を聞けるわけがないのだが。それにしても彼らは人目憚るこんな場所で、一体全体何をしていたのだろう？　でもそのおかげで自分が助かったことは否めない。

もっともナオミの心中は穏やかではない。殺し屋だと思っていた男が、あろうことか自分の命を救ってくれたのだから。またサンチョ・ボブスリーが自分を守ろうとして、片腕を失ったのだから。

下手をすれば出血死するかもしれない。自分はフェンリルとの戦いで傷だらけになったものの、不思議なことに気がつけば傷は勝手

に癒されていた。一角獣の角の癒しの力かもしれない。

そういえばサー・エドモンドの『豆知識と雑学』で、一角獣のことも学んだっけ。

一角獣は極めて獰猛で、力強く、勇敢で、相手がライオンであろうとも、恐れずに向かっていく。鋭い角はどんなものでも容易に突き通すことができ、尚且つその角には『治癒（ヒーリング）』の能力が備わっている。また勇気をもつ処女（ヴァージン）には清純さから、危険を省みず護衛をかってでるときがある、とか。

「ふーん、イノシシみたいなヤツだな」ジョジョがぼやく。

第１２話　一角獣【４】

ボルゴウッドの森を抜ければ、すっかり外は夜に変わっていた。
空を見上げれば天の川が美しい。夜風が身にしみる。テムズ先生が一角獣に乗っているナオミを見ると、血相を変えてやってきた。
あとにテル、ロロが続く。
他の騎士候補生はすでに帰宅の途だ。

「…ミ、ミス、ニト！」
テムズ先生はナオミの姿をみて、顔が真っ青だ。肌が曝けだされ破廉恥という言葉が似合う。すぐさま彼は自分のマントをナオミにかけてやった。
「ミス、ニト。あなたには聞きたいことがあります、居残りを命じます。またこのことはサー・トモロヲ・ブドリにも報告しておきますから…」
「は、はい…そ、そのう。ごめんなさい」
何よりも一番悲しかったのは、トモロヲ・ブドリの期待を裏切ったことだ。自分はどうしようもない愚か者だ。もはや弁明の余地はない。

領主館のカリヨンの鐘の音が静かに鳴り響くのが聞こえた。
テムズ邸から解放されたのは午後十時。あれから一時間がすぎただろうか、まわりはすっかり真っ暗になっていた。三人は牧場のあぜ道を馬に乗って、歩いている。
「ねえ、クヨクヨしてもしかたがないよ」
ジョジョは早歩きでぼやく。
「う…ん。私、これからどうなるのかしら？」

「まあ、なんとかなるさ」
テル・ウォ・アボカドのひょうきんな声。

「ねえ、あの一角獣、どこにいったのかしら?」
するとどこからか「あの一角獣が住んでいるところは迷いの森、バラントン泉といわれているの」という声の主はしわくちゃなお婆さんが、三人の前に現れた。

たぶんデビット・テムズ先生の祖母か何かだろう。

「抜け道でもあるのかしら」ナオミは沈んだ声でいった。
「そうかもしれないわね。ねえ、あなたたち。この子をヨセフの馬屋まで連れってくれるかしら? あの人、本当に忘れん坊のせっかちだから――――一頭だけ馬を忘れていっちゃったの」とこぎれいな老婆は、汚らしいロバをナオミのまえにみせた。
「ほらっ、ロバも立派な馬じゃんか」と嬉しそうなテル。
「…あの、でも夜はだめだって、ヨセフお爺さんがいっていましたけど…」
「この仔は特別なの。このロバの名前はヨセフといってね、ヨセフが大事にしているロバなのよ。ほらっ、人って大事にしているものに自分の名前をつけるでしょ? 連れてってくれたら騎士メダル十枚差しあげますよ」
「ねえ、僕に任しといて!」
騎士メダルに目がくらんだテルの声だ。
「きっとテルの『王様の耳はロバの耳』と、いい友だちになれるよ」
ジョジョ・ダックスフンドは静かにしっぽをふった。

三人は老婆に見送られながら、トボトボとアッパータウン牧場をあとにした。
途中、テムズが彼らに加わった。パパティーノの助言もあって、

ナオミをティソ邸まで送っていくことになったのだ。ナオミはどことなく元気がない。それもそのはずだ。

せっかくうまくやっていけそうだったのに、ティソ親方の花屋はとても素敵な仕事でちょっぴり自慢できるお手伝いだ。たぶんクビになるか、それとも「さっさとうちへ帰れ！」といわれるかのどっちかだ。入団して二週間目で卒団というか、除席になるなんて運命はなんと残酷なんだろう。

ナオミはずっとうつむいていたためか、ヨセフ爺さんの馬屋についたことも、テルとロロと別れたことも、馬から徒歩へと変わったことも気がついていない。きっとここまでの記憶も定かではないだろう。

「…先生、もうここで十分です、ありがとうございました…」

彼女は今にも泣きだしそうだ。

「遠慮しなくていい、家まで送っていくよ」

テムズは心配そうにナオミに目をやった。「モードレッド地区子爵のパパティーノにも念を押されてますしね。いえいえ、これもキング・アーサー地区男爵の務めですから」

ナオミはまだキング・アーサー地区子爵にあったことはない。ランスロット地区子爵はクーデンホーフ、モードレッド地区子爵はあのパパティーノだ。その他の子爵は何となく紹介された気がするが、やはりこの地区の子爵だけはまだ会ったことがない。

「私の目の前にいますよ」

テムズの目の前にはアニタ・ジブリ・パリの玄関口が見える。

あ！　も、もしかしてここの地区子爵って――――アニタ・ジブリ？

ご意見番ってそういうことだったのか。

ジョジョはものすごく嫌そうな顔をした。犬って素直だ。
「いいえ、だから私の目の前にいますってば――――」
ナオミはまわりを見渡すが、やはりそこには誰もいない。
「あ、あの。先生、どこに？」
するとテムズはナオミの右手をとった。
「ここにいます」
男爵はナオミに優しく微笑みかけ、そして跪いた。
「おかえりなさい。ニト子爵、わが君…」

ナオミは何といっていいのかわからない。
「『偉大なる町キング・アーサー、七大通りの子爵』、それがお父上ナオキ・ニト子爵の称号です」
現在、ニト家のかわりにテムズ家は、キング・アーサー地区は七つの大通りとその周辺を代理経営している。もちろん彼一人では無理だ。大通りに一人づつ、合計七人のご意見番に大通りの経営を委託している。そのうち一人がアニタ・ジブリだ。彼女は非公式ながら補佐役として、テムズ家から準男爵という栄誉と権限を与えらえている。

テムズは自分の父ナオキ・ニトはヤドリギ先代子爵から爵位を譲られた、正真正銘の子爵だと真顔でナオミを見つめる。そういえばボブスリーも、ホワイト次官も父は子爵だといっていた――――どこの地区の子爵だとはいっていなかったが。
この社会に慣れることにいっぱいいっぱいだったため、爵位のことはすっかり忘れていた。

そう、父はキング・アーサー地区子爵だったのだ。

「子爵を名乗るには、まず騎士に叙勲される必要があります。でも今回の件、白き悪魔に一人で立ちむかうなど――――まったくあな

たはお父上によく似てらっしゃる」
テムズはナオミのなかに父ナオキの姿をみているかのようだ。
ナオミもようやくわかったことがある。自由になるために騎士になるんじゃいけない、皆の期待に応えるために騎士にならなきゃいけないんだ。ナオミの意識が少しづつ変わろうとしていた。自分の運命を拓くということは、そういうことかもしれない。自分の運命を変えるには、まず意識を変えるところからはじめきゃいけないんだ。

いつのまにか二人と一匹は古き洋館大通りのアニタ・ジブリ・パリのまえ、ピーター・ティソのお花屋という看板がかかっている表玄関につったっていた。
「ねえ、ジョジョからはいってよ」
ナオミはダックスフンドをまえにおしやった。
「もーう、ジャンに毛をひっぱられたらどうするのさ?」
「…でも、その、あの…」

またナオミのウジウジ病がはじまったなと――――ジョジョが思ったそのとき、ジョジョの天敵「うきゃあ」という声が聞こえた。彼女たちのまえにはティソ親方が腰に手をあて、アリサ夫人がジャンを抱いてたっていた。

とくにティソ親方はとても怒っているようだ。
「あの、その…ご、ごめんなさい…」とボソボソ声。
「謝ってすむ問題じゃない。今、何時だと思っているんだ、え?夜の十一時半だ、十一時半だぞ。その意味がわからないお前でもあるまい。しかも女の子がたった一人でぶらぶらと――――まったく、お前の気がしれん」
ティソ親方は右手を大きくふりあげていった。

ナオミは（ぶたれる！）と思い、ぐっと瞳をつぶった。

「でも無事でなによりだ」

花のいいかおりがナオミを包みこんだと思えば、少女は恐るおそるそっと瞳をあけてみた。するとティソ親方がナオミを思いっきり抱きしめていた。

「伯爵から連絡はもらっている。怖かっただろうに――――もう大丈夫だからな」

今まで我慢していた何かが、ナオミのなかでパンッと弾けた。家族の温かさにも似た思いやりの心に、家族を知らない少女ははじめて大声で泣いた。そのなかに「こ、こわかったよう、ひっく、ひっく」とかすれた声、聞きとれないぐらいの小さな声がまじっていた。

「二人とも、お風呂が冷めちゃうわよ」

そんな二人にアリサ夫人はニコッと微笑んでいった。

ジャンといえば「よち、よち」とナオミの髪をなでていたと思えば、ジョジョの姿をみつけると、「うきゃあ」と足をバタバタさせて喜んだ。ついでに彼女の髪も思いっきりつかんだ。ジョジョはすぐに家のなかのどこかに隠れてしまった。

「痛いよう、ジャン」泣き声と笑い声のナオミ。

テムズはそんなナオミの姿をみて、ひそかに微笑んでいた。

「我らの子爵は、なんて素敵な女の子なんだろう」

第１３話　チェス紋章【１】

時刻は零時と三十分を少しまわったところだ。
ナオミは家に帰れといわれなかったことにひとまず一安心だ。
アリサ夫人は「サー・デビット・テムズから聞いたわよ」と少女の汚れた鼻をツンッと叩いた。どうしてそんなに嬉しそうなんだろう――――とナオミは不思議に思う。

「一角獣（ユニコーン）に乗ったんでしょ？」
「は、はい」
「どういう気分だった？」
「…うーん、よくわかんない…」
ナオミがそういうとアリサ夫人は「そうよね、ごめんなさい」と舌をだす。ただ彼女がいうには、テムズ男爵は今回のフェンリルの襲撃は迷いの森とこの町とを隔てている――――石壁の見張り番をもっと強化しなければ、と申し出たものの、パパティーノは聞く耳持たずだった。

「見張り体制はあのままで十分だ」
パパティーノはテムズの言葉を足蹴にした。かわりに男はナオミに保護観察も兼ねた、謹慎六日間という処罰を下した。処罰理由は逸脱した戦闘行為だとか。いまいち意味は分からないが、妥当だといえるかもしれない。

パパティーノは殺し屋ではなかったものの、彼は迷いの森の一味だということは忘れてはいけない。公言はしていないものの、公爵派というよりかは辺境伯派、白と黒といえばかぎりなく黒に近い灰

色だ。父ナオキ・ニトは公爵派の英雄だ、いわば対立する立場にあった男の娘を助けること自体、虫唾が奔ることだろう。それにあの白き狼の群れは、迷いの森から侵入してきたものではない。自分の命を狙った者が引き連れてきたものだ。

パパティーノもそのことはわかっている。

「ナオミは何も悪いことしてないのにね、まったく嫌になるわ」

アリサ夫人はぷりぷりしていった。

「この際だから『引継日記』を読んでおくのもいいかもね」

引継日記、何のことだろう？　アリサ夫人に訊いてみようものの、話の途中でナオミのお腹がなったので、夫人は大笑い。日記どころでなくなった。

「まずはそのどろんこの身体を洗わなきゃね！」

時刻は午前一時。真夜中とあって、食堂にはアニタ・ジブリとハナコしかない。ナオミと彼女らを隔てている、長テーブルには何もない。あるのはこちらをキッと睨んでいるアニタ・ジブリのふてぶてしい態度だけだ。

空腹と睡魔がナオミを襲う。あまりに静かのため、コクッと居眠りするものなら、アニタのドンッと右手で机を叩く音で、目を覚まされる。

「パパティーノのヤツがあたしに脅しをかけてきた。あんたはあたしの顔に泥をぬったわけだ。お前は犯人は見たんだろう？　白状しちまいな！」老婆の言葉を真に受けたのか、ハナコ・ゴーストは「えいっ！」と残飯をアニタに投げつけ、喜んでいた。

アニタはハナコをキッと睨んだあと、何もなかったように顔にへばりついた残飯をベチャッと手で払い落とした。

「お前は誰かに怨みをかっているんかい？」

怨みをかいそうなのはお前だろう、とジョジョは思う。

アニタ・ジブリが激怒している理由にはわけがある。
ナオミが夜遅くまで、テムズに白い狼フェンリルの群れが、襲ってきた状況を色々と聞かれている頃、パパティーノはアニタ・ジブリ・パリに足を運んでいた。応接間に通された副伯はハナコがもってきた紅茶には目もくれない。
紅茶にハエが浮かんでいたのが理由ではない。
「私はまわりくどいことが嫌いなんでね、早速だが――――」
アニタ・ジブリはチラッと男の顔をみた。
「あなたは私の投資に融資の申し込みをしている、お忘れではあるまい」
赤字経営から脱却、事業拡大のためである。
「あんたがわざわざ顔をみせるってことは、いい返事だと期待していいんだね？」
「フン、ガキの一人も守れん大通りの経営者が、返済の義務を守れるか疑わしい。ミスリル金貨百万枚の融資の件、不本意だが断らせて頂く」とパパティーノが席をたてば、カトニグレが扉を開けて立っている。

この言葉にアニタの顔は真っ青だ。
「…ちょ、ちょっと！　いきなりきて、そりゃ、ないって話じゃないか！」
アニタ・ジブリは部屋を出ていこうとする、パパティーノを背中越しに呼びとめた。
「…あ、あんたの条件は一体何だ？」
老婆の言葉にパパティーノはピタッと足を止めた。
「ニトのガキの命を狙った者の正体を知りたい」
「それを知ってどうするんだい？」
「ガキの口をわらせろ！」
あんたの商売とどんな関係があるのか、アニタ・ジブリは唸る。

「フン、勘違いするな。ニトのガキなどどうでもいい。妙な胸騒ぎがするんでね、油断大敵というヤツだ。大きなことを成そうとするとき、必ず魔がはいるもんだ」

悪党の直感ってヤツかもしれない。パパティーノは犯人の正体が分かり次第、無条件で融資をしてやると、アニタ・ジブリ・パリ邸をあとにした。

第１４話　チェス紋章【２】

アニタ・ジブリはドンドンッと机を叩く。夜中だから余計に耳に響く。

「さあ、犯人は誰だい？　顔を見たんじゃないのか？」

犯人を知っていれば、こっちが教えてほしいぐらいだ。

「あたしに逆らってもいいことはないよ」

ここで働くということは、この人に逆らってはいけないぐらいはわかる。

アニタ婆さんはさらに「このまえの子なんてね、いうことを聞かないもんだから私の往復平手打ちをくらわしてやったんだ、おたふく風邪みたいになっちまったがね」と右手をあげたので、ナオミは頬を叩かれたかのような気分になった。

ハナコは舌をだして、両手で両目をべろーんとしたに下げて、目玉が野球ボールみたいに飛びだしていた。いやはやとてもおぞましい姿だ。

「ハナコ、この子は謹慎六日間の保護観察を言い渡されたんだ」

アニタはパパティーノが持ってきた、処分通知書をナオミにみせた。なるほど騎士メダルの減数はないものの、ナオミを謹慎六日間に処すと書いてある。その下の欄には、ティソ親方のかわりにアニタ・ジブリの認印が押してあった。

あまり考えたくはないが、保護観察はパパティーノの善意かもしれない。彼はその間に犯人を調べあげ、秘密裏に始末する予定に違いない。ただ分かっていることは、自分の命を狙っている者とパパティーノの敵は共通の敵かもしれないということだ。

「地下牢にぶちこまれりゃ、さすがのあんたも口をわるかい？」
いやわらない。だって知らないんだから。
「ハナコ、さっさとぶちこんでやりな！」
アニタ・ジブリが低い声で呟くと、暖炉の炎ははぜた。
ハナコはニヤニヤ笑いながら、とても嬉しそうにナオミに「びびって小便たらすなよ」と彼女たちを暖炉の傍にひっそりとある、地下階段へと導いていった。そこは小さな地下牢、穀物倉庫のような細長い檻だ。

冗談じゃない！　こんなところに閉じ込められてたまるもんか！
「おい、さっさとおりろ！」
「いやよ！」とナオミの抵抗などものとせず、ハナコのほうきは少女を地下牢へ追いやった。
「お前は今日から六日間、ここで暮らすんだ」

階段をおりていくと、そこは拷問部屋のような部屋だ。
大人一人が何とかはいれるというぐらいの狭さ、ところどころにキノコやコケが生えていた。青カビが生えたわら、埃をかぶった瓶やワイン樽、グレムリンの親子も住んでいるようだ。
「ねえ、ワンちゃん。私のワンワンにならない、ねえ？」
ハナコはナオミのと一緒に地下牢にはいろうとする、ジョジョ・ダックスフンドのしっぽを思いっきり握りしめた。ジョジョは「きゃん」とのど奥で悲鳴をあげた。ナオミはハナコからジョジョを奪いとるので必死だ。

ジョジョはおもいっきり抵抗して、ハナコを爪で引っかく。
どうやらあきらめたようだ。少女は「ちえっ」と舌打ちすると格子をしめ、「こんのバカ犬！」と錠をおろして、ケタケタッと無気味な笑いをうかべた。
「お前たち。グレムリンに食われて、なくなっちゃえ！」

「きゃっ！」ナオミはグレムリンの小走りに驚きの声をあげた。
「イッヒヒヒヒヒ！」
ハナコは無気味な小笑いをあげた。
「お願いだからここからだしてよ、ねえ？」
ナオミは格子をがんがんと叩いた。
真上からはアニタ婆さんの怒鳴り声が聞こえてきた。
「犯人をいえばすぐに見習い部屋に戻してやるよ。ここは独房、お仕置部屋、誰も助けにこやしないよ」アニタ婆さんはかん高い声をあげて大笑い。

数分後、台所の明かりがふっと消え、ドアが閉まる鈍い音が聞こえてきた。アニタ・ジブリが台所奥にある、自分の部屋へもどっていったようだ。
ナオミは膝を三角にまげて、グレムリンが小走りするなか、瞳に涙を浮かべていた。こんな惨めな気分になるのは、カンペールのヤドリギ家ジジ亭の物置部屋以来だ。
暗やみのなか、ジョジョの瞳だけがギラギラとまぶしく光っていた。ときどきナオミの近くにグレムリンがやってくれば「フン！」とジョジョは捕まえようとするが、やはり無理だった。
「でっかいネズミのわりには素早いなあ」
黒犬はグレムリンをみて、ぼやく。
「ジョジョ、いつのまにあなた、猫になったの？」
「犬だってネズミ捕りの名人なんだぞ」と鼻を鳴らした。
「もーう、やだ、ジョジョったら！」
ナオミはクスクスと笑いだしてしまった。

身動きさえできないほど狭い独房、うっすらとヒカリダケがホタルのようにポワッと二人を照らしだしていた。ここは文字どおりブタ小屋だ。でもどんなに我慢してもお腹の音は鳴りやまず、しだいにお腹と背中がくっついたかのような感覚に襲われるナオミ。

うつろの瞳は光を失いつつ、暗やみに包まれていった。すると今日一日の出来事が映画のフィルムのように思いだされてきた。

五回目でどもり癖がなくなり、『ピーター・ティソのお花屋』といえたこと。

アスパラガスの束から、一本のアスパラガスが落ちたといって、わざわざその絵を描いた、ウィットに富んだ画家キャサリン・ハイネ、人見知りの馬屋番ヨセフのところでマレンゴに出会えたこと、ダ・カーポ先生を間違えて黒ヤギにしてしまった、おっちょこちょいのロベルト・パパティーノ。それから各教室の担当騎士たちの顔――――それらを突き抜けて走ってくるのは、あの銀色の一角獣だ。

でもその角獣もいつのまにか銀色のまるいふたをしたお皿にかわり、ふたをあけてみれば、二週間前に領主館前の広場で食べたごちそうになっていた。おやっ、そのごちそうをジョジョが一人占めして食べているではないか。

ナオミも大きく口を開けたそのとき、ガブッと嫌な音がした。

「痛いよ！　僕、ローストチキンじゃないってば！」

ジョジョは自分のしっぽを思いっきりかじっている、ナオミに涙声でいった。確かにそうだ、ジョジョは犬だ。ローストチキンではない。グレムリンの子どもがそんなナオミたちを見てキャッ、キャッと嬉しそうだ。

「ねえ、階段から誰かがおりてくるよ」

ジョジョは痛いのを我慢していった。

耳をすませば本当にペタペタッという足音が聞こえてきた。

（たぶんハナコだよ、きっと僕を盗みにきたんだよ）

（やだあ）という二人のヒソヒソ声。ランプの光がポワリッと地下牢を照らしだすなか、ジョジョの毛はハリネズミのように逆立ち、

とても低い声で唸り、ナオミは息を呑んだ。
「僕だよ、僕。もう忘れちゃった？」
「だ、誰？」
ナオミとジョジョはその弱々しい声に聞きおぼえがあった。
「ライアン？」
「…そうだよ、僕だよ…」

弱々しい声とともにライアンが地下牢に姿を現した。
「小さなライオン、ライアン・ティソだよ。カストロ髭の息子さ」
そうだ、ライアンの部屋がこの食堂の真上にあることを忘れていた。きっと会話が聞こえたんだ。
少年の姿を見るとともに「ライアァンッ！、お願いッ、ここから助けて！」とナオミは少年にすがった。ライアンは自分の唇にシーッと人差し指に手をあてた。
「…静かに！　ちゃんとだしてあげるから」
ライアンは親指でハナコが目を覚ますといけないから、とナオミに合図を送る。

「ねえ、それより謹慎六日って、どんなことをしたの？　僕の部屋で聞かしてよ。ついでに君に渡したいものもあるし…」とランプの光のように弱々しい声。
「渡したいもの？」
「僕の部屋にきたらわかるよ」
ハナコは自ら見張り役をかってでたものの、ぐっすりと眠っている。
ライアンはハナコの左手をじっーと見つめた。彼女の左手には鍵束がギューッと握りしめられている。
ハナコの左手をそっと解くと、少年は「おいで！」と自分たちを見つめるグレムリンの赤ちゃんに手招きして、グレムリンの赤ちゃんの手を、鍵束のかわりに握らせた。

「ごめんね、少しの辛抱だから我慢してててね」
ライアンの囁きにグレムリンの赤ちゃんはコクッと頷いた。

錠がカチャッとなると、ライアンは「さあ、いそいで！」とそっと手招きした。
ナオミは錆びた音のする格子をものすごく注意深くあけて、今さっき噛みついたジョジョのしっぽをなでながら、よろよろと少年のあとをついていった。階段近くにはハナコが椅子に座って、見張り番をしていた。頭にはアルミバケツ、右手にはモップ、なんともマヌケな姿のことか。
すれ違い際にアルミバケツが落ちそうになった。

ヤバイ！　皆は息を呑んだ――――グレムリンの赤ちゃんの両親がバケツを受け止めてくれたおかげで、何とか危機は乗り越えた。
ナオミは彼らに「あ・り・が・と・う」と小声で囁き、地下牢をあとにした。

第15話　チェス紋章【3】

第15話

ライアンの部屋にきて、ようやくナオミとジョジョは安堵感に満たされた。

ナオミが少年の部屋にはいってみれば、すでにライアンは安眠帽子をかぶり、ベッドのなかでゴソゴソしているところだ。ベッドの横にあるランプ机にはあの銀色のまるいふたのお皿、そしてグラスに水瓶があった。反対側には白馬にまたがったナポレオンの絵画のような、キング・アーサーの聖画が飾られていた。

「君のぶんだよ、母さんが君のためにとっておいてくれたんだ。アニタ婆さんのことだから、意地悪して今夜は食事なしだろうからって。うん、母さんと父さんは今日はとても忙しかったみたい、だからもう寝ちゃったよ」

ナオミは蓋をあけるまえに念のため、少年に尋ねた。

「あなたは食べたの？」

「僕はいい、食欲がわかないんだ」

きっとこれはライアンの分に違いない。

「ねえ、はやく食べようよ。僕、お腹ペコペコなんだ」

ジョルジョがもうおすわりして、しっぽをぱたんっと床にたたいていた。ナオミは遠慮がちに銀のまるい蓋を開けてみた。そこにはクッペパンとバター、ローストチキンがのっていた。

「うわぁっ――――とってもおいしそう！」

ライアンは優しそうに少女を見つめると、ゆっくりと「召しあがれ」と微笑んだ。ジョジョなんかはもう待ちきれず、舌をだらーんとたらしている。興奮のあまりしっぽが左右にふっている。

食事が終わるとそっとライアンが話しかけてきた。
「君にはチェス選手の才能がある」
「チェス選手って？」
ライアンはダックスフンドをベッドのうえまでひきよせ、頭をなでてやった。
「『チェスゲーム』のことじゃんか。君、アッパータウン牧場で一角獣に乗ったって聞いたよ、一角獣は誇り高き馬の皇帝、あれに乗れるなんて奇跡だよ。その話を聞いて、僕は確信したんだよ」

意味がわからないが、ナオミは静かに頷いてみせた。
「チェス選手はチェスゲームの競技選手のことだよ、何も知らないんだね」
チェスゲームから生まれた、ブルトン人の伝統競技チェス。
それはあの板のチェスゲームを実際に人が馬に跨って実演する、国王役を追詰（チェックメイト）したほうが勝ちとする、六地区の同時進行（ロールプレイング）の団体騎馬競技（キング）だ。

各チェス選手のポジションには国王役以外にも女王（クィーン）役、兵士（ポーン）役といったチェスゲームと同じの名前が与えられている。もちろん武器や魔法剣をつかってもよい。
とにかく相手を打ち取れば勝ちだ。チェスゲームは九月の終わりに開催され、競技順位によって騎士メダルが与えられる。騎士候補生にとっては最大の騎馬教室だといえよう。
体力とスタミナ、団結が要求される過酷なこのゲームにかぎり、担当騎士は各地区の子爵である。いわば年に一度、地区の威信と誇りを賭けて行われる地区対抗騎馬戦だ。ちなみにキング・アーサー地区にかぎって、子爵不在のためテムズ男爵が担当騎士だとか。

「君にチェスの席を譲りたい」
ライアンの言葉にナオミはきょとんとしている。

事態がまだ呑みこめていないようだ。ライアン・ティソは、この競技の優秀な騎士（ナイト）役だった。彼の称号は小さなライオン、勇敢な走りからついた名前だ。

「僕のあとを受け継いでほしいんだ」

「…それって、あのう、そのう…私がチェスゲームの…」

ライアンは自分の右掌にペッと唾を吐いた。

「僕は君を指名する。さあ、握手だ！」

「うわあ、汚ねえ！」ジョジョがぼやいた。

チェスの引き継ぎは現役チェス選手の指名により、唾握手によって引き継がられる。握手は握手でも、唾握手はチェスのようだ。ナオミも「できれば握手はしたくない」と思いながらも、ライアンと握手をペチャッと交わした。

「これで安心だよ」

「安心って？」

ライアンの頬は興奮のあまり、紅潮していた。

「僕はもう死ぬかもしれないんだ」

「…やだあ、そんなの」ナオミはライアンをじっと見つめた。

「僕ね、あと半年の命かもしれないって。ホーエンハイム先生が父さんと母さんにボソボソいうのを聞いちゃったんだ…」

ライアンの真っ白くて細長い手をみれば、まんざら嘘ではないようだ。

一息入れたあと、少年はランプ机の引きだしから、競技者の証であるチェス紋章を取りだして彼女の服につけてやった。ついでに剣と盾の紋章入りの、黒革で装丁された日記を少女に手渡した。これはアリサ夫人がいっていた、引継日記とやらに違いない。

「これはね、親方の見習いたちによって、代々引き継がれる日記なんだ。まえの子が父さんに預けていったんだよ、それを僕が預かっているんだ」
「ねえ、まえの子ってどんな子だったの？」
「それなら父さんに聞けばいいよ」

ライアンは今にも消えてなくなりそうだ。
両手と同じように青白い顔、おちくぼんだうるうるした瞳、そして美しいさらさらの金髪は本物のライオンの鬣のようだ。さぞや元気なときは女の子にもてたことだろう。この少年とはなぜかうちとけてしまい、いろんな話をした。

例えばヤドリギ夫妻やカンペールの町のこと、ここまでの旅物語など――――それから気になる少年ロロやテルのこと、パパティーノ家の人々のことも話した。
「うわあ、すごいや」
彼女の話にライアンは手を叩いて喜んだ。
「……」少女は顔を赤らめた。
「ねえ、ナオミ。どのくらいメダルはたまった？」
「うーん、三十枚かな…」ナオミは今まで獲得した騎士メダルを数えてみた。
「優秀のほうだよ。今のままだったらすぐに騎士になれるよ」
ライアンの言葉にナオミはホッと胸を撫でおろした。
（三〇〇枚の十分の一まできた。この調子だと一年後には騎士になっているかも…）

ジョジョは油断大敵だぞ、とぼやく。
そうこうしているうちにナオミはうとうとしはじめ、ダックスフンドが小あくびをしたので、ライアンはナオミの髪の毛をひっぱって「ハナコにばれると厄介だから、もうもどったほうがいいよ」と

少女を地下牢へと戻らせた。

「やっぱりもどらないといけない？」

牢のまえでナオミはぐずった。

「規則だからね。でも九年間のジジ亭での生活と比べたら、断然ましだと思うよ」

そうだ。ジジ亭のあの生活を思えば、六日間なんてたいしたことではない。少年は鍵を閉めおえると、ゴホゴホッといきなり咳き込んだ。口に手をやればうっすらと赤い血が掌に見えた。

グレムリンの親子が心配そうに彼を見ている。

「どうしたの、ライアン？」

「ううん、ちょっと興奮しただけだよ」

少年はグレムリンの頭をなでていった。地下牢にナオミの寝息が聞こえたのは、それからまもなくのことだった。

第16話　フローリスタ、フローリスタ！【1】

第16話

「ねえ、お昼ご飯、まだかな？」
謹慎六日目、ジョジョ・ダックスフンドはゴロゴロしていた。
「さっき食べたばかりじゃない」

ナオミといえば、引継日記をすみからすみまで熟読していた。
もうすでに二回もこの日記を読み返していた。だから今は三回目というわけだ。謹慎といっても、トイレに行きたくなれば自由にいけるし、噂を聞きつけたテルやロロ、ココとも自由に会話はできる。それほど厳しいものではない。ただ自由が制限されているだけなのだ。
「…ふん。このままだと僕、暇すぎて死んじゃうと思うよ」
ジョジョはめんどくさそうに寝返りをうった。

「暇で死んだ人なんて、これまで聞いたことないわ」
「だったら僕が一番最初になるんだ、きっと…」
あとちょっとの辛抱よ、とナオミはうーんと伸びをする。
「でも保護観察から解放されても、牢獄からでられる保証はないじゃんか。相手はあの守銭奴（アニタ・ジブリ）だよ」
確かにジョジョの言うとおりだ。

そう夜の十二時をまわれば、晴れて謹慎処分から解放されるものの、パパティーノは牢獄にぶちこめとはいっていない。牢獄にぶちこんだのはアニタ・ジブリだ。ナオミはこの日記にちょっぴりひっかかるところがあったので、様子を見にきてくれたアリサ夫人に思いきって訊いてみた。

「あのね、この日記のまえの持ち主って十五年もまえの――――」
「ああ、そうなのよね。あなたが握手した子はピーターのお兄さん、ペーター・ティソのお花屋の騎士候補生だったの。お兄さんのペーターのお店には、何たってナオミのような騎士候補生が五人もいるんですもの」

ピーター・ティソ親方はティソ家の次男坊。
兄さんとの共同経営を嫌い、この古き洋館大通りのアニタ・ジブリ・パリにお店をだしたのが二十三年前だ。そのとき初めて騎士候補生を受け入れたとか、それからその子が卒団式を迎えて、かれこれ十五年ほどの月日がたったそうだ。

「みてのとおり小さなお花屋だけど、昔はもっと小さかったのよ。でも商売ってね、小さいうちが楽しいものよ。だって大きくする楽しみがあるんですものね」
この大きな場所に引っ越してきたのは五年前、それまではもっと太陽の西日があたらない、じみじみしていたところに店をかまえていたとか。湿気の多いところだったから、三日に一回は店のなかにキノコが生えてきて、とても困ったとか。

「ほらっ、あのときはライアンがジャンみたいに小さくて大変だったからね。今はジャンが小さくて大変だから、ペーターにいって、一人だけこっちで面倒みさせてってわがままいったの」
「ねえ、まえの子ってどんな感じの子だったの？」
「日記に名前は書いていないかしら？」
「消えちゃっているの」残念そうなナオミ。
「うーん、もう十五年も昔のことだから……でもあだ名なら覚えているわよ。ええっとたしか、うーん」
アリサ夫人はスヤスヤと気持ちよさそうに眠っているジャンを胸

に抱いて、昔を思いだしていた。
「あっ、そうそうトニー、トニー。昔はポニーといってよくいじめたものよ。あーあ、あの頃の私はピチピチの二十五歳、できれば昔に帰りたいものよね？　なんたって昔の私は本当に男の子にモテモテだったんだから」

ピチピチって、魚みたいだ。
アリサ夫人の言葉にナオミは両手を口にもってきてクスクス。
ところで何のようかと聞けば、ティソ親方と一緒に花を届けにいかないかという、誘いの言葉だった。もちろんナオミはあと少しで謹慎処分が終わるからと断わるものの、アリサ夫人は人さし指をたてて「あと少しってあんた、暇すぎて死んじゃうわよ」とジョジョと同じことをいう。ジョジョは「僕のいったとおりじゃん」と得意げに鼻を鳴らす。

アリサ夫人が静かに錠をカチャッと鳴らした。
「こんなところにじっとしてたら、それこそキノコが生えちゃうわ」
階段をのぼればハナコが相変わらず、モップを片手に見張り番をしていた。
二人と一匹の姿をみかければ、ケラケラと笑いながら「みーちゃった、みーちゃった」とふざけていた。それからすぐに「アニタ・ジブリにいわなくちゃね、脱獄はお尻たたき五百回だもん」と意地悪そうに呟く。
「ねえ、お願いだから見逃してくれないかしら？」
「うーん、どうしようかな。その犬、くれたら考えてもいいわ」
ハナコは人さし指を唇につけて、無気味に笑ったのでジョジョ・ダックスフンドは思わず毛が逆立ち、失神しそうだった。ナオミはジョジョを思いっきり抱きしめると顔をそむけた。そしてハナコを無視した――――それがいけなかった。

「アニタ婆！　ティソ親方の見習いが逃げだしたわ。手引きはアリサよ、あの女も一緒に閉じこめなくちゃ。二人そろって拷問鞭打ちの刑よ！」

ハナコ・ゴーストはこんな悲鳴をあげたので、アリサは大声で怒鳴り返した。

「コラッ！　静かにおし！」

「ふーんだ、誰がするもんか！　へんへんへん！」

「この家から追い出してもいいのよ！」というとハナコは「おお、こわ。ぶるぶる」と顔を引きつった。少女はすれ違いにジョジョのしっぽを握ったのだが、少女の手はものすごく冷たいらしく、ジョジョはブルッと震えてしまった。

アリサ夫人はやれやれという顔をするばかり。

「ねえ、ナオミ。あなたがここに戻ってくるまでジョジョをハナコに預けたら、どうかしら？」この言葉にジョジョはビクッと顔をあげて、じりじりと後ずさりした。そのことにちょっとためらいながら、ナオミは何とか納得したようだ。

「ジョジョ、お願い、ね？」

「なにが『ね？』だよ、僕は人質ってことじゃないか」

ジョジョは恨めしそうにナオミとアリサ夫人を見つめた。

「僕、あの子のペットになるってことでしょ？」

「そうねえ、でも仕事をしている時間だけよ」

「ジャンの子守りより、ましかなあ？」

「たぶん」

「でも相手はゴーストだぞ。あの子にちょっとでもさわってごらんよ。ものすごくヒヤッてするんだよ」

「もう大げさげなんだから。すぐに戻ってくるわよ」

ジョジョは顔をしかめてあきらめたようだ、しっぽはぱたんとしなびれていた。そしてしょんぼりとうずくまると「フン！」と鼻を

鳴らした。ナオミが「ごめんね」といっても知らんぷりだ。

台所のすぐ奥部屋にはアニタ・ジブリがパチコチッと算盤をはじいて、今月の家賃及びテナント料、食事代をせかせかと計算していた。ナオミは彼女にばれないように忍び足で台所をよこぎろうとすれば、ハナコが口をパクパクあけて、アニタ・ジブリに知らせようとしていた。人の気配を感じたらしく、アニタ・ジブリが顔をあげれば、いやはやナオミたちと目があってしまった。

思わずナオミは肩をすくませた。

「さっさとお行き！　仲間に感謝するんだね！」と唸るアニタ・ジブリ。

仲間に感謝するんだね――――どういう意味だろう？

ぽかーんと口をあけている、そんなナオミの脇腹をつついたのはアリサ夫人だ。

「あなたをここから出すように命じたのはアニタ・ジブリよ」

アリサ夫人の言葉にナオミは凛として悟った。パパティーノが自分を襲った、暗殺者（ヒットマン）を始末したということに。何だかいい気分ではない。

「…あの、その…」

「なんだい。まだいたのかい？」

「その、アニタ・ジブリさんは犯人をご存知ですか？」

老婆はパチコチッと算盤をはじくのをやめ、「ドラゴンチップスにつられたお前の仲間が、あの男が殺し屋だって吐いたそうだ。お前も警戒心が足りない。殺し屋があんなすぐ近くにいたっていうんだからね。まあ、死んじゃいないけどね。それから保護観察はまだ終わっちゃいないからね！」と唸った。

その言葉を聞いたナオミはペコリッと頭をさげ、アニタ婆さんが老眼鏡を拭いているときに早々と立ちさった。ハナコ・ゴーストはちえっと舌打ちし、「ワンちゃんと遊んでこよっと」と不気味な笑みをうかべて、ジョジョがいる地下牢へと姿を消した。

数分後、キャン――――というジョジョの悲鳴が聞こえたのはいうまでもない。

第17話　フローリスタ、フローリスタ！【2】

第17話

店の表には荷馬車につながれた、青毛のクライスディールのメス一頭が大人しく待っていた。

ティソ親方の馬らしい。荷馬車には藁葺きかごがぎっしり、植木鉢には色鮮やかな花がぎっしり、ひしめきあっていた。荷馬車の影からのっそりとでてきたのは、親方の馬の半分ぐらいの大きさ、シェトランド・ポニーのマレンゴだ。

相変わらずブルルッと鼻息が荒い。

「親方、ヨセフ爺さんのところまで取りにいってくれたの？」

「なあに、おやすい御用だ」

マレンゴはナオミに近づいてきて「今日はジョジョがいないんだね」といったような感じで、自分の頬をこすりつけてくる。ジョジョには悪いが、慣れてくると馬もけっこう可愛いもんだ。

「六日分の仕事をしてもらうからな？」とナオミがマレンゴに跨るのを確かめると、ティソ親方はクライスディールの手綱をひっぱりながら歩く。

ナオミも親方の横に並んで、のんびりと歩いていく。

「注文、誰かからもらったの？」

「誰からももらってないよ。今からするのは移動販売、移動花屋だ」

でこぼこの石畳の横丁に馬の蹄鉄の音がガタゴトッ、ガタゴトッと気持ちよさそうに鳴り響く。どこか忘れていた大切な音のような気がする。

ナオミたちは鳥の鳴き声がやかましい横丁を通った。

そこは小鳥たちのかん高い声が鳴り響いていて、人の声などとても聞こえない。ティソ親方は「鳥市場さ」と少女にそっと耳打ちする。せまい通路に七十軒もの小鳥店がひしめている鳥市場、大人ひとりがやっと歩けるといったぐらいだった。

どこをみても鳥、鳥、鳥。竹かごには九官鳥や雀、ナイチンゲールなど約百種類もの鳥がいた。だけどあの青い鳥がナオミをじっとみていることは、さすがの彼女も気づいてはいないようだ。天井からぶらさがっている球状の竹の鳥かご、杯のような形をした彫刻をほどこした陶製の餌入れ――この抜け道は活気に満ちた裏通り、いたるところに青空市場が広がっていた。

生花市場や生肉市場、時計市場や雑貨市場などは歩くのもままならない人ごみだ。やっとナオミたちはあのブルトンホテル大通りにでることができた。ナオミが親方に連れられて歩いた、あのにぎやかな大通りだ。

ナオミは先ほどのアニタ・ジブリの言葉の意味を考えていた。アニタ・ジブリは確かに男といった。それならあの男しかいないじゃないか。自分を命がけで守ってくれたサンチョ・ボブスリーしか。無実の男の罪がさらに増えるのは、いい気分ではない。それにドラゴンチップスにつられたお前の仲間――お菓子につられる子なんて一体どこの誰だろう？　テルでないことを信じたい。

「さあ、仕事をはじめるぞ」

親方の声を聞いて、ナオミは現実に呼び戻された。

親方は「移動販売は声が大事なんだ」と馬にかけていたラジオのスイッチを入れた。

するとラジオからは「移動花屋（フローリスタ）、移動花屋（フローリスタ）。誰にもいえないあなたの声を花言葉にどうぞ。新鮮でピチピチ、できたてホヤホヤをお届けしますよ」とアリサ夫人の録音された、元気な声が聞こえてき

た。
「ねえ。ティソ親方。フローリスタって？」
「花屋って意味だ。さあ、誰か手をあげている人はいないか、しっかりみるんだ」

すれ違う人々でがやがやとにぎわうブルトンホテル大通りに、アリサ夫人の明るくて素敵な声が響いた。最初は素通りしていた人々もその声に声につられてか、何人かは立ち止まって、「お嬢ちゃん、一本くれないか？」と荷馬車のなかの花を買ってくれた。香りに魅せられる人もいた。

ともあれナオミはたくさんの人々の視線に顔を赤らめ、思わず地面に目をやった。しょんぼりとだんまりを決めこんでいる、少女に親方はあきれ顔だ。

「こうやって花を売り歩くのも俺たちの仕事の一つだ。町の連中は俺たちを花屋だと知っている。昔から花屋は『フローリスタ』と叫んでお客を呼びこんでいたんだ。シャキッと胸を張ってりゃ、それでいいのさ」

親方の言葉はもっともだ。

すると一人の若い女の人が「あらっ、ティソ親方。可愛いお手伝いさんですね」とナオミのことを気にかけてくれる。ナオミはもうすぐでおつりを多く渡すところだった。

大通りではそんなナオミの様子を町の子どもたちがニヤニヤッと窺っていた。彼らは時間が過ぎていくにつれて、一人二人とふえていく感じがした。

「アイツだろう？」
「ライアンのお父さんの隣にいる女の子よ」
「よくみろよ！　チェス紋章を胸元につけているぞ！」
「きっとライアンから引き継いだんだ！」

少年たちの言葉を聞いて、ティソ親方はナオミの胸元をみた。

そのうち数人の男の子が「おい、そこの家なき子」とナオミを侮辱したので、ティソ親方が「コラッ！」と一喝。すると町の子どもたちは大笑いしながら、さっと路地裏へ逃げてはまたひょっこり姿をみせた。ナオミは数人か子どもたちには見覚えがあった、彼らはモードレッド地区の騎士候補生たちだ。

（そういえば今さっき、あそこにリサ・パパティーノもいたわ）

「おい、家なき子！」ハレルヤの声だ。

ナオミは瞳をつりあげて、今度こそ何かいい返してやろうと怒りをこめてふり返った。

それを待っていたかのようにハレルヤは「アホがみる、豚のケツ」と大きなお尻をぷりぷりとふっていた。あばたたちは大笑い、ナオミは胸から噴水のように込みあげてくる、怒りを抑えるので必死だ。

「ほらっ、お客さんだよ」とティソ親方は、彼女の背中を叩いた。

いやはや彼らの視線がどうも気になる、そのたびにナオミはおつりを間違いそうになった。

そんな少女の姿を見て、モードレッド地区の騎士候補生はどっと笑い声をあげ、彼女の悪口をいった。とうとう我慢ができなくなったナオミは、拳をギュッと握りしめた。さりげなくティソ親方はそれを横目でチラッとみていた。

「ナオミ、犬が吠えていると思いな」

その言葉にナオミはジョジョを思った。

「…で、でも親方」

ティソ親方はナオミのチェス紋章をみて、静かに唸った。

「さっきの子供たちのことは本当か？　あれほどチェスが大好きだった、小さなライオンがお前にその座を譲り渡すとは」

「……」

「他のアーサー地区の子どもたちがいくら頼んでも、嫌だの一点張

りだったのに。だから連中は騒いでいるんだ。チェスゲームは騎馬戦でね、ライアンのポジションは騎士（ナイト）役なんだ。騎士役は馬術がうまくないと務まらない大役だ」

ナオミは自分は馬術なんか知らないと小声でいった。

「一角獣を乗りこなしたんだろ？　じゃあ、お前はもう一人前だ。あの聖なる馬はそう誰にも乗りこなせるもんじゃない。過去二十年間で、あの馬を乗りこなした騎士候補生なんてあの人ぐらいなもんさ。お前は自信をもっていいよ」

あの人ぐらいなもんさ――――の、あの人って誰？

「アリス・ニト、お前の母上だ」

その言葉は衝撃的だった。その親ありてこの娘あり、とティソ親方は言いたげだ。

「それにだ、ナオミ。俺、カストロ髭の花屋から三人も、そう三人もチェス選手を輩出したんだ。トニーとライアン、そしてナオミ、お前だ。俺は鼻が高いよ」

そんな親方と裏腹にナオミは戸惑いを隠せない。ただの勘違いかもしれないのに。

「…お、親方。私、辞退します、きっと失敗しちゃうわ…」

皆の期待に応えたいけど、今の自分にはその力がない。

そのことは自分がよくわかっている。実際、チェスゲームを知らないのに競技などできるわけがない。皆に迷惑がかかるぐらいなら、いっそのこと参加しないほうがいい。

「最初はみんな、半人前さ。気にすることはない、要するに自覚の問題だ。それに自分で自分をあきらめてどうする？　失敗とは失敗を恐れて挑戦しないことだ。失敗して誰がお前を責める？　失敗を責める風潮をこしらえるヤツのほうが悪い。いいか、ナオミ。失敗

を恐れれば、はなから挑戦なんかできやしないんだ」

ある著名な経済学者はいう。

百発百中は曲芸、失敗をしたことのない者を一切信用してはいけないと。人生の中で失敗を経験したことのない者は、失敗することを恐れるあまり、結果がみえている確かなことしか挑戦したことがない無難な者だ。もしくは挑戦を放棄した要領のよい者だ。しかしそれは挑戦とはいえない。挑戦とは結果が不明瞭な出来事に思慮苦慮して挑み、戦っている者のことをいう。そういう挑戦の中には結果がどうあれ、自身の成長が垣間見える。つまり人間としての差がでてくるということだ。そう多くの成功は、多くの失敗にも負けずにやり通したときに輝くものなのだ。

親方の言葉にどこか納得がいかない。どことなく話をすり替えられている気がする。

「試合の練習はテムズ先生にでも聞けばいい。乗馬教室の場所は知っているだろう?」

「それとこれと話は違うわ」とナオミは唸りに唸る。

「同じだよ、相手はお前のことが怖いんだ。お前のことを何も知らないからな。そういうお前もチェス選手になるのが怖い、チェスのことを何も知らないからな。そして世間には最初から最後まで、それを見つめているヤツが必ずいる」

「それって誰なの?」

ナオミの問いかけにティソ親方は、少女の髪の毛をくしゃくしゃにして「俺とお前さんじゃないか」と笑いながら答えた。さらに親方は「初めてが悪いことなら、この世から初めてがなくなっちまうじゃないか」と大きく笑った。

第１８話　フローリスタ、フローリスタ！【３】

第１８話

ふいにティソ親方は「おやっ、ナオミ。あそこに誰かが手をふっているぞ。どんな用事かを聞いてくるんだ、そら！」とマレンゴのお尻を軽く叩いた。

シェトランド・ポニーは勢いにまかせて走りに走った。

手をふっていたのは若い男の人だ、その人は二週間前ぐらいにアッパータウン証券からでてきた、サラリーマンの一人だ。とても難しい話をしていたから、何となくだけど記憶に残っている。

「ちょ、ちょっと待っててください！」

サラリーマンは（何だろう？）と顔をかたむけた。

ナオミはちょっとまわり道をして、モードレッド地区の騎士候補生が集まっている、ケーキ屋へとむかって走っていった。文句をいってやるつもりだったが、彼らは思ったよりも素早くて、逆に一番とろそうに見えた、あのハレルヤ・ヤドリギにあっかんべえをされてしまった。

ナオミは悔しさのあまり顔を真っ赤にして、さかんに自分の頭をポカポカッと叩きながら、見覚えがあるサラリーマンのもとへマレンゴを走らせた。

「おーい、通りすぎちゃったよ、君！」

「ご、ごめんなさい」

ナオミはすぐに謝ると若い男の方へ歩み寄った。あとからティソ親方が遅れてやってきた。親方がどんな用事でしょうかと尋ねてみれば、男の人はあたりをキョロキョロとみまわして、恥ずかしそうにボソボソと呟いた。

「ええ、なんだって？　ハイ、チーズだって？　写真を撮ってくれるのかい？」
「いやハイ、チーズじゃなくて、そのうだ…」
ティソ親方は男が何をいいたいのか、皆目見当がつかない。
「プロポーズっていいたいのかしら？」
すると若い男は何度もコクッと頷き、少女に「かわりにいってくれてありがとう」の握手を求めてきた。だけどプロポーズ、これは少女がかわりにいってあげるわけにはいかない言葉だ。
「そうなんだよ。僕の恋人は絵描きをやっていてね、女流画家でしてね。『キャサリン・ハイネ』といえば、業界ではちょっぴり名が知れた画家なんだ」との若い男の言葉にティソ親方は「ああ、あの変わった画家さんか」とぼやいた。

その言葉に証券マンは顔を少し赤らめている。
どうして男の人はこういうことを恥ずかしがるのだろう？
「その彼女の絵がちょっとまえに売れまして、今日はそのお祝いのデート。この記念すべき日にこそ、僕は彼女にプロポーズをしようと思うのです」
（うわあー、それってものすごく素敵！）
ナオミはガチッと両腕を胸のまえに組んだ。

ティソ親方は荷馬車のなかをゴソゴソしはじめたと思えば、頭をポリポリかいて「お客さん、ガマグチガエルを積み忘れてしまったようで…」ととても申しわけなさそうだ。男はデートまであと三時間しかないとあって、慌てふためいていた。

ガマグチガエル、護衛魔法によって財布に意志をもたせた護衛小銭入れだ。ティソ親方によればこのガマグチガエル、ただの小銭の番人と思っていたが、あなどってはいけない。金貨を守るように腹

袋のなかに声を保存する能力がある。
だから人にはどうしても聞かれたくない、秘密をこのカエルでやりとりしたり、ちょっとしたへそくりを隠しておくには最適なところだったりと、そう何かと用途がある。ティソ親方の場合はお客さんの声をこのカエルにいれて、花の種を作るとか。文字どおり言葉をいれて、花言葉を咲かすための種を作るのだ。

「ああ、どうしよう、僕は口べたなんだ、うーん」
するとナオミは自分の後ろのポケットにくっついている、掌サイズのポシェットのようなガマグチガエルを取りだした。
「おお、もってきていたのか、偉いぞ！」
「ううん、これは友だちのガマグチガエルなの」
エーデル酒場のカウンターで、エンガチョが置き忘れたガマグチガエルだ。
エンガチョのガマグチガエルは炎のようなバラ色のカエルだ。カエルといわれなければ、四角いエナメル財布に見間違えてもおかしくない。くりくりした瑠璃色の目が印象的だ。

ナオミは悪いと思いながら、エンガチョのガマグチガエルを親方に手渡した。
「悪いが、中身を空っぽにさせてもらうぞ」
ナオミはどうやって花言葉を作るのか、大人しく見ていた。
まず親方はガマグチガエルの口をこじあけて、地面にむけてゲロゲロと何かを吐きださせるように、ガマグチガエル財布を逆さまにむけた。
親方はジャラジャラッと音をたてて落ちてきた、金貨や銀貨などのミスリル通貨をナオミに手渡したあと、さらに人差し指で財布のなかを空っぽにした。すると青い透きとおった飴のようなものが落ちてきた。
「声のくず飴だよ」

親方がいう声のくず、何らかの事情でガマグチガエルが聞いた声が、腹袋のなかで消化されずに固まったものが集まってできた飴みたいなものだ。いわゆる消化不良のくずだ。花屋たちはそれを「声のくず飴」と呼び、捨てるわけにもいかず、仕事上の守秘義務とかで自らそれを食べる。だいたいはいろんな声が集まったものなので何がなんだかわからない。

ただ時々、男女のプロポーズや告白の言葉とかの断片が飴になってて、もちろん味はないのだが、何となく甘酸っぱさを感じるときがあるそうだ。

「これは俺は食えないな。お前の友だちのもんだからな。ナオミ、友だちのお前が責任をもって秘密を処理しなくちゃいけねえ。まあ、食ってみろ」

これも経験だ、と親方はいう。ナオミは恐るおそるくず飴を口にいれた。その瞬間、ナオミの心に聞き覚えのある、こんな声が飛びこんできた。

「私の処刑日はいつなんだ?」

「一週間後じゃ。ブルトン公爵陛下の強い要望でな」

声の主はトモロヲ・ブドリ、もう一人はサンチョ・ボブスリーだ。

「お前さんは遺言を残すかね?」

「いやいい」とても静かな声だ。

「宮中伯、まだ懺悔は終わりませんか?」と別の男の声がした。

「ちょうど終わったよ、すまないね。そこの君は確か……」

「わが主からは『黒猫』と呼ばれています――――」

「ふーむ、でも立ち聞き、盗み聞きは泥棒の始まりというがのう?」

「……」

それから声がしばらく途切れていたが、また始まった。
「兄貴は冤罪だ、無実だ」
この声はエンガチョの声だ、間違いない。
「そうかもしれんが、ブルトン公爵陛下の決定に誰も意義を唱えることはできん」
「冗談じゃねえや。なあ、なんか兄貴が助かる方法はないのか、え？　兄貴のためなら俺は何だってするぜ。人殺しと盗み以外だけどな」とエンガチョの嘆きの声。

「ほーう、その言葉に嘘偽りはないな？」
まさにその言葉を待ってましたとばかりの声だ。
「あるミスリル鉱山主だがね、君の力、ドワーフの力を借りたいといってきている。うまくいけばもしかしたら、あー、そのう、なんだ。君の兄貴は助かるかもしれんな」
「あるミスリル鉱山主ってのはパパティーノか？」
「さあね」男は言葉を濁した。
「仕事の内容は？」よほどの秘密事項らしい、男は聞き取れない声で「…　…　……」と呟いた。
「じょ、冗談じゃねえ！」エンガチョは顔青ざめた。
「君の兄弟（ブラザー）の死と引き換えだ。これ以上にないだ、と私は思うだがね？　このままでは君の兄貴は無実のまま、ここ孤島の牢獄モン・サン・ミッシェルで朽ち果てる」
「……」
ゴクッ、とエンガチョの生唾を呑む音が聞こえる。

「…よかろう…」エンガチョはしぶしぶ納得した様子だ。
「これで契約成立というわけだ。ことは重大さを極めるもの、電話石は電波盗聴の恐れがある。これから君と私との会話のやりとりはこのガマグチガエルでやりとりするものとする、いいね？」

「で、あんたの名はなんていうんだ？」
「私は『黒猫』、これ以上のことは明かすことはできん」
ガマグチガエル……おそらくこのガマグチガエルのことだろう。
――――こ、これって、脱獄の計画。
彼らは知らずしらずのうちにガマグチガエルに会話を聞かれ、その会話をどういうわけか自分が聞いている。今、自分は人の秘密を聞いてしまったのだ。
ただわかったことはいくつかある、そのうち一つはサンチョ・ボブスリーの脱獄にはエンガチョが関わっていたこと。魔法トランク脱獄の件も、きっとエンガチョが手助けしたに違いない。
黒猫という名前にも聞き覚えがある。彼は自分たちを誘拐した張本人だ、この黒猫もエンガチョと関係があり、またサンチョとも関係があった。
「おーい、ナオミ。何をぼっーとしているんだ、よく見ておくんだぞ、次はお前にもやってもらうんだから」ティソ親方の言葉にナオミは思わずドキッと飛びあがり、自分がプロポーズの手伝いをしている最中だということを思いだした。
「ガマグチガエルが空っぽになれば――――」
「はい、親方」
ナオミは勢いよくガチガチの返事をした。
「お客さんの声を入れてもらうんだ」
ナオミがコクッと頷くのを見ると、親方は若い男に「さあ、コイツをつかんで、心の中で思いきっりプロポーズの言葉をいってください」とガマグチガエルを手渡した。
若い男は大きく息を吸いこみ、声をだすかのように心をこめて、ガマグチガエルをつかんだ。風船のようにふくらんだガマグチガエルは、モゴモゴッと動き始めたと思えば、数秒後には大きくゲップ

をした。

ティソ親方はいつもの大きさになった頃合を見計らって、財布のなかに手をつっこみ、紅玉（ルビー）のような赤い宝石を取りだした。ナオミが不思議に見つめるので、ティソ親方は「これはこの人の『心（ハート）』なんだ」と少女に心の声を手渡した。

じわっとほのかに温かい。温かい言葉は温かく、優しい言葉は優しく、悲しい言葉は悲しく、冷たい言葉は冷たくと親方は声にも感じかたがそれぞれあるという。

ナオミから男の心を受け取ると、親方は赤いリボンがついた空っぽのブーケ入れにその心をいれた。

「花の女神フローラに祝福されし、汝の心は花咲く…」

――――きっと魔法の言葉に違いない。

ティソ親方がそう呟いた瞬間、男の紅玉のような情熱的な心はみるみるうちにポインセチアの、オーバルブーケと姿かたちを変えていく。ちなみに冬の花、ポインセチアの花言葉は永遠なる愛だ。

ナオミの瞳は素敵だとばかりに輝いていた。

「プロポーズはブーケのほうが女の人は喜びますよ」

どうかこの男のプロポーズが成功しますように――――ナオミは花の女神に切に願う。

花の姿かたちは季節と心によって、大きく変わる。これが花言葉である。温かい言葉であれば、それ相応の花となる。花を贈るということは言葉を贈るということ、突き詰めていえばその人の「心」を贈るということである。

若い男は勘定を支払い、ナオミには「じゃあ、騎士候補生の君にはこれをあげよう」と騎士メダル七枚を手渡すとすたすたと立ち去った。

第１９話　フローリスタ、フローリスタ！【４】

第１９話

無事に仕事が終わって一安心、二人はまた歩きはじめた。
「声を花にする場合はガマグチガエルを使って、声を物体にするんだ。物体になったあとは花の女神フローラにお願いすれば、花に変わる」
また最初から物体の場合は、花の女神フローラを呼び出せばいいとのこと。
じゃあ、試しにと親方は地面に転がる石ころを一輪の花に変えた。ナオミも親方の言葉を真似たが、どうもうまくいかない。花屋の仕事をしていれば、自然と花の女神フローラの魔法が使えるようになる、そうティソ親方はいう。
何事も場馴れが大事だということかもしれない。

「花の女神フローラの魔法は覚えていても、損はないよ」
親方はまた呪文を唱え、花を石に戻しながらいった。確かこれは素敵な魔法だ。

しばらくして誰かが誰かを呼んでいるような気がした。その声は若い女の人の声、ナオミがちょっとはなれたところにふと目をやれば、一人の若い女の人が大きく手をふっていた。世話しなく「こっちよ、こっち。小さなフローリスタさん」とどうも少女に手をふっているかのようだ。

（私のことですか？）とナオミはちょこんと指を顔にあてると、女の人はそうだとばかりに頷いてみせた。
曲がり角のあたりで二人は女の人に呼ばれ、画家たちのイーゼル

がわんさかと立ち並ぶ、画家大通りを通り抜けた。黙って親方たちは彼女にとことことついていけば、小路の一角にある大きな教会の前に辿り着いた。

ドームのてっぺんには剣がかかげられ、石文字でキング・アーサー地区教会と刻まれていた。

階段にはずらりと大理石できた教会の守護神、聖騎士の装飾彫刻が二人を出迎えた。神聖な場所とあって、二人は申しわけなそうに館のなかへとはいっていった。なかにはいってみれば、ものすごい大きな天井画がナオミを驚かせた。

オルガンの音が微かに聞こえてくると女の人にいえば、「先生はオルガニストですからね」と微笑む。どうやら次のお客さんは音楽家のようだ。この人はその助手に違いない。

赤と金を基調とした五層席の祭壇近くには、黒髪を花かんむりみたいにだらんとたらしたいかにも音楽家らしい初老の男が、それは見事なパイプオルガンを弾いていた。

祭壇には百色トマトが供えられている。この百色トマト、色によって味が異なる魔法トマトだ。聖なる食べ物ともいわれ、病気のときにしか食べれない高級品だ。

瞳を瞑り、ダダダ、ダーンッと情熱的なオルガン演奏だ。派手なマント、雄牛の紋章がはいった赤マントが印象的だ。あのマント、いまいち思いだせないが、どこかで見た覚えがある。

「…元師伯エミール・エマニエル…」

通称L卿、小さな声でティソ親方はナオミに呟いた。

「この人は黒伯爵だ、とにかく気をつけるんだ」

とにかく気をつけるんだといわれても、一体何を気をつけたらいいんだろう?

迷いの森の辺境伯派の伯爵を「黒伯爵」と一般的にいう。

辺境伯が死んだとはいえ、彼を支持した一味「迷いの森のの一味」

はまだ健在だ――――とエンガチョがいっていたのをナオミはにわかに思い出した。

親方の説明によれば、この人は師伯という身分だった元伯爵。師伯とは宮廷顧問、公爵の師というべき立場の伯爵のことだ。いうならば宮中伯と同等の地位があるものの十二年前、辺境伯モンテカルロ卿がブルトン公爵の玉座を狙い、謀反を起こしたとき、あろうことかこの男は辺境伯派についたという。

公爵の師という人が謀反に加担したとあって、宮廷内は騒然となった。当然、この男の伯爵の身分と領地は没収となった。九年前に辺境伯が死んだとはいえ、今も要注意人物として宮中伯の保護観察に置かれているとか。現在はこの教会の修道騎士長と教会楽士を兼ねる。いわゆる音楽が弾ける神父という役割だ。そしてこの男にとって、何より救いというべきはトモロヲ・ブドリが心許せる、彼の古い友人だということだ。

親方はそういうけれど、思想信条は個人の自由だ。

演奏の素晴らしさには関係ない。演奏が終わるとナオミはパチパチッと手を叩いた。それに気づいたオルガニストは軽く会釈してみせた。

「ブラボー、いいところにきてくれたね、花の芸術家の諸君」

教会楽士はティソ親方の手を情熱的に両手でギュッと握った。

「じつはもうすぐ町の音楽展――――演奏で忙しくて締めきりが今日だとは気づかなくね、今年は友人の未発表作品を、彼のかわりに発表しようと思う」

去年から審査方法が生演奏から、蓄音式に替わったらしい。

「去年はインパクトを重視してね、チョコレート専門店の親方に頼んだのだが、やはりチョコレートのレコードはだめだったよ」

蓄音機にかけてあるレコードを子どもがかじったり、ペロッと舐めるそうだ。そのおかげで彼が作曲した曲は落選してしまった。あ

る著名な批評家などは「彼の音楽はまずい、だけどチョコレートは美味しかった」と毎日ブルトン新聞に寄稿したほど。

「オウムに音楽を聞かしたが、アイツらはかってに曲を変えるからだめだった。しかもヤツは音痴でね、ドレミファソラシドの音程がおかしいんだ。さあ、親方さん。音が私の頭から逃げてしまうまえにひとつ、お願いしますぞ」

ティソ親方はナオミと一緒に椅子に座った。

彼女の太股にはガマグチガエルがちょこっと座っている。準備が整ったとみた音楽家は、ダダダ、ダーンッとパイプオルガンを弾きはじめた。その演奏はナオミたちを心地よくさせる。ガマグチガエルも心地よい音色に耳を澄ましている。

演奏が終われば、拍手とともに音楽家はまた会釈した。

ティソ親方は早速ガマグチガエルのなかから、透明色の宝石を女の人に手渡した。

あっ、思い出したぞ。あの赤マントは永久機関式飛行船、ナヴァグリオの船長サラ・レッドブルと同じものじゃないか。老音楽家はナオミからサラの名を聞くと「これは懐かしい友の名だ」と遠い目になった。

「ご回想のところ申し訳ないのですが。大先生、この曲名は？」

ティソ親方もこの老人が奏でる、偉大な調べに心を揺さぶられているようだ。

「ふむ、『ロホルトへのソナタ』。わしの友人ルレスエロ・ジェラールという音楽家が作曲したバラード。残念じゃが彼はつい最近、天寿をまっとうしたと聞く」

――――その名前はどこかで聞いた覚えがある。一体誰だっけ？

「まっすぐな良い目をしておるな、お譲ちゃん」
元師伯エミール・エマニエルはナオミの存在に微笑んだ。
「新入りでして、ほらっ、大先生にご挨拶しないか！」
「…は、初めまして。あの、そのキング・アーサー地区のナオミ・ニトです。以後、お見知りおきを…」
一瞬、音楽家の瞳が険しくなった気がした。気のせいだったらいいんだけど。
ティソ親方が花の女神フローラの魔法を唱えようとした瞬間、教会楽士が「そんな野暮のことはやめたまえ、命の音で咲かせてみせようじゃないか」と軽くオルガンの鍵盤を叩くと、いきなり美しい声で歌いだした。

♪
ドはドラゴンヌのド
レはレッドブルのレ
ミはみてごらんのミ
ファはファイアーのファ
ソはそれごらん！
ラはラストまで読んでね
シは真実はね♪　そこにある

ドレミファソラシド
ドシラソファミレド

ドミミ
ミソソ
レファファ
ラシシ

ソドラファミドレ

ソドラシドレド
♪

歌声にあわせるかのように、音の宝石からパッ、パッと白ユリが咲いた。

女の人は「まあ」と顔がほころび、祭壇ちかくの花瓶にそれをいけた。旋律と歌声にあわせて、つるや小さな花が咲乱れ、いつのまにか花瓶には、大きなユーチャリスと白ユリのオーバルブーケになっていた。

そっと耳を澄ましてみれば、白ユリからはパイプオルガンの音色が聞こえてきた。音楽家の助手は親方にミスリル金貨を数枚、手渡していた。

「おお、花の蓄音機。まさに花と音の融合、これぞブラボーの言葉に尽きる。これで私たちはそれぞれ素晴らしいものを交換したわけだ、私はこのブーケ、親方はお金、そして見習いのお嬢さんは騎士メダルだ。そうじゃのう、何枚がいいかのう」と音楽家はナオミを覗きこむように見つめ、女の人は小さな宝箱を持ってきた。赤と金の二色がまざりあった、円筒の貯金箱にも見える。

「あの…先生、感動を頂きましたから十分です…」

「これはなんとブラボーな答え」

女の人がパカッと蓋を開けてみれば、騎士メダルがぎっしりと詰まっていた。

「よし好きなだけ持っていきなさい。」とナオミはギュッと一掴み。

あとで数えてみれば騎士メダルが十二個もあった。

「遠慮深いのう。が、正義に遠慮はいらんぞ。ついでにこの百色トマトも君に贈呈しよう。君のお父さん、サー・ナオキ・ニトはこれが大好きじゃった」

老人はさりげなく、右手を左胸にやった。

そして別れ際に「ロアゾンとともに」とあの言葉を呟いた。その言葉を聞いて、ナオミは脳震盪が起こりそうになった。老人が父を知っているだけでも驚きなのに、心臓の鼓動が激しく脈打つのがわかる。

「大先生、お気を遣わせてしまいまして、どうもすいません」

ティソ親方はペコリッと頭を下げると、そんなナオミを連れて教会をあとにした。

サンチョ・ボブスリーにサラ・レッドブル、そして元師伯エミール・エマニエル。この三人は自分がナオミ・ニトと知って、わざと「ロアゾンとともに」という言葉を呟いた。

――――ロアゾン、この言葉は一体何を意味するんだろう？

彼らは父と母とどんな関係があったんだろうか。それにあの雄牛紋章のマントも気になる。ただわかることはただ一つ、ロアゾンという言葉が三人と自分を結びつけているということだ。もうひとつ分かることは騎士メダルが五〇枚も貯まった、ということだ。それと老人からもらった、赤い百色トマトが赤トウガラシの味――――通称「火炎味」だったということだ。

第19話　フローリスタ、フローリスタ！【4】（後書き）

ドレミのうた
原曲：オスカー・ハマースタイン2世作詞、リチャード・ロジャース作曲

第２０話　フローリスタ、フローリスタ！【５】

午後のブルトンホテル大通りは人でごったがえしていた。
「ねえ、親方。私、このお仕事ね、なんだか好きになりそうなの」
ナオミの笑顔に親方はとても嬉しくなってしまった。二人はまだ後ろからニヤニヤと笑ってついてくる、あばたたちが気になってしかたがない。そんな少女を気の毒に思ってだろうか、ティソ親方はずっと遠くを指差した。
「今日は大漁だよ。ほらっ、あそこでまた俺たちを呼んでいるじゃないか。ナオミ、悪いがあそこまで一走りしてくれないかな」
「え、どこかしら？」
「ほらっ、領主館の時計塔だ。とにかくどんな用事なのかを聞いてくるんだ」
ティソ親方はナオミの姿が見えなくなると、けわしい顔つきになり、後ろをふり返ってあばたたちを「コラー！」と一喝した。
彼らはティソ親方の怒鳴り声に驚き「逃げろぉー」の掛け声のもと、ナオミが時計塔から用件を聞いて、戻ってくる頃には退散していた。

「ねえ、あの子たちは？」
「さあね、他の誰をからかいにでもいったんじゃないか」
急ぎの用件とあって、少女の後ろからほっそりした男が走ってきた。神経質そう男はナオミが用件を伝えるまえに、領主館の時計塔路地まで引っ張っていく。
「やあ、サンジャック。景気はどうだい？」
「ぼちぼちだよ」と男はこの町の商売挨拶をかわしながら、ピリピリしていた。

「とにかく急いでおくれ、親方。とうとう時計塔の領主館の鐘『カリヨン』が売られちまうことになったんだ。アッパータウン銀行が譲ってくれといいだしてな。ほらっ、あそこは本物と偽物の金貨をすり替えていくって今、世間を騒がしている強盗団に盗みにはいられちまったじゃないか」

アッパータウン銀行は、どうやら黄金が不足しているようだ。

「…だから名物のカリヨンの鐘をとかして金貨を造るってかい？」

アッパータウンは都市国家的なものなので、某銀行は造幣局も兼ねている。町によってブルトン人の統一通貨ミスリルは柄も質も異なる。よって決められた純度ではないミスリル通貨を流通させるものなら、町の信用度にかかわる。

それは町の株価を暴落させる要因ともなる。

「確かにあの領主館の大時計塔は時間を知りたかっても、大抵は霧や雲に隠れて見えないし、カリヨンの鐘があればこその背たかノッポ時計塔、背たかノッポ時計塔あればこそのアッパータウン…」

「町の連中がだまっちゃいないぜ？」

「だ・か・ら、カリヨンの鐘の音をあんたに造ってほしいのさ」

時計塔のなかにはいるのは領主館からじゃない。外側にある風がビュー、ビューと吹き荒れている古びた階段を登っていくのだとか。ナオミたちは雲に隠れた、カリヨンの鐘を仰ぎみた。

「落ちたら、間違いなく死ぬよ」とジョジョならいいそうだ。

ハァ、ハァッと息を切らすナオミ。

もしジョジョが傍にいたら、きっと「僕、山登りは嫌いなんだ」とぼやくだろう。それほど慣れていないと階段の登り下りはきつい。

突然、突風がナオミの身体をブワッともちあげた。ヤ、ヤバイと思ったときにはすでに遅い。ナオミの身体は階段になかった。一瞬、時間が止まったようにも思えた。ティソ親方が手を差し伸べてくれなかったら、自分はおそらく地上へ頭から真っ逆様に落ちていただ

ろう。

「気をつけろ！」と風に煽られ、ナオミの手を握るティソ親方。

三五二六段もの階段をのぼり終えたナオミたちは、素敵な絵が描かれた大きな文字盤のすぐ横にある「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた扉を開けた。古びた扉の軋む音よりも遥かに大きな音が部屋中に響いていた。壮大な歯車の部屋だ。歴史を刻んできた威圧感がある。

「最近じゃあ、幽霊がでるって専らな噂だ」

サンジャックの言葉にナオミはビクッと反応した。

「まあ、うちのハナコよりマシだと思うがな」

ティソ親方の言葉にナオミも頷いた。

部屋のなかは大きな歯車がガタガタッ、ガラガラッ、と規律のよい音をたて、大きいのや小さいのやら、いろんな大小様々な歯車があった。ツゥーンッと鼻にくるのは油のにおいだろうか。

そこには足場をくんで、せっせとこの大時計の世話を代々世話をしている、時計職人の親方と数人の助手がいた。

ちなみにこの時計職人の家は十五代ほど前から、この領主館の大時計の世話をしている家柄。彼らは小さな金槌であっちこっちの歯車を叩いたり、せっせとネジまわしでネジを弛めたり締めたり、油を塗ったりと忙しそうだ。そのとき誰かがナオミの肩をポンッと軽く叩いた。

「やっぱりそうだ、ナオミじゃないか！」真っ黒の顔がいった。

声からして男の子らしい、小さな顔のなかで白いのは歯だけだ。あとはシャツもズボンも、首筋もすべて真っ黒だ。「ほらっ、僕だよ」と少年は雑巾でせっせと顔を拭いた。

「あっ、ロレンツォじゃないの！」

ナオミは思わず喜びの声をあげ、再会を喜びあった。

「何だ、ナオミの知り合いか？」
「うん、ライアンと同じ生徒会にはいってる騎士候補生よ」
赤毛のロレンツォ・テオ・ランゴバルト、金髪の少女コクリコ・サクラダの従姉妹だ。生徒会長が指名した六地区の補佐役（デンコーチ）の意見を集約し、生徒会長に進言する徒会書記という責任ある立場だ。ときに騎士候補生を監督指導する立場でもある。現在は病気のライアンのかわりに生徒会長代行も兼任している。

そういえば会食のおりに、時計職人の従騎士をしているとかいっていた。でもまさかこんなところで出会うなんて、ナオミは思ってもみなかった。
「ティソ親方。今回のチェス、ライアンの代役は決まったの？」
一瞬、ティソ親方が悲しそうに目を床に落とした、気がしないでもない。
「お前の目の前にいる子だよ」
「……」
ロレンツォはすんなりと聞き流してしまった。ティソ親方に「ごめん、聞き取れなかったよ。もう一度いってよ」といえば、やはり親方はナオミがライアンの代わりに、チェスに出場するというではないか。
「嘘だろ？」
「本当みたいなの、まだ実感ないけど…」
「うっひゃぁ――――すっごい、さすが伝説！」
ロレンツォはとても興奮した口調だ。伝説、これがいつのまにか彼のなかでは「ナオミの名前」になっていた。
「本当みたいなの、まだ実感ないけど…」
「俺も出場するんだぜ！　賢者（ルーク）役で。もうすぐ地区のチェス選抜選手が発表されることになっているんだ。きっとみんな、驚くぜ！」
ロレンツォの肩にもナオミと同じチェス紋章があった。

「おい、ロレンツォ！」
時計職人の親方の怒鳴り声だ。
「油がたらねえと思ってたら、そんなとこで売っていたのか」
ロレンツォとは今月末にキング・アーサー地区教会で開かれる、チェス選手たちの集会で会う約束をして別れを告げ、ナオミと親方は歯車と歯車の間にある螺旋階段を登っていった。

第２１話　フローリスタ、フローリスタ！【６】

「…こ、これがカリヨンの鐘…」

「いつみても立派なもんだな」と親方はヒューと口笛を吹いた。

そこには見事な巨大な黄金の鐘がどっしりとあった。親方のいうとおり半端ない大きさだ。いや半端ないのは威圧感もだ、と付け加えるべきか。

カリヨンの鐘は二十三個の鐘、二オクターブ以上で鍵盤で演奏する楽器だ。世界最大規模の野外演奏楽器とされる組み鐘。二十三個の鐘は魔法によって、円陣を組むように宙に浮いている。この二十三個の鐘を総して『カリヨンの鐘』と呼ぶ。

ナオミたちはカリヨンの鐘の大きな影のなかで、その宙に浮いている、カリヨンの鐘を太陽を見上げるようにして見つめている。圧倒的な威圧感、恐怖感にも似た鳥肌が立ってくる。今にも落ちてきそうなほどだ。いや落ちてきたら間違いなく死ぬよ、とジョジョならここでも同じことをぼやくかもしれない。

それにしてもそこはものすごい高台だ、風がビュー、ビューと吹き荒れ、ちょっとでも気をぬけば飛ばされそうだ。カリヨンの鐘は風に煽られ、ぐるぐると円を描いてまわっている。

「鐘の音の数はすべて同じ、一時間ごとにカリヨン奏者の演奏によって鳴ります。今は午後三時十五秒前、準備はいいですか？」

ナオミは頷くと、ティソ親方の懐中時計をみた。

「カチカチ、カチ、十、九、八、七、六…」

親方はやや緊張気味で、ガマグチガエルの袋を大きく開けた。

「五、四、三、二、一、カチッ！」

時計台守の懐中時計と時計台の時計、二つの時計の針はそろって午後三時をさした。カチッという音とともに静寂が包みこんだ。カリヨンの鐘の音は町中に鳴り響かない。

「……」

虚無の音、風の音、何もない音。誰かのため息がもれる音。

時計台守は顔を「何事だ?」と青ざめていた。

本来、聞こえてくるはずのカリヨンの鐘が聞こえてこないのだから、仕方がない。町の人々も「おやっ」というように時計塔を見つめ、多くの人が足を止めていた。

サンジャックは今すぐにでも時計台から飛び降りそうだ。

親方が「音を保存するための筒はあるか」といえば、サンジャックは自分のミスリル銀製の水筒を無愛想に手渡した。親方はガマグチガエルの腹袋から、「うえっ」と気持ち悪そうにもじゃもじゃした何かをとりだして、水筒のなかにいれた。

「音の女神アポロン、汝の大いなる力をもってカリヨンの鐘の音を今ここに封ずる」

親方の囁きにミスリル銀の水筒は鈍く光った。

「まあ、そんな青い顔をするんじゃねえ、サンジャック」

親方はパカッと水筒の蓋を開けた。

瞬間、水筒のなかをぐるぐるまわっていた、カリオンの鐘の音は「カラーンコラン!」と天空に激しく響いた。もうすぐでサンジャックは地上へと落ちそうになった。ナオミが彼の服を握りしめていなかったら、まっすぐ落ちていた――――と彼女は断言できる。

ティソ親方は大笑いしながら、「これはカリヨンの音を封じこめたものだ。蓋を開け閉めすれば何度でも使える。まあ、一種のびっくり箱みたいなもんだ。が、音色は本物とひけをとらんよ」としょぼくれる時計台守の背中をパンパンッと叩いた。

テルなら「こりゃ、面白いや」と手を叩いて喜びそうだ。

カランコラン、カラーンコラン――――とカリヨンの鐘の音色が町中に響く。

この領主館の最上階は領主の間、その下はこの町のラジオ局だ。カリヨンの鐘の音は電波を通じて、町中に広がった。

時計台の広場ではこんな会話が飛びかっていた。

「あらっ、もう三時五分ですよね？」

「忘れちゃっていたのよ。ほらっ、季節ボケってやつ？」

「気のせいかしら？　音色にノイズが混じっていませんか？」

「もーう、あなたこそ季節ボケじゃないの」

時計台守はふっーとため息、胸をホッとなでおろした。

「ありがとう。これでカリヨンの鐘が金貨に生まれかわっても、当分の間は気づかれずにすむよ。偽ミスリル貨幣、ついに被害は一億ミスリル金貨をこえたらしい、迷いの森の特別捜査官たちも動きだしたって話さ」

「ボブスリー追跡やら偽ミスリル強盗団やら、連中も大変だな」

ナオミは親方の世間話に耳を傾けながらも、この時計塔からの眺めに見入っていた。

四方を迷いの森にかこまれ、森のなかに拓かれたエルフ王の土地に築かれた広大なる都アッパータウン。改めて見てみれば、町の一番街たる目抜き通りには、大きな煉瓦造りのビルが立ち並ぶ。今、自分はこの町で一番大きな赤煉瓦のビルにいるのだ、と思うだけで少女は胸がいっぱいになる。

アッパータウンは大きくもなければ小さくもない、ちょうどよい町だ。町の真んなかは赤煉瓦の建物だらけだけど、町のはずれは中世西洋育ちのとてものんびりした村々。

牧草地もあれば小麦畑や風車や水車、木こりの村など草葺屋根の村

がいくつか見え、ここで人々は昔ながらの昔の生活をひっそりと営んでいた。

「黒カラスどもめ、いつのまにかこの町に住みつきやがった」

ティソ親方のいうとおりだった。

最近、黒カラスがこの町を頻繁に飛び交い、町の人々はうんざりしていた。カリヨンの鐘の時計台にも数羽、黒カラスがとまっていた。親方はシッシッと黒カラスを追いはらった。

「カァー、カァー」とまったくうるさい。

瞳をこらせば西の方角、迷いの森のなかにひっそりと古びたお城がそびえる。黒い霧に包まれ、そんなに遠くはないが、不気味な感じがする。

「…ねえ、親方。西のほうにお城が見えるんだけど?」

「ああ、あれはカーボネック城っていうんだ。ずっと昔は、どっかの伯爵家の別荘だったらしい。今は誰も住んでいないパパティーノ家所有の幽霊城だ。間違っても肝試しといって一人でいくんじゃないぞ」

そうやって誰かが必ずあの城に冒険をしにいく。

数日後には行方不明と誰かが騒ぎはじめた頃、トモロヲ・ブドリの孫がいつも連れて返ってくるそうだ。だが今やダ・カーポは黒ヤギ、今度こそ行方不明事件になること間違いない。ナオミは嫌な汗が滴れ落ちるのを感じた。

「それにあの城はこの町が出来るまえから、ずっと昔にあった古城だ。うちの死んだ祖父さんがいうには聖杯伝説の城だというが、祖父さんの話はあてにならん」

というのもトリスタン地区子爵にして、豆知識及び雑学のサー・エドモンド＝トリスタン卿は彼の弟子だとか。なるほどただの雑学、

都市伝説の枠からでない戯言ならぬ豆知識。そんな豆知識にエドモンドは熱弁をふるっていたっけ。

えっと確かこんな内容だった気がする。

聖杯、初代アーサー王の物語『聖杯探求』の物語群の中で、騎士たちが探し求める聖遺物のことだ。神の子が最後の晩餐で用い、神の子の血を受けた銀杯――――それが聖杯だ。

その聖杯に受けた水は聖水となり、あらゆる病を治すとか。

ブルトンの歴史家によれば、紀元六十三年頃、アリマタヤのヨセフは聖杯をブリテン島に運んできた。このアリマタヤのヨセフ、神の子の遺体を埋葬したユダヤ人でもある。

町に光がうっすらと灯りだした夕暮れ、ナオミは古き洋館大通りに帰ってきた。

ナオミがアリサ夫人に小声で「ただいま」といえば、彼女も「おかえりなさい」と小声で、まるで家族のように嬉しい挨拶が返ってくる。そのままハナコがいる台所を、忍び足で通り抜けて地下牢までいくと、ジョジョが機嫌悪そうに少女の帰りを待っていた。

なぜかジョジョはぶるぶると震えていた。

「ねえ、どうだった?」

「…あやうく死にかけたよ。みてよ、ここ」

ジョジョはハナコがさわり、霜ができた場所をナオミにみせた。

彼女がいなくなったあとのことを黒犬はボソボソ、怨めしそうに語りだした。

一時間ちょっとハナコにギュッと抱きしめられ、カチンコチンになったこと。そんな自分をライアンが看病してくれたこと、ジャンが「いい子、いい子」とはぎとった毛をもってきて、自分の毛をなでてくれたこと、それがちょっと恐かったことなど。

「あらっ、ジャンと仲良くなれてよかったじゃないの」
「…そういう問題じゃないよ、アイツのせいで僕、舌を火傷したんだもん」
　というのはそれからジャンは、肉団子スープ（しかもとびっきり熱くて、湯気だらけのヤツだった）をもってきて「あい、あい」と容赦なく口に流しこんだそうだ。
　ジョジョが一通り話終えると、ナオミは「ごめんね」とジョジョをギュッと抱きしめた。するとダックスフンドは「で、騎士メダルいくらたまったの？」としっぽをふった。
「…五十三枚…」とナオミのぼやきに、ジョジョは人質になったかいがあったよ、と彼の機嫌はこのうえなく上機嫌だった。

第２２話　聖母の黄金花【１】

第１話

ナオミの朝は、青い鳥の鳴き声ともに始まる。
「うーん」とナオミは伸びをすれば、隣ではジョジョも猫みたいに伸びをする。青い鳥が出窓をコンコンッと叩けば、ナオミは窓をそっと開けてやった。

青い鳥は部屋を一周すると、彼女の手にとまり、一週間に一枚、奨学生にのみ与えられるミスリル金貨一枚を置いて、可愛らしい鳴き声をあげて、また朝焼けの空へと羽ばたいていく。
六日ぶりの粉臭いベッドでの目覚めはやはり快適だ。
それにしても謹慎六日、何とも長くて暇だったことか。
ジョジョなんかは暇すぎて、本当に死にかけていた。そんなジョジョにナオミは「べつに付き合わなくていいのよ」といえば、「僕は君の親代わりだからね」と嬉しいことをいってくれる。また彼女を心配して大げさにもテルとココがお祝いにきてくれた。別に病気でもなんでもなかったのだが。

「へえ、なんのことだよ？」
ドラゴンチップスで白状した件をさりげなく訊けば、テルは「この婆さんは嫌なヤツってのは知ってるけど」とぼやく。どうやら彼ではなさそうだ。じゃあ、一体どこの誰がサンチョ・ボブスリーが犯人だといったのだろう？
「ナオミ、もう一人。お友だちがきているわよ」
アリサ夫人の声とともに階段をあがってきたのは、マイケル・コービーだ。右手にはドラゴンチップスを持っている――――ああ、犯人はコイツか。

「僕をのけ者にするなんて、いい度胸だね！」と楽しそうな声につられ、ライアンも部屋にあがってきた。病気に伏せた生徒会長とは皆、すぐに仲良くなったことはいうまでもない。

とりあえずナオミは四人に例のガマグチガエルの会話のこと、ガマグチガエルを使って、秘密にすべきあの会話を打ち明けた。四人はまるで名探偵になった気分であれこれと推理した。

「うーん」ライアンは頭を捻る。

「私ね、ピックル・タナカ先生が、じつはサンチョ・ボブスリーじゃないのかなと思っていたの」とココ。

「だから素人は困るんだよ。僕が思うにピックル・タナカは黒猫ってヤツかもしれない。僕らが誘拐されたあの日、アイツは知らんぷりしていたしね」

一番信頼できるヤツが一番怪しい、とテルが重ねて唸る。

「エンガチョと黒猫はまず絡んでいる、と思ってよさそうだね」

ライアンの言葉に皆が頷く。

「黒猫ってヤツに利用されたんだよ、きっと」

テルの言葉に一同はうーんと唸る、つまりそれ以上の推測ができないってことだ。ミスリル鉱山の件にしても、ボルゴウッドの森の件にしても、サンチョ・ボブスリーは自分をから守ってくれた、文字通り命の恩人だ。

残念なことにドラゴンチップスを今、むしゃむしゃと食べているマイケル・コービーの讒言で、更なる無実の罪を科せられてしまったのだが。今はどうか無事でいてくれれば、と切に願うだけだ。

少年がナオミの視線に気づいたようだ。

「食べる？」とドラゴンチップスを差し出すマイケル。

いやはや食べることしか興味がなさそうだ。ナオミは「いらない」とため息を吐いた。ライアンは皆のまえで今日の朝刊をパサッと広

げた。すると少年の顔はいつもより険しくなり、見出しのある部分を声にだした。

「ついに被害はミスリル金貨一億枚を越えた！！」

最近、頭を悩ませている金融関係者にハゲが続出中。

『ついに被害はミスリル金貨一億枚を越えた！！』

アッパータウン銀行頭取の話によれば、なんと大金庫から一夜にして、一千万枚ものミスリル金貨が偽金貨にすり替えられていたとのこと。

この手口はちまたで話題になっている、あの泥棒の仕業に違いない。発表の日がなぜ三日も遅れたかといえば、金本位体制ゆえの預金者の混乱を避けるためであったのは否めない。

すでに噂を聞きつけた某銀行では預金者が殺到しているらしいが、経営陣たちによると、すり替えられたミスリル金貨一千万枚分の金貨は第三者経由から借り受けてきたらしい。一体全体、彼らはどこからそれだけの黄金を借り受けてきたのか、いやはや疑問は残るとしても預金者にとって、まずは一安心だろう。

ただ気がかりなのは一連の騒動により、この町の株価が七日連続で下落していることだと経済専門家（エコノミスト）は語る。すでにトモロヲ・ブドリ宮中伯は「この町の経済発展、それから上方修正した業績をみれば今の株価は安すぎる。ですから今が買いですぞ、皆さん」との声明をだした。

過日、歴代公爵アーサー・ブルトン陛下暗殺未遂の道具だが、捜査本部筋の話では、どうやら人造人間（ホムンクルス）とのことだ。暗殺者本人の生命を入れ、宮中に潜らせていたということから犯人は宮中の人間かもしれない。用心にこしたことはないと思われる。

銀行が第三者経由から借り受けてきたという、ミスリル金貨一千万枚分。これはカリヨンの鐘を溶かしたものに違いない。と突然、何かをひらめいたようにココが自分の推理を皆に聞かせた。

「何がいいたいのさ、ココ？」とテル。

「だ・か・ら黒猫が今、噂になっている強盗団ってことよ」

一同はさらにうーんと唸った。

一分経過しても答えがでてこない、妙案がでてこないことから彼らの思考能力限界は近づきつつあるようだ。

「僕が思うに君たち。これはきっと危険なことだよ、あまり関わらないほういい」とライアンの大人の答えが返ってきた。確かにライアンのいうとおりだ。

話題は最近、無表情で町を歩きまわる通り魔のことにも及んだ。

「ああ、知ってるよ。言葉を交わしても何も喋らないヤツだろ」

テルは数回、ココとマイケルも一回だけ出会うというよりも、すれ違ったことがあるらしい。ナオミは一回もない。別に会わないですむなら、そんなヤバそうなヤツとは会いたくないものだ。

この町で起こっていることを確認したあと、テルはおつかい、ココは取材の途中、ライアンは薬を飲む時間、マイケルはドラゴンチップスを買いにいくと意気込む。ナオミは花を届けてくれという電話がはいったので、五人はちりぢりになった。

第２３話　聖母の黄金花【２】

第２３話

謹慎が終わって、ほどなく一週間がすぎた。

だいだいピーター・ティソの花屋のお仕事は、花の出前や予約からのルンルンルンッというオウム電話の声からはじまる。週末には移動販売もあれば、仕事帰りに来店して、お花を買ってくれるお客さんとの接客と楽しい会話、その合間にナオミは各教室の担当騎士のところで社交界に励むというものだった。

仕事が遅くなっても、アリサ夫人がライアンのところに二人と一匹分の食事を用意してくれるので、最近では食事にありつけないということはなくなった。

ハナコ・ゴーストがナオミの失敗など、アニタ婆さんにいちいち報告するのも癪にさわったけれども、アニタ婆さんがナオミに何か仕事を与えるとすれば、床掃除やトイレ掃除だった――――しかも掃除が終われば、騎士メダル一枚を必ずくれた。

今のナオミにとって一番の悩みの種は、毎日のようにちょっかいをだす、モードレッド地区の騎士候補生たちだ。とりわけリサ・パパティーノは自分を苛めることに、自分の命を賭けているかのようにみえる。

自分の命を賭けるぐらいなら、騎士メダルを賭けてほしいものだ。彼らは「嘆きの壁」と密告の同盟を結んでいるため、ナオミがどこにいるのかをいつもモードレッド騎士候補生に密告していた。

テルとはよく出会うけど、どういうわけかロロとはなかなか出会えない。テルにロロのことを聞けば「ああ、そんなヤツがいたっけな」と嫌そうな顔をするし、町角の嘆きの壁はそろってアイスクリ

ームを食べている二人を見つけては「ヒュー、ヒュー」と茶化してくるので、たまったものではない。

「アイツ、おつかいかな？」

ジョジョはハナコの姿をみて、いやそうな顔でいった。

「ジョジョ、知らんぷりよ、知らんぷりよ、いいわね？」

「うん。僕、あれ以来……冷え性になったからね」

「あの子、誰だって？」とテル。

「アニタ・ジブリ・パリにとりついているゴーストよ」

「…へえ。あれが君に意地悪ばかりするっていうハナゲか…」

ハナコよ、とナオミは飽きれ顔。

「ねえ、テルのとこにもゴーストっている？」

「いるよ、『くそったれ坊や』っていうつまみ食いの常習犯がね。そいつはいつもつまみ食いを僕のせいにするんだ。ここ最近、姿をみかけないけどね。でもゴーストって、本当に嫌なヤツだよ」

「そうなの、本当に困っちゃう。あの子ね、とっても意地悪だし、このまえだってジョジョをカッチンコッチンにしちゃったし。たぶんあの子、リサみたいにとっても意地悪かもね」

テルはポケットから取り出した、チョコレートをバリッと頬張りながらいった。

「それ、どうしたのさ？」

ジョジョが怪しそうにテルをみた。

「親方のところから失敬したチョコだよ」

テルもつまみ食いゴーストのことはいえない。

「でもリサ・パパティーノはあんなヒキガエル顔じゃないよ」

「そうね、でもとっても意地悪だわ」とナオミがいうと、今まで静かに眠っていた嘆きの壁が「聞いちゃった、聞いちゃったぞ」と嬉しそうだ。さらに「お前たち、あの可哀想なハナコの悪口をいって

だろ？」と無気味な笑みを浮かべていた。
「寝ていたんじゃないの？」
「うーんにゃ、寝ているふりをしていた」
「お前、鼻くそでも食べるかい？」
テルはもう嘆きの壁の扱いになれているようだ。

嘆きの壁はものすごく大きく息を吸うと、親しそうにハナコを呼んだ。ナオミは顔を青ざめて、とても大慌てだ。嘆きの壁はそんな彼女をみるのが、楽しくてしかたがないといわんばかりだ。
買い物かごを片手にハナコが怪訝そうにやってきた。
あいかわず目は蛙のようにギョロギョロしていた、しかも顔はそばかすだらけときた。ナオミは瞳をつぶり、ギュッとダックスフンドを抱きしめた。
「呼んだ？」とハナコの愛想のない声と顔。
「こんなところであなたと会うなんて、ほんと今日は最高だわ」
ナオミの上辺だけの言葉にハナコは顔をしかめ、彼女をキッと睨みつけた。

「ゴーストが買い物したら悪い？」
「ううん、素敵だわ」
ジョジョは早くどっか行けばいいのに、とぼやく。
「おい、ハ・ナ・コ！　こっちにおいで！　おいで！」
嘆きの壁は不気味な笑みを浮かべ、ハナコを呼び寄せた。
「そこの女の子があなたのこと、とても可愛い女の子って――――」
とハナコが壁に耳を近づけてたので、嘆きの壁はニヤッと小笑いするとボソボソ呟いた。ハナコは拳をギュッと握りしめ、たちまち恐ろしい顔つきになった。
「ねえ、そういったの？」
「ああ、本当にそういっていたよ」
嘆きの壁はニヤニヤ、ナオミは嘆きの壁をキッと睨んだ。

「…あなたのこと――――料理が上手なかわいい女の子って私はいったのよ…」
「でも私、可愛いなんて一度も思ったことないわ」
ハナコは嘘吐きとギュッと唇を噛み締めた。
「ねえ、ヒキガエルって誰のこと？」
「……」
「お前のことだよ」と嘆きの壁。
ハナコの顔がみるみるうちにくしゃくしゃになった。

「トイレのハナコ、いじわるハナコ。わかめ髪の太っちょ、そばかすだらけ、足が太い、生きている意味がない……またあだ名が一つふえたじゃない」とハナコは身体を震わせて泣きだすと、ナオミたちは建物の影のなかに逃げこんで、彼女のその激しく泣いている姿を呆然と見ていた。
「ひっく、ひっく、あたち、あたちひっく…」
やがて泣き声は少しづつ小さくなっていった。
「ヒキガエル、君たちこんな素晴らしい名前をありがとう」
嘆きの壁はとても紳士らしい声だが、嬉しさのあまり声がうわずっていた。

「あんたたち、今に仕返しをしてやるからね！」
ハナコはしゃくりあげながら、一言一言ボソボソと喋ると、また大声で一人泣きするばかり。そのまま彼女は顔をくしゃくしゃにして、いつのまにかどこかへ姿を消してしまった。
「……」唖然とするナオミとジョジョ。
「生きている意味がないって、ハナコってもう死んでるじゃん」
道に食べ終わった、チョコレートの包み紙をポイ捨てするテルの言葉だ。
「おい、道にゴミを捨てるな！」

嘆きの壁はテルに大声で怒鳴った。

そんな少年の言い訳は「捨てたんじゃないよ、手から落ちた」だった。そしてすぐさま「あっ、こんなところに喋るゴミ箱があったぞ。盗み聞きするヤツはこうだ！」と嘆きの壁にチョコレートの包み紙を押しこみ逃げれば、嘆きの壁はカンカンに怒った。これは盗み聞きをした嘆きの壁に対する、テルのさりげない仕返しだ。

第２４話　聖母の黄金花【３】

ラジオ局からカリヨンの鐘の音がカランコラン、カランコラーンと夕方七時の時を告げる。

アニタ・ジブリ・パリに帰ってみれば、ハナコ・ゴーストはいつもどおりに台所で料理を作っていた。他の親方たちはワイワイ、ガヤガヤと楽しそうに食事をし、ハナコとも会話を交わすのだが、ただナオミとは一切、彼女は目を合わそうとはしなかった。ジョジョはしっぽをぱたんってふって、うたた寝をしている。

月締めとあって忙しいアニタ・ジブリ。自分の部屋に置いてあった金庫を、台所に持ってきて昨夜の金勘定をせっせとこなしているときだった。アニタは顔をしかめた。

「…変だね、ミスリル金貨七枚足りない」

ティソ親方とナオミは黙ってフレンチトーストを食べていた。

ハナコ・ゴーストはふんふん、ふふんと鼻歌を歌いながら、コトコトッとコーンポタージュを煮ていた。アニタ婆さんは「うーん」とさらに唸った。

「アニタ婆さん、計算間違いじゃないのか？」とティソ親方。

「へん、バカいいなよ。私を誰だと思っているんだ、守銭奴のアニタ・ジブリだよ。ちゃんと金貨二七五枚、銀貨一五一二枚、銅貨四千枚って、帳簿にもあんたたちの昨日の売り上げを事細かく記しているんだ。そこから――――」

アニタはパチコチッ、パチコチッと算盤をはじいた。

「アッパータウン市株式会社に三割のテナント代、あんたたちの食事代、部屋代を天引きさせてもらってもだ。なぜか金貨七枚足りな

いんだ、金庫には守りの呪いがかけてある。開けたヤツを呪い殺す魔法がね」

「ねえ、アニタ婆さん。鍵はどこにおいてあったの？」

今さっき出来上がったばかりのコーンポタージュを皆の銀皿によそいながら、ハナコはいった。

「私の安眠帽子の中だよ」

「…だったら犯人は決まっているじゃないの？」

ハナコはうーんと唸り、とても意地悪そうな顔つきになった。

「だってさあ。新しい子がここにくるまで、こんなこと起こらなかったんだもの」

ナオミは（やられた！）と心のなかで思った。

「ねえ、新しい子ってだあーれ？」

一同はナオミをじっと見つめた。

するとすぐにヒソヒソ声が聞こえ、ティソ親方はとても驚いた様子だった。とくに一番驚いたのはアニタ・ジブリ、老婆は日増しに少女を騎士候補生、花屋の従騎士として受け入れてようとしたのでわが目を疑った。

「お前なのかい、え？」

「私じゃありません、昨日はずっと見習部屋にいたもの！」

「昼間に盗みなんてできっこないわ。きっと真夜中にでもやらかしたのよ」とハナコは無気味な笑みを浮かべ、ケタケタと大きく嘲笑った。ナオミは唇をギュッと噛み締め、ジョジョは彼女の傍をじっと離れない。

「でも私じゃありません、信じてください」

「泥棒の言葉なんて誰も信じないよ」とハナコ・ゴースト。

一同は呆気にとられ、ただ二人をジロジロッと見つめていた。

「ハナコ、本当にこの子が盗んだのかい？」

アニタ婆さんは確信がほしくハナコに問いかければ、鼻歌を歌いながらニヤニヤしていた。

「昨日、この子が金庫を開けるのを私、見ちゃったの。この子が金貨を花に変えるところも見ちゃったわ。だって見ちゃったんだから嘘はいえないわ」

明らかにハナコは嘘をついている。

「聖母（マリー）の黄金花（ゴールド）の花束、アレがそうよ。疑うのならティソ親方、花束をもってきたらわかるわ、だって私は見たんだものね」とハナコはナオミの耳もとでふっと息を吹きかけた。

「……」

アニタ婆さんはナオミの頬を思いっきり打った。

「おい、人の金を盗むなんざ！　お天道様が許してもこのアニタ・ジブリが許しやしないよ」

「で、でも私、金貨なんて盗まな…いよ…」と涙声のナオミ。

「おやおや、もう仕事の時間じゃないか」

ティソ親方は席をたち、ナオミをそっと引き連れてでていこうとすれば、アニタ婆さんはギロッとティソ親方を睨みつけ、ティソ親方もギロッと老婆を睨み返した。ハナコはそれが楽しくてしかたがない様子だ。

「親方はこの子が金貨を盗んでいないというのかい？」

「ナオミは花の女神フローラの魔法なんて使えやしないんだ」

いや移動販売のとき、物体を花に変える魔法を教えてくれたのは親方だ。親方ほどではないが少しは使える。

「それに花に姿を変えた、金貨とやらを見ないと何もいえん」

親方の言葉にハナコが自らかってでた。

「ハナコ。お前を疑がっちゃいねーが、念のため二人でいくんだ。そうだな、うーん」

しばらくして一同はジョジョ・ダックスフンドに目をやった。
「おい、耳たれ。お前も一緒にいけ」とティソ親方。
「…ふう、やっぱり使いぱしりは僕かよ…」
ジョジョはよたよたと立ちあがり、ハナコとともに暗くなった花屋に赴いた。
ハナコが「コレよ、わんちゃん！」と指指す、花屋の棚のなかで一番輝いている聖母の黄金花の花束をくわえて、親方のところへと戻ってきたのは五分後だ。

親方はジョジョから花束を受け取ると「ナオミが人の金なんざに手をつけるもんか」とピーター・ティソの信頼は揺るぎない。だがときに運命は残酷なものだ。親方が黄金花の花束を金貨にもどす魔法を唱えた瞬間、彼の掌にはチャリーン、チャリンと七枚のミスリル金貨がしっかりおさまった。
「おいおい、嘘だろう」
衝撃を隠せないティソ親方。
「どうやら、これで決まりだね！」
アニタ婆さんの声は怒りで上擦っている。
ハナコは「ブラボー！」と声をあげて、ケラケラとナオミをざまみろ、とばかりに見ていた。

「…うーん、へんだな…」
「何が変なんだい、ティソ親方？」
ナオミは顔を床にそむけ、瞳には涙がうっすらとたまっていた。
「確かに黄金花は金貨が花に姿をかえた、贈答用の魔法花だ。もちろん金貨七枚の黄金花が、俺の店にあっても不思議じゃない」
「ティソ親方、いいわけはよしな！」
アニタ婆さんはナオミを煮えたぎった瞳で見た。
その瞳には確かに炎のような怒りが燃えたぎっていた。ほかの職人の親方もまるで泥棒を見るかのような瞳で、ナオミをジロジロと

軽蔑した目で見ていた。言葉はない、無言の会話というべき視線が心にチクチクッと痛い。

「あんたの帳簿と照らし合わせれば、そんなのすぐにわかる。どこの世界に金貨七枚を黄金花にするヤツがいるんだ。せいぜい一枚が相場だろうよ。それともティソ親方に盗みをなすりつけるつもりだったんかい、え？　だからあたしゃ、うちに見習いを迎えいれるのは反対だったんだ」

アニタ・ジブリは自分に怯えるナオミに弁論の余地を与えず、少女の髪の毛を思いっきりひっぱった。まわりにはナオミの泣き声が響きわたり、さらにアニタ婆さんは少女を床に平伏させ、ゴンゴンと地面に頭を叩きつけた。

「や、やめて！　髪が抜けるわっ！」

ナオミの悲鳴など老婆の耳には届かない。

「白状しな！　お前がやったんだろ！」

「違う！　私じゃないわ！」ついにナオミは泣き出した。

怒りに狂うアニタ・ジブリ、泣きじゃくるナオミ。二人の姿を見てハナコはとても嬉しそうだ。満足極まりない、至高の幸福の時を味わっていると表現すべきだろう。他の親方たちが目のやり場に困るなか、ハナコは彼女の泣きじゃくる姿をしっかりとみて、喜んでいた。

「ナオミ・ニト！　騎士メダル全部没収！」アニタの怒りの声だ。

騎士メダル全部没収！　ナオミは騎士への道が足音をたてて、遠退いていくのがわかった。

第２５話　聖母の黄金花【４】

第２５話

「アニタ・ジブリ！　それは少しひどいんじゃないか！」
ティソ親方の声など、今のアニタの耳にも心にも届かない。

と、そのとき「痛い！」と誰かが甲高い声をあげた。
アニタ・ジブリだ。ジョジョが怒り狂い、アニタ婆さんの右腕に噛みついたのだ。
「ご主人がご主人なら、犬も犬だね」
自分の右腕に噛みついている、ジョジョ・ダックスフンドを睨みつけて、振り落とすと暖炉のほうに投げつけた。まわりにいたほかの親方たちはアニタ婆さんに味方した。
肉屋の親方なんかはアニタ婆さんをけしかけるほどだ。
「おい、婆さんや。今度、噛みついたら俺がハンバーグ用ミンチにしてやるよ」
「悪いことは悪い、身体にみっちりとたたきこんでやりな」と酒場のママの声だ。

パン屋のリンドバーグ親方は皆に冷静に考えるよう求めた。この親方は引継ぎ式のときに領主館で出会った人だ。最初は恐そうに思えたが、今はいい人に見える。
「でもせっかんはいかがなもんかな、俺は反対だね」
リンドバーグの言葉は怒り狂う老婆には、焼け石に水のようだ。
アニタはまわりの雰囲気にけしかけられ、ハナコに「私のステッキをもってきな」とせっかんは激しくなるばかり。アリサ夫人はジャンの両目をずっと手で隠していた。
ジャンは母に両目を隠され、いきなり暗闇が襲ってきたので興奮

のあまり「うきゃあ！」と手足をバタバタさせていた。アリサの瞳はティソ親方になんとかして、という哀願していた。

チャリーン、チャリン、チャリンと音が七回響いた。

「おやっ、なんのつもりだい？」

ティソ親方は「もう勘弁してやってくれよ。この子が盗みをしたなら、俺が盗んだ金を返せばいいんだろ？」とミスリル金貨七枚を食卓にほうり投げたのだ。

そんな親方にアニタは舌打ちした。

「鳥はひなのうちに羽を切る、象は子象のうちにつないでおく。泥棒は小さいうちにせっかんにかぎる。たたかれて当然のごくつぶしになるまえにね。お前もこの子をステッキで殴りな！　遠慮はいらないよ！」とアニタはティソ親方にステッキを手渡すが、親方は受け取ろうとしない。

「私に背くつもりかい？」

「背くとはいっていない、人としてできないといっているんだ」

ティソ親方はつっけんどんにいった。

「それに金庫を開けた者を呪い殺す魔法は、どう説明するんだ？」

アニタは昨夜は呪いをかけ忘れていたに違いない、と唸る。

彼女は他の親方たちにステッキを手渡そうとするが、不思議なことに誰も受け取ろうとしない。今、ステッキはパン屋のリンドバーグ親方のところに今はあった。

「リンドバーグ、あんたが腰抜けどもに手本をみせな！」

親方はそもそもせっかんに反対の立場だ、ステッキを受けとっても動こうとしない。

「子どもを殴って、心の傷を作るのがあんたのいうしつけか？」

ナオミは親方たちに取り囲まれ、脅える子猫のように縮こまって

いる。そんな少女の姿をみて、リンドバーグは「こんなの教育でもなんでもねえ」とアニタをキッと睨む。そんなパン屋の視線を老婆はさらりと受け流した。

ついにステッキはまわりまわって、ティソ親方のところに戻っていた。

「従騎士（スクワイヤー）の全行動はすべて親方騎士（マスターナイツ）の責任だ。で、どうするんだい。ティソ親方？　あんたができないっていうなら、あたしの権限でこの子をぶちのめすからね。再起不能になってもあとで文句をいうんじゃないよ、いいね！」

アニタ婆さんが親方から杖をぶんどり、ナオミに向かって杖を振りあげれば、「やめろ！」とティソ親方は声を荒げた。

「この子は俺の従騎士だ。契約も交わしている。契約に基づいて、この子は俺が罰する。あんたのいうとおり従騎士の過ちは親方騎士の過ちだ。俺も一緒に苦しむさ」と親方がアニタ・ジブリの言葉に反論すれば、リンドバーグは「正気じゃねえや」と愚痴った。

パン屋が愚痴るほどのやり方、それは体罰以上のものだった。

ティソ親方が右手をスゥーッと顔に近づけ、静かに瞳を閉じ、ぶつぶつと呪文を呟きはじめた瞬間、ナオミの額に刻まれた十字剣の痣紋章が鈍く光った。

（…ナオミ、許してくれ）

親方の声が心よりも脳に響く。

その瞬間――――少女の額に激痛が奔った。

ナオミの何ともいえない悲鳴が台所に響く。

少女は地面を這いずりまわりながら、拷問の魔法に耐えている。

激痛のあまり、床を転げまわるナオミ。少女はなぜかとてもティソ親方が苦しそうに呪文を唱えているのがわかる。親方の懺悔の言葉というか、許しを乞う言葉が脳裏に響く。

そうなのだ、ティソ親方も苦しいのだ。

「親方、私…ひっく、何も盗んじゃいま…せん…」

「真実はそうかもしれんが、事実はお前が金貨を盗んだことになっているんだ」と親方の声が脳に響く。

ティソ親方が本気じゃないと分かったのか、アニタ・ジブリは額に深いしわをよせ、声を荒げた。

「ティソ親方、茶番はやめな！　そんな生易しい呪(まじな)いで精神が壊れるもんか。どうもあたしゃ、体罰のほうが馴染みがいい。あんたがやらないなら、あたしが見本をみせてやる！」

アニタ婆さんは親方からステッキを奪いとると、泣き喚いているナオミめがけてステッキを大きく振りかざした――――とそのときだった。誰かが杖を持った老婆の手をギュッと握りしめた。

「誰だい、あたしの邪魔をするヤツは！」

「もぐりのホーエンハイムですよ」

ナオミは恐るおそる瞳を開けてみれば、アニタ婆さんとヒソヒソと話をしているのは、皇帝髭(カイゼル)を生やした男の人だった。この人は『剣と盾』のとき、「人が人を殺すことがどんなことかを見ておきなさい」と自分に問いかけてきた人だ。決闘の介添人でもあった気がしないでもない。

「いい大人がせっかんとは感心しませんな」

「…あんたには関係ないよ」

「それがあるんですよ、僕の患者の命にも関わることなんでね」

もぐりのホーエンハイムなる人は医者のようだ。

「ライアンが僕を呼んできてね、これをやめさせてくれっていってきたんだ。彼は絶対安静の身だ。しかも最近、風邪をこじらせてしまった。もちろん予断は許さない。そんななか僕を呼びに診療所ま

でやってきたんだよ。その意味がわからないあなたでもあるまい。
そうだね、ライアン？」

「…あ、ああ、そう…だ…よ」と青白い顔のライアンが戸口にもたれながら、とても苦しそうに台所にやってきた。ナオミの泣き声に少年は顔をしかめる。
「ねえ、あの子。泣いているじゃないか」
アニタは少年に見つめられて、言葉を失ったかのようだ。
「…あのガキはうちの金貨を盗んだんだよ、しかも七枚…」
「でもせっかんはだめだよ。この子は僕のあとを引き継ぐ、チェス選手だぞ。この子にもしものことがあれば今年もキング・アーサーはビリじゃないか」と息苦しそうな声。

「ふーむ、アニタ・ジブリ、まずは独房に閉じこめてはどうかな？」
ホーエンハイムは老婆に冷静になるよう促した。
「ねえ、アニタ婆さん。許してあげてよ」とライアンの弱々しい声。
「アニタ・ジブリ」と医者の静かなる声。
「ダックスフンドに噛みつかれた、腕を診せてもらえたいんですが。この子が盗んだ七枚をひいて三枚で診てあげますよ。いい取引きだと思うんですがね」
ホーエンハイムはナオミに優しく微笑んだ。
「あんたにしては妥当な値段だ」

アニタ婆さんはふーっと息をはくと、杖を投げ捨てた。
そして泣きじゃくるナオミの腕をつかむと「でもこのガキは泥棒なんだ、当分は一日一食だからね。ハナコ、さっさと檻に連れてお行き！」と独房へと引きずっていく。
ハナコが「まかせて」ととても嬉しそうに、ナオミの髪を思いっきりひっぱった。階段にさしつかえるとハナコは「えい！」とナオミを力のかぎり蹴りとばし、少女は転がるように階段から落ち、再

び檻の中にぶちこまれた。

第２６話　聖母の黄金花【５】

第２６話

数分後、少女のすすり泣く声が聞こえてきた。
台所からは夕食時の親方や職人たちの笑い声が聞こえたり、ときどき悪態を吐きにくるアニタ婆さんのしゃがれた声が耳に届く。「この泥棒！」と散々悪態を吐かれ、少女は両耳を両手でぐっと押さえた。今は何も目にしたくない、何も聞きたくない、それが少女の唯一の願いだ。
身体を三角にしてしくしくと泣きだすナオミ。

くーん、くーんとただ自分の身体をこすりあわせてくる、ジョジョ・ダックスフンド。
身に覚えのないことをやったといわれることほどつらいものはない、あれは謀られた罪なのだ。もしかしてライアンやティソ親方、アリサ夫人も自分がやったと思っているのだろうか――――そう思えば、思うほど胸がはりさけそうだ。このときナオミは初めてサンチョ・ボブスリーの気持ちが痛いほどわかった、彼が脱走したこともよくわかった。

「ねえ、ナオミは悲しいから泣いているの？　それも悔しいから？」
ジョジョ・ダックスフンドはさりげなく聞いてみた。
「悔しいからに決まっているじゃないの」
「だったら泣いちゃだめだよ」
「ねえ、ジョジョ。あなた、私が本当にやったと思っているの？」
「まさか」とすぐに「ねえ、ナオミは僕を噂の泥棒犬にしたいわけ？」
「泥棒犬じゃなくて猫、泥棒猫よ」

「知ってらあ」とジョジョはひそかに（ナオミも強くなったもんだ）と思った。

ナオミは親方たちが寝静まるまで、ずっと独房のはしっこにうずくまっていた。いっそのこと、このまま消え去りたいと思う。地下牢の寒さが身にこたえる。

いや寒さよりも身にこたえるのは、アリサ夫人やティソ親方が様子を見にきてくれないことのほうだ。弁明の余地はないとはいえ、彼らには本当のことを知ってもらいたい。

台所の騒がしさも落ちついた頃だった。ナオミは藁に埋もれていた謹慎六日間の友、引継日記を読み返していた。おやっ、日記にはこんな気になることが記されていた。

抜け道への合言葉はキング・アーサー騎士団！
『独房に閉じこめられたときの対処法』

今日、アニタ・ジブリの左足に僕の忠実なる犬が噛みついた。医者がいうには全治三週間のケガ、たぶんこれで婆さんは犬嫌いになるだろう。それは願ってもないことだ。おかげで僕は地下牢にぶちこまれ、頭にはいくつものこぶができた。たぶんラクダのこぶには負けるだろうけど。とはいえ、ここで働くこととなる未来の後輩たちは僕に感謝することだろう。なぜなら地下牢の壁は嘆きの壁だからだ。

嘆きの壁、それは今ではゴミ箱だけど、中世の大昔はぬけ穴だった。じつは彼らの口は抜け道なのだ。ちなみにここの嘆きの壁モーゼは、一日のうち二十三時間は寝ている。

（アニタ・ジブリの犬嫌いって、トニーっていう男の子が原因だっ

たんだ）

二人は何者かが自分に忍びよってくる気配を感じた。

「…ラ、ライアン？」

ナオミは思わず呟いた。

あたりは静まりかえり、いきなり「んばあ！」とハナコが目玉を大きく飛びださせて、よく彼女が人を脅かすときにやる、あのおぞましい顔つきになった。ハナコはジョジョのしっぽを握ろうとするが、ジョジョがすぐにナオミの後ろに隠れたので、それはできなかった。ハナコの舌打ちが聞こえた。

「何しにきたのよ？」

ナオミはハナコをキッと睨んだ。

グレムリンの親子もキッと彼女を睨んだ。

「うーん、どう？　金貨七枚よりも人の悪口をいった罪の重さは？」

「やっぱり、あなただったのね！」

「さーて、なーのこと、なんのこと」

ナオミはこのときはっきりとわかった。

これはすべてハナコ・ゴーストの今日の仕返しなのだ。ハナコがアニタ・ジブリの部屋に夕食前に忍びこみ、金貨七枚を黄金花に変えて、自分に罪をなすりつけたのだ。いや正しくは罪を作りだしたといえる。

「私、生きている頃は花屋の見習いもやっていたのよ」

なるほど、どうりで自分より花の女神フローラの魔法が使えるわけだ。

「あなたって本当に最低な女の子なのね！」

ナオミはふつふつとこみあげてくる怒りをおさえ、とても悔しそうだ。できることならばハナコの髪を思いっきりひっぱってやりたい、ジョジョなんかは噛みついてやりたいと思った。でも彼女はすでにゴースト、そうしたくてもできない。二人は地団駄を踏みなが

らハナコを罵った。

悪態がこのうえない喜びなのか、ハナコ・ゴーストはニヤッと嘲笑った。

「いいこと教えてあげる。ティソ親方はとても悲しそうだったわよ、アニタ・ジブリなんか親方に『あんなごろつき、兄貴のペーターのところに戻しちまいな』って喚いていたわ。たぶんアンタ、ここをクビになるわね」

「アニタ婆さんに本当のことをいうわ」

「イヒヒヒヒッ、泥棒娘の言葉なんか誰も信じないわ」

それだけいうとハナコはもう一度、ジョジョのしっぽを握ろうとした。もちろん失敗したのだが、そのまま「んばあ！」と目玉を大きく飛びださせ、おぞましい顔つきになっていきなり歌いだした。

ジョジョはカチンッ！　と固まった。

「♪

ナーオーミ・ニート！　ナーオーミ・ニート！

泥棒ナーオーミ・ニート！　泥棒ナーオーミ・ニート！

とても嫌なヤツ　ものすごく嫌なヤツ

早くここから出て行け　明日にも出て行け

♪」

「へたくそ」とナオミが彼女の歌を罵しると、ハナコはナオミにあっかんべえをして、だんだんとうすくなったと思えば、いつのまにか消えてしまった。やがて時計の音がポーンポーンと鳴った、あれから小一時間がすぎた。

彼女はライアンが来るのを待った。

地下牢に閉じこめられたり、ちょっとでも嫌なことがあればライアンやアリサ夫人、ティソ親方がいつも様子を見に来てくれていたからだ。だけどこの日は誰もこなかった。たぶん皆、ナオミが金貨

七枚を盗んだと思ったのだろうか――――いやそうに違いない。

「ねえ、クビだってさ？」

「…うん…」ナオミは目のまえが真っ暗になった。

と絶望に苛まれていたとき、ナオミとジョジョはそろって悲鳴をあげた。嘆きの壁モーゼはナオミたちを興味深々に見つめていたのだから、仕方がないといえば仕方がない。

モーゼは年老いたライオンのような威厳ある顔だ。

引継日記には、そこの後ろの壁が嘆きの壁モーゼだと書かれていた。でもものすごく寝むたがり屋で一日のうち二十三時間も寝ているという。この一時間が彼が起きていられる貴重な時間なのだろうか。

「夕方から女の子の泣き声が聞こえてくれれば、いやでも目が覚める。まあ、話は聞いておったよ」とさらに「トニーといい、お嬢ちゃんといい、やんちゃでけっこう！」とライオンのような雄々しい顔のモーゼは愉快そうに小笑いする。

「アニタ・ジブリには騎士メダルを何枚、没収されたかね？」

ナオミは歯がゆいばかりに「全部」と小さな声で呟いた。

「ねえ、モーゼさん。お願いがあるの。アニタ・ジブリに私の無実を証明してくれないかしら？」

ハナコの話を聞いていたなら、可能なはずだ。

ナオミはモーゼにすがるような気持ちでいったものの、モーゼは「素直に人の話を聞く人であれば、君は最初からここにはおらん」ともっともらしいことをいう。

「ところで、なぜお前さんはわしに頼るんじゃね？」

どういう意味だろう？

「自分の無実のことじゃよ。己の無実を証明するのは己自身、他人ではない」

モーゼの言葉とともにナオミはあの言葉を思い出した。

「自分の弱い心に打ち勝つのです、ナオミ！　人の言葉であなたの価値は決まらない、あなたの価値はあなたが決めるもの」

この言葉は引継ぎ式のあの女の人の言葉だ。

そのとおりだ。自分には身の証をたてる権利がある。なぜなら無実だから。ハナコの言葉で罪に落としいれられたのなら、自分の無実は自分で勝ちとらねばならない。

「…あ、あのう、モーゼさん。私、ここからでたいの…」

モーゼはじっとナオミを見つめた。

「墓場大通りのさびれ横丁はゴーストの集会所だ。ハナコはそこのくそったれ坊やと仲がいいと聞いておる。その少年ならハナコに真実を語らせることができるかもしれん」

墓場大通りのさびれ横丁、ロロが住んでいるところだ。

ロミオ・ロートレック。最近、まったく姿を見せないけれど元気だろうか。くそったれ坊やはテルのところのブルトンホテルにとりついている悪霊だ。最近、姿を見せないとか、気になることをいっていたが――――ゴーストの集会所にならいるはずだ。

ナオミの瞳に正義の炎がはぜる。

「モーゼさん。私、身の証を立てに行きます！」

「よろしい、その言葉を信じよう。だが朝までには戻ってきなさい、いいね？　そうしないと君に弁解の余地はなくなる」

ナオミがコクッと頷くと「われらが騎士団――」とモーゼは少女に問いかけた。抜け道への合言葉だ。ナオミが「キング・アーサー」

と呟けば、モーゼは嬉しそうに「永久に栄えあれ、白馬の騎士よ」と大きく口を開けた。

一心不乱に駆け抜けるなか、ナオミが後ろをふりむけば、グレムリンの親子が手を振ってくれている。やがて二人の姿が見えなくなれば、モーゼは「『ロアゾン』の魂は引き継がれた。帰ってきた伝説に乾杯！」とボソッと囁いた。

凍てつく寒さと満月夜のなか、アニタ・ジブリ・パリの宿り木で羽を休めていた、夜鳴き梟は飛び立った。時計塔に映える大きな満月にむかって、青い鳥も飛び立つ。時刻は真夜中の二時、静まる街にカリヨンの鐘が時刻を告げる。

第27話　暗闇に生きる者たち【1】

第27話

モーゼの口のなか、そこは真っ黒な通路だ。幽霊でもでそうだが、ハナコよりましにちがいない。ナオミは涙をぬぐい、ジョジョを連れてふり返ることなどせず、ひたすら彼女たちは前へと歩いた。

数分後には目が暗闇に慣れ、耳が冴えてきた。

ドッドッドーッ、とどこかから水の音とともに明かりが漏れてきた。

ナオミたちの歩幅が早くなるにしたがって、音がどんどん近づいてくる。水飛沫が激しくなってきたと思ったとき、一気にナオミの視界が広がった。

そこは光と水の音が交差する、地下神殿のような踊り場だ。まるでアテネにあるパルテノン神殿のようだ。左右の壁からは激しく水が流れる。天井から水が滴れ落ち、ナオミの髪に水がかかる。どうやらここは上水路から地下水道へと続く、水の踊り場のようだ。そう抜け道は地下水道へと続いていた。アッパータウンを流れる水のうち、余分な水は地下水道へと流れているのだ。

「ナオミ、誰かいるよ！」ジョジョは警戒を怠るな、とぼやく。人影がうっすらと見える。話し声もだ。この声、確かに聞き覚えがある。角に隠れてチラッと声がするほうに目をやれば、あの男がいた――――ジョルジョ・パパティーノだ。

「ねえ、子分の男爵イモもいるよ」

ジョジョのいうとおり、執事のカトニグレ男爵もいる。
残念ながら彼らの会話は水の音で聞き取れない。しかしこんなところで、しかもこんな真夜中に何をしていたのだろう。気になるといえば嘘になるが、今は連中よりも大切なことがある。自分の身の証をたてることだ。ナオミは先を急いだ。

「フン！」
ジョジョが地面を這いずりまわる、野ネズミを蹴散らしてくれる。犬も猫のようにネズミを捕るのが得意、ジョジョの言葉もそうまんざらでもない。野ネズミたちが走りまわる地下水道を行くこと数分、天井に星明りが見えた。
星からは外気が漏れている。
「マンホールだよ」ジョジョがぼやく。
星の正体はマンホールの穴から漏れる街の光りのようだ。ということは出口は近い。
「いい、ジョジョ？　一気に押し上げるわよ？」
ズシッとマンホールの蓋がにわかに持ち上がった。
「待って、ナオミ。誰かが近づいてきてる」

間一髪だった。マンホールの蓋を開けようとすれば、馬に跨った二人の夜警と一匹の警察犬（ドーベルマン）がこちらに向かっていたので、ナオミはそっと身をかがめ、夜警を通り過ぎるのを待った。
「予告状とやらが届いたそうだな」
まるで怪盗紳士気取りだよ、と夜警の会話がしんみりと彼女の耳にも届いた。
「今度はカジノだそうだ。パトカー百台体制で厳重警備中だよ」
「これだけ集まりゃ、強盗団『泥棒猫』もおしまいだな」
「そうだといいんだが――――」

夜警を何とかやり過ごすと、用心に用心をかさねて、ナオミはマ

ンホールの蓋をそっと開けてみた、表はブルトンホテル大通りのようだ。

「あそこの噴水のベンチまで一気に行きましょ！」

少女は大通りを一目散で駆けだした。さすがに真夜中だけあって昼間とは違い、噴水から聞こえる水のせせらぎしか聞こえてこず、うっすらと静かだ

ナオミは一体全体どうすればいいのかわからない。

ひとまずナオミはシャトー・ブルトンホテル広場、プラタナスの樹近くのベンチに腰かけた。傍にジョジョがちょこんと座っていた。騎士の姿が彫られた噴水池には満月が映っていた。

「一万ミスリル銀貨！」

ジョジョがベンチの下に転がっていた銀貨をナオミに手渡した。

「はいはい、一ミスリル銀貨ね」とナオミはぼやく。

――――この銀貨のように金貨七枚、どこかに落ちていないだろうか。

「ねえ、ジョジョ。ちょっと相談なんだけど、墓場大通りのさびれ横丁にいくのって明日にしよっか？」

「朝になるまでここにいるつもり？　もしかして怖いってこと？ハナコみたいなのがわんさかいると思いなよ」とジョジョ・ダックスフンド。

「それっ、元気づけているつもりかしら？」

ナオミはふーっとため息をつくと、その場で小さな声で歌を口ずさんだ。

「それなんの歌、とても元気がでるけど？」

「ドレミの歌っていうの」

「へえ、ドはあるけどジはないの？」

「まさかジは、ジョジョのジっていうじゃないでしょうね？」

ジョジョの舌打ちする声が聞こえた。

ベンチで元気になったナオミは墓場大通りのさびれ横丁を目指した。墓場大通りはおつかいで何度もきたことのある、文字どおり墓場近くの大通りだ。墓場のなかにある小さな町、それが墓場大通り。

今、噂の無表情で町を歩く、神出鬼没の通り魔ともすれ違った。

「きっとあの人よ。テルがいっていた真夜中を彷徨い歩く、無表情の男って…」

本当に無表情だ。暗くてよくわからないが、でも意外と若い男のようだ。ロエスレル・ドラゴンヌにも似てる気もしないでもない。ジョジョは毛が逆立ちつつも「気のせいだ」とぼやく。

通り魔はナオミとすれ違ったおり、ピタッと足をとめた。

ナオミが一瞬、空気のよどみを感じ、ふと振り返ったものの、そこには誰もいない。当然、男がいると思ったところには、ひっそりとして人の影はなく、寂しげな公園のベンチだけがあった。不審に思い、ジョジョに声をかけようとしたとき、「ナオミ・ニト」と背後から声がした。

ビクッと背筋が震え、嫌な汗が滴り落ちるのがわかる。

首を背後にまわすと、ベンチ下の街灯に男が立っている。青白い顔だ、いやむしろ憔悴しきった顔ともいえる。一瞬、目が合った。これはヤバそうな雰囲気だ。

「あなた、誰？」

声が悲鳴のようにうわずっている。

「私は私であって、私でない者」

異様なほどゆっくり男は答えた。どこか不気味だ。

「…真夜中で…何しているの？」

少女は男の確信に迫ったようだ。

「身体を求めている。本来の身体を？？？？」
男が怪しい目つきでナオミの身体をまじまじと眺めた。
「…無事で何よりだ、私は身体を求めている…」
ナオミはゾーッと血の気がひくのがわかった。鳥肌が全身に駆けのぼった。男の喋り方は不気味をとおりこして、人を怯えさせるような冷血な異常さがあった。まるでこの世界の人間じゃないような口調なのだ。

「君に見せたいものがある」
男はナオミの右腕をガシッと掴んだ。その手はまるでハナコのように冷たく、ハナコよりも恐ろしい雰囲気がある。
「いや！　離して！」
「…な、なぜだ？　君は…私のすべてを…知らねばならない」
その顔は真に迫っている。これは恐い、無表情だからさらに恐い。
「ジョジョ！　逃げるわよ！」
ナオミは男の手を振り払って、半べそを掻きながら、我武者羅に走りにはしった。男は「君は私のすべてをを知らねばならない」とわけの分からないことを叫び、走って追いかけてきた。
「ひえええええ！」ジョジョは悲鳴をあげた。

第２８話　暗闇に生きる者たち【２】

第２８話

「…ハァッ、ハァッ。ジョジョ、ついてきてる？」
喘ぎ乱れる呼吸。一呼吸しようとナオミが膝から顔をあげれば、より物騒な場所に迷い込んだ気がした。バサバサッと森の中を鳥たちが飛び交う音が耳に響く。
「…何とかまいたわね、ジョジョ…」
ナオミは左脇腹に手をやって、息絶えたえだ。

「ここ、どこかな。ナオミ？」
墓地の案内標識には庭園墓地と書いてある。

墓石は騎士たちの生前の面影が彫られているもので、それは見事なものだが真夜中に見るととても無気味だ。チラチラと何かの明かりが見えたときには、二人はすくみあがってしまった。
「ねえ、あれって人魂ってヤツかもよ」
「もーう、ジョジョのバカ！」
ナオミはさらにジョジョを強く抱きしめた。
いやはやその人魂がこちらに近づいてくるではないか。
本物のゴーストを何度も見慣れているとはいえ、ナオミは気絶寸前だ。するとそれは西洋ランプを手に持った、黒帽子に黒い外套に身を包んだ黒ずくめの男だった。顔には黒いマスクをかぶり、右手には黒いトランクをそれぞれ持っていた。その姿はまるで悪名高き強盗団を連想させるのに、そう時間はかからなかった。

そういう怪しい男が四、五人ほどナオミたちを取り囲んでいた。
（ナオミ。こいつら、偽金の泥棒猫の一味だよ）

（そんなことわかってる・・）

ナオミのだんまりも彼らには通用しないようだ。

「お前、ここで何をしてやがるんだ？」

「計画を聞かれちまったからにはばらすしかねえな、黒猫さん？」

黒猫って、サンチョ・ボブスリーが脱獄の際にいたヤツだ。あと自分たちを誘拐した張本人でもある。絶体絶命ってこんなときのことをいうのだろうか。

「ガキを殺すのは趣味じゃねえが」

じゃあ、殺さないでくれ？？？？と思えども、そうは問屋が卸さない。

ため息のまじりの声とともに、黒ずくめの男は腰に提げていた剣を抜いた。彼らの会話にナオミは顔を青ざめ、しどろもどろになった。ジョジョなんかはすでにぬいぐるみのふりをしていた。逃げるにしてもどうやって逃げたらいいのだろうか、頼りにすべき黒犬はぬいぐるみのふりをしているし。

しかも黒猫という聞き覚えのある、あの名前さえ聞こえてくるではないか。

「…あ、あの私、何も聞いていません…」ナオミは必死に訴えた。

自分は身の証を立てるまで、死ねる身分ではない。

「おい、あそこで何をしていたんだ？」

「あ、あの、その…友だちのロロに会いにいっていたところです」

「その友だちの住んでいるところは？」

「さ、さびれ横丁」

男の一人はちょっと唸った。

その男は、ナオミを殺すことにとても戸惑っている男だ。そのときナオミのお腹の音が恥ずかしい音をたてたので、緊張していた男たちは爆笑した。

外は真冬、空腹は我慢できようとも、寒さは中途半端ではない。
恐怖を感じつつも、身体はガタガタと震えがとまらない。寒さもそうだが、この震えは恐怖からの震えかもしれない。こんなときこそサンチョ・ボブスリーの助けがほしい。いやだめだ、これ以上あの人に助けを求めるなぞ、自分が駄目になる。何よりもあの人は左腕を自分のせいで失ったんだ。
ナオミは覚悟を決め、剣をむけている男を見つめた。

「ちっ！　なんていう目をしてやがる！」
男がナオミに剣を振りかざせば、黒猫が「やめろ！」と唸った。

「こんなところで騒ぎを起こすのは利口じゃない。それに見てみろ、ただのガキだ」
そうただのガキだ。だけど信念はお前たちよりはある。黒猫はナオミを頬をぐいっと持ち上げ、自分の顔に近づけていった。
「生かしてやるかわり、お前には時間稼ぎをやってもらおう」
黒猫は極上の葉巻を吹かしながらいった。

？？？？時間稼ぎ？

「安心しろ、雨風はしのげる」
と瞬間、黒猫はナオミにむかって息をフーッと吹きかけた。
うえっ！　と咳きこむ暇もあたえず、少女と黒犬はその場に倒れこんだ。
「さてと野郎ども。今回が最後の仕事だ、大暴れの時間だぞ！」
ロシアの民芸品マトリョーシカのように、トランクをもった男たちは黒猫が持っているトランクのなかへ、次々にガタゴトッと入っていく。このトランク、あの魔法のトランクとみて間違いなさそうだ。最後に気絶したナオミと黒犬をそのなかに詰め終え、黒猫はニ

ヤッと不気味に笑い、トランクの蓋を静かに閉めた。

第２９話　アッパータウン・ヤード【１】

午前四時、静かにカリヨンの鐘が時を告げた。
アッパータウンは暗雲に支配され、満月は雲に覆い隠される。晴れることのない闇夜は時刻とともに深まり、小雨がポトッ、ポトッと路面を濡らす。

ナオミが連れてこられたアッパータウン警察署は、窓に鉄格子のはまった歴史の香りが漂う赤煉瓦の建物だ。見方を変えれば兵舎のようにも見える。大玄関には「アッパータウン警察署」となんともいかめしい看板がかかげられ、ナオミが連れていかれた部屋は長机に木の長椅子だけの殺風景のところだ。
「君の名前はなんていうんだい？」
「ナオミ……」少女は縮こまって、ボソボソいった。
「姓のほうを聞きたいんだけどね？」
「…ニト…」
「住んでいるところ、君の出身地だね？」
「…ブルターニュ地方、フィニステール県南部、カンペール市、旅籠ジジ亭住込み…」と取り調べの警官はすらすらと、書類に彼女がいったことを書き記していた。

「君はフランス社会で生まれ育ったブルトン人か」
「はい、従騎士としてアッパータウンにやってきました」
なるほど、と警官は静かに頷く。
「父親と母親は誰だい？」
「……」ナオミは何も答えなかった。
「ラインハルト警部。僕の推測と推理によれば、この子はあのナオ

キとアリスの一人娘だよ」
　ナオミのかわりに誰かが答えてくれていた。うつむいていた彼女は声の主をみようと顔をあげてみた。その人は毎日ブルトン新聞社の記者、ナオミとは誘拐事件のときに面識があった。記者の言葉にナオミを取り調べていた、ケネディ・ラインハルト警部は、そっと万年筆を置いた。

「名探偵、あなたですか。どうしてそんなことがわかるんだい？」
「まったく簡単なことだよ」
　記者は刑事が驚いたのを見て、笑いながらいった。
「僕はこの子とある裏通りであったことがあるんだ。新聞記者には観察と推理という才能が常に求められる。そのほかにちょっとした文才もね。僕の脳みそには家系や家柄、あらゆる知識がつまっていてね。それを応用と実践すれば、ちょっとした予言などもできちゃうわけなんだな。この子がニト夫妻の一人娘、ナオミ・ニトだとわかったのはそういうわけだよ」

「誰かに聞いたんじゃないのかい？」
　ケネディ・ラインハルトは怪訝そうに男を見つめた。

「とんでもない、警部。この子がニト夫妻の娘だと、僕にはわかっていたんだ。だいたいニトっていう名前もそんなに珍しい名前じゃないしね。今回の場合、観察してみればこの子の名前はナオミというらしい。姓はニト、日系だ。住んでいるところはブルターニュのカンペール村。旅籠ジジ亭住込みとのことから、彼女は親と住んでいないのは明らかだ。ここまでは知識による観察だよ。
ここからは推理になる。この子はどうやら騎士候補生のようだ、年齢はおそらく十三歳ぐらいだろう。ではなぜ彼女に親がいないのか。たぶん親に捨てられたか、死なれたかのどちらかに違いないわけだ。そしてブルターニュ地方、カンペール村付近でそういう出来事があ

ったといえば九年前の、あの事件しかない」
「つまり彼女はナオキとアリスの一人娘というわけか…」
ラインハルト警部は納得した様子だ。

「以上が僕の推理。これだけの推理にはかかった時間は約三秒だ」
毎日ブルトン新聞社の記者は得意げにいった。
「まさにあの人たちはキング・アーサーの英雄だったよ」
すると警部はナオミに親しみをもったようだ。
「でもモードレッド地区の人は腹黒き者だって…」とナオミ。
「だったらこういってやりな。『お前たちこそ何を企んでいるか、よくわからない連中じゃないか。警察にしょっぴかれないように注意しときな』ってな！」というとラインハルト警部は記者のほうをみた。
「ところで名探偵。一体全体、何しにきたんだね？」
「もちろん取材と調査をしにだよ、君。ご存じのとおり僕は黒猫を追っているんだ。この子は黒猫と何か関係があるんだろう？　実際、アッパータウン銀行の大金庫に彼女がいたわけだしね」

ときはさかのぼり、午前三時。カリヨンの鐘が静かにその時を告げる中、少女は夢のなかにいた。
「ユージン！　君のお父さんって何している人なの？」
マイケル・コービー似の秋山亨は、新渡家のＩＴ企業の一室のような書斎、いや正確には仕事場をみて、家でも勉強机に向かうなんて、僕にはできないや、と唸った。
「ゲームオタク、表向きはシステムエンジニアだけどね、マイケル」
「カッチョエエェ？？？？」とすぐに「勝手にあだ名をつけるなよ」と唸る。

またあの夢だ。新渡勇人（ニト・ユージン）の夢だ。いや未来の夢、冷静に考えれば

予知夢ともいえる。

秋山亨は瞳を輝かしながら、床にうたた寝している黒犬にも目をやった。勇人は「クゥネルっていうんだ」というけれども、ナオミはジョジョにそっくりだな、とひそかに思った。この少年にしろ、黒犬にしろ、まるで一五〇年後の自分たちをみているようだ。

「じゃあ、君のお父さんってゲームプログラマーなの？」

秋山亨は机に置いてある、フォルトゥナ社が開発したＭＭＯＲＰＧ『ブルトン・サーガ』のパッケージをみて、爛々と瞳を輝かしている。

「ああ、フォルトゥナ社専属のゲームオタクだよ」

「じゃあ、暇なときに聞いておいてよ。最近、プレイヤーキラーが横行してるだろ？　僕も何度も被害に遭っているんだ。ギルドの仲間と一緒に立ち向かうんだけど、いつも返り討ちさ」

プレイヤーキラー。別名「暗殺者」のことだ。

ＭＭＯＲＰＧを一般的にした「ブルトン・サーガ」ではこういったプレイヤー間のやりとりは（セクシャルハラスメントなどを除いて）プレイヤー間で解決すべきという姿勢で制作されている。特にプレイヤー間で戦闘が出来るシステムを売りの一つにしていたが、ある程度強くなったプレイヤーが他のプレイヤーを狙い撃ちして倒すというプレイヤーキラーが発生し、初期の状態では一部のプレイヤー（特にゲームを始めたばかりで対抗手段をもたない場合は致命的）が満足にプレイできない状態になったこともある。

それはどんな意図なのかはわからないが、初心者をゲーム世界から追い出す行為だ。そんな行為を取り締まるため、フォルトゥナ社は数十名のシステムエンジニアをプレイヤーキラーキラー（通称：フォルトゥナの使徒）として送り込んだ。ユージンの父親もその一

人だ。

「ブルサガの世界は派閥があって、国が乱れているんだ！」

ブルトン・サーガを語らせれば秋山亨の右にでるものはいない。

国が乱れている理由はただ一つ。運命の女神に与えられた大陸アヴァロンには、白の公国ブルターニュ、青の公国ブルゴーニュ、黒の公国ドイツ、赤の公国マルタと多くの色称がついた公国がある。これら力ある公国から統一象徴としてアヴァロンの統一皇帝を選出する。だが現在、この帝位が空席なのだ。これこそ国が乱れた原因でもある。

そして世界中から多くのプレイヤーがその座をめぐり、各公国の騎士団に属して、戦争を繰り広げている。先代の統一皇帝は白の公国ブルターニュの、白の公爵から輩出された。しかしそれがいけなかった。子宝に恵まれていた先代皇帝の時代、皇帝は権力基盤を固めるため、敵対する公国の太子や王女をわが子と結ばせ、血のつながりを深めさせた。

先代皇帝が崩御すると、血の正当性ゆえにたちまち権力争いを始めた。

彼らはそれぞれが次期皇帝、皇太子の意味合いを持つ『聖王』を名乗り、生き残った者がアヴァロンの統一皇帝を名乗ることも取り決められた。結果、国は乱れ現在に至る。これがブルトン・サーガのゲーム設定であり、世界観だ。

どの公国騎士団に属し、どの公爵に仕え、誰を皇帝にするか、それがこのゲームの面白みである。もしくは下克上で公爵を暗殺後、自分が皇帝になることも不可能ではない。実際に傭兵団から身を起こし、どの騎士団にも属さない独立勢力もいるぐらいなのだから。プレイヤーキラーもおそらくはそういった輩に違いない。

とそのとき、自分の存在に気がついたのかうたた寝していたクゥネルが、めんどくさそうに立ち上がり、こちらにむかって、だらーんと垂らした舌で自分の頬を舐めてくる。
「くすぐったいよ！　クゥネル！　やめて！」
ナオミはジョジョの頬舐めでようやく目を覚ました。

「ねえ、クゥネルって？」
ジョジョは顔を渋めていった。

「ごめん、ジョジョ。夢の話、あなたに似ている犬がいたの」
「ふーん、あの悪夢のことか。そりゃ、光栄なこった」
ジョジョは夢にでてきた犬に嫉妬しつつ、またうたた寝をする。
とはいえ、ここは一体どこだろう？　一五〇年後の未来ではないことは確かだ。周りをゆっくり見渡せば大きな鉄の金庫のように思える。しかも金庫にはミスリル金貨がザックザクだ。まるで夢のようだ。いやこれは逆に夢であってほしくない。

ジョジョは山のような金貨を見て、尾っぽを振って、とても興奮していた。そんな二人の興奮する声を聞いたのか、ふいに扉がギキキッーと厳めしい音をたてて開いた。
「なんだ、お前たちは！　どこから侵入したんだ？」
警備員たちが警笛を鳴らせば、次々と人が集まってきた。
「あ、あのう。ここどこですか？」
空気が読めないナオミらしい第一声だ。
「ここはアッパータウン銀行本店、大金庫だ！」
そうして事情聴取がてらに任意同行ながら連れて来られたのが、ここアッパータウン警察署だ。

第３０話　アッパータウン・ヤード【２】

第３０話

「名探偵、あなたはどう思われますか？」とラインハルト。
「この事件は複雑な糸のからみだが、その糸をたどればある悪党にたどりつくよ」
「それってあなたのいうジョルジョ・パパティーノ卿ですか？」
「そのとおりだよ」
ラインハルトは「またですか」という顔つきでいった。
「じつをいいますとね、毎日ブルトン新聞の名探偵。僕たちアッパータウン刑事部（ヤード）では彼の話になると、あなたの推理は間違っていると思うのです。この件について僕もある程度調べましたがね、子爵は学識も才能ともに兼ねそろえた紳士ですよ」
「じゃあ、君の推理でも聞かしてもらおうか」
毎日ブルトン新聞の名探偵は、椅子に座るとゆうちょに足を組んだ。
「ええ、あの人は見識がある紳士です。モードレッド地区にある子爵邸ですが、それは豪華な屋敷（シャトー）でしたよ。客間に飾ってある絵がなんとも見事でしてね」
「ベリー・グッドウィル画伯の作品じゃないかね？」
「色鮮やかな絵だったのは憶えています」
ラインハルト警部は自分の知識のなさをとぼけた。
彼の絵は十二年前まではただ当然だったといわれる。だがある絵をきっかけに彼は、絵画王という称号を公爵陛下から授与されるまでになったことはご存じのとおり。
絵画王が率いる一派は『ハイカラ派』と呼ばれ、時代の先駆けをいっている。

その画伯の処女作がどういうわけか、あのパパティーノ子爵邸にある絵画だ。現在の評価額はミスリル金貨一千万枚。パパティーノ商会の儲けは、決算書を調べたところミスリル金貨一億三千万枚に対して、税務署の報告によれば、支配人でもある彼の年俸はミスリル金貨五千万枚だとか。

ラインハルトは彼の言葉にうーんと唸った。

「名探偵、あなたは子爵についてどこまで調べられているんですか？　彼について何か重大なことを知っているのなら、包み隠さず教えてくださいませんか」と刑事は感嘆していった。

すかさず毎日ブルトン新聞の記者はニコッと微笑んだ。

「よろしい」というと「彼は犯罪学の博士号取得者、今まで最大の陰謀をたくらむ男。正確にはすべての悪事の計画者にして、悪党たちの暗黒街を支配する頭脳。彼の才能は悪事にのみ、まさに悪党のなかの悪党だ。それがあの男の正体だよ。

それでいてアーサー・ブルトン公爵陛下の絶大なる信頼を得ており、世間の人々からはカジノを運営する実業子爵として尊敬されている。誰からも避難されていないし、疑われてもいない。それこそこんなことをいえば僕を法廷に引っぱりだして、名誉毀損とやらで僕を牢屋にぶちこむことぐらいたやすいことだろう。まさに彼は天才、悪事のね。そしてある日、彼は僕を屋敷に招いたんだ。すると子爵はなんていったと思う？」

「はい、なんていったんですか？」

ラインハルト警部に逆に質問されてしまい、男は苦笑い。

「君は質問の天才だ。その…つまりだ。これ以上、身のまわりのことを嗅ぎまわるなら、命の保証はしないって脅かしてきた。このとき僕は脅迫罪で彼を訴えたんだが、逆に名誉毀損で訴えられ、ミスリル金貨五十枚の罰金をいいわたされた。子爵は証拠や証人を造るのがうまい、しかも執事のカトニグレ男爵は彼の優秀な弁護士ときた。今でも彼の言葉を憶えているんだ。確かこうだった。『迷いの

森の辺境伯モンテカルロ閣下率いる、我らを敵にまわしてもいいことがないぞ』だ」

ラインハルトはその名前を聞いて、顔を青ざめていた。

「あなたはまったく恐れを知らないお方だ。であなたが仰りたいことは、そのモンテ何某が……パパティーノ副伯とどういう関係があると？」

「パパティーノはね、この希代の大悪党の腹心なんだよ」

今、ラインハルト警部に必要なことは教えてもらうことよりも家に帰って、自分の部屋を推理小説家の本でいっぱいにすることかもしれない。そういえばダ・カーポの助手エンガチョも、パパティーノに関しては同じことをいっていた気がする。

ナオミはモンテカルロの名を聞くだけで、胸糞悪くなる。

「…で、でも彼はその…脱獄のときに死んじゃっていますよね？」

「そのとおりだ。モンテカルロは脱獄のおり、仲間の裏切りにあって命を落とした。彼の墓は迷いの森にある。でも本当に死んでいるなら、迷いの森の辺境伯の名が飛び出すだけで、どうして僕らは毎回、震え上がる必要がある？」

「確かに…」

ラインハルト警部はゴクッと喉を鳴らした。

「それに彼の跡を継がないわけがない。あのジョルジョ・パパティーノ＝モードレッド卿ほどの悪党がだ。いや実際は迷いの森の辺境伯の跡を継ぐ必要なんてないんだよ」

「なぜです？」

「迷いの森の辺境伯が生きているからだよ」

？？？？なんだって！　そんな馬鹿なことがあるもんか。

毎日ブルトン新聞記者の言葉にナオミは言葉を失った。

「なぜモンテカルロ辺境伯が死亡説を流したのかといえば、彼が死んだほうがいい立場にいるからだ。じゃないとわざわざ死亡説を流す必要もない。僕はね、その彼を追いはじめて十三年になる」
「ということは、まだ推測の域をでてないわけですね」
推測の域？？？？なんだ、ただの戯言か。
ナオミはジョジョをチラッとみた。ジョジョは相変わらず、気持ちよさそうに、うたた寝をしている。それにしても十三年、この人はよっぽどの暇人なんだな、とナオミは新聞記者の話に夢中になっていたが、ラインハルト警部が我に返ったようだ。
コホンッと咳払い、話をもとにもどした。
「今は取調中ですから、でていってくださいよ」
そういうと警官は記者を追いだして、またコホンッと咳払い。
「やれやれとんだ邪魔がはいったが、ところで君はどの地区配属なんだい？」
「キング・アーサー地区」ナオミはつっけんどんにいった。
「君の担任、親方騎士は？」
「…ピーター・ティソ親方…」
「ふむ、これが最後の質問だよ。君が黒猫に捕まって、気がつけば銀行の金庫のなかにいたのはわかった。そもそもなぜ君がそこにいたかだ。家出の理由は？」
「…あのその、ミスリル金貨七枚を盗んだっていわれたの、でも本当は何も盗んでいません。盗んだのはハナコなんです。あの、その濡れ衣っていうヤツなの」とナオミはきっぱりといった。
「そうかい、何も盗んじゃいないのか。でもここにどういうわけか、そのミスリル金貨があるじゃないか。これは自分から盗んだって白状しているようなもんだぞ！」とラインハルト警部はガマグチガエ

ルのなかの金貨を見て、大きく唸った。
「……」ナオミは何もいうことができなかった。

このガマグチガエルは、そもそもエンガチョのものだ。当然、なかにある金貨七枚は彼のものだ。青い鳥が運んできた奨学金なんて、各教室の受講料でとっくに消えてなくなっている。残っているわけがない。
「でもこの金貨、なんだかおかしいぞ?」というとラインハルト刑事は、ミスリル金貨をちょっとかじってみれば、パリッという音がして金貨は二つに割れた。すると警部は「こりゃ、大変なことだぞ」と血相を変えて、鑑識を呼んだ。

第３１話　アッパータウン・ヤード【３】

第３１話

カリヨンの鐘が午前四時を土砂降りのなか、侘しくその音を街に響かせる。ナオミはせまい牢屋のなかでうずくまり、しくしくと泣いていた。耳を澄ませば、落雷とともに雨がザーッと勢いよく降っているのが、なんとなく分かる。

ピカッ！　と雷鳴がナオミのうずくまる影を牢獄に照らす。

数秒遅れでガララゴーンーッ、とカリヨンの鐘の音を掻き消してやかましい音が牢獄に轟かせた。嘆きの壁モーゼには朝までには戻ってくるといったものの、残念ながら守れそうにない。

どんな理由でかは分からないが、自分は牢屋につながれている。これではまるでいっぱしの悪党のようだ。テルやロロたちが見ればどう思うだろう、きっとハナコやアニタ・ジブリ、ジョルジョ・パパティーノなどは小笑いするかもしれない。少女は何だか自分がものすごく惨めに思えてきた。でも泣くだけ泣いたら、かえってすっきりした。

隣の牢屋では大きな男の「…俺はやっちゃいねえ…」と呟きが聞こえた。

ナオミも同じことをいってやりたい。自分は無実だ、金貨七枚にしろ、この牢屋にぶちこまれることさえ有り得ない話だ。偽金貨の云々で牢屋に入るべきは、本来はエンガチョであって自分ではない。自分は無実なのだ。

コツコツ？？？と誰かの足音、長くうす暗い廊下を歩いてくるのがわかる。

牢屋は四、五メートルごとに重そうな扉、各々には閂と錠前で閉

じられていた。控えめなボソボソ会話から、近づいてくるのは二人の男組のようだ。

二人はナオミのすぐ隣、一番重苦しい牢屋のまえで立ちどまり、そのまえにつっ立っている二人の看守に「お若いの、ちょっと場を外してくださらんか」と和やかな声が聞こえた。

「やあ、こんばんわ。エドガー・ボブスリー」

（えっ、エンガチョ？）と思わずナオミは牢屋の男をみた。

確かに隣の牢屋にいるのは、エドガー・ボブスリーことエンガチョだ。

「ご領主までもが俺を？」

「いいや、わしはお前さんを信じておるよ、ただこの男が何とかしろ、とうるさくてな」

声の主はトモロヲ・ブドリ・アッパータウン伯爵だった。

彼はとても深刻そうな顔で小部屋に入ってきた。後ろからはもう一人、とても神経質（インテリ）そうな中年男性（この人は見るからに刑事のようだ）が入ってきた。ナオミはその刑事とはカンペールで会話をしたことがあった。

「久しぶりだな。で、ムッシュ・ホワイトたるお人が俺っちに何のようだ？」

「数時間前、またアッパータウン銀行に『泥棒猫』が盗みに入りましてね。カジノへ盗みに入る予告状、アレは囮でした。我々はまんまと連中に騙され、いつの間にか、銀行の金貨が偽物とすり替わっていた」とホワイトがぶっきらぼうにいうと、エンガチョの顔は青ざめ、ポタポタと汗をかきはじめた。

「これで一億一千枚金貨がすり替えられ、連中に盗まれた」

「……」

「おかげで今、この町の株価は大暴落、この町の株主たちがうるさ

くてね。また迷いの森の特別捜査官たちにも非難が集中している。何か対策をとらねばならんのだ」
「俺は何もしちゃいねえ」

エンガチョはトモロヲ・ブドリを必死になって見つめた。
「確かにお前さんは何もしてはおらん。わしはよくわかっておる」
「トモロヲ・ブドリ、あなたのそういう甘いところが？？？？」
ムッシュ・ホワイトは眉をひそめていった。
「…ミスリル貨幣の練成は禁固刑一万年…」
「勝手に罪状を作るな」
エンガチョは歯軋りした。

「ある有力な証言によりますとね、君は『泥棒猫』の首領、黒猫という男にサンチョ・ボブスリーの脱走と引き換えに贋金づくりに加担したそうだな。アルモリカン山脈、ミスリル鉱山のどこかに、その鋳造所があるとも聞いている。今回の騒動は君がすべての原因だという説もある」
彼の言葉にエンガチョはうつむいてしまった。
「誰がそんなでたらめな証言をしたんだ、ぶん殴ってやる！」
「君のお隣にいる女の子ですよ」
するとエンガチョは恐ろしい顔つきで隣の牢屋を睨んだ。

「ナオミ！」男は少女の姿をみて、驚きのあまりかたまった。
「どうしてこんなところにいるんだ！」

「…あのエンガチョ、ごめんなさい。あの…その…知っていることを正直にいわなきゃ、騎士団を退団させるっていうから。あの、ごめん…」
ナオミはうつむき、ポタポタッーと流れる涙を両手で必死にぬぐった。ホワイトは取り調べの刑事がナオミから没収した、ミスリル金

貨と銀貨数枚を取りだした。移動花屋のとき、エンガチョのガマグチガエルから出てきたものだ。

「証拠はこの子が持っていたミスリル偽通貨。正直に白状しなければ、ナオミは退団どころか孤島の監獄モン・サン何とやらに入獄することになりますよ」

その言葉を聞いて、エンガチョは思わずギシッと歯軋りした。

「ちょっと強引じゃないかのう、ムッシュ？」

すでにトモロヲ・ブドリの瞳は怒りに燃えていた。

「これが私の流儀ですからな」とムッシュ・ホワイトは気取った。

「…ああ、お前のいうとおりだ、この件に俺は絡んでおる」

ホワイトの追求を交わしきれないとふんだのか、エンガチョは偽金造りに加担したことを認めた。贋金の鋳造所はミスリル鉱山の奥深くにあり、自分はミスリル鉱山に大量に含まれる自然水銀を賢者の石に練成しただけであって、贋金はゴブリンたちが鋳造していたという。

「だから俺っちは強盗団の一味でもないんだな」

ギシギシッとエンガチョの歯軋りの音が、耳に劈くようで痛い。

しかし黒猫に『剣と盾』ってところに呼びだされ、きてみたらどっこい。刑事どもがたくさんおって、誘拐犯やなんやかんやと騒がれ、自分は重要参考人として、この牢屋にぶちこまれた？？？これがエンガチョの釈明と弁明であった。

「ホワイト、あいつは俺っちを騙したんだ。俺っちこそ詐欺にあったんだ！」

「詐欺にあったのはアッパータウン銀行だ」

「ふん！」とエンガチョは鼻を大きく鳴らした。

「ではサンチョ・ボブスリーの脱獄と君は関係ないと？」

「新聞をみて驚いたがなあ。処刑前日、兄貴は上隣の老人の亡骸と入れ代わり、あのモン・サン・ミッシェルを脱獄したっていうんだ

からな。俺をこんなブタ小屋にぶちこんだ、あのバカにそう伝えるんだな」

「どっちみち証拠がないのだよ、エドガー・ボブスリー」

一同はビクッとして、振り返った先に立っていたのはジョルジョ・パパティーノだ。

彼はエンガチョを見つめ、次にトモロヲ・ブドリを見つめ、最後にナオミを見つめ「まったくあの目障りの男の娘らしい」とほくそえんだ。

パパティーノはエンガチョを見て、唇を舐めた。

サンチョ・ボブスリーの保釈金はミスリル金貨一億万枚。本物のミスリル金貨一億万枚を集めるため、弟エドガー・ボブスリーは偽金貨を鋳造、強盗団『泥棒猫』を組織した。そして連日連夜、盗みと詐欺をくりかえした。残念なことに保釈金を支払うまえに終身刑犯サンチョ・ボブスリーは脱獄した。

「…俺を強盗団の首領にでっちあげるつもりか？」

エンガチョはわなわなと震えていた。

「これが世のなかのためだ」

「無実の者を捕まえることがなにが世のためだ！」

「弁明は裁判でしろ。本日より君は強盗団『泥棒猫』首領、黒猫として刑に服してもらう。まったくドワーフという種族は往生際が悪い。さっさと罪を認めろ！　兄貴が兄貴なら、弟も弟だな」

エンガチョの怒鳴り声に、ジョルジョ・パパティーノは大きくせせら笑った。

「黒猫とやらが捕まったのなら、君は謝罪のうえ保釈される。それまでの辛抱だ、だがすぐに捕まるかどうかはわからんがね。一週間後かもしれんし、一ヶ月後かもしれん。それとも一年後や十年後、ずっと捕まらんかもしれん」

「…くそったれめ…」とエンガチョはかすれた声でいった。

さらにジジ亭のサンチョ脱獄は、エンガチョが犯人じゃないのかとパパティーノの主張に対して、ホワイト次官は「彼は犯人じゃありません」と明快に否定した。まるで犯人を知っているかのような口調だ。

「それにお前はニトのガキを命を狙っていた、暗殺者（ヒットマン）という情報もある。ボルゴウッドの森での件も包み隠さず、話したほうがお前のためだぞ」

その言葉を聞いて、エンガチョは怒り狂った。

「ふざけるのも大概にしろ！」

一瞬、ナオミはアニタ・ジブリの言葉を思いだした。

ドラゴンチップスにつられたお前の仲間？？？これはマイケル・コービーのことだ。

アニタは殺し屋が自分のすぐ近くにいたといっていた。すっかり自分はマイケルが殺し屋はサンチョ・ボブスリーだと自白したと思っていた。しかしそうではなかった。少年が殺し屋だと自白したのはサンチョ・ボブスリーの実弟、エンガチョことエドガー・ボブスリーだったのだ。

「どうして俺がナオミの命を狙う必要がある、え？」

そのとおりだ、彼に自分の命を狙う理由はない。それどころか彼は大切な友人だ。マイケル・コービーの証言など、まったく当てにならない。これはエンガチョを確実に逮捕するためのパパティーノの口実にすぎない、と思ってよさそうだ。

「弁明はホワイトにでもしろ！　私は時間がないのだ」と男は襟を正してブドリに向きなおり、ことの本題にはいった。

「さて私が用事があるのはドワーフじゃなくて？？？アッパータウン伯、あなたにだ」

「なんのようだね、ジョルジョ？」

トモロヲ・ブドリはもの静かに呟いた。
「まったくひどいことになりましてね、アッパータウン伯」
パパティーノは羊皮紙のノートを読み返して、陰気さながらに呟いた。
「先ほどの株主総会の決定事項は、すでにお聞きになったと思いますがね。大株主たちはあなたの勇退を決定したそうですぞ。要するに私ども株主たちはあなたがこの町の価値と信頼、経済発展を損ねていると感じているのです。
現在、町の株価は五分の三まで値をさげております。彼らは副領主である副伯のこの私に経営権を委ねた。すなわち私は彼らの要請により、本日より暫定伯爵として、このアッパータウンの陣頭指揮を執ることになった。公爵陛下より正式に私が伯爵に叙爵されたおりには、あなたには株式のすべてを譲渡して頂きますぞ。それにあなたの経営責任を追及させてもらう！」
「おい、俺っちが捕まればもうその必要もなかろうに、え？」
エンガチョは今にも飛びつきそうな声だ。

「それに爵位ちゅうもんは陛下からの叙位、剥奪なんてことは？？？？」
爵位の叙位、譲渡、剥奪云々は公爵陛下の特権。町の経営者たち取締役員の任命、解任は株主の特権。爵位までは奪えない。ただ伯爵は自分の領地を有する、騎士階級にのみ許された経営者の証であって、経営力の序列だ。
「町の経営から退くということは、爵位の剥奪も近いうち陛下がお決めになりましょう。副領主である私が、正式に代表取締役市長に選定されたのちですがね」
パパティーノ子爵はよどみなく答えた。

「…わしの解任票、議決権の問題じゃがね。筆頭株主のわしと二番目のクーデンホーフのもち株をあわせれば、否決は容易いなはずじ

やったがね？」

「残念ながらデイム・クーデンホーフは三番目、二番目はこの私。しかも筆頭株主のあなたとさほど差はありません。というのもあなたはあの誘拐事件のおり、もち株の半分をお売りになられた。そのすべてを買いとったのはこの私、副伯である私を支持する者とあなたを支持するものと裁決は分かれ、私が勝ったのです。彼らは私が伯爵になれば、この町の時価をミスリル金貨五百億枚にするとの言葉を支持したのです。その意味がおわかりですかな？」

トモロヲ・ブドリは神妙な顔つきで頷いた。

「ミスリル金貨五百億枚よりも、わしならこの町に五百人もの笑顔を作ってみせるという言葉を支持するがのう」

ときに貧困は本来、私たちが自由だということ、いや私たち一人ひとりがもっている未来への可能性をも忘れさせてしまうことがある。そう貧困は何もかもを忘れさせ、人をお金の奴隷にさせてしまう。真に生きるとは金の価値よりも、人間の価値に重きをなすことであり、金はやりたいことを成すための手段にすぎない。

人という存在を、金を稼ぐための手段にするのではなく、金を稼ぐための目的とすべきとき、私たちは本当の意味でお金から解き放たれ、自由を得るのかもしれない。

「今、この町の産業はことごとく死に瀕しているんですぞ」

「わしは元気いっぱいじゃと思うがね」

トモロヲ・ブドリはナオミに微笑んだ。子どもは未来を創る。すなわち子どもこそこの町の産業そのものだ、と老齢は言いたいのかもしれない。

「トモロヲ・ブドリ＝アッパータウン伯、さすがのあなたも老いには勝てないとみえる」

パパティーノのこのうえない喜びの声を聞いてか、エンガチョは勢いよく立ちあがるや否や、牢をぶち破るかにように吠えた。

「…それでお前は、お前は連中の株をいくらで買いとるって、脅迫したんだ、え！」

「さあ、ムッシュ・ホワイト。こいつをモン・サン・ミッシェルにぶちこみたまえ。もちろんマスゴミをわんさかと呼んでおいた、盛大にやってくれたまえ。あのゴミどもの嘘八百記事が、この町の下落した株価をあげる材料になる、フフフ」

エンガチョは怒りのあまり顔を真っ赤にしていった。

「サー・トモロヲ・ブドリがこの町の経営者じゃなくなったら、この町の株は一気に下落するだろうよ、へん。そうなればお前は間違いなく破産だな、パパティーノ！」

「そうなればさらに株を買い占めるまでだ」

「お前なんかくたばっちまえ！」

「言葉に気をつけなさい」

トモロヲ・ブドリはエンガチョをたしなめた。

「もうすでに決まったことじゃ、しかたあるまい」

「しかし」とブドリはナオミをみつめ、優しく微笑むと「大人たちだけが株主とはかぎらぬものよ。正義の味方、白馬の騎士はどこかにおるもんじゃ。わしはこのまま引きさがるつもりはない」

パパティーノ子爵は「どうぞご自由に」とその笑みは、不気味極まりない。

「その女の子じゃが、この子ははっきりいって何も知らん。この子が偽金貨をどこでどのようにして手に入れたかは知らんが、事件にはまったく関わりのないことじゃ。迎えがきたら釈放しなさい、よいね？」

「はじめからそのつもりですよ」とムッシュ・ホワイト。

トモロヲ・ブドリは廊下をコツコツと足音を鳴らして、静かにでていく。

パパティーノとムッシュ・ホワイトはトモロヲ・ブドリに敬礼し

て、居場所を追われた老人を見送ると「お前をモン・サン・ミッシェルに連行する」と首席特別捜査官は鍵束をガチャガチャさぐり、エンガチョを牢から連れだした。
「兄貴と同じ場所にぶちこまれるなんざ、光栄極まりないな！」
男の強がりにジョルジョ・パパティーノは「お前の悲鳴が聞くのが待ち遠しい」と嘲笑った。

ナオミの牢屋の前を通ったとき、エンガチョは瞳に大粒の涙をためる彼女にニコッと笑みを浮かべた。少女への彼なりの思いやりだろう。
「自分を責めるなんて、バカなことはするんじゃないぞ！」
パパティーノ子爵はそれを鼻で笑う。
「なんてお優しいお友だちのことか、もうすぐで鼻血がでるところだった」
「だまれ、最後に勝った者が本当の勝利者なんだぞ！」
戦いはまだ始まったばかり、エンガチョは牢をでたら、このことを友人の毎日ブルトン新聞の推理記者エイブラハム・アグリに知らせてくれ、と少女に一粒の希望を託した。

第３２話　アッパータウン・ヤード【４】

カランコラーン、カラン。
カリヨンの鐘は午前五時の時刻を告げた。
闇が深ければふかいほど夜明けは近い。午後五時は一番深い暗闇といわれるが、それを乗り越えれば夜明けは近い。すでに雨はあがり、鉄格子がついた小窓からは夜明けの光がさしこんでいた。

ナオミは牢屋につながれていたが、ジョジョは犬ということで釈放された。そもそもこういうことになったのは、ナオミの不安なる思いこみからだった。ティソ一家が顔を見せなくなったのは自分を泥棒だと思ったからだとか？？？？。

でもそれは間違いだった。ライアンがホーエンハイムを呼びにいったため、彼の病気が悪化したのが原因だった。ティソ親方もアリサ夫人も、今夜がかもしれないといわれ、息子に一晩中つきっきりだったのだ。

もちろん二人ともナオミのことは心配だったし、片時も忘れることなどなかった。

「あなた、ナオミのことですけど…」アリサ夫人は瞳に涙をためた。
「俺はナオミを信じている、あの子は盗みなんて絶対にしない」
ティソ親方は妻の肩をぐいっと引き寄せた。

ライアンはうなされる夢のなかで、昨日みたことが再現されていた。少年は店先でガタゴトッと物音がしたので、「うわあ、泥棒かも！」と熱っぽい身体でそろり、そろりと忍び足で様子をみにいった。

すると店棚にナオミがニヤニヤしてやってくるではないか。そしてミスリル金貨をチャリン、チャリンと取りだして、金貨を聖母（マリー）の黄（ゴールド）

金花に変えているではないか。

やはり泥棒はナオミだったのか？？？？と落胆していたとき、店内に飾ってある大きな鏡に目をやれば、そこにはハナコ・ゴーストの姿が映っていた。

鏡は真実を映しだす？？？？ヴァンヌの星占い師ウォーレンの言葉だ。では自分が先ほど見たのは誰だったのか。じつはあれこそ、ナオミを疑っていた自分の心がみせた嘘幻。疑いは疑いを呼ぶ。そして人を疑えば、会う人すべてがそう見えるものなのだ。

「犯人はハナコだったんだ！」

ハナコがどんなに意地悪な女の子なのか？？？？ゆっくり考えるとわかることだ。はっとしてライアンは悪夢から目が覚めた。ティソ親方とアリサ夫人は瞳に涙をためて大喜び、ジャンは「ばぶー」と嬉しそうだ。ホーエンハイム先生は「よかった、ひとまず峠を越えましたな」とふーっとため息をついていた。

扉裏ではアニタ・ジブリがひそかに聞き耳をたてており、ライアンが昏睡状態から目が覚めたことに一安心。老婆の瞳は真っ赤にはれて、チーンとハンカチで鼻をかんだ。

ハナコ・ゴーストはギャーギャーと騒ぎたてていた。意地悪をしようと地下牢に様子をみにいったものの、ナオミとジョジョがいなくなったことを発見した声だ。その声は発狂に近い。

「静かにおし！　病人が寝ているんだからね」

「大変よ！　見習いと私のわんちゃんがいないんだよう」

「こんちくしょう。とうとうあいつ、逃げだしたんだ！」とすぐにアニタ婆さんは「迷いの森に逃げこんだら大変だ。そのまえにティソ親方、捜索願いをおまわりにだしておきな。まったく世話がやけるんだからね」とひそかに心を痛めていた。

ハナコはとても悔しそうにいった。
「きっと誰かが逃がしたんだよ、このなかに共犯がいるよ」
「そんなことはどうでもいいんだよ」とアニタ婆さんのしわがれ声。

ライアンは「僕、ナオミに謝らなきゃいけないのに」と泣き声でいった。
「どういうことかしら?」とアリサ夫人。
ライアンの顔には罪悪感がにじみでていた。
「…ぼ、僕、ナオミが金貨泥棒の犯人だと思っていたんだ、でも本当は違うんだよ…」
「やっぱりね」アリサ夫人はため息をついた。
すると「ばぶー」とジャンがうなずくのもわかった。
「なぜ僕が肺炎になったかを聞いたらわかるよ。僕がハナコの身体を気づかずに通り抜けたからなんだ。そうさ、金貨七枚を盗んだのはハナコなんだよう」とライアンは夢でみた出来事、昨日の出来事を包み隠さず、ティソ親方たちにすべてを打ち明けた。

ゴーストの身体は絶対零度に近い。
少しでも触れるとヒヤッとする。気がつかずに彼らの身体を通り抜けるものなら、風邪をこじらせるどころか、運が悪ければそのまま凍死してしまう。
ライアンの話にアニタ・ジブリは顔を真っ赤にさせ、ティソ親方は「ほらっ、俺のいったとおりだったじゃないか」とアリサ夫人とともに喜んだ。
「ハナコはいるかい? 嘘つきは死なないとわからないもんさ」
怒鳴り散らすアニタ・ジブリは、せっかん用の杖をふりかざした。
「でもあの子はもう死んでいるじゃないか」
ホーエンハイム先生はせせら笑った。

「そもそも僕たちは気づくべきでした。あの金庫に呪いがしかけられているということからね。どんな呪いかは知りませんが、いやはや生身の人間が呪いをうけて、無事であることがありませんよ。死んでいるのなら別ですがね」

アニタ婆さんはハナコを引っぱたいてやらない、とどうも気がすまない。だけどハナコはライアンが自分が金貨を盗んだといったとき、自分を密告した少年の耳もとにふっーと息を吹きかけて、ケタケタと小笑いしてでていった。

すでにハナコはアニタ・ジブリ・パリの外だ。

彼女は墓場大通りのさびれ横丁で密やかに行われている、ゴーストたちの集会所へと向かっていた。その集会所で行われている集会というものは一日、何人もの生きている人間に意地悪や脅かしたかを報告して、お互いに競い合うというものらしい。それに応じて騎士候補生たちと同じようなメダル、黒金貨を獲得できるというものだ。騎士候補生にも騎士候補生の社会があるように、ハナコにもハナコの社会があることを忘れてはいけない。

「ねえ、はやいとこナオミを捜しだしてよ」

心配そうなライアンの声が部屋に響いた。

「父さんにまかしておきなさい」

そうはいっても一体全体、この大きな町のどこを捜せばいいのだろう。途方に暮れる以外にしかたがない。

そのときジャンが「うきゃあ」とまた大喜びの声をあげた。その声に驚いたかのように何かがゴソゴソと動き、大慌てでライアンのベッドの中に潜りこんだ。

「やあ、君は?」と嬉しそうなライアン。

ライアンのベッドのの中に潜りこんだ何か、それはジョジョだった。犬ということで釈放された彼はナオミを助けるため、彼女の居場所をライアンに教えるため、必死に駆けてきたのだ。

ジョジョはティソ親方の足まわりをぐるぐるまわると、自分についてきてといわんばかりに吠えたてた。
「え、なにかしら？　ついてきてといってるの？」
アリサ夫人の言葉にジョジョが「そうだよ」と吠えた。
「ねえ、父さん！」
「うん、父さんにまかしておけ！」

「いや、だめだね。ティソ親方は一睡も寝ていない、あの子に迎えにいくのは、このジェームズ・ホーエンハイムにまかせてもらえないかね。外は極寒だ。諸君は暖炉の火を燃やして台所を温めておきなさい」と医者は外套を勢いよく着込んだ。
アニタ・ジブリはもじもじしていた、自分はどうすればいいのかわからないようだ。
「あなたはスープを作ってあげておいてください」
「まかせときな。とびっきり上等なもんを作るよ」
ホーエンハイム先生はニコッと微笑み、アリサ夫人はとても嬉しくなって「まあ、素敵だわ」と胸に手をあてた。

もぐりの医者はだされたコーヒーも飲まず、ジョジョのあとを追ってアッパータウン警察署までやってきた。ここまで十五分もかかっていない。
ホーエンハイムの息は白く濁っている。
「人を捜しているんだけどね、十二歳ぐらいの女の子なんだが？」
「家出らしい女の子が牢屋でめそめそ泣いているよ」
「大変申しわけないんですが、今から面会はできますかね？」
ラインハルトはコクッと頷き、壁に吊ってあった、鍵束を握りしめ、ホーエンハイムを長くてうす暗い廊下まで案内した。一番奥の牢屋までいくと「あそこに身体をくの字にまげている女の子がそうだよ、知り合いかい？」と警部は訊いた。
「ああ、あの子だ。間違いない」

「それでどういうわけで真夜中をうろついていたんだね？」
ホーエンハイム先生はミスリル金貨七枚がなくなったこと、ナオミが疑われ、地下牢に閉じこめられて、皆が気づかないあいだに逃げだしたことなど、できるだけナオミの名誉を守るように昨日の出来事を話した。

「僕はてっきりこの子があ？？？？その？？、町の浮浪児たちの一味だと思ってね。あいつらは親方から捨てられたり、逃げだしたどうしようもない連中じゃないですか。町ではパンやニワトリを盗んでは悪さをするばかり。最近は空き缶を拾って、業者に売り、生活しているそうだけど、僕なんか自転車をやられましたよ」
ラインハルト警部のいう町の浮浪児たち、彼らは町に捨ててあるものを拾い、廃品回収の親方に売り、そのお金で生活しているという。今では空き缶だけでなく、路上に止めてある自転車や自動車なども彼らにいわせれば、道に落ちているものになるそうだ。
ホーエンハイム先生もつい三日前、自動車のタイヤをやられたほどだ。

飢える恐怖というものは経験したものしかわからない。空腹がいかにおそろしいか身をもって知っているからこそ、飢えることは何事にも耐え難い恐怖、苦痛だとわかる。飢えるということは人間から人間らしさを奪う、恐怖以外になんでもないのだ。
この貧困を生み出すのが社会なら、貧困をなくすには社会体制そのものを変えていく必要がある。経済が貧困を生みだすならば、やはり経済そのものを変えていく必要がある。資本主義のたどりつく先、それは国家そのものの存在かもしれない。

「うーむ、だがねえ。僕には悪戯で盗んでいるようにはみえんがね、経済的危機がどれほど人間から人間らしさを奪うものか。たかがお金が貧しいだけで人は心をも貧しくなるのだよ。問題なのは彼らで

はなく、この町の経営者たちだよ」
「ええ、そりゃ、そうですけども?:?:?:生きるためとはいえ、盗みはだめです。先生、あいつらはなんて名乗ってましたっけ?」
「『白馬の騎士』だよ」
「パパティーノ副伯なんて『あいつらはこの町の恥さらし、いずれ一人残らず捕まえて、領主裁判所行きにしてやる』なんていってましたよ」と刑事はパパティーノの口調を真似ていった。
ホーエンハイム先生はククク、と笑いをこらえていた。
「僕にいわせれば、パパティーノ卿のほうがいい恥さらしだよ」
「先生、これは聞かなかったことにしておきますよ」
ナオミは扉のむこうから聞こえてくる、男たちのこんな声に耳を澄ましていた。

(誰だろう? もしかしてモン・サン・ミッシェルの看守かな?
私のことを話しているみたいだけど?:?:?:たぶん、泥棒猫の一味として私を迎えにきたんだわ)ナオミはガクッと肩をおとして、両手で顔をおおった。

「…ではあなたが身元保証人になるというわけですか?」
「そういうことになるね」とホーエンハイム先生はコホンッと咳払い、ラインハルトに保釈金をいくらから支払うと、彼はカチャカチャと鍵束をさぐり、牢屋の扉を開けた。
するといきなりタタタタッーと黒いものが、牢屋のなかに駆けこんでしくしくと泣いているナオミに駆けよった。それで「で、なにめそめそしているの?」といつもの調子で少女の顔をペロペロと舐めた。
「もーう、くすぐったいよ、ジョジョったら、やめてよ」
だけどその笑い声は分からないくらい、小刻みに震えていた。
ナオミはジョジョを思いっきり抱いた。ジョジョも抱かれたまま、ナオミのにおいをクンクンッと嗅いでいた。

「やあ、お嬢さん。元気そうでなによりだ」
後ろのほうで弾むような声が聞こえてきた。
ふりむくと声の主は牢屋のなかにはいってきて帽子をそっと脱ぎ、それを脇にいれ、ナオミに優しく手をさしのべた。その人はアニタ・ジブリにもうすぐで、ステッキで叩かれそうになったところを助けてくれた、あのもぐりのホーエンハイムという医者だった。
警部は頭をポリポリッと掻きながら、めんどくさそうにいった。
「さあ、もうでてもいいよ。疑いが晴れたからね、これに懲りたら、もう真夜中を一人でほっつき歩かないことだ」
ナオミは何がどうなっているのかわからなかった。
ホーエンハイム先生が帰り道に自分が捕まっているまでのあいだに起こったこと、すべてを隠さず話してくれたおかげで状況を呑み込めた?????すべてはライアンのおかげだったとか。
「ねえ、僕の働きもちょっとは認めてくれている?」
ただジョジョ・ダックスフンドはぷりぷりして、とても不満そうだった。あっ、またあの噂の無表情と男とすれ違った。彼は何かを探しているかのようだ。

第３３話　白馬の騎士同盟【１】

第３３話

翌日、ライアンは大好きなカプチーノを飲みながら、ノイズが混じっているカリヨンの鐘の音に耳を傾けながら、ナオミが繰り広げた大冒険に瞳を輝かした。

少年の口のまわりには泡がべっとりついていた。

「アニタ・ジブリもケチだよね、たったの八枚プラスだなんて」

いや没収された騎士メダルに八枚プラスは良いほうだ、あの婆さんにしたら。

「で、いくらたまったんだい？」

「うん、今のところ合計六十一枚…」とナオミは嬉しそうだ。

ナオミの嬉しそうな顔を見るのが、最近のライアンの日課だ。

「ところでエンガチョは黒猫の身代わりになったってことさ。つまりあの夜、君は本物の『黒猫』に会ったことになる」

ようやく午後七時のカリヨンの鐘が鳴りやんだ。

昨夜、いや真夜中に出会った人は黒猫だけじゃない。噂の無表情の男に出会い、男に連れ去られそうになったけれど、ここは黙っておくほうが無難だろう。ライアンに心配はかけたくない。

「でも私、黒猫の犯行はみていないわ」

「そうそれだ。せめてそれさえ実証できれば、君は町の英雄になれるのに？？？？」ライアンは残念そうにふーっとため息をついた。

ナオミはエンガチョの言葉を思いだしていた。

「ねえ、ライアン。私、エイブラハム・アグリさんに会わなきゃならないの！」

エンガチョには毎日ブルトン新聞の記者エイブラハム・アグリっ

ていう人に会って、自分の無実を証明するよう頼まれていた。
でもどんな人物かはわからない。しかしエンガチョをモン・サン・ミッシェルに追いやったのは誰でもない、自分なのだ。無実の男を牢送りにしたのは、この自分なのだ。彼の無実を晴らすことこそ、今の自分にできる精一杯のことはいうまでもない。ライアンが自分の無実を晴らしてくれたように。
「えええ！　あのアグリを知らないの？　どっひゃぁあ！」
ライアンは毎日ブルトン新聞の推理事件のところを指差した。
そこには彼が書いた、サンチョと泥棒猫に関する推理記事があった。今まで少女が読んでいた記事の多くは、彼が書いた推理記事だとか。
「彼は推理部門の担当者であり、この町の名高い推理記者なんだ。アグリさんの推理の一翼を担っているのが、彼に忠実な私立探偵団っていう噂だけどね」

その探偵団から得られた情報から、アグリは推理記事を書いているそうだ。推理男と呼ばれるほど二十四時間、事件の推理のために町中を走りまわっているため、彼の探偵団でさえ、本人と会うことがなかなか難しいとか。
「詳しいのね、ライアン？」
「君のお父さんの次に、僕が尊敬している人だからね」
ライアンの本棚にある、彼の推理小説シリーズをみれば納得せざるえない。
「ねえ、その探偵団の名前とかわかる？」
「わかんない、でも浮浪児たちの集まりだって聞いているよ」
「…だめだ、こりゃ…」とジョジョ・ダックスフンド。

アグリもその探偵団も見つける術はなく、時間だけが無駄にすぎていった。
歯痒いことにアグリとはいつも新聞でしか会えない。どんな身な

りをしているのかさえもわからない。
ただ新聞にはトモロヲ・ブドリが代表取締役市長、いわゆる代表伯爵を辞任し、代表伯爵代行（暫定伯爵）として副領主のジョルジョ・パパティーノがその地位についた。ブドリの伯爵の爵位剥奪も間近だろうとの憶測？？が発表されていた。
あの夜のことが鮮明に脳裏に浮かぶ？？自分の非力さが嫌というほど身に染みたあの夜、怒りを抑えこむようにナオミはギュッと唇を噛んだ。

「…うわあ、冷たいなあ…」
二月も終わりに近づき、花屋の従騎士となって早二ヶ月が過ぎようとしていた。でも鉢の水替えはやはり慣れない。水に手をつっこむだけで痺れが襲ってくる。その度に口に手を持ってきて、白い息でハァーッと温める。
「ナオミ、いくぞ」
「『いくぞ』ってどこに？　親方、今日の注文はもうないけど…」
ナオミは花に水切りをしながら、ハァーッと手を温めていたときだった。
「今日はチェスの地区選抜が発表されるんだ。お前は騎士（ナイト）役の大役だろう？」とナオミがティソ親方に連れてこられたのは、キング・アーサー地区教会だ。そうだった。今日はここでチェスの地区選抜が発表される日だ。
教会では修道騎士に従い、神に祈りを捧げ、教会楽士エミール・エマニエルの演奏のもと、ブルトン人愛国歌『わが祖父の国』を元気いっぱいに歌った。キング・アーサー地区男爵デビット・テムズは頃合を見計らって、コホンッと小さな咳払いをした。
地区男爵はやや緊張した顔つきでまわりを眺めた。
「…では発表する。テル・ウォ・アボカド、マイケル・コービーの

二名は兵士（ポーン）役、ライアン・ティソは静養のため騎士役辞退？？？？代わりに」

一同がゴクッと生唾を呑んだ。

「代わりにロミオ・ロートレックを騎士役に抜擢する」

一瞬、教会内がざわめいた。

ティソ親方はナオミが騎士役に抜擢されると思っており、戸惑いを隠せない。選抜からもれたナオミはほっと胸をなでおろした。デビット・テムズはナオミをみ、申し訳ないとばかりに目を伏せた。

ナオミは大役から外れ、かえって皆に迷惑をかけずに済んだことも一安心だ。

「アンナ・ハイネノハイネ騎士候補生卒業に伴い？？？？？？」

アンナ・ハイネノハイネ、テルの前任者だ。

「ナオミ・ニトを女王（クイーン）役に抜擢する。以上がチェスの新旧メンバー報告だ」

ナオミの名前を聞くといきなり場がざわめいた。

「ナオミ・ニトが女王役だって？　大丈夫か？　殺し屋が自分のすぐ近くにいても見破れなかったヤツだぞ」

「くそ、アイツが子爵だからだよ。えこひいきってヤツだな」

エンガチョが自分の命を狙っていた、殺し屋というのは皆が知るところだ。もっと詳しく述べれば、彼女がこの地区の子爵保持者ということも周囲が知るところ。

「静粛に！　静粛に！　これ以上、騒ぐ者は不本意だが騎士メダル五枚の没収だぞ。私は本気だぞ。それにこれは引継ぎによるものだ、決してえこひいきではない！」

テムズは手をパンパンッと叩いた。

ナオミは騎士役ではないことに安堵しつつも、女王役って何だろうと、きょとんとしている。どうやらまだ現実を呑み込めていないようだ。

「では今からチェスについて説明する」
最後の騎士（ラスト ナイト）と呼ばれるチェス、早い話が陣取り合戦だ。
各領主たちの平和的な勢力争いともいえる。チェスは九月の下旬に開催され、地区の伝統の鎧を身につけた旗手が、一本の地区旗とともに体格と体型、毛色がそろった馬の集団を音楽隊の演奏に合わせ、華麗に操る入場行進からはじまり、選手宣誓のあとに競技が競われる。

「従騎士（スクワイヤー）の諸君、騎士候補生の諸君。総じてチェス選手の諸君！」
テルはチェス選手と呼ばれ、とても興奮していた。
同じくマイケルも「僕、興奮しすぎて鼻血がでそう」といいながら口はもぐもぐと動かしていた。彼の右手には間食の友ドラゴンチップスがある。ロロといえばあいかわらず、すましていた。
「今日はルールを説明する」
テムズは教会の祭壇に飾ってある、十字架を指差した。

ドルイド教は彼らの社会では聖教という位置づけにある。この聖教に相反する位置づけにあるのが悪魔崇拝、悪魔教と呼ばれるアグリッパ教だ。ドルイド教の御神体は十字架のかたちをした聖剣だ。聖教のミサでは、ワインを神の子の血に聖別して飲むが、黒ミサでは幼児の血を飲み干すらしい。祭壇には逆十字の聖剣が架けられ、暴力、淫行などといった行為を繰り返す、文字どおりの悪魔教だ。

テムズは祭壇に架けられた十字架に目をやれば、皆も同じように目をやった。
「あれはご存知のとおり聖剣（エクスカリバーン）を象ったものだ。チェスは聖剣を守りきれるかどうかの競技です。聖剣を奪われてしまったら、残念ながらそこで追詰め（チェックメイト）による負けだ。ルールは至ってシンプル、両チームそれぞれ十六名の選手がいる、そのうち八名は兵士役だ」

テムズは新人兵士役のテル、マイケルに目をやった。
「騎士役、賢者（ビショップ）役、城番（ルーク）役は各二名づつの六名だ。最後に女王役と国王（キング）役は一名づつ、総勢十六名のチェス選手で競われます。理解しましたか？」とテムズは瞳を輝かしているテルをみて、「さすが男の子だ」と微笑んだ。

チェスの試合は六地区同時進行（ロールプレイング）で行われる。
まず留意しなければならないのは、普通の卓上チェスゲームのように敵は一人ではなく、五人、いや五組いるということだ。なかには同盟を交わしている地区もあろう。ゆえに地区のはさみ打ちに気をつける必要がある。大事なのはとにかく生き残った地区が勝利者だということだ。
女王役のナオミに目をやれば、彼女は顔をひきつらせた。今更ながら自分の女王役のポジションが、騎士役よりも格上のものと理解したようだ。

テムズは何かゴソゴソしはじめたと思えば、「『騎馬競技チェス』キング・オブ・キングスへの第一歩」という本をだして、ナオミに手渡した。
「あ、ありがとう、これは？」
「ルールさえ覚えられればあとは簡単、読んでおきなさい。君に贈呈しよう。女王役は君にぴったりの役だ。かつて君の母上もそのポジションにあった」

さすが子爵の補佐役の男爵だけある？？？？？とナオミは思うものの、ジョジョは「僕ならこんな本よりも、骨付きカルビのほうが嬉しいけど」と犬らしいうたた寝ぼやき。
「各ポジションについて説明する。兵士役は突撃隊だ。兵士役は騎士役のいうことを聞かなくちゃいけない。兵士役八名は騎士役二名の配下にある。人数の配分は自由だ。騎士役一名に兵士役四名とい

うふうに勢力を二分してもいいし、騎士役が戦闘で欠けることも考えて、騎士役二名を隊長と副隊長と指揮系統を分けてもいい。ちなみに選手十六人のうち半分を占めるのが兵士役だ、これがどういう意味かわかる人？」

ロロと目があったが、少年はすぐに視線を横にそらした。

これは当ててくれといっているもんだ、とテムズはロロに答えを求めた。

「優秀な騎士役が勝負を決めるということです」

「そのとおりだ、これはチェスで勝つための条件でもある」

テムズはロロに騎士メダル五枚を手渡せば、テルは見てみぬふりをした。

「乗馬が許されているのは兵士役、騎士役、女王役の三役のみだ。女王役は国王のかわりに自由に動ける立場にある。いわゆる副官だと思っていい、ただし誓約があって女の子しかなれない」

？？？？そうか、だから自分が任命されたのか。

「賢者役は乗馬こそ許されていないものの自由に動ける。まあ、後方支援に適した役だ。城番役は文字どおり国王役の護衛だ。戦闘能力が高い騎士が抜擢される。最期の国王役は聖剣を守る役目がある。すなわち国王役がいるところが本陣だ。それが例えトイレのなかであってもだ」

テルはふむふむと「トイレが本陣」と羊皮紙の手帳に書き記した。

「先生、国王役って誰なんですか？」

マイケルはナオミたちが気になっていたことを質問した。

「いい質問だ。だがマイケル、ドラゴンチップスは飲みこんでから質問しなさい。国王役は私が兼ねる。本来、地区子爵が兼ねるのが伝統なんだがね。残念ながら我らの子爵はこのチェスに参加している」と皆の視線がナオミに集まれば、彼女は恥ずかしさのあまり顔

を赤らめた。

「国王役である僕は司令塔、君たちの監督だ。国王役には誓約がある。そう僕は戦っちゃいけないんだ、だって大人だからね。逃げまわるしかできない。敵に見つかれば大人しく聖剣を渡さなきゃいけない。王のかわりに戦えるのは王の護衛である城番役二名だ。だから戦闘能力が高い騎士を傍に置く必要がある」

なるほど彼らは国王役の右腕、左腕というわけか。

力で捻じ伏せるなら、兵士役八名を倒し、彼らを引率する騎士役二名、賢者役二名、さらに国王のかわりに動き回る女王役一名、国王の護衛の城番役二名を倒せば、試合に勝つということだ。頭で捻じ伏せるなら、国王役を見つければ試合終了というわけだ。

「厳密なルールとしては、対戦相手とは剣技で決着をつける。対戦相手から降伏を勝ち取れば勝ちになる。もちろん対戦相手を殺してはだめだ。反則行為は即刻『失格』になる。チェス選手の諸君、なにか質問はあるかい？」

「この競技で死んだヤツっているの？」

テルはナオミの心を代弁してくれたようだ。

「競技場には、優秀な医療に卓越した白騎士たちが常に待機している。首さえつながっていれば、まず命を落とすことはない。他に質問は？」

二名の兵士役とナオミはそろって首を横にふった。

「よろしい。では明日の夕方六時より、アッパータウン牧場でチェスの練習を行う、遅刻者は騎士メダル一枚没収だ」

第３４話　白馬の騎士同盟【２】

第３４話

ティソ親方のお花屋での仕事、Ａ・アグリの探偵団探し、週二回のチェスの練習、その合間での各教室（サロン）での社交界めぐりは悲鳴をあげるほど忙しかった。そのせいか少女が気がつく頃にはこの町にきて、早くも六ヶ月がすぎようとしていたことに驚いた。彼女にとって花屋の仕事も社交界の一貫であることがわかり、さまざまな人と出会えるのが嬉しく、楽しかった。

今、新緑の季節から青葉茂る季節六月を迎えようとしていた。

領主がトモロヲ・ブドリからジョルジョ・パパティーノに交代してから、この町は目まぐるしく変わった。どう変わったのかといえばエンガチョが捕まったのを機に、黒猫率いる『泥棒猫』の名を聞くことはまずなくなった。彼らが悪事を働かなくなったのはいいことだが、孤島の牢獄モン・サン・ミッシェルにつながれているのは黒猫ではなく、無実の男なのだ。エンガチョは度重なる拷問に耐えにたえ忍んでいると新聞には書いていた。

伯爵パパティーノの経営は独裁経営（ワンマン）といってもよかった。

彼に歯向かう騎士たちには容赦ない仕打ちが待っていた。会社を経営する者なら領主の権限をもって、倒産させるなんてもはや朝飯前だ。町の中心地もキング・アーサー地区から、モードレッド地区へと変わりつつあった。

人々の心は昔と違って、どこか荒んでいた。トモロヲ・ブドリの経営は何よりも人間を大事にしていたが、ジョルジョ・パパティーノの経営は人間よりも、お金を大事にする経営だ。人間のための金ではなく、金のために人間がいる、そう断言してもいい経営戦略を

執っている。

この間、ナオミの騎士メダルも着実に貯まり、一九〇枚を数えるまでになっていた。

目標の三〇〇枚まで、あと一一〇枚だ。最近ではジャンがまだ喋れないものの、よちよち歩きができるようになり、隙あらばジョジョの毛をむしりとることに、もはや命を賭けているといってもよかった。ジョジョはそのせいでピリピリしていた。

「アイツはハナコよりたちが悪いよ」

ジョジョはむしりとられた、場所を舐めながらいった。

ハナコといえば、この商店街にハナコ以外にゴーストが一人、住みついているかもしれないという噂がたった。というのもときどき「くちゅん！」というくしゃみが聞こえてきたり、ガサガサッと物音がしたと思えば、いきなり何かが走りさるという出来事を住民の何人かが経験したそうだ。しかもそれは朝方に多いらしい。

パン屋の親方リンドバーグにいわせるところ「俺はこの家一番の朝起きだがね、そんなもんはみたこともない。きっとみんなの気のせいだよ」と断言していた。

近ごろのナオミの悩みの種といえば移動販売だった。

花の移動販売（フローリスタ）にでかければ、待ってましたといわんばかりにモードレッド地区の騎士候補生たちは、相変わらずナオミの悪口をいうし、隙があれば決闘も挑んでくるのでとても困った。

リサ・パパティーノなんか、ロロと仲良くしているナオミを見かけるたびにハレルヤとともにけしかける。また彼女が捕まったことを父親から聞いたとあって、ナオミと顔を合わせるたびに「泥棒猫の一味」とはやしたてるほど。

「とにかくケンカはだめだぞ！」

そうやってティソ親方はいつもナオミを宥めた。

「モードレッドとキング・アーサーは犬猿の仲なんだよ」

そんなある日の夕暮れどき、リサ・パパティーノがブルトンホテル大通りにある、ある靴屋のガラス窓で赤い素敵な靴をじっーと見ていたとき、ナオミはまわりをキョロキョロとみわたして、彼女に一声かけた。

「ねえっ」といってもリサ・パパティーノは返事はなかった。

それでもう一度、声をかけると彼女は「なによ」と振り返った。

「うわあ、最悪！　本当にあなたって幸せな気分を台なしにする天才だわ」

「…悪かったわね…」ナオミはムッとしていった。

でもリサ・パパティーノが魅入られるのもよくわかった。

その靴はとっても真っ赤なハイヒール、どんな赤といえば恋のような赤。

商品説明には『クリスマスツリーの赤リンゴを靴にしました、リンゴのいい香りがします』と走り書きがしてあった。またクローズという署名があり、靴職人が丹精こめて作った品物だということがわかった。

「ねえ、素敵だと思わない？」

「…うん…」ナオミはその靴の虜になってしまった。

この靴を履いて、この靴にあわせてドレスを買い、お洒落をしたらどんなに素敵なことだろうか。これならロロを自分に振り向かせることができるかも？？？？一度でいいから女の子として、こんな靴を履いて町を歩いてみたいとナオミは思った。

「リサ、なぜいつも私のことをバカにするの？」

ナオミはそっと話をきりだしてみた。

「…だってバカだから…」

「そんなの理由にならないわ」

「ところであなた、お洒落とかしないの？　ずっと思っていたけど」

リサに心にひそかに思っていたことをいわれ、ナオミはドキッとした。女の子ならこのぐらいの年齢にもなれば、お洒落の一つや二つはするものだ。

大半の女の子はお母さんの真似ごとからはじまったり、お母さんから習う。両親を知らないナオミはどうやってお洒落をしたらいいのか、はっきりいってわからない？？？？せめてこの町の社交界にお洒落教室というものがあればいいのに。

リサはときどき目でも痛いのか、チラチラと目配せした。

「…私だってお洒落の一つや二つぐらい、できますようだ…」

「へえ、そう」

何もかも見抜いているような、リサの嘲笑う声が耳に痛い。

「私ね、ずっと考えていたことがあるの。あなたってまるでおイモみたい、つまりダサいってことよ。まったくロミオ・ロートレックはこんなおイモのどこがいいのかしら、あなたにはあの子はもったいないわ」

？？？？おイモ、ダサい、センスがない。ないといえばナンセンス。

ナオミは何か言い返してやろうと、口をモゴモゴ。なぜか泣きたくなってきた。ふと窓ガラスに目をやれば、見覚えある顔がちらほら。ナオミははっとした、なぜ彼女がときどきチラチラと目配せをしていたのか、傍にいたリサの仲間たちがナオミに気づくことを待っていたのだった。

「…ねえ、ヤバいよ。逃げたほうがいいよ…」とジョジョ。

ナオミもコクッと頷き、さりげなく周囲を見回した。モードレッド地区の騎士候補生の手には三年ほど塾生させた、みるからに悪臭漂う腐っているタマゴを持っていた。

「…一、二、三で右に逃げるわよ…」

「…うん…」とジョジョ。
「ハレルヤ！　みんな！　そーれ、今よ！」
「…一、二…」とナオミは呟き、ジョジョもゴクッと唾を呑んだ。
リサの叫び声とともにモードレッド地区の子どもたちは、いっせいにかごのなかの腐ったタマゴを投げつけた。
「三！」とナオミも叫び、わき目をみずにただ目のまえにある道という道を駆けだした。息がきれるまで逃げに逃げた。ほぼ間一髪だった。
窓ガラスはタマゴでぐしゃぐしゃだ。
すぐに店主がでてきて「コラー！」とモードレッド地区の子どもたちを怒鳴りちらし、その声とともに「逃げろ！」という声、子どもたちはちりぢりになった。それでもリサたちはナオミのあとをしつこく追い、少女は懸命に逃げた。

ちょっと休んでは逃げ、休んでは逃げた？？？というのもまいたと思えば嘆きの壁が「右に曲がったぞ」、「今度は左に曲がったぞ」とリサたちに居場所を教えるのだ。
これではイタチごっこだ。ナオミはさりげなく、次の角を曲がったところの嘆きの壁にお願いしてみた。その先は左右に道が分かれていた。
「ふーん、いやだね。連中とは同盟の仲だ」
「…ねえ、お願い黙っててて…」
嘆きの壁は舌をべーっとだした。

耳を澄ませば、リサたちの声が聞こえてきた。ナオミはなにか考えことをしていたが、顔を赤らめて「ねえ、お願い」嘆きの壁の額にチュッとキスをした。すると壁はポッと顔を赤らめて「口にしてくれたら黙っててもいいよ」と瞳をつぶり、口をとがらせた。
「おしっこでもぶっかけてやろうか？」とジョジョ。
ナオミはしばらく考えたあと、ジョジョをチラッとみた。

「…な、なんだよ…」と後ずさりするダックスフンドを抱えると、「やめろ、やめろってばナオミッ！」とバタバタと暴れる、ジョジョを無理に壁と口づけさせた。

嘆きの壁はとても満足そうにいった。

「初めてのキスってレモンの味って聞いたけど、ドッグフードの味の間違いだな」

「…そ、そうかもね…」苦笑いのナオミ。

ジョジョはとても機嫌が悪そうだ。リサたちの足音が大きくなるのがわかった、ナオミたちは左に曲がった。リサたちは嘆きの壁の言葉を信じたらしく、「あそこは袋小路だわ」と嬉しそうに右に曲がった。

おやっ、左の角をまがった案内プレートには、墓場大通りのさびれ横丁とある。ナオミは一、二回ほど花の移動販売で、この大通りにきたことがあった。

「ここってロロが住んでいるところだよね？」

第３５話　白馬の騎士同盟【３】

第３５話

その名のとおりのさびれ横丁は、墓場守や炭鉱労働の親方たちが住んでいる、いわばごろつきたちの寝床でもあった。チラリッと目をやれば、カサカサと新聞に包まる子どもたちやゴホゴホッと堰きこむ子どもたちの姿が目にはいった。浮浪児のような彼らの瞳は、まるで死んだ魚のようだ。

そのうち一人にナオミはロロのことを尋ねてみた。

「ロートレック？　ああ、バーンズ・マルボロ親方の？？？？あいつならあそこの角をまがったボロいアパートの二階、左から三番目に住んでいるよ」

いわれるがままアパートの階段をのぼろうと、すれ違いになった男の子がとても嬉しそうに「ナオミ！」と声をかけてきた。ナオミは驚いて声のする方向へとふりむけば、そこにはロロが突っ立っていた。

鼻はすじばり、瞳のしたにはくまができ、頬はかんなでけずったのかのようにこけ、瞳にはあきらめの色がみえ、顔全体にも絶望という色がうかがわれた。それでいて気の毒と思わせる少年の愛くるしい大きな瞳、じっとりとうるんだ瞳はいやでも人を引きつけずにいられない。

「ロロ！」

ナオミは少年を抱きしめた。

「…ふん、すっかりみないうちにませやがって…」

「ロ、ロロなの？　本当にロロなの？」

「…ああ。ロートレックだ。俺に何かようか？」

ロロはナオミに死んだ魚のような、生気のない目をやった。

「…あ、あの、そのう。最近、チェスの練習こないし、どうしたの

かなって思って…」

ロロは最近、二週間ほどチェスの練習に顔をみせていない。テルは「サボってんだよ」とめんどくさそうにいっていたが、そうではなかった。彼は病気？　いや少なくてもそう見える。

ナオミの言葉に少年は素直に謝るとバーンズ・マルボロは、人使いが荒いことや三日に一度の食事しか与えられないとか、呪術師の仕事は死と隣り合わせの危険な仕事などをありのままに話した。またマルボロ親方の奥さんはすでにでていってしまい、ロロは奥さんがしていた家事手伝い？？？？何もかもさせられていた。

「ああ、今は悪魔転生の人体実験をさせられているんだ」

マルボロの命令で二週間、軟禁状態にあるそうだ。どうりでチェスの練習にこれないはずだ。

逃げるにも逃げられない、額の十字剣の痣がそれを物語る。親方から逃げようとするならあの痛みが少年を襲う。あの痛みは自分も経験したが、経験した者しかわからない激痛だ。

ロロはときどきゴホゴホッと苦しそうな咳をするし、熱もあった。ロロが指輪のような首飾りをギュッと握りしめれば、咳は静かに治まった。マルボロ親方は「寝りゃ、治るんだ」とつっけんどんでいうそうだ。

ヴァンヌの宝石商アルマーオは、ロロの首飾りは治癒（ヒーリング）の力があるといっていた。少年の傷や心を癒しているのは、この首飾りのおかげに違いない。もしこの癒しの力がなければ今頃、ロロはどうなっていたんだろう？？？？考えただけでもゾッとせざるえない。

マルボロ親方は親方のクズだ、というのは親方たち共通の意見なのだが、ナオミはその意見に納得だ。このマルボロという男は何か少しでも気にくわないことがあれば、すぐにロロの頬を叩いたり、罵ったりするそうだ。

金がなければ強盗でも、物乞いでもしてこいというほど。親方、

いや人間のクズってこの人のことをいうに違いない。少年の劣悪な境遇と比べれば、自分はなんて恵まれた境遇なんだろう。ハナコの邪悪さなんて、マルボロの極悪さに比べたら、足元にも及ばない。

「ごめん、今まで気づかなくて…」

ナオミはロロをギュッと力いっぱい抱きしめた。

親代わりのジョジョが「ねえ、ナオミ。僕も仲間にいれてよ」と二人の間に割りこもうとするが、彼女は空気の読めないジョジョを乱暴に路上に放り投げた。ジョジョの舌打ちが聞こえてきそうだ。ナオミとロロの間に微妙な空気が流れる。

吐息ともに二人の間は狭まっていく。

ナオミがそっと瞳を閉じれば、甘いレモンの味がした。やはりキスはレモン味だ。二人が激しくキスを交わすなか、その二人を静かに見守る一人の男がいた。ジョジョは後ろ足がその男にぶつかったので、振り返ってみた。

「……」ジョジョは息を呑んだ。

後ろに立っていたのはサンチョ・ボブスリー。ボルゴウッドの森で左腕を失った男だ。

ボブスリーは通りをはさんで、黒ずくめの男を凝視していた。

男は「チッ！　忌々しいヤツだ。いつも邪魔しやがって！」と舌打ちとともに銃を外套にしまい、襟を正すとスタスタと静かに立ち去った。ナオミの命を狙っているだと思って、まず間違いなさそうだ。ジョジョがまた後ろを振り返れば、ボブスリーの姿はいつの間にか消えていた。

そんなこととは知らず、二人だけの甘い世界を満喫しているナオミとロロ。

「ねえ、ロロもあの子たちにちょっかいだされている?」

ナオミはロロに今の今さっきまで、リサ・パパティーノに追われ、必死に逃げてきたことを話した。ロロは「ちょっとまえまではな」と首を横にふった。

「ちょっとまえまでって、今はもう平気なの？」

「ああ、あいつらには俺も最初は苦しんだな。でも今は『白馬の騎士』がそんなことをさせない。『白馬の騎士』ってのはトニーっていうヤツが結成した、キング・アーサー地区の騎士候補生たちの秘密結社だ」

この集会は親方やほかの地区に虐められたら、仕返しをするための集まり。

「…またポニーってヤツだ…」ジョジョのボソボソ。

「ジョジョ、ポニーじゃなくてトニーよ」

「へん、知ってらあ」

ジョジョはしっぽをぽたんっとふった。

「なぜブルターニュが『白の公国』と呼ばれていたか、知っているか？」

少年の唐突すぎる質問にナオミが知らないと首をかしげれば、ロロはブルターニュの騎士たちが白馬に乗っていたからだ、と説明する。逆に黒馬に乗っていたドイツ騎士団は、黒馬の騎士と呼ばれ、そのことから彼らの公国は「黒の公国ドイツ」と呼ばれていたとか。また青馬に乗っていたブルゴーニュ地方の騎士たちの公国は、青の国ブルゴーニュとその昔は呼ばれていた。

白馬の騎士、つまりそれはブルターニュの騎士という意味合いなのだ。

「集会は毎日、夜の九時からはじまる。お前もこの集会に参加しろよ。そうしたらみんながお前を守ってくれる。この集会には円卓の騎士団を退団になった仲間もいるし」

ふとナオミはラインハルト刑事の言葉を思いだした。

「僕はてっきりこの子があ？？？？その？？？？、町の浮浪児たちの一味だと思ってね。あいつらは親方から捨てられたり、逃げだしたどうしようもない連中じゃないですか。町ではパンやニワトリを盗んでは悪さをするばかり」とさらに「パパティーノ卿なんて『あいつらはこの町の恥さらし、いずれ一人残らず捕まえて、領主裁判所行きにしてやる』なんていってましたよ」

ナオミはどういっていいか分からなかった。

「テルも参加しているぜ」とのロロの言葉が決め手となった。

ジョジョの「やめときなってば、また牢獄につながれるぞ」の言葉を無視して、ナオミはとても嬉しそうに「ねえ、どうやって参加するの？」とぎこちなく訊いた。ロロはアッパータウン領主館の万年大時計を静かに眺めた。

「もう八時だな、九時になったら集会所に案内する」

二人はそれからしばらくいろんな話をした。

名探偵エイブラハム・アグリとはまだ会えないことや、騎士メダルが一九〇枚を数えるまでになったことなど？？？？ロロは白馬の騎士の集会のことをお互いに話した。

そうこうしているうちに午後九時を告げる。

カリヨンの心地よい鐘の音がラジオの電波にのって聞こえてきた。すると何人かの子どもたちがふと立ちあがり、いつの間にか姿を消していた。ロロがうとうとしていたナオミをツンッと突いた。

「…ごめんなさい、親方！　まだ鉢替えはできていません…アレ？」寝ぼけているナオミにロロはクスッと小笑い。

「時間だ、ついてきてくれ」

ロロは歩いては休み、歩いては休みながらせまい路地にはいっていった。何だか苦しそうだ。やはり彼は病気なのかもしれない。途中、ロロは知り合いの浮浪児に声をかけていたようだ。ジョジョは「あ・や・し・い」とぼやいていたが、ナオミは「きっと友だちな

のよ」とロロをかばった。

第３６話　白馬の騎士同盟【４】

第３６話

キング・アーサー地区は以前と比べて活気がない。

二人はシャトー・ブルトンホテル広場までやってくると、時計塔の風がビュー、ビューと吹き荒れている古びた階段をのぼっていった。やがて二人の目のまえには素敵な絵が描かれた、大きな文字盤のすぐ横にある「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた扉があった。その向こうは歯車の部屋だ？？？とナオミは思った。

歯車の部屋は思っていたとおり、大きな歯車がガタガタッと規律のよい音をたて、大きいのや小さいのやら、いろんな大小さまざまな歯車があった。夜の歯車の音は昼間と違って、不気味な鈍い音に思える。ときおりガシャッ、ゴットンッ？？？と歯車が入れ替わるときなど、飛び上がらんばかりにびっくりだ。

ロロは足場が組まれた部屋を通り過ぎて、歯車と歯車の間にある小さな扉までたどりつくと、コンコンッと扉を静かにノックした。

「…我らが地区…」と誰かがいった。

「キング・アーサー！」ロロは神妙な顔つきでいった。

さらに静かな声が「…聖なる騎士の都…」と続く。ロロは「我らが都アッパータウンに光りあれ！」と厳かに答えた。やがて「君に永久に栄えあれ」という声とともに掛けがねがはずされて、二人はなかに通された。

部屋のなかは数匹のグレムリンがランプを灯しており、とても神秘的だった。どこかの客間と思えるほど素晴らしいところだ。ざっと大人十五名は容易に収容できそうだ。

部屋にはベンチもあれば、真んなかには円卓が置いてあった。赤

煉瓦の壁には、紅色の生地にまわりに金色のひらひらがついている旗が地図のように飾られていた。

おそらくここは時計守の宿直用の部屋だったのだろう。

ベンチにはさびれ横丁で見かけた、汚らしい子どもたちが楽しそうにペチャクチャとお喋りをしたり、ポリポリと誰かがもってきたお菓子を食べていた。

「あははは、マイケル。それ、面白い、最高だよ！」

「チャーリー、君にもできるよ。牛乳を鼻から飲むことぐらい！」

となぜかマイケル・コービーがドラゴンチップスを脇に抱え、口をもぐもぐと動かして、金髪の少年と楽しそうに話をしていた。少なくともナオミが見たかぎりでは、二十人ほどの少年少女が集まっているようだ。

ナオミを見かけると彼らは「おっ、伝説だ」とか「ついに僕らの伝説も白馬の騎士入りか」と手を叩いて喜んでいる者、声をかける者がいた。ここの子どもたちはすでにナオミのことを知っているかのようだ。

「そろそろ君も、僕らの仲間に誘う話が持ちあがっていたんだ」

マイケルはドラゴンチップスを食べながら、得意げにいった。

「話すか食うかのどっちかにしろよ」ジョジョはぼやく。

「ねえ、君ってチェスの女王役だろう？」

先ほどまでマイケルと話をしていた、金髪の少年が自分に話しかけてきた。

「あっ、あなたは賢者役の……」

「賢者役のチャーリーだ、よろしくな」

ナオミは改めてまわりを眺めると、チャーリーのほかにチェスの兵士役の数人かの少年少女の姿もあった。少年たちのうち幾人かは葉巻きを吸ったり、アニタ婆さんみたいに酒を瓶からラッパ飲みしている子もいた。

「ねえ、こいつら不良ってヤツじゃないのかい？」とジョジョ。
ナオミはジョジョの問いかけに黙っていた。
むしゃむしゃとポップコーンを食べている、ちょっと身なりが汚らしい子どもは「食べるかい？　盗んできたものだけど」とナオミに差しだした。ナオミは盗んできたものと聞いてびっくりして、いらないと首を横にふった。
「ねえ、どうして盗んだの？」
ナオミは何か理由があるのだろう、とひそかに聞いてみた。
「どうしてって生きるためじゃんか。そりゃ、君みたいに親方がいるヤツにはわからないと思うけど、円卓の騎士団を辞めさせられちまった僕たちは盗まなきゃ、ここではやっていけないのさ」とポップコーンをポリポリ食べながらいった。

突然、聞き覚えのある声が耳に届いた。
「ここの連中の大半はパパティーノの難くせによって、円卓の騎士団を辞めさせられた子どもたちさ。アイツはトモロヲ・ブドリを追いやってから、自分に刃向かう候補生を次々に退学や停学にしているんだ。アイツに破産に追いこまれた親方に捨てられたり、逃げだしてきた子どももいるんだ」

「あなたも？」
「僕はちょうど四ヶ月前、パパティーノに停学二十年間っていいわたされた。つまり自主退学してこの町からでていけってことさ。僕たち生徒会は反パパティーノ派だからな」
声の主は炎のような赤毛ロレンツォ・テオ・ランゴバルト。
「どうしてそうなったの？」
生徒会が絡んでいることに戸惑いを隠せないナオミ。
「何も驚かなくていい。生徒会はアッパータウンの株券を百万金貨分を保有しているんだ。僕らは臨時株主総会のとき、騎士候補生を代表してトモロヲ・ブドリの辞任を拒否したんだ。それでヤツは僕

を停学にして、かわりにモードレッド地区の補佐役（デンコーチ）だった、息子のマルコを生徒会書記に任命したんだ」

生徒会書記は現在、病に伏せているライアンの代わりに生徒会長代行でもある。

つまりパパティーノは生徒会をも自分の手中に収めた、といってもよい。いつの時代も独裁経営者のやり方というのは変わらない。

「すでに生徒会はヤツの手に落ちた？？？？というわけで僕は浮浪児になったってわけだ。だから僕らは生きていくために盗みもやる。今や白馬の騎士こそが、亡命政府ならぬ亡命生徒会だ」

どうりでチェスの練習にこないわけだ。

「僕もパパティーノのヤツに退学にされたら？？？？」

チャーリーが話に割り込んできた。

「ここに住むつもりさ。でもランゴバルトがそうはさせないけどね。彼はこれ以上、キング・アーサーから退学者や停学者をだすのを防ごうとしているんだ。これ以上チェスのメンバーがいなくなると困るからね」

ロレンツォ・テオ・ランゴバルトはあきれ顔でいった。

「昔は『剣と盾』という空家を隠れ家にしていたんだけど、ほらっ、君たちの誘拐事件の現場だよ。でもついにあそこも借主が見つかってね。もう剣と盾は隠れ家につかえないんだ」とロレンツォは楽しそうに小笑いした。

「だけど幽霊の正体なんてグレムリンだと分かれば怖くないし、それに今では僕らが幽霊をやっているほどさ。とくに外から誰かがやってきたときなんかはね」

「誰かって、誰かきたことあるの？」とナオミ。

「ああ、例えば君たちとかね。あのときは僕が君たちを追いはらったけどね。でももっと質が悪いのは『アグリッパ』さ」というとロロが皆にナオミは、そのアグリッパに付け狙われていると説明してやった。

チャーリーは立ちあがっていった。

「あの一味が『アグリッパ』、現在のリーダーはパパティーノ兄妹。たぶん君は僕らの仲間だと思われたんじゃないかな。最近じゃ、パパティーノの親父が僕らを捕まえようと躍起になっているから、気をつけなきゃいけない」

アグリッパ、白馬の騎士と代々対立している、モードレッド地区の悪魔教を信奉する、騎士候補生たちの集まりだ。

「ちなみにこの会の創設者はジョルジョ・パパティーノだ」

ということは、迷いの森の一味養成組織と思ってよさそうだ。

「この会の名前となったアグリッパは、黒魔術と死霊術（ネクロマンシー）の専門家だった…」

ナオミは生唾をゴクッと呑んだ。そういえばピックル・タナカの悪魔祓いの授業で、その名前の人物のことを習った気がする。

「ああ、そのとおり。その名は魔術の研究家にして中世最大の魔術師、『科学と芸術の虚栄について』の著者の名で知られている」

ロレンツォはアグリッパの名の由来を語り始めた。

ハインリッヒ・C・アグリッパ・フォン・ネッテスハイム
一四八六年九月十四日生まれの一五三五年没。

ルネサンス期ドイツ王国の思想家にして神学者。また黒魔術師にして錬金術師。

彼は青年時代から多読家であり、学問研究に秀でており、語学も八ヶ国語を話せたといわれる。彼は博学の人であり、オカルト史において彼の著書は重要視されている。

最も有名な著作は『オカルト哲学』という書物である。彼の錬金術への貢献は創造よりも、むしろ形式知の体系化にあり、中世までの錬金術をとりまとめたことにあるといわれ、悪魔術の研究『悪魔

学』にも精通していた。

そんな彼はそんな彼はドイツの名門大学を卒業後、ときのドイツ皇帝に仕え、一五〇九年には大学で哲学を教える。だがアグリッパの魔術的世界観を当時の教会は、容認できずに彼を異端者として追放した。アグリッパはフランスに亡命するが「知識とは専ら人に本当に自分がいかにものを知らないか、とを悟らせてくれるものである」などの当たり前のことをいって、異端思想による宮廷侮辱として一年間投獄される。一時は追放されたものの、ドイツの故郷にもどり、有力貴族の侍医として過ごした。

平凡な日々はそう長くは続かなかった。

ドイツのとある田舎町に住む、ある女性が魔女の告発を受けた。告発状によれば、彼女の母親がかつて魔女として、焚刑に処された事実から、彼女も同類であるとみなされたからである。それを知ったアグリッパは彼女の弁護をかってでたという。

「そもそも人が神の救いから離れるのは、自らの罪であって、他者の罪のためではない」

このアグリッパの陣論は、協会側の訴訟を取り下げるには十二分なものだった。ところがこのときの彼の行為がドイツの異端審問官を敵にまわすどころか、教会の宿敵とみなされることになった。

異端審問官と騒動をまき起こし、とうとうアグリッパはドイツ全土から永久追放の身となり、安住の地を求めてフランスへと舞いもどれば、ときのフランス皇帝の后への悪口が仇となって、また投獄されるという不運。数年の服役後、フランス東南部の古都でその短い一生に幕をおろした。

没後、出版までに二十年の歳月を要したアグリッパの著書、悪魔

学集大成『オカルト哲学』は次代の思想家たちに多大な影響を与えた。また「愛する女に弄ばれて棄てられた恋人は、悲観の極みが原因で死にいたることがある」とは、彼の人生の名言。

「アグリッパのエピソードとして、最も有名なのが死体の一時再生なんだよ」とロレンツォ。

「死体の一時再生？」

「彼にまつわるオカルト伝説のひとつでね。アグリッパがベルギーに住んでいた頃の話なんだけど、あるとき彼の屋敷に間借りしていた、ある青年がアグリッパが町にでかけた隙に、彼の書斎に侵入したんだ。ある本を読みたくなったらしい。ところが書斎には鍵がかかっており、青年はアグリッパの奥さんに嘆願して、ようやく書斎に足を踏みいれると目指すべき本は机のうえに置かれていた。

その書物は魔術の呪縛の書かれたもので、青年が声をだして読みあげるとまもなく、ドアをノックする音が聞こえた。ドアを叩いたのは悪魔だった。悪魔は青年に呼びだされたわけを尋ねたが、おびえきった青年はどうしても答えることができない。

そんな青年に腹をたてた悪魔は、青年の喉をつかみ絞め殺してしまったんだ。町からもどったアグリッパは大慌て。青年の死体をみつめ、自分で死体を処理するにしても警察に届けるにしても、おそらく疑いの目でみられるであろう。

そこで彼は一計を案じたんだ。青年を殺した悪魔を呼びだすことにしたってわけさ。悪魔はアグリッパの計画とおりに青年を再生させ、町の広場を徘徊させたあと野たれ死んだようにみせかけた。だが青年の首には絞殺の生々しい痕が残っていた。アグリッパは殺人容疑で指名手配、町から逃亡したって話だよ」

「それとジョルジョ・パパティーノとどう関係あるの？」

「パパティーノ家はドルイド教徒じゃなくて、悪魔崇拝のアグリッパ教徒。悪魔を崇拝する黒き連中だよ」

するとドンドンッという扉をノックする音がしたので、ジョジョは「ひええ」と驚きの声をあげ、ナオミの足にしがみついた。ナオミもビクッと肩を震え上がらせた。

「悪魔がおでましだな」とロレンツォ。

「悪魔！」

恐怖のあまり、ナオミはジョジョを思いっきり抱いた。

「確かに悪魔みたいなヤツだよ。テル・ウォ・アボカドはね」

まもなく部屋にはいってきた、テルの話によれば雨が降ってきているらしい。少年は犬のようにブルッと全身を震わせ、ナオミを見ると「仲間から連絡をもらった、今から同盟を結ぶのか？」とロレンツォに訊いた。

ロレンツォは静かに頷いた。

（ジョジョ、同盟って何のことかしら？）

「たぶん悪魔と契約を結ぶんだよ」とジョジョはそっけない。

第３７話　白馬の騎士同盟【５】

第３７話

突然、聞き覚えのある声が耳に届いた。
「ここの連中の大半はパパティーノの難くせによって、円卓の騎士団を辞めさせられた子どもたちさ。アイツはトモロヲ・ブドリを追いやってから、自分に刃向かう候補生を次々に退学や停学にしているんだ。アイツに破産に追いこまれた親方に捨てられたり、逃げだしてきた子どももいるんだ」

「あなたも？」
「僕はちょうど四ヶ月前、パパティーノに停学二十年間っていいわたされた。つまり自主退学してこの町からでていけってことさ。僕たち生徒会は反パパティーノ派だからな」
声の主は炎のような赤毛ロレンツォ・テオ・ランゴバルト。
「どうしてそうなったの？」
生徒会が絡んでいることに戸惑いを隠せないナオミ。
「何も驚かなくていい。生徒会はアッパータウンの株券を百万金貨分を保有しているんだ。僕らは臨時株主総会のとき、騎士候補生を代表してトモロヲ・ブドリの辞任を拒否したんだ。それでヤツは僕を停学にして、かわりにモードレッド地区の補佐役（デンコーチ）だった、息子のマルコを生徒会書記に任命したんだ」
生徒会書記は現在、病に伏せているライアンの代わりに生徒会長代行でもある。
つまりパパティーノは生徒会をも自分の手中に収めた、といってもよい。いつの時代も独裁経営者のやり方というのは変わらない。
「すでに生徒会はヤツの手に落ちた？？？というわけで僕は浮浪児になったってわけだ。だから僕らは生きていくために盗みもやる。

今や白馬の騎士こそが、亡命政府ならぬ亡命生徒会だ」
どうりでチェスの練習にこないわけだ。
「僕もパパティーノのヤツに退学にされたら？？？」
チャーリーが話に割り込んできた。
「ここに住むつもりさ。でもランゴバルトがそうはさせないけどね。彼はこれ以上、キング・アーサーから退学者や停学者をだすのを防ごうとしているんだ。これ以上チェスのメンバーがいなくなると困るからね」

ロレンツォ・テオ・ランゴバルトはあきれ顔でいった。
「昔は『剣と盾』という空家を隠れ家にしていたんだけど、ほらっ、君たちの誘拐事件の現場だよ。でもついにあそこも借主が見つかってね。もう剣と盾は隠れ家につかえないんだ」とロレンツォは楽しそうに小笑いした。
「だけど幽霊の正体なんてグレムリンだと分かれば怖くないし、それに今では僕らが幽霊をやっているほどさ。とくに外から誰かがやってきたときなんかはね」
「誰かって、誰かきたことあるの？」とナオミ。
「ああ、例えば君たちとかね。あのときは僕が君たちを追いはらったけどね。でももっと質が悪いのは『アグリッパ』さ」というとロロが皆にナオミは、そのアグリッパに付け狙われていると説明してやった。

チャーリーは立ちあがっていった。
「あの一味が『アグリッパ』、現在のリーダーはパパティーノ兄妹。たぶん君は僕らの仲間だと思われたんじゃないかな。最近じゃ、パパティーノの親父が僕らを捕まえようと躍起になっているから、気をつけなきゃいけない」
アグリッパ、白馬の騎士と代々対立している、モードレッド地区の悪魔教を信奉する、騎士候補生たちの集まりだ。

「ちなみにこの会の創設者はジョルジョ・パパティーノだ」
ということは、迷いの森の一味養成組織と思ってよさそうだ。
「この会の名前となったアグリッパは、黒魔術と死霊術（ネクロマンシー）の専門家だった…」
ナオミは生唾をゴクッと呑んだ。そういえばピックル・タナカの悪魔祓いの授業で、その名前の人物のことを習った気がする。
「ああ、そのとおり。その名は魔術の研究家にして中世最大の魔術師、『科学と芸術の虚栄について』の著者の名で知られている」
ロレンツォはアグリッパの名の由来を語り始めた。

ハインリッヒ・C・アグリッパ・フォン・ネッテスハイム
一四八六年九月十四日生まれの一五三五年没。

ルネサンス期ドイツ王国の思想家にして神学者。また黒魔術師にして錬金術師。
彼は青年時代から多読家であり、学問研究に秀でており、語学も八ヶ国語を話せたといわれる。彼は博学の人であり、オカルト史において彼の著書は重要視されている。
最も有名な著作は『オカルト哲学』という書物である。彼の錬金術への貢献は創造よりも、むしろ形式知の体系化にあり、中世までの錬金術をとりまとめたことにあるといわれ、悪魔術の研究『悪魔学』にも精通していた。

そんな彼はそんな彼はドイツの名門大学を卒業後、ときのドイツ皇帝に仕え、一五〇九年には大学で哲学を教える。だがアグリッパの魔術的世界観を当時の教会は、容認できずに彼を異端者として追放した。アグリッパはフランスに亡命するが「知識とは専ら人に本当に自分がいかにものを知らないか、とを悟らせてくれるものである」などの当たり前のことをいって、異端思想による宮廷侮辱とし

て一年間投獄される。一時は追放されたものの、ドイツの故郷にもどり、有力貴族の侍医として過ごした。
平凡な日々はそう長くは続かなかった。

ドイツのとある田舎町に住む、ある女性が魔女の告発を受けた。告発状によれば、彼女の母親がかつて魔女として、焚刑に処された事実から、彼女も同類であるとみなされたからである。それを知ったアグリッパは彼女の弁護をかってでたという。

「そもそも人が神の救いから離れるのは、自らの罪であって、他者の罪のためではない」

このアグリッパの陣論は、協会側の訴訟を取り下げるには十二分なものだった。ところがこのときの彼の行為がドイツの異端審問官を敵にまわすどころか、教会の宿敵とみなされることになった。
異端審問官と騒動をまき起こし、とうとうアグリッパはドイツ全土から永久追放の身となり、安住の地を求めてフランスへと舞いもどれば、ときのフランス皇帝の后への悪口が仇となって、また投獄されるという不運。数年の服役後、フランス東南部の古都でその短い一生に幕をおろした。

没後、出版までに二十年の歳月を要したアグリッパの著書、悪魔学集大成『オカルト哲学』は次代の思想家たちに多大な影響を与えた。また「愛する女に弄ばれて棄てられた恋人は、悲観の極みが原因で死にいたることがある」とは、彼の人生の名言。

「アグリッパのエピソードとして、最も有名なのが死体の一時再生なんだよ」とロレンツォ。
「死体の一時再生？」

「彼にまつわるオカルト伝説のひとつでね。アグリッパがベルギーに住んでいた頃の話なんだけど、あるとき彼の屋敷に間借りしていた、ある青年がアグリッパが町にでかけた隙に、彼の書斎に侵入したんだ。ある本を読みたくなったらしい。ところが書斎には鍵がかかっており、青年はアグリッパの奥さんに嘆願して、ようやく書斎に足を踏みいれると目指すべき本は机のうえに置かれていた。

その書物は魔術の呪縛の書かれたもので、青年が声をだして読みあげるとまもなく、ドアをノックする音が聞こえた。ドアを叩いたのは悪魔だった。悪魔は青年に呼びだされたわけを尋ねたが、おびえきった青年はどうしても答えることができない。

そんな青年に腹をたてた悪魔は、青年の喉をつかみ絞め殺してしまったんだ。町からもどったアグリッパは大慌て。青年の死体をみつめ、自分で死体を処理するにしても警察に届けるにしても、おそらく疑いの目でみられるであろう。

そこで彼は一計を案じたんだ。青年を殺した悪魔を呼びだすことにしたってわけさ。悪魔はアグリッパの計画とおりに青年を再生させ、町の広場を徘徊させたあと野たれ死んだようにみせかけた。だが青年の首には絞殺の生々しい痕が残っていた。アグリッパは殺人容疑で指名手配、町から逃亡したって話だよ」

「それとジョルジョ・パパティーノとどう関係あるの？」

「パパティーノ家はドルイド教徒じゃなくて、悪魔崇拝のアグリッパ教徒。悪魔を崇拝する黒き連中だよ」

するとドンドンッという扉をノックする音がしたので、ジョジョは「ひええ」と驚きの声をあげ、ナオミの足にしがみついた。ナオミもビクッと肩を震え上がらせた。

「悪魔がおでましだな」とロレンツォ。

「悪魔！」

恐怖のあまり、ナオミはジョジョを思いっきり抱いた。

「確かに悪魔みたいなヤツだよ。テル・ウォ・アボカドはね」

まもなく部屋にはいってきた、テルの話によれば雨が降ってきているらしい。少年は犬のようにブルッと全身を震わせ、ナオミを見ると「仲間から連絡をもらった、今から同盟を結ぶのか？」とロレンツォに訊いた。

ロレンツォは静かに頷いた。

（ジョジョ、同盟って何のことかしら？）

「たぶん悪魔と契約を結ぶんだよ」とジョジョはそっけない。

第３８話　白馬の騎士同盟【６】

第３８話

白馬の騎士会に参加するには立会人が二人いるらしい。
ナオミが同盟に参加するときいて雨の中、テルはわざわざ駆けつけてくれたのだ。ロロが時計塔に向かうとき、彼が知り合いの浮浪児に囁いていたのはこのためだ。友というのはなんと有り難い心のつながりだろうか。ナオミはちょっぴり目頭が熱くなった。

「一同、厳粛にしたまえ」とロレンツォの声がした。
「今からナオミ・ニトの忠誠の誓いをはじめる」
その声に今までふざけていた子どもたちは立ちあがり、襟をただした。グレムリンは子どもたちに自分の松明を手渡すと椅子にすわり、見学と洒落こんだ。
青い炎はナオミとロレンツォをとりかこみ、二人の立会人はナオミの一歩後ろで跪いた。すると後ろから立会人の一人、ロロがナオミに自分と同じように跪いて、頭を垂れ、両手を組み、ロレンツォに差しだすようにいった。

「託身（オマージュ）の礼をとるんだ」
ロレンツォは彼女のまえに立ち、厳かな声で尋ねた。
「…そなたの名は…」
「ナオミ・ニト」
ナオミもやや緊張した声でいった。
「そなたは白の公国ブルターニュに忠誠を尽くすか？」
「はい」
「ではそなたの剣と盾、誇りと名誉に忠誠を誓いたまえ。我とわが友よ、彼女をブルターニュの白騎士『白馬の騎士』と迎えるか？」

との儀式的な言葉にロレンツォが「ビバ」と呟けば、「ビバ！　ビバ！」という声がまわりから一斉に聞こえてきた。

「では立会人二名、汝らの名は？　右より名を名乗るがよい」
「これよりは白馬の騎士ロミオ・ロートレック」
「同じく白馬の騎士テル・ウォ・アボカド」
二人は跪きながら、次々と自分の名前をいった。
「汝らはこの者の親となり、友となるか？」
「…はい…」と二人は声をそろえた。
「ではおのが剣に誓いたまえ」
ロレンツォの声とともに二人は剣を抜き、各々の顔に近づけた。
「汝は我のため、我は汝のために！」

今度はロレンツォが剣を抜き、ナオミの左肩においた。
「汝よ、身は騎士候補生であれど心は騎士であれ！　我の声に汝よ、誓いたまえ」
ロレンツォは誓いの言葉を厳かに述べ始めた。

「白馬の騎士に身を捧げる汝よ、汝は我のために忠誠を誓うか？」
「うん」そんな彼女の返事にケラケラッとグレムリンたちが笑い声をあげた。
「『忠誠の義務を怠りなく尽くすことを誓います』っていうんだ」
ロロが頭を垂れながら、彼女の背後から囁いた。
「…忠誠の義務を怠りなく尽くすことを誓います…」
ナオミはいわれたとおりに繰り返した。
「我とわが友を裏切らないことを誓うか？」
「友の義務を怠りなく尽くすことを誓います」
ロレンツォの声は、一段と厳かな口調になった。
「これよりロレンツォ・テオ・ランゴバルトの名のもと、汝をブルターニュの白騎士『白馬の騎士』に迎える」と白馬の騎士のリーダ

ー、ロレンツォの厳粛な声が部屋中に響いた。

ロレンツォは少女が差しだしている組手をギュッと力強く、両手で握りしめ、託身の握手をかわした。それから誰かが壁にかけてある紋章旗から布地だけをとりだし、少年に厳粛に手渡した。

ロレンツォはそれをスカーフのようにナオミの髪に白馬の紋章旗をかぶせた。

この紋章は命よりも大切なものだとか。白馬の騎士が結成されたときより、代々のリーダーたちから手渡され、受け継がれてきた紋章なのだ。この紋章を心に宿すということは仲間たちと同盟を結んだことになる。血は水よりも濃いけれども、その血よりも濃いものこそ彼らの友情ともいえよう。

「…血よりも濃いもの、それが友情…」とナオミは呟いた。

最後に子どもたちはグレムリンたちに松明を手渡し、騎士の誓いを大合唱した。

己の誇りと命を天秤にかけてみるといい

汝はその剣を主君に捧げることができるか
おのが命をかけて　誓いをはたすことができるのか

物事の是非は騎士道ニトうがよい
いばらの道こそが　おのが騎士道に通ずると知れ

かよわき者はその楯でつつみ
邪悪なものには正義の鉄槌をくだせ

誠実さ　優しさ　勇敢さ　公平さ
そして献身　名誉　清らかさ　謙虚さ

騎士見習いはこの八つの徳と名声を重んぜられよ

子どもたちは歌い終わると、とても満足に腰をおろした。

忠誠の儀式は終わり、場は数分前と同じ温かな雰囲気にもどっていた。マイケルに対して「お前のあだ名はドラゴンチップスに決定だ」というテルの声も聞こえる。でもドラゴンチップスというあだ名は、どこか名前勝ちしている気がする。

「君はどうするんだ？」とチャーリー。

「『どうするんだ』って？」

「明日の午前二時、僕らはアグリッパどもに囚われた仲間を助けにいく」

「囚われた仲間？」

「コクリコ・サクラダが連中に捕まったんだ。連中の隠れ家はすでに判明している」

なるほど彼女も白馬の騎士にはいっているのか。

またこれがアグリッパの常套手段だとか。毎年チェス選手を一人づつ狙い、拉致監禁、私刑（リンチ）の病院送りにすることが、だ。去年はキング・アーサーの優秀なチェス選手が連中の闇討ちによって、何人かが病院送りになり、チェスは準決勝敗退に喫したそうだ。

「ナオミ、君が連中に狙われる最大の理由はここだ。君はチェスの女王役だ」

そうか、そういうことか。

決闘の日時は明日の夜、零時、場所は庭園墓地東にあるアグリッパ悪魔教会。チャーリーがいうにはナオミもその決闘に参加すればいい、連中に自分の後ろには白馬の騎士がいると分からせれば、連中も不本意に手はださない。いやだせなくなる。嫌がらせもじきになくなるだろうというのだ。

「なんたって僕らの後ろには、あのエイブラハム・アグリがいるん

だからね」

四ヶ月間、捜し求めていたその名を聞き、ナオミは声を荒げた。
「な、なぜ。あなたたちの後ろに…」
「僕らの後ろ盾にエイブラハム・アグリがいるかって？」
チャーリーは得意げにいった。
「…だって、僕らはエイブラハム・アグリの探偵団だからさ」
ナオミは驚きのあまり、ポカーンッと口を開けたままだ。
「あ、あの…その、私、エンガチョのことで、どうしてもアグリさんに会って、伝えなきゃいけないことがあるの…」
そう伝えなければならない。彼が無実であることを、冤罪であることを。
エイブラハム・アグリがこうも白馬の騎士同盟に深く関わっているのかといえば、彼はキング・アーサー地区の出身にして、白馬の騎士同盟のＯＢだからだ。さらにチャーリーはココはアグリの従騎士だと教えてくれた。

迂闊だった、こんな間近にエイブラハム・アグリに近い人間がいたなんて。

騎士候補生の監督権は親方騎士にある。自分が担当する騎士候補生に何かあれば、彼らの担当騎士でもある親方が責任をとらねばならない。ココの担当騎士はもちろんＡ・アグリその人だ。
「今回の件はＪ・パパティーノが絡んでいるって、アグリさんがいっていた。それにココの救出にはアグリさんも来るよ。調べたいことがあるんだってさ」とロレンツォはいう。

表向きは白馬の騎士同盟対アグリッパに見えるが、そうこれは聖教対悪魔教、いやもしかしてエイブラハム・アグリ対ジョルジョ・パパティーノの対立なのかもしれない。ココはパパティーノ動向を

探っていたために、連中に捕まったのかもしれない。自分はアグリに会わなきゃいけないし、友人のココも助けたい。

そう自分には、ココ救出に参加しなければならない義務がある。

「私も参加するわ、だって仲間ですもの！」

「さすが英雄の子だ」

ロレンツォは改めてナオミと握手を交わした。

カリヨンの鐘が夜の街に唸るように響きだした頃、親方がいる子どもたちは次々と姿を消し、ナオミもロロと一緒にブルトンホテル広場まで降りていった。二人はお互いに両頬にぎこちない、小さなキスをかわして別れた。

「ふん、僕は認めないからな！」親代わりのジョジョはぼやく。

第３９話　白馬の騎士同盟【７】

第３９話

「鍵、締まっていると思うよ。どうするのさ？」
「何とかなるわよ、うるさいわね」とナオミ。
深夜に静かに鳴る、カリヨンの鐘には心地良さがあった。
ゴソゴソする二つの影を近くの樹で羽を休めていた、夜鳴き梟がゆっくり見つめている。そうナオミたちが古き洋館大通りに戻ってきたのは午後十二時だ。

（たぶん鍵は開いてないだろう）と覚悟をしていたナオミ。

でも不思議なことに扉は開いていた。すると扉にはさんでいた手紙がポロッと落ちたのがわかった。ライアンの字だ、手紙には「戻ったら鍵を閉めておいて。そうそう、夕食をとっておいたから僕の部屋にきてよ」だった。
カチャリッと鍵を閉めると、忍び足でナオミたちはライアンの部屋までいった。
「やあ、おかえり」とライアン。
「まだ起きていたの？」
「うん、今さっき物音がしたから目が覚めたんだよ。それで今日はとくに遅かったね？」
ナオミは白馬の騎士になってとても興奮していた。
とはいえアグリッパに出会い、それから友人のロロにも出会い、生徒会書記長のロレンツォ・テオ・ランゴバルトとの出会いを物語るも、ロロの体調がすぐれないこと、ココがアグリッパに捕まっていることは黙っていた。
「僕も心配していたんだ、ロレンツォのこと。そうか、まだこの町

にいたんだね。彼は僕のかわりに生徒会を率いてくれていたんだけど、今は白馬の騎士のリーダーか。でも最近の白馬の騎士はいい噂を聞かないけどな」

「うん、ジョジョは不良と浮浪児の集まりっていうの」

ジョジョは自分の意見は、正しいとばかりにうたた寝していた。

「君が白馬の騎士会同盟を交わしたことは、父さんたちには絶対に内緒だよ、きっと辞めさせるだろうから。でも以外だったな。アグリの忠実なる探偵団が、白馬の騎士だったなんて」

ライアンもこれは迂闊だった？？？？と正直に認めた。

生徒会長は中立を守るべき立場にある。ゆえに少年は白馬の騎士同盟には参加していないとか。また白馬の騎士のことは昔から限られた子どもたちの秘密？？？？もちろん代々のリーダーも違えば、集会所の場所も違うのは当たり前だ。

「ロロは元気そうだった？」

彼のことを思えば、火傷に触るように心も身体も痛い。

おそらく今、ナオミにとって一番触れられてほしくない場所にライアンの言葉がグサッと刺さった。

「ほらっ、ロロの親方は僕の元親方だから、ちょっと心配なんだ」

ナオミは機会があれば連れてくるといいながらも、ひそかにライアンの心配は当たっているのかもしれない？？？？とベッドにゴソゴソもぐりながら思う。

気がつけば日付は変わり、午前一時だ。カリヨンの鐘がナオミの耳に届いた。

ナオミは来るべき戦いに備えていた。まずは身だしなみを整え、剣の位置も入念に確認した。ロレンツォが「魔法戦になる可能性があるから、魔法剣の準備と魔法力（スピリチュアル）を高めておくんだぞ」といったのが、どうも頭からこびりついて離れない。

凄まじい斬り合いになるかもしれない。死人まではでないとしても、再起不能者や指の一本や二本、ぶっ飛ぶかもしれないといわれれば、誰だってビビッる。ついでに散らかっていた部屋の整理整頓まですませると、ナオミは最後に大きく息を吸いこみ、ふーっと息を吐き、張りつめいてる自分の顔をパンパンッと二回ほど叩いた。

「やっぱりいくの？」

ジョジョはどこか気がのらないようだ。

「うん、仲間を見捨てるわけにはいかない」

「それじゃあ、そういうご主人を見捨てるわけはいかないよね」

ジョジョもゆったりと重たい腰をあげた。眠たいという理由で主人のあとをついてまわらず、睡魔に身を委ねるものなら、自分はただのペットだと理解しているようだ。ペットと友人の差はここで決まるといってもよい。どうやらジョジョはぼやきの多い、友人のほうを選択したようだ。

ただライアンの部屋を通ったとき、「ナオミだよね？」という少年の声に捕まってしまったのは誤算だった。少年は自分たちを部屋に招きいれ、今夜の友とするつもりだ。集合場所までもう一時間もない？？？急がなくちゃいけないのに。

「私、今日は本当に忙しいから、ごめん」

「なんで忙しいの？」

「あの…その…秘密！」ナオミはどもってしまった。

「でも君、殺気がぷんぷんしてるよ。心を落ち着かせなよ」

一瞬、ナオミはドキッとした。

「そんなにぷんぷんしているかしら？」

今から決闘だなんていえるはずがない。

ライアンはコクッと頷き、ランプ机に置いてある毎日ブルトン新聞を指差した。そこにはアグリの従騎士が庭園墓地近くで行方不明

になったこと、しかも犯人は悪魔教徒の仕業だとか？？？？ココの親方アグリは「この僕にケンカを売るなんていい度胸だ、後悔するまえにココを解放したまえ」と談話をだした？？？？とあった。

「この記事が関係しているんだろ？」

「…ご、ごめん…」

これからしようとする罪悪感からか、ナオミは謝ってしまった。

「ねえ、詳しく話してくれる？」

「帰ってきたあとじゃだめかしら？」

「白馬の騎士もそれには関わっているのかい？」

ナオミは頷いた。

「そうか。ロレンツォはキング・アーサーのなかでの三本の指にはいる秀才だ、アイツのいうとおりにすれば絶対に間違いない。僕が保証するよ。ねえ、ナオミ。白馬の騎士には君の親友のロロもはいっているのかい？」

ナオミはまた頷いた。

「だったら今夜、君は彼に会うわけだね？　僕、どうしてもその子にいっておきたいことがあるんだ。時間があれば、ここに連れてってくれるかい？」

「うん、聞いてみるわ」

「絶対だぞ」とライアンはナオミに唾握手を求めた。

第４０話　アグリッパ悪魔教会　【1】

第１話

カランコラーン、カランコラン？？？カリヨンの鐘が午前一時三十分の時を告げた。庭園墓地は昼もうす暗くてとても気味悪いところだ、真夜中ならいうまでもない。

まわりは墓石と芝生、そして死の香りがただよっていた。ホーッと夜鳴き梟の鳴き声がさらに不気味さを感じさせる。美しい木立が並ぶなか、墓場の気味悪さと闇夜にまぎれて、例の悪魔教の教会は姿を現した。

墓場の森のなかでジョジョが人影らしき黒い影をみた、といった気もしないでもない。

「ねえ、本当だってば！　あそこにナオミを見ていたヤツがいたよ」

「へー、それって仕返しかしら？」

ジョジョの舌をだらーんと垂らし、ハッ、ハッ、ハッと息をしている。目は悪戯小僧のように純粋だ。信じるには値しない？　いやこれは真夜中の連れだしに対する反抗、ジョジョの戯言だと考えてもいいだろう。

教会手前でロレンツォたちと合流してまもなく、カリヨンの鐘が午前二時を告げた。鐘の音が鳴り終えるとロレンツォが厳かに剣を抜いた。するとそろって皆も剣を抜く、ナオミも遅れながら父の剣を抜いた。

「汝は我のため、我は汝のために！」

ロレンツォの厳正の声に、皆は自分の剣を彼の剣に重ね、同じく復唱した。この言葉で皆の心は一つになった？？？といっても過言ではない。

アグリッパ悪魔教会は名のとおり、不気味だ。
カステラのように横長のゴシック建築様式の教会、しかも黒で統一されている。先端の聖剣を象った黒十字架には、飢えた人間が突き刺さった悪趣味な黒い彫刻。聖教のドルイド教と比べれば何もかも正反対だ。入り口の厳めしい悪魔像を通りすぎて、ナオミが扉に手をやれば、キィーッと古びた音をたてて、白馬の騎士たちをなかに迎えた。
ココ救出の選抜隊はナオミ、テル、ロロ、ロレンツォ、チャーリー、マイケル、そしてジョジョの六名と一匹だ。ほかの白馬の騎士たちは外で待機していた。

教会に一歩踏み込んだ瞬間、「剣を抜け！　魔法で身を守れ」とロレンツォの声が場に響いた。
一呼吸もしないうちにナオミたちに剣が襲いかかる。彼の声があと一秒遅ければナオミたちは深手を負っていたに違いない？？？？いやきっと死んでいただろう。
「あれ、なに？」
ナオミはケタケタケタッと笑う、骸骨の騎士に脅えた。
芯まで黒い骸骨が鎧を纏い、ケタケタと笑う髑髏は不気味極まりない。目があるべきところには目がなく、頬には腐った肉が糸をひいて、ボロボロと落ちていた。剥き出しの歯というか、牙はおぞましい。こんな歯に首を噛まれたら、一発で即死だ。
「骸骨（スケルトン）剣士だ」
ロレンツォが髑髏にむかって、剣を横にふって地に沈めた。
少年の攻撃を境に、骸骨剣士が一斉に襲いかかってきた。剣と剣の金属音がけたたましく鳴響く。
ロロやテルは骸骨剣士を蹴り飛ばし、勢いよく前のめりに斬り込み、連中を地に静める。ナオミも「火の女神ヘスティア、火の鳥」と呟き、火の鳥を剣に宿らせて、骸骨剣士を幾度となく灰にする。

一瞬、ナオミの背中が誰かにぶつかった。「くそ！」とナオミはすかさず振り返り、相手を確認せず剣を勢いよく振り上げた。
「落ちつけ！」とガチャン！　と剣を受け止めたのはロロだ。
白馬の騎士たちは、床に剣を突きさして肩であえいでいる。もう皆、息があがっているようだ。これまで地に沈めた骸骨剣士の数はざっと四十体は超える。周囲を見渡せばあと三十体はいると思って間違いない。
「ぐわあぁ！」悲鳴がするほうに目をやれば、テルをかばったロロが骸骨に首もとにかじりつかれていた。ポインセチアの花のような色鮮やかな鮮血がパッ、と床に飛び散った。血がドクドクと流れ落ちる首筋を右手でおさえ、ロロは骸骨剣士の首を剣で断ち切った。
瞬間、その影に隠れていた骸骨剣士が少年の胸を突き刺した。
？？？？くそったれ！　ロロがそう口を動かしたのがわかった。
「ロロ！」
ナオミがその骸骨剣士を炎で焼き尽くした。
「…チッ、へたこいちまった…」
少年は床に跪いたあと、ゆっくりとくの字になって倒れた。
「そ、そんな。なんでだよ、なんで僕なんかのために…」
「…フンッ、なんでって。身体が勝手に動いちまったんだ、こればかりはどうしようもない…」
テルはロロに近寄り、大粒の涙をボロボロと流している。
「で、でも…」
「…そ、そんなしけた顔してんじゃねえよ…」
ロロを抱く、テルの服は真っ赤に染まっていく。床に血溜まりができている。テルの脳裏に出血死という言葉が浮かんだ。
「ロロに助けられた命を無駄にするな」とロレンツォ。
「泣く暇があったら剣をとれ」
チャーリーのこの言葉がテルを頷かせた。

「お前の仇は俺がとってやる！」
テルの剣に怒りと友情の電流が迸る。
「アスガルドの神トールの裁き、雷帝の聖電撃（サンダーボルト）！」
少年の心の叫びに応えるように、テルの怒りは骸骨剣士を地に沈めた。とはいえやはり何度も使えるものでもなく、限界がある。傷ついたロロを囲むように円陣を組み、襲いかかる骸骨剣士と剣を交えつつも、体力の差は天と地だ。そもそも相手は死んでいる、疲れなどはなから感じない。

今や白馬の騎士の鉄壁を誇った、団結の円陣も崩れかかっている。チャーリーとテル、ロレンツォが剣にもたれるように、肩呼吸で喘いでいる。骸骨剣士の一人は円陣が崩れたとみたのか、骸骨剣士はお互いに目を合わせると勝利の雄叫びをあげ、ナオミたちに襲いかかってきた。
白馬の騎士たちが「もうだめだ」と目を閉じた瞬間、「聖イヴよ、汝の尊き聖なる守護をもって我らを守りたまえ」と聞き覚えのある声が聞こえた。

「光の魔法陣、守護聖人イヴの抱擁」
瞬間、床に神々しいばかりの光の六芒星の円陣が現われ、ナオミたちを光で包みこんだ。光に突進してきた骸骨剣士たちは聞くも耐え難い声をあげて、光りの中に消えた。さらに声の主が親指と人差し指でパチンッと音を鳴らせば、光が外にむけて広がっていく。
逃げ場を失った骸骨騎士たちは光りに呑まれ、悲鳴とともに姿を消した。
「悪魔教の連中には聖教の護りをもって封じる。覚えておけ…」
ナオミが顔をあげれば、やはりあの男だった。

第４１話　アグリッパ悪魔教会　【２】

第４１話

？？？？男には左腕がない。そして自分はこの男を知っている。男の名はサンチョ・ボブスリー。孤島の牢獄モン・サン・ミッシェル脱獄囚だ。

フェンリルに喰いちぎられた痕をみれば、ナオミは心が痛んだ。はたして左腕を犠牲にまでして、こんな自分を助ける意味があったのだろうか。そして今、この男はまた自分を助けてくれている。なぜなんだろう？

「…気にするな、俺には友の誓いを守る義務がある…」

男はナオミにチラッと目をやったあと、瀕死のロロをゆっくりと抱きかかえた。

「まだ息があるな、助かるかもしれない」

サンチョ・ボブスリーは「守護聖人イヴの治癒（ヒーリング）」と呟き、右手を少年の手に当てれば、不思議なことが起きた。骸骨剣士に噛みつかれた首筋の傷、剣で貫かれた胸の傷がみるみるうちに癒されていく。きっとロロの癒しの首飾りも、彼の回復を手伝っているに違いない。

数分後、ロロが「うーん」と目を覚ませば、テルは彼を思いっきり抱きしめた。

「気持ち悪いからやめろ！」といわれても、今のテルにはどうでもいい。少年が生きていてくれただけで嬉しいのだ。

奥に進めばすすむほど、悪魔教会は不気味だ。拷問の部屋やらがある。

「ひえええ」と悪魔の剥製やらに声をあげるマイケル。

ボブスリーが傍にいてくれるだけで、ナオミは心強かった。いや

ナオミだけはない、それは白馬の騎士、皆の意見だ。部屋が奥に近づくにつれて、廊下には骸骨騎士の残骸が目につく。自分たちより一足早く、この教会に来ている人がいるのは確かだ。

「きっとアグリさんだよ」ロレンツォが嬉れしそうにいった。

?:?:?:ズドドオオオオオオー――ーンッ!!!

教会の奥で大きな音が聞こえ、ナオミたちは急ぎ足になった。

奥の扉を開ける頃にまた、ズドドドオオオオオオ?:?:?:ンッと耳をつんざくような音が聞こえてきた。誰かと誰かが交戦状態にあるのは確かようだ。

「あの扉の奥よ」

「きっとアグリさんに何かあったんだ!」

ナオミたちはバーンッ、と勢いよく扉を開けた。

悪魔教の祭壇の間のようだが、意外な光景が彼らの前に飛び込んできた。牙が鋭い、一頭の大きなトラが一人の男を睨み見据えているのだ。五頭いたらしいがうち四頭はすでに息絶えている。血に飢えた獰猛なトラは唸りに唸り、男に喰らいつこうと必死だ。

「剣歯虎(サーベルタイガー)だ」

どことなくボブスリーの声は緊張して、わなわなと震えていた。

二本の牙は剣よりも鋭い、獰猛な古代の生き残りの剣歯虎。それと対峙しているのはあの男だ。ボブスリーの声が緊張していたのは、それだけじゃない

「…ジョ、ジョルジョ・パパティーノ…」

この男を目にして、ボブスリーは震えていた。

恐ろしいのではない。男をこの手で殺せることが嬉しく、手とともに声が震えていたのだ。パパティーノは男の視線に気づいたようだ。胸糞悪そうに舌打ちすると「私をこんなところに呼んだのはお

前か！」と襲いかかる剣歯虎の喉元に剣を突き刺し、血泡を吹く、瀕死の剣歯虎を剣を抜くとともに蹴り飛ばした。

剣歯虎の亡骸を間に挟んで、パパティーノとボブスリーは睨み合いは続く。空気は張りつめている。

「きさまをこの手で殺れることを神に感謝する」

「それはお互い願ってもないことだ」

ボブスリーは唸り声とともに、パパティーノに襲いかかった。剣と剣とが交差する音、あまりに素早く、激しいぶつかりあいに火花が飛び散った。ボブスリーが一瞬、床に消えたと思えば、パパティーノの影から突然現われ、彼の背後を何度も襲い、男の心臓を貫いたものの、それはパパティーノの影だった。高度な黒魔法と白魔法の戦い、魔法剣にナオミたちは手出しができない。

「ス、スッゲェー」とテルは呟いた。

パパティーノは柱に飾られている鏡のなかに逃げこんでは、ボブスリーの背後の鏡から鋭い突きとともに現われるものだから、ボブスリーの身体は傷だらけだ。一瞬、鏡の中のパパティーノと目が合い、互いに剣を突き刺しあった。鏡からも血がピュッーと鮮やかな赤い華が咲いた。

ボブスリーもガクッと跪いた。

「イヴの名のもとにお前を浄化する」

男が「光の騎士、守護聖人イヴの近衛」と剣を床に突きさせば、鏡の前に幾人もの光に包まれた騎士、いや光の馬に跨り、光の鎧、光の盾、光の剣、あらゆる光の寵愛を受けたと表現すべき、光の騎士が現れ、鏡に出入りするパパティーノを追いかける。これはかなわんと鏡からでてきた男を、一斉に十数人もの光の騎士が襲いかかった。

「汚れた魂もろとも、この世から消え失せるがいい！」

「フンッ、ボブスリーごときが小賢しい」
パパティーノも負けてはいない。剣を大きく振りあげ、「大いになる闇、冥府の神ハデスの一呼吸」との呟きとともに、虚空に巨大な口が現れ、光の騎士たちを深呼吸ともに闇の中に吸いこんだ。邪悪な空気のよどみが息苦しい。男はまた鏡のなかに姿を消した。

一進一退、ボブスリーは追撃の手をゆるめない。
「光の震動、守護聖人イヴの破壊」と剣を振れば、剣から光の衝撃波が円を描くように祭壇の間に広がった。瞬間、バンバンッ、バーンッと魔法の鏡が勢いよく割れ、天井絵まで破片が飛んだ。小窓を飾っていた彩色硝子（ステンドガラス）はいわずと木端微塵だ。
「どこだ？」
あの男の姿が見当たらない。
魔法の鏡が割れ、逃げ場を失ったはずのパパティーノの姿が見当たらない。ボブスリーは男の気配を感じるため、目をつぶり、耳を澄ませた。

「後ろよ！」
ナオミの言葉がボブスリーを救った。

ボブスリーの背後に密かに忍び寄っていた、パパティーノが振り上げた大剣はドガッと床に沈んだ。両者とも一歩も譲らない、激しい戦闘だ。パパティーノの猛攻にボブスリーは勢いよく床に剣を突き刺し、床板を盾にするも、男は一振りでそれを薙ぎ払う。諦めなければ、必ず攻勢のチャンスはある。
パパティーノの足がズボッと床にはまった、ほんの一瞬だった。男はそれを見逃さなかった。剣を床に突き刺して、最期の力を振り絞り、解き放った。
「光の環、守護聖人イヴの拘束！」

ボブスリーの剣の柄が鈍く光ったと同時、剣は眩いばかりの光りに包まれ、祭壇の間を輝かせた。気がつけばパパティーノは光の環のなかにいた。そこから男は一歩も動けないようだ。男が顔をあげた瞬間、喉元にはボブスリーの剣があった。

「フンッ、くたばりぞこないに殺されるとは…」

「？？？？正義に貫かれて死ね」

サンチョ・ボブスリーは剣を大きく振りあげ、そして勢いよく振り落とした。ドサッ、とその場に倒れたのはパパティーノの身代わりの骸骨剣士だった。

？？？？じゃあ、パパティーノはどこに？

「後ろだ、己の脇の甘さを痛感して死ぬがいい！」とパパティーノもボブスリーの影からぬっと現れ、剣を大きく振りあげた。

剣が勢いよく振り落とされ、ボブスリーは「これまでか」と静かに瞳を閉じた。一秒、二秒と時間がたつともに、耳に届くのはカチカチッという硬い金属の音。一瞬、何が起こったのか分からない様子のボブスリーに、パパティーノが「私の邪魔をするな」と声を荒げた。

「この人はお前なんかに殺させない！　私が守ってみせる！」

ナオミの瞳に正義の炎が宿る。

「失せろ、目障りだ」

パパティーノは自分の剣を受け止めている、ナオミを大きく蹴り飛ばした。宙に浮いたナオミは祭壇にガラガラッーと勢いよく転げ落ちた。落ちたはずみでボキッと嫌な音がしたから、たぶんあばらの二、三本は折れたと思っていいだろう。

パパティーノの右腕にはジョジョが喰らいついている。男はジョジョをうっとしいそうに振り払い、「死ね！」ともう一度、剣を振りあげた瞬間だった。突然、空に炎の魔法陣が現れ、真っ赤な赤黒

の炎が濁流のごとく、うねりでた。
誰かが、そう誰かが地獄の業火を召還したのだ。
祭壇の間は瞬く間に炎に包まれた。豪々しく燃える炎をみて、パパティーノは「ここは退いたほうがよさそうだ。命拾いしたな」とボブスリーに目をやると、男は祭壇に飾ってあった鏡のなかへ姿を消した。どうやら割れずに残った魔法の鏡とみてよさそうだ。
誰が地獄の炎を召還したのかは分からない。でもおかげで自分たちは命拾いした。

「…安心するのはまだ早い…」
サンチョ・ボブスリーのいうとおりだ。

炎には地獄の使者の顔がある。これは『豆知識及び雑学』のサー・エドモンドのところで学んだ、きっと炎の神イフリートの魔法に違いない。炎神は呻き声をあげ、ナオミたちに呑み込もうと大きな口を開けて襲いかかってきた。
「海と泉の神ネプチューン、怒りの炎からわが友を守れ」
凛とした男の声だ。その声が呪文を唱え終わるや否や、立派なあご髭を生やした海と泉の神ネプチューンが現われた。海神は右手に長い槍、左手に大きな盾、長髪の半魚人の姿をしている。水の神は男の声に従って、ナオミたちの盾となり、壁となった。
本当に間一髪だった。炎と水が激しくぶつかり合い、祭壇の間は蒸発によって蒸気が立ちこめた。濃い蒸気のなか、誰かがこちらに走ってくるのがわかった。

「アグリさんが今のうちに外に逃げろって！」
声の主はコクリコ・サクラダだ。

凛とした男の声はきっとエイブラハム・アグリに違いない。ナオミは蒸気にうっすらとぼやける、アグリの背中に目をやりつつも、

急いで悪魔教会の外にでた。
やはりボブスリーの姿は見当たらない。ジョジョは「いつもどおりじゃん」と屈託ない。
ココはナオミたちがパパティーノと交戦しているとき、アグリによってアグリッパとともに助けられた???と逃げるなか説明してくれた。テルは「自分たちは囮だったのかよ」とぼやいた。

第４２話　アグリッパ悪魔教会　【３】

第４２話

ナオミたちが脱出してまもなく、炎に包まれたアグリッパ悪魔教会は大きな音とともに崩れ落ちた。何かが焦げ付いたにおいに鼻がもげそうだ。その先には気を失ったパパティーノ兄妹、ハレルヤたちアグリッパの姿が目にはいった。

アグリさんが！」

「大丈夫、あの人はエイブラハム・アグリなんだから！」

ココはアグリなら大丈夫だと自信に溢れていた。案の定、ピリリリーッとココの制服のなかの電話石（モバイルビー）が喧しく鳴った。電話の声はエイブラハム・アグリだ。噂の男はココの身を案じつつも、ナオミに代わってくれと嘆願した。

「やあ、ナオミ・ニト。元気そうで何よりだ」

四ヶ月間、探していた男との声にナオミは声が震えた。

でもこの声、聞き覚えがある？？？？えっとどこだろう？　いまいち思いだせない。

「初めましてはいわないよ、君とは何度も会ってるからね」

やはりそうだ。彼とはどこかで出会っている。顔と名前が一致しないだけだ。

「二重の罠？」

ナオミはアグリの言葉を繰り返した。

「ああ、そうだ。ココがアグリッパに捕まったことは事実だ。今夜、白馬の騎士同盟が彼女を救出しようと動いたのを逆手にとって、悪魔教会に誰かが罠を仕掛けたんだよ。わざわざ骸骨剣士と剣歯虎を

教会のなかに召還してね」

骸骨剣士はココを救出しにきたナオミたちを殺すため、剣歯虎はアグリッパたちを助けるためにやってきた、パパティーノを殺すための殺し屋が放った刺客だという。その事実にナオミは驚愕した。ついに仲間にまで危害が及んだのだから。

ロロは何とかその場にいてくれたボブスリーのおかげで、命を取り留めたものの、今度は誰が彼と同じような運命になるかわからない。自分を一人を狙うのならまだしも、関係ない仲間を狙われるのは合点がいかない。

ナオミはふつふつと込み上げてくる怒りに拳を固めた。

「でも二重の罠ってどういうこと？」

「パパティーノもアグリッパを人質にとられて、殺し屋に呼び出されていたんだ」

なるほどそういうことか。アグリの推理はこうだ。

殺し屋は自分たちがココを助けるために、骸骨剣士と剣歯虎と戦って連中に殺されることを画策した。仮に骸骨剣士と剣歯虎との戦いにナオミたちが勝利しても、そこには人質をとられ、悪魔教会にやってきたパパティーノがいる。当然、彼も骸骨剣士と剣歯虎と激戦を繰り広げてきた。

祭壇の間で対面したナオミたちとパパティーノは、お互いにいきりたっているわけだ。当然、罠とは知らず、お互いに殺し合うことになる。もちろん最期はどちらかが生き残る。生き残った者も含めて、証拠は地獄の業火で焼き尽くす予定だった。

これぞ完全犯罪？？？とこの緻密な戦略にアグリは「稀にみる戦略家だよ」と舌を巻いていた。自分たちも罠にかけられ、パパティーノも罠にかけられた二重の罠。

敵はよほどの知能犯、暗殺に長けた人間とみていいだろう。

「殺し屋の目的は君とパパティーノだと思う。だから今夜、君とパパティーノとの殺し合いを画策したんだよ。どちらが死んでもいいようにね。でもボルゴウッドの森の件から推測すれば、殺し屋の優先順位は君だといえる」

そんなことは分かっているが、あのエンガチョの伝言だけは伝えなければ。

「パパティーノもさすがにエンガチョを殺し屋だとは、思っていないと思うよ。僕はね、ある人からこれらの事件を解決するように頼まれていてね。もちろん泥棒猫の事件はエンガチョが犯人のわけがない」

ナオミはアグリの言葉を聞いて、ホッと胸を撫でおろした。エンガチョに頼まれていたことは、すでに毎日ブルトン新聞社の記者が知るところらしい。

えっ！　誰？

人の気配？　いや殺気を感じたナオミは剣に手をやり、教会近くの林に振りかえってみたものの、気のせいだろうか。やはり誰もいない。ただ空気のよどみを感じた。そんな彼女にジョジョは墓場の森にいたヤツだよ、とさりげなくぼやいた。パパティーノだろうか、いや違う。パパティーノは少なくとも銀髪ではない。

ナオミは確かに林の中で銀髪らしき女の人影を目撃した。そして銀髪といえば、少女の脳裏にすぐ思い浮かぶのはあの女の人だ。旅立ちの町ヴァンヌで出会い、引継ぎ式の魔法の鏡のなかでも出会った、羽衣を身に纏うかのように不思議な雰囲気をまとった、あの女の人だ。名前は知らない。

今となってはあの女の人の言葉が真実味をもって、彼女の胸に迫ってくる。

確かこんな言葉だった気がしないでもない。
「一言だけいっておきます。私は一切手加減はしません。覚えておきなさい」

第４話

ロレンツォは興奮を静めるかのようにいった。
「議論の続きは秘密基地で祝おうじゃないか。夜警がくるまえに僕たちは姿を消したほうがいい。それに墓場守に見つかったら、それこそ大ピンチだからな」
それには皆、コクッと頷いた。
「よし、ひとまずここで解散だ」とロレンツォ。
「あとをつけられる可能性があるから、まずは散らばるんだ！」
ロレンツォの言葉に従うかのように、皆はあっちこっちの方向に散らばった。なかには時間が時間なので、そのまま帰ってしまう者もいた。

ナオミはロロを呼びとめ、ライアンの言伝を伝えた。
「俺はかまいやしない。どっちみち広場で時間を潰すつもりだったからな」
夜中のマルボロはぐでんぐでんに酔っているから？？？帰ったら帰ったで殴られるだけ。本当に親方のクズ、人間のクズだ。クズの集まったのが悪党というものだ。
「アニタ・ジブリ・パリには、ホーエンハイム先生っていうお医者様がいるの。ロロの病気も先生ならきっと治してくれるわ」
「…そうだといいんだけど…」ロロは小さな声で囁いた。

気がつけばいつの間にか、あばらの痛みがなくなっている。
何でだろう？　不思議なことがるもんだ。
（ナオミのお母さんの首飾りのおかげだよ）
ジョジョは気になることをいう。そうかもしれない。
きっとロロと同じ魔法効果があるんだろう。母の形見の、この銀のロザリオは聖金属（オリハルコン）の回復力を秘めたものに違いない。ボルゴウッドの森のフェンリルで負った傷もそれなら理解できる。

今は午前三時四十五分だ、二人の姿をみるとアリサ夫人は「仲がよくていいわね」と眠たそうに微笑み、ライアンの部屋へと案内してくれた。必死で隠そうとしているが、アリサの瞳は大粒の涙が光っていた。
「ついさっきライアンが体調を崩してね。ええ、もう大丈夫。でも今はホーエンハイム先生が往診に来てくださっているから、静かにしてちょうだいね」というとドアをノックした。
「息をはいてごらん」
ホーエンハイム先生は、ライアンの胸に耳をあてていたところだった。ふーっとライアンは大きく深呼吸をした。
「先生、背中のアイツは今、どうしていますか？」
「かんばしくない、相変わらず独り言を呟いているよ」
ホーエンハイム先生は唸った。
「薬をかかさずに飲めば、じきによくなるだろう」
先生はライアンの頭をなでた。
ライアンは微笑み、ナオミたちに気がついたようだ。ナオミはロロを前に押し出して「この子がロロよ」と少年に紹介した。ホーエンハイム先生はロロを見て、とても心配そうな顔つきになった。
「引き継ぎ式のとき握手したの、覚えている？　僕も卒団予定だったんだけど、ほらっ、病気だから卒団保留、中見習いのままになっちゃったんだ」

中見習い、騎士メダル三〇〇枚は貯まっているものの、領主判断で騎士推薦が見送られた見習いのことだ。いうならば准騎士という立場にある。

ライアンはロロに握手を求めた。

「でもその…君たち、髪の毛を燃やしたにおいがするよ、どうしたんだい？」

ナオミとロロは顔を見合わせると、クスクス笑いだした。

三人はわいわいといろんな話をした。とくにライアンは「マルボロ親方には気をつけるんだ、あの人は悪魔教徒だからね。悪魔崇拝の虜になっているんだ。絶対にアイツに心を許しちゃだめだよ」とロロに忠告した。ロロは苦笑いのなかコクッと頷いた。会話が弾むにつれて、ゴホゴホッとロロの堰が止まらなくなり、すかさずホーエンハイム先生は咳止めの薬を彼に飲ませた。

「先生、あのロロは病気なんです。時間があれば、診てもらえないでしょうか。お願いします！」

ナオミはミスリル金貨一枚を差しだしたが、ホーエンハイムは何もいわず彼女に金貨をそのまま差し返した。

「気持ちだけいただくよ、どれどれ？？？？」

ホーエンハイムはロロの背中に聴診器を当てようと、ロロの服をゆっくりとめくったものの、数秒後にはもぐりのホーエンハイムは顔色を青ざめてしまった。何がどうなったのかはわからない。ただ医者は「…これは人面瘡じゃないか…」と静かに呟けば、ロロも静かに頷き、ナオミには黙っていてという仕草をみせた。

一瞬、ホーエンハイム先生は戸惑ったが、少年の意志を尊重したようだ。

その結果、ロロの病気は疲れからくるストレスと医者は診断した。

さすがもぐりなだけある。
「ふーう、なんだ。ただの疲れなの」ナオミの安堵の声。
「ロロ。君、ちょっと疲れているんだよ」
ライアンは頬を赤らめて、ぜいぜいと苦しそうにいった。
「そういう君もだよ、ライアン・ティソ。今日はここまでだ」
とホーエンハイム先生はどことなくぎこちない。
「そうだね、また遊びにきなよ」
「ああ」とロロはライアンに手をふり、ナオミは彼を表通りまで見送った。ライアンの部屋を通り過ぎるとき、ホーエンハイム先生と少年のボソボソ会話が聞こえてきた。

会話はどうやらロロのことらしい。ナオミは思わずピタッと立ち止まり、耳をそっとドアに澄ました。
「盗み聞きは泥棒の始まりだぞ！」とジョジョ。
「へえ、そーですか」
ナオミはその言葉が嫌いとばかりに、ジョジョの言葉をシャットアウトしている。
「…ナオミに教えないなんて、そんなバカなことがあるもんか」
ライアンの嘆きにも似た声が聞こえてくる。
「ロロの背中には『人面瘡』がとりついていた。僕はあの子の背中を診たとき、すぐにわかったよ。おそらくあの子は君より長生きはできないだろう、とね。あの病気の正式名はライアン、君も知っているはずだ」
「錬金術の両性具有（ヘルマフロ）の怪物病（モンストゥルム・ディトゥス）…」
ホーエンハイム医師によるところ、人面瘡は喋る皮膚腫瘍だ。

自分の意志とは関係なく、ペラペラと悪魔教の死の呪文を呟く。人面瘡の呟きに比べたら嘆きの壁のぼやきなど、ただの愚痴にすぎない。一説によれば人面瘡は、両性具有の怪物との学説がある。人面瘡の声は死の声、それがカウントダウンを始めれば、もうその者

は助かる見込みはないとか。
「あの子は両性具有の怪物が宿っている。君と同じくマルボロの悪魔崇拝、人体実験の餌食にでもなったんだろう。呪いから開放されることはただ一つ、死ぬことだけだよ」
悪魔祓いでも追い祓えない悪魔、それが病魔だ。
「あの子は僕よりも元気だったよ」ライアンがやり返した。
それはきっと彼がいつも身につけている、治癒の首飾りのおかげかもしれない。

「ただの痩せ我慢だよ。あのロベルト・パパティーノにいわせれば、呪いの解放には『アルカヘスト』というエリクサが必要なんだ。しかしそれはどうやって製造されるのかわからない」
張りつめた沈黙が流れ、ライアンがゴホゴホッと堰きこんだ。
「ライアン、君は休まなくちゃいけない」
ナオミは椅子が動いた音をきき、できるだけ音をたてずに見習部屋にもどった。数秒後、ホーエンハイム先生がアリサ夫人に見送られていくのが窓から見えた。ホーエンハイム先生の言葉にナオミはものすごい衝撃（ショック）を受けていた。

「…ロロがライアンより長生きできないなんて、そんなの嘘よ…」
瞳をつぶれば、ロロの青白い顔と頬のこけた顔がひっきりなしに浮かんでくる。
そういえば彼はライアンと同じようなゴホゴホッという咳をしていた。きっと働きすぎなのだ、一週間ほどゆっくり休めばすぐによくなるはずだ。
いやおぞましい骸骨剣士に胸を貫かれても、少年は並々ならぬ生命力で生き返ったではないか。あのロロが病気で死ぬなんて考えられない。例え少年がそういう運命にあろうとも、アルカヘストというエリクサの作り方さえ発見できればライアンやロロ、そして黒ヤギになったダ・カーポ先生も？？？？すべてが万事うまくいくのだ。

もしかしてエイブラハム・アグリなら、あれほどの推理力なのだから、何か知っているのかもしれない？？？そう思うと少女の気持ちは幾分か和らいだ。

第1話　聖なるクローズ家の人々【1】

第1話

今はピックル・タナカ先生の悪魔祓い、召喚術『死者との会話』の講義中だ。

公衆電話に魔界の通貨一枚を入れて、自分の電話石にかける。次に自分で自分の電話石に「〇〇〇、〇〇〇。おいでください」と呼びだしたい人の名前を二回いい、さらに「〇〇〇、〇〇〇。いらっしゃったらお返事ください」といって、電話を切る。このときに忘れず自分の電話石の電源も切る。それから一時間以内に電源を切った電話石に着信音がなるそうだ。

呼びだした人からだそうだ。その人は「今どこどこのどこにいるよ」といって、その場所がだんだんと近づいてくる。そしてやがて自分のところにやってきて、最後に「今、君の後ろにいるよ…」といってくるから、そのときひとつだけ質問をするとその人が知っている過去のことを答えてくれるそうだ。

「これは犯罪捜査、とりわけ殺人事件に使われている黒魔術です。ですが一つだけ注意しなければならないことがあります。というのは後ろを振り返ったり、とっさに質問できなかったら冥界に連れていかれますから」

この授業でナオミの騎士メダルは二一〇枚になった。テルは一五二枚、ロロは二三五枚とキング・アーサー地区で一番だ。アグリッパ教会での出来事は昨日のことだ。ナオミはホーエンハイム医師の言葉もあって、ロロをじろじろと見た。

「なんだよ、ナオミ。俺の顔に何かついているのか？」

「…え、いや、その。ごめん、何でもない…」

少年に謝りつつもロロはやっぱり元気だ、ライアンよりも元気じゃないか、すぐに死ぬなんてありえない。きっとホーエンハイム先生の誤診なんだとナオミは思う。テルは「鼻くそがついているぜ」とふざけたので、脇腹にロロの拳をもろにくらっていた。

「教会の火事、俺たちの仕業になっているらしいぜ。パパティーノがぼやいてる」

ロロが持ってきた毎日ブルトン新聞には、確かにそう書いてある。発言者はJ・パパティーノだ。今や名実ともにアッパータウンの伯爵だ。半年前と違って伯爵が白といえば、この町では黒が白になる。パパティーノもあのとき一緒に居合わせたにも関わらず、男は火事は放火で、自分はこの目で確かに見た、犯人は町の浮浪児たちの仕業だと断言していた。

「あのとき焼け死んでいたら、よかったのにな」とテルのぼやきだ。

テルとロロとはそこで別れ、ナオミは美術教室にいってみた。キャサリン・ハイネのところでは、花瓶に活けられた向日葵の水彩画を描いた。どうやら絵を習いにきているのは騎士候補生たちだけではないようだ。

町の若い女性や小さな子ども、老人までもがいた。アトリエのなかの本棚には画集がずらりと並び、雑誌コーナーのところでは、少年たちが週間漫画雑誌を楽しそうに読んでいた。

女流画家キャサリン・ハイネは右手のくすり指に高そうな指輪をはめていた。

「ああ、これ。婚約指輪よ、うふふふ」さらに「私ね、結婚しようっていわれたとき、彼に思いっきり抱きついちゃったのよ。それからお祝いのブーケをもらったわ。それってあなたのおかげなんですってね」と少女はハイネが嬉しそうな姿をみると、なぜか自分も嬉しくなってしまった。

「…ねえ、これなに？」
ジョジョはナオミの水彩画を見て、大きく唸った。
「『なに』って、向日葵の絵に決まっているじゃないの！　変なこというわねえ…」
「僕、てっきりの道化師（ピエロ）の絵だと思っちゃった」
「まあ、失礼ね」
ナオミはぷりぷりしていった。
「うふふふ。絵はね、うまいとか下手じゃないの。お花と同じで心が大切なの。悲しい顔の人が自分の絵をみて、笑顔になるのって素敵でしょ？　それに本物そっくりに描きたいのなら、写真を撮ればいいんじゃないかしらね」
ハイネのいうとおりだとナオミは思った。

彼女のアトリエには「絵画王ベリー・グッドウィル／騎士切手展」というポスターが貼られていた。開催日は今年の一月一日から、なんと期限は今日までだ。
「この人は超有名ですから、すぐに入場券が完売になるの。結局はみれずじまいでしたわ、同じ画家としては超残念ですわね」
ハイネはとても残念そうにため息をついた。

彼女の可愛らしいため息にナオミは、ロベルト・パパティーノという錬金術師から、騎士切手展の入場券を二枚ほどもらったのをふと思いだした。
「ハイネさん。私ね、その展覧会の入場券二枚、持っているの。もしよかったら、今からでも見にいきませんか」との言葉にハイネは頬を赤らめた。
「二枚ってダックスフンドのぶんでしょ？」
「やだあ、ハイネさんったら。ジョジョのことなら大丈夫。この子、ぬいぐるみのふりをするのがとっても上手なの、ピシッと動かなくなるんです」との言葉にジョジョは「あれはとても苦しんだぞ、息

もなかなかできないし」とひそかに呟いた。

第2話　聖なるクローズ家の人々【2】

第2話

カリヨンの鐘が午後一時を知らせる。

芸術大通りにある、アッパータウン市立美術館はとても素敵な建物だった。赤煉瓦に蔦の葉がびっしりへばりついて、屋根には風見鶏が風にあおられ、クルクルとまわっていた。この美術館の隣は博物館、そして図書館があった。美術館広場には一人の少女の彫刻があった。

「ねえ、ジョジョ？」

ナオミは女の子像を指差していった。

「あの彫刻の女の子、どことなくハナコに似ていない？」

「本当だ」さらに「ヒキガエル顔だ」とジョジョはボソボソいった。

図書館と同じように美術館にも「盲導犬以外立ち入り禁止」という貼り紙があった。

美術館の受け付けの女の人は、ジョジョをしばらくじっと見つめていたので、ジョジョはピシッと一分ほど緊張していた。ときどき女の人がジョジョの髭をさわったので、ナオミは冷やひやした。

「いいぬいぐるみをお持ちですわね、ごゆっくりどうぞ」

受け付けの女の人は納得した様子だ。

美術館は長細い廊下のようだ。最終日とあって、駆けこみ客で廊下は人という人でごったがえしていた。ナオミたちは人酔いしながら、一つひとつ絵画を鑑賞して歩いた。小さいのやら、大きいのやら、いろんな騎士の絵があった。そのほかにも特別展として風景や人物の絵もあった。美術館は展覧会最後の日とあって、画伯の絵をもう一度見ようと人という人でにぎわっていた。

「それであの方は見つけられました？」
ナオミの背後からこんな聞こえてくる。

でもこの声、この冷血と厳しさを交えた男前の女の声、どこかで聞き覚えがある。

ナオミは恐るおそる顔をあげてみたが、その女の人は自分が思っていた人とは違い、どこかの貴婦人のようだ。腰まであるカールがかかった金髪、目には青いアイシャドー、そのつぶらな瞳を大きく印象付けているマスカラ、唇はピンクの淡い口紅が男ならず、女でさえ美しいと思わせる。

服装もものすごくプリティだ、今どきのギャルを思わせるほど。

彼女と話をしているのは教会楽士のエミール・エマニエルだ。元師伯にして、ブルトン公爵の元宮廷顧問、いや親方の言葉を借りるならば黒伯爵Ｌ卿だ。二人は美術館のにぎわいを利用して内密な会話をしていた。

「まわりは敵だらけじゃ、でるに出れんのじゃろう」

「ですがあの方は、この町のどこにいることは間違いありません」

あの方？　あの方って誰だ？

「きっと、あの方はロアゾンが壊滅したと思っているのでしょう」

「そうかもしれんな。わしは引き続き探索に当ろう。そなたは革命的警戒心をもって事にあたれ。あの方をお護りし、公爵の座までお迎えすることがロアゾンの責務。それにまだ大人しくしており、疑われては身も蓋もなかろうに」

Ｌ卿は警戒心が足りぬ、とぼやく。

「ガルニエから電話がありましたわ、パパティーノの様子が何だかおかしい、胸騒ぎがしてやまないと。案の定、ガルニエの思ったとおりのことでしたわ」

アルフレッド・ガルニエが「愛しのエリー」と電話石で会話をしていたのを、ナオミはにわかに思い出していた。これは明らかに陰謀めいた話だ。

あの方をお護りし、公爵の座までお迎えする？　あの方ってもしかして、いやそんなわけがない。公爵の玉座を狙った、あの迷いの森の辺境伯モンテカルロは九年前、仲間の裏切りにあって死んだのだ。生きているはずがない。

「幸いなことにエルフの歴代君主が迷いの森に墓標をたててくれたおかげで、死んだことになっておるが、いつまでそれが通用するかはわからん」

そ、そんな！　そんな馬鹿なことがあるもんか！

ナオミのその確かなる思いは、黒伯爵Ｌ卿のこの言葉で、ものの見事に裏切られた。ジョジョは「どうしよう！　僕、心臓がばくばくしてきたぞ」と唸る。

「現にわしらは宮中伯という大いなる後ろ盾を失った。これでは表立った抵抗運動（レジスタンス）はできん。我々がグッドウィルの展覧会で情報交換することも、もはや難しくなろう」

えっ、トモロヲ・ブドリも彼らに絡んでいるのか？

黒伯爵たちの陰謀めいた会話？？？？。

トモロヲ・ブドリは陰謀に加担したせいで、伯爵の座をパパティーノに奪われたのだろうか。それならパパティーノは未然に謀反を封じこめた、ということになる。もしかして宮中で最近起こったという、ブルトン公爵暗殺未遂の犯人は彼らかもしれない。

もはやナオミの頭は混乱の極みに達しつつある。

「お祖父様、私はこれで失礼致しますわ」

エリーが立ち去ろうとすれば、背中越しにL卿は声をかけた。
「いつになればお前は軍服を着なくなるのだね？」
貴婦人は痛いところをつかれたらしい。
「この世から…」ピタッ、エリーは両足をそろえた。
彼女は悲しそうに瞳を床に落としつつも、その瞳は険しい。
「この世から愛する人を奪った戦争がなくなったときです。それまで私は戦い続けます」
会話を遮るかのように見覚えのある男前がコツッ、コツッーと靴音をたてて、二人に近寄ってきた。「君のことをナオと呼ぶヤツだよ」とジョジョが、男前はアルフレッド・ガルニエだ、と小声で知らせてくれた。
「サラ・レッドブル少将、お迎えに参りました」
「うむ、ご苦労。引き続きナヴァグリオまでの護衛、頼むぞ」

絶世の美女があの男勝りのサラ・レッドブルだとわかり、度肝を抜かれた。嫌な汗が流れるとともに後ろを振り返れば、もはやそこは誰もいない。
変装してまで黒伯爵に会いにくるなんて、どんな事情かは知らないがよほどのことと考えてよさそうだ。それにL卿ことエミール・エマニエルが彼女の祖父だということにも驚いたが、何よりもガルニエが黒伯爵とつながっていることも驚きの事実だ。愛しのエリー、きっとこれは彼女と情報交換をするときの決まり文句なのだろう。

第3話　聖なるクローズ家の人々【3】

第3話

「…ト、ニトさんってば、聞いてます？」
ハイネの言葉にナオミははっと我に返った。
「は・い！」
ナオミはガチガチの返事をした。
「ねえ、ニトさん。この絵は本当に素晴らしいわね」
彼女はときどき絵のまえでうーんと考えこんだり、「この絵は素晴らしいわ」とか「この絵は楽しいね」とか呟いていた。ときどき絵の筆さばきをじっと見ては、羊皮紙のメモにすらすらと何かを描いていた。そしてある絵の前にくるとぱたりと足をとめて、その絵に魅入ってしまった。

「これは大傑作だわ、これは絵というか愛情（ラブ）ですわね」
「わぁあ、素敵！」ナオミも感嘆の声をあげた。
ナオミが感嘆したその絵は、女の人が頬づえをついて、本を読んでいる絵だ。絵の題名は「愛しのサンタマリア」とあった。するとその隣の紳士二人が何やら、この絵について議論していた。ナオミはそっと耳を澄ましてみた。

「この絵の女性が画伯の恋人か、どうかは僕の横にいる女の子に聞きたまえ。彼女はカンペールの出身だからね。ちなみにぬいぐるみのふりをしているダックスフンド、あれは本物だよ」と男はナオミに笑いかけた。
ジョジョのぬいぐるみのふりは、この男の前では通用しないようだ。
そういえばこの男、どこかで見たことがあると思えば、あの毎日

ブルトン新聞の記者ではないか。自分をナオキとアリスの娘だといったあの人だ。彼とは町で言葉を交わしたことはないものの、何度か見かけたことがある。

ナオミは男たちがとても聞きたそうな顔をしていたので、テルからさりげなく聞かされた、この絵のモデルとなったサンタマリアの生い立ちを話してあげた。

サンタマリアの母とは彼女が幼いときに死別し、父は自分の夢を叶えるがため彼女を母方の父母に預け、カンペールの村をでていった？？？悲しい物語である。だけど物語には続きがあった。男がでていったもまもなく、彼女の養育費としてミスリル金貨三十枚が匿名で送られてきた。今もそれは続いてるとか。

毎日ブルトン新聞の記者は、この絵の説明文を小さな声で読んだ。この女性はカンペールの酒場の看板娘、純粋な心と優しさにひかれて、私は彼女をモデルにしたとある。しかもこの絵の制作には一年もかかっている。隣には習作が何度も描かれていた。若い女性を描いた画伯の絵はこの絵をふくめて二枚ある、大変に貴重なものだ。

そのうち一つはこの『愛しのサンタマリア』、もうひとつは入場口近くにあった女性の絵、『わが妻サンタモニカ』という名前だ。双方は題名が非常に似ているし、絵の構図もよく似ている。とくに注目すべきところは、この絵に描かれている本だと、男は力説した。サンタマリアが読んでいる本の題名は「…愛しのわが妻サンタモニカへ、君の夫と娘より…」だ。

「夫とは画伯のこと、娘とは描かれている彼女のことだよ。この作品はね、愛娘の成長を描いた画伯の妻サンタモニカへのオマージュ作品だと僕は思う」

ナオミの話から推測してみれば、サンタマリアは画伯が父親だとは知らないが、画伯は彼女が娘だと分かっている。名乗りたいが名乗れない、後ろめたさがあるとまで男はいいはる。一体全体、この

男は何者なんだろうか。
「君は知っているだろう？　僕の名前ぐらい」
誰だっけ？　えーっといまいち思い出せないのだが…。
「昨夜、電話で喋ったじゃないか」
え！　もしかして、もしかして、もしかして？？？？。
「そう、僕はエイブラハム・アグリだよ。ナオミ・ニト」

彼の名前を聞いて、ナオミはにわかに喜んだ。
彼が噂の名探偵として名高いエイブラハム・アグリという推理記者なのだ。ずっと探していたのに、こんな近くにいたのか。ライアンの口癖を真似すれば迂闊だった、まさにそのとおりだ。彼と連れ立っている男は「君の推理力を疑ってしまって失礼なことをした」と頭の帽子をとった。

「ところで最近、町を徘徊する奇妙な男の話は聞いているか？」
「アレはドッペルゲンガーだ。何も危害は加えないから大丈夫だ」

ドッペルゲンガー？？？？ってなんだ？

すると「おお、ナオミ。いいところで会った」と自分の名前を呼ぶ声がした。
声の方向に振りむけば、ティソ親方が花瓶に活けられた花を持って歩いていた。隣には四十歳ほどの中年の紳士が一緒にいる。
「こちらのお客さんから花の出前を頼まれてね。数十年前に勘当された画伯のお父上が、この町の病院に入院されているそうだ。花を贈りたいらしい、届けてくれるか？」
男は帽子をそっととり、にこやかに微笑んだ。笑顔が印象的だ。
「ベリー・グッドウィル画伯さんですよね？」
ハイネは高鳴る胸をおさえていった。
「いかにも」と画伯。

すかさずキャサリン・ハイネは「尊敬していますわ」と彼に握手を求めた。

それをみていた紳士は「ヒュー」と口笛を吹き、エイブラハム・アグリ本人も自分の推理が命中したので、とても満足そうだ。そしてティソ親方がナオミはカンペール出身だといえば、グッドウィルは「あの村には、生き別れた僕の愛する娘がいるんだよ」と寂しげにいった。本当は生き別れたんじゃなくて、捨てたとの間違いかもしれない。

「娘さんってサンタマリアさんでしょ？」

ナオミの言葉にグッドウィルはとても驚いた様子だった。

「なるほど絵を見たんだね、でも娘には内緒だよ」

「どうして？」

「娘はたぶん僕を怨んでいるからね。それにあの子はもうすぐ結婚するんだ、僕にはあの子の花嫁姿をみる資格はない。それに花婿にどういえばいいだね。僕は二十年間も、愛娘をほったらかしにしていた、バカ親だよ」とどこか悲しげなグッドウィル。

「ううん、そんなことないよ。怨んでいるどころか、たぶんグッドウィルさんに会いたがっていると思うの」

死んだと聞かされている父ナオキ、もし彼が生きているのなら今すぐに会いたい。そして一番最初にすることは父親の胸に抱きつくことだろう、ナオミは心の底からそう思った。

そのときだらけていたジョジョがいきなり、ピシッとぬいぐるみのふりをした。受付の女の人が大きな花束を持って、とんがって歩いてきたからだ。

「先ほどティソ親方のお兄様ペーター・ティソさんが来られまして『カンペールの女の人から、電話注文で頼まれて、ベリー・グッドウィルさんっていう人に花を届けにきたんだ』というので、お花を預かって参りましたの」と女の人が持ってきた花束は、それは見事

な黄色いバラの花束だ。

そういうと女の人は、グッドウィルに黄色いバラの花束を手渡した。町のはずれのバラ畑から朝一番でとってきたものらしく、とてもいい香りがする。黄色い花束のなかには一枚のメッセージカードがはいっていた。

「？？？？いったい誰だろう？」とベリー・グッドウィル。

「きっと娘さんからですよ。今日は六月の第三日曜日、父の日ですからね。あなたが勘当された父親に花を贈るように、サンタマリアさんにとっても画伯はこの世でたった一人の父親なんですよ。おそらく娘さんはあなたが父親だということは、すでに感づいているんでしょう。その証拠がこの黄色バラですよ」とアグリは静かにいった。

メッセージカードにはこんなことが書かれていた。

？？？？いずれ母になる娘から祖父になるお父様へ。

「今度、食事にでも誘ってみたらどうですかな？」

エイブラハム・アグリの言葉にベリー・グッドウィルは静かに頷いた。その瞳には涙がうっすらとにじんでいた。それからナオミに振り返ると、自分を勘当した愛する父にも同じ想いを、と彼女に涙声でいった。

第４話　聖なるクローズ家の人々【４】

数分後、ナオミたちは美術館をでて、とぼとぼと歩いていた。なぜか和やかな気持ちなのだ。花言葉というのはまさに魔法みたいだ。離ればなれになっていた人の心をくっつける魔法だ。でも本人を前にして、ナオミはアルカヘストのことを聞くのを忘れてしまい、後悔するのはそれからまもなくだった。

「ねえ、ジョジョ。家族ってああいう感じなのかな？」

ナオミはしょんぼりしていった。

「何をいまさら。僕はナオミの家族じゃないか。それにティソ一家はナオミの家族みたいなもんだろ？」とジョジョはつんとすまして歩いていった。

「そうでした、ごめんなさい」

ティソ親方の説明によれば、画伯の父は風邪をこじらせて、ずっと聖ハレルヤ病院に入院しているそうだ。病室は一七五号室だ。

ジョジョはその名前を聞いたとき、ものすごく嫌そうな顔をしたし、ナオミもハレルヤの顔だけじゃなく、パパティーノ一家の顔も浮かび、せっかくの気分がどこかにすっとんでいった。

「ねえ、誰がその名前つけたのかな？」

「もう誰だっていいじゃない、それより何号室だった？」

「…七五号室、ガラハッド地区子爵クローズ卿だよ」とジョジョ。

聖ハレルヤ病院は教会のような白煉瓦の建物だ。

そこはどこか厳正な感じがした。まるで大きな大学総合病院のようだ。ホーエンハイム先生のように白衣をきた人々、松葉杖をつく若い青年、車椅子の老人など様々だ。薬局らしいところには錬金薬

局という看板がかかげられていることから、なかで粉末を調合している人は錬金術師か何かだろう。
「ナオミ、あのさ。ぬいぐるみのふりは一日一回が限度だよ」
ジョジョの不満そうな声が耳に響く。

「こんにちは、お花をお届けにきました…」
一七五号室、その部屋は生命維持装置が置いてある個室だった。ベッドに横たわっているのは四十歳ぐらいの中年紳士と淑女、美男と美女だ。夫婦なのだろうが、どういう理由で入院しているかわからない。二人とも瞳はうつろ、植物人間っていうヤツだ。女の人も男の人も規則正しい呼吸をしていた。
「ナオミ、部屋間違えている。ここは一五七号室だよ」
ぬいぐるみはぼやく。

部屋間違いであることは、すでに気づいている。
ジョジョは「君の両親に似ている」というが、少し違う。クリスマスの日にボブスリーから贈られた両親の写真を改めて見ても、やはり両親とは顔が違う。
彼らは自分の両親ではない。それに父と母はすでに死んでいる。と突然、ナオミの目からとめどなく涙が流れた。目にでもゴミがはいったのだろうか。

（いきなりどうしたのさ?）と心配そうなジョジョ。

ナオミは自分でもなぜ涙がでてきたのかわからない、と呟く。だが瞳は感情をもつがごとく、その二人を見て涙を流した。それは封印された過去の記憶が心と脳に働きかけたのかもしれない。
「ど、どういうことだ、君らは生きていたのか!」

ドウイウコトダ、キミラハイキテイタノカ!

ナオミはカチンッ、と固まった。
不思議なことが続くように、またあの声が聞こえてきた。男の人のうめき声にも似た、苦悩の声だ。しかしその声は明らかに動揺している。声の主はボブスリーだ。
「あらっ、匿名患者さんのお知り合いかしら?」
通りがかったナースはナオミにいった。
たぶん空耳だと思うが、男の声はナースの声にかき消された。
「匿名患者?」
「この患者さんは植物人間なの。ええ、昏睡状態。体は生きているけど、心がどこかに逝っているのよ、意識が戻るまでずっと眠り続けているの。ほんと可愛そうに…」

なるほど、匿名患者というのだから院内のなかでもごくわずかの人間しか、彼らの名前を知らないとみえる。部屋間違いだとわかると、ナースは本来の部屋一七五号室まで案内してくれた。
目的の部屋にいくまでにナオミはあの患者のことを探った。ナースによれば、彼らは自分がこの病院に勤めるまえから入院しており、身元保証人はトモロヲ・ブドリだとか。

「お姉さんはこの病院に勤めて何年になるの?」
「私は五年と二ヶ月と三日、二時間ちょっとかな」とナース。
では五年前から入院しているのは確かなようだ。
それにしても植物人間のあの二人、なぜか気になる。ジョジョはトモロヲ・ブドリの身内だよ、ともっともらしいことをいうのだが、なぜか腑に落ちない。

第5話　聖なるクローズ家の人々【5】

第5話

一七五号室は個室になっていた。そっとのぞくと白い髪とあご髭のもじゃもじゃのお爺さんが安眠帽子をかぶり、毛布に顔を半分ほどうずめて静かに眠っていた。ナオミはすでに開いている扉をコンコンッと叩いた。

おやっ、お爺さんはぐっすりと眠っているようだ。

「ねえ、どうする？」とジョジョがいえば「起きるまでまっているわ」とベッドの近くの丸椅子に腰かけた。

クローズ爺さんはでっぷりとしたお爺さんだ。

「僕なら叩き起こすか、鼻をかじって起こすけど？」

「バカねえ、そんなことして驚いて死んじゃったらどうするのよ」

花を机に置きながら、ナオミはうわの空でいった。どうやらあの二人のことで頭がいっぱいのようだ。

あれから二時間がすぎた。

こっくりと居眠りをしながらも、老人が起きるのをただひたすら待っていた。ようやく老人が大あくびをして起きたのは、それから三十分後だったのでナオミは、椅子のうえで眠っているところをクローズ爺さんに「これ！」と起こされるはめになった。

「きゃああ！」と思わずナオミは悲鳴をあげ、クローズ爺さんの頬を思いきりぶってしまった。

「痛い！」と老人の声を聞いて、ナオミはすぐに謝った。

クローズ爺はぶたれた頬を摩りながら、「わしを起こしにきて、わしに起こされるとは」と、とても楽しそうだ。

「こりゃ、愉快、愉快！」

クローズ爺さんの小笑いにナオミも微笑んだ。

「それでわしに何か用事かね？」

「あ、あの息子さんからの贈り物をお届けにきたんですけど…」

ナオミはすでに小窓にかざってある、青と白の花瓶に活けられたそれは見事な黄色のバラを指差した。それは夕方の太陽により、きらきらと黄金色に輝き、まるで黄金のバラのように見えた。

「どうりでバラのいい香りがするわけだ。それに今さっきまで家をでていっちまった息子の小さい頃の夢を見たんだ。家族三人で野原で追いかけっこした夢だったんだ。もう過ぎちまった昔なつかしの日々だよ」

ナオミは美術館の素晴らしい出来事を一つひとつ話した。

その間、彼女の頬は真っ赤になっていた。老人は「うん、うん」と頷きながら、ナオミの話を聞くと、髭のなかに沈んでしまいそうな目をゆっくり動かした。

「孫娘がわしらの仲をとりもってくれたんじゃな」

「あ、あの…なぜ息子さんはでていったの？　あっ、ごめんなさい」

クローズ爺さんはかまわんよ、という手をそっとあげた。

老人は二十年、いやもっと昔の話をナオミに聞かせてくれた。

クローズ爺さんとクローズ氏は昔は仲がよかったらしい。だがある日、家業を巡って争いが起きた。クローズ爺さんは先祖代々の家業を継ぐことを望んだが、クローズ氏は爵位を捨ててでも絵描きになることを望んだ。いうまでもなく二人は口論となり、クローズ氏は家をでていった。このときクローズ爺さんは家名を汚すことを恐れて、クローズ氏にその名を使用することを禁じた。こうして絵画王ベリー・グッドウィルという名前が生まれた。

それから数年がすぎた頃、息子のクローズ氏から「父さん、生活が苦しいから仕送りをしてくれないか」という手紙が送られてきたそうだ。その手紙によれば、彼はカンペールで売れない貧乏画家を

やっているとか。

「わしは息子が不憫に思えてな、すぐに息子を連れもどしにいったんだ。だが息子はすでにその村の娘モニカと結婚しておった。彼女のお腹にはマリアが身篭っておった。わしはそんなこととは知らずに息子を連れもどした。マリアを生んだ後、モニカは一年もたたずに死んでしまったんじゃ、もともと病弱な女性でな。

モニカが死んだ事を聞いたせがれは、もちろん激昂した。彼女が死んだのはわしのせいだといって、三日三晩、泣きつきしたあと息子は置き手紙なく失踪した。わしはせめてもの償いとして、孫娘マリアが結婚するまで、ミスリル金貨三十枚を彼女の後見人に、匿名で毎月欠かさず仕送りすることにしたんじゃ。それは今も続いておる。たぶんあの子は自分の父親から仕送りだ、と思っているだろうけどね。また息子の絵も少しづつ売れていくようになった。最初のうちはわしが偽名で購入しておったがね」

何と悲しい物語のことかとナオミは思った。話を聞いているうちにナオミはまた涙が溢れてきた。あとから頬を伝って、なぜか涙がぽろぽろでてくるのだ。止めようにも止まらない悲しみの涙。

「…ご、ごめんなさい、お爺さん…」

ジョジョが一生懸命、彼女の涙を舐めている。

「お嬢ちゃん、お願いだから泣かないでおくれ。これからはたぶん楽しいことがいっぱい起きると思うんじゃ。お嬢ちゃんが悲しい顔をすれば、わしは悲しいのう。また悲しいことが一つふえるだけじゃ。ほらっ、約束しておくれ。笑っておくれ」

クローズ爺さんは小指をそっとさしだした。ナオミはその指に自分の小指をからませると、またしゃくりあげてしまった。クローズ爺さんは花瓶にいけられた黄色いバラを一本だけとると、チョキンッと花の部分を切り落とした。

すると花びらはパンッとはじけ飛んでしまい、聞き覚えのある声

が聞こえてきた。この優しい声は依頼主のクローズ氏ことベリー・グッドウィル画伯の声だ。

「やあ、花束を贈るなんて何十年ぶりだろう。母さんが生きている頃、まだ僕が父さんに肩車されていた小さな頃だけど、一緒に郊外のバラ畑に遊びにいったよね。そうあれは、一枚の絵画のようだった。父さんは覚えていないと思うけど……」

「よく覚えておるよ、あの頃は本当に絵画のような生活じゃった」

（お爺さん、息子さんと楽しそうに会話している、よかった…）

それから五分ほどたった。

「そうそう父さんには感謝しているんだ。僕がまだかけだしの頃、父さんは僕の絵を買ってくれていたんだってね。執事のマリオから聞いたよ。ありがとう、心から感謝している。父さんは僕の一番最初の収集家（パトロン）であり、理解者だったんだ。それからサンタマリアへの月に金貨三十枚の仕送り、あれも父さんだったんだね」

「マリオめ、あれほど黙っていろといったのに！」

クローズ爺さんは嬉しそうにぼやく。

「この町での展覧会はもうすぐ終わる、落ちついたらお見舞いにいくよ。もちろん娘のサンタマリアを連れてだけどね。そこで三人そろって食事でもしようじゃないか？？？あなたを愛する、息子クローズより」

しばらく何ともいえない沈黙が起きた。老人の瞳にはうっすらと涙がにじんでいるのがわかった。ナオミもなぜか嬉しいときの涙がでて、思わずクローズ爺さんにっこりと微笑んだ。

「わしはお嬢ちゃんにものすごくお礼がしたい気分じゃ」

「…あ、あの。お気づかいなく、もう頂きましたから」とナオミ。

「いやそうはいかんよ。情けないことにわしの家業は五年前に倒産の憂き目にあってね。つまり息子は正しかったわけだ。大事なのは

生まれではなく、どう生きたいかだ。やりたい仕事こそ本当の仕事ってわけじゃな」

ガラハッド地区子爵クローズ、アッパータウンの六地区のなかにあって、名ばかりの貧乏子爵で知られる。現在、彼が経営を任されているガラハッド地区は、モードレッド地区に吸収合併される案がでているほどだ。それを頑なに拒んできたのが、前伯爵トモロヲ・ブドリだった。

「今は靴職人をやっておってね。執事のマリオの靴屋に置かせてもらっているんじゃ。ちょっと前にアグリッパどもが腐ったタマゴをぶつけた店じゃがね。あそこのウインドーに飾ってある、赤いハイヒールを君に譲ろう」

その赤いハイヒール、たぶんそれはリサ・パパティーノがほしがっていた、恋のような赤のハイヒールに違いない。クリスマスツリーの赤リンゴを靴にした、リンゴのいい香りがする、あのハイヒールのことだ。

ナオミはあの赤い靴をもらえるとあって、胸が高鳴った。

「…本当に？　あの素敵なハイヒール、頂いてもいいの？」

「季節外れのサンタからの贈り物じゃ、どうか受け取っておくれ」

ナオミは「もちろん」と頬を高潮させていった。少女の言葉を聞くと、老人は羊皮紙のメモ帳にすらすらと走りが書きして、それをマリオに手渡すようにいった。

「あのハイヒールを君に譲るように書いておいたから」

老人の声はかすれた声でいった。

「でもいいのかしら、あんな素敵なハイヒール、本当に頂いても？」

ナオミは確認のため、クローズ爺さんの顔を覗きこんだ。

「靴もこんな可愛いお嬢さんにもらわれて喜んでおるよ。でももう一人、靴をあげたい女の子がおったんじゃがな。その子はわしの家の隣、帽子職人の親方のところに住んでおる、騎士候補生の女の子

でな」

老人は瞳をくるりんと動かした。

「わしの小さな女友だちじゃ、多少いじっぱりじゃが根は優しい子じゃよ。そうだ、あの子にもなにかお礼をしなくちゃな。わしのアトリエに『赤リンゴの木の実』というクルミから、彫りかけのハイヒールがある。あの子にそれをあげてくれんかね？」

「ふふふっ、お爺さんはその子の仲好しさんなんだ」

「君ならいい友だちになれると思う。一度、訪ねてごらん。きっと喜ぶと思うよ、あの子はいつも一人ぼっちだからね。でもわしが病院におることは内緒じゃぞ。あの子、きっと心配するからね」

ナオミはコクッと頷き、老人の顔をまた見つめた。

「ええ、息子さんのところに会いにいったことにしておきます」

「そうしてくれると助かる」

どことなくクローズ爺さんは遠い瞳をしていた。

ナオミは静かに頷いた。するとまた、あの恐いような悲しいような思いが少女の胸にこみあがってきた。ナオミはぐっと息を飲みこみ、胸をおさえた。ジョジョはまじめな顔でそれを見ていた。

「あと一つだけ質問していいですか？」

ナオミは急いでいった。

「一五七号室、匿名患者のご夫妻のことなんですけど、なにかご存知でしょうか？」

老人はナオミの瞳をじっと見つめ、彼女の名前を聞くと「皮肉なもんじゃ」と意味深な言葉を呟いた。

老人はここ数年、入退院を繰り返しているが、彼らのことで知っていることといえば、トモロヲ・ブドリが連れてきた患者ぐらいだといった。それ以上のことは何も知らなければ、ナオミにもあの二人のことは忘れるよう促した。

「さあ、いっておくれ。わしは疲れた、ちょっと一眠りするよ」

クローズ爺さんは震える細くてしわくちゃの手をあげた。

ナオミはペコッと頭を下げると一七五号室をでていった。

それからまもなく一人の老人がクローズ爺さんのところへ、花束をもってお見舞いにやってきた。

「やあ、元気かね？」と花束の老人。

「今日は花束がよくやってくる日じゃのう、トモロヲ・ブドリ。お前さんが領主じゃなくなってみんな、辛い想いをしておる」

トモロヲ・ブドリは花瓶にいけられた黄色のバラにめをやると、何もかも理解したように「そういえば今日は父の日じゃったのう」と頷いた。そしてこの元領主はナオミが座っていた、椅子に腰かけた。椅子はまだほのかに温かかった。

「わが友よ、先客がいたようじゃね、息子さんかね？」

「…いや見舞いにきていたのはナオミとかいう女の子だよ。一五七号室、匿名患者のことを聞いてきた」

「で、あんたはなんて答えたのかね？」

クローズ爺さんはふっーとため息をついた。

「なんも。お前さんは昔から、他人にそうやすやすと身内の秘密を打ち明ける男ではなかろう。仮に迷いの森の一味に殺されかけ、心を壊され、植物人間になったトモロヲ・ブドリの孫娘夫婦とは口がすべってもいえんよ」

クローズ爺さんの言葉にトモロヲ・ブドリの動揺は一先ず安心へと変わった。

「まったく人のつながりというのは不思議なもんじゃな、ところで聖（サンタ）クローズ…」

「その呼び名は正確ではないのう」

クローズ爺さんの別名はサンタクローズ。

だが彼の家業の「宅急便」が五年前に倒産してから、その名を用

いてはいないそうだ。もちろん息子のクローズ氏も画家だからサンタの称号を使用していない。またサンタの称号を贈られるということは大変名誉なことで、その称号は家業を受け継ぐ者に代々受け継がれてきた。

十二年前、せめてもの償いとしてクローズ爺さんは、義理の娘モニカにその称号を名誉称号として譲渡したという。モニカは故人のため、実際にはその称号を引き継いだのは幼かった孫娘マリアだ。それはグッドウィル氏も知っているところ。

さて倒産する前のクローズ爺さんの仕事は、空飛ぶトナカイに乗って、町から町へと荷物を届けるというものだった。とくに一番の刈り入れ時というのが、クリスマスの日であったことはいうまでもない。そもそも彼の本当の名前はニコラウス・シンテル・クローズというそうだ。

「ニコラウス・クローズ。クローズ家がこれから先、どんな仕事をしようとも、先祖代々のクローズ家の人々がやってきた仕事はもう誰も忘れることはできんよ」

人は死んでも名前は残るということだろうか。

さらにクリスマスとなれば、一般世間の町という町は様々な光で包まれ、店という店の店頭にはクリスマス商品が並び、人々はこの日に様々な思いを馳せる。すれ違う人々はとても幸せそうな顔になる。これこそクリスマス、いやクローズ家最大の功績なのかもしれない。クローズ爺さんは何もいわず、前領主にして前伯爵の目をしっかりと見据えている。

「お前さんたちは偉大な仕事をしてきた。今ではクローズ家は名実ともに知らない者は誰一人おらん。お前さんたちの名は子どもたちに夢を与え、大人たちにも希望を与える魔法の言葉じゃ」

「…ああ、トモロヲ・ブドリ。もうそろそろお別れのときがきたようじゃ…」とクローズ爺さんのかすれた声は、少しづつ小さくなっ

ていった。

第6話　ハイカラ帽子屋の女の子【1】

第1話

病院をでるときだった。一〇五室の病室のまえでテルがコックの親方に連れられ、ペコペコと頭を下げていた。ナオミの姿を見かけるやいなや、テルはそっと親方からはなれて、少女のもとへやってきた。

「テル、どうしてここにいるの？」

「僕が作った料理でお客さんが食中毒になっちゃったんだ」

「へえ。その人、まだ生きているの？」

と、ジョジョ・ダックスフンドはぼやく。

「ああ、まだ生きているよ」

声の主はロエスレル・ドラゴンヌだ。彼はお腹をさえながら、男子トイレのほうへよたよたと歩いていく。その姿はなんとも情けなく、同情さえしたくなるほどだ。

「お見舞いのクッキー、僕が作ったんだ。お味はどう？」

「…どうりで塩っぱいはずだ…」と顔をしかめるロエスレル。

テルは「塩と砂糖を間違えちゃったんだな」とボソボソと呟いていた。テルとはそこで別れたのだが、病院ではその他にパパティーノ兄妹の親父、現アッパータウン伯のジョルジョ・パパティーノにも遭遇した。

「呪いの闇討ちとはまったく卑怯なヤツだ」

彼は右手には包帯をしているものの、黒い炎がメラメラと纏わりついている。どこか不気味だ。

「伯爵、どうぞご冷静に。まわりの目もあることですから」

「そうだ、お前のいうとおりだな。ガンダルフ・カトニグレ」

カトニグレ家は代々パパティーノ家の執事の家柄だ。

この執事の声、聞き覚えはあるが思い出せない。執事の横にはハレルヤの親父、あのジジ亭の亭主ヤドリギがどういうわけか、下僕のようについてまわっていた。

「アレを見つけるのがお前の役目だ、見つからないは聞き飽きた。ヤドリギ、お前の息子は私の人質だということを忘れるなよ。わかったなら、さっさとカンペールの田舎に帰って、『例のアレ』を見つけてこい！」

パパティーノが男を一喝すれば、ヤドリギは小さく縮こまった。

「ヤドリギ！　な、なんでこんなところに！」

ナオミは驚きのあまり声が震えている。

「フンッ！　小賢しい」とヤドリギは、ナオミとチラッと目があうと「今頃、自分が迷いの森の一味だと気づいたのか」と憎たらしい目つきで舌打ちした。もはやヤドリギがパパティーノの手下であることは明々白々だ。

パパティーノはナオミの存在に気がつくと、憎しみをもって「失せろ！　ニトのガキ！」と一喝し、男は執事とともに、とても機嫌悪そうに歩いていった。

もしかしてヤドリギが自分を引き取らせたのは『例のアレ』を見つけるため、パパティーノに命令されていたのか？

例のアレはパパティーノだけでなく、ブルトン公爵陛下も捜しているものだと聞いている。パパティーノは公爵陛下の忠実なる部下だ？？？？ナオミは美術館で出来事さながら、水面下で起こっているに違いない、何か陰謀めいたものにゾクッと鳥肌が立ってきた。

七分後、ナオミはブルトンホテル大通りの靴屋の窓ガラスの前に立っていた。何回みても赤いハイヒールは素晴らしい、それにけっこうな値段なのだ。

ナオミは「ひい、ふう、みい…」とゼロの数を数えてみた。

「ミスリル金貨二十五枚と銀貨二十五枚、銅貨が三百枚もするよ」
「そんなのわかっているわよ」
「だったら骨つき肉がいくら買えるの？」とジョジョ。
「…一ヵ月分…」
ナオミは震える声でいった。

こんな高価なものをクローズ爺さんは、自分に譲ってくれるというのだ、どこか少女は後ろめたさを感じてしまった。もうすでに時刻は午後四時、カリヨンの鐘がノイズと一緒に夕暮れどきを知らせてくれた。どこからか黒カラスのカァー、カァーというわびしい鳴き声も聞こえてきた。

執事のマリオの靴屋はとても素敵な店だった。
昔ながらの靴専門店というか、小さいながらにどこか素敵がお店のなかに漂う。ジョジョなんかは店のなかに流れる靴屋独特のにおいに「鼻がもげそうだ」と不満そうだった。
「ねえ、これって水虫のにおいだろ？」
「バカねえ、ワックスのにおいよ、いいかおりじゃないの」
「そーお、テルの足のにおいとそっくりだよ」
と、ジョジョ・ダックスフンドは相変わらずだ。
店の奥からでてきたのは、白髪まじりの初老を迎えたばかりの背の高いおじさんだった。ナオミがクローズ爺さんの走り書きをみせるものなら、執事のマリオは瞳に涙を浮かべて「本当にありがとう」と少女の手をギュッと握った。
ありがとう？　いや逆に自分がお礼を述べたいほどだ。
「ねえ、マリオさん。お爺さんはどこか悪いんですか？」
マリオは首を横にふり、「ご主人様は今、寿命のてっぺんにいるのです」と遠回しにいった。ナオミは（どういうことかしら？）と首をかしげ、ジョジョはいきなりまじめな顔つきになった。それからマリオは、赤いハイヒールを誕生日の贈り物を入れるのにふさわ

しい、お洒落なかごに大切に入れてくれた。

「あ、あのぅ」

ナオミは遠慮がちにマリオに訊いた。

「はい、なんでしょう?」執事はゆっくり微笑んだ。

「クローズさんのお気に入りの女の子って、ご存知ですか?」

「ええ、あの素敵なお嬢様のことですね。それならご主人様のアトリエの横に住んでおられると伺っていますよ。古きよき時代通りの二十二番館の…」

ご主人様って???この執事はクローズ爺さんのことを本当に尊敬しているようだ。

「お嬢様。今、地図を書きますから、ちょっとお待ちください」

マリオは執事だけあって、とても上品だ。

行動も喋り方も、何もかもが。いやガラハッド地区子爵クローズの執事というぐらいなのだから、この人はおそらく男爵という身分にある人に違いない。どうりで上品なはずだ。

店をでるときナオミがお礼をいえば、なぜかマリオ男爵も「ありがとう」とまたお礼をいった。それからマリオに書いてもらった地図どおり、ナオミはてくてくと目的地を目指して歩いていった。ジョジョも小走りでついていった。

「…あ、あの、あのさ。そのハイヒール???リンゴの他にだけど、あのお爺さんのにおいがするよ。それからマリオさんのにおいも。ついでにこの町のいろんな女の人のにおいもするよ」

ジョジョは歩きながら、ナオミを見上げた。

「それってどういうこと?」

「この靴はいろんな人から愛されているってことだよ」

ジョジョはいつになくまじめな顔で、ナオミを見つめた。

古きよき時代通りはこじんまりとした、昔ながらの面影がある職人通りだ。ここの赤煉瓦街はモードレッド地区で一番古い町、当時の建物がずらりと並んでいた。ちょっぴりひと昔までにぎやかな通りだったらしいが、隣に大きな大通りができると、ここはすっかりさびれた通りになったという。

「ねえ、ジョジョ。この赤いハイヒール、お爺さんのお友だちにあげたほうがいいんじゃないかなって思うの」

「どうしてさ?」ジョジョはしっぽをぱたんとふった。

「だってこの靴、いろんな人から愛されているんだもの。だから一番大切にしてくれる人に履いてもらうのが一番幸せだし、お爺さんも喜ぶと思うの」

「ふーん、ここじゃないかな?」

ジョジョは二十三番館のハイカラ帽子屋という看板を見上げた。トントンッとナオミは、「すみません? 誰かいっらしゃいますか?」と遠慮がちに彫刻が施された木の扉を叩いた。

ちょっとばかり耳を済まして、また叩いてみた。それでも返事はなかった。ナオミは扉のうえにぶらさがっている、帽子の紋章をみて、次に看板をみた。

今にも消えそうなブルトン文字で「ハイカラ帽子屋」と彫ってあるのが、なんとなくだけどわかった。二十一番館は帽子屋だからクローズ爺さんの女友だちは、きっとここに住んでいるはずだ。

「やっぱり、ここよ」とマリオさんに書いてもらった、案内図をみていった。

ナオミは消えかかっている番地をみて、さらに確信を強めたようだ。今度はちょっとばかり扉を強めに叩いてみた。ジョジョは小さな欠伸をして「きっと留守にしているんだよ」とナオミの足もとで囁いた。

「…そのようね。じゃあ、またあとできましょうか…」

「でも覗いてみるだけ、のぞいてみれば？」とジョジョ。
ナオミは小さな声で「うん」と頷き、そっと扉を押してみた。

すると扉は古びた音とともにゆらゆらと動いた。
帽子屋のなかには色取りどりの素敵な帽子が置いてあった。床は赤い絨毯、帽子掛けにはシルク生地の帽子や火の鳥のような赤い羽帽子、緑色の孔雀の羽を織り込んだ婦人帽子がずらりと並べられてある。茶黒の棚には帽子用の生地が規則正しく織りたたまれ、どことなく凛とした高級感があった。
「素敵な帽子がいっぱい飾ってあるわ」
その矢先だった。少女の背後から「ハイカラ帽子屋に何か御用かしら？」と女の子の声がした。後ろに振り向けば一人の女の子が立っていた。その子は白い帽子をかぶっていて、首には赤色のネッカチーフを巻いている、とても素敵な町の女の子だ。

「あ、あの…」とナオミはどもった。
「ふーん、その靴ってクローズさんのよね？」
女の子はナオミを怪しむように見つめた。
「そのクローズ爺さんならね。今、息子さんが遊びにきているの」
「ふーん。クローズ爺は独身じゃなかったの…、そうなんだ」
「サンタマリアっていうきれいなお孫さんもいるのよ」
ナオミは得意げにいった。
「あらっ、そう。ついてっらしゃい」とナオミは女の子に手招きされて、店のなかに入っていった。女の子はナオミを知っているかのような口調だ。
「この子、知っているの？　ナオミ」

ジョジョの呟きに「いいえ」と首を横にふった。こんなお洒落な友人なんて自分にはいない。いたらどんなに素敵だろう。
「へえ、だったら初対面のくせに生意気なヤツだ」

女の子もジョジョにいわれては、世話がない。

第7話　ハイカラ帽子屋の女の子【2】

第2話

帽子屋の奥は古びた工房のようだ、壁には大きな絵がいっぱい飾ってあった。ところどころにクモの巣がかかっているのも見逃さなかった。女の子によれば親方は帽子の生地を仕入れにいっているところだとか。

「でもよかった。私ね、そのハイヒールずっとほしかったの。それで一日一回はあの靴屋にいって、誰かに買われないかって見張っていたの」

ナオミは少女の声を聞くと、とても嬉しくなった。

「この靴にね、お爺さんがあなたに履いてほしいって私に預けたの」

ナオミの言葉にジョジョは（この生意気なヤツに履かれるぐらいなら、僕が履いたほうがハイヒールも喜ぶよ）とぼやいた。

「あなたはあのお爺さんの仲好しこよしなんでしょ？」

「よしてよ、仲好しこよしなんて。あの赤いハイヒールがほしいから、私からお爺さんに近づいていっただけよ。あのお爺さん、ずっと独りぼっちだったんですもの、可哀相だからいい話相手になってあげただけなの」

思いがけない返事だ。

「…え！　そんな、ひどい…」ナオミはギュッと唇を噛みしめた。

「ナオミ・ニト、どうせあなたもそうなんでしょ？」

「何で、私の名前知っているの？」

ナオミは少女をキッと睨んでいった。

女の子は「まだ私が誰だか分からないのかしら？」と小笑いすると、女の子は白い帽子を帽子立てにかけた。「あっ！」とナオミは驚きの声をあげた。

「リサ・パパティーノだよ」
どうりで生意気なはずだ、とジョジョはぼやく。
白い花柄の帽子をかぶっていて分からなかったが、目の前にいるお洒落な女の子はリサ・パパティーノだった。彼女はナオミが驚いているのをみて、楽しくて仕方がないのかまた小笑いしていた。
「私も騎士候補生だということをお忘れかしら?」
迂闊だった。彼女だとわかっていれば、わざわざ会いにこなかったものの。ナオミは自分の愚かさを呪い、ジョジョは「いい社会勉強になったじゃん」と気休めにいった。
「ねえ。ローズヒップ茶とミント茶、どちらがいいかしら?」
奥の台所からリサの声が聞こえる。
「…ミント茶…」口のなかでもごもごしていった。
彼女の部屋は工房のすぐ隣にあった。
自分の埃まみれの部屋とは違って、女の子らしい部屋だ。花模様のテーブルクロスからクッション、壁紙なんて今どきのお洒落な絵柄だ。
夏をイメージした派手なカーテン、帽子立てには白い帽子のほかにいくつもの帽子がある。これぞまさに町のお洒落女子(アッパージャンヌ)っていう感じがした。そう女の子はお洒落をするものなのだ。このとき初めてナオミは、リサがあのときいった自分はダサいっていうのが身に沁みた。
セーブル焼きの陶磁器のポットとペアになっている、ティーカップにとくとくと音をたてて、ミント茶が注がれていく。心を和やかにさせるいい香りだ。王侯貴族の絵柄がはいった青と白、金のティーカップは優雅という言葉に尽きる。
「でもあの子、アグリッパだよ」
ジョジョは警戒を怠るなとナオミに忠告する。
アグリッパ、白馬の騎士と代々対立している、モードレッド地区の

悪魔教を信奉する、騎士候補生たちの集まりのことだ。ココを誘拐したのも連中だ。やはり気をゆるめてはいけない。

「警戒しなくてもいいわよ」

リサはミント茶を小指をたてて、可愛らしく口にはこぶ。

「女子には男子の決闘なんて無意味だし…」

意外とコイツ、冷めてるな？？？彼女のいいたいことも分からないナオミでもない。

「いいかしら、私の夢はね。ガチガチなパパティーノ家から飛びだして女優（プリマドンナ）になることなの。悪いけどあんたたちダサ坊なんて、はなから眼中にないわ」

ムカッ！　と一瞬、ナオミとジョジョは鬼の形相になった。

「あら、お気に召されました？　ごめんあそばせ、マドモワゼル」

「ブルトン社会が嫌いなの？」

リサはそうじゃない、と手を横にふった。

「女の子は夢が多いほうが素敵になれるの。そうそう昨日焼いたばかりのビスケットがあるんだけど、あなた、食べる？」

リサがいれてくれたミント茶は、身体がすきとおる感じがした。彼女の手焼きビスケットなんかはサクサクしてとても美味しかった。女の子ならクッキーやビスケットの一つや二つ、焼けなくては素敵とはいえないのかもしれない。リサはやたらビスケットを食べろと自分とジョジョに勧めてくるが、本人といえば「さっき食べたばかりだから遠慮するわ」とビスケットに手をつけない。

ジョジョもクンクンッと鼻を鳴らし、前足でビスケットを弄んでいた。

とりわけ自分を警戒するジョジョをみてか、リサはビスケットを

砕いて、サラミの中でも極上とされる、細かく挽いた豚肉が使われ、米粒大の脂肪が霜降りのサラミミラノを混ぜた。瞬時にジョジョは目の色を変えて、尾っぽをふり、ガツ、ガツッとビスケットを喰い散らかす。

「所詮は犬なのね」とリサの目は勝ち誇っていた。

ナオミはふーっと一息入れた。

ミント茶のおかげで身体も心もスッキリだ。

「でもあなたはお金持ちだから、すぐ買えるんじゃないの?」

ナオミは本題にはいった。赤いハイヒールの件だ。

「そうねえ、お父様に頼んだらね」

「だったらどうして?」

ナオミが驚いたように聞けば、リサはめんどくさそうにいった。

「本当にほしいものは、おこづかいをためて買うものなの。そうじゃなきゃ、ありがたみって分からないじゃないの。お金ってね、貯めていたら何もならないの。でも使い道を間違えたら、もっと大変なのよ。分かるかしら?」

リサ・パパティーノは鼻を鳴らした。

「だったらなんでお爺さんに近づいたの?」

「だ・か・ら・赤いハイヒールがほしかったからよ」

「本当にそうなの? 本当にそう? それだったら私ね、お爺さんがとっても可哀相だと思うわ。あの人、あなたのこと嬉しそうに話していたもの。まるで本当の孫娘のように独りぼっちのあなたのこと、大切にしていたと思うの」

ナオミはちょっぴり怒鳴るような声でいった。

「…ふん、独りぼっちって。余計なお世話よ。いいかしら、私は生徒会のモードレッド地区の補佐役(デンコーチ)よ」

兄のマルコが停学になったロレンツォの跡を継いで、生徒会書記

に任命されたおり、彼の後継として妹のリサが生徒会モードレッド地区の補佐役に任命されたことは周囲が知るところ。

「それに友だちだってたくさんいるわ、そんなのおせっかいっていうのよ。別に独りだって寂しくないわ。友だちなんてわずらわしいだけだし…」

いきなりリサは胸ポケットから煙草を取りだし、親指と人差し指をパチンッと軽く鳴らした。人差し指に小さな炎がはぜる。少女は煙草をスウーッ、と気持ちよさそうに吸うと、息をナオミに吹きかけた。

「年寄りの道楽に付き合ってあげただけよ。あんた、バカ？」

「うわあ、コイツ。不良ってやつだな」とジョジョ。

ナオミはリサを睨みつけた。

「それになによ。独りぼっちと独りぼっち、仲良くしようっていいながら、二週間も姿を見せないって思えば、自分は息子さんと楽しくしちゃってさ。それを嘘つきっていうんだからね」

「お爺さん、嘘なんかついていないよ。お爺さんね、なんだか病気っぽいの。別にどこも悪くないんだけどね、寿命のてっぺんにいるんだって」

少女の言葉にリサの顔が一瞬だけ、真剣な表情になった。

「嘘でしょ？」と動揺するリサ。

「ううん、お爺さんがそういってって頼んだの。本当はお爺さん、あなたにお見舞いにきてほしそうだったわ。でも心配させたくないからって。無理しちゃって…」

リサはぐっとうつむき、いきなり涙声になった。

「クローズ爺、今はどこにいるの？」

「聖ハレルヤ病院、聖なるハレルヤ大通りにある病院よ」

「美術館の真向かいの…あの病院ね…」

ナオミの言葉を聞くや否や、リサはいきなり立ちあがり、本棚の

近くに置いてあった小さな宝箱をもってきて、ジャラジャラッと今までのあの赤いハイヒールを買うために貯めていた、ミスリル金貨や銀貨、銅貨を数えはじめた。
「こんなにたくさんのお金、どうしたの？」
「お父様からの毎月のお小遣いを貯めてたのよ」

リサらしくない慌てぶりに、ナオミは驚いて声がでない。
「ひい、ふう、みい？？？？あと金貨一枚足りないわ。ど、どうしよう」
リサの涙声がナオミの心にカリヨンの鐘のように響いた。
絶望に打ちひしがれるリサにナオミは「ベッドのすみっこに金貨が一枚、落ちていたわ」とミスリル金貨一枚をそっと手渡した。するとジョジョが怪訝そうな顔つきでナオミを見つめた。
「…本当に落ちていたの？…」
「ええ、さっき端っこにコロコロッて転がっていたの」
「へえ、『コロコロッて転がっていた』んだ。まあ、今回はそういうことにしておくよ」

犬のくせに鋭い？？？？さすがジョジョだ。

そういえばカンペールのジジ亭でのことだ。水汲みの帰りにパンを買ってこいとヤドリギ夫人にいわれ、十フランを受け取ったものの、水汲みを終わらせ、ジジ亭に帰ってみれば、いつのまにかお金がなくなっていた。十フランがなくなり、もうすぐで鬼の形相となったヤドリギ夫人に張り倒されそうになったとき、自分を助けてくれた男の人がいた。
その人こそサンチョ・ボブスリーだ。今になって、ボブスリーの気持ちが痛いほどわかる。今、彼と同じことをしている自分が不思議にさえ思える。

「ねえ、そのお金どうするの？」
ナオミがさりげなくリサに訊いてみた。
「お爺さんと私は誕生日が同じなのよ。毎年、贈り物の交換をしてきたの。今日がその誕生日、それであなたが赤いハイヒールを持ってきたときは、本当にびっくりしたわ。お爺さんは私があの靴をほしいって知っていたのね」
ナオミは震える声でいった。
「あ、あのもしかしてお金を貯めていたのって？？？？」
リサは何もいわなかった。
きっとそのお金は、お爺さんの誕生日の贈り物を買うためのものに違いない。お爺さんは昔、商売に失敗して大きな借金を抱えたこと、それでも毎月ミスリル金貨を欠かさずに誰かに仕送りしていたことを、野ネズミのような小さな声で彼女は呟いた。
「あなた、知っている？　仕送りのお金ってね、クローズ爺さんの一ヶ月分の大半の生活費なの。生活はぎりぎりだったらしいわ。執事のマリオさんから聞いたの」
そのときナオミはクローズ爺さんの言葉を思いだした。
「わしの小さな女友だちじゃよ、多少いじっぱりだが根は優しい子じゃよ」
確かに多少いじっぱりだ。
リサの声はその優しい心とともに震えた。
「『これは贖罪、わしは過去の過ちを償っておるんじゃ』、あの人はいつも口癖のようにいってたわ。そんなお爺さんを応援したくてね、私、ずっとおこづかいを必死に貯めていたの」というとリサは両手で顔をおおった。

第8話　ハイカラ帽子屋の女の子【3】

第3話

「あの人は百色トマトが大好きなの」

百色トマト、色によって味が変わる高級な聖なる食べ物だ。

移動販売（フローリスタ）のおり、キング・アーサー地区教会でN卿からもらった、唐辛子味の百色トマトがナオミの脳裏に浮かんだ。せめて今だけは、クローズ爺さんへの贈り物の百色トマトが火炎味じゃないことを切に祈りたい。ジョジョは「鼻血味だったら面白いけど」とぼやくけれど。

「だから誕生日にそれを贈ろうって…」

どうやら彼女には寿命のてっぺんという言葉がわかっているようだ。リサは瞳の涙を拭うと、戸口にむかって歩きだした。

「今からいくの？」

「うん、でもお見舞いの百色トマトを買いにいくから、ちょっと時間かかると思うの」

「だったら一時間後に病院のまえで会いましょう？　私も赤いハイヒールが一番似合っている人に届けましたって、クローズさんに報告したいもの」と優しい声のナオミ。

「ええ」リサは赤い瞳で頷いた。

それから二人はハイカラ帽子屋の店の前で分かれ、ナオミは二十二番館のクローズ爺さんのアトリエに入ってみた。黙ってはいるのは気がしれたので、何度かコンコンッと扉をノックした。

返事はない、当たり前だ。誰もいないのだから。

扉が軋む音、店はツーンッと森の心地よい香りがした。店奥の大きな木台には木屑と彫刻刀にまじって、サッカーボールほどの彫りかけの赤い靴らしい赤リンゴが置いてあった。

「これ、赤リンゴに見えるけど、ただのまるい木の実だよ」

「そうね、ジョジョ。でも赤リンゴのいい香りがするわ」

おそらくこれが赤リンゴのような木の実なのだろう。

香りは赤リンゴそのもの、でも中身はただの木だ。しかも形はまるいときた。確かにハイヒールのような靴が彫ってある。すぐ近くには一枚の手紙が置いてあった。

「ねえ、読んで聞かせてよ」

これは親友のリサさんへの赤いハイヒールになる予定でしたが、私の一身上の都合によって、残念ながら完成させることができそうにありません。もしこの手紙をお読みになられた方は、どうぞ隣のハイカラ帽子屋の騎士候補生、リサ・パパティーノさんにそうお伝えください。また私のかわりに、どうぞ彼女の友だちになってやってください。

ニコラウス・クローズ

手紙を読み終えたあと、赤リンゴにボタボタッーと大粒の雫が落ちた。

「泣いてるの、ナオミ?」

「…う、うん…」ナオミの頬から大きな涙が流れ落ちる。

「ねえ、ナオミ。クローズ爺さんの贈り物ってさ…赤いハイヒールじゃなくてさ」

「…うん、きっとお友だちだったのよ…」とナオミは呟いた。

そのとき少女は、クローズ爺さんの面影をうっすらとみた。

「え？　クローズさん？」
老人はニコッと微笑むと次第に遠くなっていく。
「お爺さん！　クローズさん！　ちょ、ちょっと、待って！」
ナオミは驚きのあまり、もうすぐで心臓が飛び出そうだった。
「…ジョジョ、さ、さっきお爺さんが！」
そのことをジョジョに話すと「きっとお爺さんが『ありがとう』をいいにきたんだよ」と訳の分からないことをいっていた。

一時間後、病院のまえで待ち合わせたナオミとリサ。
二人でクローズ爺さんの部屋へ向かえば、先ほどまで老人が寝ていた一七五号の病室のベッドには、クローズ爺さんではなくて、ヘンリーという名の青年がうんうんとうなっていた。
傍には女の人がいて「もーう、ヘンリーのバカ！　決闘はしないっていっていたじゃないの！」とぷりぷり怒っていた。青年はナオミに気がつくと「やあ、またお腹を撃たれちゃったんだ」と顔をしかめた。この人は『剣と盾』で決闘を申し込み、腹を撃たれ、ホーヘンハイム医師に治療されていた人だ。

受付の看護婦さんにクローズ爺さんのことを聞けば、ほんのちょっぴり顔をしかめて「あの人は奥さんに会いにいったのよ」と優しそうに微笑んだ。
「息子さんじゃなくて？」とナオミ。
「ええ、息子さんはそのあとに会いにきたの。でももうお爺さんは旅立ったあとでね、ちょっぴり遅かったのよ。それからどちらがリサっていう女の子かしら？」
「あの、私ですけど…」
どことなく元気のないリサの声だ。
「お爺さんから言伝があってね。『わしがいなくなっても寂しがらないでおくれ、そのかわりわしのかわって新しい友だちができたと思う。君と同じで優しい子だ』。ちゃんと伝えましたからね」と老

人の伝言を伝え終わると、看護婦さんは気まずそうにその場を立ち去った。

病院をでたところでいきなりリサは顔をくしゃくしゃにして、泣きだした。ようやく今になってナオミがお爺さんがどこに旅立ったのか、分かった気がした。あのお爺さんのアトリエでみた、クローズ爺さんの面影はきっとリサのことを頼むよ、彼女の友だちになってやってくれと頼みにきたのだと思う。

時刻はすでに午後七時をまわったところ、二人は道の別れ道にただすんでいた。

いつもなら心地よく聞こえてくる、あのカリヨンの鐘がなぜか心に痛く感じる。耳から響いてくる届く鐘の音は、今のナオミには悲しみの鐘の音として響く。

「今日は忙しいところ、いろいろとありがとうね」とリサ。

「ううん、それより大丈夫?」

「…それはこっちの台詞よ、ナオミ・ニト…」

それだけいうとリサは一方の道を駆けていった。

ナオミは追いかけようとしたが、立ち止まった。

リサが振り返って「昨夜のお返しよ、エイブラハム・アグリによろしくね」と百色トマトを投げてきたからだ。トマトはぐるりっとナオミと手におさまった。

「ねえ、リサさん。今度一緒にね、広場のアイスクリーム、食べにいかない?」

「…うーん、考えておくわ。おイモさん」と嬉しそうにいった。

それからまもなくしてリサの姿が見えなくなると、今度はナオミがカリッと百色トマトをかじった。それはものすごく甘くて、高級なアンズの味がした。

「…美味しい…」ナオミの口から声がもれた。

と今まで我慢していた何かが吹っ切れて、ドッと勢いよく涙が溢

れてきた。
　お爺さんに食べてもらうはずだった百色トマトを今、自分が食べている。そう思えばこそ口に広がる甘すっぱさ、抑えていた悲しみがこみあげてきたのだ。ナオミは通りに座りこむや否や、声を押し殺して泣いた。ただ泣いた。

「今日はみんな、よく泣くなあ」とジョジョ・ダックスフンド。
「…ジョ、ジョジョは悲しくないの？…」
「うん、何となくわかってたからね」
　意外なジョジョの言葉にナオミはきょとんとしていた。
「…ど、どうして、どうして…」と泣きじゃくるナオミ。
「教えてくれなかったのよ、ひっく…」
「あのさ、人の死って、ナオミに教えてもどうこうできることじゃないだろ！　それにあの人はとても幸せそうだったじゃんか。人の死って悲しいけど素晴らしいものなんだよ。そう思える日がナオミにもくるよ、きっと…」
「……」ナオミはうつむいたままだ。
「下には何も落ちてないよ」
　ジョジョはアリサ夫人の口真似をしていった。
「ねえ、それより何だかお腹がゆるくない？」
「うん、私もそう思っていたの」
　ナオミはハッと思った。
　先ほどのリサの言葉を思いだしたのだ、確か彼女は昼間のお返しといっていた。ジョジョは熱いものは、大の苦手だからお茶はまず飲まない。ビスケットだけを食べていた。自分もそうだ、だけどリサはビスケットだけは食べなかった。
？？？？お腹がくだる、やはり毒をもられたようだ。
「…ねえ、あのさ。やっぱり僕。あの子、大嫌いだな！」

ジョジョの小言にナオミも「うん」と頷きながらも、サンタマリアがクローズ爺さんとクローズ氏の仲をとりもったように、もしかしたらクローズ爺さんは、自分とリサの仲をとりもってくれたのだと思う。そう人のつながりはまわりめぐる。

それから三時間ほど、ナオミとジョジョが下痢に苦しむのは別の話。

第9話　推理記者エイブラハム・アグリ【1】

第1話

午後九時、ナオミとジョジョは時計台にやってきた。
すでに隠れ家は昨夜のココ救出作戦の勝利を祝って、ドンチャン騒ぎ、お祝いのケーキなどのごちそうが円卓にどっさりと並べられていた。マイケルは顔中、ケーキの白いクリームでべっとりになっていた。
「ねえ、マイケル。これどうしたの？」
「アグリッパからココ救出作戦の勝利を記念して、パン屋のリンドバーグさんが特別に作ってくれたんだ」
マイケル・コービーはとても嬉しそうにいった。
パン屋のリンドバーグと少年はどういう関係なんだろう、とナオミが声をあげようとしたとき、時計台を見廻りにきていた夜警たちの声が彼らの耳に届いた。
「静かに！　灯りを消せ！」とロレンツォ。
一同はたちまち静まりかえり、彼らの声に耳をピクッとたてた。
「あいつら、ここらへんにいたんだよ」マルコが大声でいった。
「嘘じゃないだろうね？」
青年刑事ラインハルトは無気味そうにまわりをみた。

（この声は私を牢獄に閉じこめた刑事の声だわ）

ナオミの囁きに、一同はさらにピシッと凍りついた。
「本当だよ、ケネディ警部。あのうすのろコービーがごちそうを持って歩くのをみたんだ」
「あいつら、きっとお祝いのパーティでもやっているんだ」
「今からぶちのめしてやる！」

ところどころにアグリッパたちが喚いた。
「でも彼らの隠れ家は『剣と盾』ですよ」とラインハルト。
「いやあそこはもう誰かが借りて住んでいるよ」ともう一人の若い警官の声。
「僕はこの時計台に登っていくのをみたんだ」とさらに「それっきりここからでてこないんだよ」とマルコはいいはった。

ざっと十五名ほどの見覚えのある顔が、外から隠れ家を胡散臭そうに覗いている。
今夜は満月だ。雲に隠れていた満月が顔をだしたとき、ナオミたちはマルコたちアグリッパ数名、さらにはジョルジョ・パパティーノ伯爵やガンダルフ・カトニグレ男爵執事、ラインハルト警部や時計職人の親方などの顔ぶれをみた。
相変わらず、パパティーノの右手は黒い炎が纏わりついている。
「あなたはどうお思いになりますかね、時計職人の親方」
と、パパティーノ伯爵は時計塔の親方を威圧する。
「…うーむ、どうやらここにはいないようですな。だってここは私の家みたいなもんですからな、さすがに住んではいませんが。人がいるなら息づかいですぐに分かりますよ」
時計職人の親方は場を誤魔化すように小笑いした。
「でもこの人はランゴバルトの親方だよ」とアグリッパの誰か。
「そうだ、きっと親方は連中とグルなんだな」
マルコの確信ある声だ。
「いやマルコ、むやみに人を疑うのはよくない。昔からこの時計塔はからくり時計で有名だった。ひょっとしたら隠し部屋があるのかもしれん。さっそく軍警察を送りこんで調査させよう」
パパティーノは警察署長たちに振りかえると、凛としていった。
「よって半日ほど私の、諸君の護衛の任を解く」
「正気でございますか。閣下はボブスリーに命を狙われているんですぞ、軽率な行動はお控えに…」

護衛など不要、自分の身は自分で守るとばかりにパパティーノは吸っていた葉巻を、地面に投げ捨てるとギュッと、いらつきながら靴でその火をもみ消した。
「フンッ、小賢しい。ならば私も立ち会えばいいのだろう」

伯爵の圧倒的な威圧感、野心と野望におされ、町を守る立場の権威など警察署長には、もはやどこにも見当たらない。
「その代わりきさまの命に賭けて、あの浮浪児どもを炙りだせ。連中はそのボブスリーを匿っている可能性がある。昨夜の悪魔教会の件でそれははっきりしている」
白馬の騎士たちが見つからなければ、死を覚悟しろということだろうか。いきなり死刑宣告を受けた警察署長、彼の慌てぶりは尋常ではない。
「…か、閣下。陣頭指揮はラインハルト警部にお与え下さい、彼は優秀な警察官ですから…」
権威に媚びた人間は、保身のために若者に責任をなすりつけるのは、いつの時代も変わらない大人の方程式だ。
「ははは……こりゃ、まいった」とラインハルト警部はまだ死にたくないぞ、と両手を組んで唸った。
（こりゃ…、アイツに手助けしてもらわんといかんなぁ…）
ナオミは一瞬、覗き穴からパパティーノと目があった気がした。不審に思ったのだろうか、パパティーノはコツコツッ、と隠れ扉のほうに靴の音を鳴らしてやってくる。ヤバイッ、見つかると思ったそのとき、白いシーツで全身を覆った、グレムリンが歯車の間を悲鳴をあげて、走り去った。

パパティーノたちはビクッと震え上がった。
「今のはなんだ?」顔をしかめる伯爵。
「…や、やはり悪霊が住んでいるとの噂は本当だったのか…」
こんな弱腰のアッパータウン警察署長の言葉に「ゴーストなど私

の館には十二人もいるよ、署長どの」と無気味に笑い、さらに伯爵は「時計台の歯車の鍵はどこかね？」と時計職人に振り返って、冷静沈着に訊いた。

「私の家に大切に保管してあります」

「ふむ、それはけっこう。では明日、一斉捜査を開始したまえ」

警察署長をはじめ、警官たちの敬礼に見送られ、パパティーノ伯爵たちは時計台をあとにした。彼らがいなくなるには、それから三分もいらなかった。

「なあ、聞いたかい？　『諸君の護衛の任を解く』だって、いつのまにアイツはあんなに偉くなったんだ。署長なんてもうアイツの家来じゃないか」チャーリーの声だ。

「でも時計職人の親方は私たちの味方っぽいね」とナオミ。

「隠れた僕たちの支持者だよ」ロレンツォは自慢げだ。

第１０話　推理記者エイブラハム・アグリ【２】

第２話

次の日、ラインハルト警部はエイブラハム・アグリを捜しだすのに、半日もの時間を費やしていた。ようやく彼を見つけたのは夕方近くになってからだった。アグリはココから明日の記事について話をしていた。

「なるほど、ココ。それは困ったことになったね」

「どうしたらいいのかしら？」ココはとてもおろおろしていた。

「なあに、君たちはいつもどおりすればいい。悪魔教会の件は、僕が伯爵に説明してあげるから安心したまえ」とアグリは悪戯小僧みたいにココに笑いかけた。

彼の姿を見つけると、ラインハルト警部は近寄ってきた。

「やっと見つけましたよ、名探偵どの」

「なにか事件でも？」アグリはわざとらしく尋ねた。

「ええ、町の浮浪児たちコソ泥棒と放火魔をですね」

と、ラインハルトは当たり前のように答えた。

「ケネディ・ラインハルト警部。いつからこの町では、子どもたちをコソ泥棒と放火魔呼ばわりするようになったのかね？」

ラインハルト警部は困ったように頭をポリポリッと掻いた。

「ホーエンハイム先生みたいなことをいわないでくださいよ。パパティーノ卿がいうにはね、悪童たちが時計塔のどこかに住みついているらしい。捜しだして牢屋にぶちこむんだって…」

「パパティーノ卿がそんなことを？」

エイブラハム・アグリはうまそうに葉巻きを吸っていった。

「泥棒を牢屋にぶちこみたいなら、いっそのことパパティーノ卿の屋敷を捜してみてはいかがかな？　もしかして『黒猫』っていう泥

棒が見つかるかもね」
　ラインハルト警部は「ハハハッ、まったくご冗談を」と苦笑い。
「黒猫ことエドガー・ボブスリーはすでに捕まりましたよ」すると彼はアグリにパチッと目配せして、「子どもたちは本当にあそこに住んでいるのですか？」と心配そうに尋ねてきた。
「さあね」
　アグリは言葉を濁した。
「ついでに連中がボブスリーを匿っている可能性があるとか…」

　ラインハルトが何かいいだそうとすれば、彼は「用件は先ほどの会話からなんとなくわかった」と頷くと否や、「この件、喜んで引き受ける。ああ、そうだよ。そろそろ伯爵と話をしなくちゃいけないな、と思っていたところだ。君は伯爵の要人警護官だろ？　伯爵とともに午後八時頃に時計塔にきてくれ、悪いようにはしない」と反論は許さないとばかりに一気に言った。
「これで僕の首はつながった、助かった」と一安心した警部はアグリに一礼して、町のみまわりにでかけた。ラインハルトの姿が見えなくなるや、ココはすぐに時計塔に駆けていき、今さっき聞いたことをロレンツォたちに話した。

「あの人がそういったのなら、この件は大丈夫だ」
　ロレンツォは大船に乗ったつもりでいろ、と皆を安心させた。

　耳を澄ませばカリヨンの鐘が不気味な響きに聞こえる、午後八時。満月は暗雲に隠され、時計塔はポタッ、ポタッーと濡れはじめてきた。次第に雨足が強くなっていくのがわかる。十五分後には土砂降りになった。雨のなか、Ｊ・パパティーノは時計塔の歯車の間まで登ってきた。
　無理やり同行させられた時計職人の親方は、やれやれと深くため息をついていた。

ぞろぞろと階段を登ってくるのは総勢十八名の大人や子どもたちだ。そのなかにもちろんマルコ・パパティーノやハレルヤもいた。だがリサの姿はどこにもみあたらない。きっと興味がないのだろう。

歯車の間でパパティーノたちは無言のまま、正面を睨んでいた。

「遅いじゃないか、伯爵。十五分も遅刻ですよ」

男は懐から懐中時計を取り出して、不満そうにいった。

突然、空がピカッと光り、ガラガラピシャーンッと雷鳴が耳に轟いた。歯車の間に照らし出されたのは、エイブラハム・アグリ率いる白馬の騎士たちだ。アグリは右手に黒い革張りの高級そうな旅行鞄を持っている。

「フンッ、やはりな」

パパティーノは小賢しいガキどもだ、と悪態を吐いた。

「オグリといったかね、私に関わるなと以前にも忠告したはずだ」

すかさず毎日ブルトン新聞の記者は「アグリです」と自分の名を訂正した。

「どちらでもよい。お前がどういうつもりでガキどもとつるんでいるかは知らんが、コソコソと私の近辺を嗅ぎまわる、野良犬のような存在にはまったく反吐がでる。これ以上、私に関わるなら首なし死体になっても、もはや文句はいえまい」

「そうかっかなさらないでください、伯爵閣下」

アグリは黒い革張りのトランクケースを地面に置き、ポケットに両手をつっこんで、伯爵のもとに歩いていく。要人警護の責任者ラインハルトは困惑しつつも、「ヤツを取り押さえろ」と叫べば、数人の護衛官たちがアグリをで羽交い締めにした。

「今日はこの場を借りて、是非とも伯爵閣下にお伝えしたいことがあって参りました」

「さっさといえ、時間が惜しい」

パパティーノの言葉にアグリは彼を目をみて、厳正にいった。
またピカッと風車の間が光り、ガラガラピシャーンッと雷鳴が轟いた。時計塔の避雷針に落ちたようだ。雨足と雷鳴が伯爵とアグリの会話をかき消す。ナオミたちも、マルコ・パパティーノたちも彼らの会話は聞き取れない。
「…　……　…」
「…なるほど、よく調べている…」
「…恐縮です…」アグリの軽やかな声が聞こえる。
ようやく会話が聞きとれるぐらいになったとき、鬼の形相となったパパティーノは有無もいわさぬ速さで、アグリの胸に斬りかかった。
アグリさん！」
白馬の騎士の誰かが悲鳴にも似た声をあげた。
伯爵の剣が右上から左下へと勢いよく、肉を斬り、パパティーノはその返り血を全身にあびた。よろめいたアグリを伯爵は左足で地面に蹴り落とし、ためらいもなく、アグリの胸を憎しみとともに突きさした。ガッという音で、地面にパパティーノの剣が突き刺さったのがわかった。

本当に一瞬のことだった。
「グフッ」と口から血痰とともにアグリのうつろな瞳は天井を見ている。数秒後、アグリは血溜まりのなかで息絶えた。突然のことでナオミたちは現実が理解できていないようだ。
「…お、お願いだから、仇をとらせて！」
ココは怒りの涙を流している。
「いやだめだ、君がいったところで犬死にするだけだ」
ロレンツォが自分の親方を目の前で殺され、今にもパパティーノに斬りこみそうなココに身体を張って、何とか制止していた。
「フンッ、真実を知りすぎるのも罪だな、アグリとやら…」
パパティーノがいい終わらないうちに、ココの代わりにナオミが

男に襲いかかった。怒りの炎、憎しみが彼女を動かす。我武者羅に剣を振るうも、実力でのしあがっただけのことはある。パパティーノの剣技の腕は剣術指南役のサー・ガルニエと匹敵、いやそれ以上といえるかもしれない。ナオミの怒りに伴って、剣に纏わりつく巨大な火の鳥さえ、この男は剣の覇気で真っ二つにする。

分からない。アグリを殺さなければならないほどの真実、一体どんな真実なんだ。

「お前には関係ないことだ、ニトのガキ！」

パパティーノはナオミの剣を振り払った。彼女の剣は虚空に円を描いて、マルコの足元に突き刺さった。「ひえええっ」と地面に腰をつくマルコ。白馬の騎士たちも、また彼らも手出しができず二人を見守らざるえない。

ナオミが腹に伯爵の重たい拳を受け、前のめりに倒れかければ容赦なくパパティーノは彼女の首もとをつかみ、時計塔の壁に押しやった。ハァッ、ハァッと肩で喘ぐナオミ、口からはツゥーッと一筋の血が流れ落ちている。

「その目が気にくわん」

「……」どういう意味だろう？

「目も母親似であれば、わが寵愛を受けたものを……いやはや残念極まりないな。母親の血が半分混ざっていることに感謝しろ」

どういう意味かは知らないが、誰がお前なんかの寵愛を受けるものか、ナオミが「くたばれ！」と血反吐をペッとパパティーノの頬に飛ばせば、間髪入れずに男の手が少女の頬に飛んだ。ナオミはゴロンゴロンッと転がり、テルの腕のなかにおさまった。

第１１話　推理記者エイブラハム・アグリ【３】

第３話

雨足はますます強くなり、暗闇はさらに更ける。
「お前たちには聞きたいことがある」
パパティーノが「前戯は終わりだ。大人しく投降すればそれでよし、逆らうのであれば諸君に未来はない」と勝ち誇りながら、ナオミたちのもとへ剣をぶらさげて、コツコツッーと不気味な靴音ともにやってくる。その姿はまるで悪魔のようだ。

白馬の騎士たちは一斉に剣を抜いて、男と対峙する。
ナオミはマルコの足元に刺さっている剣に「来い！」と右掌をやり、深く念じれば剣はカタカタッと音を鳴らし、次の瞬間には彼女の手におさまっていた。
「…どうあっても、私に逆らうつもりか…」
パパティーノの言葉にナオミたちは一斉に頷いた。
「ならば」と男は剣を振りあげ、「生ける屍、眠りの神ヒュプノスの誘い（いざな）」と呟いた。
パパティーノの剣から神の形をした優美な霧が現われると、ロレンツォ、テル、ロロ、チャーリー、マイケルと順番に優しく抱きしめていった。霧に抱きしめられた少年たちは意識を失い、その場に次々と倒れていく。ココが眠りに落ち、次は自分の番だ。なんだか心地よい感じがする。

「…ユージン…」
聞き覚えのある名前だ。新渡勇人（ニト・ユージン）の夢、またあの悪夢だ。
誰かが少年の名を呼んでいる。蚊が鳴くような細い声、どうやら

女の人のようだ。それにしても自分はどこにいるのだろうか。まるで霧のなかにいるかのようだ。いや我が存在しない無のなかにいるといってもいい。

違う。自分はその場所に見覚えがある。

ここはユージン・ニトの家だ。だけど何だか変だ。廊下という廊下、壁という壁　血がこびりついている。騎士の姿をした男たちの亡骸が数体転がっている。何があったんだろう？

今のナオミは感覚だけの存在だ。

突き当たりの部屋に危険な香りを感じてか、先を急げとばかりに嫌な予感がする。案の定、部屋の前にそっとナオミが近寄れば会話が聞こえてきた。

「…フォルトゥナの使徒はお前で最後だ…」

フォルトゥナの使徒、プレイヤーキラーキラーと呼ばれる『ブルトン・サーガ』の運営側が送り込んだ、仮想ファンタジーゲーム管理人のことだ。

だが現実に目の前で起こっていることは、百五十年後の予知夢であるとしても、仮想ではなく、現実だ。しかも異常な出来事だといえよう。ネット世界、いやゲームでのいざこざが現実の世界で“殺人”というかたちで発展したというのだから。

しかもなんだ、コイツらは！

黒い怪しげな仮面をかぶった数人のマントの騎士たちが、一人の男を取り囲んでいる。息苦しそうに眼鏡をかけた男は、仮面の騎士の一人に喘ぎながら言った。

「お前たちが何回、何百回と使徒を殺そうとも、フォルトゥナはすぐに新しい使徒を任命し、お前たちを追い詰めるだろう。これがフォルトゥナの世界の掟だ」

男は息絶えた女の人を抱いている。察するところ彼女がユージンの名を呼んでいたのだろう。残念ながら虚ろの瞳に半目のままの彼女の魂は、すでにこの地上に留めてはいないようにみえる。

「お前たちはどこの公国の者だ？　青の公国ブルゴーニュか？」

仮面の騎士たちは頭を横に振る。

「では白の公国ブルターニュ、それとも黒の公国…」

「…我々は銀の騎士団、独立勢力…」

会話から推測して眼鏡の男はユージンの父親、息絶えた女の人は母親のようだ。そんな彼らを取り囲んでいる仮面の騎士たちは、俗にいうプレイヤーキラーと呼ばれる者たちなのかもしれない。

「…お前たちは一体何を企んでいる…」

「目的などない、生き残るためだ。フォルトゥナは我々のことを『ウィルス』と呼ぶ。それに対してお前たちは『セキュリティ』と呼ばれている、これは生き残りをかけた戦いにすぎない」と男はユージンの父親に向かって、黒仮面を投げ捨て、すかさず隠し持っていた短銃（ピストル）で、バンッ！　バンッ！と男の胸に何発か銃弾をぶち込んだ。

数秒後。じわりと撃たれた男の体から血が滲みでてきた。

「…お、お前は、どうして…」

その驚き方からして、仮面の騎士とは知り合いらしい。

「まさかフォルトゥナの使徒の…なかに内通者がいたとは…」

ユージンの父親は『ブルトン・サーガ』の仮想世界でなく、なぜこの現実世界で、しかもこの日を狙ったのだといえば、もう一人の仮面騎士がその黒き仮面を投げ捨てた。

「なんとあなたも…、大賢者たるあなたまでも…」

男の声は絶望のあまり震えていた。

「この日、そなたの国は天災に遭う。『ブルトン・サーガ』の世界ではそなたは多くの部下に守られ、手が出せぬ。ゆえに我らは相応しい日を選ばせてもらった。そなたの亡骸は津波が持ち去ってくれ

る」

大賢者は声からして、かなりの老齢のようだ。しかもこの声、どこかで聞いた覚えがある。

「貴様らに…フォルトゥナの…天罰がくだらんことを…」

「フンッ！　女神の犬ごときがなにをほざく」

男は腰に引っ提げていた剣で素早く鞘から抜いた。

一瞬、何が起こったかは分からなかったが、自分の足もとに男の……ユージンの父親の頭がゴロッと転がっていれば、さすがのナオミも何が起こったかは分かった。ユージンの父親は頭と胴体が離れ、ビクッ、ビクッと痙攣を起こしている。首からは血が噴水のように流れている。

予知夢か悪夢かは別にして、人が殺される夢なんて、お世辞にも気分が良い夢とは言いがたい。にしても彼らの話によれば、ユージンの父親はゲームの世界に魂と肉体をトリップできるらしい。百五十年後はなんと不思議な世界のことか。

？？？？ああ、なんだか瞼（まぶた）が重い。何ともいえない睡魔が襲ってくる。

「光の権力、守護聖人イヴの拘束（バニッシュ）」

その声とともに発動した光の衝撃派が、得体の知れない霧を瞬時に晴れさせた。ピカッ、ピカッーと歯車の間が光り、ガラガラピシャーンッと雷鳴が何度も轟いた。気がつけば、白馬の騎士たちの前にあの男が立っていた。

第１２話　推理記者エイブラハム・アグリ【４】

第４話

霧が晴れるとともにロレンツォ、テル、ロロ、チャーリー、マイケル、ココが眠りから目を覚ました。彼らの目の前には片腕の顔刺青の男、サンチョ・ボブスリーが静かに立っていた。

「ねえ、テル。死にかけた気分はどう？」

こんなジョジョの囁きに「ゲロを吐いた気分と一緒だよ」とテルがぼやいた。

すなわち最悪ということだ。

ナオミたちの前には英雄のようなサンチョ・ボブスリーがいる。彼らは瞬時に目の前の出来事を悟った。ボブスリーが自分たちを助けにきてくれたのだ、と。

「ここは俺に任せろ、ヤツは俺に用事がある」

男の目は鋭く、Ｊ・パパティーノを凝視している。

「フンッ、やはりな。ガキどもに匿われておったか、ボブスリー」

ラインハルトたちが動きだそうとしたが、パパティーノが「お前たちでは、ヤツの相手は務まらん」と護衛の動きを制止した。パパティーノが男に剣をむければ、ボブスリーはぶつぶつと呪文を呟きだす。

悪魔教会と同じく、激しい魔法戦が繰り広げられた。

魔法剣と魔法剣のぶつかり合いといってもよい。空気がいつの間にか大海となり、パパティーノにめがけて空気の人食い鮫が襲い掛かったと思い気や、パパティーノは覇気でその魔法結界を打ち破るといった、緊張感が漂う魔法戦だ。

「黒き魂は黒き呪いによって、消え失せるがいい！」

毒をもって制すといってもよいのかもしれない。しかしパパティーノの場合、中途半端な毒ではない、猛毒だ。しかも即効性の、と付け加えたほうがいいだろう。

「邪悪な蛇よ、黒き魂を食い尽くせ！」

ボブスリーの言葉に反応するかのように、伯爵の右手の黒い炎がみるみる大きくなり、蛇の形となった。

「この炎はやがてお前の魂を喰らい尽くすだろう」

これは黒魔法だ。ボブスリーは黒魔法にも通じているのか。

「『蛇女（ゴルゴン）の呪い』まで使えるとはな」

パパティーノは驚きのあまり声をあげた。

「運命に立ち向かえと、運命の女神が授けてくれた力だ」

?:?:?:運命の女神が授けてくれた力？　どういう意味だろう？

蛇女（ゴルゴン）、毒牙を持ち、髪の毛の代わりに生きている蛇が生えている女神になり損ねた魔物である。神話によればその顔を見た者は石にされるとか。その石にされる呪いが蛇女の呪い、時間をかけて相手を石化させるものだ。

「だがそんな呪いでは、残念ながら私は殺せんな」

パパティーノは右脇に剣を挟むと、勢いよく上に振りあげた。

男の手から蛇の形をした黒い炎が纏わりついている右腕を斬り上げた。腕が身体から離れると同時にブッシューッと噴水のように鮮血が散った。この衝撃的な出来事にテルは顔をしかめ、ナオミは生唾をゴクッと呑んだ。皆が蒼然とするなか、男は剣で斬り落とした右腕を突き刺して、虚空に投げた。

円を描くようにパパティーノとボブスリーの真ん中に、腕はベチャッと嫌な音をたてて地面に静かに落ちた。黒い蛇はあいかわらずはぜている。

「ボブスリー、悪魔の生贄になるがいい！」

パパティーノは剣を地面に勢いよく刺すと、ぶつぶつと呪文を唱え始めれば、地面に黒い六芒星、いや正確には星型正多角形ではない、不恰好な六芒星の魔法陣が現われた。これはクロウリーの六芒星といわれるものだ。

「…悪魔召喚、バフォメットの契約…」

邪悪な空気のよどみを感じたと思いきや、ヤギの頭に黒い翼をもった悪魔が六芒星から前屈みになって現われた。その巨大さは半端ない。歯車の間の三分の一は占めているといってもよい。天井が高いとはいえ、バフォメットの威圧感にナオミは鳥肌が立った。

威圧感漂う雰囲気の中、ヤギ頭の悪魔は細い目を開け、自分を呼び出した者を睨みつけた。

「…汝と我は契約を交わす…」

悪魔バフォメットはこの世のものとは思えない、おぞましい声で唸った。

「…生贄はなんだ…」

「わが右手…」と男がいえば「…汝の右手は余を召還させる代価…」とバフォメットは腕を組み、ナオミたちを細い眼で睨んだ。無言の殺気というものだろうか、ナオミは心を射抜かれた感じがした。わなわなと恐怖感が沸き起こる。

パパティーノはバフォメット相手に「最後まで人の話を聞け」とぼやいた。

「わが右手の再生、代価はサンチョ・ボブスリー…」

バフォメットは確認ため、男の言葉を復唱した。

「生贄はサンチョ・ボブスリー、代価は汝の失われた右手。汝の願いを聞き届けよう」

バフォメットが「悪魔の契約は結ばれたり」といった瞬間、ボブスリーの身体が泥濘にはまったように、地面に沈んでいく。ナオミは必死に彼の身体を持ち上げようとするが、残念ながら悪足掻きに

すぎない。
「サンチョさん！」
「俺のことは心配するな」
もう肩まで男は地面に沈んでいる。ナオミはボブスリーの右手を握って離さない。言葉を一言二言と交わすなかで、剣を握ったも右手だけが呑みこまれずに残っていた。ナオミは剣を握りしめるその手を力いっぱい両手で握った。
男の右手にはナオミの涙がポタポタッと零れ落ちる。
「…泣くな、俺は戻ってくる…」
「で、でも…もう…」

男は戻ってくるといったが、ピックル・タナカの悪魔祓いの講義では『悪魔召喚、バフォメットの契約』において、契約と引き換えに死者の国に連れてこられた生贄が、この世に戻ってくることはまず不可能だと学んだ。
ボブスリーが冥界に引張られると代価にして、パパティーノが自ら斬り落とした右腕の付け根の部分は、から形成するかのように血管から神経、骨へとみるみるうちに再生されていく。

もう男の右手は握りこぶしの山の部分しか見えない。
「俺は戻ってくる。必ず君を守るために、運命を変えるために！」
そういってナオミの両手から、男の右手が地面に沈んだ。
数秒後、今度は天井からドサッとボブスリーが降ってきた。しかし意識はない。
「…汝の願いは代価誓約によって成就されたなり…」
男が降ってくると同じくして、パパティーノの皮膚のない赤い腕は瞬時に皮がはられ、何事もなかったように蛇女の呪いを受ける前の右腕となった。契約を交わし終えたヤギ頭の悪魔は、静かに魔法陣のなかへと姿を消した。

「サンチョさん！　サンチョさん！」とナオミが呼びかけようが、身体を揺すろうが、ボブスリーはピクッともしない。胸に耳を当てればドックン、ドックンッと心臓の脈打つ音が確かに聞こえる、死んではいないようだ。いわゆる昏睡状態、植物人間といってもよいだろう。

？？？？彼は別の意味で死んだのだ。

もう目覚めることはない、そう思えばナオミは「うわあああ！」とボブスリーの身体に平伏した。耳につんざくような、心にガラスが突き刺さったような泣き声に、ロロは居た堪れずにそっと彼女の肩を抱き寄せた。テルはやりきれず、瞳を地面に伏せた。

「そもそもボブスリーごときが私を殺せるはずがあるまい」

ようやく殺し屋を始末できたとあって、伯爵は満足げに葉巻を吸った。

だが男は勘違いしている。ナオミもかつてパパティーノが自分の命を狙っていた殺し屋だと思っていたが、そうではなかった。同じようにパパティーノも、ボブスリーが自分の命を狙っていた殺し屋だと思っている？？？？確かにサンチョ・ボブスリーは彼の命を狙っていたかもしれないが、本当の意味の殺し屋ではない。

殺し屋は別にいる。ただ今、ナオミが分かっていることは、その殺し屋から身を守ってくれたボブスリーは死んだのだ。殺し屋にとって彼女を殺すには、またとない絶好の機会だということだ。ますます警戒は怠ってはいけない。

二人の死者をだして、もはや白馬の騎士たちは戦意喪失だ。

「いいな？　本日をもって白馬の騎士同盟は解散だ」

パパティーノの言葉にナオミはギュッと唇を噛みしめた。

男がナオミたちにだしてきた提案、白馬の騎士同盟の解散と引換えにアグリッパ悪魔教会での放火の件、諸々の盗みの件は罪に問わない。さらに聖教から悪魔教へと改宗するなら、退学や停学の処罰にある騎士候補生たちの復学を許可するというものだ。

この条件を呑むことは、屈辱以外の何でもない。悪に染まるということだ。

「今夜のことは一切口外してはならんぞ、これは領主命令だ」

うつむくナオミにマルコは握手を求めてきた。

息子のマルコ・パパティーノは調子に乗って「これが悪魔教の底力だ。君も思い知ったはずだ。もう白馬の連中と付き合うのはやめて、僕らの仲間入りするんだ。それが君のためになる」とナオミの耳元にそっと囁いた。悪魔の囁き以外に何でもないのだが、今の彼女に言い返す力など残っているはずがない。

第１３話　光と闇【１】

第５話

カリヨンの鐘が静かに午後十時の時を知らせる。
ようやく雨があがり、夜空には暗雲から大きな満月が静かに顔をだした。
「サー・ラインハルト警部、そこに転がっている野良犬の死骸は君に任せた。現場検証をしたあと、適当に書類を作って闇に葬りたまえ。ボブスリーの魂の抜け殻は、聖ハレルヤ病院の匿名患者の病棟に打ちこんでおけ。さあ、いくぞ。マルコ」

匿名患者の病棟、そういう意味なのか。

パパティーノはマルコを引き連れ、歯車の間から姿を消した。
続いて警察署長が「閣下のお手をわざわざ汚させおって、この浮浪児どもが！」と一喝したあと、ラインハルトを残してぞろぞろと引き揚げていった。
ココはアグリに両手を胸に組ませ、彼の瞳を閉じてやった。
「…ア、アグリ…さん、こんな結末ってないよ」
ココの頬からとめどなく涙が流れる。そんな少女にそっとハンカチを差し出してくる人がいた。ココが涙と鼻水をチーンッと拭いて「ありがとう」とハンカチを返せば、聞き覚えのある声で「どういたしまして」という言葉が返ってきた。

アレ？　この声は確かーーーと顔をあげてみれば、ココは思わず悲鳴をあげた。

「ア、アグ、アグリさん！」

「やあ、君たち。元気そうでなによりだ」
いきなり死んだはずのアグリの声が聞こえたので、ラインハルトは飛びあがらんばかりに驚いた。自分のすぐそばで死んだはずのエイブラハム・アグリがなんとも愉快そうに、ふっーと葉巻きを吸っているではないか。

「このまま僕が死んだら、三文小説もいいところだよ」
ココは何が何だかわからず、嬉しさのあまり彼に抱きついた。
死にきれずゴーストになったのだろうか。そりゃ、そうだ。あんな死にかたじゃ、誰だって報われない。虫ケラみたいに殺されたのだから。いや違う。革張りの黒い旅行鞄が開いている、きっとこれは魔法のトランクケースに違いない。彼は今までここに隠れていたのだ。
「名探偵！」
ラインハルトは叫んだ。
「あなたは伯爵に殺されたはずだ、僕はこの目でしっかり見たぞ」
ナオミたちもそのとおりだ、と刑事の言葉に頷いた。
「君たち。そもそもそこでくたばっているのは、僕じゃない」
「じゃあ、誰というですか？」
ラインハルトはうーん、と思わず唸り声をあげた。

これは人造人間（ホムンクルス）だ、と横たわっている自分の亡骸の顔をベリッと破った。
なるほどゴム皮の下には、理科の実験室にある人体標本のような赤い皮膚の人間らしい何かがあった。ナオミはミスリル鉱山でゴブリンに追われているときにも、同じようなものを見たことがある。身体の大きさは全然違うが一一一一。
ラインハルト刑事は「うえぇ、気持ちわる！」ととても楽しそうにいった。

「コイツは捜査段階で手に入れたものだ。人の命を喰らって命をつなぐ、錬金術の集大成ともいえる生命練成によって生まれた人造人間だ。命を弄び、神を冒涜する悪魔教徒のものだよ。コイツには五分、僕の命を分け与えたんだ。まあ、伯爵にはたったの三十秒で殺されてしまったがね」

「それであなたは、どこからこの気持ち悪い人形を手に入れたんですか？」

「パパティーノの屋敷からだよ」とアグリが打ち明けると、おもちゃ箱にしまいこむように、人造人間を自分のトランクケースのなかにしまい込んだ。

そういえばブルトン公爵の暗殺に使用したのは、人造人間だとあった。

しかも犯人は迷いの森の一味で、宮中の者だといっていた気がしないでもない。もしかして犯人はパパティーノかもしれない。

「いやはやあなたは悪趣味に毛が生えた男だよ」

ラインハルト警部は微笑んだ。

「これで僕、名探偵エイブラハム・アグリは死んだことになる」とアグリは満足そうにいった。その目は周到に用意してきた悪戯が成功して、ロレンツォやテルたち大喜びの少年とあまり変わらない。

「名探偵、一ついいですか？」

ラインハルト警部は顔を曇らせた。

「僕が殺された理由？　まあ、僕が事件の真相をつかんだと思ってくれればいいよ。それには僕がどうしても地下に潜る必要がどうしてもあるんだ、確たる証拠集めのためにね。で、これから推理記事はココ、君が代筆してくれ。僕は捜査で忙しくなるだろうから。安心したまえ、記事内容は電話石で毎回教える。のほうにはもう話を通してある」

というのはご存じのとおり、アグリは泥棒猫とサンチョ・ボブスリー、それから冤罪でモン・サン・ミッシェルに幽閉されている、

エンガチョの三つの事件をかけもちしているからだ。
「あなたは事件を掛け持ちするのが、大嫌いなお方なはずだが？」
ケネディ・ラインハルト警部は、これは珍しいとばかりに顔をしぶめていった。
「掛け持ちをしているつもりはないよ。僕の推理によればこれらはもつれた糸、この事件には三つのばらばらな謎があるわけじゃなくて、謎はたった一つ。じつは一本の糸になっている可能性が高いといっているんだ、どんなに複雑に絡まった糸にも必ず端っこはあるものだ。おかげで僕は伯爵に殺されたわけだから。そしてここにいる彼らは、これら事件解決には欠かせない僕の優秀な浮浪児探偵団といっておこう」
それでもナオミの顔は晴れない。理由は明白だ。本日をもって白馬の騎士同盟は解散させられてしまったのだから。
「じゃあ、隠れ家を変えればいい、簡単なことだよ」
アグリは簡単というが、自分たちに無償で隠れ家を提供してくれる人がどこにいよう。

「心当たりがある、少し待ってくれ」
アグリが「デブッちょ」といえば、彼の電話石がピ、パ、ポ、ピポッ、と音を鳴らした。
十五秒後、大声で「…うぃー、ひっく。ああ、アグリか。あ？今はスモーキーと白馬の騎士同盟のことを熱く語りあっていたんところだ、ひっく…」と酔っ払いの喚き声が聞こえた。

アグリは単刀直入にいった。
「パパティーノによって、白馬の騎士同盟が解散させられてしまった。そこで君が住んでいる『剣と盾』をしばらく彼らの隠れ家にする。今日はスモーキーのところにでも泊まりたまえ。後日、君の家は僕が用意するから」
「…ひっく、うぃー…」

酔っ払いは「わひゃりました…」と酔いつぶれた。
「話は聞いてのとおりだ。明日から君たちの隠れ家は剣と盾だ」
少し強引な気がしないでもないが、そもそも剣と盾の借り主はエイブラハム・アグリだとか。彼にいわせれば剣と盾はその友人のために自分が借りたものらしい。
「でもお友だち、怒らないかしら?」とナオミはさすがに怒鳴りこんでくるんじゃないか、とハラハラしている。
「そんなちっぽけな人間じゃないよ。それに君の友人でもあるんだから心配はない」
推理記者はナオミにパチッと目配せした。ナオミはその意味深な言葉に一体どういう意味だろう? と首をかしげた。

第１４話　光と闇【２】

第６話

隠れ家を変えるとともに、白馬の騎士同盟の名も一時的に変えることにした。

皆の意見は円卓の騎士とか、白騎士とか、どうもしっくりこない名前だったので、最終的にマイケルのあだ名「ドラゴンチップス」が有力候補になった。伝統ある白馬の騎士が一時的であっても、ポテトチップスの名前になるのは許せないらしい――ロレンツォはアグリに助言を求めた。

「同盟の名前はうーん、そうだな」

アグリはナオミの瞳をみて、凛とした声でいった。

「『ロアゾン』でどうだ？」

ロアゾンとともに――ナオミはその言葉を思い出した。

この言葉は一体どんな意味があるのだろう。

アグリに訊いてみれば、この言葉は「パパティーノには虫唾が奔る言葉だよ」ということしか教えてくれない。ジョジョは「きっと水虫になる呪いの言葉なんだよ」とぼやいた。

パパティーノには虫唾が奔る言葉、それが決め手となった。

解散させられた白馬の騎士同盟が名を変えて、ロアゾンとして復活することになったことはロレンツォやテル、ロロ、チャーリー、マイケルたちを喜ばせたが、ナオミは正直まだ喜べない。眠り続けるサンチョ・ボブスリーに目をやれば、抉られるかのように胸がズキズキッと痛む。

死んだわけじゃない、そんなことはわかっている。

「助けにいけなかったのは申し訳ない」
「ううん、いいの」
嘘だ、本当は助けてにきてもらいたかった。
「彼は冤罪だ。この僕が保証するよ」
アグリはナオミの肩に手をやって、優しく頷いた。
「彼は意思が強い人だ。必ず冥界から戻ってくるよ。君が信じてあげなければ、一体誰が彼を信じてあげるんだい？　信じる強さは何事にも勝る力なんだよ」
ナオミの頬から涙が滴り落ちた。
サンチョ・ボブスリーが冤罪だと聞いての嬉し涙だ。彼を信じてきたからこそ、彼が無実だということが何よりも嬉しいのだ。自分の命をも犠牲にしてでも、彼は自分を守ってくれる。彼は本当の意味で自分の騎士なのだ。
「警部、彼が意識を取り戻すまで、聖ハレルヤ病院に運んでくれ。パパティーノのいうとおりに秘密裏にだ」とのアグリはボブスリーの右肩に手をやり、ラインハルト警部は左肩に手をやった。

カリヨンの鐘が午後十一時を知らせる。
隠れ家ではテルの雑談で盛りあがっていた。先ほどまでの緊迫した空気が嘘のようだ。どんな話かといえば、テルがよくつまみ食いをするので彼の親方は、テルに鍋の番をさせるときは絶対に鍋ミミックを使うそうだ。
鍋ミミック、つまみ食い防止用の歯がついた鍋だとか。だけどそれでは鍋の中身がよくわからないことから、それでよく鍋の中身を焦がして、騎士メダルを没収されてしまうとか。

テルの言葉に五、六人の子どもたちが耳を傾けている。
「僕は親方に信頼されてないんだ。でも勘違いするなよ、僕はマイケルみたいに食いしん坊じゃないぞ。お腹がペコペコな少年に料理番をさせるほうが悪いのさ。お腹が空いて死にそうなとき、目のま

えの美味しそうなヤツが、僕のペコペコになった腹につまみ食いをさせるのさ。その度に親方は僕にこう聞く。『テル、ここに今さっきまであったビーフストロガノフはどこいったんだ』って。そして僕はこう答える。『ムッシュ、盗まれました』ってね。それから僕はずっと皿洗いさ、しかもこのまえなんか高級な料理皿を七枚も割っちゃって、親方はカンカンだったんだ」

「それでいてテル、君はどのくらいつまみ食いしたのさ」

今やテルは、チャーリーたちに一目置かれるほどだ。

「お腹がすいているときは鍋まるごとだったよ」

「君、それはつまみ食いっていわないよ」

「だったらなんていうんだい？」

「タダ食いっていうんだ、くすねるってことさ」

マイケルが胸をはっていった。

会話の途中、ナオミはエリクサの最高級、アルカヘストのことをアグリに訊いていた。

アグリは「ああ、あの万能血液のことだね」と興味のない返事をした。

「パラケルススの弟子の末裔のことなら心配ない、彼ならほどなく見つかった」

さすがエイブラハム・アグリ。アルカヘストといえば、明快な答えが返ってくる。

「これでデイム、ダ・カーポの呪いも解けるだろう。ただその錬金薬を作るにはある植物が必要なんだ。その植物の収穫は来年の三月だ、それまでの辛抱だよ。それにその薬はどうやら君にも必要なものらしい」とアグリはロロの頬を軽く右手で触った。

ナオミはふとライアンのことも思いだした。

「あのもう一人だけアルカヘストが必要な人がいるんです」

「おやっ」と一瞬だけ驚いた様子だったが、すぐに「さすが英雄の

娘ナオミ・ニトだ」と嬉しそうだ。
「分かっているよ、もう一人必要なのはライアン・ティソぐらい」
ナオミはこの人なら、きっと二人の病気を治してくれるだろうと心の底から思った。そして初めて頼もしい大人の味方をえたと思った。この人なら必ずロロ、ライアンを助けてくれるに違いない。ついでに黒ヤギになったダ・カーポ先生も…。

第１５話　光と闇【３】

第７話

恐怖のあとということもあって、雑談は大きく弾んだ。

ロレンツォが懐中時計をみれば午前六時だ。神々しい朝の光、目覚めの光が歯車の間にもさしてきた。朝のカリヨンの鐘の音は清々しい。時計塔からの朝焼けは、アッパータウンの朝の景色はそれは何とも美しく、街は希望という黄金の絹衣（ヴェール）に包まれる。建物という建物が朝露で輝いてみえた。

闇は光によって退散し、希望は光ともにナオミたちの心に再生した。

「さあ、君たち。『剣と盾』に引越したまえ」

アグリの言葉に引率されるように、一行は大きく欠伸をするとぞろぞろと引き揚げた。

一時間後にはブルトンホテル広場についた。ロレンツォたちは眠たそうに万年時計台を見上げた。負けるということはどんなことか、ナオミは昨日学んだ。本当に惨めだった。目先が真っ暗の闇に覆われ、死の恐怖さえも感じた。すべてが未来さえも闇に支配された気がした。

敗北を知れば人は強くなる――そう戦いはいつでも始められる、そのことも彼女は学んだ。

仕事がある者は仕事へ、皆、朝の準備は忙しい。

チャーリーが何かを思い出したかのように、マイケルにチラッと振りかえった。

「マイケル、足長のパン屋に行くのを忘れちゃだめだぞ」マイケルは意味深に頷き、チャーリーに「まかせて」と親指を立て返したのがわかった。
「ねえ、ナオミも一緒にいくかい。どうせ帰り道だろ?」
マイケルは傍にいるナオミに振りむいた。
「どこにいくの?」
「町のパン屋、足長おじさんのパン屋さ」
ナオミはマイケルと一緒に古き洋館大通りへ歩いていく。
「僕らの支持者から失敬するだけだよ」
マイケルはクスクスッ小笑い。

「失敬って、それって盗むってことでしょ?」
ジョジョは(うん、泥棒ってことだぞ)と唸った。
ナオミは濡れ衣をきせられてから、いやあの牢獄での出来事から泥棒という言葉が嫌いになっていた。その言葉を聞くだけで虫唾が奔る。きっとロアゾンという言葉も、パパティーノにとって同じ意味をもっているに違いない。

「シッー、大声をだすなってば」とマイケルはナオミの口を押さえた。
そしてあたりをキョロキョロと見回して、忍び足で町のなかを歩いていった。その間、マイケルはナオミに自分たちの支持者のことは話して聞かせた。
「足長おじさんのパン屋、リンドバークさんからパンをもらっているんだ」
「リンドバークさんなら私、知っているわ。じゃあ、あなた、私の隣のお家に泥棒に入るわけ?」
顔をしかめるナオミにマイケルは「違うよ!」と声を荒げた。
「あの人は僕たちの支持者なんだ」とさらにマイケルは「…というのも今から一ヶ月ほど前なんだけどね。最初の二週間ぐらい前では

リンドバーグさんから、確かにパンを盗んでいたんだ。君ともすれ違ったりしたはずだよ」

そういえばそういうことがあった。いきなり物音がしたり、「くちゅん」というくしゃみがしたり、犯人はこの少年マイケル・コービーだったのだ。ジョジョなんかはあのとき本気でぶるぶるっと震えていた。

「そうか、お前だったのか」とジョジョの恨み節。

「僕はあそこのパン焼き部屋で、パンが焼きあがるのを今かいまかとまっていた。あそこは小さなパン屋だから、すぐ隣じゃ、おかみさんと娘さんがせっせとパン生地をこねているのがわかる。僕は薪場のところに隠れていたんだ。

ところが見てのとおり、僕は食いしん坊なんだ。

焼きあがったパンを袋にいれず、僕の口にいれちゃったんだ。パンが焼きあがったら食べ、焼きあがった食べていたら、ついに見つかっちゃってね。

あそこの小さな娘さんが『でっかい野ネズミがうちのパンを食べている』って喚いたんだ。もうこれで正直、僕は自分の人生は終わったって思ったんだ。ところがどっこい、リンドバークさんは僕の姿を見るなり『こりゃあ、確かにでっかい野ネズミだ』といって、僕をおかみさんと娘さんに見つからないように、奥の蒔きわり場に連れて行ったんだ。

それであの人は物珍しい動物を見るかのように僕をジロジロみて、『いやはや食うも困らないこの町で、こんなみすぼらしい少年を見たのは初めてだ。どうやら君はスリルを楽しむために盗みをやっているわけではないようだ。野ネズミくん、三十分ほどここでじっとしていられるかな?』

僕は頷いた。それからあの人は姿を消したんだ。たぶんアニタ婆かおまわりを呼びにいったんだと思ったんだ。それで僕はアニタ婆

にぶちのめされて、手下のハナコ・ゴーストに嘲笑われ、またおまわりにぶちのめされ、君と同じようにぶちこまれるんだって思ったんだ。それでつい悲しくなって、しくしくと泣きだしたんだ。

　すると誰かが僕にハンカチを差しだしてくれたんだ。その人はリンドバーグ夫人だったのさ。夫人は僕に『どうしていつもパンを盗みにくるの』と聞いてきたんだ。当然のように僕は『お腹が空いて死にそうだから』といってやった。それからしばらくしてリンドバーグ親方が仕事を終わらせて、僕の目の前に現れた。あの人のまわりにはアニタ婆もハナコ・ゴーストも、おまわりも誰一人いなかったんだ。それで僕はリンドバーグ親方に『おまわりを呼ばないの』って訊いたんだ。

　リンドバーグさんは『君が面白半分で盗みをやっているのなら呼んでいたかもな』といって、あの人は僕に『君には親方がいないのかい？』って聞いてきた。僕は胸をはって『僕にはいますけど、他の子どもたちの親方はパパティーノに破産させられ、捨てられました』といってやったんだ。

『君は友だちのために盗みをやっているのかい？』

『僕たち白馬の騎士の大半はそうです』

　僕がそういったら、あの人は『なんだって！　君が白馬の騎士だって？　俺も十年前まではその秘密結社に入っていたんだ。よくそこで悪さもしたし、冒険もしたよ』とさらに『つまり俺は君たちの先輩ってわけだ。白馬の騎士は勇敢な騎士たちの集まりだったんだなあ、いつのまに浮浪児たちの集まりになったんだね？　最近の白馬の騎士はいい噂をあまり聞かないな。ＯＢとしては心を傷めていたところだ。俺の耳にはいってくるのは、いつも畑のなかをうろついていたり、ニワトリを盗んだりっていう噂なんだ』とリンドバーグさんは唸っていたね。

　もちろん僕はみんなの名誉のため、リンドバーグさんたちに白馬の騎士がなぜか浮浪児たちの集まりになったのか、なぜ盗みをやっ

ているのかを説明してあげたんだ。それで親方はゆっくりと頷いてから、こういったんだ。

『なるほどそれで君たち白馬の騎士は浮浪児の集まりになったというわけか。白馬の騎士はキング・アーサーの騎士候補生の秘密結社だ。ＯＢとしてはそれを君たちの代で解散させるわけにはいかないな。よし、俺は君に誓いをたてよう。これから今までよりちょっと多めにパンを焼き、残った古いパンを君たちにあげよう。

だいたい古いパンはアニタ婆さんのところの夕食、朝一番で焼いたパンもアニタ婆さんのところの朝食になるのが、俺らのお決まりのルールさ。だけどばれないようにしなくちゃいけない、俺が君たちを支持しているってのがパパティーノの耳に入っちまったら、アイツはきっとこのパン屋を倒産させてくるだろうから。

ちなみに俺は朝六時きっかりにパンを焼くんだ。その朝一番の試し焼きのパンと昨日の古いパンを、そこのパンかごに置いといてやるから、君らは好きなだけパンを持って行きなさい。でも七時までだぞ、七時になればハナコっていう、ゴーストの女の子が朝食のパンをとりにくるんだ。アイツは三日前にある女の子を盗みの現行犯とやらで、その子に罪をかぶせたばかりなんだ。もちろんその子の無実は証明されたが――とにかくアイツに見つかったら、たぶん君らに弁解の余地はない。いいね？』」

マイケルは得意げに鼻をすすった。

「その日、親方は焼きたてホヤホヤなパンをかごいっぱいにくれたんだ。僕たちが飢えないでいられるのはリンドバーグさんのおかげさ。ときどきあの人はね」とマイケルは顔を輝かせてはナオミをみつめた。

「ハンバーガーやホットドッグも入れといてくれるんだ。ついでにフライドチキンもね」

マイケルの話が終わる頃、二人は古き洋館大通りにでた。

アニタ・ジブリ・パリのリンドバーグのパン屋からは、焼きたての何ともいえないパンの香ばしい香りが漂ってきた。マイケルはキョロキョロと周囲を警戒したあと、扉をトントンッと三回ほど叩いて、野ネズミの鳴き真似をした。どうやらこれが二人の合図らしい。

まもなく扉はカチッという音がして、掛け金がはずされた。

リンドバーグ親方は「いつもよりちょっと遅れているな。今日はミートパイを入れてやっといたからな。いいか、みんなで仲良く食べるんだぞ」とパン焼きかまから、できたてホヤホヤの長食パンを取りだしていたところだった。マイケルは本当に嬉しそうに「親方、いつもありがとう」といった。

二人がパンかごを手にもったとき、「ちょっと待っときな」とリンドバークは食パンのはしっこをパン切り包丁できり、「パンははしっこがうまいんだよ、うちの娘はこれが大好きでねえ」とかごのなかに入れてやった。するとリンドバーグはナオミの顔をジロジロみつめた。

「おやっ、お前はナオミ・ニトじゃないのか?」

ナオミはしまった、とほんの一瞬だけ顔をしかめた。

「は、はい。そうですけど…」

素直に答えてしまった、なんて自分はバカ者なんだ。

「ヒュー」と口笛を吹くと「もうどんな悪さをしたんだい?」と聞いてきた。ナオミは「あのティソ親方には黙っててください」と嘆願した。もちろんリンドバーグは黙っててくれる、と約束してくれたのはいうまでもない。

「うむ、アイツはいいヤツなんだが、過保護がたまに傷だな」

リンドバーグはパン生地をかまどにいれながら、ボソボソいった。

そして時間をみようと柱時計に目をやれば、なんと時計の針は午前六時四十五分をさしていた。

「あと十五分もしたらハナコがくるぞ」とパン屋は二人をけしかけたのだが、すでに遅かった。ハナコは決まって変なところからでてくる。今日はかまどのなかからスゥーッとでてきて、ナオミとマイケルの姿を見つけると「パン泥棒！　パン泥棒！」と喚きちらし、パン生地を投げつけていた。

「ハナコ、やめろってば！」とリンドバーグ。

「アニタ婆にさっそく知らせなきゃ、リンドバーグ親方はパン泥棒だって！」

「アハハハッ、パン屋がパン泥棒だって。こりゃ、おかしいな」というとナオミを手招きして「俺はこの子に台所まで、パンを運んでくれって頼んでいたんだよ」と少女の肩をパンパンッと叩いた。

「でもアニタ婆が最近、パンが少ないっていってたもん」

リンドバーグは焼きたてのパンをかまどから「だったらこれからもっと多めに焼いておくよ」と取りだしながらいった。

「でもあの子の傍にいる子はだーれ？」

「あれは焼きあがりのパンを配達してもらう従業員（アルバイト）だよ」

「初めて見るわ」

胡散臭そうにハナコは怪しい顔つきでマイケルをみた。

「そりゃ、そうさ。今日が初めてだからな。君、名前は？」

ここで本名をいうことは得策ではない。

「…ドラゴンチップス…」とマイケルは小さな声でボソボソいった。

二人がパン泥棒でないことが分かったらしく、ハナコはとても悔しそうに「ちえっ」と舌打ちするとトボトボ、台所のほうへ歩いていった。

「あー、びっくりしたわね」

「…うん、今のはちょっとした冒険だったよ。僕、ものすごくドキドキしたもん。あんな不細工なゴーストを見たのも初めてだよ」
マイケルはスーハーッ、スーハーッと息を整えながらいった。
「さあ、ドラゴンチップス！　これを君の仲間たちのところへもっていってくれ、駄賃はこのかごにはいっているパンでどうだ？」
このリンドバーグの申し出に、マイケルは嬉しそうに頷いた。
パン屋の親方はとてもいいことを思いついたらしく、これからは本物の従業員（アルバイト）としてマイケルを雇い、古くなったパンを君の仲間たちに配達してもらう、報酬はかごのなかのパン、そうすれば誰も怪しまないですむと提案するのだった。

第16話　最期の騎士チェス【1】

第8話

名探偵エイブラハム・アグリの死は、ラインハルト警部によって公にされることはなかった。これは彼が望んだことだし、パパティーノ卿が望んだことでもあった。

また白馬の騎士同盟が名を『ロアゾン』と改め、隠れ家を万年時計塔から『剣と盾』へと引越し、アグリが姿を見せなくなってから三ヶ月がたとうとしていた。

サンチョ・ボブスリーは相変わらず、昏睡状態から目を覚まさない。

ナオミは週に一度は必ず、彼のお見舞いにきていた。何度、彼の手を握りしめて「ねえ、サンチョさん」と呼びかけたことか。何度、彼の寝顔をみて自分を責め、ボブスリーの頬に涙を流したことか――それでも彼は一向に目を覚まさない。

九月の中旬、アッパータウンの町はブラジル・リオの謝肉祭（カーニバル）のように活気を帯び始めた。

チェスの試合まであと一週間、ナオミはこれまで何週間もの練習が終わるのだと思うと、心からホッとする。現在ナオミの騎士メダルは二八〇枚だ。ロロはすでに三〇〇枚を超え、テルとマイケルは二〇〇枚前後だ。チェスゲームの優勝チームには騎士メダルが五〇枚贈与されるとあって、テルとマイケルは張切っている。

誰かが隠れ家の扉をノックした。

「合言葉は？」

「モードレッド地区」

「その次は？」
「今年こそ打倒！」
ナオミの言葉にカチャッ、と掛け金がはずされた。

新しい隠れ家では、チャーリーがテルと卓上のチェスゲームをしていた。
テルは負けず嫌いなのか、自分が負けそうになれば「くっしょん」とわざとらしいくしゃみをして、チェス駒をゴチャゴチャッにしていた。チャーリーは「モードレッドみたいなことをするなよ」とぷりぷりして怒った。
「テル、お前がチェス選手なのが心配だよ」
「どうしてさ、チャーリー？」
「試合をむちゃくちゃにするからさ」

とくに女王（クィーン）役のナオミはキング・アーサー地区の人々から、大きく期待されていた。
テムズ男爵から借りた「『騎馬競技チェス』キング・オブ・キングスへの第一歩」という本はとても面白かった。
この書籍にはいろんなことが書いてあった。
例えばチェスゲームは地区同士の試合だが、小さな合戦であり、地区の誇りを賭けて戦う競技だとか。またチェスの試合会場はこの町だ。試合時間は三時間、聖剣が奪われていない地区は選手の生き残り数をもって、勝敗を決める。国王（キング）役や仲間との会話は電話石で使ってするそうだ。この競技ではよく接触事故や衝突事故、ときどき死亡事故などが起きるから注意が必要だとか。

古き洋館大通りに雄鶏の朝一番で鳴いた。
ナオミが洗面所に行く途中、アリサ夫人は「あらっ、がんばってね」と出会いがしらに、少女の寝ぐせでボサボサの髪をなでた。
台所には朝だというのにこってりした朝食が並べられていた。

ナオミはいつもより少なめの朝食を食べていると、ハナコ・ゴーストが「朝食、しっかり食べないと負けちゃうぞ」と銀皿にわんさかとパンケーキをおいてくれるではないか。そしてべったりとピーナッツバターをつけてくれた。

地味な嫌がらせだ、あいかわらず嫌なヤツだ。

「いちいちご丁寧にありがとうね」ナオミが気分悪そうにいった。

「どういたしまして」

午前九時になるとチェス選手たちが領主館広場に集まった。

広場では歓迎会のように、長テーブルが運ばれていた。またブルターニュ地方株式会社の旗とこの町の旗、各地区の旗の合計八旗のためのポールが立てられていた。各地区には露店商がずらりと食べ物を売っていた。その数、ざっと二百店はあった。

最期の騎士チェスにケンタウルス祭、万聖節（ハロウィーン）に仮面舞踏会、最後にパパティーノ卿が運営するアッパータウンカジノは、アッパータウンの五大名物だそうだ。なるほどどうりで観光客が多いはずだとナオミは思った。

集合時間、ナオミたちはキング・アーサー教会に集まった。

教会の前には馬屋番のヨセフが連れてきた、十二頭あまりのアンダルシアンの白馬が大人しく待っていた。馬もお洒落をしていて全身に馬具を身につけ、その上からキング・アーサー地区の紋章旗の布地を羽織らされ、その姿はまるで騎士も馬も、今から合戦にでかけるかのようだ。

見覚えのあるチェス選手にナオミが嬉しそうに声をかけた。

「ねえ、ロレンツォも参加するの？」

賢者（ビショップ）役の少年に声をかければ、「ロレンツォって誰だい？　僕はジョナサンだ」と明らかにどこからみても本人なのに、当の本人は自分はロレンツォではなく、ジョナサンだと言い張る。

「ロレンツォは停学中の身だ。僕はジョナサン、彼の従姉妹の従姉

母の従兄弟の双子、その友だちだ」
つまり他人ということだ。
「ナオミ、彼はどこからみてもジョナサンだよ」
テルがパチッと片目をつぶる。なるほどそういうことか。不当処分とはいえ彼は停学中だ、しかも生徒会書記だ。責任ある立場から公にチェスに参加はできない。だから名前を変え、鎧で顔を隠してチェスに参加しているのか。
耳を澄ませばユトレヒトの声が聞こえる。

「選手番号ＫＡのＰ七番号の選手、もうすぐ競技が始まります。五分以内に受け付けを済まさないと、残念ながら『失格処分』となります。失格の場合は罰則規定に基づきまして、騎士メダル二十枚没収となります」とそういえば先ほどから彼は、三回も四回もＫＡのＰ七番号の選手を呼んでいた。
「自分がチェスの出場選手だっていうことを忘れているんだよ」
テルはチェス選手に選ばれるだけでも名誉なことなのに、自分が選手だと忘れるなどもってのほかだ、とＫＡのＰ七番号の選手を罵った。

「きっとトリスタンあたりのグズだよ」
マイケル少年はドラゴンチップスをむしゃむしゃ食べていた。
「なあ、マイケルもそう思うだろう？」
「うん」少年はとコクッと頷き、お腹がいっぱいになるとパンパンッと、とても満足そうにお腹を叩いてみせた。頬には食べかすがついていた。
「ねえ、マイケルはちゃんと出場登録したのでしょうね？」
「ええっとね、あとからするよ、たぶん」少年はのほほんといった。
その言葉に一同は「もしや」と顔を青ざめ、マイケルに何番なのか尋ねた。すると返ってきた答えはやっぱり「ＫＡのＰ七番」だった。ナオミはあきれて額に手をやり、テルとチャーリーは「はやく

いけよ」と少年をけしかけた。

マイケルは自分がしでかそうとしている罪に気づいたらしい。あたりをキョロキョロとみまわすと恥ずかしそうに手をあげて、「ＫＡのＰ七番はここにいます、失格にしないで！」とあろうことか、広場の真んなかを突き進んでいった。そしてグズゆえにすってんと転び、観客たちはどっと笑いを声をあげた。

「ＫＡのＰ七番号の君、失格にしないから迂回してきなさい」

ユトレヒトは笑いをこらえながらいった。

第17話　最期の騎士チェス【2】

第9話

カリヨンの鐘がカランコラン、カラーンと町中に鳴響く。
ドーンドンッと空砲の音も聞こえる。とうとう時間が迫ってきたらしい、音楽隊の選手たちを鼓舞する演奏が聞こえてくる。足踏みしながら町を行進しているのは鼓笛隊だ、彼らは大歓声のなかを歩きながら行進していた。
旗手のテムズ男爵は大きく咳払いした。
「町の行進は僕たちキング・アーサーからだ。その先頭を歩くのは旗手の僕、行進はこの前の乗馬教室で教えたとおりだからね。まずは一番最初が肝心だぞ」
「先生こそ失敗しないでよ」
「マイケル、そういう君が一番心配だよ」
ナオミはありえない話ではないと思った。
「よーし、キング・アーサー地区の勇ましさを連中にみせつけてやるぞ、みんな！」
ナオミはテムズ先生と上級生たちのあとに続き、ときめきと胸揺さぶられる魂を落ちつかせるように息をふーっと吐いた。

大歓声が耳と心に響く。
キング・アーサー地区は、地区内の大通りを音楽隊の奏でる音楽に合わせて、威風堂々と行進する。地区の家という家にはキング・アーサーの地区紋章旗が立てられ、風になびいている。地区の人々は「がんばってね！」と手をふってくれる。ティソ親方やジャンを抱いたアリサ夫人、テルの親方の顔もちらほら。
路上には自分たちの雄姿を一目見ようと地区の人々がごったがえしていた。たくさんの人々が自分たちを見てはざわめき、親方たち

の「今年のキング・アーサーはやってくれそうだ」との声も聞こえてきた。

先頭のテムズ先生と数名の上級生は、アンダルシア種の白馬にまたがり、地区紋章旗を大きくかかげて行進していた。しかもただの行進ではない。地区の団結のみせ場、血と汗がにじんだ練習の成果ゆえのパレードなのだ。ときおりピシッと交互に整列したり、前進や後進したり、左右に分かれたりと華やかに行進した。

旗手の命令に従い、上級生たちが馬を華麗に操るものなら、路上からヒュー、ヒューと親方たちの大歓声と拍手が舞いあがった。

一時間後、六地区のチェス選手全員が領主館広場の真んなかに集まった。

「これより第五七三回チェスを開催したいと思います」

前伯爵執事のユトレヒトが大会の進行役だ。

「まず選手宣誓！　選手代表マルコ・パパティーノ！」

「はい！」とマルコは威張りつらすように宣誓台に登った。

そのあとから二人の付添人がモードレッドからやってきた。付添人の一人はハレルヤだ。彼らはそろって会場側が用意した剣を抜き、三本の剣を重ねること数秒、しだいにざわめきが起こった。

「どうしたのかな？」

「さあね、でも忘れていたらおもしろいよな」

テルは嬉しそうにいった。

先生方から一枚の羊皮紙がマルコに手渡されたあと、ようやくマルコの選手宣誓が始まった。どうやら本当に忘れていたようだ。ともあれ少年の選手宣誓はとても胸が悪くなるようなものだった。思ってもないことをペラペラと喋る、そのたびにテルが「見え透いた嘘をつくな」と悪態をついた。

「続きましてブルトン人愛国歌斉唱を行います」

ユトレヒトの厳粛な声とともに、愛国歌『わが祖父の国』斉唱の

とき、一人だけ音低がはずれている者がいた。マイケル・コービーだ、しかも少年はそれを大声で歌っているからたまらない。

愛国歌を歌い終わる頃には八本のポールには六地区の旗、この町の旗、ブルターニュ地方株式会社の旗が風になびいていた。

厳粛な空気のなか、ユトレヒトが大声で反則行為について話し始めた。

「試合時間は三時間きっかりです。各地区には審判が一人ずつつきます。また反則（ペナルティ）を行った場合、一回について競技時間を五分削減します。競技時間が減れば減るほど、最後のほうには身動きができなくなり、不利になります。ですから正々堂々と戦いましょう。ちなみに審判長は私ユトレヒトが務めさせて頂きます」

彼は競技場の真んなかで大きな時計の前に立っていた。どんな時計かといえば、六個もの時計盤がついたチェスクロック。たぶんあそこから反則をすれば、競技時間が減らされるのだろう。

六地区の騎士候補生たちは、自分たちの地区教会へとぞろぞろと引き揚げていく。

生徒会はチェスの実況中継のため、時計塔のなかにあるラジオ局を実景中継会場として設けていた。

時々「只今、角笛マイクのテスト中。只今、角笛マイクのテスト中」という教会のラジオから、ココの声が聞こえてきた。

キング・アーサー教会の祭壇の前に、チェス選手たちは試合はじめのテムズ先生のように、鎧兜で身を包んで現われた。一般席ではティソ親方一家が自分に手をふっているのがわかった。

アリサ夫人はジャンを抱きかかえながら「ライアンの分も頑張ってね！」と声をはりあげ、ジャンは「うきゃあ！」とジョジョ・ダックスフンドをよだれでベトベトにしていたし、そんなジョジョは顔をひきつらせていた。

「テル！　パパティーノのせがれをボコボコにしてこい！」

ブルトンホテルの親方の言葉に、テルは親指を立てて返した。

「皆さん、これは試合とはいえ、その昔、我らの祖国が白の公国ブルターニュと呼ばれていた時代の流れを汲む列記とした合戦だ。僕の指令は電話石で伝えるが、相手の電波妨害に遭った場合の対処としては、各自の判断に任せる」と国王役のテムズは一人ひとりに電話石を渡してながら、さらに「充電切れには気をつけることだ」と皆に注意を促した。

各地区の国王役は左記のとおりだ。

キング・アーサー地区　デビット・テムズ男爵
ランスロット地区　マリー・クーデンホーフ子爵
ガラハッド地区　ベリー・クローズ子爵（通称ベリー・グッドウィル画伯）
トリスタン地区　カール・エドモンド子爵
ガウィン地区　シャルル・パリオリ子爵
モードレッド地区　ジョルジョ・パパティーノ伯爵

ラジオからユトレヒトの声が聞こえる。
「では皆さん、用意はいいですか？」
たちまち「ビバ！　ビバ！」と声があがった。
「お互いにかまえて。よーい、はじめ！」

カーンッとチェスクロックの始まりの鐘が鳴った。

実況中継は「私、コクリコ・サクラダが務めさせてもらいます」とココの自己紹介から始まった。彼女の実況放送はとてもユニークで人気があるものの、ときどき冗談をいったり、チェス選手を茶化したりする。

かっこいい男の子がいたら、その子ばかりをえこひいきして放送するため、ユトレヒトから彼女にかかってきた「コクリコ・サクラダ！　騎士メダル五枚没収！」と電話石の会話が、電波を通じて聞

こえてきた。

第１８話　最期の騎士チェス【３】

第１０話

テムズは皆の前でパサッと町の地図を広げた。
そこには各騎士団の陣地、それから現在、移動中のチェス選手たちがチェスゲームの駒で現されていた。しかもどの地区に属するのかも地区の旗と色で識別でき、一目で分かるようになっている。
「この白い点が僕らだ」
なるほどしっかり十六名、キング・アーサー地区の教会に集まっている。そして純粋無垢な白は、白の公国ブルターニュの象徴ともいえよう。
「この地図と実況中継をもとに状況を判断し、駒を進める。早速、青色の兵士（ポーン）役二名がこっちにやってきている。兵士役は教会手前に待機しなさい」
数分後、ランスロット地区の兵士役たちがやってきた。
「チャーリー・マクドナルド選手はさすが！　ランスロットの二名の兵士役たちを討ち取りました。おやっ、東からはガウィンの緑色の騎士（ナイト）役二名が攻めこんできました。突っ走っていますね。残念ながらキング・アーサーの兵士役一名、討ち獲られました。ドラゴンチップスの封を開けているときに狙われたようです。
来年のチェスには、マイケル・コービーのドラゴンチップスは禁止にすべきでしょう。もはや彼はドラゴンチップスを食べるために生きているといわざるえません――おおっ、油断大敵です。ランスロットとガウィンが同盟を締結したようです。こちらにも吉報が届きました。キング・アーサーがガラハッドとの同盟に署名したとのことです。
おおっとそんななか、黒色のモードレッドが一斉攻撃にでました。狙いはガラハッドです。ガラハッドはキング・アーサーに援軍を要

請しています。さすがテムズ男爵、兵士役と騎士役、一名づつ援軍に向かわせています――これは大変なことだ。

西方からトリスタンが攻めてきました。東方からはガウィンの騎士役と賢者役四名が攻め込んできました。こんなことがあってもいいのでしょうか。なんとガラハッドはキング・アーサーの援軍が辿りつくまえに、逃げまどう国王役ベリー・グッドウィルは聖剣を奪われての脱落。

聖剣をとったのは女王役のリサ・パパティーノ。おやっ、モードレッドはガラハッドの陣地にも陣を移したようですね。現在、彼らの旗は二つに陣地に翻っています。いやはやこれを脅威といわずになんといえばいいのでしょう！　ではモードレッド地区からのインタビューを聞いてみましょう」

歓声が響いてくるモードレッド地区教会、生徒会の誰かが「ええ、こちら生徒会です。現在の心境は？」と騎士（ナイト）役のマルコにインタビューすれば、クチャクチャとガムを噛みながら「そうだな、キング・アーサー地区のアスパラガス！　一時間後はお前をタコ殴りにしてやる」とテルへの挑発の言葉が返ってきた。

ラジオを聴いていたテルは「串刺しにしてやる！」と唸った。

「二つの地区に攻められているキング・アーサー、全軍を率いて陣地を捨て、ランスロットの陣地に一斉攻撃にでました。女王役のナオミ・ニトの厳しい護衛のもと、国王役のテムズ男爵は城番役とともに移動中。騎士役のロミオ・ロートレック、ランスロットの兵士役三名に追いつめられました！　これはピンチです！　と思いきや兵士役三名、いきなりもがき苦しみ始めました。これは窒息の黒魔法、彼はどこでそんな呪いを覚えたのでしょうか。老婆心ながら彼の将来を危惧します。彼にこんな魔法を教えたマルボロ親方は、噂どおりのくされ外道です。親方のあだ名『悪党のなかのクズ』は納得です」

ブルトンホテルで昼間から酒を飲んでいたマルボロは、ラジオの声に「ケッ、余計なお世話だ、くそガキが！」と愚痴っていた。

時計塔のラジオ局から緊迫した空気が流れてくる。

「ランスロットの兵士役三名！　ああ、白目をむいて、口から泡を吹いて気絶。身体は痙攣しています。すぐさま修道騎士たち介護班が駆けつけます。え――――、あ、そうですか。兵士役三名、なんとか息を吹き返しました。この魔法でマルコ・パパティーノをノックアウトしてもらいたいものです」

「生徒会、個人攻撃はやめなさい！　とくに補佐役（デンコーチ）！」

ココとクーデンホーフの電話石の会話が、電波を通じて聞こえてきた。

「ランスロット地区子爵！　えこひいきはさすがといわざるえ…」

「コクリコ・サクラダ！　騎士メダル五枚没収！」

「ということなのでこのことは忘れましょう。この借りはチェスの女王役にでも晴らしてもらうことにして、ともあれこれ以上、ロミオ・ロートレックの犠牲者がでないことを祈るだけです。

おおっと、女王役ナオミ・ニト、ついにやってくれました。ランスロットの国王役クーデンホーフ子爵から聖剣を奪いました。ピンチをチャンスに見事に変えました。私との会話で彼女は油断をしていたのでしょうか」

たちまち大歓声がキング・アーサー席から湧きあがった。

ティソ親方やリンドバーグ親方は立ちあがって思わず「万歳！万歳！」と両手を天高くあげて喜んだ。アリサ夫人に抱かれたジャンは、「うきゃあ！」とジョジョによだれをなすりつけ、試合開始から五分でノックアウトされた、マイケルはあいかわらずドラゴンチップスを食べていた。

生徒会のインタビューに「あの子はライアンの再来よ、いえそれ

以上だわ」とアリサ夫人の興奮した声が聞こえる。時計塔から聞こえてくるラジオ放送に耳を傾けるナオミ。誰かが応援してくれる、それだけで勇気が湧いてくるのがわかった。

ココの実況放送は本当に的確だ。

「さてキングー・アーサーが新しい陣地を得たところで、彼らの古巣では不幸なことにトリスタンとガウィンは鉢合わせ、多少ですがトリスタンが有利！　ああ！　何ということでしょうか、トリスタン！　陣地にいた国王役エドモンドがモードレッドに討たれたもようです。これでは競技続行不可能。やはり本ばかり読んでいてはだめですね。トリスタン地区がぞろぞろと引き揚げていきます。ここで残念ながらハーフタイムのようです」

大歓声のなか、チェスクロックの時計が静かに唸った。

「ふーう、あと一時間か」

テルは額に汗を浮かべていった。

「今のところ生き残ったのはキング・アーサー十一名、ガウィン十五名、モードレッド十三名だ」と教会に姿を現した、ロレンツォは冷静に戦況を分析していた。

第１９話　最期の騎士チェス【４】

第１１話

一方、キング・アーサー騎士団陣地では作戦が練られていた。
「君たち、状況はすこぶるよくないぞ」
テムズ男爵はいつもとなく厳しい顔つきでいった。
「北にはモードレッド、南にはガウィン。つまり挟みうちだ。ここから考えられるのは同盟締結しかない」とテムズ男爵が説明するには、お互いに同盟を結ぶまえにどちらかを潰すにしても、結局は自分たちが不利になるという。
「ここは大人しくするほうがいいのでは？」
賢者役のロレンツォことジョナサンは大人の答えだ。
「それでは明らかに負ける、挟みうちにあってね」

一同は唸るも、妙案がでてこない。
大人しくしていては確実に挟みうちでやられ、だからといってどちらかに攻めいれば、勝利をしても人数は半分くらいに減っているし、そこで決勝戦にもつれこむと確実に負けるだろう。
「これを打開するには、西方のトリスタン地区の教会に移動せねばならない。そうなれば僕らを挟みうちにしようとした連中同士がぶつかり合う。そのとき弱った地区は僕らの不意打ちを恐れて、きっと同盟を結んでくるはずだ。僕は行動しない勝ち組よりも、行動する負け組を選ぼうと思う」
時間を見計らって、ユトレヒトがチェスクロックの鐘の音を鳴らした。とたちまちモードレッド地区とガウィン地区、二つの地区の姿が南北にみえた。キング・アーサー地区はすぐさまトリスタンの陣地跡に一斉に逃げだした。マルコたちは「憶病者め！」と彼らを罵った。

コクリコ・サクラダの実況中継がまた始まった。
「トリスタン陣地跡に本陣を移したキングー・アーサー。あと一分ほど遅れていたら、危ないところでした。さてキング・アーサーを挟みうちにしようと失敗した、二つの地区は互いに争い、モードレッドの兵士役が三名撃沈。今まで無敵を誇ってきたモードレッド、非常に危機的状態、いったん退いたようです」

各地区の教会は大歓声に包まれ、話声さえままならない。

「おやっ、犬猿の仲キング・アーサーにモードレッド地区子爵兼任伯爵パパティーノ卿が同盟の使者を送ったもようです。おおっー、これは歴史的出来事といえるでしょう！　テムズ男爵も同盟を受け入れた模様です。ガウィンもキング・アーサーに同盟を申し入れたようですが、残念ながら断わられてしまったようですね。おやっ、どういうことでしょうか。ガウィン、パパティーノ子爵に和睦を申し入れました。モードレッド、身動きこそできなくなりましたが、決勝戦進出は確定です」とラジオから聴こえてくる、マルコたちの喜びの声にテルは舌打ちした。

ガウィン地区が捨て身の一斉攻撃にでれば、キング・アーサー地区はどういうわけか陣地に女王役のナオミ、一人を残してモードレッド地区の陣地近くまで逃げこんだ。後ろには同盟を結んでいるモードレッド十名が控え、前にはガウィン十五名。たちまち剣と剣がぶつかり合う音が聞こえてきた。
「今だ、挟みうちにしろ！　徹底的に潰せ！」
パパティーノの声だ。
「なんて卑怯なんだ！」とロロが声を荒げた。テルは声をぷるぷると震わせ、怒りが絶頂に達していた。　マルコは生徒会の特派員から強引にマイクを奪いとると、「合戦に人の言葉を信じるほうが悪

いのさ」と大笑いする声が町中に響いた。
「本当に忌々しい連中だよ」
テルが歯を食いしばっていった。

「卑怯！　卑怯！　モードレッド卑怯！」
キング・アーサー地区から一斉に卑怯コールがあがった。

誰もがキング・アーサーはここで脱落すると思われたとき、いきなりガウィン側の審判が赤旗をふりあげて「ガウィン、国王役シャルル・パリオリが聖剣を奪われ、試合続行不可能」という声があがった。同時に町からは空へとどよめきの声があがった。

実況中継からはココが怒っているのがわかる。
「これは囮作戦です！　モードレッドが攻撃を仕掛けてくると、先を読んだテムズ男爵の作戦勝ちといえます。ですがこれほど心を読みやすい国王役は、私は今までみたことがありません。さすがモードレッド地区子爵！　トモロヲ・ブドリを追い出して伯爵の座を奪っただけあります。性根が腐っています、いえ悪知恵が働くといいましょうか」
愛馬マレンゴに跨った笑顔のナオミ、右手には聖剣を天高く掲げていた。彼女の姿は太陽の西日に照らされ、まぶしい。
「女王役ナオミ・ニト、さすが伝説！　我らの伝説、ここぞというときにやってくれました！　それこそ英雄の娘です！」
キング・アーサー地区教会はどっと喜びに沸いた、拍手さえ聞こえてきた。ガウィン地区の人々からも「敵ながら天晴れだ」と彼女の雄姿に拍手喝采だ。ただマイケルだけ変わらずドラゴンチップスをむしゃむしゃと食べていた。興奮のあまり食べるスピードが異常にあがっていたのは、書かずにいられないが。
ユトレヒトは両手をぐるぐるまわして、反則のポーズをとった。

「パパティーノ伯。同盟を結んでからの攻撃は反則行為になります。厳重注意と十分間、試合時間を減らさせて頂きます」
「フンッ、好きにしろ」
パパティーノはユトレヒトを見下していった。
「それから双方とも距離のある陣地までさがり、体勢を整えてください。五分後に決勝戦を行いますから」とすぐに五分後、ユトレヒトはチェスクロックの鐘を激しく鳴らした。
観客の歓声はますますひどくなった。

「とにかくここからは慎重にいかねばならんぞ」
ナオミたちは静かに頷いた。先ほどの戦いで騎士役と城番役を一名づつ失ったからだ。つまりキング・アーサーのチェス選手の生き残りは合計九名、対するモードレッドは十名、戦力は五分五分というところだろう。
一番最初にキング・アーサー地区の陣地に踏みこんできたのは、女王役のリサ・パパティーノだった。ナオミはひらりと彼女をかわしたが、それがよくなかった。四人人しか残っていない兵士役の一人がやられたのだ。そのあとで賢者役のジョナサンが彼女を追いかけまわした。
「ナオミ、大丈夫かい？」
そう叫ぶなり、近くにやってきたモードレッドの騎士役ハレルヤに戦いを挑んでいた。
チャーリーは敵方の賢者役や兵士役たちに追いかけまわされながらも、「こんちくしょうめ！」と喚きながらもなんとか生き残っていた。
一息吐くこともなく、今度は女王役のリサが陣地近くまで駆けてきた。いや攻めこんできた。今度はテムズ男爵の聖剣を狙っているのは明らかだ、このままでは彼が危ない。

ナオミはテムズ男爵を守ろうとリサと馬と馬、剣と剣の激しい攻防戦をくり広げた。攻撃しては守り、守っては攻めての大接戦に他のチェス選手たちは、自分の役目をすっかり忘れてしまったように二人に魅入った。

ナオミのほうがリサよりも手綱さばきがうまかった。

と突然、彼女はドシンッと体当たりというか、左右にぐらつきを感じた。ナオミはもうすぐではじき飛ばされそうになった。ハレルヤがわざと仲介にはいったというよりも、リサ・パパティーノに加勢したのだった。ナオミを挟んで左右からの一騎討ちだ。

「なんだよ、二人がかりで攻撃して卑怯だぞ」とチャーリー。

「審判！　一騎打ちは一対一が原則だろ！　今のは反則だぞ！」

テルの怒りの声にモードレッドの審判、ロエスレル・ドラゴンヌは聞こえないふりをした。

「おい、アイツに誰か、石をぶつけてやれよ！」

キング・アーサー地区から、ものすごい非難（ブーイング）の嵐が飛びかった。

するとモードレッド地区から陣中見舞いとばかりに、ボンッと砲弾が飛んできた。砲弾の正体は腐ったタマゴの石つぶてだ。運が悪いというか、少年を狙ったものかは分からないが、路上にいたマイケルは顔にもろに当ったせいで、ぐったりとのびていた。

これにはさすがのコクリコ・サクラダもムッときたらしい。

「ハレルヤ・ヤドリギはルールを知らないよっぽどのバカですね。いえ、あの顔をみれば誰だってルールが理解できないクソ野郎、あっ、失礼。ブタ野郎だと分かりますね。ブヒッ、ブヒッ、うるせえといってやりましょう」

「コクリコ・サクラダ！　個人攻撃はや・め・な・さ・い！」

クーデンホーフの怒りの声が町中に響いた。

「騎士メダル五枚没収！」

「…とまあデイム・クーデンホーフはキング・アーサーには大変手

厳しい人です。モードレッドは応援席のマイケル・コービーを殺しました。おやっ、失礼致しました。気絶しているだけでした。でも大勢の人は彼が死んだのでは？　とハラハラしたでしょう。彼のお見舞いには是非、ドラゴンチップス『火炎味』を！」

第２０話　暗殺者【１】

第１２話

一方、テルはマルコ・パパティーノと死闘を繰り広げていた。テルがナオミの応援に駆けつけようとすれば、マルコがそうはせないと間に割って入ったのだ。

「メキャベツ。お前、新しい結社を作ったらしいじゃないか」

マルコはテルの剣を受け止め、またそれを返しながらほざいた。

「バイソンっていうんだろう？」

「ロアゾンだ、悪魔教徒め！　お前はこれでも喰らえ！　それに誰がメキャベツだ！　明らかに字体が違うだろうが！　お前もロールキャベツが好きなほうか、え？」

テルはマルコに雷撃波を放てば、少年は「相変わらず芸がない」と電話石でそれを放電させた。

「悪魔召還」とマルコはクチャクチャッ、と噛んでいたガムをペッと吐き出して、「海の魔王クラーケンの魂をここに宿す」と呟けばガムがみるみるうちに巨大化し、巨大タコになって、恐ろしい唸り声とともにテルに襲いかかった。

ココはナオミのことを気にしながら、実況放送を続けた。

「キング・アーサー、ロロが次々とモードレッドのチェス選手を蹴散らしています。おおっ！　いやはやこれは大変なことが起こりました、テルがマルコの唱えた黒魔法の餌食となりました。マルコがテルを地面に叩き落としました――ドガッと嫌な音がしました。

また一人、モードレッドは人を殺しそうになりました。マルコが生み出した巨大タコはテルをお構いなしにバシバシッ、殴っています。有言実行とはいえ、これぞ本当のタコ殴り！」

テルがガクッと気を失いかけ「…こ、降参だ…」と白旗をあげれば、クラーケンは巨大化したガムにもどり、テルの身体をベチャッと覆った。ベチャベチャしたガムにテルは「お前の口の臭いは最低だな」と悪態を吐いた。

モードレッド地区の人々はとても愉快そうだ、大歓声が聞こえてきた。

ロロの計算によれば、キング・アーサーの現在の状況は、国王役と女王役、騎士役が一名づつ、兵士役二名の総勢五名が生き残っている。対するモードレッドは国王役と女王役、そして城番役が一名。兵士三名の総勢六名だ。

死闘は時間とともに激しくなっていく。

賢者役のジョナサンは、モードレッドの兵士役二名とともに相打ちとなって姿を消した。ハレルヤはロロの窒息の黒魔法でもうすぐで死にかけた。両陣営ともすでに国王役捜しに躍起になっていた。

現在、キング・アーサー地区の生き残りはテムズ、チャーリー、ロロ、ナオミの四名だ。実質的戦力といえば三名しかいない。チャーリーは聖剣護衛のため、テムズとともに行動している。自由に動けるのはナオミとロロの二人だけだ。

そしてロロは今、モードレッドの最後の兵士役をノックアウトさせていた。

これでモードレッドの戦力は女王役のリサ、城番役のマルコ、総じてパパティーノ親子の三名だけとなった。

「ここからは二手に別れよう。ヤツはマルコとともにいるはずだ。ナオミはリサ・パパティーノを頼む」

ナオミはロロの言葉に頷いた。

ロロが姿を消して十五分。ナオミは小さな物音でも警戒心を怠らない。一瞬、息苦しいほどの空気のよどみを感じた。快晴だった空がいつの間にか、暗雲に包まれている。嫌な汗が脇の下から流れで

てくるのが分かった。すぐ近くに、いや自分の背後にがいることは間違いない。この感じは何度もなく経験している。

殺気を感じ、ナオミは勢いよく振り返りざまに剣を抜いた。

「ふーっ。もーう、ロロ。驚かせないでよ」

彼女の後ろにいたのはロミオ・ロートレックだった。

と安心したのが束の間、ロロはナオミに剣を向けてきた。鋭い剣の突きを受け流しながらも、ナオミは困惑が隠せない。もしかして殺し屋はロロだったのか――いやそんなわけがない。落ち着け、落ち着くんだ。これは殺し屋の罠に違いない。

「お前は誰だ！」

「俺、ロミオ・ロートレック。お前の殺し屋…」

片言のブルトン語、なんだか異常な感じだ。ロロはニヤッと不気味に笑うと「お前、殺す。俺、お前、殺す…」と頭から言葉を捻りだすような口調、そのたどたどしい言葉にナオミはゾッと鳥肌を立たせた。

「いやお前はロロじゃない、私にはわかる」

ナオミは声を荒げた。

「…俺、ロロ…」

「いや違う、お前はロロじゃない」

「俺、お前のこと好き。お前も俺のこと好き。俺、知っている」と無表情のロロは、ナオミの首根っこを掴むと、乳房を揉むかのように胸をギュッと握った。

「…ち、違う！」

「…違わない。じゃあ、どうしてお前、嫌がらない？」

ロロはナオミの耳に息を吹きかけるように囁いた。彼の声が心に響く。お前は一体誰なんだ？　もしかして本当にロロなのか？

「そ、それは…」

少年の甘い声に、ナオミはグッと顔を赤らめた。
「…お前。本当、こうしてほしい。俺、知っている…」
「ち、違う！」
「いいや、違わない。だからお前、抵抗できない。いやしない」
ロロはニヤッと不気味に笑うと次の瞬間、わが目を疑うかのような出来事が起こった。胸を揉んでいた彼の右手がズボッと自分の胸のなか、いや心臓を鷲掴みにしている。血は出ていない。やはり目の前のコイツはロミオ・ロートレックではない。
「くそッ！」身動きができない。ドクンッ、ドックンッと規則正しく心臓が脈打っているのが、その手から伝わる。心臓を鷲掴みにする男の手が強まり、ナオミは蚊のような声をあげた。
「ロロ、やめて！」
「やめれない。だって俺、ロロじゃないから」

やはり、そうか。じゃあ、お前は一体誰なんだ？

「知れたこと、殺し屋だ。死ね、ナオミ・ニト！」
一瞬、ロロのたどたどしい、覚束ない言葉から大人の言葉に変わった。
それもドスが効いた顔と憎悪の睨み、太い声。ナオミはあまりの恐ろしさに何もできずにいた。
男が鷲掴みした心臓に力を入れようとした瞬間、「死ぬのはお前だ」と男の首がズバッと宙に天高く浮いた。返り血にナオミは悲鳴をあげ、地面に腰がついた。そんな彼女に手を差し出すのはリサ・パパティーノだ。
彼女の右手には血塗られた剣が握られていた。

「ど、どうして？」
リサの剣先から血がポタッーと滴り落ちている。
ベチャッと地に落ちたロロの頭を左手にぶら下げているのは、ジ

ョルジョ・パパティーノだ。息子のマルコもいる。「フンッ」とまるで馬糞をみるかのような、男は見下した眼つきでナオミを見た。
「テムズどもがお前の姿が急に見えなくなった、と騒いでいる。さっさと悪魔結界からでろ。私の手を煩わせおって」
「ロロは、ロミオ・ロートレックは――――」
ナオミの声は震えていた。

「死んだのはお前の命を狙っていた者の魂をいれた、ただのでくの坊だ。人間ではない。しかも私の屋敷から盗まれた培養中の人造人間だ。ご丁寧に姿真似の魔法までかけてある。敵はどうやら黒魔法の使い手、悪魔教徒のようだな」
ナオミの暗殺をあわよくば、パパティーノにでも擦りつける腹だったんだろう。首だけの人造人間が「お前には関係ないことだ、邪魔をするな！」と怒りの形相でパパティーノを睨みつければ、男は痙攣している胴体のほうに首を放り投げた。
「関係はないとはいえまい。ニトのガキが命を狙われるのはどうでもいいが、どんな理由でお前は私の命をつけ狙うのだ？　それが解せんな」
そうだ、まったくそのとおりだ。

自分が命を狙われる理由なんて、どこにもない。お前のような悪党が命を狙われるのは理解できるが、とナオミはパパティーノをみて心からそう思う。
「お前に答える義務はない」と人造人間に宿る、邪悪な魂の声。
「フンッ、敵は多いほど名誉なことだ」

男がパチンッと左手で指で音を鳴らせば、ロロの姿形をした人造人間はボッと炎に包まれた。跡形がなくなったのを確認すれば、伯爵は「解！」と気合をこめた。
瞬時に空間のゆがみが消え、瞬く間にアッパータウンの青空がナオ

ミの頭上に広がり、町中の歓声、とりわけココのユーモラスな声が彼女の耳に聞こえてきた――結界が解かれたようだ。どうやら自分は知らず知らずのうちに、あの用心深い殺し屋の術中にはまっていたようだ。

ココの張りあげた声が、ラジオ局から聞こえてくる。

「おおっと！　どこに隠れていたのでしょうか。ひょっこりと姿を現したのは今、血眼で捜していたナオミ・ニト選手です。いやこれはすごい、新種の魔法でしょうか。是非、この魔法でタコ殴りにあった、テル・ウォ・アボカドの仇を討ってほしいものです」

瞳を凝らせば、パパティーノも右手に怪我をしているようだ。彼の右手は血で真っ赤だ。もしかしてパパティーノも今の自分のように殺し屋に命を狙われたのだろうか。いや現状と先ほどの言葉から判断すればそうなる。

「お父様、お手当てを」とリサは父を案じる。

「案ずるな、大した怪我ではない。私は調べたいことがある。リサ、マルコ、ニトのガキから降伏を勝ち取れ。さっさとこの下らん、お遊戯を終わらせろ！」

「はい、お父様…」

リサが返事する頃には、伯爵はどこかに姿を消していた。リサとマルコがナオミを後ろと前から挟んで、交互に剣の先をむけた。

「君の負けだ、降参しろ」

受け入れがたいが、受け入れざるえない。

「…こ、降参…」ナオミが降参する、と呟こうとしたときだった。

突然、ユトレヒトが赤旗を天高くあげた。

「はい、二時間五十分、モードレッド地区はここまで！」

モードレッドのチェスクロックは、二時間五十分のところで停まっ

ていた。もう動くことは一秒たりともない。

「二回もの反則行為により、君たちの時間は二時間五十分だ。ちなみにキング・アーサーの制限時間は三時間、あと十分もある」

審判長ユトレヒトの声にキング・アーサー地区から、聞いたことのないほどの大歓声があがった。

第２１話　暗殺者【２】

第１３話

「あと一人、あと一人、あと一人！」
キング・アーサー地区からのかけ声が聞こえてきた。

「キング・アーサー！　プレッシャーを与えてはいけません！」
クーデンホーフの注意の声に地区内からはブーイングの嵐、これに腹をたてたクーデンホーフは「キング・アーサー地区の全騎士候補生に騎士メダル三枚没収！」と叫んだ。すると観客席から空き缶が彼女にめがけて飛んできた。十分以内に国王役のＪ・パパティーノを見つければ、自分たちの勝ちだ。
「大丈夫か」と自分に声をかけてくるロロを見て、ナオミは「無事だったんだ」とゆっくりと胸を撫でおろした。それにしても殺し屋は用意周到だ。隙を少しでもみせれば、つけこんでくる。十二分に用心しなきゃいけない。

電話石（モバイルビー）が一瞬、放電したのがわかった。
「はい、ナオミ・ニトです」
「僕だ、テムズだ。パパティーノは時計塔の領主の間だ。僕らも急いですぐそっちに合流するから、そこで待っていてくれ」というと電話は途切れた。

すぐまた電話石が放電した。
「僕だ、テムズだ。ヤツがいるのは庭園墓地だ。すぐにそっちに向かいなさい」

それだけいうと無愛想に電話は切れた。一瞬、空気のよどみらし

きものを感じたが、気のせいだろう。ナオミはどっちが正しいのかテムズに再度、連絡をかけようにもツゥーッ、ツゥーッと電話が通じない。

何回かけても通じない。いわゆる電波障害だ。

ロロは二手に分かれようというが、ナオミは先ほどの出来事もふまえ、用心のため二人で行動をともにすべきだ、と主張した。正論だ。テムズは電波障害に遭ったときは、個々の判断に任せるといっていた。ロロも彼女の言葉に従うのが最善策と考えたようだ。

数分後、教会墓地の門のまえに二人は立っていた。

蛇女（ゴルゴン）の顔を象った重厚そうな扉に手をやれば、勝手に扉は開く。

キィーッと軋む音、ナオミが二歩ほど庭園墓地に入ればバタンッと扉は閉まった。扉に手をやれば開かない。その瞬間、あの空気のよどみを感じた。

この邪悪な感覚、確かに身に覚えがある。殺し屋が何らかの行動を起こしてくるときの空気の揺れだ。

「どうやら前へ進むしかないようだな」

ロロの囁きにナオミは周りをみながら静かに頷いた。

二人は鞘から剣を抜き、ナオミは剣に炎を漲らせた。警戒心をこれほどまでかといわんばかりに研ぎ澄ませ、二、三歩進めば突然、漆黒の霧がナオミとロロを闇に誘った。

「ロロ、どこにいるの？　返事して！」

周到にまわりを見渡すも、ロミオ・ロートレックの姿がどこにも見当たらない。霧は二人の袂を別ちつつ、悪魔のような笑みを浮かべて、ナオミに襲いかかる。

息が詰まるほどの邪悪な何かを感じ、漆黒の墓標のなか、ナオミは霧のなかを懸命に走りにはしった。耳を澄ませばホーッ、ホーッ

と梟が飛び去るのが聞こえる。
ナオミは暗闇の森のなかに一人彷徨っていた。
本当にここは庭園墓地なんだろうか。アグリッパ悪魔教会のとき、こんなに広くはなかった気がする。いやもしかして違う場所なのかもしれない。両耳に手をやり、耳を澄ませば、ポーッと蒸気機関の汽笛が聞こえてくる――おやっ、霧の奥に駅舎らしき建物がぼんやりとみえる。

一瞬、女の人影が見えた。
確かにあれは銀髪の、あの女の人だった――気がしないでもない。
人影の正体を確かめてみようと影を追いかけて、辿り着いた先は真っ黒な寂しげな駅舎だった。半壊した扉に手をやれば、不気味な音とともにそのまま地面に朽ち果てた。駅舎はなにか悲しみに覆われている気がする。息をすれば、空気が鉄のような味がする。いや違う。これは空気そのものの味だ。悲しみの味ともいえる。

肌が焼けつくようにひりひりする。
誰もいない寂れたプラットホームの真ん中に誰かが背を向けて立っている――ロロだろうか。五歩ほど勇気をもって、前へ進んでみれば、それは黒い法衣を身に纏った悪魔教徒の姿だった。
パパティーノだろうか――いや違う。若い女だ。だが銀髪のあの女の人ではない。目を凝らせば黒い法衣と思っていたのは、血が乾いたものだった。
「あ、あの、すいません。ここはどこでしょうか？」
「ここは冥界、死ねる者の世界…」
「…死ねる者の世界…」
ナオミは現実を受け入れようと、彼女の言葉を復唱した。
じゃあ、自分は死んでしまったのか？　いつどこで？　自分の記憶が正しければパパティーノを追って、ロロと一緒に庭園墓地まで

行ったのは憶えている。

「いいえ、あなたはまだ死んでいない。だけどもう戻れない」

「ど、どうして？」

戻れないと聞いて、ナオミの動悸が高鳴った。

「だってここで死ぬ運命にあるのだから」と女は自分に振り向いた。その女の顔を見て、ナオミはおののきながら、ずるずると後ずさりした。それは見覚えのある顔だった――――そうそれは、それは自分の顔なのだから。

「そ、そんなバカな！」

ありえない。そんなのありえない。

その者は何もかも漆黒で統一され、言葉では言い表せない邪悪なものか、いや深い悲しみを肌で感じてか、ナオミはゾッと足首から首にかけて、ゾッと鳥肌が立った。ナオミはナオミをみるなり、待ちくたびれたとばかりに、悲しみの声をあげた。

「己の運命に挑む、勇敢なる旅人よ」

その声は悲しみで統一された声といってもよい。

「どうして運命に逆らう？」

ナオミはわけが分からず彼女の言葉を復唱した。

「私はお前に絶望を与える者」

次の瞬間、衝撃的な言葉にナオミは頭が真っ白になった。

「そしてお前はここで死ぬ運命にある」

「お、お前は誰だ！」

震える声でナオミはナオミに訊いた。

「だからいっただろう？　私はもう一人のお前だと――――」

「違う！　お前は嘘幻！　お前は私ではない！」

瞬間移動と呼ぶべきだろうか。
女は祭壇から瞬時にナオミの背後に現れると、振り返りぎわに剣を抜いた。ナオミはその凄まじい一撃を受け止めきれず、衝撃波とともにブワッと宙に浮き、ゴロゴロッと転げた。ゴンッと誰かの足にぶつかったと思いきや、その女の足だ。

「私は運命の意志によって、お前を殺す。だがお前は運命の意志によって生きようとする。運命は常に中立なる意志、我々を天秤にかけるだけだ。死ぬも生きるもすべてを決めるのはお前だ。さあ、あがいてみせろ！」
女はニヤッと不気味に笑うと、勢いよくナオミに喉もとに剣を突きたてた。ガッ！　と剣が地面に突き刺さる音が聞こえた。
剣と剣とがぶつかる音、女が少女の腹を蹴り飛ばす音、蹴り飛ばされ、また地面に転がる音が絶えまなく続く。ナオミは斬り刻まれ、喘ぎながら、もう一人の自分を凝視している。
「これが運命の大いなる意志だ」

自分を生かしているのは、それが運命だからだと思っていた。
だけど違った。運命は自分を生かしているのではなく、逆に運命は自分を殺そうとしていた事実にナオミは驚愕した。

じゃあ、どうして自分は生きているんだ？

運命は自分の死を願っているのに、自分はその運命の意志に背いてまで生きている。ナオミは女の剣を受け止めながらも困惑から逃れられず、必死に答えを見つけようとしている。
力の差は五分と五分かもしれない。
襲いかかる困難とそれに負けない心の強さの差ともいえる。血の流しすぎたのかもしれない。目が霞んできた。ナオミが膝をつくと、女を不適な笑みを浮かべ、ナオミの顎に手をやり、色気のある声で

「今すぐ楽にしてやる」と剣をふりあげた。

運命は常に困難を与える。それに挑んで勝つか負けるかの差だ。勝てばそれが運命となり、負ければまたそれも運命となる。じゃあ、運命の女神ってなんだ？　一体どこにいるんだ？　姿を現さないなんて卑怯じゃないか、このときナオミは慄然として悟った。

――運命の女神は、目の前にいるじゃないか。

運命の女神は自分自身なのだ。では自分を勝利に導く者は一体どこの誰なんだ？　運命の女神が自分のなら、そんなこととっくに分かりきっている。目の前の邪悪な姿のナオミが自分の運命を終わらせるなら、自分の人生を、自分の運命を切り拓くのは今の自分しかいない。そう決して他人ではない。

背伸びをするじゃない。ありのままの自分でいい、運命と戦い、競り勝ってこそ自分の運命を拓くことができる。否、ありのままの自分でいいからこそ、泣くような思いで戦ってこそ、ようやく運命を変えることができるといえよう。

「私は負けない！　だって勝つまであきらめないから！」

ナオミの瞳にあきらめない炎が宿った。

「お前なんかに運命を決められてたまるか！」

人間はいつでもその瞬間から、変わることができる。自分の意志次第で絶望を希望へと変えることができる。一人ひとりの生命のなかにある運命の女神は、意志次第で自分の味方に変えることができるのだ。

ナオミは勢いよく振り落される剣を身体で受け止めた。

振り落とされたと同じ勢いで、血がパッと鮮やかに咲いた。黒き姿のナオミが彼女の行為に戸惑うなか、ナオミは無の心で自分の分

身の胸を貫いた。

「どうして現実を受け入れようとしない？」理解できないとばかりに運命の女神は、そんな少女に目をやった。

「私は襲いかかる困難から逃げない。すべて受け止めてやる！」

ナオミの言葉に運命の女神は「よろしい。では目の前の運命を受け入れるがいい」と意味深に呟いた。数秒後、運命の女神は見覚えのある者へと姿を変えていた。あまりにも過酷な現実にナオミは手が震えていた。

少女の目の前に受け入れがたい現実が飛び込んできた。

「…私、なんてことを…」ナオミの頭は真っ白だ。パニックに陥っているようだ。それもそのはず、彼女の目の前にはロロがいたのだから。

第２２話　暗殺者【３】

第１４話

ふと目をやれば、彼の腹には自分の剣が突き刺さっているではないか。ポタッ、ポタッ――と血が止め処なく滴り落ちているのがわかる。剣の柄から手を外せば、その両手は彼の血で真っ赤に染まっていた。自分もロロの剣を身体いっぱいに受けている。

「ロロ！」と叫びながら、ナオミは倒れているロロに飛びついた。

「ロロ、ロロ！」

両腕でロロを抱き上げるナオミの頬は、ぼろぼろと大粒の涙でいっぱいだ。剣をグッと抜けば、血がどっと溢れでてきた。蒼白の顔のロロはでうっすらと目を開けていた。

顔中傷だらけで、腕はだらりと垂れ、まるで死人のようだ。

彼をこんな姿にしたのは他ならぬ自分なのだ。知らなかったとはすまされない。もしかしてロロもナオミ同様にナオミに自分の姿を見たのかもしれない。ロロはナオミに自分の姿をみ、ナオミはロロに自分の姿をみ、互いに運命の戦いに挑んだのだ。

「否定はしない、俺たちははめられたんだ」

慄然として、ナオミは悟った。

自分たちはここにきたんじゃない、連れてこられたんだ。一体誰に？　もちろん自分の命を狙っている殺し屋に。そうこれは自分の命を狙っている殺し屋が仕掛けた罠だ。冷静になれば誰だってわかる。アグリッパ悪魔教会と同じ構造じゃないか。しかも殺し屋は決して自分の手を汚さない。

「…ロロ。か、顔をみたの？　犯人は誰？」

名前さえ分かれば今すぐにそいつを殺してやる、ナオミの決意は固い。

「…残念ながら顔はみていない」

ロロの瞳が彼女を捉えた。

「泣くな、まだ終わっちゃいない…」

まだ終わっちゃいない？　どういうことだろう？

「ここは冥界の入り口だ、マルボロの悪魔召還のときに何度かきたことがある。俺たちの魂と肉体は別々のところにある。肉体はアッパータウン、そして魂は冥界」

「…肉体はアッパータウン、魂は冥界…」

ナオミの言葉にロロは静かに頷いた。

「俺はもうだめだ」

「そんなこといわないで」

ナオミの涙がロロの頬にとめどなく落ちる。

「ここは死者の国だ。お前は連中に見つかるまえに戻らなきゃいけない…」

ロロの口調が急に激しくなった。

「…れ、連中って？」

殺し屋は一人じゃないのか？

ロロの会話を遮るように何かの唸り声が聞こえる。ザクッと土を蹴る音に顔を上げてみれば、九匹もの恐ろしい四つ目の巨大な狼が自分たちを取り囲んでいる。血だらけの黒い身体、よだれをたらしている姿はおぞましいという言葉が似合う。

「ガルムだよ」

「…ガ、ガルム？」

会話を遮るかのようにガルムの群れが二人を取り囲んだ。

死者の国『冥界』の番犬だ。無闇に冥界へと近付く者たちを追い

払い、冥界から逃げ出そうとする死者を見張る黒き犬。もう戦う気力はなどない。

抵抗するだけ、もはや無駄だといえよう。歯痒いが今度は殺し屋の勝利だ。ナオミは剣を鞘にしまい、「さあ、喰え」とばかりに瞳を静かに閉じた。ガルムの群れはナオミが動けないと悟ったらしい、互いに目で合図を送ったあと、唸り声とともに襲ってきた。

――――ここまでか！

ナオミはグッと瞳を閉じた。

キャンキャンッ！　という声が聞こえてきた。五秒がすぎた。痛みを感じない、どうしてだろう？　と瞳を開けたとき、信じられない光景が目の前に広がっていた。

何者かが自分たちを助けてくれたのだ。

「大丈夫か？」

声をかけてくる男に自分たちは見覚えがあった。

男の名はロエスレル・ドラゴンヌ。いわゆる腰抜けの英雄だ。

腰抜けというあだ名は、一体どこの誰がつけたんだろう？　やはり噂は噂にすぎない。男は黒革のテンガロンハットに黒い外套で身を包んでいる。顔は黒いマフラーで覆い隠されている。

漆黒の剣客というべき言葉が似合う。

「どうして君たちがここにいるのかわからんが――――」

それは自分の台詞だ。でも今はそんなことはどうでもいい。

ナオミとは格が違うといえばいいだろうか。さすがにかつて人々から英雄と謳われただけあって、戦い慣れしている。腰抜けはガルムを次々と外套の下に隠していた小銃（ショットガン）でガン、ガンッ、と銃を連射して次々と地に沈めていく。

「魂が死ねば、君らは植物人間になる」

ナオミとロロの前でガルムと凝視する男がいった。魂だけが死ぬってどんな気分なんだろう――男のその言葉にナオミは聖ハレルヤ病院の、匿名病棟の、あの夫婦の姿を思い出した。

どういうわけか、ナオミの胸のロザリオが鈍く光るとともに、少女の傷は少しづつ癒されていく。しかしロロの傷は同じ聖金属の首飾りといえ、癒えてはいない。

そんな少女をみて、ドラゴンヌは「運命の女神は君を生かすことにしたようだ」と意味深に呟き、目をうっすらと細めた。

「ロロ！　ロロ！」

ナオミの問いかけに返事がない。

口に手をやれば呼吸をしていない。脈もない。

「お願い！　目を開けて！」とナオミはロロを抱きしめた。

少女の頬からぽろぽろとロロの頬に涙が流れ落ちた。もう立ち上がる力がでない、何もかも真っ白になってしまった。そんな悲嘆に暮れる少女にドラゴンヌがゆっくりとナオミに近寄ってきた。

「ロロ！　ロロ！　お願い！　目を覚まして！」

少女の言葉にロロがうっすらと瞳を開けた。

「…俺は大丈夫だ…」とドラゴンヌに抱きかかえられ、ロロの蚊が鳴くような声が聞こえる。いや大丈夫なわけがない。

第２３話　暗殺者【４】

第１５話

ナオミの耳にポーッ、ポーッ、と甲高い汽笛の音が耳に響いてくる。シャッ、シャッ、シャッと車輪が勢いよくまわる音も聞こえてくる。明らかに蒸気機関車が近づいてくるのが分かる。

ドラゴンヌが襲いかかる、ガルムを向かいの線路に蹴り落としたと同時にポーッと激しく音を鳴らして、勢いよく蒸気機関がプラットホームに停止した。

プッシューッ、と温かい空気が駅舎のなかに漏れた。

「こいつに乗れ！　そうすれば元の世界に戻れるはずだ！」

ナオミがロロに肩を貸そうとすれば、男は悲しそうに地面に目を伏せた。

「この子の運命はすでに決まっている。ここに置いていけ！」

「だめ！　ロロを置いていけない！」

なんてことをいうんだろう、とナオミは男を睨みつけた。

「この子は――もう娑婆世界には戻れない運命にある」

娑婆世界、自分が生きる世界のことか。

「それでも置いていけない、だって仲間だから！」

「だったら好きにしろ、止めはしない」

男は飛びかかってきたガルムの顔を殴りつけていった。

ナオミとロロが蒸気機関車に乗ると同時に、ポーッと甲高い汽笛の音がホームに鳴響いた。

蒸気機関車はゴトゴトッと車輪を回転させていく。ドラゴンヌもガルムの首もとに銃弾をぶちこむと、蒸気機関車の最後尾に飛び乗

った。そんな男を追ってガルム数匹も飛び乗ろうとしたが、外套の下に隠し持っていた投げナイフの餌食となって、キャンッ、という悲鳴とともに線路に沈んだ。

蒸気機関のシュッ、シュッ、シュッと規則正しい車輪の音が聞こえる。コンパートメントにはナオミとロロ、その向かいにドラゴンヌが両足と両腕を組み、黒いマフラーの中に顔を沈めていた。言葉のない沈黙、重たい空気がナオミの胸を圧迫するかのように押しかかる。とそんなとき、誰かがコンッ、コンッとドアをノックした。誰も返事をしない。

重たい空気のなか、「どうぞ」とナオミが返事をすれば、黒い外套に身を包んだ車掌が切符を拝見したい、と無言で右手を三人に差しだしてきた。男は顔がない、まるで透明人間のようだ。さあ、とばかりに車掌は右手を彼らに差し出す。

ナオミは戸惑い、ロロは喘ぎながら肩呼吸、ドラゴンヌは目を細めた。どうやら無賃乗車と悟ったらしく、車掌は目をグッと大きく見開いて、ナオミの手をギュッと握った。

腕が千切れそうなほど痛い！　少女が「痛い、放して！」と悲鳴をあげた瞬間、ドラゴンヌは外套から一枚の切符を取り出し、それを親指でピンッと車掌の頬に飛ばした。車掌は「二枚足りない」とばかりにチッ、チッ、チッと人差し指をたてた。

「ひとまず彼女の分だ、俺たちの分は次の見回りのときには用意しておく」車掌は手間を取らせるな――といいたげだ。

「…目障りだ、さっさと失せろ…」

ドラゴンヌは車掌を部屋から追い出した。

「あの切符は？」

「冥界から娑婆世界へと帰るための切符だ」

生きている者が冥界に行く場合、この切符をなくしてしまえば帰

れなくなる。ということは先ほどの一枚、きっとドラゴンヌの分に違いない。冥界で自分たちと出会うなんて想定外だったはずだ。彼は自分の帰りの切符を車掌に手渡したのだろう。

もし残りの切符を渡せなければ、ロロとドラゴンヌはどうなるのだろうとナオミが質問のために立ち上がった、そのときだった。蒸気機関車はポーッと警笛を鳴らし、徐々にスピードを緩め始めた。再びポーッ、ポーッと激しく音を鳴らして、勢いよく蒸気機関がプラットホームに停止した。

ホームはひっそりとしている。人らしき人はいない。

「この改札口を抜ければ、君は娑婆世界に戻れるはずだ。さあ、行きなさい！」

ナオミが列車から降りようと一歩踏み出したものの、どういうわけか、ロロとドラゴンヌは列車から降りようとしない。

「ねえ、どうしたの？」

ロロは悲しそうに瞳をプラットホームにやった。

「俺は行けない。どうしても行けないんだ、許してくれ…」

「どうして？」

ナオミは意味が分からない、と声を荒げた。

「切符がないからだ」とドラゴンヌは目を伏せた。

やはりそうか。

「じゃあ、かわりに私が――――」

「いや、この子は冥王の御許に逝かねばならない運命にある」

ナオミは元気な自分がその冥王とやらの御許にいく、と声を荒げつつも、ドラゴンヌは悲しそうに首を横にふる。

「それはできない。そもそもロミオ・ロートレックは悪魔契約により、冥王の権限によって、生きる時間を延長されている。本来ならすでに死んでいるはずだ。もう彼が生きられる時間はない」

悪魔契約？　その言葉は聞いたことがある。

バフォメットによって、サンチョ・ボブスリーの魂が冥界に引きずりこまれた場面が一瞬、ナオミの脳裏に浮かんだ。

「これがその悪魔契約書だ」

ドラゴンヌは懐から、契約書を取りだした。

「ちなみにこの契約書は俺のものだ」

意外だ、この男もバフォメットと悪魔契約を結んでいたのか。

目の前にある悪魔契約書には、そんなことが書かれている。契約書にはロエスレル・ドラゴンヌと悪魔バフォメットの名がある。仲介人として、ジョルジョ・パパティーノの名前があることにナオミは胸くそ悪い。

「悪魔との契約者は瞳に魂を封じこめられるか、両目に契約の刻印ウロボロスを宿す」

確かにドラゴンヌの両目には悪魔契約の刻印がある。

「俺の場合、もうすぐその契約は破棄され、魂は解放される」

なぜ契約が破棄されるのといえば「あと少しでバフォメットの望みを叶えてやれるからだ」と男の返事。どんな望みを叶えてやるのかは知らないが、サンチョ・ボブスリーもバフォメットの望みを叶えてやれば、契約は無効になるのだろうか。

「まあ、そういうことになるだろう」とドラゴンヌはどことなく歯切れが悪い。

当然だ。パパティーノ派の人間にとって面白くない話だろうから。

ナオミが男にサンチョ・ボブスリーを見かけたかと訊けば「残念ながら見かけてはいないが、ボブスリーはバフォメットの望みを叶えたと聞いている。いずれ娑婆世界に戻ってくるだろう」との言葉にどれほど安堵したことか。

「ねえ、ロロ。早く戻りましょうよ！」
ナオミはロロの手を握った。
「友だちなら、この子の気持ちをくんでやれ！」
ドラゴンヌは声を荒げた。

冥王とは魂を管理する王のことだ。冥王は冥界で自分が死んだ場面を何度も再現させ、罪を犯した者を何度も苦しませ、懺悔をさせる世界でもあるのだが現在の冥界はそうではない。約九年間、冥王は冥界の王として、その責務をこなしていないそうだ。もはや冥界にいることさえも疑わしいとか。
「お願い、早く行こうよ！」
ナオミはロロの右手をギュッと握り、蒸気機関車はゆっくり動きだすも、少年はそこから動こうとしない。
「この先に死者たちが集まる袋小路駅（ポータブル）がある。そこで二人分、娑婆世界へ戻るための切符を買えたら買ってみよう」
ドラゴンヌはロロの心の声を代弁した。聞き覚えのある遠吠えが耳に響く。
ガルムだ、なんて執念深いんだろう。
「さあ、行け！」と男は唸る。
「……」
「生きる意志を持って、死の狭間を奔りぬけろ！」
目のまえの改札口の先は、黒い廊下が果てしなく続いている。
ナオミは涙を拭くと「ロロのことをお願いします」と後ろを振り向かずに突っ走った。上下左右には人の顔らしい何かが蠢いているのがわかる。冥界で死にきれなかった者の魂だろうか。
自分の足を握る者、首に喰らいつく者を払い退け、欲望のなかを助けてくれと哀願する魂たちに目もくれず、ナオミは廊下の果てへと急いだ。

一一一一ああ、光が見える。

燦々と輝く四角の光が一一一あと少しでその先が見える。
まばゆいばかりの光がナオミを包みこんだ。「ああ、まぶしい」
と少女がゆっくりと瞳を開ければ、そこは聖ハレルヤ病院の集中治療室だ。

「お、親方…」ナオミの手を握っていたアリサ夫人は「ナオミ！」と彼女に抱きついた。
テルやマイケルは「万歳！　万歳！」と両手をあげていた。
周囲の状況から判断すれば、どうやらナオミは冥界から戻ってこれたようだ。
「ねえ、チェスはどうなったの？」
ナオミはテルのその後を聞けば、自分たちは庭園墓地で気を失っていたところを審判のピックル・タナカに発見され、ここに運ばれたそうだ。自分たちは二日間、意識がもどらなかったとか。ちなみに試合は残念ながら、リサ・パパティーノがテムズから聖剣を奪取したことにより、優勝はモードレッド地区に決定したそうだ。

マイケルはドラゴンチップスの封を開けながら「なぜ君たち、あんなとこにいたの？」とナオミに訊いた。
「なぜって、パパティーノがあそこにいるって…」
「パパティーノは領主館の執務室にいたよ、テムズ先生がいったじゃん。で、食べる？」
マイケルの会話を遮ち、隣の集中治療室でも「うおおー」と声があがった。
「ロロも目を覚ましたようだな」
テルは笑顔でいった。ナオミもつられて笑顔で笑った。だが本当の笑顔ではない。ナオミは突然、両手で顔を覆った。そんな少女の姿をみて、テルとマイケルは動揺を隠せない。そうなのだ、彼らは知らないけれど、ロミオ・ロートレックはいずれ死にゆく運命にあ

る。どうやら今回、彼は切符の購入を許されたようだが、ドラゴンヌの声が耳からこびりついて離れない。

――この子は冥王の御許に逝かねばならない運命にある。

第２４話　星降るケンタウルス祭【１】

第１６話

（ふーう、暑いのにご苦労様なこと）

アッパータウンは西から東へ、爽やかな秋風が吹いていた。

秋といってもまだまだ暑い、それなのに通りのあちらこちらでは人々がガヤガヤと騒いでいた。何やら店という店に豆電球を飾っているではないか――というのもそれは三日前からだった。

すでに季節は十月だ。ナオミがアッパータウンにきて、もう十ヶ月が過ぎたのだ。思えば去年の十二月にボブスリーとの出会いに始まって、円卓の騎士団に入団、そして様々な出会いと別れ、出来事が魔法の化学反応式のように起こった。

自分の未来を拓いてくれたサンチョ・ボブスリー、その弟エドガー・ボブスリーは黒猫という泥棒猫の首領（ドン）として、孤島の牢獄モン・サン・ミッシェルに幽閉された。もちろん冤罪だ。

その黒猫は自分たちを誘拐し、身代金のためにトモロヲ・ブドリはこの町の株を売ったためにパパティーノによって、彼は領主と伯爵の座を奪われた。パパティーノが暫定伯爵から、正式な伯爵になると同時にトモロヲ・ブドリは経営責任を問われ、つい最近、この町を追放されたと聞く。

ボルゴウッドの森では暗殺者（ヒットマン）に、再び命を狙われ、一角獣（ユニコーン）とサンチョ・ボブスリーとあろうことか、そのパパティーノに命を助けられた。アグリッパ悪魔教会では殺し屋によって、パパティーノと自分が罠にかかり、ともに殺されそうになった。また伯爵になったパパティーノの悪魔の契約によって、サンチョ・ボブスリーは冥界へと引きずりこまれ、白馬の騎士同盟は名を『ロアゾン』と変え、隠

れ家を『剣と盾』に変えた。

最後の騎士チェスでは冥界へと連れてこられただけでなく、殺し屋の罠にかかり、自分の姿をしたロロと死闘を繰り広げた。殺し屋の罠に打ち勝つも、それはロロを傷つけることだった。逆に負けていればロロを傷つけずにすんだろうが、おそらく自分は死んでいたに違いない。

そう自分の剣はロロに致命傷を与え、そのせいで彼は瀕死の状態となった。また冥界の番人ガルムの群れに襲われたところを、ロエスレル・ドラゴンヌに助けられた。彼は皆がいうほどの腰抜けでも臆病者でもなかった。ドラゴンヌのおかげで、自分が目を覚ますとともに、ロロも目を覚ました。そのことをロロに訊けば少年は「あれは悪い夢だったんだよ」と誤魔化すばかり。

敵と思っていた者が味方であったり、味方かなと思っていた者がやはり敵であったり、腰抜けと思っていた者がそうじゃなかったりと人生はいろんな意味で自分の期待を裏切ってくれる。

ジョジョはすでに暑さのため、本物の毛皮のようになっていた。

「ねえ、ジョジョ。そんなに暑いのなら毛皮、脱いじゃったらどうかしら？」

「そんなことしたら、僕はジョジョ・ダックスフンドじゃなくて、ジョジョ・プードルになっちゃうじゃんか。あの七月と八月、そして九月、僕はこれでやってきたんだ。十月もこれでやりとおしてみせるよ」

「あらっ、プードルもかわいくていいじゃないの」

「冗談じゃないよ」ジョジョ・ダックスフンドは鼻を鳴らした。

そのときアリサ夫人がジャンを抱いて、見習部屋の掃除にやってきた。すると彼女はナオミと目が合うや否や、「ケンタウルス、露ふらせ」と不思議なことをいった。

その言葉があまりにも謎めいた言葉だったので、しばらくナオミ

とジョジョはアリサ夫人を見つめて、首をかしげるとライアンの部屋に引っ込んだ。そこでもライアンは同じことをいっていた。
「ねえ、『ケンタウルス、露ふらせ』って？」
「そういえば君、知らなかったんだよね。この町の秋の星祭り、ケンタウルス祭の挨拶なんだ。ねえ、あの太陽を見てごらん」
ライアンは窓越しに白い太陽を指差した。
この町の秋は太陽が沈まず、夜が訪れない白夜が二週間も続くそうだ。それは夜の魔女の秋休みっていう噂だが、やはり夜がこないと誰もが不安になる。夜がこないから二週間、寝ないで仕事をする人もいるほどだ。

「そいつ、よっぽどバカなんだな」
ジョジョはゴロンッとうたた寝しながらぼやく。
「それで夜が帰ってくる、白夜の終わりをお祝いするのがケンタウルス祭。その始まりのときに毎年、同じ時刻に射手座から流星が流れてくるんだ。天文学者がいうには射手座流星群っていうんだけどね。だから白夜が終わるこの日、町のみんなは待ち遠しくなって、『ケンタウルス、露をふらせ』ていうのが挨拶になったんだ」
ライアンの瞳はこれとなく、輝いているのがわかった。
「うわあ、なんてロマンチックなの！」
ナオミは両手の指を組んで、瞳を一段と輝かせた。
「ねえ、ライアン。星祭りってどんなことをするの？」
いつのまにかナオミもわくわくしていた。
「あのアッパータウン領主館が光の塔になるのは、ぜっーたいに見物だよ」

町の騒がしさは夜空を彩るための騒がしさだ。
アッパータウンの人々が、夜の魔女を歓迎しているってわかるように、バラントン泉へと流れる小川に青い灯りを灯した烏瓜を流すそうだ。満天の星空の下、流れていく小さな青い灯りは、まるで天

の川みたいに美しく色鮮やかだとか。
　この日は「乗馬術」教室のデビット・テムズ男爵の特別講義、キツネ狩りにでかけることになっていた。この授業は騎士候補生全員が心待ちにしていた。ナオミはテルとロロに顔を合わすと、三人そろって「ケンタウルス、露ふらせ」と挨拶した。
　キツネ狩りの場所は小さな村と田園が広がる、アッパータウン牧場の一角だ。田園といっても田畑があるわけではなく、生い茂った広大な野原やボルゴウッドの森が不気味に広がっている。
テムズ男爵は、何十頭もの狩猟犬を引き連れて歩いてきた。
「ケンタウルス、露ふらせ」とテムズが紳士に挨拶すれば、鼓膜が破れるような大きな声でナオミたちも、ケンタウルス祭が今から楽しみだとばかりに声を張りあげた。

　耳鳴りがやんでから、テムズはコホンッと咳払いした。
「さてとキツネ狩りには剣ではなく、銃を使います。追いつめたキツネの生命を剣で奪うのは残酷ですから。ええ、キツネ狩りは貴族や名士たちの三百年の歴史あるスポーツですけどその反面、残酷さをともなったスポーツだね」
　猟犬が野生のキツネを追いつめて、馬に乗ったハンターが銃で仕留めるというキツネ狩りの残虐な手法に対して、最近では動物愛護団体などから「これはまさに動物虐待だ！」という批判が高まっていた。アッパータウンの町会議員たちも、これには頭を悩ましているとか。

「先生はどっちよりなの？」とナオミ。
「僕はどちらよりでもない中立でね。もちろんキツネ狩りは残虐な行為だというのは認めているし、その一方では農村の伝統でもあるんだ。反対の声も高まっていることも知っている。目を背けたくなるのも事実、生きるということは生きている者の生命を奪うことだからね。

確かに僕らは食糧に困って、キツネを狩るわけじゃないよ。そこで君たちにキツネ狩りをしてもらうのは、その残虐さを学んでほしいんだ。その…つまり、って何なのかってのを学んでもらいたくてね。それには生命を狩ることが一番だ」

牧草地にはポニーをはじめ、数十頭の馬でにぎわっていた。

テムズ先生は騎士候補生たちを三人一組にさせて、キツネ狩りの説明をした。各組には犬使いが随行する。

犬使いが放った猟犬がキツネを巣穴に追いつめたあと、騎士候補生たちはスコップを持って、巣穴をほじくり返し、隠れているキツネを巣穴から引っ張りだす。引っ張りだしたキツネが子キツネだった場合は殺してはいけない。それ以外は拳銃（ピストル）で命を奪う――というものだ。確かに残忍なスポーツといえる。

「僕はつくづくキツネじゃなくて、よかったと思うよ」

と、ジョジョはキツネに同情をよせる。

ナオミはロロとテルの三人で狩りのチームを組んだ。マイケル・コービーが三人のなかに入りたがっていたが、このときだけ三人とも知らんぷりを決めこんだ。

「さあ、狩りを始めるよ。準備はいいかい？　そうそう狩りのあとは楽しいケンタウルス祭が待っていますからね」とまもなく、狩りの合図である銃声がした。すると騎士候補生たちは一斉に猟犬を田園へと放して、ポニーに跨り、彼らのあとを追った。

第２５話　星降るケンタウルス祭【２】

第１７話

ボルゴウッドの森は果てしない。

一角獣と出会った聖なる泉近くで、休憩をとっていたマルコの班とも出会った。彼らはすでに一匹目のキツネを仕留めたあとらしくとても満足そうだ。少年はテルにめがけて、死んだキツネを放り投げてきた。

「めぐんでやる、どうせ一匹も狩れないんだろ？」

「いらないやい！」そういうとテルたちはマルコを無視して、猟犬たちのあとを追った。

町から離れているとはいえ、耳を澄ませばカリヨンの鐘の音がカランコラーン、カランコランとにわかに聞こえてくる。

今時刻は午後一時だ。

猟犬たちは群れをなして、やっと一匹の野ギツネを見つけたらしい。数匹が一丸となって一匹を追いまわしていた。その姿はまさに狩りの名にふさわしいと思ったそのとき、数頭の猟犬が吠える声が聞こえてきた。

「きっと捕まえたんだよ」とテル。

「嫌だな、私。キツネの死骸みるのなんて」とナオミ。

猟犬たちはキツネ穴に向かって吠えていた。

どうやら彼らはどう猛な猟犬の牙の餌食にならずにすんだらしい。すぐさま犬使いがやってきて、猟犬をキツネ穴から遠ざけた。これは狩りで定められたルールであり、キツネに恐怖感を与えないためだとか。猟犬たちの姿が見えなくなると、ナオミはジョジョに目をやった。

「…な、なんで僕なんだよ…」

「テムズ男爵から狩りのルール、聞いていたでしょう？」

キツネ穴は地中で複雑に入り組んでおり、総延長ははてしない。巣穴に逃げこんだキツネを追いこむには、小型犬を巣穴にもぐらせるのがちょうどいいのだ。五分後、ジョジョはキツネを追いつめたらしく、「ここにいるよ」と吠えたてていた。

「どこにいるの、ジョジョ？」

テルは適当に刺しちゃえよ、というがそうもいかない。

ジョジョの声を合図に、ナオミたちはやっとダックスフンドの居場所を突き止めた。スコップを取りだして、慎重に穴を掘り進むこと数分、泥まみれのジョジョを土のなかから発掘した。

途中で大雑把なテルが「ここらへんじゃないかなあ、えい！」とスコップを適当に地面に刺せば、ジョジョの手前に勢いよくスコップが刺さった。

あと五センチ、手前だったらゾッとする。

「…ふー。もうすぐで僕、テルに殺されかけたよ…」

泥まみれになって、何かに吠えつづけるジョジョを脇によけ、巣穴の奥でぶるぶると脅えるキツネの群れに目をやった。

巣穴には親キツネが一匹、成人した若いキツネが二匹、子キツネが一匹いた。まずテルが左手を伸ばして首根っこをつかみ、巣穴からキツネを引っぱりだした。最初は子キツネだった、子ギツネは狩りのルールで殺してはいけない。

「子キツネだわ、かわいい！」ナオミの声は裏返った。

テルは森奥深くに投げ捨てた。キャンッという悲鳴が鳴き声が耳に届いた。

「ふつうに逃がしてあげんなさいよ」とナオミ。

「バカ、親が殺されるところをみせてどうするんだよ。僕らは今から『殺し』をやるんだぞ」

そういうと今度は親ギツネがでてきた。
やることはただひとつだ――引き金（トリガー）を引くことだ。
少年が瞳をぐっと閉じて、ほんの少し人差し指に力をいれれば、巣穴に赤い鮮血が飛び散ったのがわかった。
硝煙がツーンッと鼻にくる。耳にはあの嫌な鳴き声が何度も木霊してくる。次はロロの番だったが、彼も何とか無事に『殺し』とやらをやり遂げたようだ。
「今度はナオミの番だよ」とジョジョ。
「…僕だって嫌なことしたんだからね…」
「わかっているわよ」とどこかやる気のないナオミの言葉。

少女が引き金を引くべきキツネは若キツネだった。
明らかにこのキツネの瞳をみると、ナオミと死に脅えているのがわかった。ナオミはためらいながら「ごめん、あなたの命は無駄にしないから」と引き金を引いた。ぐったりと息絶えたキツネをみると、なぜかナオミは悲しくなる。
さらさらした金色の毛なみを触れば、ほのかに温かささえ感じるではないか。このキツネは今さっきまで生きていたのだ。そう思うといたたまれなくなり、「ごめんなさい」と少女は殺したばかりのキツネをギュッと抱きしめた。

すると年老いた犬使いがやってきて、三匹のうち一匹を狩りの褒美として猟犬たちに放り投げてやってくれという。ちなみにこのとき生きたままのキツネを与えることは、法律で禁止されている。
「やわらかい若いキツネの肉のほうがいいだろう」
犬使いはナオミが殺した若いキツネをみたもの、「この子は絶対にだめよ！」とナオミが拒んだので、しかたなくテルのキツネを放り投げた。群れの真んなかに投げこまれた、キツネの死骸は無数の牙にかかり、バラバラに引きさかかれていく。
「恐ろしいわ、なんておぞましい光景なの」とナオミ。

猟犬たちのペチャクチャッと舌で味わう音が聞こえてくる。

ナオミは瞳をまんまるにして、みるからに凶暴そうな犬たちがキツネの肉をめぐって、争っている光景をただじっとみていた。

それは自分たちが奪った命がどこにいくのかを見届ける、せめても責任感からもしれない。ときどき猟犬（フォックスハウンド）たちがジョジョのほうにもチラッ、と目配せをする。

「お友だちになったの、ジョジョ？」

「冗談じゃないよ、あいつらは『お前も一緒に喰おうぜ』っていたんだよ。ーーーーったくあいつら、狂犬病にでもかかっているんじゃないのか？」

「どうして？」

「どう猛だからだよ」

「キツネと犬って、先祖は同じだと聞いたことがあるの」

「だったらこいつらは共食いってヤツだな」

ジョジョはさりげなくいった。

犬使いというぐらいだから、犬語がわかるのだろう。ナオミたちの会話に犬使いは額にぐっとしわをよせ、大きな澄みきった美しい瞳でナオミを真剣にながめて、やがてぽつりと呟いた。

「そんなに驚くことはない。人間たちのほうがもっと始末が悪い。犬たちは狩りの褒美として親戚を喰っておるが、彼らは命を無駄にはしておらん」

「人間たちのほうが悪いって？」

ナオミは驚いて、老人を見つめた。

「人間の世の中はなあ、人間が人間を狩ることがある。それでどれだけの人間を狩ったかどうかを競っておるってことだ。キツネ狩りは見てのとおり残忍じゃが、ヒト狩りはもっと残忍じゃ。キツネ狩りを廃止にするまえに、ヒト狩りを廃止にせねばならんという声もある」と年老いた犬使いはそういいながら、ふーっと葉巻きを吹か

した。

第２６話　星降るケンタウルス祭【３】

第１８話

さらに森を彷徨うこと数時間、ナオミたちはキョロキョロとあたりをみまわしてから、「迷ったみたい」と顔を青ざめていった。
「銃声が聞こえる方向に歩いていけばいい」とロロ。
耳を澄ませば、西の方向に銃声とキツネたちの何ともいえない悲鳴が聞こえてきた。
「あっちみたいね」とナオミが西の方角に歩いていこうとしたら、誰かが自分の手を引っぱっているのがわかった。
「もーう、テル。引っぱらないでよ」
「僕、何もしてないよ」テルはナオミに振り返っていった。
そうだ、自分の前にはテルとロロの二人が歩いている。自分は最後列だ、だとしたら誰が自分の手を引っぱっているのだろう？

ナオミは喉をゴクッと鳴らす。

警戒心を研ぎ澄ませながら、恐るおそる振り返ってみた。とたんに少女は「きゃあああ」と悲鳴をあげた。テルたちも何事かと後ろにふり返ってみたものの、すぐに「迷いの森の魔物かッ！」と悲鳴をあげ、剣を抜いた。
そこには汚らしい髭もじゃの男が立っていた。
男はニヤッと不気味に笑えば、ナオミたちは剣を一斉にかまえた。いつ襲ってくるかわからない、もしかしてこれがサー・エドモンドがいっていた、迷いの森に住むだろうか？　連中は残虐非道だと聞いている。もしそうだとすれば、どうやってはいってきたんだ？
まさか自分の命を狙っている暗殺者（ヒットマン）が放ったものか？

「ケンタウルス、露ふらせ」
どうやら人の言葉が喋れるらしい。
「お前たち、ケンタウルス祭の挨拶も知らんのか？」
髭もじゃの汚い姿の男の言葉に、ナオミたちは拍子抜けしたようだ。ともあれ目の前の男が人喰い鬼ではなく、ジョジョのいうとおり「小汚いおっさんだ」かもしれない。でもこれは汚すぎる。一瞬、野人かと思ったぐらいなのだから。
「剣をしまえ、ナオミ」
なんとなく聞き覚えのある声だ。
「それにテルテル坊主、それとそこのガキんちょ。ともかく剣をしまうんだな。そんなんじゃ、話もできんだろうが」

ナオミたちは互いに顔を合わせ、戸惑いつつも剣をゆっくりと鞘におさめた。
「ああ――――なんだ。ここはなにかと人目につく。場所を移動するからついてこい、わんぱくども！」
やはりこの大男は自分のことを知っているかのようだ、自分はまったく見覚えはないが。
「きっと僕たちを食うつもりだぜ」とテルは警戒を怠らない。
髭もじゃの男に案内されたのは、迷いの森とボルゴウッドの森を隔てている、いや正確にはアッパータウンと迷いの森を隔てている石灰洞だった。
洞窟の中は瓦礫となった祭壇やたくさん椅子の残骸が散らばっている。それにしても壁面は悪魔の絵や残虐な拷問の絵やら悪趣味だ。はっきりいって気持ちが悪い。
「ここは昔、悪魔教の礼拝堂だったんだんだな。まあ、洞窟礼拝堂ってヤツだ」
ということは、この男は悪魔崇拝の悪魔教徒かもしれない。

「それで元気にしちょったか、え？」

この声、このしゃべり方、この壁のような大男――もしかして、もしかして…。

「エンガチョ！」

ナオミは瞳を大きく開けたまま、突っ立っていた。

エンガチョは優しい瞳で大きく微笑んだ。テルは目が点になり、ロロは寡黙に目の前のドワーフを見つめ、ジョジョは「何日風呂にはいっていないんだ？　犬は嗅覚がするどいんだぞ！」と鼻を鳴らしていた。

今、彼は無実の罪でモン・サン・ミッシェルに幽閉されているはずだ。兄サンチョと同じく脱獄してきたのか？　ナオミたちは怪しそうにエンガチョを見つめた。

「エイブラハム・アグリのおかげなんだな、人造人間が身代わりになってくれておる」

今自分の代わりにモン・サン・ミッシェルに幽閉されているのは、アグリがパパティーノの屋敷から失敬した、小悪魔の魂がはいった人造人間だとか。まずそれが偽物だ、と見破るのは無理だとエンガチョは唸る。

「アグリが施した変装だぞ、見破るのは専門家でも難しい」

あの時計台のアグリに扮した、人造人間を思いだせば納得せざるえない。パパティーノでさえ見事に騙したほどの変装だ。暗い牢獄の中、看守がわかるはずがない。

「ここは悪魔教の教会なんだな。モードレッド地区に悪魔教会が建つまで、連中はここで悪魔崇拝の儀式をしておった。まあ、燃えちまったがな。いや燃えて当然なんだな」

ナオミとテル、ココは苦笑いした。

「そうそうアグリから聞いたぞ！」と男はいきなり激昂して「パパティーノのヤツが白馬の騎士同盟に解散命令を下しおったとか。思い出すだけで腸が煮えくり返るわ！」とエンガチョの顔は真っ赤だ。

怒り狂う獅子のごとく、険しい形相だ。これではその解散された白馬の騎士がアグリッパ悪魔教会を燃やした犯人だとは、口が裂けてもいえない。実際は殺し屋が放火したのだが。

「ここにずっと住んでいるの？」

ナオミはわざと話題を変えた。

「ちょっとまえまで、俺は『剣と盾』に住んでおった」

アグリが彼のために借りてくれたらしい。あのときアグリが電話していた声の主は、エンガチョだったのか。なるほど彼は自分の大切な友人の一人でもある。

「白馬の騎士はお前らの代で終わらしちゃ、いけねえ。伝統は守るためにあるんだ」

その日以来、エンガチョはドワーフ族の仲間の迎えがくるまで、人知れずここで世間を捨てた世捨て人のように、隠者として暮らしているそうだ。アッパータウンの数名の先生たちは、このことは知っているらしい。

「知ってのとおり、ドワーフとブルトンは停戦中とはいえ、まだ戦闘状態にある」

ナオミはミスリル鉱山での砲撃のことを思い出した。

「俺を直接迎えにくるもんなら、パパティーノのことだ。ドワーフが攻めてきたといいかねんだろう？　最悪、戦争に発展するかもしれん。迎えはひっそりと極秘でやらねばならん。なあに、もうちょっとの辛抱なんだな」

それでもだいぶん無理をしているのはわかる。

「エンガチョ、ごめんなさい！　私のせいで、私のせいで…」

ナオミは心の底からエンガチョに頭を下げ、本心から謝った。

彼をこんな目に遭わしたのは、他ならぬ自分なのだから。どんな非難中傷も甘んじて受けよう。少女のそんな健気な姿に「顔をあげてくれ」と男は優しくいった。

ナオミの頬にボロボロッと零れる大粒の涙を、男はその大きな人差し指で拭ったあと、「自分はしょっぴかれることをしたんだ。逮捕されて当然だ」といった。知らなかったとはいえ、いやにわかに知っていたとはいえ、悪に加担すればこうなることは分かっていたんだ。当然といえば当然なのだ。

「それに迷いの森のカーボネック城にはスプリガンのスモーキーが雇われておってな」

カーボネック城はパパティーノ家所有の別荘だ。幽霊城との噂もあるが。

「スモーキーって？」

ナオミは瞳をまんまるにしていった。

「俺っちの飲み友達なんだな。今はカーボネック城で宝の番人をしている」

スモーキーは生前、エンガチョと蛮勇の士として若かりし頃はタッグを組んで冒険した仲だ。冒険の途中、活火山の突然の噴火に遭い、不幸にもマグマの餌食となったものの、亡霊となった今でも友情は変わらない。

岩巨人（トロル）の亡霊スプリガンは女の子からドラゴンにまで、自由自在に変身できる。

エンガチョは迷いの森のなかにある、カーボネック城にスモーキーを訪ねては、毎晩のように酒を交わし合っているそうだ。電話のときもカーボネック城のバーで酔い潰れていた、気がしないわけでもない。

「…迷いの森への抜け道がこんなところにあったなんて…」

「さよう、一角獣の抜け穴でもある」

もしあのフェンリルのような森の魔物たちが襲ってきたら、どうなるんだろう。

「安心するんだな、その先は湧き水の溜り場だ。まあ、腰ぐらいの深さだ。聖なるバラントンの泉の力によって守られている。森側は

エルフ族の守衛もいるし、さすがに連中は襲ってはこれんよ」

会話の途中、狩りの終わりを知らせる、テムズのホイッスルが森に響いた。

仕方なく帰ろうとするナオミに男は小袋を手渡した。袋には騎士メダル五十枚がずっしりと入っていた。

「この洞窟で休憩をとっておった、ガキんちょの忘れ物だ。人の顔をみるなり、悲鳴をあげて逃げだしやがった。失礼なヤツだ、親の顔をみてみたいわ！」

今のエンガチョの姿をみれば、大半の子どもは逃げだすだろう。

第27話　星降るケンタウルス祭【4】

第19話

狩りの結果はマルコ・パパティーノ兄妹が堂々の一位だった。

彼らが狩ったキツネの数はざっと八匹だった。それに対して最下位はマイケルとチャーリーたちの班で、仕留めたキツネの数はゼロだった。仕留めたキツネたちは解体人が回収してまわった。あとで毛皮になるとか。

「君たち、キツネも殺せないほど勇気がないのかい？」

「黙れ、マルコ！　お前みたいな残虐なヤツと一緒にするな！」

「キツネ狩りは魔女狩りと一緒にしてもらったら困るぜ。この狩りはキツネの数を減らすための正当な行為であり、領主の伝統的競技なんだ。スポーツであるからルールがあり、僕らはそのルールに従って狩猟を楽しむんだ」

「さぞやお前は罪のないキツネたちを、血祭りにあげてきたんだろうな」

テルがとても軽蔑した顔つきでいった。

「あいつらに罪がないって？　農村はキツネたちによって荒らされているんだぞ」

マルコは田園所有者の苦労も知ってほしいという。

なにやら反対派は「キツネはかわいいから殺すべきではない」といったことを口にするが、自分たちがずる賢いキツネを駆除するからこそ、農村は食べ物を作れるんだ、と自慢げにいった。

「そうそう君たち、この森には化け物が棲んでいるんだ。乞食のような汚ない人食い鬼だ。僕たちなんか、もうすぐで食べられそうになったんだ。もちろんこてんぱんにのしてやったんだけどね。これ

でこの森も平和になるよ」
　マルコの嘘八百、傍にいたテルはもうすぐで吹きだしそうだ。
「勇敢に逃げだしたの間違いじゃないのかい？」
「…ち、違う。ヤツの右腕を斬り落としてやったんだ…」
エンガチョは親の顔をみたいといっていた気がするが、きっと見ないほうがいい。見れば激昂するだけだから。

　課外講義の終わりにテムズ男爵はコホンッと咳払い、「キツネにしろ、ひとつの命を奪うことは非常に苦しむ。君の勇気ある行動に騎士メダル五枚」とマルコに騎士メダル五枚を手渡した。それは胸くそ悪くなる光景だった。
　人は心で生きている。だから生き物を殺して心を痛めない者は心がないのと同然、ゆえに心だけは失いたくないものである。せめて人として生きる努力はしたい。楽しむがために無抵抗の者を殺す者は人ではない、心もない、そしてその獣よりも劣る――テムズ男爵はマルコを見つめながら、静かにいってのけた。
「…また勇気にもそれぞれある。命を助ける慈悲の勇気、命を尊ぶ勇気。僕の課外講義ではそのことを学んでほしかった。戦う勇気や冒険する勇気じゃなくてね。君たちが仕留めたキツネたちを持って帰ってきたときは、正直がっかりしたよ」
　キング・アーサー地区の騎士候補生のほうをみて、テムズ男爵は残念そうにいった。
　ナオミは期待されていたぶんだけ、男爵の言葉にうつむいた。
「だから僕はマイケル・コービーたちにも、騎士メダル五枚をあげたい。いいかい、理由はともあれ相手を傷つけるのは勇気なんかじゃない。僕はね、相手を助けてあげる優しさこそが本当の勇気だと思うんだ」
　自分より強い者に立ち向かう勇気よりも、自分よりも弱い者に手をさしだす勇気を褒められたマイケル・コービーたちは、恥ずかしさのあまり苦笑い。マルコはテムズの言葉に驚き、恐れおののいた

顔をしていた。
「先生、これはえこひいきってヤツじゃないですか？」
モードレッド地区の騎士候補生たちは次々にいった。
「僕はいたって中立だ」
テムズはマルコの言葉を無視した。
「最後にキツネを殺したとき、君たちはいろんなことを思っただろう。それにいろんなことを感じたことだろう、先生はそれが命の重みだと思うんだよ。あのとき君たちが命に対して考えたこと、命を奪ったときに生じた戸惑いを、家に帰ってからまた改めて考えてほしいんだ。これは僕からの宿題だよ」
午後五時を知らせる、カリヨンの鐘がにわかに聞こえてくる。

帰り道はとても憂鬱だった。
「ねえ、テル。今日のこと、どう思う？」
「どう思うって、命のことかよ？」
テルはなにも感じていないかのようだ。
「命って『もちづもたれず』だと僕は思うけどね。だって僕たちが生きるには他の命を奪って生きるんだ。生きるのって誰かの命を奪っているんだよ。あのキツネだって、生きるためにニワトリの親子を殺しているかもしれないじゃんか」
テルはテルのくせに、もっともらしいことをいう。
「親方のところじゃ、あんなのはしょっちゅうだよ。食材は農家から直接仕入れることが多いんだ。生きているニワトリをしめて、毛をむしるのは僕の役目だし。子ブタの丸焼きだってそうだよ」
ナオミはだんだんと気分が悪くなってきた。
「キツネが生きるためにニワトリを食べるのと、僕らが生きるためにそのキツネを食べるのってあまりかわらないよ。まあ、僕らはキツネは食べないけどね。でもこれって『もちづもたれず』なんじゃないかなあ」
テルもけっこうそれなりに成長しているんだ、とナオミは感心し

ていた。十ヵ月前のテル・ウォ・アボカドなら、きっとそんなことはいわなかっただろう。さらに少年は「食べるって、生きるってことなんだ。だから食べ物は粗末にしちゃいけないんだ。一枚の銀皿にはこの世の中すべての命の物語があるって、親方の口癖さ」と少年は親方の声を真似ていった。

初秋の夕暮れ、南の低い空に思いがけない多数の明るい星がみえはじめた。

キング・アーサー騎士団の町は色鮮やかな豆電球で飾られ、まるで光の都のように美しい。

すれ違う人々は交互に「ケンタウルス、露ふらせ」と挨拶をするし、広場では子どもたちが星めぐりの口笛を吹いていたり、青いマグネシヤの花火で遊んでいた。

バラントンの泉に通ずる、水路では青い灯りを灯した烏瓜が一斉に流れ、それは幻想的だ。川面と夕闇にうっすらとカラフルに浮かびあがる。町の夜景は絶賛すべき美しさ、エーゲ海に浮かぶ町並みのようだ。

町という町が星空に感謝をこめる日、それがこのケンタウルス祭なのだ。夜空を見上げれば射手座から青色や赤色、黄色の流れ星がバラントンの泉に流れ落ちるように見えた。人々はその光景にうっとりして、星が落ちるたびに歓声をあげた。

ロレンツォたちは姿を見られるとまずいので、こっそりと万年時計党の最上階で天体観測のパーティを開いていた。おや、目をやれば領主館広場にむかって、何かがチカチカッと光っている。

どうやらモーリス信号のようだ。

「ドランゴンチップスからだ、早くあがってこいだってさあ」とテル。

領主館広場ではこの町のワイン醸造所の大テント、座席数一万席を数えるほどの、それは大きな大テントでのワインの飲み放題が盛大に催されていた。

ワインを運んでいるウエイトレスは大急がし、ロロの親方マルボロはマースと呼ばれる、大ジョッキでわずか一時間で、観光客とともに一ヵ月分をただ飲みしていた。

ブルトンホテル大通りでは、音楽隊や鼓笛隊などがパレードでにぎわい、それを見ようとする人々で混雑していた。移動サーカスや移動遊園地も大人気だ。大通りのそばには棒につきさしたリンゴ飴がなどを売っている、露店がずらりと立ちならんでいた。そのときそっと夜空を見上げれば、黄金色に輝いてみえる領主館の神聖さにナオミは声をあげた。

「素敵！　なんてすてきなの！」

銀河はあまねく星々でいっぱい、花火のように色鮮やかだ。その満天の下のアッパータウン・オブ・ギルウェル領主館は荘厳にライトアップされ、まさにこの町のに相応しい。そのときだった。ラインハルト警部が血相をかえて、領主館広場に駆けこむようにやってきた。皆が見つめるなか、ラインハルトはクーデンホーフの耳もとに囁いた。

「なんですって！　人造人間（ホムンクルス）が？」

「パパティーノ商会のアッパータウンカジノから、なにかを盗もうとした盗賊を追って、こちらにやってきています。今すぐ討伐隊を編成してください」

泥棒猫の件から、人々は金庫の番人として用心棒を雇うようになったとか。

錬金術師パラケルススの著作『ものの本性について』によれば蒸留器に人間の精液を入れ、四十日密閉して腐敗させれば、透明で人間の形をした物質ではないものが出来上がるそうだ。それに毎日人

間の血液を与え、馬の胎内と同等の温度で保温して、四十週間保存すると人間の子供ができる。

しかし一歩でも間違えれば悪魔が生まれるとか。

よって現在、人造人間を造るのにその方法は用いられてはいない。今は悪魔教の立法学者（ラビ）の儀式によって、死んだ人間を母体にして悪魔の魂を入れる方法が採用されている。

最近では大きなガラス試験官に入れて、組織細胞（ディーエヌエー）から培養することにより、何体も造れるようになったとか。さほど知性は高くはないけれども、人の言葉はさりげなく理解することができる、人の死体から生まれた怪物だ。

パパティーノ卿はコブレットのなかの、バタービールを飲みながら、「ご存知のとおり私は悪魔教徒でしてね」とさらに「あのでくの坊は私のところの用心棒。アイツはちょうど腹が減っているんでしょうな。腹を空かした人造人間はなんせ凶暴だ。それにしても幸運ですな、皆さん。スプリガンがついてこなくてね」と無気味に笑った。

「ス、スプリガンですって？」

「うちのもう一つの用心棒、ヤツは凶暴でね、フフフ」

たちまち大混乱となった。クーデンホーフの命令により、広場の大砲が何度か空砲を鳴らして、やっと人々は静かにさせた。人々はクーデンホーフをじっと見据えた。

「たかが人造人間一匹、なにを恐れる必要がありますか！」

彼女の重々しい言葉が聞こえてきた。

「私はカジノに忍びこんだ不届き者を捜させてもらう。あんなでくの坊は放っておいたらいい。人を百人も喰らったら、勝手に消え失せるだろう」

「パパティーノ！　あなたは仮にもアッパータウン伯ですわよ！」

他人事のようにこの場を去ろうとする、パパティーノにクーデン

ホーフは一喝した。そんな彼女に伯爵は勢いよく剣を抜き、「それがどうした？　十分に自覚はしている」と彼女の喉もとに男は剣を突きつけた。

クーデンホーフはぐっと唇を噛みしめた。

「…あ、あなたは人の上に立つべき器ではありません！」

パパティーノはペッと唾を地面に吐くと、声を荒げた。

「サー・ガルニエはおるか？」

数秒後、アルフレド・ガルニエは「お呼びですか、アッパータウン伯」と男の前に跪いた。

「お前に十字軍アッパータウン師団の指揮権のみならず、全権を委ねてやろう。さっさとあの目障りな人造人間を始末しろ」

「かしこまりまして…」

伯爵はクーデンホーフに振り向き、脅すような顔つきで「これでお気に召されましたかな？　クーデンホーフ子爵」というと、パパティーノはカトニグレを引き連れ、領主館広場をあとにした。

第２８話　人造人間【１】

第２０話

パパティーノの姿が見えなくなると、ガルニエはすぐに「そういうわけだ」と自分の後ろで待機している、十字軍アッパータウン師団に振り返った。

ガルニエはすでに人造人間（ホムンクルス）の動きを察知して、軍人たちを招集していた。彼らの姿をみて、「さすが城伯です」とクーデンホーフはひとまず一安心だ。

「上騎士たち各大隊長は、配下の中騎士たちを召集して討伐隊を組織しろ。残りの下騎士は各地区の防衛にあたり、生徒会は騎士候補生たちを引率しろ」ガルニエの言葉を聞いて、生徒会書記のマルコは得意げにいった。

「騎士候補生たちは生徒会に従うんだぞ、僕らの命令は絶対だ。僕の言葉に従わない者は人造人間に喰われても文句をいうなよ。君たちは兵舎のなかに非難するんだ、あそこなら安全だからね。おい、そこのヤツ、道を開けろ！　僕は生徒会書記、生徒会長代行だぞ。ほらっ、さっさとそこをどけよ！　僕はパパティーノ伯爵家の者だぞ、報復されたいのか！」

「上騎士って？」

ナオミは兵舎にはいるとき、ココに尋ねた。

彼女の説明によれば、いわば非常事態に与えられる軍部の指揮権だ。

階級別でいえば下騎士は中騎士に従い、中騎士は上騎士に従い、上騎士は大騎士に従うという指揮系統である。下騎士に属するのは士官学校をでていない騎士たち、一般的に兵士といわれる軍人だ。

中騎士は士官学校において正規の軍教育を受けた騎士で、階級的

には少尉、中尉、大尉の地位にある者。上騎士は階級的には准佐、少佐、中佐、大佐の身分にある軍人だ。その上が大騎士、一騎当千の将に与えられるもので准将、少将、中将、大将の階級にある者たちのことだ。

アッパータウンの最高司令官はパパティーノ伯だが、指揮権は師団長にして中将、大騎士であるサー・アルフレド・ガルニエにある。また彼は要塞厳護の任にある城伯を軍部次官より、勅命をもって命じられている。今、彼の命令で迫りくる危機に対して、いくつもの上騎士と中騎士の討伐隊（一隊は上騎士を長として三名ほどの中騎士で成り立っている）が編成され、下騎士たちによって各地区の安全網が瞬時にひかれた。

ガヤガヤッ、と兵舎に待機していた騎士たちがいきなり騒がしくなった。

どうやら噂の人造人間が見つかったらしい。背丈は自分たちの十五倍はあると思っていいかもしれない。腰のあたりからひん曲がっている。

赤色の筋肉筋にそこらじゅうの人面痩のような顔がある。

顔は意志を持っているかのように勝手に泣き叫んでいる。身体全体と表現すべきか、常に赤い血を垂れ流しているというか、悪臭がするものを垂れ流している。ヘドロのようなにおい、いや死臭と呼ぶべきだろう。

その姿は悪魔という呼び名さえ納得する。両腕は大きなサルのように長くて、指は四本でゴボウのように細長い。足は短くて、四本の足の指だけは長かった。まさにヒトになりきれなかったヒト、人造人間と呼ぶにふさわしい。

噂の人造人間は前かがみになって、自分の背と同じぐらいの大きな腕をだらだらと地面にこすりながら、不気味に歩いてきた。

「アイツが退治されるところをみようぜ、きっとすごい戦闘が見ら

れるよ」

「私、人が死ぬところなんてみたくない…」

ナオミは厳として拒むも、テルは「人造人間は人間じゃない、人間が作りだした欲望の塊だよ」とナオミの言葉を一蹴すると、サンチョ・ボブスリーとパパティーノのときのような戦闘が見られるとあって、とても大はしゃぎだ。

「安心しろ、いざとなったら俺が守ってやる」

ロロの言葉にナオミは渋々納得した。

好きの男に守ってやるといわれれば、どんな女も「うん」といわざるえない。ナオミたちは人造人間が退治されるのをみようと、兵舎から急いで飛びだせば、凄まじい光景が待っていた。

広場では上騎士と中騎士の討伐隊、すでに三班が全滅していた。残りの隊は人造人間と激しく交戦中だ。人造人間、一体どんな姿かといえば、ナオミたちがミスリル鉱山でみた、赤い筋張った筋肉の巨人と姿は同じだ。

図鑑に載るような悪魔のような、おぞましい姿だ。

人造人間は死体には興味を示さず、生きている者を両手でつかみ、口のなかにバクバクと放りこんでいる。そのたびに腹は膨らみ、ところどころに喰った者の顔が体中に浮き上がっては「助けてえ」と不気味に泣き叫んでいた。

「天空の神ウラノス、天なる神々光臨（ライトニングボルト）！」

ガルニエが剣を天高く振りあげれば、凄まじい雷が幾度となく、人造人間にむかって嵐のように落ちた。赤い筋肉の巨人は黒焦げになって、ガクッと跪いた。が，、時に黒焦げになった身体はすぐ赤味を取り戻して、両手を天高くあげ、「ウオォー」と怒りの唸り声をあげた。一歩も歩かないうちに巨人はウエッーと口から数人の騎士を口から吐いた。騎士たちは透明な粘膜で保護されつつも、すでに息絶えていた。

ガルニエの攻撃が効いたのだろうか。
「全滅した班は？」
「テネシー班、ブレゲ班、トリノ班、ブライトリング班――合わせて七班です」
上騎士の戦況報告にガルニエは一瞬、悲しそうに目を伏せた。
「閣下！　ガトリング砲一式、準備が揃いました」
「よし、ヤツに鉄の飴を浴びせてやれ！」ガルニエの合図とともに、数十ものガトリング砲が一斉に火を吹いた。
人造人間は攻撃を受けるたびに、口から軍人をウエッーと吐く。吐かれた上騎士や中騎士に目をやれば、透明な粘膜で保護されつつも、やはり全員が息絶えていた。
望遠鏡で戦況を見ていた、ガルニエは何かに気づいたようだ。
「攻撃やめーい！」
彼の号令のもと、攻撃がピタッと止んだ。周りは硝煙臭い。
「何かがおかしい。様子を見にいく、装甲車をこっちにまわせ。お前たち援護を頼むぞ！」
「閣下！　ヤツめ、時計塔へと向かっています」
「あそこには民間人が多数避難しています。ガルニエ中将！」
大佐の一人が唸った。
「討伐隊を時計塔に向かわせろ、動ける者は私についてこい！」
そういうとガルニエは幾人かの側近を引き連れて、急いで装甲車に乗りこんだ。

この言葉を聞いたときナオミが顔を青ざめた。
「どうかしたの？」とココ。
「今夜、ロレンツォやマイケルたちが天体観測するって――」
テルは思わず唇をかみしめた。
「…人造人間に見つかるまえに知らせなきゃな…」

ナオミたちはコソコソと、時計塔の階段がある裏通りへとまわった。裏通りの角を曲がったとたん、後ろから足音が聞こえ、自分たちと同じようにコソコソと誰かがやってくるのがわかった。

ナオミたちはせかせかと町の地図台の後ろに身をひそめた。

「ピックル・タナカだ」

ロロの言葉どおり、後ろからやってきたのはピックル・タナカだった。彼はあたりを気にしながら、コソコソと闇夜へと消えた。

「先生はどこにいったのかしら？」

「あの方角って…たしか、うーん…」とテルの声。

「アッパータウンカジノの方角よね」ナオミは唸った。

「ええ！　それってタナカ先生が盗賊だってこと？」

ココは皆がふと思いついたことを口走った。

「なあ、何かにおわないないか？」と次はロロだ。

「…ごめん。そんなに臭うかな？」

テルが恥ずかしそうにさりげなく呟いた。

「うん、すごくにおうわ。たぶん黒猫の正体って――」

「僕、歯を磨いてくるの忘れちゃったんだ」テルがお茶目にいった。

「……」なるほどどうりで臭いはずだ、ナオミとココは納得したようだった。

ともあれ今、大事なのは推測ではなく、一刻も早く、ロレンツォたちに人造人間の存在を教えることだ。つまり逃げろと知らせることだ。彼らは地上がこんなにてんやわんやになっているなんて、夢にも思ってないだろうから。

第２９話　人造人間【２】

第２１話

一方、ロレンツォたちは地上のいざこざなど知らず、天体望遠鏡で流れる星々を観測していた。
「ねえ、ナオミたち遅いねえ？」マイケルの声だ。
「それで捜してみろよ」
マイケルはコクッと頷くと、望遠鏡を領主館広場にやった。
「何が見える？」
「マルコ・パパティーノのアホ顔だ」
「それから？」
「なんだか皆、こっちをじっと見ているよ。それに広場にあった大砲がこっちにむけられているようだよ。あれれっ、急になんだか真っ暗になっちゃったぞ？」とマイケルが首をかしげると、今度はチャーリーがかわってみた。
「倍率があっていないんだよ」
「僕、何もしてないよ」と不安げなマイケル。
チャーリーが覗いてみてもやっぱり、見えるのは黒いものだ。
「倍率をちょっとさげてみる」とまた倍率をさげてみても、凸レンズに写るのはやっぱり真っ黒なものだった。そしてうーん、と唸ると「自分で探してみるのが早いや」と少年はひょっこりと顔をだしたと思えば、すぐに顔をひっこめた。

チャーリーは無言のまま、汗をポタポタと流した。
それから大きく深呼吸をするとまた扉から顔をだした。すると「ひえええええ」という叫び声をあげた。
「どうしたんだ？」
何人かとポーカーをしていたロレンツォの声だ。

「…ロ、ロ、ロレン、ロレンツォ…。そとに化け物がいるぞ！」
時計塔をよじ登っている、おぞましい姿の赤黒の人造人間。
月明かりに照らされて、その恐ろしい姿はよくわかった。人造人間は逃げまどう民間人たちを喰おうと必死だ。もうすでに二十人は喰われていると思ってよい。

誰かが時計塔のそと階段で、蹲いている。
ライアンだ。人造人間はニタッと笑うと、少年のほうに近寄ってくる。そんな少年をみて、階段から勢いよくおりてきたのはアリサ夫人だ。ライアンは「母さん、僕のことはいいから早く逃げて！」と叫んでいる。

「どこの世界に息子を見捨てる母親がいるもんですか！」
アリサ夫人は凛としていった。
「この子をお願いね」
彼女は背中に抱いていた、ジャンをライアンに手渡した。
「母さん！」とライアンは自分の剣を投げ渡すと、剣を受け取ったアリサは、のそのそと迫りくる人造人間に向き直った。ジャンは「こわいよ！」と兄ライアンにしがみついている。
「さあ、こい！　母親の偉大さを思い知らせてやる！」
アリサは鞘から剣を抜いて襲いかかるも、赤い巨人には蚊が刺す程度にしか感じない。

じりじりと壁に追いやられ、逃げ場を失うアリサ。そんな母親を助けようにもライアンはゴホッゴホッと堰をし、口からはうっすらと血痰を吐いていた。
肩呼吸のライアン、到底戦える身体ではない。
人造人間はアリサを追いつめたとあって、このうえない笑顔でニタッ、と不気味に笑った。その顔は悪魔のような笑顔で誰しもゾッとする。大きな手がアリサをギュッと握りしめたと思いきや、怪物

が握ったのはティソ親方だった。
間一髪、アリサはティソ親方によって、突き飛ばされたおかげで命拾いしたようだ。だが彼女の代わりにピーター・ティソ親方が化け物に捕まってしまった。
「あ、あなた！」蒼白な顔のアリサ。
「お前はライアンとジャンに必要だ、死んじゃいけねえ」
人造人間は大きな口を開けて紫色の舌をだして、親方を美味そうに口に運んでいく。

「あ、あなた！」
アリサ夫人は大声で泣き叫んだ。

「あとのことは頼んだぞ！　大丈夫だ、俺たちには立派な娘がいる！」
俺たちには立派な娘がいる――――きっとナオミのことだ。
人造人間がゴクンッと喉を鳴らせば、「うあああ――――！」とこの世のものとは思えない悲鳴をあげて、アリサは顔を覆った。ライアンも瞳に涙をため「くそおお！」と悔しそうに地面を叩いた。
ジャンは思いっきり目をつぶっていた。
数秒後、ティソ親方の人面瘡が背中のところに剥きでていた。
現実は厳しい。まだ満たされないのか、化け物はアリサに腕をぐいっと伸ばしてきた。アリサはジャンをギュッと抱きしめ、人造人間を睨みつけた。

――――もう、だめか。

「天空の神ウラノス、天なる神々光臨（ライトニングボルト）！」
その声とともに人造人間は電撃に包まれ、真っ黒になった。
アリサの前に立っているのはナオミたちだ。
「アリサおばさん、大丈夫ですか？」

「ナ、ナオミ、どうしてここに？　避難しているはずじゃ…」

アリサは状況が呑みこめないでいる。ジャンはジョジョの姿をみてよだれの友と再会に「うきゃあ」と喜びの声をあげて、手足をバタバタさせている。あの雷を放ったのはナオミではない。もちろんテルでもロロ、ココでもない。

「途中で合流したんですよ」

誰でもない、アルフレッド・ガルニエ中将だ。

「ナオミ！」

アリサは恐怖心を癒すように、ナオミを思いっきり抱きしめた。

「ピ、ピーターが！　ピーターが…」

アリサはそれ以上、言葉がでてこない。

「大丈夫、私がついていますから！」ナオミは笑顔でいった。

根拠はない。だけど今のナオミにはそれしかできない。

ティソ親方が人造人間に喰われるところは見ていた。助けにいきたかったが、ガルニエに抑えられていたから――――なんて言い訳にすぎない。本気でティソ親方を助けようと思えば、今のナオミなら彼らを振り払うことは、そう難しくはない。

本音は恐怖で足がすくんでいたのだ。

それに比べれば、ガルニエ率いる先鋭部隊は勇ましい。戦い慣れしているせいもあるだろうが、人造人間をみても一歩も退いてはいない。さすが軍人と呼ぶべきか、戦闘の専門家（プロフィッショナル）だ。

「諸君の勇気には敬服するが、ヤツとの戦いは我々に任せて、君たちはできるだけ高く避難しなさい」

中将の言葉にナオミは頷いた。

「君たちの勇気に騎士メダル十五枚だ。さあ、行きたまえ！」

今、自分たちが目指すべきは最上階のカリヨンの鐘があった場所だ。ナオミたちの姿が見えなくなるや、ガルニエは人造人間を凝視する。

赤い筋肉が再生していくにつれて、また化け物はウエェーと数名の軍人を口から吐きだした。吐きだされた部下のもとに駆けつけてみれば、やはり死んでいる。部下の虚ろな目を右手でそっと閉じたそのとき、「ガルニエ中将、あぶない！」と側近の大佐が人造人間から自分をかばい、その餌食となった。

左腕の部分に自分をかばってくれた、大佐の顔をした人面痩が剥きでた。

人面痩はギロッと目を開けると、「ガルニエ中将、あぶない！」と大佐が叫んだ、先ほどの言葉を何度も復唱する。

ガルニエは「だまれえええ！」と人面痩にバン、バンッと銃弾を撃てば、大佐の顔は耳を防ぎたくなるような悲鳴をあげ、人造人間の腕から消えたと同時に、ウエェーと口から軍人を吐き出した。

「ジョルジョ・パパティーノ、くされ外道め！」

ガルニエはギュッと唇を噛みしめ、拳は怒りでわなわなと震えている。どうやら男はすべてを悟ったようだ――そう今さっき人造人間が吐きだした軍人は、自分をかばってくれた大佐その人だ。

人造人間、生きている人間を生命源として活動する生ける屍。

人間を電池のかわりにしているのだ。ヤツを殺せば、ヤツの身体の中に取り込まれた誰かの命がなくなる。すなわち人造人間を相手にするということは、化け物が喰らった人間全てを相手にすることであり、ヤツを完全にこの世から消し去るということは、この化け物の身体に取り込まれている、全ての人たちの命をこの世から消し去るということに他ならない。

第３０話　人造人間【３】

第２２話

アリサ夫人とライアン、ジャンとは、時計塔の中腹あたりで別れた――というのも下騎士たちが避難所を設け、厳しい警備体制だったからだ。自分たちといるより、彼らと一緒にいたほうが安全に決まっている。別れ際、アリサは「やっぱり行っちゃうの？」と小さな声で呟いた。

「…仲間が待っているから。でも必ずもどってきます」

ナオミは震えるアリサの額に、優しくキスをした。

ジャンも「うきゃあ」と自分にもと要求してきたので、同じく優しく別れのキスをした。ただジョジョはそんなジャンをみて「女垂らしにならないか、アイツの将来が心配だよ」と久しぶりにぼやいていた。

カリヨンの鐘が午後八時の音を知らせる。

やっとのおもいで四人は、秘密基地のなかに駆けこんだ。だがそこには当然、カリヨンの鐘などはなく、天体望遠鏡で地上を眺めるマイケルやチャーリー、ロレンツォたちの姿も見当たらない。最初に彼女たちの目の前に飛び込んできたのは、人造人間がロレンツォを呑みこんでいる姿だ。

――一足遅かったようだ。

ナオミたちはそろって剣を抜いた。

「アスガルドの神トールの裁き、聖電撃（サンダーボルト）」

最初に攻撃にでたのはテルだ。

少年の雷撃は人造人間を痺れさすに十分だが、それ以上の致命傷

を与えるには至らない。ナオミの剣にも炎の鳥が勢いよく宿る。ロロが何か呟こうとした瞬間、少年は「グホッ」と勢いよく吐血し、その場にうつ伏せに倒れた。

「ロロ！」

ナオミはすぐさま少年に駆けより、ロロに首飾りをギュッと握らせた。

人面瘦の病がロロを蝕んでいる。ホーエンハイム医師がいっていたように、病は猛烈な早さで進行しているのかもしれない。

「ナオミ、危ない！」

テルとココの言葉に敏感に反応したナオミは「火の女神ヘスティア、火の鳥」と呟いた。

瞬間に火の鳥がナオミたちを取り囲んだ。人造人間は彼女たちを掴むことはできなかった。喰うこと以外の本能はないとみえる。

「すまない、もう大丈夫だ」

ロロはよろめきながら、剣にすがって立ちあがり、人造人間に跳びかかるも、やはり病は進行しているようだ。いつものロミオ・ロートレックではない。人造人間が軽く払いのけただけで、少年は地面に叩き落とされた。すかさず筋肉筋の赤い手が逃げまどうロロを追いかけ――勢いよく掴んだ、と誰もがと思った。

ロロがゆっくりと瞳を開ければ、目の前にはテルがいた。

「…ど、どうしてだ、テル…」

テルがロロを掴みとろうとする、筋張った手を両手で必死に押さえていた。

「理由なんてない、身体が勝手に動いただけさ。早く逃げろ！」

アグリッパ悪魔教会のとき、なぜロロが自分を助けたのか、今のテルなら分かる。痛いほどそれが分かる。いややっと分かったといってもいい。

「だめだ、身体が動かない」

ロロは半分あきらめかけている。

「バカヤロウ！　生きることをあきらめんな！」

テルはロロを勢いよく蹴飛ばすと力尽き、彼の代わりに人造人間の手におさまった。人造人間は大きな口を開けて、紫色の舌をだして、ゆっくりとナオミたちのほうを見ながら、不気味にニタッと笑いながら、テルを口に運んでいく。

「や、やめろ！　喰うのなら俺を喰えよ！」ロロの声が聞こえる。

「テ、テル！」

ナオミとココは一緒に叫んだ。

「ナオミ、ロロのことを頼んだぞ！」

テルがジョジョにも目をやれば、黒い犬は瞳に涙をためていた。

「泣くじゃねえ、ナオミをしっかり守るんだぞ」

人造人間が喉を鳴らし、テルの顔が胸に浮かび上がった。

その顔はギロッとナオミたちを睨むと、あの大佐と同じように「バカヤロウ！　生きることをあきらめんな！」と同じことを復唱する。その瞬間、ナオミのなかで何かがパンッと弾けた。

「殺してやる！」

ナオミがそう叫ぶと、意識が徐々に遠退いていく。

第３１話　人造人間【４】

第２３話

ハッと目を覚ませば、ナオミは病院の一室に立っていた。

病室のベッドには一人の男の子が規則正しい音をたてて、右手に点滴を打たれ、鼻には酸素チューブがささっていた。ナオミは一瞬、聖ハレルヤ病院の匿名病棟にいる、サンチョ・ボブスリーの姿を思い出した。

医療方法は異なるが、この少年もきっと植物人間なんだろう。

ナオミは植物人間の少年をみて、彼の髪をなでた。今、おそらく彼の魂は冥界にいるのだろう。

ナオミはそっと少年の手を握った。そして自分はこの少年をにわかに知っていた。そう、ときどき夢にでてくるあの少年だ。改めて見てみると、少年は美少年という言葉が似合う。

ナオミは小机に置かれてある、寄せ書きに目をやった。

新渡勇人（ニト・ユージン）と書いてある。やはり間違いない、あの少年だ。友人からの贈り物だろうか、それとも着替えだろうか。小机に寄せ書きと以外にもシャツが置いてある。背中には脂肪吸収という漢字、表面にはドラゴンチップスよこせという文字がある。その文字に呼応するかのように、ドラゴンチップス『火炎味』がいくつか置いてある。マイケル同様、この美少年もドラゴンチップスの熱心なファンらしい。

それにしてもここはどこなんだろう？

窓のカーテンをピシャッ開ければ、目の前に広がったのは高層ビルが建ち並ぶ、見たことのない町だ。そこはアッパータウンでないことは明らかだった。病室に飾ってあるカレンダーには二〇一一年三月一六日とある。ということは、ということは今、自分は一五〇年後の未来にいるということだろうか。

ナオミはおかれた現状が呑みこめず、放心状態だ。

「そう、ここは君にとって未来にあたる」

部屋に少年の他に誰かいたようだ。ナオミは脅えるようにしてそっと振り返った。

見覚えのある老人の姿に、少女は胸をホッと撫でおろした。それにしても緑と金色の法衣を着て、まるで別人のようだ。頭の王冠らしきものもちょっと気になる。腕にはミニチュア・ダックスフンドを抱いている。

毛並みが違う。ジョジョではないことは確かなようだ。

「ここはおよそ一五〇年後のアッパータウン、君にとって未来にあたる時代じゃ。そしてここは聖ハレルヤ病院」

「…サー・トモロヲ・ブドリ、偉大なる我らの宮中伯…」

「これは懐かしい名だ」と老人は微笑んだ。

「あ、あの…その、どうして私、未来なんかに?」

トモロヲ・ブドリは「これは運命の女神との約束だ」と、物静かに囁いた。運命の女神との約束、それは彼の魂が危機に陥ったとき、否応なしにユージンの魂をこの世界に戻すという取り決めだ。

そうか、この少年は一五〇年前の世界に記憶と魂があるから、植物人間になっているのか。だが自分はユージン・ニトという少年なんて、一度も見たことはない。

「君とユージンとの魂が、いや生命が共鳴したのだろう。もともと同じような境遇のわけじゃったわけだし、なんら不思議なことではない。じゃが目覚めるのはまだ早い。彼はこの旅をまっとうしなけ

ればならん」

もともと同じような境遇だった？

目覚めるのはまだ早い？　どういう意味かは分からない。

ナオミが言葉の真意を正そうとしたときだった。一瞬、右手に圧力を感じた。目をやれば少年がギュッ、と自分の手を握り返している。どうやらユージン・ニトが目を覚ましたようだ。

「ナオミ、君は僕と一緒に時計塔に戻らなくちゃいけない」

時計塔という言葉でナオミは、本来の自分を取り戻した。

なぜ自分の魂が未来にあるのかは今はどうでもいい。今やるべきことは偉大なる騎士、トモロヲ・ブドリに人造人間を倒すことを請うことだ。

「それはできない、未来の者が過去の歴史を変えることは許されぬ」

未来の者が過去の歴史を変えることは許されぬ？

「何をいっているの？　だってあなたは一五〇年前の人じゃ――」

「一五〇年前のわしならともかく…」

トモロヲ・ブドリの優しき瞳がナオミに真理を悟らせた。

「…も、もして、あ、あなたは一五〇年後のトモロヲ・ブドリ…」

そうこの老人はナオミが知っている、一五〇年前のトモロヲ・ブドリではない。

どうやってここまで人間が長生きできるのかはさておき、一五〇年後のトモロヲ・ブドリなのだ。つまり二〇一一年の未来を生きる者――――姿かたちは同じであれども魂の本質が違う。

「運命の女神はこの世のすべてを司る諸現象。運命の女神は乗り越えられない試練を与えることは絶対にない。自分の持てる力をもって運命に挑みなさい。そうすれば必ずや運命の女神は君に応えるじ

ゃろう」

といわれても、あの人造人間なんかに勝てる者がいようか。

「ナオミ・ニト、憎しみで運命に立ち向かってはいかん。憎しみで運命に勝とうなんぞ、もってのほかじゃ。それでは運命の思うつぼじゃぞ。そなたは必ず後悔する。そして後悔の果てに悪道に堕ちるであろう」

憎しみは人の感情の中で最も力を秘めた感情だ。ときに憎しみは人を殺める破壊的な力を持つものの、必ずそのあとは憎しみの連鎖を生みだす。憎しみが憎しみを生み、やがて負の連鎖は社会を破壊させる。

「じゃ、じゃあ。だったらどうすれば？」

ナオミの戸惑いに老人は囁くように頷いた。

「憎しみさえも花のように優しく包みこみなさい。君ならきっとできる」

これはトモロヲ・ブドリの助言だと思っていい。

今、運命の女神はきっと自分を試しているのだ。この困難を乗り越えることができるかを。

「ナオミ、準備はいいかい？」

ユージンが優しくナオミに囁いた。

「ねえ、一つだけ聞いていい？　あなたはどこにいるの？」

ナオミの問いかけにユージンは「君のそばにずっといるじゃないか」とさらに「さあ、僕の手を握って！　君の世界に戻ろう」とナオミの手を握った。

「汝らに運命の女神のご加護があらんことを」

トモロヲ・ブドリの声が聞こえた。

気がつけばナオミとユージンは四角い光を目指して、天体星座のなかを歩いている。次第に景色がぼんやりとしてきた。ナオミとユ

ージンはゆっくりと瞳を閉じ、そして心静かに瞳を開けたとき、少女は時計塔に立っていた。

誰かが自分の手を力いっぱい握っている、誰だろう？

「やっと自分を取り戻したか？」

声の主はロロだ。ジョジョがいうには放心状態になったナオミを、今まで人造人間から守ってくれていたそうだ。

「ともかく意識が戻ってよかったよ」

「ごめん、ロロ。心配かけて」

ロロは目の前にいる、七名の黒い男たちに視線をやった。

「俺たちは連中に感謝しなくちゃいけない」

ナオミが放心状態に陥ってすぐに、七名の黒い男たちが時計台に現れ、みてのとおり強力な魔法剣をもって、人造人間の動きを止めてくれていた。地面の光の魔法陣をみれば、ナオミもそのぐらいのことはわかる。七名がかりの六芒星の巨大な魔法陣だ。

「我々はドワーフ王直属の近衛隊の者だ、ボブスリーを迎えにきた」

そうか、彼らはエンガチョのいっていた迎えか。

第３２話　人造人間【５】

第２４話

黒い騎士たちは「我々の任務はボブスリーの救出と迎えだ。これ以上は関わらない」といい、騎士たちは互いに目をやると時計台から飛び降りた。

最期の一人が飛び降りるまえに「あの人造人間だが、大事な人がヤツに呑みこまれたならば、君たちは覚悟を決めなければならないだろう。我々もミスリル鉱山の人造人間には、多くの仲間の命を犠牲にした」といった。

人造人間は他人の生命を電池代わりに生きている、擬似生命体なのだ。

すなわちアイツを殺すことは、呑みこまれた全ての人たちの命を奪うことだ。これは虐殺のために合理的に開発された魔法兵器ともいえる。一民族を殲滅するには時間がかかる、だが人造人間に喰らわせたあとなら、そう手間暇はかからない。

ドワーフ王の近衛隊たちが姿を消してまもなく、光の魔法陣も地面から消えた。人造人間がゆっくりと動きだす。

「あの連中の話によれば、テルはまだ生きているってことだろ？」

ジョジョは嬉しそうに尾っぽをふった。

「でもアイツを生かしていたら、犠牲者がもっと増えるわ」

一をとるか、全をとるかの問題だ。

人造人間を殺せば皆が死ぬ、だけど皆を助けたいなら人造人間は殺せない。しかし人造人間を生かしておけば、また罪のない誰かを喰らう。やはり命の悪循環、死の悪循環はどこかで断ち切らねばならない。今になってキツネ狩りのときのテムズの言葉が、ナオミの胸に深く突き刺さる。

――ひとつの命を奪うことは非常に苦しむ。

そうだ、そのとおりだ。また彼はこうもいっていた。

「相手を助けてあげる優しさこそが、本当の勇気だと思うんだ」

人造人間をキツネのように殺すことなんて、できやしない。

あのなかには助かるかもしれない命がたくさんある――ティソ親方、テル、ロレンツォ、チャーリー、マイケル、数えきれない大事な人たちがいる。失いたくない人たちだ。一瞬、トモロヲ・ブドリのあの言葉が脳裏によぎった。

――荷憎しみさえも花のように優しく包みこみなさい。

（…もしかして、あの魔法なら皆を助けられるかもしれない）

今、運命は私を試そうとしているのだ。この試練を乗り越えられるかどうかを。この世のすべてが運命の女神であるなら、花の女神フローラも運命の女神だ。彼女の香り豊かな包容力をもって、私は目の前の運命を変えてみせる！

「ナオミ！」

ロロとココ、ジョジョが叫んだ。

ナオミの目の前に人造人間の手が迫るものの、少女は微動だにしない。それどころから赤い筋張った手、巨人の大きな人差し指が頭までくると、逆にナオミは自分の掌をそっと人差し指に当てた。ドックン、ドックンと命が脈打つのがわかる。これはきっと皆の命に違いない。なんて温かいんだろう。

（いやきっとできる、自分を信じろ！）

人造人間がナオミを握りしめようとした瞬間、ナオミは凛として叫んだ。

「花の女神フローラに祝福されし、汝の心は花咲く…」

ナオミの言葉とともに人造人間はブルッと瞬間的に身震いした。
人差し指から肉体に凄まじい電撃が奔るように、パン、パン、パンッと指から全身へと赤い巨人は、赤いバラの花びらへと変わっていく。ニタッと人造人間が笑ったような気がしたが、夜風が吹くとともに人の形をしていた人造人間の姿はどこにもなく、夜空にバラの花びらが枝垂れサクラのように舞った。
時計塔最上階はバラの花畑のようにバラの花で埋め尽くされ、そのなかに人造人間に喰われた人たちも埋もれていた。ティソ親方はもちろん、テルやマイケル、ロレンツォたちの姿もあった。テルは一体全体、何が起こったのか理解していないようだ。
「テル！」

少年の姿を見つけるや、ナオミは思いっきり抱きついた。
抱きつかれた本人は顔を赤らめ、「色男はつらいよ」とテルらしく、きょとんとしていた。ジョジョは嬉しさのあまりテルに甘噛みするどこか、本気で噛りつき、テルから「痛いじゃんか！」と蹴り飛ばされていた。
運命を変えるためには、まず憎しみを乗り越えなければならない。そのためには憎しみをも包みこむ包容力、いや人間力が必要だと運命の女神は、ナオミに花の女神フローラの魔法を思い出せたのかもしれない。憎しみさえも花のように優しく包みこめとばかりに。

第３３話　人造人間【６】

第２５話

しばらくしてバタバタという足音が聞こえてきた。
一番最初に最上階に飛びこんできたのはサー・ガルニエ中将とその部下たちだ。それから順番にクーデンホーフ、パパティーノ、カトニグレ、テムズたちが雪崩込んできた。

ガルニエ中将はキョロキョロと辺りをみまわし、パパティーノは顔色一つかえず、ナオミのほうを睨み、クーデンホーフは丸眼鏡を何度かかけなおし、とてつもない鋭い眼差しで彼らを見つめていた。テムズは赤いバラの花びら畑を見ていた。
テルはびっくりして口をあんぐりと開けていた。
「それでヤツは？」とガルニエ。
「…バラの花びらに変わりました…」
ナオミの言葉にガルニエは「さすがだ」と嬉しそうに頷いた。

「何がさすがのものですか！」
クーデンホーフはまた眼鏡を何度かかけなおしてからいった。
「私はあなたたちには兵舎に避難するようにいったはずですよ。これこそ無謀というものですわ。しかも皆、キング・アーサー地区出身じゃないですか！」
ナオミたちはうつむいた、テルは口があいたままだ。
「これは一人につき騎士メダル半分没収だな」と、嬉しそうなパパティーノ。
そのときテムズが「僕は今回の件に関しては、罪に問うべきでは

ないと思います」と自分たちを救ってくれた。
男爵の言葉にガルニエも「同感だ」と頷いた。
「いかなるご理由で？」
パパティーノは鋭い眼差しでテムズを見つめた。
「そもそも人造人間は伯爵がこしらえたものです。それをお忘れになられましたか？」
「カジノに盗みにはいったヤツが悪いのですよ」
執事のカトニグレは伯爵をかばう。
「そうかもしれませんが、人造人間が大暴れしたせいで、この町を一時的に非常事態に落としいれただけでなく、多くの尊き命が奪われたのも事実。それに魔法物責任法という法律があることもお忘れなく」

魔法物責任法、自分が造った魔法製造物が他人に危害をくわえたら、すべての責任をとらなければならないという法律だ。
「これに懲りたら、人造人間など怪しげなものは造らないことだ」
「なるほど」パパティーノは唇をギュッと噛みしめた。
息子のマルコそっくりだ。
「だがこの大惨事はクーデンホーフにも責任がある」
パパティーノの言葉に「なんですって！」とクーデンホーフは声を荒げた。

伯爵の説明によれば、人造人間は風船みたいなものらしい。
百人の人間を喰らえば、勝手に破裂してこの世から消え失せるとか。つまり何もせず野放しにしていたら、自然に解決していただろうとパパティーノはクーデンホーフに詰め寄った。
「腹が満たされれば、勝手に自滅していたものを。あなたが私に行動を促すものだから、私はガルニエに師団の指揮権のみならず全権を委ねた。その結果、どうなった？　多くの優秀な騎士が風船ごときに命を落とした」

今度はクーデンホーフがギュッと唇を噛みしめた。
「これに懲りたら、私の経営に口をださぬことだな。大人しくしていろといったにもかかわらず、チョロチョロ出回った、そこのガキどもは騎士メダル五十枚減数だ」
「アッパータウン伯」
サー・ガルニエ中将は跪いた。
「今回の出来事、彼らの活躍も否めません。大目にみてやってはいかがでしょうか？　それに実際、多くの死人を出したのはわが師団ですぞ。あなたは師団長の私に、真っ先にそのことを伝えるべき義務があったと思うが？」
ガルニエの瞳には、伯爵への怒りの炎が宿っている。

パパティーノは中将の瞳のなかに、彼の元上官の顔がチラリッと思い浮かんだ。
「憎まれ口はサラ・レッドブル譲りだな。だが中将、己の無知を棚にあげるのはやめたまえ。そもそも私を信用していないヤツに真実を教えて一体どうなるというのだ？　そこのくそガキどもは、大目にみてやっても騎士メダル三十枚減数は免れん」
ガルニエも、ナオミたちも何も言い返すことができない。
確かに今回の出来事、パパティーノを信用しなかった彼らにも非はある。
「これ以上の言い訳は、侮辱罪と名誉毀損で訴えるぞ。あとカリヨンの鐘がどこかにいったかも気になる。時計守を拷問にかけるのは私に任せてもらおう」とパパティーノはカトニグレとともに横柄な態度のまま、時計塔をおりていった。伯爵たちがいなくなるとテルは「あんなんだから誤解されるんだ」と呟いたし、マイケルは（階段から足をすべらしたらいいのに）と思った。

しばらくして地上から星めぐりの音楽が聞こえてきた。クーデンホーフはバラの花びら畑を見つめてから、子どもたちをまた見つめ

た。

コホンッ、とクーデンホーフの咳払いが聞こえた。

「地上ではケンタウルス祭のお祝いが再開されたようですから、嫌なことはこの際、忘れて大いに楽しみましょう」

子どもたちは人造人間に喰われた人たちに混じって、時計塔の階段をおりていった。

途中、ナオミはティソ親方に肩をかせば、親方が人造人間に喰われたときに「俺たちには立派な娘がいる」の言葉の真意を訊けば、

「ああ、腰が痛い」と親方は誤魔化す。

人の本音というのは土壇場でてくるものだ。

ティソ親方の本音、それはナオミをじつの娘のように思ってくれている。それだけで十分だ、言葉で再確認しなくても。ナオミは親方の腕を嬉しそうにギュッと握りしめれば、親方は照れながら、そんな少女の頭にその大きな太い手をポンッとのせ、「無茶はほどほどにな」と静かにいった。

なぜ男の人ってこうも照れ屋なんだろう。そんな二人をみて、ジョジョは「ノミが湧いてきそうだ、かゆくてたまらない」とぼやいていた。

「町の連中はついに知っちまったな、サンジャックも大変だろうな」

カリヨンの鐘のことである。やはり嘘はどこかでばれる。エンガチョ然り、真実を相手に嘘を突き通すことなんてできやしない。

数分後、子どもたちが広場につくと歓声があがった。

「うわあ、僕たち人気者だよ」

ジョジョ・ダックスフンドはしっぽをぱたんとふった。

「今夜の主役は間違いなく、キング・アーサーの騎士候補生だよ」

「君たちのおかげで、ケンタウルス祭が中止にならずにすんだ、ありがとう」

「今夜はキング・アーサーに乾杯しようじゃないか」

広場は彼らの冒険を聞こうと、子どもたちに詰めより、ガヤガヤしていた。見事に別人に変装したエイブラハム・アグリのわざとらしいというか、ぎこちない取材もうけた。ロロはカジノに盗みにはいったのはピックル・タナカだといったが、翌日の新聞にそのことは一切触れていなかった。

触れていたのはカリヨンの鐘のことだけだった。

「それにあそこにはスプリガンがいるんだ。例え彼がそうであったとしても、スプリガンをぶちのめすのはむずかしいよ」アグリはフライドチキンを食べながらいった。

「なんでそんなこと、知っているの？」とナオミは不思議に思った。

「なんでって、僕は推理記者だからね」

年に一度のケンタウルス祭、ナオミたちは惜しみなく楽しんだ。円卓においてある歓迎会のときのような、豪華なごちそうを皆で頬張った。

「あのさ、ありがとうな。助けてくれて」

ロロはテルに近寄ると顔をみずに、恥ずかしそうにいった。

「気にするな、お前は――」

テルは顔を赤らめた。

「お前はやっとできた大切な友だちだ、大事な俺の仲間だ」

手足をもがれようが、関係ない。命を奪われようが関係ない。やっとできた友だちを奪われるぐらいなら、自分が死んだほうがましだ。その言葉を訊いたロロは、心からテルに握手を求めた。握手に言葉はいらない。

彼らはこの日、本当の兄弟となった。仲間となった。

「ねえ、テル。どうしてロロが嫌いだったの？」とナオミ。

「優等生だからだよ」それがテルの答えだった。それならロロの答えもなんとなくわかった気がした。あとから彼に聞いてみれば「バカだから」という返答だった。

優等生と劣等生、お互い軽蔑していたものの、心の底では本当は一緒にいて、すごく楽しかったのだ。なぜならテルは誰よりもロロのことを認め、ロロもテルのことを認めていたのだから。彼らに必要なものはお互いを認める心、それがテムズがいいたかった勇気なのかもしれない――とナオミは思った。

隣ではマイケルがむしゃむしゃとドラゴンチップスを食べていた。本当に食べることしか能がないようだ。

そんな彼は「僕は二人とも大好きさ」と、さらに基準はわからないが「ドラゴンチップス七袋分ぐらい、大好きだよ」と胸を張っていた。ジョジョは「マイケルは好き嫌いがないだけだと思うな」とぼやく。

第３４話　世の中を欺いてきた悪党【１】

第２６話

ナオミは『剣と盾』にでかけるとき、ホーエンハイム医院にはいっていくピックル・タナカをみかけた。すると窓越しに「ケンタウルス祭のときからなんですよ」というタナカの気になる声が聞こえ、盗み聞きはいけないとわかっていながらも、ナオミは彼らの会話に耳をたてた。

「疲れやすくて脱力感、体重減少、食欲低下。そのほかには？」

診察所ではホーエンハイムとピックル・タナカ、あと可愛らしい女の看護士がいた。

「首と肩、それから足と手の関節が痛くてね」

ピックル・タナカはいった。

「それは朝によく起きますかな？」とホーエンハイム先生。

「ええ、朝によく一時間から二時間ほど続くんですよ。もしかして呪いですかね？」

「いいえ、これはおそらく関節リウマチですな」

「…関節リウマチ…」

「およそ三十歳以上の約一パーセントがこの病気にかかっています。病因は現在のところ残念ながら不明ですが、痛みのメカニズムなら解明されているんですよ。血管内から関節滑膜組織にリンパ球、マクロファージなどの白血球が遊走してね。

関節局所で免疫応答が起こり、リンパ球やマクロファージが産生するサイトカインの作用により、炎症反応が起こって軟骨や骨の破壊が進行。それで痛みがはしるんですよ。最近ではスプリガンという妖精の唾がリウマチになるとか、ならないとかで学会でもめているほど。医者としての立場からしてみれば、大変に興味深いことです」

「…やはりあのスプリガンの唾が原因か、いまいましい…」
ピックル・タナカが小声でそういうのをナオミはひそかに聞いた。
おやっ、ホーエンハイム先生はナオミの存在に気づいたらしく、正しくはジョジョ・ダックスフンドのしっぽが見えたので、つかつかと小窓までやってくると窓をあけた。すでにそこには少女の姿はなく、そっと遠くに目をやればナオミがどこかへと駆けていく姿、その後ろを必死に追いかける黒犬の姿がみえた。

それから数分後のことだった。
「どうしたんだよ?」息切れをするナオミにロロが声をかけた。
ナオミは自分が今、聞いてきたことを秘密基地のすみで三人にヒソヒソ話した。
その三人というのはテルとロロ、そしてココの三人だ。これだけはロアゾンの子どもたちも知らない、彼らだけの秘密なのだ。
「ピックル・タナカ先生が黒猫だったの、そういう意味なの!」
ナオミはゼッー、ゼッーと、とても息苦しそうに話した。

「だからね、ケンタウルス祭のあの日。カジノに忍びこんだのはタナカ先生でね、金庫を狙っていたの。人造人間(ホムンクルス)はたぶんあの人の仲間を追ってきたのよ」
「…でも翌日の新聞には金庫は無事だったって…」
ココは残念そうにいった。
「ほらっ、パパティーノさんの会話を思いだしてよ」
四人はうーんとうなり、J・パパティーノがコブレットのなかのバターピールを飲んでいたところを思いだした。たしか彼は「…それにしても幸運ですぞ。スプリガンがついてこなくてね…」といっていた。しかもものすごく凶暴だともいっていた。
テルはモンスター大図鑑の「ス」のページをペラペラめくってみた。『豆知識及び雑学』のサロン、本屋のサー・エドモンドに買わされたものだ。

「あった、この怪物だな。ええっと…」と小さな声。

『妖精や小人の用心棒スプリガンについて』

まずスプリガンは醜い巨大な姿の妖精である。彼らは財宝の番人として知られ、用心棒としては素晴らしい才能を発揮する。普段は小さな姿をしているため、近年では要人たちの身辺の護衛やボディーガードとして雇用されている。彼らにとって依頼内容は絶対であり、それに危害をくわえようとする者には容赦はない。ある筋によれば彼らスプリガンはトロル族の亡霊だといわれている。これはあまり知られていないことだが、彼らの唾はリウマチを発症させる毒素が含まれているので、スプリガンに出会ったときは唾に気をつけること。

「ナオミのいうことも一理あるな」とロロ。

「でも私、タナカ先生が黒猫だなんて思えないわ」ココは戸惑うように「確かにあの人は怪しいけど、でも実際に何も盗んでいないんだし」とボソボソ。

「あーあ、君は人を疑うってこと知らないんだな」

テルはココに現実を知れ！　といった。

「事実、ヤツは盗みにはいってリウマチになった。盗みには失敗したけどね、それ以外に考えられないじゃないか。いつもアイツの肩にとまっている黒カラスは、きっと仲間とのやりとりに使っているんだ。いずれまたヤツは盗みにはいると思うよ」

「エイブラハム・アグリさんに知らせなくちゃ」

「いやナオミ、証拠をつかんでからにしたほうがいい」

途中、マイケルが聞き耳をたてているのがわかったので、テルは「これでも食っとけ」とマイケルにドラゴンチップスを投げ渡した。少年は嬉しそうにドラゴンチップスの封を開けた。きっとマイケル

は聞き耳をじゃなく、テルのドラゴンチップスでも虎視眈々と狙っていたんだろう。

第35話　世の中を欺いてきた悪党【2】

第27話

ここは毎日ブルトン新聞社近くの喫茶店『暴れ馬』だ。
ナオミとロロ、テル、ココの四人は「遅いねえ、アグリさん」とぼやいていた。テルは隣にいる今時のギャルというか、都会の女性の姿をみていた。とても奇抜で色気がある服装というか、わざと男性を誘惑するような服装だ。
金髪で癖毛、丸眼鏡かけたその女の人は毎日ブルトン新聞を読んでいる。
「私はタージリン紅茶とケーキセット」と可愛らしい声だ。小指を立てる仕草、耳たぶを触る仕草、なるほどちょっとした動作がすごく可愛らしく、気品がある。テルが彼女に見惚れるのもわかる気がする。
「ナオミとじゃ、月とスッポンだよ」
ジョジョの言葉はひとまず無視、聞かなかったことにした。

テルを意識しているのか、わざと女の人は足を組んでみせた。一瞬、チラッとパンツが見えた気がしない。テルは見てみぬふりをするが、顔は紅潮していた。ナオミはキッと女の人を睨めば、女の人が席をガタッと立ち上がり、少女の前にやってきた。
「女の嫉妬は見苦しいよ」ジョジョがナオミの足元でぼやいた。
「…な、なにかようですか…」
ナオミは魅力ある大人の女性を前にして、さすがにどもった。
ツゥーンッと女の人がつけている、香水の優しい香りが鼻に届く。
「…ねえ、僕」と女の人はテルの顎に手をやり、色気のある声でテルを誘惑する。
「は、はい！」

もはやテルの頬は紅潮の絶頂にあった。
「私と奥の個室でいいことしない？　じっとこっち見てたでしょ？」
女の人はナオミに目もくれず、テルの手をそっと触った。

テルは胸をギリギリまで曝けだしている、女の人と目が合った。
少年は顔をさらに赤らめ、ナオミがムッとして何か言い返そうとすれば、女の人は「あなたたちもいいわよ、今後の勉強のためにね。私と絡みたいかたはどうぞいらっしゃい。ちなみに私は顔射が好きなの」と自分たちをも喫茶店の個室に誘う。
女の人の意外な言葉にナオミとココはドギマギしていた。
「あばずれだ」ジョジョは軽蔑していった。
「マスター、奥の個室を借りるわね。そうねえ、一時間ぐらいかしら。え？　そこで子どもたちを連れこんで何をするかって？　もう野暮のことは聞かないで、ね？」

「ごゆっくり、顔射をお楽しみ下さい」
店主の怪しい眼つきとともに、パタンッと個室のドアが閉まった。
個室は赤いソファーがテーブルを挟んで、凹のような感じに収まっていた。テーブルには紅茶、あと彼女が頼んでくれたモンブランのケーキが五皿ある。壁にはお洒落な絵画が飾られ、小机に置いてある花瓶には、色鮮やかな花が生けられている。
テルは何を想像しているのだろうか――これは大人の男になるための第一歩かもしれないと、テルは女の人とこれからすべきことを想像していた。そんなテルにロロは過度に期待しないほうがいい、と大人の忠告をしていた。

「僕、こういうことは初めてなんだ。どうしよう！」
「何が初めてなんだい？」
「だ・か・ら、お姉さんと――――アレ？」
その姿を目前にして、ナオミたちは声がでなかった。

「やあ、皆。待たせたね」
声の主はエイブラハム・アグリだ。

「…ねえ、そこに座っていた美人のお姉さんはどこにいったの？」
テルのいう美人が座っていた場所には、エイブラハム・アグリが足を組み、微笑みながら座っていた。ソファーにもたれながら、アグリはシュボッと自慢のジッポライターで煙草を優雅に吹かしていた。
「アレは僕の女装だ。どうだい？　色気があっただろ？」
「悪ふざけにもほどがあるぞ！」
テルの唸り声、少年は顔射とやらを期待していただけにとてもショックな様子だ。
ロロはククククッと失笑し、ナオミはホッと胸をなでおろし、ココは「いつものエイブラハム・アグリのお茶目な悪戯だわ」と呆れていた。ジョジョは人間の交尾が見れるとあって、ひそかに期待していただけに舌打ちしていた。
「この手の話は、君たちには十年早いよ」
煙草を吹かし終えると、コホンッとアグリは咳払いした。
「わざわざ僕を呼びよせたのは、こんな俗な話をするためではあるまい」
ナオミたちは黒猫の正体がわかった、とアグリに詰め寄った。
「それがピックル・タナカ先生だって？」
アグリは彼らの言葉に微笑んだ。
「あいつは泥棒猫の首領『黒猫』なんだよ。僕たちはケンタウルス祭のときだけど、あいつがカジノに忍びこむのをみたんだ。人造人間を連れてきたのはたぶんヤツの手下だよ。それにスプリガンにやられて、リウマチになっていたし」
テルが髪の毛をくしゃくしゃにして叫んだ。
「なーるほど。うーん。君たちはよく調べているようだ」
「だからあと証拠だけなの、あの人は黒猫に間違いないわ」とナオ

ミ。

アグリは紅茶をずずずーっと音をたてて、「彼は黒じゃなくて白だよ」といった。

「でもあの状況なら誰もがみても…」

ココはケンタウルス祭の出来事でピックル・タナカを完璧に疑っていた。百聞は一見にしかず、噂よりも自分の目で確かめてみることは、何よりも真実を知ることができる最善の方法といえよう。

「確かにあの状況では、誰がみてもそう思う。だがそれが判断を狂わせる。疑いは疑いを呼んでしまうものだからね。どうだろう、ここは正攻法に彼に聞いてみたら？」

「そりゃあ、楽しいかもね」

テルはアグリの声を真似していった。

「あらっ、ピックル・タナカ先生。一晩、私と夜をともにしませんか？　ええ、私が慰めてあげますわ。あなたの悲しみを。私、タナカ先生のこと全部、知りたいの。先生は泥棒猫の首領『黒猫』なの？　教えて下さらない？」

少年のささやかな復讐に、アグリはククククッと苦笑い。

「そうだな。君のように色仕掛けが通じる相手だといいだがね」

テルは顔をグッと赤らめた。

「彼を黒猫と断定するのは時期早々というものだ。それにナオミ、エンガチョを匿っていたことは許してくれ。秘密はいつどこで漏れるかわからないからね。ドアの外で聞き耳をたてている連中もいることだし」

突然、アグリは扉に向かってペッと唾を吐き、「官能の神エロス、男女の喘ぎ」と呟いた。何も起こった気配はないが、男は聞き耳をたてている連中には僕らの淫らな声が聞こえているだろう――とさらりといってのけた。

「陰謀というものはそういうことだ、君たちも十二分に気をつけた

まえ」

ナオミたちはゴクッと喉をならした。すなわち油断大敵ということだ。『殺し屋』に狙われているナオミなら、その意味が痛いほどわかる。油断をしていたら、すぐに悪党に付けこまれてしまう。つまり革命的警戒心をもって、細心の注意を払うことだ。

一瞬、アグリの電話石に放電が奔った。

「はい、アグリだ」

「ああ、アグリ記者ですか？　ええ、僕です。ケネディ・ラインハルトですよ」

ラインハルト警部はとても興奮しているようだった。

「警部、まずは水でも飲んで、落ちつきたまえ」と笑いをこらえるアグリ。

「水なんか飲んだら、それこそもどしてしまいますよ」

「ということは殺人事件かい？」

アグリの鋭い問いかけに電話の先で、ラインハルトが頷いた気がした。

「じつはとんでもない事件が起こりまして、現場はキング・アーサー地区、ブルトンホテル大通りにある聖ハレルヤ病院です。とにかく奇妙な事件なんです。事件は昨日の真夜中に起こりました。面会時間が終わる午後十一時頃、いきなり悲痛な叫び声が聞こえ、非番だった看護士がかけつけてみるとですね、なんと植物人間状態だったはずの、あのサンチョ・ボブスリーがいたんです――というかベッドに横たわっていたんです。そのベッドはまた食中毒で入院していたロエスレル・ドラゴンヌ氏のもの」

ナオミたちは彼らの会話に聞き耳をたてている。

ラインハルト警部の話では、サンチョ・ボブスリーは意識を取りもどしたようだ。

「ドラゴンヌ氏がいうにはトイレから帰ってきたら、自分のベッド

にヤツが寝そべっていたので、恐怖のあまり大声をだしたとのことです。そうそうボブスリーですが、首根っこに銃弾が一発撃ちこまれていましたよ。

おそらく直接的な死亡原因は出血死だと思われますが。ともかく午前中に現場においでになられるのなら、お待ちしています。午後には鑑識がはいりますので、それまでにお越しいただけたらありがたいのですが。記者クラブの連中にはまだ知らせていませんから、これは特ダネですよ」

警部の言葉にナオミは脳をガツンッ！　と誰かに殴られた気分になった。

まだ現実が理解できていない。心臓の鼓動がいつもより早く脈打つのが分かる。ラインハルト警部はあの不死身の男が死んだといっていたけれど、きっと自分の聞き間違いに違いにない。そんなことがあってたまるか。相手はあのサンチョ・ボブスリーだぞ。

「本当に死んだのはサンチョ・ボブスリーかい？」

アグリはナオミをチラッと見つめ、もう一度確認のために警部に訊いた。やはりラインハルト警部は「死んだのはサンチョ・ボブスリーだ」と同じことをいう。

シンダノハ、サンチョ・ボブスリーダ。

嘘だ、いや信じたくない。あの人が死んだなんて。

「あ、あの…アグリさん。片腕かどうかも訊いてもらえますか？」

どうか嘘であってほしい、という少女のひそかな希望は「左腕がない」との言葉で断ち切れてしまった。そう死んだのはサンチョ・ボブスリーに間違いない。だが彼ほどの腕の持ち主がそう簡単に殺されるなんて、相手は一体どんなヤツなんだ。

ナオミは無念とばかりに瞳をぐっと閉じた。

「さっそくでかけるよ」
「ありがたい」とラインハルト警部は電話を切った。
アグリがふーっとため息をついて、ナオミたちに目をやった。
「聞いてのとおりだ、君たち。犠牲者はサンチョ・ボブスリーだ。彼がどんな理由で殺されたのかはわからないが、彼と君たちは何らかのつながりがあるのだから、用心にこしたことはない」とアグリは急いで外套を着ると、せかせかと動きまわった。
テルは小声で「エンガチョが悲しむな」と呟いた。
「そーね」
ナオミはうわの空でいった。

「さあ、君たち。心の準備はできているのかね?」
「ついていってもいいの?」ナオミはびくびくしていった。
「君たちのことだ。現場についてくるな、といってもついてくるだろう?」
ナオミが沈むゆく気分のなか、扉を開ければ、聞き耳をたてていた常連の顧客たちは「いや盗み聞きじゃなくてね、あの…そのう」と慌てぶりは何とも情けない。
「知的好奇心も火傷しない程度にね」
再び女装したアグリ。いやはやどこからみても女性だ、しかも美しい。常連の顧客たちは顔を赤らめ、彼をジロジロッと見ている。アグリがチュッと右手で投げキスをするものなら、てへへっと男たちは顔を赤らめた。
「マスター、勘定はつけておいてくれ」とアグリの小言に「あいよ」と喫茶店のマスターはぶっきらぼうにいった。どうやら彼はアグリの理解者のようだ。
ナオミは友人、いやそれ以上の人、自分に自由とこの社会での生活を与えてくれた、恩人というべき人が何者かに殺され、もはや彼らにかまっているどころじゃない。

それにしても大人の男の人って、なんでこうも美人に弱いのだろう。

ココは「本当に最低だわ！」とぷんぷんと怒っていた。テルといえば常連の顧客たちに「このませガキが！」と羨ましがれていた。いやはや真実と事実とはこうも違うとは――彼らが真実を知ったとき、そのときの顔がみてみたいものだ。

第３６話　世の中を欺いてきた悪党【３】

第３６話

数分後、ナオミたちは路面電車に乗って、ブルトンホテル大通りををめざした。

朝の通勤ラッシュとはいかないとしても、電車の中は人ごみでごみごみしている。ゴットン、ガッタンと電車の揺れが吊革に伝わり、ナオミの手にも伝わる。さりげなく窓に目をやれば朝から霧がたちこめていて、目にうつる建物は青く、そしてぼやけていた。でもアグリはとてもわくわくしているかのようだ。謎が彼を元気にしているのかもしれない。

推理記者は紅茶マニアだった。

キャッスルトン茶園で栽培されているタージリン紅茶は最高級品だとか、アッサム紅茶は深い味わいがあって、ミルクティーむきだとか、ことのほかにネパール紅茶は伝説級だとか。茶園限定、季節限定の紅茶では、紅茶が摘まれた季節ごとによって、香りや味の特徴がワインのようにちがうとか――そんな専門的なことをひとりで、ペラペラとしゃべっていた。

「ねえ、アグリさんは今度の事件のこと、あまり気にとめないの？」

アグリの紅茶話にナオミが割りこんだ。

「死体なら何回もみてきたからね。僕は噂では絶対に判断しない。およそその半分は妬みや嫉妬からくる、悪意ある作り話が多いからね。推理というのは自分の足と目でえられた資料、現場証拠がでそろわないと判断が狂うんだよ」とアグリはもの静かにいった。

アグリのいうとおりだ、まずはボブスリーの亡骸をみてみないと分からない、もしかして違う人の可能性もある。いや違う人であっ

てほしいーーーとナオミは心の底からそう願わざるえない。

その資料ももうすぐでそろうようだ。

アグリは停車ボタンを押して、聖ハレルヤ病院前で下車した。ナオミたちも急いで路面電車からおりた。テルはお金の持ち合わせがなかったため、下車できずに困っていたところを、通りがかりの紳士に助けられた。

「僕がだしてあげよう」

紳士はテルの分も余分に代金を支払った。

「あ、あの。ありがとう！　できればあなたのお名前を…」

「ああ、僕かい？　僕はねーーーっていうんだ」

路面電車のプーッという、出発の汽笛の音に紳士の名前はかき消されてしまった。もう一度、名前を訊こうにも紳士の姿はどこにも見当たらない。

「テル、ちゃんとお名前聞いたの？」とナオミ。

「路面電車のヤツが邪魔したせいで、聞きとれなかったよ」テルは小声でいった。

殺人現場は聖ハレルヤ病院の別棟、三一五号室の部屋だ。巡査のまわりに入院中の数人の野次馬が集まっていて、なかで何が起こったのかを首をのばして、覗きこもうとしていていた。ロエスレル・ドラゴンヌの隣部屋の老人なんか、「これは悪魔のしわざじゃ」とあることないことを皆に聞かせていた。

これがアグリが先ほどいっていた、悪意ある作り話に違いない。

まず推理記者は現場に駆けむことはせず、受付の女の人にお見舞などの訪問帳をみせてもらっていた。そして「なるほど」と頷くと、ようやく現場に足を踏みいれた。

「お嬢さん。ここは関係者以外、立ち入り禁止です」

ラインハルト警部は、女の人の胸の谷間をみてうなった。

「まったく男というものは悲しい生き物だな。警部、僕だ」
「ふーむ、最近の女の子は自分のことを『僕』っていうのか」
さらにラインハルト警部は「これが『萌え』ってヤツか」と唸った。
警部はナオミたちの姿をみて、ようやく僕という意味を悟ったようだ。恥ずかしさのあまりコホンッと咳払いすれば「もうすぐであなたに惚れそうになったよ」とアグリたちを事件があった、現場へと案内した。

ベッドにはものすごい形相をして、大きく目を開けた、恐怖の顔の男がナオミたちに飛びこんできた。まるで何かに脅える気味の悪い死体だった。
ジョジョはその亡骸と目があったため、ビクッと毛が逆立った。
「警部。どうぞ、お人払いを！」
アグリの言葉にラインハルト警部は皆を追い払った。
現場に自分たち以外誰もいなくなると、「よくぞきてくれましたよ、名探偵！」と金髪の色白の若い男、背が高いラインハルト警部が、待ちかねたようにアグリの手を感激ながらにギュッと握った。
右手には羊皮紙の手帳をもっていた。
「でも相変わらず、変な趣味をしていますね」
「大きなお世話だ」
アグリは死体に目をやっていった。
「で、手がかりは見つかったのかね、ケネディくん？」
「だからあなたを呼んだんじゃないですか」と呆れ顔のラインハルト。

もう一度、死体を見てみよう。

死体はそれほど背が高くはなく、エンガチョをひとまわりほど小さくした感じだ。

右手には何かを握っていたようにあとがあった。三十代後半から四十代前半の中年男で黒い髪にちぢれ毛、ぶしょう髭、顔はエンガチョにちょっとだけ似ていた。服装はあのサンチョ・ボブスリーの服装であることは間違いないのだが…。

――顔が自分の知っているボブスリーの顔ではない。

ナオミが知っているサンチョ・ボブスリーとは似ても似つかない。

「特別捜査官のムッシュ・ブラックが顔を変えているって…」とジョジョ。

「ムッシュ・ホワイトよ」

確かに以前、ホワイト刑事が顔を変えているのだろう、とカンペールのジジ亭でいっていたものの、これがサンチョ・ボブスリーの本当の顔なのかはわからない。雰囲気もどことなく違う。なぜか悲しみが湧いてこない、なぜなんだろう。自分の命を何度も救ってくれた恩ある人の死をみても、涙を流せない自分に嫌悪感さえ覚える。

「きっと別人なんだよ」

ジョジョはナオミの心を慰めてくれる。

「誰に殺られたと思いますか、名探偵?」

「まあ、まずは調べてみないとね」

エイブラハム・アグリは死体に近づくと、跪いて念入りに調べてみた。

ラインハルトは手帳をみながら神妙そうな顔つきで、死体をくまなくさぐっているアグリに目をやった。触ったり、押してみたり、ジャケットのなかを荒らしてみたり――亡骸の検査があまりにも素早いがため、刑事には彼が死体を冒涜してようにみえる。

「この亡骸の身元引受人、保証人は確認したのかね?」

「先ほどモン・サン・ミッシェルの看守に確認してもらったところです」

「それで間違いなくサンチョ・ボブスリーだと?」

「ええ、間違いありません」

やはり目の前の死体はサンチョ・ボブスリーに間違いないようだ。そう思えば心がずっしりと重たくなった。今まで数えきれいほど彼に助けられたことか、せめて「ありがとう」の花束を贈りたかった。後悔の念が少女の心に深く影を落とした。

アグリは何かを握っていたような右手をじっとみた。

「短剣を握っていたんですよ。速効性の猛毒を塗ったヤツです。ドラゴンだって一撃で殺れる強力な毒でしたよ。危ないですから鞘におさめて、僕たちのほうで預からせてもらっていますよ。それが何か？」

「いやそれならけっこう。ところで君は訪問帳をみたかね？」

ラインハルト警部は部下に命じて、受付から訪問帳をもってこさせ、ペラペラッと羊皮紙の手帳をめくった。そして昨日のすべての訪問客をもう一度、確認するように声をだしていった――ずらりとこんな感じだった。

『昨夜におけるロエスレル・ドラゴンヌ氏の訪問客』

午前十一時、ジョルジョ・パパティーノ氏と執事のガンダルフ・カトニグレ氏。果物をもってドラゴンヌ氏を訪問。果物は百色トマト十二個。午後一時、騎士候補生ヴィクトル・イエファがお見舞いに訪問。ドラゴンヌ氏は感激のあまり、少年に騎士メダル五枚を与えた。

「では彼の亡骸を霊安室に運んでもらってけっこう、調べることはもうないからね」

ラインハルトは担架とかつぎ手を四人用意させた。

彼の命令で死体は担架で運びだされることになったそのとき、一

枚の羊皮紙がペラッとアグリの靴元に落ちてきた。推理記者は親指と人さし指で気持ち悪そうに紙を拾いあげると、さらっと一読。羊皮紙には真っ赤な血文字が一文だけ、こんなふうになぐり書きされていた。

次はお前だ！

一瞬、ナオミの顔が強張った。

「ああ、これね。この連続殺人の予告、どう思いになりますか？」

「悪戯ではあるまい。あと一人、死ぬかもしれないね」

ラインハルトはゴクッと生唾を呑んだ。

「ど、どうして一人だと？」

「お前らじゃなくてお前だからだよ」

「で、名探偵。そのお前って、一体どこの誰なんですか？」

「これだけは犯人に聞いてくれたまえ」アグリは愉快そうにいった。もしかして自分かもしれない、ナオミはそう思った。サンチョは自分を殺そうする『殺し屋』に殺された可能性がある。アグリッパ悪魔教会、チェスのときに仲間もろとも襲われたことを考えれば、何も驚くことはない。

部屋はこれが連続殺人事件のはじまりと知り、どんよりと暗くなった。

「ところで警部、亡骸の所持品はわかりますか？」

「ここに全部あります」ラインハルトは隣のベッドを指差した。

そこには羊皮紙の手帳、万年筆、金の紋章入りの懐中時計が一つ。それから葉巻きにマッチ、電話石、最後に猛毒を塗った装飾短剣が一本あった。

皆が見守るなか、推理記者は靴でマッチをすり、葉巻きに火をつけて一服。

「僕の意見を聞きたいかい？」
遠い目、悲しい瞳が印象的なアグリ。
「そのためにあなたをここに呼んだわけですから」
ラインハルトと同じようにナオミもコクッと頷いた。
「それもそうだね。参考にだがこれは殺人事件、犯人は男だよ。死因は大量出血死であることは間違いない」とアグリはそっけなく答え、懐から懐中時計を取りだした。パカッと銀の蓋を開ければ、カチッ、カチッ、カチッと規則正しい音が鳴っている。
そうか、殺し屋は男なのか。
「これはそう難しくない事件だ。僕はその犯人の目星はついているけど、彼は完璧なまでに証拠隠滅をはかっているんだ。いや証拠なんてはなから存在しない。彼は犯人であって犯人じゃないわけだから、あえて名前を公表しない。僕は彼に自首を求めたいと思う。それまで沈黙を守る、君たちも協力してくれたまえ」
「ええ、それで犯人が捕まるのなら…」
そう簡単に殺し屋が自首するものなのか、怪しいところだ。
なんせパパティーノもいっていたが、相手は悪魔教徒だ。しかもパパティーノに殺しの罪をなすりつけようとしたほどの知能犯。アグリッパ悪魔教会のとき、アグリも確か「稀にみる戦略家、完璧なほどに証拠隠滅をはかっている」といっていたじゃないか。
「警部、いっておくがね。自首には多少時間がかかるよ、なんぜ複雑な糸だから」
アグリは淡白な声で、そういうと戸口へと歩いていった。ナオミたちも我に返り、彼のあとをついてでていった。残されたラインハルト刑事はぽかんと口を開け、「またわけのわからないことを！」とボソボソいっていた。
ナオミはこっそり、あの匿名患者の部屋にいってみたものの、その部屋はすでに空っぽだった。通りかかった医師に尋ねてみれば、トモロヲ・ブドリのたっての願いで部屋替えをしたそうだ。医師に

その場所を訊けば、いきなり先生は口を閉ざした。目のまえにトモロヲ・ブドリがお見舞いにきていたからだ。

医師は何もいわず、そのまま立ち去ってしまった。

「わしの可愛そうな身内に何かようかね?」前伯爵は微笑んだ。

その一言でナオミはすべてを悟り、彼女たちのことを忘れることにした。

トモロヲ・ブドリ伯爵といおうとしたが、なぜか声がでない。

「元気そうで何よりです」

ようやく気遣いの言葉が口から飛び出した。

「君もな」とトモロヲ・ブドリはニコッと優しく微笑んだ。

再会の感動というよりも、動揺のほうが大きいかもしれない。経営責任をとらされ、この町を追放されていたと聞いていたが、老人は以前とさほど変わりはないようだ。ナオミが今はどこに住んでいるのか、と訊けば老人は何も答えない。自分と会ったことを公言しない約束をさせられ、トモロヲ・ブドリとはそこで静かに別れた。

耳を澄ませばカリヨンの鐘が聞こえてきた、もう時刻は午後三時だ。

「長電話はアグリのはじまりって言葉、知ってる?」

ブルトンホテル大通りにある、赤い電話ボックスからでてきたエイブラハム・アグリにテルはお茶目にいった。電話石の充電がきれたとはいえ、一時間はさすがに長いものの、今のアグリにとって、テルの言葉など町の雑音に等しかった。

帰りの路面電車で、アグリはピックル・タナカの住所を知っているか、ナオミたちに訊いてきた。ロロはやっぱりという顔をしていた。

「泥棒のほかに殺人までやっちゃったんだな!」テルはうなった。

ナオミはどういえば分からなかった。

「おいおい、彼は犯人じゃないよ。それに泥棒もやっちゃいない。

彼の住所を聞いたのはタナカ先生に思うところがあって、会いにいくだけだよ。会って聞くことこそ、一番たしかなことはないからね」とアグリは苦笑していった。

「だったら犯人は誰なの？」

ナオミは強張った顔つきだ。

「犯人はサンチョ・ボブスリーであってそうでないものだ。でも実際に死んだのはサンチョだけどね。彼はまぎれもなく世の中を欺いてきた悪党だ」そういうとエイブラハム・アグリはナオミたちと別れた。

世の中を欺いてきた悪党？　自分に自由を与えてくれたあのサンチョが？

確かエイブラハム・アグリは地下に潜る前、サンチョ・ボブスリーは冤罪で刑に服していた、といっていたような気がする。ナオミはいまいち理解できない。そんな少女にジョジョは「天才の頭のなかはそんなもんさ」と世の道理をぼやいた。

第37話　ロミオ・ロートレックの秘密【1】

第37話

「おかみさん、どれですか？」
「そこにあるでしょ、青色のバラの花束…」
アリサ夫人はブーケ作りに忙しそうだ。
「どこに届ければいいの？」
「三階」アリサ夫人はつっこんどんでいった。
「どこの三階ですか？」
「もーう、ピーター・ティソの三階よ」とせかせかしている。
アリサ夫人は「この花束はナオミ宛よ、あなたもすみにおけないわね。どこの男の子の告白かしら？」と嬉しそうに少女をからえば、「そ、そんなんじゃないです！」とナオミは顔を真っ赤にして、三階へとかけあがった。
このバラの花束はティソ親方の兄ペーター・ティソの花屋で働いている騎士候補生が、朝一番で届けてくれたそうだ。贈り主の名前はない。その子がいうには今から三日ぐらいまえに手紙とともに声の塊が同封されていたそうだ。支払いは小切手、代金を受け取った以上、ペーター・ティソ親方は断ることもできず、声を花にしたとか。

ナオミは花瓶にバラの花を活けると、ベッドに腰掛けた。
「アグリッパの連中の悪戯だよ、捨てちゃいなよ」

そうかもしれない――であったとしても、人の心を蔑ろにしてはいけない。

ナオミはどんな言葉が聞こえてくるんだろうか、もしかして呪い

の言葉とか、いきなり誰かの怒鳴り声だったらどうしようと、ハラハラしながらバラの花びらを数枚、千切ってみた。すると聞き覚えのある、あの声が聞こえてきた。

「私は生きている、安心してくれ」

その言葉にナオミの頬にツゥーッと涙が滴り落ちた。男の死に顔をみても、瞳から一滴も流れなかった涙が男の声を聞いて、ようやく胸の奥から止め処なく溢れた。

言霊ーーー言葉には魂、いや人格があるということは、満更でもなさそうだ。

「君に嘘をついていたことを許してほしい。私はサンチョ・ボブスリーではない。君の身の安全のために今は本当の名はいえない。落ち着いたら君に真実を告げにいく」

サンチョ・ボブスリーであって、そうでない男の声はそれで終わっていた。

何ともいえない重苦しい雰囲気がナオミとジョジョを包み込んだ。

「じゃあ、あの人は誰なの?」

ナオミはゴクッと生唾を呑んだ。

「きっと本物のサンチョ・ボブスリーを殺した犯人だよ」

ジョジョの言葉が正しいかどうかはさておき、聖ハレルヤ病院で横たわっていたあのサンチョ・ボブスリーが本物のボブスリーなら、どうして自分は彼をサンチョ・ボブスリーと思ってしまったのだろう。

いや冷静になれば、誰だってわかる。事の始まりは彼をサンチョ・ボブスリーと断定したあの男、特別捜査官のムッシュ・ホワイト次官だ。彼の推理は最初から間違っていたんだ。ムッシュ・ホワイトは違う人を逮捕したんだ。でも逮捕されたあの人はサンチョ・ボブスリーと呼ばれても、何も否定しなかった。

なぜなんだろう？　どうもいまいち合点がいかない。
「きっと彼の身代わりだったんだよ」
ジョジョの推理「犬も歩けば棒に当たる」は、ときどき物事の核心にせまる。
あのサンチョ・ボブスリーの亡骸には左腕がなかった。あの人も左腕がない。これをどう説明すればいいのかわからないが、ただ先ほどの声は確かにあの人の声だった。これだけは確かな真実だ。
「ねえ、ジョジョ。あの人がサンチョ・ボブスリーじゃないことは秘密よ」

さて古代ケルト暦十月三十一日は、一年の終わりの日だ。
新年と冬を迎えるお祭りで、夜には死者の霊が家に帰るといわれている。多くの農家では秋の収穫を祝っていた。いわゆるハロウィーンはケルト人を先祖にをもつ、ブルトン人にとっても大切な伝統文化だ。
最近では四人だけ、もしくは五人だけの秘密を話し合うのは、いつもライアンの部屋のなかで行われていた。『剣と盾』では、マイケル・コービーがいつも仲間にいれてほしそうにこちらをうかがい、安心して話ができないからだ。

部屋にはナオミ、テル、ココ、ライアンの四人しかいない。
最近、ロミオ・ロートレックの姿がみあたらない。というのもここ数日、ロロは体調を大きく崩し、ずっと寝込んでいた。ナオミがお見舞いがてらに三回ほどロロを訪ねて、さびれ横丁にやってきたものの、部屋にはマルボロ親方がいて、いつも会えない。無理に会おうとすれば「なにしやがる！」と追い返されていた。
それから一週間がたち、ロロが元気にならないことにナオミたちは苛立っていた。
しばらくしてコンコンッ、と誰かがティソ邸の玄関をノックした。
「お菓子をくれないといたずらしちゃうぞ！」とマイケルの声が聞

こえた。
「はい、どうぞ。小さなフランケンシュタインさん」
アリサ夫人はうふふと笑うと、少年のかごのなかにドラゴンチップスを山のようにいれてやった。マイケルは「ありがとう」とぺこりと頭をさげた。それから彼女にナオミたちを呼んでもらった。
「どうしたの、マイケル？」
「…ロロに頼まれたんだい、ナオミを連れてきてって…」
フランケンシュタインに仮装している、マイケルは今にも泣きだしそうだ。
「ロロの具合が悪いの？」マイケルはただ頷いただけだった。

マイケルに連れられ、ナオミたちは病床のロロのもとへと急いだ。
ブルトンホテル大通りではハロウィーンだけあって、いろんな服装に扮した人々が仮装行列をしていた。広場では大きなかがり火がたかれ、人々は愉快に飲み食いしていた。商店街や家々にはお馴染みのボチャ提灯が飾られていた。
墓地大通りではゴーストたちが、水がはいった大きくて広いおけにリンゴを浮かべ、おけのうえに身を乗りだして、歯でリンゴの軸をくわえて釣り上げるという伝統的なゲームを楽しんでいた。そこにはハナコ・ゴーストの姿もあった。
「ねえ、悪霊がいるよ」
ジョジョはハナコを見ていった。
「もーう、バカなこといわないの」とナオミ。
「ねえ、知っている？」ココはナオミたちにカボチャ提灯の物語を話した。
「北欧の小さな村にジャックというけちんぼで、飲んだくれの男がいたの。そのジャックが死んだとき、神様はジャックを天国へいれてくれなかったの。そこでジャックはカブをくりぬいて提灯をつくり、その灯りで道を照らし、地上へもどってきたの。これを知った人々がハロウィーンの魔物を追い祓うのにね、ジャックのカブの提

灯を作るようになったの。これが北欧に伝わる古いなんだって」
「だったらどうして今はカボチャなのさ?」
テルが不思議そうにいった。
「うん、ケルトの人々が新大陸に移住してきたとき、カブよりもカボチャが提灯にむいているとわかったの。それ以来、ジャック・オー・ランタンはカボチャをくりぬいて、作られているんだって」
「それでけちんぼジャックはどうなったのさ?」
「ゴーストになったって話よ。その弟の子孫がね、あの飲んだくれのバーンズ・マルボロ親方なんだって。アグリさんがいうにはね」

ナオミたちは墓地大通りのさびれ横丁にある、マルボロ親方が住んでいるアパートのまえに辿りついた。アパートとアパートの間に挟まれた、古びた路地ではナオミたちの到着を今かいまかと待っていた。
「…五分、遅かったな…」チャーリーは悲しげにナオミをみた。
「今さっき酔っぱらったマルボロが帰ってきたんだ」
「じゃあ、会えないの?」
ナオミは肩をがっくりと落とした。

「ロロに会うまえにヤツの呪いを喰らうはめになる」
一同はチャーリーの言葉にうつむいた。アパートの玄関にはハロウィーンを祝う、カボチャの提灯がいくつか並んであった。するとふとナオミは何かをひらめき、輪になってボソボソと密談した。そして最後にフランケンシュタインに扮している、マイケルを皆でゆっくりとみた。
「なんだよ。僕は嫌だぞ」マイケルは後ずさりした。
「ドラゴンチップス三日分で、手を打たないか?」
「うーん。四日分だったら考えてあげてもいいよ、テル」
テルとマイケルはガチッと握手を交わした、どうやら交渉成立のようだ。

ドラゴンチップスでつられるマイケルの将来が心配だ、とジョジョはぼやく。

ナオミは人の将来ばっかり気にするジョジョがとても心配だ。でももっと心配なのはロロ、そうロミオ・ロートレックの体調だ。マイケルを使いにやらねばならないほど、弱っているなんて今までになかった。

ナオミは心情穏やかではない。胸にそっと手をやれば、鼓動がいやに早く脈打っているのがわかる。運命の女神よ、どうか彼が無事であるようにとナオミは切に願う。

第３８話　ロミオ・ロートレックの秘密【２】

第３８話

マルボロが住んでいるアパートはそれほど広くはない。呪術師を生業としているだけあって、そこらじゅうに悪魔教の遺物がある。干からびた人の顔らしき者や髑髏、黒蝋燭に黒十字架、正直、気持ち悪い。玄関扉には黒ヤギの剥製が飾ってある。押しても引いても扉はビクともしない。一瞬、黒ヤギの剥製がギロッとナオミを睨んだ。

「来訪者か、何者だ？」

この扉の守護魔法か何かだろう。ヤギ頭が不気味に呟いた。

「バーンズ・マルボロの従騎士に会いにきた」

ナオミは慄然とした声でいった。

「従騎士の名は？」

「…ロミオ・ロートレック…」

黒ヤギがもう一度、ナオミをギロッと睨んだ。

「…扉の合言葉。我らがフォン・ネッテスハイム…」

なんて答えればいいんだろう？　合言葉なんか自分が知るわけがない。

悪魔教といえば、ナオミが思い浮かぶのはパパティーノとあの言葉だ。パパティーノが暗号のわけがない。ジョジョは「僕はパパティーノのくそったれが合言葉だと思うよ」とその目は悪戯小僧のようだ。

ジョジョの言葉は当てにならない。フォン・ネッテスハイムといえば思い浮かぶのは、あの言葉だけだ。

「…アグリッパ…」

ナオミはやや緊張気味でいった。
黒ヤギは何もいわず、ナオミをギロッとまた睨んだ。
「不十分、我らがフォン・ネッテスハイム…」
「あ、あの…そのパパティーノ……くそったれ」思わずナオミはその名を呟いた。
黒ヤギは「偉大なる黒き血脈、その名に我らは拝し奉る」と、その殺気に満ちた瞳を静かに閉じてまもなく、キィーと不気味に扉が開いた。正解だったのかどうかは分からないが、ジョジョは得意げに「犬も歩けば棒に当たるって言葉、ナオミは知っている？」とぼやいていた。

耳を澄ませば扉の奥から変な音が聞こえてくる。
小さな暖炉に部屋が二つ、そこにあるソファーにマルボロは、ぐーぐーと鼾をかいて寝ていた。右手には飲みかけのラム酒の瓶をもっていた。
「ヒック、ーーーーったく、ハロウィーンのどこがいいんだあ」
マルボロはぐでんぐでんに酔っぱらいながら、ぶつぶつと独り言を呟いていた。
「くそガキどもは俺をみて、ジャックの子孫と罵っては石を投げるばかり…」とまたマルボロはラム酒を飲みはじめた。

ボーン、ボーンと万年時計の鐘の音が午後九時の打ちはじめた。
マルボロは「おい、いねえのかい。まさかくたばっちまったのかあ？　コラァッ、くそガキ！」と大声でロロの名前を呼んだ瞬間、男はラム酒の瓶をとり落としてしまった。
マルボロはほっそりした瞳は、みるみるうちに大きくなった。
路地に面した小窓にうっすらと青白い顔の大男が見えたのだ。マルボロは目をこすり、もう一度ゆっくりと見たが、カボチャ提灯をもった青白い大男がそこにいるのだ。まるでフランケンシュタインのようだ。

「バーンズ・マルボロ！」
気持ち悪い声とともにドアを開けて、ゆらりとはいってきた。
「お前はわしを祝ってくれんのかね？」
「く、くるな！」マルボロは血相をかえて、酒瓶を大男にめがけ投げつけた。
「お前はわしを祝ってくれんのかね？」とまた男はいった。
「だ、誰だ！　な、名を名乗れ！」
マルボロは今度は剣をすばやく抜いた。

「愚か者め！　ご先祖に剣をむけるとは身のほどを知れ、バーンズ！」
「ご、ご先祖だって？」
マルボロは悲鳴のような声でいった。
「あんたはジャック・マルボロか、俺のご先祖か？」
「さよう、今夜はハロウィーン、死者の祭り。死者が親族をおとずれてどこが悪い」
「…そ、その、ジャックが何しにきたんだ、ヒック！」
ジャックは青白い顔をして、カボチャ提灯をマルボロの顔に近づけた。
「…近ごろのお前は何かと評判が悪いようだ、見かねてここにきた…。お前をわしらの仲間に引きづりこもうと思ってな。なあに、チクッと痛いだけさ」というと青白い顔の男は自分の剣を抜いた。
「外では仲間が待っておる、早くせねば…」との言葉は効果覿面だった。

マルボロは剣を投げ捨て、「うわあああ！」と踵を返し、悪魔から逃げるように一目散にかけだしたが、途中で石に躓いて、ドサッとその場で倒れた。するとマルボロは路地にたむろしていた無気味な怪物たちをみて、「ち、近寄るな！　化け物どもめ！」と後ずさりしながら、そのまま悲鳴をあげて気を失った。

「失礼しちゃうわね」とココ。
「ああ、　ヤツのほうが百倍は恐いよ」と愉快そうなテル。
するとジャック・マルボロが二つにわれて、部屋からぬっとでてきた。
「あー、怖かった。僕、斬られるんじゃないかって思ったんだ」
「お前はマルボロと同じように顔を青ざめていただけだろ！」
上半身役のマイケルに対して、下半身役のチャーリーがうなった。
「だってあの人の顔、ものすごく恐かったんだもん。君たちもみただろ！」
マイケルは何を思ったのだろうか、「一度、見てみたかったんだ」とマルボロの右目の眼帯をそっと外してみた。少年が「カラスが棲んでいる」とウエェーッと声をあげると、右目の中にうずくまっていたカラスは鳴き声をあげて、夜空に飛び去った。

ふとチャーリーが悲しそうな顔をして、親指で部屋をさした。
「ロロが待っている、はやくいってやれよ」
「皆はいかないの？」とナオミ。
「ロロは君と話したがっているんだ」
「…犬は連れていっていい？」少女はジョジョをみていった。
チャーリーはコクッと頷いた。

階段はぎしぎしと古びた音がし、二階まであがると左から三番目がマルボロの住居だと聞いていたので、そっとドアに近づいてみた。耳を澄ましてみればゴホゴホッと男の子の堰が聞こえた。
「きっとロロだ」ジョジョはヒソヒソ声でいった。
ナオミはかるくコンコンッとノックをして、小さな声で「おじゃまします」と呟くと部屋のなかへはいった。

アパートのなかは微かに死の香りがした。これは死人の香りだ。
そこはうっすらと満月の光はさしこんでくるものの、物置部屋み

たいなところだ。床には本がたくさん散らかっており、先ほどまでマルボロが横になっていたソファーがあった。するといきなり何かがもぞもぞと動いたと思えば、そこには毛布に包まり、まるくなっていたロロがいた。

「ロロ！」ナオミは少年を抱きおこした。

「その声はナオミか？」

「ええ、そうよ。私よ、それより大丈夫？」

ジョジョ・ダックスフンドはくーんとロロにすりよった。

「お前も心配してくれるのか？」

ナオミはロロの手をギュッと握った。

彼の手はものすごく青白く、そして骨ばった小さな手。一週間前よりもさらに痩せほせて、ライアンの手よりも熱をおびていた。返り血を浴びたように血が体中にべっとりついている。今気づいたのだが、少年のまわりは異臭がする。いや死臭といってもよい、それにロロはとても息苦しそうだ。

大きな堰をすれば、血痰が床に飛び散る。手遅れ――――いや希望はあると信じたい。

「ちょっと待てて、ホーエンハイム先生を呼んでくるわ」

ナオミは顔を真っ青にしていった。

ときどきホーエンハイム先生は診察にきてくれる、わざわざお前を呼んだのはそんなためじゃないんだ――――ロロの死んだ魚のような目つきがズサッと心に刺さる。

「お願い、生きることをあきらめないで！」

と突然、衝撃的なことが起こった。ロロの背中から、手がぬっとでてきたのだ。

ナオミは悲鳴をあげ、ジョジョは唸った。

ロロの背中が真っ二つにわれ、まるで穴からはいでてくるかのよ

うに何かが、ロロの血と苦痛に満ちた声とともに鈍い音をたてて地面に転げ落ちた。赤い粘々した粘膜に覆われた黒い物体。背中には翼が生え、目は赤い。これは俗にいう、つまりその、わかっているのにその先がいえない――。

「魔族だ」ロロがナオミの声を代弁した。

そうだ、その言葉だ。俗にいう魔族は醜い、この世の者とは思えないほど邪悪だ。

「ロミオ・ロートレック！　悪魔契約に従い、お前を迎えにきた」

魔族の声はこの世のものと思えないほど、邪悪に満ちている。

「だまれ！」

ロロは力を振り絞り、よろめきながら、血に染まった剣で魔族の喉もとを掻き斬った。

呻き声とともにドピュッという音とともに血が飛び散った。返り血を浴びたロロは表情を何一つ変えない。もう慣れているらしい、異なる者の生命を絶っても無表情のままだ。おそらく何十匹という魔族の命を同じように奪ってきたのだろう。

目の前にいるロロは、キツネ狩りのときのロロとは明らかに違う。

「人面痩は、この世と冥界との扉なんだ」

冥界と娑婆世界（いわゆる私たちが生きる世界）は結界がはられ、本来は行き来ができないようになっている。本から得た知識では、この人面痩はお互いの世界を行き来できる扉だといわれる。末期の人面痩がぶつぶつ呟くのは死の合図ではなく、冥界に住む魔族たちに扉が完成したことを知らせる呟きだ。

知らせを訊いた冥界の魔族たちは人面痩を扉として、冥界からこの世界に招かざる客として足を踏み入れる。大抵の場合、人面痩からはいでてくるまえに、その激痛で多くの者は命を落とす。あの魔導師マーリンも、聖女が夢魔との間に身ごもった呪われた子どもと

いわれるが、じつは女の背中からやってきた夢魔の子であるとか。
魔族、それは一度死んだ人間のことだ。この世に未練があるため悪魔に魂を預け、姿形を変え、邪悪な力により蘇った者。対して彼らと相反するのがエルフだ。不老不死と引き換えに運命を受け入れた傍観者ともいえる。
「もう俺には時間がない」

這い出てくる魔族はどんどん強くなっているらしい。いずれ俺は連中に殺され、その魂は冥界に引きずり込まれるだろう。そのまえに伝えたいことがある、とロロはいう。
「ロロ、お願いだからそんなこと、いわないで！」
ナオミはロロを力のかぎり、ギュッと握りしめた。
「時間がない、頼むから聞いてくれ」
もはやロロは感情に翻弄されない。その瞳は死を悟った者の目だ。
吟遊詩人が叙事詩を綴るように少年は、アッパータウンに来るまえに送られてきた手紙の内容をナオミにゆっくりと聞かせた。それは魔族同様に衝撃的な内容だった。ナオミはロミオ・ロートレックの話にゴクッと生唾を呑んだ。

第３９話　ロミオ・ロートレックの秘密【３】

第３９話

ロロの父の名はピエモンテ、冤罪専門の優秀な法律家だった。ある日、ピエモンテに冤罪で牢屋にいれられた、高貴な人を助けてやってくれないかという手紙が届いた。その手紙を読んだピエモンテは思わず身ぶるいした、そこにはものすごい陰謀がひしめいていたそうだ。

その高貴な人を陥れたのは悪名高きモンテカルロ党、俗にいう迷いの森の一味だ。

ピエモンテは『公爵陛下のために喜んで受けましょう』と返事を書いた。

それから三年もの歳月がすぎた。ピエモンテはたくさんの証拠を集め、依頼人のために裁判を起こそうとした前日、妻マリアノと一緒に行方不明になった。誰が見ても明らかだった。ロロの父と母は迷いの森の一味に殺されたのだ。一歳だったロロは親戚に引き取られることもなく、ロートレック孤児院に預けられた。彼も自分同様、人生を迷いの森の辺境伯によって狂わされた一人だったのだ。

「俺の本名はコ・クーボ」

父から受け継いだ名前は、ロミオ・ラマンチョ・ピエモンテ・コ・クーボ。

今から九年前、行方不明になったコクーン・コ・クーボはロロの叔父。手紙の差出人はコクーン・コ・クーボだ。世間ではコクーンがロロの父と母を殺害した犯人だといわれているが、手紙では迷いの森の一味の誰かに殺されたって書いてあったそうだ。

信じるかどうかはロロ次第だが、こうして手紙がくるってことは

コクーン・コ・クーボが生きているというなによりの証。生きていながら地下に潜っているということは、真実が表にでることを許さない者がどこかにいるってことだ。

沈黙しか許さない、重たい空気が部屋中に流れた。とその瞬間、瞳がゴリゴリと痛くなってきた。ナオミの目の痛みには理由がある。コクーン・コ・クーボという名前が引き金になったようだ。

瞳に封じこめられた少女の過去、記憶は完全に目を醒ました。

「ここはどこ？　ああ、これは私の記憶のなかか…」

気がつけば暗闇のなか、終わりのない螺旋階段へを登っていた。黒い階段だ。螺旋階段の真ん中、空洞には大きな砂時計がある。砂時計は静かに記憶の砂を流れている。ナオミは暗闇のなか、一筋の光に手をやった。キーッと不気味に扉が開いた。

部屋の壁にカレンダーがかけてある。

一八五四年十二月のカレンダー、ということは今から九年前の記憶か。

部屋をでれば大きな廊下にでた。ここはどこだろう？　いや似たような場所を自分は知っている。左右に個室があり、真ん中に廊下がまっすぐにあるその場所は、永久機関式飛行船ナヴァグリオの船体にどことなく似ている。

廊下には傷ついた騎士たちがうつ伏せで倒れていたり、壁に背をもたれ、虫の息のように見える。いやきっと死んでいるに違いない。助けようにもこれは瞳の記憶、無駄なことぐらいはわかっている。ナオミは瞳をグッと閉じ、木嚢へと続く階段をあがった。

そのときだった、階段に背もたれしていた騎士と目があった。

騎士は最後の力を振り絞り、「うおおおー！」と声を荒げ、隠し持っていた短銃を少女に目がけてバンッ！　バンッ！と数発、撃った。確かに自分は撃たれたが、銃弾は自分を貫通して、後ろの壁に

めりこんでいた。
「くたばりやがれ！」
男は額から血を流して、それだけ呟くと息絶えた。誰かが彼の頭を打ち抜いたようだ。

一体誰だろう？　と振り返るとそこは見覚えのある者たちが立っていた。

「ホワイト次官補、時間がない」
男を撃ったのはムッシュ・ホワイトだ。その取巻きにも見覚えがある。一人はサラ・レッドブル、そして彼女の部下たちだ。ホワイトはコートから葉巻を取り出し、ジッポの蓋をパカッと鳴らして、葉巻に火をつけた。
「あと一息だ」とホワイトが廊下をコツ、コツッと歩けば、そんな彼をレッドブルが護衛する。部下たちはさらに彼女たちを守るかのように警戒しながら、血に飢えた狼のように階段へと足を運んだ。

「あとは私に任せろ。諸君はここで待機しておけ！」
ホワイトは吸い終わった葉巻きの火を、靴のつま先でギュッと消した。
「容認できませんな、我々は閣下の護衛だ。それに私、サラ・レッドブル中将には失態を挽回せねばならない、軍人としての責務がある。まさかホワイト次官補たるお方が昨日の夜の約束をお忘れか？」
と男勝りの声で、先ほどホワイトが撃ち殺した騎士の虚ろの目を左手で閉じてやりながら、ホワイトを直視するサラ。
勝負はすでについている。なにも殺す必要はなかっただろうに、と言いたげな顔だ。
「中将、そうだったな。お前には名誉挽回の機会が与えられて当然だ」

今、彼女はレッドブルは少将だ。結局、失態を挽回できずに降格したのだろう。

「昨日、ベッドのうえで楽しませてもらった、御礼をさせてもらわなくちゃな。それにしてもお前の部下たちは外でよくまあ、我慢できたもんだ。軍人の鏡だな」

ホワイトはその豊かな胸をギュッと右手で握った。

「私の部下は命令に忠実でしてね。例え上官がきちがい猿に犯されようが、部屋の外で待てといえば忠実な犬のように何時間も待つ」

今すぐにでも、ホワイトをぶちのめしたいとばかりにレッドブルの右手がぷるぷると震えている。だが彼女は何もしない。彼女よりも、彼女の部下が怒りを抑えるので必死のようだ。一瞬、犬猿の仲という言葉がナオミの脳裏に思い浮かんだ。

「その猿のガキでも孕ませてみるか、中将?」

「閣下がお望みなら――――」

サラは他人事のようにさらりと受け流した。

「お前はベッドのうえでもそうだったが、裏表がないヤツだ」

男は嫌がる女に強引に自分の唇を重ねた瞬間、ホワイトはサラの頬を右手で勢いよく打った。彼女の美しい金髪が乱れ、豊かな胸も左右に揺れた。部下が剣を鞘から抜こうとするのをサラは右手をあげて制止した。

「まさか思うが、お前はまだナオキに想いをよせているのか?」

「オンナがオトコに想いを寄せてどこが悪い」

ナオミは美術館でのエミール・エマニエルとサラ・レッドブルの、意味深な会話をにわかに思い出した。ボロが「いつになればお前は軍服を着なくなるのだ」と訊けば、確か彼女はこの世から愛する人を奪った戦争がなくなったときだ、と答えていた。

ホワイトはペッとサラの足もとに赤くなった唾を吐いた。

「ナオキには妻子がいる、もうあきらめろ…」

「残念ながら、私の愛はそんな薄っぺらいもんじゃない」

もしかしてサラ・レッドブルは父を愛していたのかもしれない。
「フンッ、そこが男の心をくすぐる！」

階段を上がれば、青空を仰ぎ見ることができる。
度重なる砲撃に次ぐ砲撃で、ところどころに大きな穴があいている。砲撃によって木嚢は炎に包まれ、黒煙がもくもくとあがっていた。木嚢には砲撃によって、命尽きた騎士たち幾人かの亡骸が転がっている。ナオミが一歩踏みだしたとき、彼女の頬をピューンッと銃弾が飛びかった。まだ交戦状態のようだ。

甲板の上の野戦、そんな言葉が似合う。
「軍警察の特使が来たと伝えよ」サラが声を張りあげた。
次の瞬間、何者かが彼女に襲いかかった。襲いかかった？　いやそれとも流れ弾から彼女を救った？　それは分からない。もしその場にいたなら流れ弾は彼女の腕ではなく、間違いなく心臓を貫いていただろう。
ガキッ！　と男の剣を受け止めるサラ。
死闘は数分間続いたものの、力で女が男に勝てるはずはない。しかも手負いなら尚更だ。地面に叩きつけられたサラの首もとに男が剣を近づけた。決闘を見守る部下たちの眼には、男の剣を払いのけようとする必死の上官の姿が映る――だが実際はそうじゃない。
「ロアゾンのなかに裏切り者がいるだと？」
男はサラと剣を交えながら、小声で会話を交わした。
「その情報は確かか？」
「ああ、昨日の夜、きちがい猿と寝取って得た情報だ」
首もとのキスマークが男の目にはいってきた。男は何も言い返せない。
「気にするな、お前たちが身体を張っているんだ。私にもそのぐらいはさせろ」

裏切り者の存在は何となく気づいていた。
だが認めたくはなかった。が、その自分の心の甘さが露呈した結果、今やロアゾンは壊滅状態に陥っている――男は瞳をグッと閉じた。小さな悪が大いなる正義を滅ぼすことは歴史の常である。

カチッ！　と誰かがナオキの頭に拳銃を突きつけた。

男はゆっくりと視線を横に流した。万事休すとはまさにこのことだ。
「我々は戦いにきたんじゃない、投降を促しにきたのだ。これ以上やるなら、不本意だがお前の頭を打ちぬく。時間がない、話し合いの場所を設けろ、ナオキ・ニト！」
声の主はムッシュ・ホワイトだ、劣勢の仲間の助けにはいったようだ。劣勢の仲間、サラ・レッドブルのことじゃない。きっと今、彼が銃を頭に突きつけている敵、ナオキ・ニトのために彼は戦いに割ってはいったのだ。ホワイトもまたロアゾンを助けたい、と願うナオキ・ニトの友人だった。

「そうか、特使というのはお前のことか、ホワイト…」
初めて聞く、父の声にナオミは小刻みに震えた。やはりそうだ、肌身はださずもっている写真と同じだ。目の前にいる人は英雄と謳われた騎士ナオキ・ニト、自分の父だ。

第４０話　ロミオ・ロートレックの秘密【４】

第４０話

ここは階下のゴンドラ、船長室だ。
「兄夫妻殺しのコクーン・コ・クーボが、ここに匿われているとの情報だが？」
「あいつはでかけている。この件にあいつは関係ない、巻きこむな」
「本題にはいろう、大人しく投降してほしい」
ナオキ・ニトは、窓の外に目をやった。
「ヤツに屈しろと？　アイツやお前のようにか？」
「生き延びるためだ」
「ふん、悪に染まりやがって！」
不正を知りながら、不正を正すことを恐れるとき、そのとき人は悪になる。

男は違った。不正に屈するぐらいなら、喜んで死ぬとナオキ・ニトは厳正にいった。
ホワイトは再起をはかるべく、ここは降伏を受け入れるべきだというが、ニトは大半の仲間が捜査中に暗殺されたこと、自分は特別捜査官次官という立場、とりわけ今回の任務隊長であることをあげた。仮に降伏しても、万事よろしくとはいかないのだ。
「正気か！　まわりをみろ！」
硝煙が晴れ、ようやく周りを見る余裕がでてきた。

ナオミは恐怖のあまり声が出ない。まわりをぐるっと見渡せば、数十メートル先にナヴァグリオのような軍艦六隻がこの飛行船を取り囲んでいた。ホワイトはあと一時間後に軍艦六隻は一斉砲撃に転じるだろう、と唸った。つまりこれが投降の最後通告だと、男は暗

に言いたげだ。
　ナオキもそんなこと分かりきっている。だがどうしても、どうしても悪に屈することはできないのだ。正義が悪に屈すれば、それは正義でなくなる。自分たちが正義であり続けるためには悪と戦う以外にない。
　首席特別捜査官補佐は事実を受け入れるよう、上司にせまった。
「軍部『十字軍』の軍艦六隻の砲撃に、さすがにこのロアゾンはもたない。これが秘密を知りすぎた結果だ、ナオキ。今なら間にあう、頼むから降伏してくれ」
　ロアゾン、この船の名前でもあったのか。
「ホワイト、大義は我々にある」
　覚悟を決めた男の静かなる言葉が、瓦礫ともにむなしく炎のなかでうごめいた。
「この船に乗っていた、あの男はどこだ?」
「残念ながらお前の負けだ」
「…お前はあの男を逃がすために　囮となったのか…」
　ナオキは静かにホワイトの顔を見つめた。
「皆も逃げたのか?　お前を残してか?　まったく薄情な連中だな」
　ナオキ・ニトは「そうじゃない、彼らが生きているかぎり『ロアゾン』は滅びない」と凛とした声が部屋に響いた。仲間を逃がすため、自らが敵の標的となったナオキ・ニトにホワイトは「お前は何がしたい?」とさらに唸った。

「正義を貫くだけだ」
　ナオキ・ニトの声が胸に響く。
「すでにロアゾンは壊滅した。現実を受け入れろ、ナオキ・ニト!」
「まだ俺がいる、俺がロアゾンだ」
　ナオキは扉をあけて、ホワイトに退出を促した。
　もはや意思がかたいというか、揺るぎない意思を変えることは、このうえなく難しいと悟ったホワイトは、最後に自分にできること

はないかと尋ねた。友人の返事は四歳になったばかりの娘ナオミを頼むというものだった。

ゴンドラの部屋の赤い扉、ナオミはそれが何なのかわかる。

「…これがダ・カーポがロアゾンのために開発した、空間移動魔法か…」

ホワイトの呟きにナオミは耳を傾けた。

そうこれはダ・カーポの『開かずの扉』、開発の起源はロアゾンにあったのか。

開かずの扉を前にして、女の子は母親の右手をギュッと握りしめ、左手にはピーピー泣いている、小さな犬を脇に抱えている。彼女たちを守るかように大きな黒犬が寄り添っている。

「パパとママはいかないの?」

「ごめんね、ごめんなさい、ナオミ! あなただけでも生きて!」

母親の頬からぽろぽろとこぼれ落ちる涙。ナオミは「なんで泣いているの?」とまだ涙の意味を理解していない。四歳の子どもに人の死を理解することが難しいように、永遠の別れを理解するのは難しい。

「サラ。いえレッドブル中将、ナオミを頼むわね」

アリスは嗚咽を呑みこんでいった。

サラはアリスを抱きしめ、小声で「ロアゾンとともに」と囁いた。

赤い扉『開かずの扉』の取っ手に手をやるサラ、彼女の手を握りしめがらも、何度も母親のほうを振り返る四歳の自分をみて、ナオミは知らずしらずのうちに頬から、とめどなく涙が溢れでてきていた。

最初にサラの部下数名、次にナオミ、続いてまた部下数名が扉のなかへ姿を消し、今度はホワイトの番だと彼女がいえば、男は「一

斉砲撃まで時間がある」と懐中時計をみて、決意溢れる声でいった。
「私はもう一度、ナオキの説得を試みる。君たちは先にいけ！」
ナオミは自分の姿が消えつつあるのがわかった。
嫌だ、まだこの記憶の中にいたい！　母と父の側にいたい！　どんなにお母さんとお父さん！　と心の底から叫ぼうが、彼らには聞こえない。そもそも聞こえるはずがない。なぜなら瞳の記憶にすぎないのだから。

記憶はさらに目覚める。
今度はトモロヲ・ブドリとホワイト刑事の声だ。
「君の尽力のおかげで、わしの孫娘夫婦は助かったと聞く」
「残念ながら生ける屍……今回の事件は気心知れた者たちの不幸でした」
ホワイトはあそこにトモロヲ・ブドリの孫娘夫婦がいたことを始めて知ったらしく、発表されているよりも多いとはいえ、生き残った者はごくわずか、しかも意識を取りもどすことはまず不可能な者たちだと、心を痛めていった。

モン・サン・ミッシェルを脱獄した迷いの森の辺境伯、彼のもとへ馳せ参じようという一連の動きがあった。現役の特別捜査官次官ナオキ・ニト、英雄と名高い男が関与していたことは上層部で極秘とされ、極秘作戦『ロアゾン』部隊は、迷いの森の辺境伯の刺客によって全員暗殺、別案件というかたちで処理された。
こうして真実は歪曲され、捻じ伏せられた。
「この事件の黒幕は、あなたという噂もありますが？」

ホワイトはトモロヲ・ブドリを探る。
「あなたはエルフ歴代君主のご親戚でもあられる」
「邪推にすぎんよ」寡黙な老人の目には鋭さが宿っていた。

ナオミはグッと瞳を閉じ、拳を固めた。頬からぽろぽろと涙が流れ落ちる。

記憶とはいえ、こみあげてくる感情は抑えきれない。父と母は迷いの森の一味に殺されたと聞いていたが、本当は軍警察に殺されたのだ。せめて父と母の最期を看取ることができたことは何よりの救いだ。

「では伯爵、この剣はあなたがナオキ・ニトに贈ったものではないと？」

ホワイトがトモロヲ・ブドリに手渡した剣は、ナオミには見覚えがあった。見覚えがあるというよりも今、その剣は自分の手もとにある。

「いやわしが贈ったものじゃよ、聖水の女神ニミュエの守護があるようにな」

「なるほど、これが名高い刃毀れずの剣　聖水剣（アロンダイト）か」

聖水剣（アロンダイト）、サー・ランスロット愛用の剣だ。聖水の女神ニミュエが成人したランスロットに贈ったものといわれる。決して刃毀れしない剣で知られ、アーサー王の聖剣（エクスカリバーン）の兄弟剣とも呼ばれる伝説の剣だ。なぜそんな伝説の武器をトモロヲ・ブドリが持っているのかはわからない。

「なぜあなたがこの剣を？」

「ランスロット亡きあと、聖水の女神ニミュエがわしのご先祖に託しおってな」

なるほど、そういうことか。

甦った瞳の記憶を辿って、わかったことがいくつかある。

わかったのは父と母は殺されないければならない、それほど重大な秘密を知ってしまったために死んだ。いや正しくは正義を貫いたために命を落としたこと。それとトモロヲ・ブドリがエルフ歴代君

王の親戚だということ、自分の手もとにあるこの剣はあのサー・ランスロット愛用の名剣『聖水剣（アロンダイト）』だということだ。

第４１話　ロミオ・ロートレックの秘密【5】

ロロのゴホッゴホッと咳きこむ音が、ナオミを記憶の世界から連れもどした。

「大丈夫、ロロ？」

ロロは途中で苦しそうに何度もなんどもゴホッゴホッと咳きこみ、毛布にくるまりながらぶるぶると震え、ナオミの手をギュッと握った。その手はさらに熱をおびているかのようだ。少女はロロの背中を摩り、ロロの手をだまって握り返した。すると落ちついたのか、それとも落ちつきを取り戻したのか、ロロはふーっとため息をついた。

「サンチョ・ボブスリー殺しの犯人は、ドラゴンヌだ」

「ドラゴンヌがどうしてサンチョを？」

ナオミは心臓が張り裂けそうなのを感じた。

「ドラゴンヌが俺の両親を殺し、君の両親を殺したからだよ。ボブスリーはそれを目撃したためにヤツに犯人に仕立てられ、孤島の牢獄に収監されたんだと思う。もしかして後ろで糸を引いていたのはパパティーノかもしれない、あくまでも推測だけどな」

そうかもしれない。いやきっとそうだ。

ロロはまた咳き込むと、その潤しい大きな瞳でナオミを見つめた。これは嘘のようだけど本当の話。用心にこしたことはない――真実が明るみにでるまえにドラゴンヌはサンチョ・ボブスリーを殺したのだ。次はナオミの番かもしれない、気をつけるんだ、そう少年は言いたげだった。

「一つだけ願いがある」
ロロはナオミの手をガシッと握っていった。
「もし俺が死んだら、星が綺麗に見えるところに墓をたててほしい」
その目は真剣だ。
「絶対に嫌よ」これはナオミの強がりだ。
それからまもなくしてテルがナオミを呼びにきた。
一瞬、テルはロロと目があった。その目は悲しみに満ちていた。
お互い何かをいおうとしたが言葉にならない何かが胸をしめつける。
大丈夫かと声をかければ、ロロは「心配するな、ナオミのことを頼む」といって、笑顔をみせた。

カリヨンの鐘がこれほど胸に響いたことはない。今は午前零時。
「お友だち、どうだった?」アリサ夫人は、わざわざ起きて待っていてくれた。
アリサ夫人の明るい声を聞くと、今までロロのまえでこらえていた悲しみがどっとあふれてきた。ナオミは夫人に抱きつくと、大声で泣いた。しゃくりあげながらアリサ夫人にロロのことを話した。
「大丈夫、人は寿命のてっぺんまでいかなきゃ、死なないんだから」
夫人はときどきうんうんと頷きながら、彼女の髪をなでながら聞いてくれた。
ナオミの話が終わると、ふっくらした手で少女の顔をはさんで見つめてくれたので、少女は優しい気分になり、ようやく心が落ちついた。
「…そうね、あなたはまるで一年前の私と同じ…」
「一年前のアリサおばさんと?」
ナオミは目をまるくした。
「ええ、ライアンがそう長生きできないって、聞いたときの私と同じね…」
アリサ夫人は瞳をゆっくりと閉じて、ナオミにいった。

「いい、ナオミ？」
ナオミは静かに頷いた。

「人はね、いつかは死にます。私もあなたも。ライアンも、そしてその子も。長生きできるかどうかなんて誰にも分からないことだし、人は必ず死ぬの。それはもう決まったことです、誰にも変えることのできない生命の定め。だから人より長生きできたからって喜んだり、早く死ぬからって悲しむのはどうかしらね」
「でも友だちが死んじゃうなんて、いやだわ」
「そうね、それはとっても悲しいことよね。でもナオミの心のなかのその子は死なないでしょ？　ナオミが生きているかぎり、その子はあなたのなかで生き続ける。本当に死ぬってその子のことを忘れることじゃないかしら。だからね、どう長生きするかよりも、どう生きるかってことが大切じゃないかな。花と同じってことかしらね。花が枯れるのは次の季節に新しい花を咲かすため、だから花は生きるために死んじゃうの。要するに人間も同じってことよ、わかるかしら？」

ナオミは（ふう、大きいなあ）と思った。

「…ア、アリサおばさんはどうしてそんなに強いの？」
「まあ、どうしてっって」というとアリサ夫人はうーんとうなり、ナオミをギュッと抱きしめて、頬にキスをして「お母さんだからよ」と微笑んだ。アリサはおやすみの挨拶をかわすと、ライアンの寝顔を確認し、寝室にもどっていった。
ナオミはそっと三階の自分の部屋にもどり、カチャッと扉に背を向けて閉めた。
「アレ、なんで私、泣いているんだろ…」
なぜか涙がでてくる。ナオミは両手で顔を覆い、静かに泣いた。
人には理由もなく流れる涙があるのだ。きっと彼女の涙はそれに違

いない。

今、運命は自分に過酷な試練を与えている。挑むべき敵は強大だ、万策尽きたといえるかもしれない。そしてようやくわかったことがある。そう自分の命を狙っている『暗殺者（ヒットマン）』は父と母を殺した犯人であり、父の友ロエスレル・ドラゴンヌであるということだ。やはり自分の運命にこの男は絡んでくる。今夜のことはひとまず秘密にしておこう。

第1話　新しき仲間【1】

第1話

瞬くあいだに十一月は過ぎていき、十二月が訪れた。
クリスマスの前週になったある日のことだった、一人の酔っぱらいが古き洋館大通りのアニタ・ジブリ商会のアニタ婆さんと激しく、口喧嘩をしていた。

ナオミとライアンは静かに食事をしながら、ときどきチラッとマルボロ親方を見つめ、また長テーブルのしたでは先ほどまで一緒に食事をしていたロロが、マルボロ親方の声に聞き耳をたてていた。
酔っぱらいは大声で怒鳴っていた。
「うちのガキをさっさと返しやがれ、誘拐罪で訴えるぞ！」
「ここにはうちのガキなんていりゃ、しないよ」アニタ婆さんも負けずに怒鳴っていた。
「もぐりのホーエンハイムを呼んできやがれってんだ！」
酔っぱらいは青筋をたてて、テーブルをドンドンッと激しく叩いた。
「ちょっとは静かにしてください、マルボロ親方」とホーエンハイム先生が台所に現れ、青筋をたてているバーンズ・マルボロに帽子をちょっとあげて、挨拶をした。
「ここには病人が二人も寝ているんですよ、マルボロ親方」
「この誘拐犯め！」
マルボロはホーエンハイム先生を罵った。
「ほほーう、こんなことで私が誘拐犯になるのでしたら、バーンズ・マルボロ。親方はものすごい罪に問われるでしょうな。例えば未成年虐待とか、あるいは殺人未遂とかはいかがですかな？」ホーエンハイム先生の言葉にマルボロはペッと唾を吐いた。

どうしてマルボロ親方が怒鳴りこんできたかといえば、一時は身体も心もとても弱りきっていたロロだったが、月日が流れるにつれて彼は持ち直してきた。

ホーエンハイム先生は「少なくても三日は休まなきゃいけないよ」とロロに忠告はしたものの、マルボロ親方は三日どころか、半日も休ませてくれるはずがなかった。

元気になり次第、すぐに働かせるばかり。

「相手に呪いをかけにいけねえなら、盗みでもしてきやがれ！」

しかたなくロロはすりにでかけた。

季節はもう十二月の半ば、空からは牡丹雪がしんみりと降っている寒い季節である。治りかけていたというか、少しながら改善の兆しをみせていた、ロロの身体は急激に悪化していった。治まりつつあった堰はぶり返し、身体がぶるぶると震え、身体の痺れがまたはじまった。

相手とぶつかって財布を盗める場合よりも、逆に手癖が悪いガキだと罵られ、タコ殴りにされるときのほうが多い。悪事を働けば必ずは本人にもどってくる、いや怒涛として襲いかかるものなのだ。忘れてはいけない。

空からは牡丹雪がしんしんと降ってきていた、そんなある日のことだった。

その日、ロロはブルトンホテル大通りで、盗みができそうな無防備な客を探し歩いていた。大通りに目をふとやれば、母親と小さな女の子が買い物を楽しんでいた。ロロに言わせれば世間知らずのだ。

「ねえ、ママ。サンタクローズって本当にいるの？」

「ええ、ちゃんといるわよ」

「どこにいるの？」

「きっとこの町のどこかにいるわ」

どうやらクリスマスのお祝いのことを話しているようだ。

雲行きのあやしさも重なって、人通りは少ない。ロロはゴホッ、ゴホッと咳込み、雪道に赤い色がにじんだ。ヒュルルルーと夜風が吹いてきた、おそらく今夜は吹雪にでもなるのだろう。クリスマスの飾りをつけた、大通りの豪華なつくりの領主館レストランの小窓からは温かな光がもれていた。次々と馬車がとまり、お金持ちの紳士淑女が店のなかにはいっていくのがわかった。

耳を澄ませば彼らのこんな会話が聞こえてきた。

「この晩餐会はパパティーノ卿の役員人事の根回しだろ?」

「でも招待されておいて、断わるのもあとが恐い」

「ああ、相手はパパティーノ伯爵。あのトモロヲ・ブドリを追い出したやり手だからね」

ひとまず吹雪がやむまで、ロロは店の小窓で雪宿りをすることにした。

小窓からみた店内はとても豪華なパーティ会場だった。真んなかに大きな長テーブルが置かれ、そのうえには太ったニワトリのまる焼き、詰めものをした子羊のもも肉などが金皿にのせられそのほかにウサギやキジのソテー、薬草のサラダなどもあった。

不幸なことにも吹雪きはやむどころか、どんどん激しさをましていった。

数分後、コック見習いがゴミ捨て場にやってきたとき、雪にうずくまったロロの姿をみつけて「大変だ、人が倒れているよ」と悲鳴をあげた。その声に次々とコックたちが姿を現わし、頬のこけたロロの青白い顔をみた。

「かわいそうに死んじゃっているわ」とウエイトレスのひとりがいった。

「こりゃ、大変だぞ!」

コックの一人がしどろもどろにいった。

すると領主館前で甲高いクラクションがした。
黒い自動車がレストラン前に停まるとしばらくして、立派な礼服の紳士がおりてきた。紳士は黒い服に身をつつみ、まるい眼鏡をかけ、目は青く、あご髭はみじかく刈りこみ、左手にはその昔、ナポリ王国のが愛用した赤と黒の二色装飾の仕込み杖をもっていた。
「ムッシュ。吹雪きのなか、わざわざ僕をお迎えにきてくれたのかな？」
「ああ、いいところにきてくれましたわ」
ウエイトレスは手を組んで喜んだ。
「ホーエンハイム先生、ここに男の子が冷たくなっていますの」
ホーエンハイムはコックに抱えられた、ロロを見つけると「な、なんてことだ！」と顔を青ざめてコックたちに「熱いお湯と毛布を用意しなさい」とテキパキと動いた。

領主館の厨房はがんがんと火が焚かれて、ロロは毛布にくるめられていた。医者はロロの胸や腕をしきりにこすながら「死んじゃだめだぞ」とつぶやいていた。
「ああ、顔色がよくなってきたわ」
ウエイトレスは思わず、安堵の声をだした。

ホーエンハイム先生は「安心するのはまだ早い」とうなずきながら、胸や腕をしきりにこすっていた。
やがて三分後にはロロの顔に血の気がもどり、少年の「うーん」と寝声にもにたうめき声が聞こえた。しばらくして規則正しい呼吸をしたと思えば、ロロはゆっくりと瞳をあけた。
「やったあー」と厨房で喜びの声が一斉にあがった。
嬉しさのあまり、ウエイトレスはホーエンハイム先生に抱きついたほどだ。
先生はポッと顔を赤らめたのはいうまでもない。ロロは状況が呑

みこめず、意識がもうろうとするなかでキョロキョロとまわりを見まわしていた。そこには赤ら顔のコックたちをはじめ、数名のウエイトレスやウエイター、もぐりのホーエンハイム、テルの顔があった。

ロロは目をぱちぱちして、深くふーっとため息をついた。

「父さんと母さんはどこ？」

「それは悪い夢だったんだよ、ロロ」

先生はまるい眼鏡の奥でひそかに笑っていた。

「…君はね、もうすぐで凍え死ぬところだったんだよ…」

「先生、不思議な夢をみたんだ。大きな屋敷で家族水いらずで、父さんと母さんとでクリスマスのお祝いをしていた夢。そこにはコクーン叔父さんもいて、皆楽しそうだった」

その言葉にホーエンハイム先生は眼鏡を光らせた。

「…コクーン叔父さんて、あのコクーン・コ・クーボのことかい？」

しまったと思いながらも、ロロはまわりの目を気にしながらうなずいた。

「…ということは君はピエモンテ夫妻の息子か…」

ホーエンハイム先生はいきなり遠い目になった。

ゆっくりと瞳を閉じては、またゆっくりと瞳を開けた。

「ピエモンテ・コ・クーボ子爵は、まれにみる優秀な弁護士だった」

「父さんを知っているの？」

ロロは身を乗りだすように聞いた。

「…その昔、彼に助けてもらったことがあるんだ。ずっと昔のことだがね…」

ロロが起きあがろうとすれば、「まだ起きてはだめだよ」とホーエンハイム先生は起きあがったばかりの少年をそっと寝かせてまもなく、テルができたてホヤホヤのポタージュをマグカップにいれてやってきた。

テルはロロを抱きおこして、ポタージュを飲ましてくれた。

「驚いたぞ、つまみ食いをしたらさあ、親方が『テル！　小腹がすいたなら表の雪でも食ってろ！』というからさ。外にでてみたらロロ、お前が冷凍庫にいれられたみたいにコチコチになっていたんだからな」
「ナオミにはいわないでくれ。アイツは心配性だから」

やがて厨房はいつもの落ちつきを取りもどしたようだ。
コックたちはせかせかと晩餐会の食事の続きにとりかかった。ソムリエはワイン倉庫にでかけ、ウエイターやウエイトレスたちは金色や銀色のおぼんに料理をのせ、パーティ会場へと運びだした。ちなみにテルは皿洗いだ。
ホーエンハイム先生はロロの手首の脈拍をはかっていた。
「脈拍も正常、顔色もふだんのハンサムの君になってきた」
「先生。俺、本当に死にかけていたのか？」ロロはおぼろげな顔でいった。
「仮死状態、その手前だった」
ホーエンハイム先生はふーっとため息をついていた。
「…そこって生きているときよりも、幸せだったな…」
先生はぐっと言葉をつまらせて、ロロをじっと見つめた。
「でも生きているほうがもっと幸せじゃないか。もし君が死んじゃったら皆、悲しむと思うよ。もちろん僕だって悲しい。それにしても君はちょっと痩せすぎだな、ちゃんと食事をしているのかい？」
ロロはずっと黙っていたが、やっと蚊が鳴いた声で「はい」と頷いた。

「では昨日の夜、何を食べたのかね？」
「俺、仕事があるから…」ロロは質問に答えずにいった。
「仕事熱心なことには感心するがね、そのまえに十分な栄養をとらねばならないよ。今のままだと治る病気も治らないし、悪化する一

方だぞ。いいね？」
「……」
「それに君の評判は聞いている。これ以上、悪事に手を染めていけない」
そういうとホーエンハイム先生は長財布から金貨を二、三枚とりだした。
ロロはお金をもらう理由がないというが、この紳士は「いいからとっておきなさい」と黙って、少年の手を握り返した。ロロが立ち上がったとき、「そんな青白い顔をしてでてかれたら店の評判がおちてしまう」とコックたちは、ロロがマルボロ親方のところでは食べたことのない豪華な食事までごちそうしてくれた。
「…あ、ありがとう。そろそろ俺、いかくなくちゃ…」
「いやだめだ。君は入院しなくちゃいけない、マルボロ親方のところにいたら君はすぐに死んでしまうからね。そこの少年、親方のところに使いにいってくれないかな」と医師はすらすらと羊皮紙のメモ帳に一文書いて、テルに手渡した。
テルは瞳をまんまるにしてホーエンハイム先生を見た。
「まだ何かようかい？」テルはうなずくと右手をさしだした。
「君はちゃっかりしているなあ」と医者はテルに騎士メダル五枚を握らせた。

第2話　新しき仲間【2】

第2話

マルボロ親方がやってきたのはそれから一日後だった。
「さっさと返しやがってんだ！」
「バーンズ・マルボロ、君の下宿人は病気でしてね」
ホーエンハイム先生はゆっくりと振り向くと、幸うすい顔つきのマルボロ親方をするどく睨んだ。それからコホンッと咳払いをして、またマルボロ親方をしげしげと見つめた。さすがのマルボロ親方もじろじろ見られ、ちょっぴりひるんだのか、椅子を引き寄せると無愛想な態度で座った。
「どんな病気だといいますとね、つまり過度の栄養失調がみられる。次に身体をみせてもらったが、いろんなところにあざがある。最後に水銀中毒の恐れがある。先ほど聖水を飲ませて水銀を体から解毒させてもらった。つまり水銀に対抗する必須ミネラルを摂取させたのだが、完全な治癒にはまだ時間はかかる。ところで僕が気になるのは誰かにひどく殴られたという虐待の形跡だよ」
マルボロは葉巻きをふーっとひと息ついた。
「人聞きが悪い、せっかんといってくれ。もぐりのホーエンハイム大先生閣下」
「あばら骨が三本、ひびがはいってました。親方はあの子にどんな食事を？」
ホーエンハイム先生はマルボロ親方をじっと見た。
「ごく普通の食事を与えている」マルボロ親方はボソボソつぶやいた。
「なるほど、ではパンの耳と水だけと思ってけっこうですな。あの子は餓死寸前というところまできていた。昨夜、人なみの食事を食

べさせたんですが、こっちにきてすぐにもどしてしまったんだよ。何日間もお腹をすかした人間がね、いきなり食べ物らしい食べ物を食べるとね、それが原因で死ぬことがあるんですよ」

「で、うちのやどろくは死んだのか？」

マルボロ親方はうさんくさそうにホーエンハイム先生を見た。

「いえ生きてはいます。ですが重傷ですな」医者は顔をくもらせていた。

「へん、バカいうんじゃねえ。だったら誰が俺様の明日の酒代を稼ぐんだあ？」

マルボロ親方は髪を逆立て、テーブルをドンドンッと叩いた。

「自分で働きゃいいだろう、マルボロ！」

「パン屋は黙っていろ！」

酔っぱらいはリンドバーグ親方を睨みつけた。

「っていうわけだ、あのやどろくには休息なんて一時間で十分だ」

ホーエンハイム先生はじっとマルボロ親方を見つめ、ポリポリと頭をかいた。

「私が払ってさしあげましょう。その代わりあの子を預からせてもらいますぞ」

「ああ、かまいやしねえ。だが金貨一枚だ」

「…では一日銀貨八枚にしましょう、これ以上は脅迫とみなしますぞ」

「いいだろう、ビジネス成立ってヤツだな、大先生」

そういうとマルボロ親方は、右手にもっていた赤ワインの瓶をラッパ飲みして、いきなり歌をうたいだした。しかもホーエンハイム先生が親方にやたらに酒を飲ますので、マルボロ親方はむにゃむにゃと数分後には酔いつぶれてしまった。それからホーエンハイム先生はどこかに電話をかけたようだ。

「外に放りなげちまいな」

アニタ・ジブリは腹立だしげにいった。
「アニタ婆さん、悪党にも三分の命、マルボロにも三分の命ですよ。ところであの若い刑事はまだですかな？」
「ええ、僕ならここにいますよ」
扉のまえでラインハルト警部は立っていた。
「そこの若造、さっさとこのごろつきを引き取ってくれやしないかい？」
「アニタ・ジブリ、あなたにいわれずともそうしますよ」とラインハルト刑事はマルボロ親方の両足を肩にかけて、ずるずると警察署へと引きずっていった。ゴンゴンッと誰かの頭にぶつかる扉の音、ホーエンハイム先生はドアが閉まるまで耳を済まし、ようやくややこしい出来事がかたずくと、ニヤッと笑った。

「…嵐は去ったようだ。もうでてきても大丈夫だよ」

長テーブルのしたに隠れていたロロは、キョロキョロとあたりをうかがいながら、ナオミとライアンのあいだに腰かけた。アニタ・ジブリ・パリの人々はそろって、興味深そうにロロを見つめた。
「…せ、先生、どうしてそこまでしてくれるんだよ？」
「まえにも話したけどね、私は君のお父さんに恩があるんだ。正直にいうと君のお父さんに助けを求めたんだが、違うやりかたで助けられたんだけどね。とにかく私には君を助ける義務と責任がある。これがジェームズ・ホーエンハイムの願いだ」
「…ジェームズ・ホーエンハイムの願い…」

話に割り込むかのようなアニタ・ジブリの大きな咳払いが聞こえる。
「アニタ・ジブリの願いはね……」
この守銭奴のことだから、何か意地悪なことをいうのか、もしかしてロロを追いだすのかもしれない――とナオミは思った。そ

れはティソ親方やリンドバーグ親方、アニタ・ジブリ・パリの人々、皆が少なからずも思った。
「ところであんた、名前は？」
「ロミオ・ロートレック」少年はすましていった。
「あたしゃの願いはね、そのロートレックの歓迎会をさっさとすましちまうことだ」
　このとんでもなく素晴らしい答えに、しばらくティソ親方たちは口をぽかーんと開けていたが、一斉に「わああ」と歓声をあげた。
数分後、アニタ・ジブリ・パリはてんやわんやの大騒ぎになり、パンパンッとクラッカーが鳴る音が聞こえてきた。

第3章　カーボネック聖杯城【1】

第3章

皆、クリスマス休暇が楽しみだった。

騎士候補生は、親方たちから二十日から一週間だけ、クリスマスウィークというの休暇が与えられるのだ。この休暇を利用して、帰郷する子どもたちもいれば、この都でクリスマス休暇を楽しむ子どもたちもいる。決まりでは一週間だけの休暇だが、だいたい年末年始は忙しないので、親方たちは来年の一月五日まで休暇を与えるのが慣例。

『剣と盾』ではキング・アーサーの騎士候補生の帰郷のことでにぎやかだ。

「僕は家に帰るよ。テル、君は？」とチャーリー。

「僕は残らなきゃいけないみたいなんだ、クリスマスシーズンは忙しいんだって」

ブルトンホテルはレストラン予約でいっぱいだ、とテルは不満そうに呟いた。

「それで結局、誰と誰とが残るんだい？」

ロレンツォは羊皮紙の一覧表に目をとおして、ナオミ、テル、ロロ、ココ、マイケルの五人の名前をあげた。そもそもナオミに帰るべき場所はない。思えばちょうど一年前、去年のクリスマスだった。サンチョ・ボブスリーと思っていた人物との出会いが自分の運命を開いてくれた。彼は自分にとってサンタクローズだった。

深夜、町を徘徊する通り魔、（アグリにいわせるところドッペルゲンガー）は、サンチョが何者かに殺されたとの同時に姿をみせなくなった。テルは通り魔の正体はサンチョに違いないと確信しているかのようだ。

「きっと潜伏中のストレスを発散していたんだよ」

クリスマスウィーク第一日目。

ここはアッパータウンの東の外れ、アッパータウン牧場だ。

デビット・テムズ先生の『乗馬術』では、牧場にある大きな樅の木が騎士候補生たちを驚かせた。数日前、ボルゴウッドの森で切り出してきた樅の木だ。その近くではヤギになったダ・カーポ先生はぴょんぴょんと牧場を奔りまわっていた。

「おい、アスパラガス！」

マルコとハレルヤはとても陰気さながらにいった。

「よかったじゃないか、貧乏のお前がクリスマスのごちそうにありつけてさ」

テルはぷいっと知らんぷりをしていた。

チェスの試合でキング・アーサーがモードレッドに負けて以来、マルコ・パパティーノ率いるアグリッパのいびりは酷いものになっていた。自分たちの悪口が少しでも聞こえるものなら、追いかけまわして袋叩きにあわせるほどだ。文字どおり、頭から袋をかぶせてモゴモゴと苦しんでいるところをボコボコにする、タコ殴りだ。

テルなんかこれまで五回も袋叩きにあって、とてもぷりぷりしていた。ちなみにマイケルは十二回だった。それ以来、テルとマイケルは自分もひそかに袋を忍ばせておいて、すきがあったらマルコを袋叩きにしようと心に誓っていた。

「ふん、タコ殴りの卑怯者にはいわれたくないな」

「あのときの君の顔といやあ、まるで野ブタそっくりだったな」

野ブタという言葉を聞いて、ジョジョはドラゴンチップスをむしゃむしゃ食べている、マイケルをチラッとみた。ジョジョの視線を感じてか、フンッ！　と少年は胸を張った。

「もしかして、そこにいるのは弟のブタヲか？」
「ぶちのめしてやる！」
まさにテルが馬からおりて剣を抜いた瞬間、テムズ先生が怒鳴った。
「今、何をしようとしていたのですか？」
「フェンシングの練習だよ」テルは口笛を吹いてごまかした。
「テムズ先生、アスパラガスに串刺しにされるところでした」とマルコ。
チャーリーがかばいにはいった。
「パパティーノが喧嘩をふっかけてきたんだよ」
「もうすぐクリスマスですから、今回だけ大目にみましょう。さあ、諸君。今からクリスマスツリーの飾りつけをしますよ。お手伝いしてくれたら、騎士メダル五枚、さしあげますけどね」
テムズ先生は微笑みながらいった。
「ところでロートレックは？」
「死にました」とマルコが冗談ながらにいった言葉が、テムズ先生の怒りをかった。
「仲間の死を願うなどもってのほかだ、パパティーノ。今のは侮辱だ。先生はこれほど残酷な言葉を聞いたのは初めてだ、罰としてツリーの飾り付けを命じます」
テムズ先生は顔を真っ赤にしていった。
チエッ、と舌打ちするマルコに後ろから、誰かガサッと袋をかぶせた。
「な、なんだ！　不意打ちとは卑怯だぞ！」
「だまれ！　パパティーノ！　仲間の死を願うなどもってのほかだぞ！」
犯人はマイケルだ。食べ終わったドラゴンチップスの袋を彼にかぶせると、マイケルはしばらく口をモゴモゴし、「誰がブタヲだ！」とマルコの顔をぶん殴った。日頃の鬱憤を晴らすかのようにタコ殴

りだ。

――ドサッ、少年が地面に倒れる音がした。もちろんマルコだ。

少年の以外な行動にナオミたちはきょとんとしていた。

新しいドラゴンチップスの封を開けながら「フンッ！」と鼻息を荒くして、「僕だってやるときはやるんだぞ！」とマイケルは胸を張っていた。

マイケルの行動に一番驚いたのは、デビット・テムズだ。

「今回のことも大目にみましょう」とマイケルに微笑み、さらに「いざとなったら、仲間のために行動する君の勇気に騎士メダル三枚だ」と少年の勇気を讃え、気絶したマルコ・パパティーノの襟をずるずると引っ張り、ツリーのほうへ歩いていった。

第4章　カーボネック聖杯城【2】

第４章

カランコラーン、カラン。時計塔が午後六時の音を街中に知らせる。

アッパータウン牧場の樅の木のかざりつけも見事だが、もっと見事なのは樅の木に見立てて飾りつけした万年時計塔、そして領主館アッパータウン・オブ・ギルウェルだ。毎年恒例とはいえ、いざ光を宿すとなると町の人々がざわざわと集まってきた。

領主館ツリーと呼ばれるこのクリスマスツリーは、柊や宿木が綱のように編まれて壁にかざられ、それは聖なる城と呼ぶべき、荘厳さがにじみでている。

「…三、二、一…」

やがて点灯のカウントダウンが始まった。

皆で最後に「クリスマスウィーク！」と叫んだのだが、マイケルだけは「ハッピー・ニュー・イヤー」と間違えて叫んでしまった。

「ねえ、マイケル。誰かハッピー・ニュー・イヤーっていわなかった？」

「きっと気のせいだよ、ナオミ」

マイケルはボソボソいった。

これより町という町はクリスマス休暇、町のところどころに樅の木や柊が飾られ、緑と赤、クリスマス色に染まっていた。耳を澄ませば、たえずクリスマスソングが聞こえ、街の皆という皆がお祝いの雰囲気になっていた。

「ねえ、ロロの調子はどう？」とテル。

「僕より悪いね」
ライアンはゴホッゴホッと咳払いしながらいった。
ロロが住んでいる部屋はホーエンハイム先生の家だ。正しくはホーエンハイム先生の善意で入院させてもらっているといったほうがいいだろう。お見舞いにいけば、ロロの部屋はいつも病気臭かった。それをまぎらわすために美人の看護婦さんが、いつも花瓶に明るい花を活けてくれている、今ではそれが彼女の日課だ。
ライアンの部屋では、そのロロのことで何やら密談が行われていた。
「ねえ、皆。ロロは元気になれると思う?」
「ココ、それって死んじゃうってことかい?」
テルは真剣な顔つきでいった。
「僕、そんなのいやだあ」
マイケル・コービーは瞳に涙をためた。
「あれから万能薬アルカヘストについてなにか分かった?」
「ううん、さっぱり。図書館にはそんな文献も本もなかったの。それにアグリさんとは、あれから連絡も一切とれないし」とココは、とても不満そうだ。
「アグリはピックル・タナカに殺された、と僕は思う」
「勝手に殺さないでちょうだい」
アグリの従騎士ココは、テルの脇腹を力のかぎりグーッで殴った。
「ねえ、町の西にある古城がカーボネック城っていう話、知っている?」
「たぶんあれは嘘だよ」
テルは確信ありげにいった。
サー・エドモンド担当「豆知識及び雑学」によれば、初代アーサー王の『聖杯探求』の物語はブリテン、現在の英国(イギリス)と仏国(フランス)の二カ国をまたにかけた物語だとか。ゆえに聖杯城カーボネックが、町の西

にあるカーボネック城であっても何ら不思議ではない、と本屋の主人は胸を張って公言していた。
「いい大人が純粋な子どもを騙して喜んでいるんだよ」
テルは考えるのに疲れたという顔をしていた。

聖杯、アーサー王物語のなかにでてくる聖遺物。その杯で酌み交わした水を飲んだ者の傷を癒すといわれる、歴史が生んだ伝説だ。ガラハッドが聖杯を捜しだすとともに、彼は聖杯とともに昇天して聖人となったと伝えられる。
「聖杯はガラハッドとともに消えたんだ、伝説によればね」
「一概には嘘とはいえないと思うの」
「あっ？　どうしてそんなことわかるんだよ？」

ココはアグリが一時期、聖杯伝説が本当かどうかを調べていた、と皆に打ち明けた。
「で、その行方不明者はなんていったんだよ？」
ココがまたテルの脇腹を殴った。
少女は「聖杯は真実だよ。まさかアレが聖杯だったとはね、僕もびっくりだ。聖杯はガラハッドとともに昇天したって？　あれは真実を歪曲した者の後付けだ。正しくはガラハッドの魂は聖なる運命に従い、冥界と人間界の狭間に逝ったんだ」とアグリの口調を真似ていった。

意外と似てるな、とナオミはひそかに思う。

冥界と人間界の狭間、ナオミはその言葉をただの言葉とは捉えられない。
そう自分も、いや自分の魂も冥界をわずかながら旅をした。あのエイブラハム・アグリが聖杯伝説は真実だと断言したならば、そう少しでも可能性があるならば、見過ごすわけにはいかない。今は藁

にもすがりたい気分だ。
「うーん、確かにいってみる価値はあるけどさ」
ついにテルもおれ、かわりに少年の瞳に冒険心が宿った。
「…でも町の外にでちゃいけないんだよお…」とマイケルは顔を青ざめていた。
「聖杯が本当にあったとしても、どうやって町の外にでるんだい？」

ライアンはゴホッゴホッと咳き込みながら訊いた。
アッパータウンをぐるりと取り囲む石壁は、三六五日ずっと軍警察の警察部門、国家憲兵隊が見回りの警備の任についている。そのおかげでこの町は迷いの森の魔物たちの侵略などに頭を悩ますことなく、平和に暮らしていけるのだ。
「やっぱり無理なんだ」
マイケルはふーっと一安心のため息をついた。

テルの舌打ちが聞こえるや、ナオミは何かをひらめいたようだ。
「無理なんかじゃないわ。テル、ひとつだけ方法があるじゃない。ほら、エンガチョがいっていたじゃない。あの大きな洞窟って――」
「ああ、確かに迷いの森に通じているっていたよな」
テルの顔は冒険の始まりにわくわくしていた。

「ねえ、エンガチョって？」と首をよこにかしげるココ。
ナオミはボルゴウッドの森に潜んでいた、エンガチョのことを皆に話した。
ココは嬉しさのあまり手を組んだし、ライアンは「そんな抜け道があったのか」と驚きの声をあげ、マイケルは呻き声をあげた。
「それでいつでかけるの？」とココ。
「そうねえ。だったら今夜はどうかしら？　クリスマスウィークだし」

ナオミの言葉にマイケルとライアン以外は頷いた。
「集合時間は午前二時、集合場所はボルゴウッドの森付近、これでいい？」
「いやだめだ」とテルは唸った。
「装備をしっかりしてくるんだ。ポニーは邪魔になるから、別にいらないや」
「ねえ、ライアン。君、生徒会長だろう？　こんな危ないこと黙認してもいいの？」
泣きべそをかきながらマイケルはライアンにすがった。
だけどすでにライアンは深い眠りについていた。もちろんたぬき寝入りであることはいうまでもない。マイケルは最後までぶつぶついっていたが、最後にはガクッと肩を落としてあきらめたようだ。

カランッ、コランッ、カラーンッと万年時計が静かに午前二時の鐘を音をうった。
「いくのかね？」とモーゼはいった。
「ええ、今にも友だちが死にそうだから。悪いことだとは知っています」
「友だちのために危険を犯すことが悪いことだと？　モーゼはそうは思わんよ。悪いとか善いとかは結果、友だちのためにそれが正しいと思うのなら、それは善いことじゃ」
「どこにいくのかは聞かないんですか？」

ナオミの言葉にモーゼはゆっくりと瞳をつぶった。
「秘密は聞かないからこそ秘密」

「ありがとう、モーゼさん」とナオミはモーゼの口のなかに走っていった。あとからジョジョが（もーう、僕をおいていかないでよ）とついていった。やがて二人の姿がみえなくなるとモーゼは「血は

争えんというわけじゃな」とボソッと意味深に囁いた。

第5章　カーボネック聖杯城【3】

第５章

集合場所のボルゴウッドの森付近では、皆出発の準備ができているようだった。

マイケルも嫌がっていたわりには冒険の準備が整っていた。改めてボルゴウッドの森を眺めてみれば、古の神聖さがまだ残っている巨木の森だ。ザワザワッと夜風に笑われ、枝と枝が擦れる音が不気味さをさらに引き立たせていた。耳を澄ませばホーッ、ホーッと夜鳴き梟の声が聞こえてくる。

夜空を見上げれば今夜は満月夜のようだ。息が白く濁る、真冬の星満天の空が肌に凍みるのがわかった。寒さからの震えなのか、恐怖からの震えなのかは分からない。小刻みに身体が震えるのわかった。

「あー、僕、なんだかわくわくしてきちゃった！」

テルは小躍りしてはしゃいだ。

「なんだか騒ぎたい気分だぞ！」

「でも騒がないでね」

ナオミは口をとがらせて、皆を静かにさせた。

真夜中のボルゴウッドの森は暗黒の森、漆黒の森だ。

霧に包まれ、まるで墓場にきたような妙な静けさが漂っている。何もかもが漆黒に見える。唯一の明かりといえば木陰からうっすらとみえる、夜空に浮かぶ満月だ。

木陰にとまっている数匹の青い鳥がナオミたちを見つめるなか、ナオミを先頭にして、森の中をずんずんと進んでいく。ときおりカ

サカサッという音が聞こえ、キツネがまえを走りさっただけでもナオミたちはビクッとしたほどだ。そのうえフクロウの夜鳴きや動物たちの息づかいにも悲鳴をあげそうになった。さらにもっと驚いたのは人の話声だ。

ナオミたちはすぐにランプを暗幕でおおい、茂みに身を潜めた。

「きっとお化けだよお」マイケルがいった。

「シッ。皆、静かにして！　話声が聞こえるわ」

ナオミは短くいった。

「誰かにあとをつけられたんじゃないのか？」

暗がりをすかしみながら、テルがヒソヒソ声でいった。

「クーデンホーフ先生、それって悪戯電話じゃないですか？」

「いいえ、サー・タナカ。確かに変てこな鼻声による密告がありました」

「ですがねえ、レディ。『今夜二時頃、キング・アーサー地区の騎士候補生がボルゴウッドの洞窟から、迷いの森に入りこみますので捕まえてください』っていかにも悪戯電話じゃないですか。たぶんマルコ・パパティーノあたりのしわざですよ。僕は今夜、デートがあったんですよ」

ピックル・タナカとクーデンホーフの会話だ。

「真夜中の二時にデートですか。あまり関心しませんね」

「まあ、そのおかげであなたは僕とこうして出会えたわけですがね」

ナオミは思わず飛びあがった、どうしてクーデンホーフとピックル・タナカがここにいるのだろう？　と思いながらも四人はとおりすぎるのを待った。

「見つかったら騎士メダル半分没収は確実だよな？」

「そうね、見つかったらね」

マイケルは後ろめたそうな顔でナオミたちをみた。
「ぼ、僕が呼んだんだ！」
少年の言葉に一同は瞳がまんまるになった。
「マイケル、お前が呼んだのか？」テルはとても驚いた顔つきだ。
「そうだい！　これ以上、君たちに悪事を働かせないためだ。僕、こんなのは間違っていると思うんだ」
マイケルはドキドキしながら、はじめて自分の思いをいってのけた。
「…ぼ、僕。今から大声をだして先生に知らせるよ。それでクーデンホーフに本当のことをいって許してもらうんだい。君たちにそそのかされたって。もちろん君たちのことはちゃんと僕が弁明するから、そこは安心してよ」
「お前、ドラゴンチップスの食べすぎで、頭がおかしくなったんだな」
いい度胸してるじゃんか！　とテルは胸ぐらをつかんだ。
「な、殴ったら大声をだすからな。ほらっ、はやく殴れよ、バカ！」
「バカは臆病風に吹かれたお前だよ」とテルはどこからか袋をとりだし、それをマイケルの頭からズボッとかぶせた。しばらくマイケルは袋のなかでモゴモゴいっていたが、恐怖のあまり悲鳴をあげて、やみくもに走りだしてしまった。

いきなり袋をかぶったマイケルが林のなかから飛びでてきたので、二手に分かれて見回りをしていたタナカは「うわあ」と悲鳴をあげた。
「逃げなくちゃ、ばれちゃったよ！」
ナオミが声を張りあげて、先生たちが追いかけてくるかどうかなど振りむきもせずに、三人はただがむしゃらに走りだした。林という林を抜けて、狩猟小屋をとおりすぎてボルゴウッドの森に流れる小川も越えた。そしてようやく洞くつのなかに逃げこむと、テルはマイケルの臆病を罵った。

袋をかぶったのがマイケルだとわかると、タナカはクーデンホーフを呼んだ。
「きっと僕たちを驚かせようとしたんですね」とタナカの言葉にマイケルは「まだ三人、隠れているから探して！」と駆けよってきたクーデンホーフにいった。
「まったく悪戯にもほどがありますわ」
クーデンホーフはコホンッと咳払い。瞳には怒りの炎が宿っている。
「あのクソ婆がやってくるぞ！」テルがヒソヒソ声でいった。
「はやく逃げなくちゃ」
ココが顔を青ざめていった。
「君らにはどこにも逃げ場はない」と後ろから声が聞こえてきた。

しまった！　万事休す！　マイケルの密告で見廻りにきていたのは三人だったのか。
冷静になればわかることじゃないか。ボルゴウッドの洞窟とその名を語っていたのだから、洞窟にも先生の一人や二人、いてもおかしくない。
「やあ、君たち。久しぶりだね」
嬉しそうに自分たちに話しかけてきたのは、美しい女の人だ。
「警戒しなくていい、僕だよ」

誰だろう？

「だから僕、アグリだよ」
問われてみれば喫茶店で出会った女の人だ。
ということは、目の前の美人は正真正銘のエイブラハム・アグリというわけか。
「どうしてこんなところにいるの？」

驚きのあまり、三人はそろって声をあげた。
「ここである人と待ち合わせしててね」と暗闇から現われた男は、興味深そうに今度はなぜ自分たちがここにいるのかを訊いてきたので、ナオミはロロの病気が悪化していることなどを途切れとぎれに話した。
「ほーう、聖杯をねえ…」
「あ、あの。アグリさんは聖杯は真実だって…」

アグリはナオミをじっと見据えた。
「聖杯は本当の話だ。多少事実と真実は異なるがね」
アグリの意味深な言葉にナオミは首をかしげつつも、「可能性があるなら私たちは行きます」と少女の決意は固い。アグリも彼女の気持ちを酌みとってあげたのか、「真実を受け止める覚悟があるなら、僕は止めやしないさ」とまた意味深に呟く。
「ナオミ・ニト、アルカヘストの完成まで待てなかったのか?」
ナオミは悲しそうに瞳を閉じた。
きっと彼なら理解してくれるはずだ。ロロの背中から這い出てきた冥界の魔物のことを。
「残念ながら…ロロの病気はその日まで待ってくれません。それにあのアグリさん、私…その、ロロの背中から冥界の魔物が出てきた…」
どういっていいのか分からないナオミの言葉に、アグリは静かに頷いた。
「…辛い現実かもしれないが、そのことは今は君の胸に秘めておきたまえ…」

どもった彼女の言葉を聞いて、アグリは全てを悟ったようだ。
「この先をまっすぐに進めば、迷いの森にでられる」
さすがエイブラハム・アグリである。
士は己を知るための者のために死すという言葉があるように、ナ

オミはやっと救われた気がした。彼女は今、目の前の困難をしっかりと見つめることができた。迷いの森は危険だらけ、生きて帰れる保証はない。それでも自分たちは進まなければならない。どんな真実が待ち受けていようとも。

テルの姿が闇に隠れた瞬間、間一髪、クーデンホーフたちがやってきた。

なんでこんな人目憚る洞窟に、しかも真夜中に若い年頃の女の人がいるのか、女装したアグリをみて、クーデンホーフは怪訝に見つめた。

「あの、そこのあなた。こんな洞窟で何をしていますの？」

「ええ、デイム。恋人を待っていましたの」

アグリはわざともじもじしてみせた。

「もじもじするのはやめなさい、恋人って誰ですか！」

コホンッとタナカは「…僕ですよ」と顔を赤らめていった。

クーデンホーフは二人をじっと見ると、デートの待ち合わせなら町の公園や時計塔広場とか、わざわざこんな人目憚るところで密会などせずとも、相応しい場所はたくさんあるでしょうにとぼやく。

「お二人とも人間性に誤解を招きますよ」

「今から黒ミサを行うの、だってここは悪魔教会跡ですもの」

クーデンホーフは黒ミサと聞いて、後ずさりした。

「悪魔召還…ですか」

ゴクッと生唾を呑む音が聞こえてくる。

「悪魔教の黒ミサの一つにね、教会内での男女の淫行があるの。今夜はここでタナカ先生とその黒ミサを体験してみようと思ってね。今後の博学のためにね」

アグリはまたもじもじしてみせた。彼女のくねくねした態度にイ

ラッときたのか、クーでホーフは「なんて淫らな！　まったく最近の若い女は」と小言を呟いた。
「ねえ、先生たちも参加されてはどうですか？」
アグリはその滑らかな白い手で、マイケルの頬をゆっくりなでた。
「ドラゴンチップスくれたら、考えてあげてもいいよ」

バシッとクーデンホーフがその手を叩いて、「私たちは聖教徒です。そんな邪悪な行為は遠慮いたしますわ」とアグリをキッと睨んだ。
眼鏡をかけ直し、凛とした口調でクーデンホーフはいった。
「それよりあなたに聞きたいことがあります。子どもたちをみかけませんでしたか？」
「男の子一人と女の子二人の三人組ならみかけましたわ」
「ナオミたちだ！」マイケルが大声で叫んだ。
「それで彼らは？」
「ええ、『あなたたちも悪魔教の黒ミサに参加するの？』って聞いたら、悲鳴をあげて、大慌てで逃げちゃいましたわ。男の子なんてものすごく取り乱していたわね。それがどうか致しまして？」

アグリの言葉、お茶目な嘘にクーデンホーフたちは一安心だ。
「邪魔をして悪かったですわね。どうぞ黒ミサの続きを楽しんでちょうだい」
クーデンホーフはふーっとため息をつくと大あくびした。
時刻は真夜中の午前三時、マイケルとクーデンホーフは、タナカたちと別れ、ボルゴウッドの森をあとにした。アグリがなぜこんな物騒な森にピックル・タナカを呼び出したのかは分からない、よほど人には聞かれたくない会話なのかもしれない。

第6章　迷いの森【1】

第6章

鍾乳洞の奥から荒い息遣いが聞こえてきた。耳を澄ませば、三人の足音と一匹の犬の声が徐々に近づいてくる。暗闇の中、月明かりに照らされ、姿を現わしたのはナオミ、テル、ココの三名とジョジョの一匹だ。

「…へえ、ここが迷いの森か…」

ずっしりとした鍾乳洞を抜ければ、白い巨大な樹々、息が詰まりそうな濃い霧、どことなく死者の香りといってもよいほど神聖な雰囲気が流れる森が眼前に広がっていた。

そうここが噂の迷いの森なのだ。自分たちはついにその森に足を踏み入れたと思えば、何か感慨深いものが込みあげてきた。

「油断大敵だぞ」

テルが剣の柄をギュッと握りしめれば、鞘にバチバチッと電流が流れた。

決して立ちいってはならない禁断の森、帰らずの森とも呼ばれ、ブルトン人とフランス人との生活を境目といってもよい。それにしても森の樹々はとても大きくて、今も古代の神々の伝説が息づいていた。

あのシンデレラ物語にでてくるような背の高い城、カーボネック城の青い尖鋭の屋根を目印にして歩くこと数分、セコイヤの樹の穴からひょっこりと顔をだす、森の妖精たちと出会った。

「テル、アレって妖精だよね?」とナオミ。

「違うな、アレはきっとカブト虫だよ」テルは唸った。

森の妖精たちはナオミたちよりもずっと小さい、彼女たちの手のひらに乗るぐらい小さい。まるで子ネズミのような小ささだ。妖精

たちはナオミの耳元までによじ登ってくると、彼女の耳もとでボソボソなにかを呟いた。

「ねえ、近道を教えてくれるって、いっているけど…」

「きっと罠だよ、僕らを底なし沼に導くんだな」

テルはその怪しげな森の妖精をまざまざと見つめた。

「もーう、疑りぶかいんだから」ナオミは森の妖精をテルの耳もとに近づけた。

するとテルが聞いたのは「オマエノシリヲタタイテヤル！　アカクハレルマデタタイテヤル！」だった。少年は悲鳴をあげて、森の妖精を放り投げた。てくてくと地面を歩いている者は踏み潰そうとしたので、妖精たちは樹の巣穴へと逃げだした。

「『乱暴な子どもは土の巨人に退治してもらわなきゃっ』て。誤解よ、私たちはあなたたちをいじめにきたんじゃないの」

ココは大切なことを思いだしたように、テルからモンスター図鑑を借りて「やっぱり、そうだと思った」と確信ありげだ。

「アレは森の妖精ピクシーよ。恐がっている人にはね、一番恐いと思う言葉が聞こえてくるの。だからピクシーと会話をするときは、恐れちゃいけないの」

「へえ、だったらさっきのは僕の心の声？」

「テル、なんて聞こえたの？」

「そんなのいえないよ」テルは顔をぐっと赤らめた。

するとまもなく地面が揺れはじめた。

地鳴りとともにゴゴゴッと地面は唸りはじめ、土のなかからむくむくと巨人がぬらり、と今まさに墓場から生まれでたかのように現れた。背はナオミたちのほぼ五倍、錆色の肌、ずんぐりした巨漢に小さな頭、紫色の舌がやたらに長く、短くてゾウのような太い足、腕がやたら長く、口からは数本の牙がむきでていた。

見るからに獰猛そうだ。ざっと数えて三匹はいる。ココ、テルは素早く剣をぬいて攻撃しようとしたが、ナオミがそれをとめた。
「なんでとめるんだよお?」
「彼らに非はない」
確かにナオミの言い分にも一理ある。
「じゃあ、このまま食べられるのを待っているのかよ?」
私たちにも非はない、あとは信頼関係だけにすぎない。それならまず自分たちが彼らを信ずるところから始めよう。土の巨人もきっとわかってくれるはずだ。

テルはジョジョのほうをチラッとみた。
「一番最初に食べられるのはジョジョ、絶対にお前の気がするよ」
「そうかなあ、僕はテルの気がするけどなあ」ジョジョ・ダックスフンドは鼻をならした。
ナオミの言葉に従って、一同は大人しくした。
土の巨人たちは少女たちのまわりをぐるぐるとうかがい、土の巨人たちはテルの頭のうえで大きく口を開けたり、閉めたりしていたが彼らが敵じゃないとわかったらしい。巨人たちは静かに地面に寝そべると、そのまま地面に沈んでいった。

ひょっこりと森の精霊ピクシーが現れると、ナオミたちをじっとみた。
「『乱暴者もいるようだけど、早とちりしてごめんなさい。おわびに森のなかで拾った、この指輪を君にあげるよ。さあ、安全な道を案内しましょう』だって」
森の精霊たちの言葉に誰かが舌打ちするのが聞こえた。
ピクシーたちはナオミに小さな銀の指輪を手渡した。べつにどこにでも売っていさそうなミスリル銀の指輪だ。するとその指輪から「誰か助けておくれ!」という変てこな声が聞こえた。ナオミはもうそんな程度で驚かない。

「呪われているんだよ。捨てちゃえよ」ジョジョが唸った。
「なあ、マイケルのお土産にどうかな？」
テルがニヤニヤしながらいった。
「そうね」ナオミはガマグチガエルに指輪をしまいこんだ。

ナオミたちは用心しながら、森の奥へと突き進んでいった。神経質に何度もなんども後ろをふり返ってはキョロキョロした。誰かにつけられている気もすれば、誰かに見張られているような気もするのだ。
「ねえ、誰かにつけられていない？」とナオミ。
「たぶん骸骨騎士だよ、ほらっ、鎧を着た骸骨の騎士ってヤツ」
あのアグリッパ悪魔教会のときに殺し屋が放った、あの骸骨剣士たちか。有り得ない話ではない。
「襲ってきたらどうするの？」
ココの声は恐怖のあまり、どもった。
「ジョジョにでも噛みつかせればいいんだよ。なあ？」
「人骨なんかいらないやい！」
テルの言葉にジョジョはぷりぷりしていった。
すると会話が終わらないうちに何者かが襲ってきた。
その数ざっと二十五名、どうやら襲ってきたのは噂の骸骨の騎士たちのようだ。悪魔教会のときと比べて、自分たちは確かに強くなった。ナオミやテル、ココの身のこなしはさすがといわざるえなく、次々と骸骨の騎士をなぎ倒していった。
「こいつで最後だな！」
テルが骸骨騎士の首を胴体から斬り飛ばした。

第7章　迷いの森【2】

第7章

枝と葉のあいだからもれる月明かりのみが頼りだ。

ドシンッ、ドシーン！　と地面を揺らして、のしのしと歩いてくるのは岩巨人（トロル）だ。右手には大きな斧を持っている。東と西のほうから一体づつ、合計二体の巨人だ。ナオミたちは気づかれないように茂みのなかにそっと隠れた。

彼らは大きな揺らめく炎をかこみ、樹の幹に突きさした子羊の丸焼きをむしゃむしゃと食べていたが、最後の一頭になると互いに自分のものだ！　ウガウガッと言い争いをはじめ、ついには力で決着をつけるようになったようだ。

岩巨人は互いに見つめ合うと、ウガガガア！　と声をあげて、襲いかかった。東からやってきた岩巨人が「ウガア！」と勝利の雄叫びをあげ、西からやってきた岩巨人の首を斧で切り落としたあと、右手でその首を持ち上げた。

途中、テルがオエッと吐き気を催し、その声を聞いた岩巨人は茂みを凝視した。ナオミたちは息を殺し、自分たちの前を通りすぎるのを待った。

とその瞬間、ビチャッと大きな水滴がナオミの頭に降り注いだ。

テルは恐怖のあまり、何も喋れず、ツンツンッとナオミを指でつついた。そっとナオミが顔を上げればいやはや、岩巨人は二体ではなく、三体いたようだ。東と西、そして自分たちの真後ろに。子羊の丸焼きが三つあったことを考えれば、自ずと察しはつく。

コソコソと忍び足で通りすぎようとした、ナオミたちの存在に気がつくと、岩巨人は低い唸り声をあげて、メチャクチャに棍棒を振

りまわして、躍起になって彼らを追いかけてきた。

「逃げろおおおおお――――！」

岩巨人はとてもしつこかった。ついにナオミたちは大きなセコイヤの樹のふもとに追いつめられてしまった。岩巨人はじりじりと近寄り、いきなりウガウガッ！　と勝利の雄叫びをあげ、その大きな棍棒を振り落とした。

一瞬、森の木陰からゴソッと人影が動いたような気がした。

「もうだめかも！」とナオミが瞳をギュッと閉じたとき、いきなり岩巨人が呻き声をあげて倒れた。背中には無数の矢が突きささっており、岩巨人は紫色の舌をだらんとたらして、ぐるりっと白目をむいていた。鼻からは臭そうな鼻くそがたれており、ぷーんとハエがたかっていた。

「こいつ……死んだのかな？」

ナオミはつんつんと剣で叩いてみた。

「たぶんね」とテル。

「でもいったいどこの誰が？」

キョロキョロとまわりを見渡せば、彼らは無数の狩人たちにか囲れているのに気がついた。どうやら全員男性のようだ。だが女のように美しい。細身の彼らは銀髪の長髪、とんがった耳につりあがった緑色の瞳、美しい整った顔立ちをしていた。神聖、いや聖なる森の民を意味する銀色の神聖文字（ルーン）を顔に刻んでいた。

やはり自分たちは誰かにつけられていたようだ。

「うわあ、エルフ族じゃんか」とテル。

「気をつけてよ。この人たちは中立だから」

ココはきっぱりと真面目な顔つきでいった。

「こんばんわ、騎士候補生の諸君」

ナオミたちの制服をみて、リーダーらしき狩人が静かに囁いた。
「あ、あのこんばんわ」
ナオミはどもってしまった。
「あ、あの…ずっとつけていたの？」
「つけていたかはともかくとして、私たちエルフ族は町をでた騎士や騎士候補生たちを守るという、契約をトモロヲ・ブドリと交わしている。ちなみに岩巨人は夜が明ける前に地下に潜らねば、山の石にもどり、二度と動けなくなる」

「見てよ、ナオミ。もう夜が明けようとしているよ」
ジョジョのいうとおりだ。闇夜から月と星がうっすらとかすみつつ、かわりに夜明けの空には青い鳥が飛び交っていた。自分たちに襲ってきた岩巨人はパキパキッと少しづつ石化しつつあった。
「そんなことぐらいアリス、君なら知っているはずだろうに」
エルフは飽きれているようだ。

（アリス？）とナオミは自分の母の名前を呼ばれてうろたえた。

「君はアリスじゃないのか？」
「あ、あの娘です。アリス・ニトの一人娘…ナオミ…です」
「…ラファエロ…」
女のような美しいエルフがいった。
「人間はかぎられた命だということを忘れてはいませんか？」
「そうだったな、ルーファス。そうか、君は彼女の一人娘か。なつかしい友と会えたと思っていたが、それは残念なことだね。それで君たち、肝試しでこの森をうろついていたわけじゃないだろう？」
「あ、あの聖杯城を探しているんですけど、皆さんはご存知ありませんか？」
「我々は不死の命をもつゆえ、死ある者とはかかわらない。それが掟、君たちとかかわりをもてば我々はその資格を失う。聞かれても

答えない、知っていても答えない」
　ルーファスと呼ばれた狩人は厳かにいった。
「けちだなあ」テルはぷりぷりしていった。
「今夜は満月が美しい」
　そろって狩人たちは復唱した。
「我々は『バラントンの泉』に行く途中だ。よろしければそこまで送っていこう」

　聖水の女神ニミュエと魔法使いマーリンが出会い、恋に落ちたバラントンの泉。
　そこは迷いの森きっての聖なる水で清められた聖域だ。エドモンドの「豆知識及び雑学」によれば、アーサー王の聖剣は、この聖水の結晶体から生み出されたものだとか。ともあれ邪悪な魔物は聖なる力を嫌う。

第8章　迷いの森【3】

第8章

途中、バラントンの泉への通り道として、迷いの森の庭園墓地を通り抜けた。左右にある白い大理石の彫刻、いやエルフの狩人の雄姿を象った墓標からは神聖さが漂い、そこが墓地であることを改めて、ナオミたちに感じさせてくれる。

「ここはエルフ歴代君主が眠る霊廟…」

エルフは不死と聞いていたので、ナオミたちは驚いた。

「不死である我々エルフ、その歴代君主がなぜ代替わりすると思いますか？」

ラファエロによれば、エルフは運命の傍観者で知られる。運命に逆らえば運命の女神によって、不死の力を奪われる。そのとき女神によって止められていた、時の砂時計は一気に襲いかかる。そうやってエルフは死んでいく。不死といえども永遠ではない。

ナオミは見覚えのある彫像の墓で足をとめた。

「…これって、そのまさか…」

「気づかれましたか、これは迷いの森の辺境伯の墓標です」

迷いの森の辺境伯モンテカルロ、そう稀代の大悪党の名前だ。

「仲間の裏切りに遭い、この森で力尽きたあの男の亡骸は、歴代君主のご慈悲でこの地に葬られたのです。これがブルトン社会を恐怖に陥れた男の末路…」

それは嘘だ。彼は死んではいない。

「ねえ、ナオミ」

ジョジョの言い分もわかる。

そう彼は死んではいない、それだけは断言できる。この墓を作っ

たのがエルフ歴代君主というなら、エルフたちも辺境伯の死に一枚噛んでいることになる。ココはエルフは中立というけれども、もしかして彼らは近い未来、自分たちの敵になるかもしれない。用心にこしたことはない。

またガサッと森の木陰で何かが動いた。

やはり自分たちは誰かにつけられている。エルフ族じゃない誰かに。ルーファスはピタッと足を止めて、木陰に隠れている者に「いつまで隠れているつもりなんだ。いい加減、姿を現わしたらどうだ」と声を荒げた。

瞬時に重たい空気が流れた。

ナオミたちが臨戦態勢にはいるなか、やっと観念したのか、木陰から姿を現わしたのは腰抜けと名高い、あの男だった。ナオミはやはりな、ともう驚きはしない。

「ロエスレル・ドラゴンヌ、お前がナオミの殺し屋だったのか…」

テルの剣の鞘がバチバチッと勢いよく放電している。

こいつが父と母を殺し、そして自分の命を狙っている殺し屋。

きっと臆病者のふりをしているのは、周りの連中を欺くためだろう。臆病者を装うことでこの男は、迷いの森の辺境伯の忠実なる手下として、多くの罪のない人たちを殺してきたに違いない。

ふつふつとやり場のない怒りが込み上げてくる。尽きることのない憎しみ、カンペールの森、ボルゴウッドの森のフェンリルの襲撃、アグリッパ悪魔教会での闇討ち、チェスでの巧妙な罠、冥界では男の罠にまんまとかかり、ロロを死に追いやろうとした。

ガルムに襲われたときは助けられたものの、きっとこの男のことだから理由があるに違いない。ともあれその結果、今自分は聖杯を求めて、この迷いの森にいる――その張本人が今、目の前にい

ると思えば、抑えきれない激しい怒りが込み上げてくるのだ。
ナオミは素早く剣を抜くと、ドラゴンヌに襲いかかった。
「うおおお！」
激しい鍔競り合い、剣と剣の激しい攻防、まわりに火花が飛び散った。間合いが狭いこともあって、テルとココは戦闘に加勢できずにいた。

ナオミを攻め動かしているのは憎しみだ。途方もない憎しみ、尽きることのない地獄の業火、憎しみの炎だ。そんな彼女をもの悲しげにみる、ドラゴンヌの悲哀に満ちた瞳が、さらにナオミの怒りの炎を煮えたぎらせた。
「お、お前は！　お前はなんて最低なヤツなんだ！」
ナオミはすでに息があがっている。肩呼吸になった彼女に勝ち目はない。ナオミが懇親の一撃と剣を振りあげた瞬間、ドラゴンヌは彼女の剣を薙ぎ払った。ナオミの剣が三回転して、ラファエロの足元にズサッと突き刺さった。憎しみの瞳でドラゴンヌを睨みつけるナオミ、彼女の喉もとに剣を突きつける。

――――殺るならさっさと殺れ！

ナオミは静かに瞳を瞑った。もう覚悟はできている。
「ナ、ナオミ！」
「ドラゴンヌ、この野郎！」
テルとココがドラゴンヌに襲い掛かろうとするところを、ルーファスが制止した。

「…ロエスレル・ドラゴンヌ…」
自分の名を呼ばれた男は、エルフにそっと目をやった。
「誤解を招くことはお前のためにはならない」
「これは運命の女神が仕組んだことじゃないのか？」

ドラゴンヌは剣を鞘に納め、静かにいった。
「立ち去れ」
ルーファスは男の言葉に不快感を表し、言葉を濁した。
「ルーファス。ドラゴンヌはドラゴンヌになったと、そうエルフ王に伝えてくれ」
どういう意味かはわからない。その言葉にテルとココはまじまじとルーファスの顔を見つめた。ルーファスの瞳もひそかに悲哀をおびている。
「王はすでにご存知だ、そしてその後の未来も…」
「俺はその未来を変えてみせる」とドラゴンヌはナオミたちに静かに背を向けた。
「ああ、期待している。あがいてみせろ」
この会話からして、二人は知り合いらしい。
エルフが何を期待しているのかは分からない。ただナオミに分かることは目の前のエルフは、敵のようであって味方でもない。ココのいうとおり「中立の者」だということだ。微かながらにカリヨンの鐘の音が聞こえる。

懐中時計に目をやれば時刻は午前五時。
気がつけばドラゴンヌは、風のように自分たちの前から消え去っていた。今回の襲撃、今までの襲撃と比べて何かが違った。ああ、そうだ。ドラゴンヌから殺気を感じなかった。
ただ様子見をしていたとき、エルフに自分の存在が気付かれ、仕方なく姿を現わしたという感じだ。剣を交えているときもドラゴンヌは、自分の剣を嫌々受け止めていた気がする。男は最初から戦うつもりはなかったのだろうか、何だか変な感じがする。
「もうすぐでバラントンの泉につきます。さあ、元気をだしてください」
ラファエロはナオミに彼女の剣を手渡していった。

第9話　バラントンの泉【1】

第9章

バラントンの泉、そこはアーサー王伝説に謳われるだけあって、とても美しい。大地からはうっすらと水がしみだし、絶えず聖なる力で清められている。泉の真んなかには一際大きな樅の木があって、季節がクリスマスだからなのか、樅の木は美しくクリスマスツリーのように着飾り、黄金の鐘や赤と緑のステッキ、それから赤色の靴下、てっぺんにはベツレヘムの星がつけられていた。まわりの樅の木々も同じように飾りつけされており、それはそれは美しい光景だ。

空からはしんしんと粉雪が降っており、その聖域だけ銀世界。

「ではまたどこかで会いましょう、アリスの娘ナオミ・ニト」

森に木霊するエルフの声が心に響く。

するとカサカサッと枝のざわめきが聞こえ、どんどん声が遠くなったと思えば、冷たい夜風とともに彼らはいつのまにか姿を消していた。ナオミとテルは口をぽかんと開けたままだった。

「ねえ、もう口を閉めたら」とココ。

迷いの森の狩人エルフ、本当に意味深な連中だが、彼らが殺し屋ロエスレル・ドラゴンヌから、自分の命を救ってくれたことは否めない。しばらくナオミたちはバラントンの聖なる泉の美しさに見惚れていたものの、ココが何かに気がついたようだ。

「ねえ、あそこに家があるわ。誰か住んでるのかしら？　灯りがついてるけど…」とココは大きな樅の木を指さした。

一見、樅の木のように見えるが家のようだ。

「行ってみましょう」

ナオミはやや緊張した声でいった。

「でももし魔女なんかだったら、どうするのさ？」
「ここはバラントンの聖なる泉よ。邪悪な者は近づけないわ」
ナオミが扉をノックをしようとしたとき、彼女たちの存在に気づいているかのように「おはいり、お待ちしていましたよ」と優しい女の人の声がした。ナオミたちはお互いに顔を見合わせると、ゴクッと喉を鳴らして、扉をそっと開けた。

そこには一人の老婆が編み物をしていた。
扉を開けた瞬間、ほのかに樅の木の香りが、鼻にツゥーンッと届き、暖炉の暖かさがナオミたちを包み込んだ。家の中は木の温かさが漂っている。クリスマス間近とあって、部屋は緑と赤の装飾でいっぱいだ。鳥かごには青い鳥が静かにしていた。
「あなたはアッパータウン牧場のところにいた、お婆さん！」
「あの時はヨセフのロバを届けてくれてありがとう」
錆色の髪の毛というか銀髪というか、鼻眼鏡をかけた老婆は、貴婦人という言葉が似合うほど、どこか気品が漂っている。ナオミたちとは初対面というわけではなく、アッパータウン牧場で一度は会話をかわしたことがある。

もしかしてこの人もエルフなんだろうか。
「青い鳥が教えてくれましたの」
老婆の編み物、どうやらマフラーのようだ。孫へのクリスマスの贈り物だろうか。窓からはしんしんと雪が降ってきた。
「もうすぐ三人の子どもたちが訪れてくるってね。自己紹介が遅れましたわね、私はエディンバラ。この森のエルフ歴代君主の庇護を受ける者」
エルフと何らかの関わりがあることは確かなようだ。
「明けがたは冷えるわね。何の用事で、バラントンの泉に来たのか分からないけれど、暖炉に当たっていきなさい。ついでに何か飲む？」

「ええっと私たちは…」ナオミはしばらく考えたが、とくにテルなんかは親方たちが仕事終わりに飲んでいる酒しか、頭をひねってもでてこなかった。
「じゃあ、僕はベルモット酒」とテルが皆を代表していった。
「こらこら、そんなものを子どもが飲んじゃいけないわ。まっすぐおバカさんになっちゃうわ。ええっとあなたたちにはアップルティーね」とエディンバラは、編み物を途中でやめていった。

（テルの場合はもう手遅れだな）とジョジョはひそかに思う。

「じゃあ、そのメロンティーを頂きます」
「おほほほ、アップルティーね」
エディンバラの上品な笑い声だ。
エディンバラは円卓に置いてある小さな呼び鈴チリン、チリーンと鳴らした。するとすぐにグレムリンがボーイに扮して、アップルティーを運んできた。
「では私たちの出会いに乾杯を！」
「エディンバラさん、なぜ私たちがここに？」
カフェを楽しみつつも、ナオミは会話の本質に迫った。
「なぜあなたたちが来ることが分かっていたかって？　ある友人から青い鳥の知らせを聞いてね。この森を横切ろうとする勇敢な子どもたちがいるから、その子たちに力を貸してやってくれってね」

（誰だろう？）とナオミは首を横にかしげた。

子どもたちは彼女に今までの冒険のことを話した。
エディンバラは紅茶を飲みながらうんうんと頷いて、ときおり驚いたしぐさをみせた。また彼女はとてもかわいらしいお婆さんで、紅茶マニアだということもわかった。そこでテルはキャッスルトン

茶園で栽培されているタージリン紅茶は最高級品だと、どこかの誰かさんから聞いた紅茶話をまるで自分の知識のようにいった。

「助けておくれ！」

ガマグチガエルにしまい込んだ、指輪がまた助けを求めている。

「呪われた指輪の戯言だよ」

テルは紅茶をすすりながらいった。

「よろしければ見せて頂けます？」エディンバラの微笑みにナオミは財布から例の指輪を取りだし、老婆に手渡した。

「あらっ、精霊が宿っていますわね。ちょっと貸してくださいな」

すると彼女はポチャンッと指輪を紅茶ポットのなかにいれ、砂糖やなんやらとポットにいれ、鼻歌を「ルンルンルン」と歌いながら「蒸発するまで火にかける」と呟いた。

三分後、沸騰している紅茶ポットから、もわもわと水蒸気があふれでてきた。やがてそれは椅子の上に集まりだしてきたと思えば、椅子には一人のゴーストが気分悪そうに座っていた。

「こいつは精霊じゃなくて悪霊だよ」

テルが唸った。

「黙れ、テルテル坊主め！」

青白いゴーストはテルを罵った。

「こいつ、ゴーストの『くそったれ坊や』だよ。僕の親方の店にとりついているんだ」

第１０章　バラントンの泉【２】

第１０章

「それにしても腹が立つなあ、あのパパティーノの親父には！」
「ジョルジョ・パパティーノがどうかしたの？」
ナオミはひかえめに尋ねた。
「どうかしたってぐらいじゃすまないよ、僕を指輪にしたんだ」
くそったれ坊やの話によれば、今からおよそ十ヶ月前のこと。
もうすぐガールフレンドの、ハナコの誕生日パーティが催されるから、ボルゴウッドの森に遊びにきていた一角獣に招待状を渡しにいったときだった。少年はスモーキーが何やかんやというパパティーノの密談を聞いてしまったために指輪にされ、迷いの森のなかに投げ捨てられ、森の精霊たちに拾われたのだという。
「あらっ、そう。それはごめんなさいね」
エディンバラが一角獣のかわりに謝ったとき、ナオミは慄然として悟った。
その密談の最中、自分はボルゴウッドの森で殺し屋が放ったフェンリルに命を奪われそうになった。パパティーノに命を助けられたが、そのおり男は指輪をみて「盗み聞きした罰だ。迷いの森にでも捨てておけ！」と執事のガンダルフ・カトニグレにいっていた。あれはこのことだったのか、と今更ながらに思う。

「カジノの大金庫を守っているスプリガンって――」
「スモーキーだったんだよ、ナオミ」テルのその言葉にくそったれ坊やは、ナオミのほうにじっと見つめた。
「…あ、あのう…何か…」
ナオミはゴーストに見つめられ、しどろもどろだ。
「君がハナコがいっていた騎士候補生かい？」

ナオミは頷き、（どうせ悪口でもいっていたんだろう）と思った。
「いやあ、ハナコがほめていたよ。親なき子のくせになかなか根性があるって。ゴーストはなかなか本音を語らないからね。とくにあの子はコ・クーボ家の悲劇から、ああいう皮肉れた性格になってしまったんだ」

「…ハ、ハナコとコ・クーボ家って関係があるの？」
意外な組み合わせにナオミは声をあげた。
「彼女はコ・クーボ家の料理人だったんだ」
「ねえ、くそったれ坊や」
ココは興奮しながら、二人の会話に割りこんできた。
「伯爵の密談のメンバーにはピックル・タナカはいた？」
「カトニグレ執事、それから腰抜けのドラゴンヌの二人だけだよ」
その名を聞いたとき、ナオミは確信した。

――やはり殺し屋はロエスレル・ドラゴンヌだと。

ロロの推測におそらく間違いはない。
アッパータウンに行く前、自分の命を狙っている者がいるとかいないとかホワイト刑事の伝言も、今思えばドラゴンヌに違いない。さっきだって自分の命を狙ってきたじゃないか。
くそったれ坊やの話によれば、パパティーノは黒猫に間違いなさそうだ。ピックル・タナカはきっとその一味だろう。でももっと驚いたのはハナコにボーイフレンドがいることだった。こっちのほうが意外といえば意外だ。ジョジョは「どうやって子どもを作るんだろう？」と不思議がっていた。

「ねえ。くそったれ坊や、集会所に急がなくていいの？」
エディンバラは紅茶をすすぎながらいった。
「何を急ぐのさ？」

「あらっ、あなたは知らないの。あなたがいなくなって早十一ヵ月ちょっと。この町の法律では、ゴーストの死亡は姿が見えなくなってちょうど十一ヵ月目で認定されるのよ。ゴーストたちはカーボネック城であなたのお葬式をやるって、私のもとにも不幸な手紙がきたの。そのお葬式の日がなんと今夜なのよ」と彼女は髑髏の紋章入りの手紙を、くそったれ坊やに見せると少年は「こりゃ、大変だ！」と驚きの声をあげて、扉をスゥーッと透き抜けてしまった。

ジョジョは耳をたれていった。

「ゴーストってさあ、死んでいるのにまたお葬式するんだね」

「カーボネック城だってさあ。ナオミ？」

「…うん…」ナオミはゴーストがわんさかいるところにいくのかと思えば、いきなり気が滅入ってしまったようだ。

「あらっ、あなたたちもお葬式にいくの？」

ナオミは病気の友だちを助けるため、アーサー王物語にでてくる聖杯伝説、ガラハッドのカーボネック城を目指していることを、エディンバラに打ち明けた。

彼女はふーっとため息をつき、「城のなかにはパパティーノ卿の造りだした、人造人間がいるって専らの噂よ。それに今夜はゴーストたちがいつもより多いわ」と三人をみた。

なるほど、この城であの男は悪魔の人体実験を行っていたのか。

「それでもいくの？」

「友だちを助けるためだからな」

「あ、あのカーボネック城について、なにか知りませんか？」

ナオミの言葉にエディンバラはゆっくりと頷いてみせた。

「この森にあるカーボネック城が――――」

エディンバラは遠い瞳になって、静かに語りだした。

「あのガラハッド聖杯伝説のカーボネック城かどうかは、誰にもわ

からないの。でもこんなお話をご存じかしら？　ずっと昔、あのお城はホテルだったの。結婚したばかりの若い夫婦が営んでいた素敵なホテルだった。あなたたちのような騎士候補生が五十人もいたんですよ」

「へえ、だったらなぜ今は幽霊城なの？」とテル。

「…そんなある日、夫妻はちょっとしたことでケンカしちゃったの。仲直りしたいんだけど、なかなか二人ともいじっぱりでね、そうもできなかったの。そこで優秀な騎士候補生の少年が力を貸してくれたの。何やら実験中の魔法があるから試させてくれってね。少年は夫人に昼は馬、夜は人間になる魔法をかけ、亭主には昼は人間、夜は馬になる魔法をかけたの。だけどそれが悲劇の始まりだった」

ナオミたちはゴクッと生唾を呑み、テルだけはアップルティーを飲んだ。

「その魔法は愛を確かめるには十分な魔法だった。このとき二人は自分の愚かさをいやというほど知った。でもそれはもうあとの祭りだった。愛する人に会いたくても、近くにいるのに二人とも気づかなかった。それからまもなくして、夫妻が昼と夕方、交互にいなくなるという幽霊話が流れてね、ホテルは立ち入り禁止になったの。そして今ではゴーストたちの集会所よ」

「それってものすごく可哀相な話だわ」

ナオミは刹那にそう思う。

「お互いに人間として会うことができない残酷な話ね。だけどこの話にはまだ続きがあるのよ。夫人はあまりにも高貴すぎて、馬ではなくて一角獣になっちゃったの。それがあなたたちがボルゴウッドの森で出会った一角獣よ」

このことにナオミたちは「えー」と驚きの声をあげた。

「二人はどんな些細なことでも分かり合いたかった。その思いがそのままケンカになっちゃったのね。ひっくり返した水はね、水の量

だけ涙になるの。二人にかけられた魔法は、愛が深い分、今も二人を苦しめているのよ」

「男の人はどうなったの、まだ生きているの？」

エディンバラは静かに頷いた。

「どこかにね」

「その少年って、マルコ・パパティーノみたいなヤツだなあ」

「その少年はアッパータウン始まって以来の鬼才、とくに悪魔祓いのいわれについてはね。夫妻の魔法もこの子がかけたなんて、誰も思ってやしない。だってあれは悪魔祓いのなかでも高等魔法。あの子はそのまま悪魔崇拝の道に堕ちていった」

「ねえ、その子は今、どうしているの？」

ココの質問にエディンバラは、大きくコホンッと咳払いした。

「確かあなたたち、聖杯城に行くっていってたわよね？　護衛もかねて一角獣をあなたたちに同行させましょう。ええ、私は一角獣の馬屋番エディンバラ、三階で休んでいるあの子に話をつけてあげます。この森の連中はあの子に手出しできないからね。それからあそこにいくにはゴーストに変装していったほうがいいわよ」

「ありがとう、エディンバラさん」

ナオミは彼女がわざと話題をかえたと思った。

「先に表にでてちょうだい、三階にいる一角獣を呼びにいくから」

ナオミたちの姿が見えなくなると、二階にひっそりと隠れていた、白いマントに身を包んだ怪しげな老人がおりてきた。老人のまわりには数人のエルフ族の狩人たちが跪いていた。

「それでいったいどういう気まぐれですの、あなたというお方がわざわざ――――」

あの子たちの自分の運命を変えようとする勇気を称えて、自分もそれなりの行動をみせただけのこと。別にたいした理由はない、彼らの運命は彼らが決めよう。運命を変えられるかは彼ら次第、と顎髭を触りながら、老人は淡々と呟く。

老人は懐中時計の針を静かに見ている。
「あの子たちに運命を変えられまして、トモロヲ・ブドリ？」
「魔法がきれる時間じゃよ」
わざと会話を断ちきると、トモロヲ・ブドリは人さし指と親指をパチッと鳴らした。瞬時に老婆は一角獣へと姿を変えた。いや戻ってしまった、というほうが無難だろう。
「悪いがもう少しお邪魔させてもらうよ。なあに、森の狩人たちにベルモット酒をごちそうするだけじゃ。では朝方に悪いが、あの子たちをよろしく頼むよ」
トモロヲ・ブドリはチリン、チリーンと呼び鈴を鳴らし、グレムリンを呼び寄せた。

第１１章　聖杯城の城主【１】

第１１章

一角獣は三人をじーっと見つめたあと、くるりとナオミに背をむけた。
「『ついてこい』っていってるみたい」
テルとココが顔をしかめた。
「なんとなくわかるの」
この一角獣はあのボルゴウッドの森で、フェンリルに襲われたときに自分たちを助けてくれた、あの一角獣であることは間違いなかった。三人は深くて真っ暗な茂みのなかを突き進んだ。純銀の毛なみのおかげで、一角獣を見失うことはなかった。まるで暗やみのなかに煌く宝石のようだ。
魔物たちもさすがに彼らのまわりには近づけない。
「あいつの毛って本物の純銀かなあ？」
「試しにちぎってみなよ」とジョジョがいったので、テルは一角獣にそっと忍びよって、右手で力いっぱい銀色の毛をむしりとった。すると一角獣に手を噛まれて、テルは呻き、皆はどっと笑った。
「僕らの毛と同じだよ、銀髪ってやつだ」

ナオミは一角獣の連れられ、暗く生い茂った木々を通り抜けた。ずんずんと森の奥深くに入っていく。木枯らしは葉をざわめかせ、ブワッと皆の髪を逆立たせた。
女性の悲鳴のような嘆きの声が聞こえてきたときなど「ひえええええ」とテルとジョジョは顔を強張らせた。墓から這い出てきた死にきれぬ、腐敗した男女の死体の群れが顔中の蛆虫とともにこちらを凝視している。ナオミと目が合えば、ニヤッと不気味に笑い、右手でおいで、おいでをしている。

やがて樹と樹が重なりあった、大きな一本道にでた。
人面樹といえばいいのだろうか。樹々が自分たちをジロジロとみて、クスクスと小笑いしている。
迷いの森のフェンリルの群れも、一角獣がいなければすぐに襲いかかりたいとばかりに自分たちを付け狙っている。一角獣の護衛がなければ、連中と今頃死闘を繰り広げていたかもしれない、と思えばナオミはゾッとする。
いつのまにか雪は小雨となり、夕立ちがきそうなほどの雲行きになってきたと思ったそのとき、ピカッ、と雷の光が城を照らしだした。すると一角獣がピタッと止まり、ナオミたちに振りむいた。
「あれがカーボネック…」
ナオミの言葉にテルが「聖杯城」と生唾を呑んだ。

森を抜ければ大小さまざまな塔が立ち並んでいた。
いかにも年代ものの古城、雲行きとともにその古かしさが恐ろしくみえる。尖鋭の屋根がいくつもある、カーボネック城は煉瓦造りの中世の城だ。おそらくアッパータウンの町ができるまえ、もっとずっと昔から、ここにそびえていたに違いない――――とナオミは思った。
崖のうえに築かれた山城、ふもとはかつて騎士候補生たちが住んでいたと思われる、今は廃虚となった古びた宿屋のほか、武器屋や道具屋、教会などがひっそりと闇夜にまぎれていた。
ここはその昔、噂の夫婦が呪われるまでカーボネック城を中心とした小さな村だったに違いない。村に鐘の音が響いていた頃は、きっとのどかで、おとぎ話にでてくるような素敵な渓谷の村だったのだろう。

ナオミたちは誰もいない村の広場をとおり、崖のうえにそびえる

カーボネック城を目指した。石段を脅えながらのぼれば、そこは大きな英国庭園（イングリッシュガーデン）だった。決して美しいとはいえないものの、きちんと剪定されている。庭園を抜ければ石畳の一本道だ、左右には街灯がひっそりと灯されている。

巨大な樫の木の扉前で街灯は終わっていた。

「ここが聖杯城の玄関扉のようね。テル、ココ、覚悟はいい？」

ナオミの言葉にテルとココは頷き、ジョジョは尻尾をふった。

キイイイィーッと古びた無気味な音をたてて、ナオミがちょっと触れただけで扉は開いた。扉には鍵はついてはいない。なかは思ったとおりさびれた城のようだ。

一番最初に飛び込んできたのは玄関広場に飾られた、大きな騎士の肖像画だ。きっとエディンバラが話をしていた馬に変えられた夫の肖像画か何かだろう。どっかの誰かに似ている――――がいまいち思い出せない。

「サー・ヨセフ・サナム六十五世の肖像画。伯爵サナム一世の娘リオノルスと初代アーサー王の間に生まれた庶子、円卓の騎士ボールの後裔…」

ナオミは銘版に記されていることを声にだした。

馬に変えられた夫婦は名門一族のようだ。いやアーサー・ブルトン公爵の親戚みたいなものじゃないか、そんな一族に呪いをかけるなんてどんなヤツなんだ。よほど邪悪な人間に違いない。玄関広場にはゴーストの姿がちらほらと見えはじめた。

「急いだほうがいいわね」

しばらく誰が先頭を歩くをかもめていたが、結局ジョジョが先頭を歩くことになった。城内はキャンドルのお化けや火の玉が行き交っており、不気味に明るかった。

ジョジョはまだぶつぶついっていた。

「君たち、白馬の騎士失格だぞ。いいかい、今日からは黒犬の騎士

って名乗りなよ」
と、そのときだった。招かざる客というべきか、耳を澄ませば大人の足音が聞こえてくる。
「まったくヤツらは嘘しかいわんな」
「閣下、真実を語るゴーストなど今まで聞いたことは一一一一」
「それもそうだな、ゴーストほど秘密の番人にふさわしい連中はいない。それでこの城の警備はどうなっている？」
「ご安心を、閣下。新型の人造人間を数体、徘徊させております」
自分たち以外にも、この屋敷には誰かいるようだ。
確実に誰かが、いや数名がこちらに歩いてくるのがわかった。危険な香りというものに子どもは敏感である。ナオミたちはすぐさま赤カーテンの裏に隠れた。

稲光に照らされ、顔を出したのはあの男だった。
「ジョ、ジョルジョ・パパティーノ！」

なんでこんなところにいるんだろう？　いやマイケルの密告による用心のための見廻りと思ってよさそうだ。にしても用心にこしたことはない。一人いれば必ず三人はいると思えばいい、捕まるまえにやるべきことだけは、やらねばならない。
「急ぎましょう！」
ナオミの言葉に皆が頷いた。

第１２章　聖杯城の城主【２】

第１２章

だいぶんゴーストたちとすれ違うことも多くなった。
「ねえ、ここらへんでちょっと変装したほうがいいよ」
テルの言葉にナオミたちは頷き、回廊の白いカーテンをビリビリッと引き裂くやいなや、口と目、鼻の穴をあけて頭からかぶさった。テルなんかこだわって、わざわざ自分の鼻を殴って、赤い染みをつくったりしていた。
ジョジョも変装したが、皆に裾を踏まれてよく転んでいた。
入館の受付では、この館を取り仕切っている執事が、もちろんゴーストなのだが「皆さんの冒険の思い出にどうぞ」とナオミたちに人間専用の羊皮紙ノートに記帳を求めた。感じのいい男のゴーストだ。
「あっ」とナオミは声をあげた。

「どうしたんだい？」
テルは恐怖で声がうわずっていた。

ナオミが記帳をしようとページをペラペラッとめくってみれば、ナオキ・ニトとアリス、その他にロエスレル、サンチョ、ダ・カーポなどの名前が黒ずんだ血色で記されていたのだ。もちろんエイブラハム・アグリの名もあった。

（お父さんとお母さんたちもこのお城に冒険しにきたんだ）

そう思うとナオミはなんだか勇気が湧いてくるのを感じた。
ジョジョは犬のなので血色のインク壺に手をいれて、ペタッと右

前足で記帳した。なぜかナオミもジョジョもどこか誇らしげだ。
「どのような赴きで当屋敷へ？」
黒いスーツを着こなしたホスト風の男がいった。
「僕ら、くそったれ坊やの葬儀に参列しにきたんだよ」
テル得意の口からでまかせだ。
男はよれよれの煙草をスゥーッと吸って一息入れた。半透明の身体が煙で白く濁っている。フゥーッと息を吐きだせば、身体はニコチンで黄色く濁っているのが分かる。
「では右の回廊へお進みくださいませ、ご案内致しましょう」

途中、ジョジョはナオミにボソボソ呟いた。
（え？　あなたのお父さんとお父さんの記帳があったの？）
（うん、あったよ。君のお父さんたちの名前にしたにね、手形があったんだ）
執事は気さくなゴーストだったため、意外と仲良くなった。
廊下にはところどころ鏡が飾られていた。そのなかには自分たちの姿が映らない鏡もいくつかあって、不気味だ。このままではくそったれ坊やの葬儀に参列してしまう。自分たちの目的はそれではない、何とかしなくちゃいけない。
「ガラハッドの聖杯、ご存知ありませんか？」
ナオミは思いきって訊いてみた。

執事は横目でチラッとナオミを流しみた。
「聖杯ですか。残念ながら存じ上げません。部屋のどこかにあると仲間内から聞いておりますが。もしかしてゴーストの誰かが知っているかもしれませんね」
パパティーノの言葉を思い出そう。
ゴーストほど秘密の番人にふさわしい連中はいない――そのようだ。真実を語らないのがゴーストというものなら、目の前の執

事はそれほどでもない。暗に聖杯はこの屋敷のどこかにある、そういってくれている。
どうやら聖杯はこの城のどこかにあることは間違いなさそうだ。

ある渡り廊下にさしかかったとき、壁に飾ってあった肖像画たちがニヤッと笑った。
「…人間がきたよ、ゴーストにうまく化けているよ…」
「…へえ、久しぶりだね…」
「…可哀相にねえ、一生ここでさまよい続けるんだねえ…」
「…うん。一生、この城のなかをさまよい続けるんだ…」
「…かわいそーーーー」とナオミたちに語りかけ、彼女たちが「キャー」と悲鳴をあげているなか、テルはじっーと絵画をみて、いきなり少女の頬のところをカリカリ、人さし指でこすったあと、たった一言「ハエがとまっていると思ったら、ほくろだった」と呟いた。
すると絵のなかの少女は傷ついたらしい、もう一言も喋らなくなった。

「喋らなくなっちゃったよお?」
「テルがあんなひどいこと、いうからよ」
大きな扉の前に案内され、執事とはそこで別れた。扉の前では数名の女のゴーストが悲しげに挨拶していた。
「…このたびはくそったれ坊やの葬儀におこしくださいまして、ううう…」
「少年は何歳だったのかね?」
黒い礼服に身をつつんだ、年老いたゴーストが聞いた。
「生前は十三歳、没後は一一五歳でしたわ」
「それはまだお若い、残念なことじゃ。わしは生前は七十五歳、今は三七五歳じゃ」
ナオミたちは受付の女の人にお悔やみの言葉をいうと、なぜかだ

んだんと心が沈んでいくのがわかった。ナオミたちが扉を開けてみれば、そこには信じられないような光景が広がっていた。

大客間の真ん中には柩の上にかかった、真っ黒なビロードがあった、骸骨の紋章入りだからちょっと無気味だ。そのまわりを何千という黒バラにかこまれ、墓石には赤い血がべっとりとかけられていた。また頭上のシャンデリラには、数百もの黒い蝋燭に黒い炎が輝いていた。

ポルターガイストたちがランプを片手にプヨプヨ、空中を無気味に彷徨い、黒蝋燭を持ったゴーストたちが柩に献花を捧げていた。

「…うわあ、ゴーストの葬式だ。私、初めてみたよ…」とココ。

「くそったれ坊やは、まだきていないみたいだな」

「シッ」ナオミがテルの口をおさえた。すると誰かがつんつんと自分の肩を叩いているのがわかった。「テル、お願いだから静かにしてよ」と彼女がふり返ってみれば、肩を叩いていたのはハナコ・ゴーストだった。

彼女は黒ドレスに羽根つき黒帽子をかぶっていた。

「そこにいるのはだーれ？」

突然、ハナコは意地悪そうに目をキュッと細めた。

「ゴーストのふりをしているのは分かっているんだ、人間っ子！」

ナオミたちは黙りを決めこんだ。ハナコもしばらく黙っていたが、ナオミたちの足をじっと見つめた。

「あー、足があるわ。ゴーストの葬儀に人間っ子が忍びこもうとしているわ。皆に知らせよっと。はやく呼ばなくちゃ！　皆でこいつらをぶちのめさなくちゃ」

ハナコが大声をだしたそのときだった。いきなり暗雲はピカッと光るや、ゴロゴロッ、ガッシャーンと雷が鳴った。

ハナコはその場でしゃがみこんだ。

「…いやあ、この音こわい！　この音こわい！」

突然、いたずら好きのテルは何かをひらめいたようだ。
「…わしらは隣町からやってきた、偉大なる大佐ウォ・アボカド亡霊伯爵じゃ。くそったれ坊やの伯父さんじゃぞ」
「くそったれ坊やの伯父さん？　でも足があるわ」
ハナコ・ゴーストは疑うようにテルをジロジロとみた。
「愚か者め、隣町のゴーストは足が生えておるのじゃ。信じぬのならば、今度は雷をお前の頭に落としてやる！」としゃがれ声のテルは剣の柄に手をやり、ぶつぶつと呪文を唱えると、ハナコに向かって雷撃を解き放った。

ゴロゴロッ、ガッシャーンと落雷の音が遅れて鳴った。
ハナコの目は大きく見開いていた。瞬時に髪の毛が逆立ち、半透明の身体は電気がビリビリと奔り、光輝いている。
「…アワワワッ、ワ・カ・リ・マ・ヒ・タ、オユルシクダサイ…」
今、彼女に触れば電話石の充電ができそうだ。電流が一気に放出されると彼女は「ひえええ」と肝を潰して、ナオミたちを敬うようにとたんにへりくだった。
「申し訳ございません。偉大なる大佐ウォ・アスパラガス閣下」
放電しながら、ハナコはぺこぺこ謝りながらいった。
「偉大なる大佐ウォ・アボカドじゃ！」
テルの剣先から雷がゴロゴロッ、ガッシャーンと鳴った。

「…ひえええ、どうぞお許しください…」
「この館にアーサー王の聖杯があると聞いたが、本当かな？」
その聖杯は鏡のなかに封じられた部屋にある――ゴーストたちの間で有名らしい。またその部屋にはゴーストは入ることはできないが、生身の人間なら中に入ることができるという噂だ。
「どうして知っているの？」
「パパティーノに殺された推理オタクが、その中に入るのを見たんだもん」

推理オタク、きっとエイブラハム・アグリのことだ。
「偉大なる大佐閣下はその禁じられた部屋に、一体何のようでございましょうか？」
「お前は知らなくてよい、さっさと案内せよ」
テルはしゃがれ声でいった。
「こちらです」とハナコはまわりをキョロキョロみまわし、うっすらとナオミたちをさびれた回廊へと案内した。ハナコが壁を通り抜けていこうとすれば、ナオミが「隣町のゴーストは消えることができないの」といったので、ハナコはわざわざ遠まわりをして、その場所へと案内してくれる。

途中、人造人間を培養している部屋のなかを通りすぎた。大きな試験官のなかで、緑色の液体の中、ホルマリン漬けにされた人造人間はみるからに気持ち悪い。
「これは人造人間よ、パパティーノが培養しているの」
ハナコがこんなに素直なんて、どこか気持ちが悪い。ジョジョは「僕はこの人間になりそこねた悪魔の標本のほうが、よっぽど気持ち悪いね」とぼやく。確かに実験的に失敗した人造人間が数体ある。
「イテッ！　どうしたのさ？」
テルがいきなり立ち止まった、ナオミの背中にぶつかった。
ある人造人間をみて、ナオミは思わず足をとめてしまった。というのも、その人造人間は今までの人造人間とは違い、皮膚も髪の毛もあって、一番人間らしいといえば人間らしい。しかも胸の膨らみから推測して女性だ。ナオミはどことなく母アリス・ニトに似ているなと思うほど、美しかった。

人造人間の間を通り過ぎて五分。
ハナコが「ここです」と大きな鏡の前で立ち止まった。
「閣下、ここがその聖杯の禁じられた鏡の部屋です、どうぞお気をつけてください」

壁一面が大きな鏡だ。自分たちの姿ははっきりとわかるが、残念ながらハナコの姿は映っていない。死せる魂はきっと鏡に映らないのだろう。

「ご苦労であった。甥のくそったれ坊やだが、あの子はじつは昇天しておらん」

つまみ食いをいつもテルのせいにするので、罰として大佐の屋敷で監禁されていたそうだ。しかしテル少年が『もう許してあげてよ』と直訴するものだから、今日、監禁を解いてやったとこの似非ゴーストはほざく。

「じきに姿を現わすはずじゃ」

「ほ、本当ですか？」ハナコは瞳を輝かした。

ハナコが耳をすませば、葬儀場から「うわあー！」とゴーストの悲鳴が聞こえた。

「カカカカッ、人を驚かすゴーストがゴーストに驚かされておる。まあ、これからも仲良くしてやってくれ。いいかね、くれぐれもテル少年に会ったら、お礼をいうのを忘れてはいかんぞ。少年の直訴があって、監禁を解いてやったのだからな」

よくまあ、そこまで法螺が吹けるもんだ、とジョジョはぼやく。

「アイ、アイ、サー」と少女は肘を曲げて、最敬礼のポーズをとるとボーイフレンドに久しぶりに会えるとあって、ハナコは瞬時に姿を消した。

第１３章　聖杯城の城主【３】

第１３章

「…ナオミ、これってさあ…」
テルの囁きに「魔法の鏡だと思う」とナオミは応えた。
鏡の中は美しい光の装飾、いや光回廊（ルミナリエ）がどこまでも続いている。
鏡もナオミたちに応えた。
「私を求める者のみ、私のもとへと辿りつけるであろう」
ココが鏡に浮かびあがった神聖文字（ルーン）を読んだ。
私を求める者のみ――それが意味することは、おそらく真実の鏡のみぞ知る。ナオミとテル、ココは互いに顔を見つめあうと静かに頷き、鏡のまえに一列に並んだ。

三人とも瞳を閉じて、鏡のほうへ意を決して歩いていく。途中、勢いよくゴンッと二つの音がしたが、ナオミは気にせずに前へ進んだ。十五歩ほど歩いただろうか――そっと瞳を開けてみれば横にいたはずのテル、ココの姿が見当たらない。
傍にいるのはジョジョだけだ。
「ねえ、ジョジョ。ここどこかしら？」
「知らないよ」ジョジョはまったく屈託ない。
「ここはエルフの王宮『神聖（ルーン）の宮』です」
聞き覚えのある声が聞こえてきた。

声の主はルーファスというエルフだ。さらにここは歴代君主の間だという。光輝く水晶でできた宮殿の周りを見渡せば、どこにも扉がない。あるのは鏡だけだ。
「運命を変えたいと真に願った者のみ、この場所に辿りつくことができる」

緑色の法衣を羽織り、豪華な法冠をかぶっている銀髪の若い男、玉座に座り、興味深そうにこちらを見ている。

この優男がエルフ族の長、エルフ歴代君主。言葉を変えればエルフの王たる人だ。そういえば一五〇年後のトモロヲ・ブドリも、同じような格好をしていた気がしないでもない。

「余はアリマタヤのヨセフ・ジェラール二世だ、ナオミ・ニト」

どうやら自分のことはすでに知っているようだ。お得意のエルフの予言かな？　それともルーファスか、ラファエロのどちらかが自分のことを話したのだろう。

「聖なる鏡は君を聖杯の使者に選んだようだ」

エルフの意味深な言葉に王も、臣下も関係ないようだ。

「陛下、お願いがあります」ナオミは跪いた。

「残念ながらここに聖杯はない」

ザンネンナガラ、ココニハ、セイハイハナイ。

そんな！　だったら自分は何のために危険を冒してここまでやってきたのか。

先手を打たれ、ナオミは何もいえずにいた。そんな絶望に暮れる少女をみて、エルフ王ジェラール二世は聖杯の意義について語りだした。

「そなたが求める聖杯はアリマタヤのヨセフの子孫によって、この地にもたらされた」

アリマタヤのヨセフは、新約聖書に登場するユダヤ人だ。

神の子を処刑した、ローマ帝国の第五代ユダヤ属州総督ピラトに願い出て、神の子の遺体をひきとって埋葬したことで知られる。神の子は彼によって墓（この時代は洞窟）に亜麻布で巻かれ、香料とともに葬られたそうだ。十字架のもとで神の子の血を受けたのが、

いわゆる聖遺物、のちに聖杯といわれるものだ。アリマタヤのヨセフは聖杯を持って、西都（ローマ）から英国（ブリテン）に渡り、その子孫は仏国（ブルターニュ）へと渡った。

数百年の時をへて、初代アーサー王の時代のことだった。

サー・ランスロットとかの一族の娘との間に、一人の男の子が誕生した。男の子は父と母ともに祝福されず、ひっそりと修道院に預けられ、育てられた。

「男の子の名はガラハッド」

エドモンドの話によれば、成人したガラハッドは父と再会を果たした。

父ランスロットの推薦もあって円卓の騎士となった彼は、初代アーサー王の命により、聖杯探索の旅にでることになる。そして母の実家カーボネック城で聖杯をみつけ、聖杯とともにその穢れなき魂は昇天したと伝えられていた。

「聖杯を手に入れるには二つの条件がある」

ジェラール二世の落ち着いた声が胸に響いてくる。

聖杯を得る肉体的な条件として、アリマタヤのヨセフの血に連なる人物であること、次に魂の条件として純潔、謙遜、忍耐を兼ね揃えた人物であることだ。

「アリマタヤのヨセフ・ジェラール二世…」

ナオミはその名を口にだした。そう、アリマタヤのヨセフの名を。

「陛下はもしかして…」

エルフ王は静かに微笑んだ。

「ガラハッドは聖杯とともに昇天したと伝えられている。ガラハッドは聖杯を守るがため、エルフになったのだ。我々、エルフ族がフランス人から神の使い、ときに守護天使といわれるのは知っておろう。それが私から数えて二十五代前の初代エルフ歴代君主アリマタヤのヨセフ・ガラハッド一世だ」

すなわちカーボネック城はその昔、エルフの聖なる城であった。

いや今もエルフの城といってもいいのかもしれない。ガラハッドは昇天して聖人になったのではなく、聖杯を守るがためにエルフの君主として、不死なる存在となったのだ。そして何らかの理由でその資格を失い、代替わりとともに永眠したのだ。

これがアグリのいう事実と真実の差かもしれない。

聖杯を手に入れる肉体的条件、それはアリマタヤのヨセフの血縁者であること、ナオミは唇をギュッと噛みしめた。これだけはどうしようもない。だからジェラール二世は聖杯はここにはないと、いや暗にお前には渡せないといったのだろう。

「そうではない、そなたにはその資格がある。ゆえにこの王宮に招かれたのだ」

その資格がある？　どういう意味だ？

「そなたの母上はアリマタヤのヨセフの血に連なる一族だ」

母アリス・ニトが？　一体どうして？

「聖杯はアリマタヤのヨセフの直系一族が所有している」

アリマタヤのヨセフの直系一族、エルフ歴代君主ではないことは残念ながら確かなようだ。

「陛下は、その直系一族の姓名をご存知ですか？」

ナオミは唯一の希望を、目の前の男の返事に託した。

「問われても聖杯の守護者がその名を語ることはない。許せ、ナオミ・ニト」

明言を避ける王にナオミは顔を床に落とし、瞳を静かに閉じた。

「だが聖杯の所有者はそなたの近くにあって、そうでない者。そなたが求めるならば、その者はそなたの求めに応じよう。すべては運

命の女神の御心にあらん」

それだけ分かれば十分だ。ナオミが俯いていた顔をあげたときだった。水晶体を通じて一体の人造人間が、テルとココに襲いかかっているのが垣間見えた。時計塔のように大きくはない。自分たちより一回り大きいぐらいだ。

そうか、テルとココは鏡のなかに入れなかったに違いない。今更ながらあのゴンッという音の意味がわかった――テルとココが鏡に頭をぶつけた音だ。

「あれはパパティーノが練成した人造人間だ、君はここにいたまえ」

ルーファスの言葉にナオミは首を横にふった。

「ここは聖なる神殿、この世で最も安全な場所だ。わざわざ死にいく理由もない」ルーファスの頬を引っ叩いてやろうか、ナオミは本気でそう思う。

それに聖杯が神聖の宮にないのであれば、ここに滞在する理由など何一つとない。身の安全のためにここに止まれだって？　冗談じゃない。仲間が死に瀕している姿を目の当たりにしながら、どうして傍観者でいられようか。今すぐ駆けつけねばならない。

「この世で最も安全な場所はここじゃないわ」

ナオミは怒りを抑えていった。

ではどこに？　とばかりにルーファスは顔をしかめた。

「この世で最も安全な場所は、困難と戦う『勇気』があるところよ」

踵を返す少女の姿にジェラール二世は運命の傍観者ではなく、運命の挑戦者になることを選んだか、とまた意味深に呟く。

「立ちはばかる困難に恐せず、それでも前に進むか」

金と緑の調和が美しい衣を纏ったエルフ歴代君主の問いかけに、ナオミは振り返らずに前を歩いていく。

「エルフは運命に挑む者を心から祝福する、そなたに諸天の御守護

があらんことを」

王がそういい終えると、ナオミは鏡の中へ姿を消した。

第１４章　犯す者、犯される者【１】

「テル、逃げて！」
ココは脇腹を押さえ、息絶えたえでいった。どうやら先ほどの人造人間の攻撃であばらを数本、折られたようだ。
「どこの世界に仲間を見捨てて、逃げるバカがいるんだよ」
テルは何度も電撃を打ち込むが、人造人間にはまったく効いていないようだ。しかも新型の人造人間らしい。尻尾が生えている。人でありながら、四つん這いになって自分たちに襲いかかってくるその姿は、あの獰猛なフェンリルと変わらない。

「お願いだ、殺してくれ。殺してくれ、殺してくれ！」
そんな人の声が聞こえたと思えば、「お前を喰いたい、喰わしてくれ」と呻き声が聞こえてくる。テルは化け物の尻尾の攻撃をまともにくらい、身体が壁にめりこんだ。
グホッ、と口から鮮血が地面に飛び散った。
「…ナ、ナオミ。どこにいるんだよ…」
テルは助けを求めるように呟いた。

人造人間は嬉しそうに尻尾を振り、「いや、こないで！」と後ずさりするココ。瞳には半ば涙が溢れている。赤い筋肉質の人造人間はそんな彼女にガッと飛び乗り、ココの両腕を地面に力のかぎり押さえつけた。
「い、いや！　やめて！　こないで！」
ココは両足を力のかぎりくの字にしている。
人造人間は「わが子を宿すがいい、わが慰めを受け入れろ！」と人の交尾のようにココの股を開かせようとした瞬間、人造人間は宙

に浮いた。ゴンッと壁によく頭をぶつけるとくるりと半回転し、四つん這いになって、警戒の体勢をとった。
「この変態野郎！　お前は私が相手をしてやる！」
ココは自分のまえに立ちはばかる者の顔をみて、笑顔になった。
「ナオミ、どこいっていたんだよ」
テルはへへへっと嬉しそうだ。テルとココ、二人の傷みつけられた姿をみて、ナオミは怒り心頭だ。拳をギュッと握りしめ、人造人間に剣をむけた。
「気の強い女は好きだ、ヒーヒーいわせてやる」
「くたばれ、人造人間！」とナオミが剣をむけた。

意外とこの化け物は強い。
人間の生命を擬似生命として生きる人造人間のわりには、まるで一個の性格をもっているかのようだ。ガッ、と人造人間の爪が地面に抉れるように突きささる。その衝撃波は楕円となって、周りに飛び散った。
ナオミの頬にピシッと飛び散った破片がかすめ、ツゥーッと血が流れおちた。
「お前は統一した？意志？を持っているのか」
頬の血を右手の甲で拭きとりながら、ナオミはいった。
「統一？　いやそうでもないな」
と人造人間がいうとすぐに、恐怖に脅える女の人の顔が現れ、「お願い、私はあなたの好きのようにしていいわ。この子は十四歳なの、まだ早いわ。勘弁してあげて」とか「イヤー！　やめてええ！　ロド、助けて！」と耳を劈くような声が聞こえる。

なんだ、この悲痛の叫びは！　何だか胸が抉られる感じがする。

「俺が強姦した女たちの叫び声だ、ククク」
この言葉にナオミは怒りのあまり唇をギュッと噛みしめ、額の青

筋が膨らんだ。
「ざっと二百人はいたっけな。最初は皆、嫌がるんだがな。最期は諦めて、されるがままになっていたなあ。途中で舌を噛んで死ぬオンナもいたがねえ、ククク」
人造人間は舐めまわすように、ナオミをギロッと見つめた。
「お前を喰うのが楽しみだ！」
ナオミは人造人間に剣をむけていった。
「お前に一つ訊きたいことがある。お前を人造人間から解放すれば、また同じ過ちを犯すつもりか？　人のうえに不幸を作って生きていくのか？」
少女の言葉に男は鼻で笑った。
「そうだ、といえばお前はどうする？　俺を殺すか？」
「殺しはしない、お前をこのままにする」
ナオミは静かにいった。
「残念ながら、俺はすでに死んでいる。ククク」
「死んでいるですって！」
男は半年前まで、自分はモン・サン・ミッシェルに収監されていたという。新しい囚人が自分の部屋に収監されることになったので男の死刑が執行されたとか。
「エドガー・ボブスリーっていう大詐欺師の入獄と入れ替えにな」
そういうことか。
「兄弟そろってモン・サン・ミッシェルなんざ、ドワーフもなかなかやる。サンチョ・ボブスリーなんざ、神経質なヤツだったんだがな。アイツが脱獄したって聞いた日には、俺たち囚人は拍手喝采だったんだぜ。まあ、殺されたのは残念だがな」
ガッ！　とナオミを狙った巨大な爪が地面に突き刺さった。
動きは見切ったと思いきや、人造人間の尻尾が少女の腹にドガッと食いこみ、そのまま地面に叩き落とされ、グホッとナオミは地面に血を吐いた。

「あっ？　どうやって人造人間になったってか？　パパティーノが冥界から俺を連れ戻したからじゃねえか」と男は冷淡に笑った。

ナオミは男の言葉に混乱を覚えた。果たして異なる魂と肉体を融合することなんて、できるのだろうか。

「そういえばサンチョ・ボブスリーも俺と同じようなもんだったな。アイツは自分の魂と肉体が異なるって、いつもほざいていた」

瞬間、ナオミは男の言葉を聞いて、あの言葉を思い出した。

「私は生きている、安心してくれ」

そしてさらにこうもいっていた気がする。

「君に嘘をついていたことを許してほしい。私はサンチョ・ボブスリーではない。君の身の安全のために今は本当の名はいえない。落ち着いたら君に真実を告げにいく」

ナオミは凛として悟った。

自分に贈られてきた、あのバラの花はサンチョ・ボブスリーの肉体のなかにはいっていた、サンチョ・ボブスリーでない者が贈ってきたものなんだ。なんだか胸のなかに痞えていたものがとれた気がする。では今、彼は魂だけの存在になっているのだろうか。それは分からない。ただ彼が生きていることは確かなようだ。

ナオミの剣に勢いよく炎が宿った。

「…お前を二度殺すことになるが、許してくれ…」

第１５章　犯す者、犯される者【２】

第１５章

人造人間（ホムンクルス）は炎に包まれながらも「俺はまだ死ねない。多くの女を抱きたらねえ、女の悲鳴が、喘ぎ声が聞きたりねえ」と炎の中で唸ると、憎しみを倍増させたのか、人造人間の身体は炎に包まれながらも、一段階、いや二段階と身体を巨大化させた。

もはや人間の身体を維持はしていない。

赤い筋肉質の巨大な尻尾、ワニのような長くて太い胴体に顔、頭には鶏冠とともに角さえ生えているではないか。巨大な牙に滴り落ちる酸が混じった涎。吠えれば喉の奥まで鋭い牙が生えている。これはまるで神話にでてくる、あの生き物にそっくりだ。

「あれはドラゴンの姿にそっくりだよ」

テルが顔を青ざめていった。

そのとおりだ、憎しみとともに身体を変化させた人造人間。パパティーノの執事、カトニグレが城に「新型を徘徊させている」といったのはこういうことか。

人造人間はナオミの顔をみると、グアアアッーと太い声で吠えた。もはや人間の心を忘れ、本能と憎しみだけの巨大な畜生、いや修羅だ。男は犬のように身体をブルブルと身震いさせれば、炎は瞬時に消えてなくなった。

ドンッ！　巨大な尻尾の一撃は部屋の壁を凄まじく抉った。

砂煙がナオミたちの姿を消してくれる。が、煙がなくなればナオミたちが魔法の鏡にへばりついているのが目についたのか、ドラゴン化した男はワニのような口で彼女たちに襲いかかった。

ガッ、ガッ！　と耳を澄ませば、歯軋りする音しか聞こえてこない。ナオミたちがすぐ目の前にいるにかかわらず、喰えないことにドラゴンは必死だ。懸命に下顎と上顎を動かすも、彼女たちを牙で噛み砕くことができない。紫色の舌でナオミたちを舐めてようやく男は悟った。

これは鏡に映った姿、本体は自分の後ろにいる、と！

男が唸り声ともに振り返ったその瞬間、「それ、逃げろ！」と待ってましたとばかりに、ナオミたちは奥の廊下へと全速力で、駆け出した。

裏をかかれた人造人間は怒り狂い、よだれをたらしながら、ナオミたちを追いかける。突然止まれないらしく、ナオミが右にカクッと曲がれば、ドラゴンは正面の壁にドシンッと身体をぶつけて、ようやく右に曲がることができる。

数分後、当然といえば当然なのだが、十字路の廊下のところで男はナオミたちの姿を見失ったようだ。肝心のナオミといえば、目についた赤い扉の部屋に飛び込み、静かに息を止めていた。ドラゴンが扉の前を通り過ぎたときは、もうすぐで心臓が飛びでそうになったほどだ。

「…いっちゃったみたいだよ…」

テルは扉の隙間から覗きながらいった。

「…待って、テル。誰か来るわ」

扉の隙間から見えるのはパパティーノたちの姿だ。それもそうだろう、あんな大きな音をたてていたんだ。気づかないほうがどうかしている。

ドラゴン化した人造人間は、もはや敵味方の判断がつかないようだ。怒り心頭のドラゴンは大口を開けて、よだれとともにパパティ

ーノに襲いかかった。ドラゴンが男を喰らったと思った瞬間、パパティーノはドラゴンの喉元を右手でおさえると、左手で勢いよくズボッと喉元に手をやった。

「欲望に執着するあまり我を失ったか」

その言葉とともに左手から引っ張り出されたのは人造人間の魂、擬似生命ともいえる男だった。パパティーノは「フンッ、悪魔契約を解いてやる。本来なら冥界で何百年も懺悔の日々を送り、苦しんでもらうのだがな」と男を地面に投げ捨て、一切の迷いをみせずに男の心臓を貫いた。

人造人間の擬似生命体だった男は「ようやく死ねる、ありがとう」と感謝の言葉を述べると、うっすらと消えてなくなった。同時にドサッ、と魂を失ったドラゴンの姿をした肉体は床に倒れた。

パパティーノは顔をあげて、カトニグレに「敵が城に忍び込んでいるようだ。おそらく私の命を狙っている殺し屋だろう」と警戒を怠るなと声を荒げた。

「ナオミ、どうする？」

テルは出るにでれない状況に困惑しているようだ。

「どうするもこうするもないじゃろう。少し休んで行きたまえ」

ナオミのかわりにテルに返事をしたのは、元気のいい老人の声だった。彼女たちが振り返れば、そこには見覚えのある老人が微笑んでいた。

銀の顎鬚がモップのように垂れている、その老人の名は――。

「トモロヲ・ブドリ！」

老人は元気なナオミたちの姿をみて、嬉しそうだ。

ナオミの声に反応したのか、J・パパティーノがコツ、コツッー

と靴音を響かせて、赤い扉へやってくる。間違いなく自分たちの部屋へ近づいてきている。万事休すだ。サンチョ・ボブスリーと呼ばれていた、あの人を冥界に引きずりこんだほどだ。あの男の強さと邪悪さは半端ない、おそらくアッパータウンのなかで筆頭格といえるだろう。

「落ち着きなさい、扉を閉めれば事足りる」

トモロヲ・ブドリの落ち着いた声は、恐怖で混乱していたナオミたちの心を変に静めてくれる。

ナオミがパタンッと扉を閉めれば、老人はぶつぶつと呪文を唱えその扉に書かれていたかけ札「カーボネック城の扉」の文字は瞬時に消えた。

十五秒、二十秒、二十五秒たっても、パパティーノがやってこない。どうかしたんだろうか？　ジョジョは「きっとお腹が痛くなって、引き返したんだよ」というが当てにはならない。

そんなナオミたちにブドリは「そろそろまわりを見る余裕がでてきたんじゃないかね？」と、暗にその場所を彼女たちに理解させた。

まわりを見回せば、そこはこじんまりとした廊下だった。

赤絨毯が敷いている廊下、古びた幽霊城のなかにこんなこざっぱりした、優美な回廊があるなんて信じられない。だけどナオミとテル、ジョジョはこの廊下に見覚えがあった。

「ねえ、ナオミ。ここってさあ」

「…うん、ダ・カーポ先生の屋敷だわ…」

窓からみえる、この風景に二人と一匹はなぜか見覚えがある。

あそこにあるとんがり屋根の教会、歴史を感じさせる中世の旧市街、美しい家々が並ぶフレロン通り……そう、ここはカンペールのダ・カーポの屋敷だ。古ぼけた赤い扉のかけ札、すでに文字は消えているが、確かカーボネック城とそこには書かれていた気がする。

隣のかけ札には「バラントンの泉、エディンバラ邸」とあった。

「『開かずの扉』っていうの」

ナオミはダ・カーポが復活させた古代魔法をココは説明した。

そういえば一年前、ダ・カーポに呼ばれ、クリスマスのツリーの飾り付けにいったときだった。この扉からゴーストに服を引っ張られ、情けないことに悲鳴をあげたのを、にわかにナオミは思い出した。今、思えばあれはハナコ・ゴーストだった気も否めない。そして今日はそのクリスマスイヴだ。

少女は運命の皮肉をひそかに感じた。

そうか、トモロヲ・ブドリはアッパータウンを追放されたのち、孫娘ダ・カーポのこの屋敷に住んでいたのか。頃合を見計らって老人が「守護聖人イヴの癒し」とナオミ、テル、ココの頬を触っていけば、人造人間の戦いで傷ついていた、彼らの傷はみるみるうちに癒されていく。

「で、君たちはカーボネック城に季節外れの肝試しにきたのかね？」

テルとココは罰せられるかもしれない、と嘘を吐くかどうか顔を見合わせていたものの、ナオミはガラハッドの聖杯を探しにきたと正直に打ち明けた。そうこの人に嘘は通用しない。その心を見通す青い瞳、いや眼力によってすぐに見破られてしまう。

「ふむ、騎士メダル五十枚減数は確定ーーーー」

その言葉にナオミたちは顔をしかめた。ルールを破ったのだから仕方がない。

「といいたいところじゃが今、わしは領主の立場ではない。よって公平に騎士候補生を評価せずともよい。わしは君たちの仲間を救う勇気に騎士メダル三十枚を授けよう。ユトレヒトにはそう申し付けておく」

トモロヲ・ブドリはゆっくりと頷いてみせた。

「君たちを送っていこう。で、どこに送っていけばいいのかね？」
「『剣と盾』です」
ナオミはトモロヲ・ブドリの伯爵失脚の原因を招いた、『剣と盾』での誘拐事件に想いを馳せた。
運命の女神はなんて残酷なんだ。そんな彼女に老人は「気にとめる必要はない」と囁きかけ、「カーボネック城の扉」と書いてあったかけ札にむかって、ぶつぶつとまた呪文を唱えた。するとすぐに神聖文字で「剣と盾の扉」という文字が浮かび上がった。
「さあ、おかえり」
トモロヲ・ブドリはそっと扉を開けた。
扉の奥のカウンター先には、ドラゴンチップスが山積みされたかごが見えた。

第１６章　死者との会話【１】

第１６章

翌日、つまりクリスマスウィーク第二日目。
ナオミたちはライアンに聖杯探求の旅を洗いざらい話した。臆病者と思っていたマイケルが裏切ったこと、悪魔教の洞窟礼拝堂でアグリに会ったこと、岩巨人（トロル）に殺されかけたところをエルフ族に助けられ、殺し屋ロエスレル・ドラゴンヌに命をつけ狙われていたことなどだ。
「あの森に人間が住んでいるなんて、びっくりだよ」
聖女エディンバラのことだろう。ライアンは彼女から聞かされた悲しい夫婦のこと、くそったれ坊やのこと、少年がハナコと付き合っていることに目を丸くしていた。
「サナム伯爵家っていったら――」
それ以上、ライアンは何も語ろうとしないので、テルが彼の脇腹を殴った。
「テル！　生徒会長には騎士メダルを減数させる、特別権限があることを忘れるなよ」
ライアンは「ウォ・アスパラガス！　騎士メダル三枚減数！」と呻けば、テルの舌打ちが聞こえたのはいうまでもない。
「…辺境伯はサナム伯爵家の出身って、僕は聞いたよ」とライアン。
なるほど。では迷いの森の辺境伯モンテカルロは名門出身というわけか。
「それにしてもパパティーノのヤツは、あの城で人造人間の培養を

していたのか」

しかも人造人間は魂と肉体を融合させた新型だ。

さらにこの新型はサンチョ・ボブスリーについて、気になることをいっていた。ドラゴンヌに殺されたボブスリーも自分の魂と肉体が異なるといっていたとか。

「ナオミ、彼は殺されたんだよ！」

テルがナオミに現実を受け入れるんだ、と唸った。

「ううん、違うのよ。テル、きっとあの人は生きているわ」

ナオミは胸にしまっていた秘密、あの青いバラの花言葉を皆に話した。

「じゃあ、その人は今、『魂』だけの存在になっているわけか」

ライアンは鳥肌がたってきたのがわかった。

それは恐ろしさのせいもあったが、ハナコが近くにいたからだ。

ゴーストが一人近くにいるだけで、周囲の温度は五度は低くなる。

彼女はじっーとテルを見つめていた。何か言いたげだったが、ハナコは何もいわずに立ち去った。

そんな意味深な少女をみて、テルは思いついたように「魂だけの存在って、つまりゴーストってことじゃん」とお茶目にいった。そうかもしれない。もしかして今、彼は肉体を失い、ゴーストになっているのかもしれない。

エルフの神聖の宮に聖杯がなかったことはさておき、初代エルフ歴代君主がガラハッドであり、彼はアリマタヤのヨセフの子孫であり、何よりもナオミの母親アリスがそのアリマタヤのヨセフの血に連なる一族であることは皆が驚いた。

当然、自分の身体にはその血が流れている。

「君はガラハッド地区に配属されるべきだったのかもしれない」

ライアンの呟きにすかさず、テルがまた脇腹を殴った。

「ライアン！　ナオミの耳はエルフのようにとがっているか？」

生徒会長は「ごめん、謝るよ」とナオミに頭を下げた。

「気にしないで、でもトモロヲ・ブドリが無事で何よりだわ」

ダ・カーポ邸とカーボネック城が『開かずの扉』でつながっていたことは、ともかくとして彼の居場所をつかめただけでも、今回の冒険での功績は大きい。確かに聖杯はカーボネック聖杯城にはなかったが、実在することはわかった。

それにエルフ王ジェラール二世の意味深なあの言葉が、ナオミの脳裏からこびりついて離れない、

そうあの言葉「聖杯の所有者はそなたの近くにあって、そうでない者。そなたが求めるならば、その者はそなたの求めに応じよう」だ。ジョジョはエルフの戯言だよ、というがジョジョの戯言よりは当てになるだろう。

クリスマスウィーク第三日目。

ホーエンハイムのおかげで、ロロの体調は少しづつ改善にむかっていった。クリスマスの前日にはナオミやテル、ココと領主館広場で雪合戦ができるほど元気になった。

ただマイケルは敵味方など関係なく、あの事件を根にもっているテルから、やたら猛烈な雪玉が飛んでくるので、ヒーヒー息をはずませて逃げまどっていた。

ドカッ、テルの雪玉が誰かに当たった。

「君たち、あいかわらず元気だね？」

声の主はピックル・タナカだ。

するとナオミたちは「泥棒猫の一味！」といって、雪玉をなげつけては逃げだした。タナカは首をよこにかしげて、すたすたとその場を立ち去った。

その日の夜、ナオミたちはアッパータウン牧場に招かれた。

「ようこそ、おいでになりました」とデビット・テムズが紳士らしく挨拶した。

一同はクリスマスの前夜祭を大いに楽しんだ。

大きな樅の木のまわりに円を描くように置かれた円卓、そこには丸まると太った七面鳥香草焼きのロースト数百羽、三日間コトコト煮込んだビーフシチュー、大皿にのったチキンのトマト煮、サーモンステーキ、骨つきラムのソテー香草風味、聖杯のような大きな器にもられたカボチャポタージュ、マグロのカルパッチョ、ジャガイモをすりつぶした色とりどりのゆでポテトなどがあった。

どれもこれも美味しかった、頬っぺたが落ちそうなほどだ。とくに驚いたのはテーブルに一皿づつあるローストチキンだ、いざ銀のナイフでお腹を切りさけば、騎士メダルがいくつかでてきた。マイケルはそんなことなど知らずに食べたため、奥歯が一本かけてしまい、悲鳴をあげた。

テーブルにはクラッカーが置いてあり、ナオミがロロと一緒にクラッカーの紐をひっぱると、三十匹もの猟犬が鳴いている音をたてた。『探求のけもの』というおかしな生き物で、かつてアーサー王の盟友が追っていた生き物。

そこで彼についた異名が「吠える怪獣の騎士」だというのは、エドモンド先生のところで学んだ雑学だ。ジョジョはその声にびっくりして、円卓の下に隠れてしまった。

上座のテーブルではクーデンホーフやピックル・タナカ、ロエスレル・ドラゴンヌたちが愉快そうにクリスマスを楽しんでいた。音楽隊の演奏はとても素晴らしく、トランペットから飛びだしたハトをタナカの黒カラスが追いかけまわしていた。

最後にスイーツが運ばれてきた。

プラム入りのブランデーケーキや樹の形をノエルケーキ、黒イチゴのクラフティー、ミンスミートパイ、伯爵トマトのカラメルゼ、ココアバケットのフルーツのせ、八段重ねのクリスマスツリーケーキたち。どれもこれも美味しかったが、プラム入りのブランデーケ

ーキは甘くはなく、むしろ塩っぱかった。このケーキを食べた人々は「うわあ、びっくりケーキだ」と悲鳴をあげ、「これは誰かのクリスマスの悪戯だな」と皆はどっと笑い声をあげた。

「きっとこれ、テルが作ったものだわ」

ナオミの囁きにロロ、ココ、マイケルは頷いた。

マイケルはローストチキンに騎士メダルを忍ばせたのは、テルに違いないと確信していた。噂のテルといえば、不幸なことに仕事だった。毎年恒例とあって、アッパータウン牧場の小さな台所で、ブルトンホテルのシェフたちとともに、クリスマス料理を手伝うので必死だ。

領　主館のカリヨンの鐘が午後十時の鐘を鳴らした頃、ナオミたちはお土産にシュトーレンという、フルーツケーキをもらうと皆と別れた。ロロと一緒に古き洋館大通りへともどり、安眠帽子をかぶると自分の部屋へと駆け上がった。

第17章　死者との会話【2】

第17章

クリスマスウィーク第四日目。
翌朝、目を覚ませば扉の前にはプレゼントの山という山だった。
ナオミはわっせわっせと贈り物を掻き分けて、外にはいでた。すると皆、赤い帽子をかぶっており、食卓はみたことのないごちそうでいっぱいだった。（牧場で催された前夜祭のごちそうにはさすがに負けるが）。アリサ夫人はナオミの顔をみるやいなや、「メリー・クリスマス！」と言葉を交わした。
「メリー・クリスマス」
ナオミはロロにも言葉を返した。
「アリサおばさん。私の部屋にたくさんの贈り物があるわ、どうしよう」
「クリスマスは贈り物をする日だからね」
「誰への贈り物？」
「あなたへのに決まっているでしょ！　もーう、おとぼけ屋さんなんだから」

朝食が終わると、ナオミは見習部屋にもどり、クリスマスの贈り物をドキドキしながら開けてみた。
一番最初の箱は骨に赤いリボンがついていた。これは誰からの贈り物なのかは分かった、たぶんジョジョだ。知らんぷりをしているが間違いない。
次の贈り物は野ネズミの死骸だった、黒い血がついたクリスマスカードに目をやれば、ハナコ・ゴーストと書いてあった。ティソ夫婦からの贈り物は温かそうな手編みの赤いマフラーだ。ナオミはそっとマフラーに顔をうずめた、なんだか優しい香りがした。

（…お母さんの香りってこんないいかおりなのかな…）

その次はうすっぺらい封筒だった。

ドキマギして開けてみれば、いやはやハレルヤ少年からで「死ね」というクリスマスカードだった。ナオミはすぐにビリビリと破り捨てた。ライアンからの贈り物は、素敵なリボンだ。ジャンからの贈り物はよだれベトベトのおしゃぶり。

これが最後の贈り物らしい。手に持ってみると、何だかずっしりと重たい。ビリビリと包み紙を破ってみると、黒い布袋に入れられたジャラジャラと音がなるもの、最初はお金だと思ったがそうではなかった。小袋にいれられていたのは黒金貨五枚だった。あとでロロに聞いてみたら魔界の通貨だという。

小袋にはいっていた手紙には、こう書いてあった。

メリー・クリスマス、ナオミ。

この黒金貨はその昔、カーボネック城で君のお父さんたちと冒険したとき、偶然に発見したものだ。もうずいぶんといたずらに使ってしまったが、残りを君に譲る。君なら間違った使いかたをしないと信じている。

君の後見人より

手紙には名前が書いていなかった。

ナオミは不思議な感じがした。ただ確かなことは黒金貨の贈り主は、ナオミの両親の友だちだということだ。コツコツと誰かが階段をあがってきたので、とっさに黒金貨を小袋にいれて隠した。これは危険なものだと密かに思ったからだ。

階段をあがってきたのはアリサ夫人だった。

「気にいってくれた？」
「はい。あ、あの…その嬉しい…」
アリサ夫人はナオミのマフラーを巻き直してやった。
「…私も皆に贈り物したいんだけど、どうやったらいいのか…」
モゴモゴいうナオミにアリサ夫人は人さし指をたてて、「皆、あなたから贈り物をもらったわ」とちょんと少女の鼻をおした。ナオミは鼻水をずるとたらしていたので、アリサ夫人はちょっと顔をしかめた。
「あなたがきてね、私は感謝してもしきれないの。あなたがきてくれたおかげでピーターもライアンも、私もまえより元気になったんだから。何よりの贈り物はナオミっていうとっても素直な娘ができたってことかしら。あなたはもう私のかわいい娘なのよ」
そういうとアリサ夫人はナオミをそっと抱きしめた。そのときナオミは（これがお母さんっていうものなのかな）とひそかに思い、にわかに「…お母さん…」と小声で呟いた。

今年のクリスマスは有意義な日だった。
町は銀世界、商店街からあらゆるすべてがクリスマスの緑と赤で飾られ、とても神聖な気がした。雪合戦も雪だるまも申しぶんないほど楽しかった。夕食はとても優雅だった。皆がスヤスヤと寝息をたて始めた頃、ナオミはなかなか寝つけなかった。
「ねえ、ジョジョ。黒金貨のことどう思う？」
「まだ気にしているの？」
「だってさあ、気になるんだもん」
「僕が思うにはアレはミスリル金貨を真っ黒に塗っただけだよ。たぶん質の悪い、どっかの悪童の仕業だよ。あんまり真剣に考えないほうがいいよ。だいたい名前を書かないってのが悪戯の証拠じゃんかよ」とジョジョは小さな欠伸をした。

そもそも自分には後見人などいない。親代わりなら生意気な黒犬

が一匹いるけど。ナオミはうーんと唸ると、赤いマフラーをギュッと抱きしめた。

マフラーの甘い香り、いや黒金貨の件が重くのしかかっていて、少女はなかなか寝付けない。やはり気になる、布袋から黒金貨を取りだして、しげしげとかざしてみた。明らかにミスリル貨幣ではない。これは黒金貨、魔界の通貨だ。

「…『君なら間違った使いかたをしないと信じている』っか…」

ナオミは独りごとを呟いた。

そのとき何かが脳裏をかすめた。確かピックル・タナカが死者との会話をするのには、魔界の通貨が必要だといっていた。もしかして、もしかしてナオミはドキドキと高鳴る胸をおさえながら、（これでお母さんとお父さんと話ができるかも）と思った。

『死者との会話』の召喚術ならちゃんと覚えているし、羊皮紙ノートに書いてある。

ナオミは羊皮紙のノートをパラパラッとめくってみた。

えー、何々。まず公衆電話に魔界の通貨一枚を入れて、自分の電話石にかける。次に自分で自分の電話石に「〇〇〇、〇〇〇。おいでください」と呼びだしたい人の名前を二回いい、さらに「〇〇〇、〇〇〇。いらっしゃったらお返事ください」といって電話石を切る。

このとき忘れず自分の電話石の電源も切る。それから一時間以内に電源を切った電話石に着信音がなる、呼びだした人からだ。

その人は「今どこどこのどこにいるよ」といって、その場所がだんだんと近づいてくる。やがて自分のところにやってきて、最後に「今、君の後ろにいるよ…」といってくるから、そのとき一つだけ質問をすれば、その人が知っている過去のことを答えてくれる。

ただ注意しなければならないことがいくつかある。その人を一目

見ようと後ろをふり返ったり、とっさに質問できなかったら、悪魔バフォメットとの制約によって冥界に連れていかれるとか。そう黒魔法は悪魔の邪悪な力を利用する代価契約である。

これこそこの黒金貨の正しい使い方だ、ナオミは高鳴る心臓をおさえ、何回かふーっとため息をついた。また『死者との会話』の注意事項は質問に答えられないことか、後ろをふり返ればあの世に連れていかれるとのことだ、質問なら山ほどある。

冥界に連れて行かれる――ナオミは悪魔バフォメットの契約によって、冥界に引きずりこまれたサンチョ・ボブスリーの魂を思いだした。両親の声を聞いて、後ろを振りむかない自信はない――そうだ、もしものためにジョジョを連れていこう。

黒魔法は禁じられた魔法だ、夜中にひっそりとやるしかない。電話石は親方のものを今夜、そっと借りていこう。ナオミが知っている公衆電話といえば、領主館前のあそこしか思い出せない。そしてそれは即実行に移さなければならない。なぜなら決意から生まれた行動は、一時間遅れれば一日延びる。一日延びれば三日延び、三日延びれば一週間延び、一週間延びれば実行にうつすことはもうない。それが人というものなのだ。

第１８章　死者との会話【３】

第１８章

「僕は絶対にいかないよ」と嫌がるジョジョを無理矢理に連れて、雪がしんしんと降りつもる領主館広場へとでた。ギュッ、ギュッという足音は早足になり、やがては急ぎ足になっていった。

数十分後、ナオミはブルトンホテル大通りにある、赤い電話ボックスに辿りつくと大きく深呼吸をして、ゼーゼーとはずませた息を整えた。念のためナオミはまわりをキョロキョロとみまわした。確かに誰もいない。

「いい、ちゃんと後ろを振りむきそうになったら吠えてよ」

「うん」ジョジョはめんどくさそうにいった。

心臓が高鳴るのがわかる。ときめく胸を抑え、ナオミは赤い公衆電話から自分の携帯電話にかけた。

「ニト夫妻、ニト夫妻、おいでください」といい、さらに「ニト夫妻、ニト夫妻、いらっしゃったらお返事ください」といって、電話を静かにきると、自分の携帯電話の電源もためらながらも静かにきった。電話ボックスからでてまもなく、ピリピリー、ピリピリーッと電話が鳴った。

「…ど、どうしよう。ジョジョ…」

ナオミは脅えていった。

「『どうしよう』ってでてみたら、いいじゃんか」

ジョジョは屈託ない。

「…そ、そ、そうね。そうよね…」

ナオミは恐怖か、喜びかは分からないが震える手で電話をおそるおそるとった。

「…は、はい。ナオミですけど」なぜかどもっていた。
「やっぱりナオミからだよ、アリス」
「まあ、どうして？」
聞きおぼえのある男の人と女の人の声、瞳の記憶にあったあの声だ。間違いない、声の主はナオミの両親ニト夫妻だ。二人はとても楽しそうだった。
「…あ、あの黒金貨を使ってお電話したの…」
「さすが僕らの娘だな」
「ええ、本当ね」
じわっと少女の瞳に涙が浮かんだ。
「あの聞きたいことがあるんです、お父さんとお母さんに」
「そうか、では今から君のところにいくよ」というと電話は切れた。

再び電話が鳴れば「今、キング・アーサー地区の古き洋館大通りだ」というと電話はすぐに切れてしまい、数分後に電話がかかってきたら「今、ブルトンホテル大通りだ」というとすぐに電話がきれた。
ピリピリリー、ピリピリーッと三回目の携帯電話が鳴った。
「今、あなたの後ろにいるわ、ナオミ」とアリスの優しい声がした。
ナオミは靴屋のウインドーの前に立った。ナオミはガラスをとおして、後ろに立っている自分の両親を見つめた。生まれて初めて彼女は、じつの父親と母親と会話ができ、ガラス越しに二人の姿を見ることができた。残念なことに両親の顔はぼけていて、いまいちよく分からない。
感動はいくばかりか、言葉で表現することは難しい。

「…ずっと、ずっと会いたかったんだから…」
「ごめんなさい」
アリスは謝ると、いきなりナオミを抱きしめた。
「…お、お母さんに会いたかったんだから。ずっと会いたかったん

だから…」

ナオミは喜びと悲しみがいり混じり、胸がつっかえてこれ以上は言葉にならない。ただコクッと頷くだけが精一杯だ。思わず後ろを振りむこうとしたが、ジョジョが唸り声をあげてくれたので、少女はふと我に返った。

「…あのね、また会える？」

「ナオミが電話をしてくれたらね」

誰かが酔っぱらいながらこっちに歩いてきた。

「俺さーまのご先祖はジャック！　ジャック！　ジャック・オー・ランタン！」

人の気配を感じるやいなや、二人はすっと姿を消した。どのくらいの時間がたっただろうか、十五分程度のようで一時間のような気もする。酔っぱらいはバーンズ・マルボロ親方だった。ナオミはふーっと大きくため息をして、マルボロ親方とすれ違った。

「ジョジョ、ありがとね」

「おやすい御用だよ」ジョジョはとても疲れた顔をしていた。

クリスマスウィーク第五日目の朝、テルがとてもぷりぷりしていった。

「君だけずるいな。僕もナオミの両親に会いたかったよ」

「今夜もいくのか？」

ロロは心配そうに尋ねた。

「…うん、またお母さんとお父さんに会いたいの。もしよかったら今夜、二人ともブルトンホテル大通りの赤い電話ボックスで待ってて。集合時間は午後十時ね」

「あらっ、冒険の話？」

アリサ夫人が物置部屋にやってきた。

「ロロ。あなた、病み上がりなんだから、冒険はほどほどにね」

ロロは顔を赤らめてコクッと頷いた。あの強気のロロもアリサ夫人にはめっきり弱いとみえる。

たぶんナオミが抱いているように、少年もアリサ夫人には母親の何かを感じているのかもしれない。でもテルは「僕の母ちゃんもあんなに美人だったらなあ」とぼやいていた。

第１９章　死者との会話【４】

第１９章

約束の場所と集合時間。ナオミはテルとロロに一枚づつ、黒金貨を手渡した。テルはなかなか黒金貨を入れようとしないので、少年の順番は一番最後になってしまった。
「じゃあ、テルは一番最後ね」
「だって死者と話をするんだろ？　怖いじゃんかよ」とテル。

まず最初に黒金貨を入れたのはナオミだ。彼女は昨日と同じように自分の両親を呼びだした。お父さんとお母さんの声を聞いて、ナオミはとても嬉しくなった。靴屋のウインドーには両親の姿がぼやけて見えた。

次はロロだった。彼も自分の両親を呼びだすと誰もが思っていたが、しかし少年が呼びだしたのはハナコだった。するとハナコは「あらっ、あんただったの」とつまんなさそうにいった。
「それで何かようかしら？」無愛想にいった。
「ひとつ教えてほしい。お前が死んだとき、正確には九年前のコ・クーボの悲劇を知りたいんだ」

するとたちまちハナコの顔つきがかわった。
どうやらゴーストにとって、自分が絶命したときのことを話すことは、誰かを脅かしたことの二番目に嬉しいことらしい。少女は声を嗄らして、とても恐ろしそうにいった。
「あのときはね、本当に怖かったわ」とハナコのしゃがれた声。
「私はピエモンテ・コ・クーボのところのだったの。あの人のお手伝いさんとしてだけどね。そんなある日、屋敷で鶏の声が聞こえたの。たぶんコックがクリスマスのローストチキン用に飼っていた鶏

だったと思うわ。でもね、その鶏は特殊変異ってヤツで、尻尾がヘビなのよね。もーう、気持ち悪いのなんのって一一一あんなのローストチキンにするなんて、ゾッとしたわ」

「それでその鶏、お前はローストチキンにしたのか？」

「まさか、そのまえに私、死んじゃったんですもの。コックのジョバンニの命令でね、その鶏を捕まえようとしたときに一一一コロッて逝っちゃったの」

ハナコは胸をはり、ものすごく誇らしげにいった。

「どうやって、お前は死んだんだ？」

「『少女が鶏に睨まれてショック死！』って、当時の毎日ブルトン新聞を騒がしたわ」

ロロは顔をしかめた、ハナコの話が信じられないのだ。

「本当よ。私、鶏に睨まれたあと、体全体が石になっちゃったの。ピシッと固まちゃったとき、ゆらりと石になった自分の亡骸を見ていたんですもの。さすがに『うわあ、私、死んじゃうんだ』と思ったの」

で、気がついたらゴーストになっていたというのだ。その彼女の亡骸はこの町の美術展ではものすごく絶賛されたそうだ。表情が真に迫っているとかで。

ハナコはえっへんと得意げにポーズをとってみせた。

「ベリー・グッドウィルっていう人がね。私の身体を『真に迫った少女の顔』っていう題名の彫刻で美術展に出品したの。もちろんグッドウィルは、あの彫刻が本物の私の身体ってことは知らないんだけどね」と鼻を鳴らした。

「今、その体はどこにあるんだ？」

「美術館広場にかざってあるでしょ！　アレがそうよ」

それだけいうと満足げにハナコはスッと消えてしまった。

「お父さんとお母さんと話をしなくてよかったの？」
ナオミは怪訝そうに訊いた。
「ああ、いいんだ」
「でもわざわざ黒金貨を使うことなんて…」
ナオミのするどい質問にロロは静かに頷いた。
どんなに脅そうとも、今までのハナコはあっかんべーしかしなかったそうだ。こうでもしなければ、ゴーストが本音を語ることはまずない。その昔、ゴーストが秘密の守り人だった由縁はそこにあるのだろう。

次はテルの番だった。
少年が呼びだしたのはお祖父さんだった。少年のお祖父さんは呼びだされて、とてもぷりぷりしていた。
「これは黒魔術、いつのまにお前は悪魔崇拝者になったんじゃ！ウォ・アボカド家の家名に泥をぬりおって。わしが生きておったら、尻たたき百回じゃぞ！」
テルのお祖父さんは少年を一喝した。
テルは「…だ、だってさあ…」としどろもどろだった。
「死人と会話するなど許されんことじゃ、死者を冒涜してはいかん」
それだけいうとテルのお祖父さんはスッと姿を消した。
「プレーリードッグ似のくそ爺め！」
テルは唸った。
「でもテル、お祖父さんとお話できてよかったじゃない」
「話さないほうがよかったよ」
テルは舌打ちして、顔をくもらせた。

クリスマスウィーク第六日目の早朝、ナオミたちは寝不足のあまり頭だけでなく、心もぼーっとしていた。
「君たち、夜更かしはだめだぞ」ライアンが三人にいった。

「今日で終わりにするわ」
ナオミの手元にはまだあと一枚、黒金貨が残っていた。
「なあ、ナオミ。また今夜もやるのかい？」
テルがヒソヒソ声でいった。
当然よ、と少女は眠たそうに頷いた。
「その黒金貨、捨てちゃいなよ」
「いやよ。これがなくちゃ、お母さんとお父さんに会えないもの」
「それって死者を冒涜する行為だよ、やめたほうがいい」
「だったらハナコはどうなるの？」
ナオミはテルにムッとしてテルに訊いた。
「あいつは死にきれなかったヤツだ、半死にってヤツだ。でも君のご両親はゴーストなんかじゃない。もう埋葬されて、立派に死んだんだぞ」
「それでも会いたいの！」

ナオミの両親に会いたいという気持ちは誰にも止められない。
三日目の夜、ナオミは昨夜と同じように両親の魂を呼びだした。
だが変なことに電話石は鳴らなかった。
「めんどくさくなったんじゃないの？」とジョジョ。
「そんなことないもん」といったそのときだった。ピリピリー、ピリピリーッと待ちにまった、電話石の音が鳴った。ナオミはむさぼるように電話をとった。
「…あの、またかけちゃった…」
「ふむ、これで三回目らしいね、ナオミ・ニト」
少女は飛びあがるばかりに驚いた。

声の主はお父さんとお母さんではなく、年老いた男の人の声だった。少女が間違い電話じゃないのかと問いただせば、老人は「間違えたのは君だよ」と静かにいった。
「最後の数字が間違えたんじゃよ。電話をとってみればお前さんが

『死者との会話』の召喚呪文を唱えておった。相手はニト夫妻、そこでわしはピンッときた、電話をかけてきたのは君だろうとね。わしはすぐに電源をきり、夫妻からかかってくるのを待って、ちょっとばかり話をさせてもらった。そして夫妻はね、もう二度と君と話をしないと誓ってくれたよ」

「そんなあ、ひどい…」

ナオミは今にも泣きだしそうだった。

「君だけじゃない、子どもを失った母親、親を失った子ども、恋人を失った者。皆、声を聞きたいばかりにこの『死者との会話』の虜になった。死んだ者は甦りはせん、話もしてならん。生と死の狭間に踏みこんではならん。多くの者は死者と会話ができるうちに生きる力を使いはたして、いっそのこと死のうとした者もいた。他人の死を受けいれることこそ、自分が生きている何よりの証拠。そのことを忘れるなど愚かなことじゃ。これ以上は君をだめにする、とわしはそう判断した」

「あ、あなたは一体どこの誰なの?」

ナオミはボソボソいった。

「わしは君がどこの誰だか分かったのに、君はまだわしが誰だか分からないのかね。いやそうではあるまい。ちょっと混乱しているだけじゃ、よく考えてごらん?」

この優しい穏やかな喋り方、確かに以前どっかで聞いたことがある懐かしい声だ。生きている者すべてを愛おしむ声、そのときナオミははっと思った。

「もしかしてトモロヲ・ブドリ伯爵ですか?」

「前伯爵じゃよ、ナオミ・ニト。いいかね、生きている者は生きられる時間を必死に生きねばならん。死はいずれ、皆に訪れるからのう。君が必死に生きることこそ、死んだ者とともに生きるということなのじゃ。十四歳の女の子には難しかったかのう?」

「いいえ、仰りたいことはよくわかります」
彼女の言葉にトモロヲ・ブドリは微笑んだように思えた。
「お利口さんじゃ、それならばもうわかるね。黒金貨はゴミ箱に捨てなさい」
「これが最後の一枚でした」
ナオミはため息をついて、とても残念そうにいった。

「なるほど、君は思ったよりもしっかり者のようだ。最後にご両親と会話したい――だが心弱い者にとって、それが最後にならん場合もある。いいかい、ナオミ。君のご両親は君のためにわしの説得に応じた、そのことをよく考えるんじゃよ。さてと、もうそろそろお休みの時間じゃ。わしはこれで失礼する」
電話は静かにツーッ、ツーッときれていた。
ナオミはこれでよかったんだ、と思ったのは見習部屋に戻ってからだった。確かにこの三日間、自分はどこにいたのかも分からなかった。まるで夢のなかにいたようだった。ちゃんと必死に生きようとしなかった、もしあのときトモロヲ・ブドリじゃなくて自分の両親だったら――たぶん彼と同じことをいっていたかもしれない。

翌朝、ナオミ宛てに小さな赤い宝箱が届けられた。
宝箱には鍵はかかっていない、ナオミがそっと宝箱を開けてみれば、赤いビロードの布地に真ん中に、大きな銀のゴブレットが納まっていた。

メッセージカードには、こんなことが記されている。
「…昨日のお詫びじゃ、遅れながらのクリスマスプレゼントを受け取ってほしい。わしの愛用のゴブレットを君に譲る。これはおそらく君が探していたものだ」

名前は書いていなかったが、誰が贈ってきたものかはわかる。

トモロヲ・ブドリだ。そしてこれが、そうこれが自分たちが探していたカーボネック聖杯城の秘宝、アリマタヤのヨセフの聖杯であることは疑う余地はなかった。

ナオミは瞳の記憶、ムッシュ・ホワイトの言葉を思い出した。

あなたはエルフ歴代君主のご親戚でもあられる、なるほどそういうことだったのか。

エルフ王ジェラール二世のあの言葉「聖杯の所有者はそなたの近くにあって、そうでない者。そなたが求めるならば、その者はそなたの求めに応じよう」の意味もようやくわかった気がする――――確かにアリマタヤのヨセフの直系子孫は、すぐ近くにいた。

第２０章　解き明かされる紐【１】

第２０章

真に迫った少女の顔が美術展にて大絶賛をうけたのは、今から九年前のある日のことだった。それはある貧しい青年彫刻家が掘ったものであるそうだ。その後、青年は生き生きとした、その作品のおかげで世に広く認められた。

最初の頃は仕事の依頼が舞いこんできたものの、彼の仕事の内容はどれも少女の彫刻のように素晴らしくなく、いわゆるすべて駄作であった。次第に彼への評価も下がり、当然のように仕事もこなくなった。それから誰もその青年彫刻家を知らないという。

「なるほど、それはとても興味深い話だね」

ベリー・グッドウィル画伯はナオミたちに紅茶を入れていった。

「それで僕のところにやってきたわけか――――」

ふーっと画伯はため息をついた。

クリスマスウイークから三日後、十二月二十九日の午後二時。

ここは古きよき時代通りの二十二番館だ。ちょっと昔まではニコラス・クローズのアトリエだったが、老人が亡くなったあと、息子のクローズ氏がここにアトリエを開いていた。突然、画伯は若き日に思いをよせるように遠い瞳になった。

「恥をさらすようだがすべてを語ろう。今から九年前、私は今日にいたる名声を成しえてはいなかった。つまり若い頃の私は本当に貧乏だった。あの頃は生きるのに本当に必死だった、名が売れるのなら何でもしようと思っていたんだ。

そんなときだった、ある人が私に肖像画を書いてくれと依頼してくれた。今となっては父さんがその人に頼んだってわかったんだが

ね。そんなある日、私はあの少女の素晴らしい彫刻に出会ってしまった。その人は気にいったらあげようといってくれた、自分もそのほうが助かると不思議なことをいっていたがね。

彫刻はそれは見事なもので、若さからの愚かさ、芸術家としてあってはならぬ愚かな行為だと知りつつ、悪いと思いながらも好意で譲り受けたあの彫刻を権威あるコンクールに出品したところ、それはそれは素晴らしい絶賛を受けてね。いつしか私は彫刻家として生計を立て始めるが、それも長くは続かなかった。それもそのはず、あれは私の才能ではどうしても彫れない代物だからね。批難なら甘んじて受けよう」と画伯は顔をくもらせた。

「なんで出展したんだ？」

ロロは遠慮がちに、しかもさりげなく聞いた。

「妻が病気でね、お金が必要だったんだ。優秀賞には賞金一万ミスリル金貨が贈られることになっていてね。結局、妻は半年後に他界したがね」

こんな話を聞けば、誰も彼を責めることはできなかった。

「画伯は誰からその彫刻を譲ってもらったの？」

「ジョルジョ・パパティーノ伯爵からだよ。僕の売れない絵と交換したんだ。肖像画の絵の依頼はコクーン・コ・クーボからだ。パパティーノは今でこそ伯爵だがね、昔はコ・クーボ家の執事、男爵の家柄だったんだ。その三日後、あんな悲劇が起こったなんて、今だに私には信じられない」

「コクーン・コ・クーボ！」

ナオミとロロは声を張りあげた。

「彼を知っているのかい？　彼は僕の二番目の収集家（パトロン）なんだ」

「コクーン・コ・クーボは俺の叔父だ」ロロは口ごもった。

「なんと君はコクーンの甥だって？」

グッドウィルの声に不思議な響きがあった。

「彼とは同じキング・アーサー地区だった。よく一緒に冒険もした仲だよ。それに君をロートレック孤児院に預けたのはこの僕だ、コクーンに頼まれてね。君があのときの赤ん坊だったならいうんじゃなかった……」

グッドウィルは悔いる顔つきでロロを見つめ、そしていった。

「あ、あの。もしかして…」

ナオミはロロの言葉を代弁するかのようにいった。

「グッドウィルさんはコクーン・コ・クーボさんの居場所を知っているの?」

「ああ、知っている」

なんともさらりと画伯は答えた。

「いやある男が彼の居場所を知っていると、いうべきだろうな」

「ある男って?」

ナオミの胸はドックンと高鳴った。

「ロベルト・パパティーノという男だ」

ロベルト・パパティーノ。シャルル・パリオリの錬金術師の師匠にして、ダ・カーポを黒ヤギにした張本人だ。その名を聞くと、ナオミたちは紅茶を勢いよく飲み干し、せかせかと彼のところへと赴こうと席を立った。

部屋をでるとき「グッドウィルさん?」とナオミはあることを男に訊きたくなり、声をかけた。

「コクーン・コ・クーボさんをご存じなら、私のお父さんとお母さんとは友だちだったの?」

グッドウィルは紅茶を飲んでいたところいきなりゴホッゴホッとむせた。

「…あ、ああ、二人とは友だちだった…」

「それならサンチョ・ボブスリーは?」

「いきなりどうしたんだね?」

グッドウィルはとても驚いているようだ。

「いえ、あのサンチョ・ボブスリーは私のお父さんたちと友だちだったって…」

「殺されたサンチョは私たちの友人だったよ。ナオキ、ロエスレル、サンチョ、アリス、ダ・カーポ、コクーン、そして私をふくめた七人は白馬の騎士同盟という誓いを結んだ仲だった。でももう遠い話だよ」

第２１章　解き明かされる紐【２】

第２１章

目指すべきところは丘のうえ大通りの二丁目、パリオリ錬金薬局だ。行き道でラインハルト警部とばったり出会った。彼の隣には女の人がいる。しかも見覚えのある女の人だ。そうこの人は推理記者エイブラハム・アグリじゃないか。

女の自分からみてもやっぱり彼の女装は美しい。

「ちょうどあなたたちを探していたところなの」

ナオミが顔をしかめたのは嫉妬だけじゃない。今、自分は大いなる謎解きに忙しいのだ。

「事件解決までの道筋はあまりかんばしくないの。昨日、またジョルジョ・パパティーノ卿が闇討ちにあったんですの。幸い大事にはいたらなかったようだけど」

闇討ち――すなわち暗殺者（ヒットマン）か。すっかりその存在を忘れていた。

「アグリさん、それはまだ公表していないのに、なぜあなたが――」

ラインハルト警部が女言葉に顔をしかめれば、コホンッとアグリは咳払いして、声色と言葉遣いを元に戻した。

「知っているよ。だって僕はそこにいたんだからね。だがこれで犯人について、ちゃんとした確信がとれたよ。さあ、彼が新たなる殺人を犯すまえに急がねば。そこで君たちにサー・ドラゴンヌを呼んできてほしいんだ」

エイブラハム・アグリの瞳は輝かしていった。

「彼の協力なくして、おそらく犯人逮捕はむずかしいからね」

「でも私たち、今からシャルル・パリオリ子爵のところにいかなくちゃいけないの」

ナオミは今にも泣きだしそうな声でいった。
「ふーむ、でもテル・ウォ・アボカドはそのことに関係ないようだね。まあ、そのぐらい君たちの顔をみればすぐにわかる。変装術の基本中の基本だよ。どうだろう、テル。彼を呼んできてくれたら、騎士メダル三十枚を贈呈しよう！」

「騎士メダル三十枚だって！」
テルは思わず飛びあがり、手を叩いて喜んだ。

「集合場所は『パリオリ錬金薬局』にしよう。ちょうど僕もそこに足を運ぶつもりだったんだ。事件の証人の証言がほしくてね。それからテル、サー・ドラゴンヌとは馬車か、車のどちらに乗ってくるんだよ。犯人を運ぶのに必要だからね」
テルの姿が見えなくなると、ケネディ・ラインハルト警部は飽きれていった。
「いいんですか、たったサー・ドラゴンヌを呼びにいくだけで一一一」

エイブラハム・アグリは得意げに人さし指をたてた。
「それほどの価値はあるのだよ、ラインハルトくん。あとで君もそれは認めざるえないことになるだろう。それというのも推理を始めたとき、君たちは目のまえの唯一の重要な手がかりを見逃してしまった。だけど僕はそれを見逃さなかった、まあ、これも変装学の博士号のおかげだろうね。だからその後の事件の成りゆきはすぐにわかった。そしてそれを防ぐために僕は侵入捜査に入ったんだ。
そんなわけで君たちを悩ませた事件は、僕にとって推理の正しさを立証するものになったわけなんだ。とはいえ、犯人はまだ目的をはたしていない。つまり犯人の目的、それがパパティーノ伯爵の殺害だ」

じりじりしながらラインハルト警部は、アグリの推理演説を聞いていたが、もうすでに犯人が分かっているのにどうしようもできないというか、それを教えようとしない、このちょっとばかり変わった男にいいよった。

「犯人の目的もその犯人も知っていながら、どうしてあなたはその犯人を捕まえようとしないのか、まったく僕にはわからない。いいですか、エイブラハム・アグリさん。もうこのへんではっきりしてもらいたんですがねえ?」

「いやそれはできない」

エイブラハム・アグリは首を縦には振らない。

「確かに僕は犯人を知っているし、その目的も知っている。動機も何となくだけどわかっている。でも証拠がないんだよ、証拠がね。ですから逮捕をするなら、現行犯でしか逮捕できないんだ。まあ、もうじき逮捕はできますがね。手配はご心配なく、この僕が先ほどすましておきましたから」

ナオミたちは丘のうえ大通りの二丁目にある、パリオリ錬金薬局にまでやってきた。大きな扉の前にたつと、緊張気味に扉の把っ手をトントントンと叩けば、鼻がもげそうなタマゴの腐った臭いは相変わらずだ。

「君たち、何のようだい? 講義は明日の予定だが?」

パリオリはラインハルト警部を見ながら、ナオミにいった。

「サー・ロベルト・パパティーノはご在宅ですか?」

「ふー、またうちの先生が何かやらかしたんですね、やれやれ」

パリオリは警察にご厄介になることを仕出かしたんだな――――という確信の顔つきだ。すぐに四人は客間に案内され、「今すぐ先生を呼んできますので、どうぞお待ちを」とパリオリは奥の部屋に

姿を消した。
数分後、四人はロベルト・パパティーノをかこって、一緒に紅茶を飲んでいた。アグリはさすがというべきか、紅茶の香りをくんくんと嗅ぐと「おやっ、これはキャッスルトン茶園産のタージリン紅茶だね」と紅茶の産地と種類を見事にいい当てた。
「君たち、紅茶の種類をいいにきたわけであるまい」
さすが鋭い。錬金術師だけのことはある。

「コクーン・コ・クーボに会いにきたんだ」
ロロは遠慮がちにいえば、ナオミたちは静かに頷いた。
少女たちのそんな言葉に、ロベルト・パパティーノはたじたじになった。シャルル・パリオリはなんだ、そんなことかと一安心。「先生、減るもんじゃないんですから、もう教えてあげたらどうですか?」と明らかにナオミたちの味方だった。
「ロベルト・パパティーノさん」
アグリがあることに気がついた。
「もしかしてあなたがコクーン・コ・クーボでは?」
ロベルト・パパティーノはギクリッとした。

「どうして、そう思うんだね?」と男はアグリを睨んだ。
「べつに一一一一ただ変装がちょっとおかしいから。とくにしわのあたりなんか」
論より証拠だ。アグリは「残念ながら僕の目は、誤魔化せませんよ」と女装をベリッと解いた。美しい女の顔のしたには、凛々しい青年の顔が現れた。女の服装を脱ぎ捨てた、男にもどったアグリに二人は驚いていた。

「…君はエイブラハム・アグリ…」
「ええ、理由があって死んだことになっておりまして…」
ラインハルト警部は彼を擁護した。

もはや言い逃れはできない。決してアグリの趣味が女装だ、ということではない。ロベルト・パパティーノは眉間に深いしわをよせ、瞳をぐっと閉じた。何か深い物思いにふけるかのようなしぐさをみせたと思えば、ふーっとため息をもらした。

それからチラッとロロを見つめた。

「…ロミオ・ラマンチョ・ピエモンテ・コ・クーボ、君が受け継いだ古き名前のように私もコクーン・ロベルト・パパティーノ・コ・クーボ、こういう名前を先祖から受け継いでいるんだよ」というとロベルト・パパティーノは、ベリベリッと音をたて、顔のゴム皮膚をめくった。

その下からでてきたのは、二枚目のほっそりした灰色髪の男だった。鼻立ちと目のあたりがどことなく、ロロに似ていた。

ロベルト・パパティーノ、彼が造りだした偶像だ。

「ずっと変装をしていらっしゃったんですか?」とアグリ。

「まさか、人前にでるときだけだよ。シャルルとグッドウィル、僕のせいで黒ヤギになったダ・カーポの三人は僕がコクーン・コ・クーボというのは知っている。確かに僕はコクーン・コ・クーボ、君のどうしようもない叔父だよ」

コクーン・コ・クーボは名高い子爵の次男だ。

九年前、家督と爵位をめぐり、兄ピエモンテ・コ・クーボ夫妻を殺しの容疑を当局からかけられ、指名手配になってから、誰一人と彼の姿を見た者はいない――――こんな近くにいたなんて、いやこんなすぐ近くにいたなんて、まさに木を隠すには林のなんとかだ。

ナオミたちは驚きのあまり何もいえずにいた。

「ロロ、君がここまで利口だとは思わなかったよ。もし問われなかったら、僕はずっと君とはロベルト・パパティーノで会っていた。

君を危ない事件に関わらせないためだよ、まるで君たちは若き頃のナオキとロエスレルのようだ」

「どうして変装などを？」

アグリはコホンッと落ちついたせき払いをした。

「ある悪党から自分を守るためだよ」

コクーン・コ・クーボはナオミにチラッと目をやった。

「ちょうどいい、いつか君にも話しておこうと思っていたんだよ。遠かれ近かれ、君にも関係があることだからね。ロミオから僕の手紙の話は聞いたかい？」

ナオミは静かに頷いた。

「あれは僕の知っている話の半分、あの手紙にはこういう続きがあるんだ」

第２２章　解き明かされる紐【３】

第２２章

コ・クーボ家の悲劇、あれがモンテカルロ党の陰謀だったのはナオミが知るところ。ピエモンテ・コ・クーボ夫妻が殺されたのはある高貴な人を救うため、しかしその人の名前は誰も知らない。

「兄貴はあとで話すといったきり帰らぬ人となったからね。あの事件が起きた日、僕は悲報を聞いて屋敷に駆けつけてみると――兄貴とマリアノ義姉（ねえ）さんは死んでいた。そしてそのときだった、兄貴の秘書だったアイツに出会したんだ！」

「アイツって？」

コクーン・コ・クーボは歯噛みをした。

「ジョルジョ・パパティーノだよ。アイツはあたかも僕を兄貴殺しの犯人にしたてようとした。たぶん兄夫妻を殺ったのは連中だ。兄貴とマリアノ義姉さんは、石像みたいにカチカチになって死んでいた。僕にはすぐにわかった、これはパパティーノが飼っていたコッカトリスのしわざだとね」

コッカトリスは尻尾が蛇、自分が睨んだ者を石にしてしまうのが特徴だ。人造人間を製造していたことでもわかるようにパパティーノは非合法とされる、黒魔術の熱心な研究家だ。

「三日前、僕の屋敷で働いていたハナコっていう女の子が石になっていたからね。可哀相にコッカトリスの餌食になったんだろう。クリスマスのローストチキン専用に育てていた、ほかの鶏と一緒にまぜて育てていたらしい」

その後、ピエモンテ夫妻の亡骸は行方不明になった。

彫刻としてパパティーノがどっかに売り飛ばしたのだろう。グッ

ドウィルがパパティーノから、自分の絵と石になった女の子を交換したように。コッカトリスはクリスマスの日にローストチキンにして食べれば証拠は残らない。羽根をむしり、尻尾を落とせばただの鶏、これぞ究極の完全犯罪といえよう。

身に覚えのない兄夫妻殺しの罪をなすりつけられた、コクーンは自分の無実を証明するためにある友人を頼った。

「そ、それが私のお父さんとお母さんだった……」

ラインハルト警部はふむふむと頷き、羊皮紙の手帳にすらすらとコクーンの言葉を一言残らず、メモしていた。アグリは珍しく黙っていた。

ナオミの両親が殺害される時間帯、ちょうどコクーン・コ・クーボはグッドウィルのところへ外出していた。当時の天才画家は貧しく、コクーンは絵を買うことで彼を経済的に援助していた。それはグッドウィルの父、故クローズ氏からの頼まれていたことだ。用事を終わらせて開かずの扉から、帰宅の途についてみれば、ニト夫妻が何者かに殺されていたというのだ。

「現状証拠じゃ、どうみても僕が殺ったことになる。僕は怖くなって逃げだした」

コクーン・コ・クーボの声が途切れた。鼻をかむ大きな音が何回か聞こえてくる。

「あとで新聞をみてびっくりしたよ。あの男が、あのサンチョがナオキとアリス殺しの犯人っていうんだからね。僕はあの――――あの光景だけは今でも忘れることができない、思いだせばだすほど身の毛がたつ」

数日後、男は兄夫妻殺しの容疑で賞金首がかけられた。

「僕は名を捨て、地下に潜った――――」

ナオミの甦った記憶、瞳の記憶によれば、自分はホワイト刑事によって助けられたものの、両親は極秘作戦『ロアゾン』の任務中、

正義を貫いたために軍警察の闇討ちにあって命を落とした。記憶のなかの父は「不正に屈するぐらいなら、喜んで死ぬ」といった。父と母はその秘密のために殺されたのは間違いない。

軍警察は事件の真実を揉み消した。

たぶんコクーン・コ・クーボは、この事件に直接関係はない。

「ヤツに屈しろと？　アイツとお前のようにか？」

父のこの言葉が気になる。ヤツって誰だ？　アイツって誰だ？

サンチョ・ボブスリー、いやサンチョ・ボブスリーなる人物のわけがない。自分は彼のおかげでヤドリギから解放され、自由を手に入れた。その人は殺し屋からも幾度となく自分を助けてくれた。その人はアイツに殺された――そう、あの男に。

あの男こそ、自分の父と母を殺した犯人なのだ、間違いない。

「サンチョが誰かに殺されたのは意外だった…」

「まさかあなたじゃないでしょうな？」

ラインハルト警部は疑うような目つきでコクーン・コ・クーボをみた。

「あなたのいうことが仮にですが、本当の話であったとしても一般世間では、兄ピエモンテ・コ・クーボ夫妻殺しにより、あなたは指名手配されているんですよ」

「ケネディくん、犯人は彼じゃないよ」すかさずアグリはいった。

コクーンは口惜しげにいった。

「…サンチョは口封じのために殺されたんだ」

そうかもしれない。いや本当にそうなのだろう。

父と母を殺したのは本当は、本当はドラゴンヌだ。

そして自分の命を狙っている殺し屋。サンチョ・ボスリーは無実

の罪で投獄され、冤罪を晴らすため、執念でモン・サン・ミッシェルを脱走し、ドラゴンヌを追いつめたところで逆に殺されたんだ。

「それが君たちの辿りついた推理なら……」

エイブラハム・アグリはちょっと笑っていった。

「残念ながらはずれだ」

コクーン・コ・クーボはアグリの言葉をすらりと流した。

「思えばサンチョはね、太っちょのおっちょこちょいの食いしん坊の少年だった」

（…マイケルみたい…）とナオミはひそかに思った。

ロロは言葉もなく、ナオミをみつめていた。

ナオミはこれまでもなく、今まで考えないようにしていた両親の死、愛する両親たちを殺したロエスレル・ドラゴンヌのことを考えた。領主館で出会った頃はまだよく分からなかったが、今なら経験したことのない激しい怒り、憎しみが血液のように体中をめぐり、息苦しさに襲われた。

心の耳にロエスレル・ドラゴンヌの残忍な笑い声が聞こえる。

「ナオミ?」

遠慮がちにロロの声がした。

親友に裏切られたとき、父と母はどんな気分だっただろうか。

もし黒金貨が残っていれば、二人は自分とどんな会話をかわすだろうか。許してやれとでもいうのだろうか。それとも仇をとってくれというだろうか――父と母が信頼していた友に裏切られる姿を想像しただけでも胸くそ悪い、ナオミはキュッと唇をかみしめた。

「私、アイツのこと許せない!」

「復讐なんてくだらないことだよ」

彼女の心を察するようにアグリは冷静にいった。

「なんの価値もない、卑怯者のやることだ。君はロロを見習わなくちゃいけない。彼はとても冷静じゃないか」

ナオミは黙っていた。自分でもどうしたいのか分からないのだ。ただしロエスレル・ドラゴンヌが野放しになり、牢獄にぶちこまれるはずだった彼のかわりに無実のサンチョ・ボブスリーが九年間もぶちこまれ、死刑前日に脱走した彼をあんな惨たらしい殺し方をしたドラゴンヌは許せない。何もしないでいるのは、耐えるに耐えられなかった。

「…どうして呼んだの？」

ナオミは出し抜けにいった。

「だったらなぜアグリさんは、ここにロエスレル・ドラゴンヌを呼んだの！」

ナオミの言葉にコ・クーボは飛びあがって驚いた。

「それは本当ですか？」

「本当だよ、コ・クーボさん。君たちは何か大きな誤解しているようだがね。彼は被害者であり、同情すべき可哀相な人なんだ。だけど今の君たちは彼と会うやいなや、斬り合いにでもなりそうな顔つきをしている。万が一、斬り合いになってもだ。君たちには勝算はないよ。彼は剣の達人だからね」

瞬時にナオミとテルは、迷いの森でのドラゴンヌでの決闘が脳裏に浮かんだ。

「いや斬り合いになっても彼なら、大人しく殺されるだろうね」

「どうして？」

ナオミはするどく聞き返した。

「それは本人に聞きたまえ」

するとまもなく、コンコンッとドアをノックする音が聞こえた。
「ドラゴンヌ先生を呼んできました」と、得意げなテルと裏腹に用心深さそうにロエスレル・ドラゴンヌがまわりを警戒して現われた。その姿は最初に出会ったあのときの雰囲気とは違い、やはり別人のようだ。

迷いの森で出会ったドラゴンヌの雰囲気のままだ。
この雰囲気が彼の本当の雰囲気なんだろうか。また男はコクーン・コ・クーボ、そして公では不慮の事故死を遂げたとされるエイブラハム・アグリの姿をみて、ちょっとばかり驚いていた。
「これはわけありのようだ。それで何か俺にご用とかで?」
ロエスレルは静かにいった。
「…い、いや僕じゃなくて、あの…その…つまり――」
シャルルは何ていっていいのかわからず、どもってしまった。

「ええ、君を呼んだのは僕でしてね。サー・ドラゴンヌ、あなたの足でね、ある荷物をあるところまで運んでもらいたいんですよ。引き受けていただけますかな?」
「運ぶものによるがな」
「簡単なことですよ、あなたを運ぶだけですから」
「どこにだね?」
エイブラハム・アグリは立ち上がり、ドアをピシャリと閉めた。
「アッパータウン警察署です。皆さん、サー・ロエスレル・ドラゴンヌを改めてご紹介いたします。サーはサンチョ・ボブスリー殺しの犯人であり、パパティーノ伯爵を闇討ちした、殺人未遂の犯人です。そして彼は自ら自首してきた次第です」エイブラハム・アグリの瞳はこれまでもなく輝いていた。

彼の話のあと、それは長い沈黙が続いた。
「なるほど」とドラゴンヌは、ニヤリッと黄色い歯をむきだして「

これはおもしろい」と笑った。
アグリはナオミをチラッとみた。ナオミはドラゴンヌをキッと睨み、
ドラゴンヌの鋭い目はナオミをしっかり見据えていた。

第２３章　解き明かされる紐【４】

第２３章

ボーンッ、ボーンッと客間の振り子時計が午後四時を告げる。
「…君はますますアリスにそっくりだ…」
それはかすれた声、どこか悲しげな声の調子だった。
「君をみていると昔を思いだす。ちょうど君たちと同じぐらいだろうか、私たちはいろんな冒険の旅にでた。万年時計の幽霊騒ぎ、カーボネック城への冒険――――数えきれないほどの大冒険をした。その渦中で私たちは友情をふかめた――――」
「…あなたはその友情を九年前、裏切った…」
ナオミは憎しみを噛みしめるようにいった。

少女の胸は憎しみで煮えくり返り、この目のまえにいる男に決闘を挑みたくなった。いやそれどころか、彼女は今すぐにでもロエスレル・ドラゴンヌを傷つけてやりたい、例え刺し違いになってもかまわない――――とさえ思った。
ドラゴンヌがまたニヤッと笑った。ついにナオミの怒りは爆発した。彼女が剣の柄に手をやったとき、うえから誰かが彼女の手を押さえこんだ。
「やめるんだ！」
ロロは顔を青ざめて、哀願するようにいった。
「コ、コイツはお父さんとお母さんを殺したんだ！」
ナオミは声を荒げ、ロロの手を振りはらった。怒りは炎のようにうねる。柄を握りなおすと、ナオミは剣を素早く抜いた。
「うおおお――――おぉ！」
女の子であることを忘れたかのように、剣を振り上げる。

渾身の力で襲いかかるナオミに男は有無をいわず、少女の太刀を受け流した。悲しい瞳が印象的だ。それでも少女は狂ったかのように、男に剣を向ける。何度やっても結果は同じだ。そう簡単に父の右腕と呼ばれた男に勝てるはずがない――そんなこと、ナオミもわかっている。

そう、迷いの森で剣を交えたときから分かっている。

たぶん彼女が戦っているのはドラゴンヌではない、父と母の敵でもない。彼女もその答えを知りたくて戦っている。自分を狩り立てるこの気持ち、一体何だろう？　目の前の男を殺せと命じる、心の奥深くあるどろどろした何か。

――ドスッ、鈍い音が聞こえた。

ナオミの腹部にドラゴンヌの剣の柄が勢いよく食いこんだ。

勢いあまって前のめりにと倒れつつも、彼女はドラゴンヌを睨み倒した。同時にジョジョは男の左足に噛みつき、ドラゴンヌは痛さのあまり呻いた。テルは彼の顔に袋をかぶせて、モゴモゴと苦しんでいるなか、「この野郎！」と手当たり次第、男の頭をボコボコに殴った。

ドラゴンヌはテルをふりのけ、ジョジョを蹴り飛ばし、頭にかぶせられた袋を脱ぎ捨てるとそこに待っていたのは、ナオミが自分の首もとに剣を突きつけたまま、こちらを凝視している姿だった。ナオミは唇から血を流しつつ、自分を睨みつけている。

彼女を止めようとするパリオリやラインハルトを「手をだすんじゃない」と抑えていたのは、コクーン・コ・クーボだった。エイブラハム・アグリとロロはただ静かに黙って、ことの成りゆきを見守っていた。

「お前は私のお父さんとお母さんを殺した」

ナオミは怒り震える声でいった。

「だから俺を殺すのか？」ナオミはコクッと頷いた。
彼女の頷きに「…俺に弁解の余地はない、好きにしろ…」と物悲しそうにいうと、静かに瞳をつぶる。
ナオミはカタカタッと震える自分の腕をみた。
「やめろ、ナオミ！」
こんな真顔のロロは見たことがない。
「お前がやろうとしていることは、ドラゴンヌと同じことだぞ！」

そういうロロも魔族を殺していたではないか、まるで虫けら当然のように。
いざ人を殺すというのは一体どんな気分なんだろう？　あのキツネ狩りのキツネみたいにのをひくように、この男の心臓を貫けばそれでいいのだ。それで両親の仇をとったことになる。
「一生後悔するぞ！」
「そんなこと、ロロにいわれずとも分かっているわ！」
ナオミの心は怒りと憎しみがドックンッ、ドックンッと脈打っていた。人殺しとはいえ、きっと一生、自分は後ろめたさを感じて生きるに違いない。でもやるなら今しかない、そのときある言葉がふと脳裏にかすんだ。

――自分の弱い心に打ち勝つのです、ナオミ！

引継ぎ式のときに聞こえた、あの女の人の声だ。
ナオミは今ようやくわかった。自分が戦っていた者、ドラゴンヌでもない。父と母の敵でもない。それはモンテカルロ、いや迷いの森の辺境伯に姿をかえた憎しみ。そもそも引継ぎ式に現われた辺境伯は、自分の胸に宿る憎しみだった。

敵は、黒幕は自分だった。今、ようやく気がついた。

自分は人生を狂わされた、モンテカルロという名の憎しみと戦ってきたのだ。目の前の男を殺しても、おそらく憎しみは消え失せることはない。黒幕は胸に宿る自分、弱い自分なのだから。今まで自分はまわりのせいにして生きてきた。本当はそうじゃない、本当はまわりじゃなくて、自分なんだ。戦うべき相手は自分なんだ。

カランッと剣が地面に落ちる音がした。彼女の頬から、とめどなくポロポロッと、大粒の涙がしたたり落ちた。

「…もう気がすんだかい？」

コクーン・コ・クーボは彼女にそっとガウンをかけると、今度は頭から血を流しているドラゴンヌをさりげなくみて、タオルを投げ渡した。テルは壁に鼻をぶつけて、鼻血を床にボタボタッ――と垂れ流していた。ジョジョはナオミに近寄って、彼女の顔を必死に舐めていた。

コ・クーボは「ロエスレル、どうしてサンチョを殺した？」と静かに訊いた。

「…あいつは『迷いの森の一味』だ…」

「それはお前だろう？　僕が聞きたいのは――」

「頼むから聞いてくれ！」

ドラゴンヌの声には緊迫したものがあった。

「…お前たちは信じないと思うが、これは大切なことなんだ…」

「僕はあなたの言葉を信じるがね、ドラゴンヌさん」

アグリの紳士的な言葉にドラゴンヌは耳を疑った。

自分を信じるといってくれたのは遠い昔のこと、もうとっくに忘れていた人間らしさを耳にしたので、男はアグリをとても不思議そうに見つめ、そして「ありがとう」と小さな声で囁いた。

「コクーン、お前はどこまであの日の真実を知っている？」

第２４章　解き明かされる紐【５】

第２４章

ドラゴンヌは極秘任務『ロアゾン』の主要メンバーの一人だった。ロアゾンと呼ばれる極秘任務は、迷いの森の一味への侵入捜査が主な任務だ。捜査本部は軍部のなかにも迷いの森の一味が潜伏していることをかぎつけた。もちろん捜査本部も捜査対象の例外ではない。捜査本部、警察本部、軍本部、いわゆる軍警察への侵入捜査と一味の一掃が『ロアゾン』の極秘任務なのだ。ゆえに別名を『暗部』と呼ばれる。

設立者はエルフの歴代君主ジェラール二世だ。

ロアゾン率いるナオキ・ニトは、エルフ王の意向に従い、迷いの森の辺境伯をモン・サン・ミッシェルに幽閉した。また彼らはエルフ王より、辺境伯が脱獄したおりは行動をともにするよう命じられていた。

その矢先、極秘任務の情報が漏洩した。密告によって迷いの森の一味とレッテルを貼られたナオキ・ニト率いるロアゾンは、軍警察の総攻撃にあって壊滅した――ロエスレル・ドラゴンヌは遠い目になってすべてを語り終えた。

「お前が密告したんじゃないのか？」

もちろん殺されたサンチョもロアゾンのメンバーだった。

「お前はナオキとアリスを殺した。その目撃者だったサンチョに無実の罪をかぶせ、ともに闇に葬った。だが予想外のことが起きた、サンチョがモン・サン・ミッシェルを脱獄した。そしてお前は――」とコクーンは唸った。

ロエスレルはそれは違う、と首を横にふった。

「サンチョを殺ったのは俺だが、ナオキたちを裏切ったのは俺じゃない。裏切ったのはサンチョ・ボブスリーだ。いや正確には俺になったヤツだった。他人転生で心と身体が入れ替わっていたんだ」

一瞬、重たい空気が流れた。

その言葉に頭が真っ白になった、とばかりにコクーンは痙攣している。いや事実を知って震えている。彼は今、事態を呑み込もうと必死なのだ。自分は今までとんでもない間違いを、勘違いをしていたばかりに。

「なんていうことだ！」

いきなりコ・クーボは額に手をやった。

「…僕はてっきり君が犯人だと。君はサンチョとカメレオンになっていたのか…」

「そういうことだ、コクーン」ドラゴンヌをゆっくり頷いた。

ナオミはほんの一瞬、コ・クーボをみた。その次にドラゴンヌをみた。

二人が何をいっているのかは分からなかった。それはロロもテルも、ラインハルト警部も同じだ。だけどアグリは二人が何をいっているのか、理解しているようだ。

「…あ、あのコ・クーボさん…」

ナオミが緊張した声で二人のなかに割って入ったそのとき、いやはや信じられないことが起きた。

コ・クーボは壁に背もたれして、息苦しそうなドラゴンヌに手を差しだして、彼を立ちあがらせると「許してくれ。この九年間、お前を誤解していた」とドラゴンヌをギュッと抱擁した。

ナオミはもうすぐで発狂しそうになった。

「ときに事実と真実は違うものだ、世間一般による事柄が事実であったとしても、その事実をべつの角度から解釈できたとき、人はそ

れを真実と呼ぶということぐらい、君たちだってわかっているはずだ」

アグリはナオミたちをじっと見つめながらいった。

「――僕はね、この事件の真相をこう結論づけている」

アグリはドラゴンヌをじっと見据えた。

「サンチョ・ボブスリーは、ロエスレル・ドラゴンヌだったと」

皆、彼の口からでた突拍子もない、この言葉を理解するまでに数秒はかかった。

「アグリさん、聖ハレルヤ病院でもいってきたら？」

テルがナオミの言葉を代弁してくれた。

「バカバカしい、作り話にもほどがある」ロロもすかさずいった。

「サンチョ・ボブスリーは死んだわ。ドラゴンヌが殺したのよ！」

ドラゴンヌの顔がにわかにピクッと引きつった。

「そのとおりだ、俺が殺った」ドラゴンヌはニヤッと笑い、テルとロロは恐怖のあまり後ずさりした。

「君は黙っていろ！　話がややこしくなる」

コ・クーボはドラゴンヌに自粛を求めた。

再びナオミは絶え間ない憎しみに支配され、怒りにまかせて、地面の剣に手をとろうとしたがコ・クーボが一足はやく、彼女の剣を蹴り飛ばした。

「どうして？　コ・クーボさんはアイツの味方なの？」

「昔は君と同じく彼を憎むほうだった」とさらに「だが今はそうだ、ドラゴンヌの味方だ。彼の無二の親友といってもいい」

「どうしてなの！」

ナオミはギュッと歯を食いしばった。

「そうだよ、僕たちはサンチョ・ボブスリーの死体を見たんだ、聖ハレルヤ病院で」

助け舟をだしたテルはアグリをみつめ、それにはアグリもしっか

り頷いた。
「アレは確かにサンチョ・ボブスリーに間違いない。僕がいっているのは、その以前のサンチョ・ボブスリーのことだよ」
コクーン・コ・クーボは無理に微笑んだ。
「ナオミ、最後まで僕の話を聞くんだ、それが君のためになる」とさらに「なぜ彼がサンチョなのかもわかってくれると思う」
コ・クーボもサンチョ・ボブスリーがロエスレル・ドラゴンヌだった――とアグリと同じことをいう。まったくこれでは意味がわからない。
そもそも魂と肉体を分けることなんてできるんだろうか。
いや『悪魔祓いのいわれ』担当のピックル・タナカのところで、学んだ気がある。一時的に魂と肉体を分けることができる禁断の黒魔法――なんだったっけ。襟巻きトカゲ、違う。イグアナ、これも違う。カメとライオン、ちょっぴり似てるが、やはり違う。
ああ、やっと思い出した。
一時的に魂と肉体を分けることができる黒魔法、その名は――。
「…黒魔法カメレオン、肉体と魂分離の秘法…」
そう黒魔術『カメレオン』、別名を他人転生。限定的にだが、自分と他人との心と記憶を入れ替えることができる。ただ長時間使用すれば、元に戻らなくなるという副作用がみつかったため、発明した年にすぐに黒魔術として封印された、これがピックル・タナカの悪魔祓いのいわれで学んだ――突然、ナオミは何ともいえない大きな衝撃に襲われた。
体系理論ではそうだ。実際に自分は体験したことがある。
ダ・カーポのところで自分は、テルと確かに肉体と魂が入れかわ

ったじゃないか。
一瞬、脳が揺さぶられ、聖杯城で出会った人造人間のあの言葉「アイツは自分の魂と肉体が異なるって、いつもほざいていた」が脳裏に思い浮かんだ。自分は異なる魂と肉体が融合する人造人間も知っている。これは嘘のような話だが本当の話だ。

ナオミとロロ、テルはお互いに目を合わせると何といっていいのかわからず、きょとんとしていた。もはや戦意喪失といってもよかった。

「君たち、ここからは第三者の僕が説明させてもらうよ」

アグリの瞳にひそかに真実の炎が宿っているのがわかった。

第２５章　解き明かされる紐【６】

第２５章

ドラゴンヌは物語り、アグリは説明する。

暗闇の宮殿のなか、玉座に座っている男と跪く男がいた。

「パパティーノ、報告によれば忌まわしき『ロアゾン』は今夜滅び去ると？」

「御意、閣下」

今頃、自分たちの下僕が軍部を動かし、ロアゾン根絶に動いているとパパティーノ。

なんていうことだ！　すぐに戻らなければ！　パパティーノの影に潜み、迷いの森の一味の動向を探っていた男は顔色を変えた。チャンスがあれば、連中の寝首を虎視眈々と狙っていた暗部のドラゴンヌは、すぐさま軍艦ロアゾンに奔った。開かずの扉をでて、そこでみたおぞましい光景に男は愕然した。

ロアゾンは軍警察の軍艦に四方八方囲まれ、裏切りの炎に包まれていた。廊下には部下たちの亡骸、奥の作戦本部には見覚えのある指揮官の姿があった。

「ナオキ！」

ドラゴンヌは全身傷だらけの瀕死の親友に駆け寄った。

すでにアリス・ニトは生き絶えていた。男は「ここにすべての秘密がある、お前に秘密と娘を託す」と一枚の羊皮紙を渡し、万事よろしく頼むと笑顔をみせ、その青い瞳から光が消えた。英雄と呼ばれた男は、ついに力尽きたのだ。

「バカな男だ、意地を張るからそうなる」

振り返れば、悪に染まったアイツがいた。ドラゴンヌはすべてを悟った。サンチョ・ボブスリーが何をしでかしたのかを、あの男が一味の密偵（スパイ）だったことも一一一一。

「ボブスリー、お前は死んでその罪を償え！」

剣から鞘を勢いよく抜き、男は修羅となって、裏切り者に襲いかかった。ドガッ！　修羅は後ろから何者かに襲われた。ときに憎しみはまわりを見えなくする。

「そういうお前は生き地獄に連れていってやろう、ドラゴンヌ…」

一一一一まだ仲間がいたのか。この声にも聞き覚えがある。誰だ、思い出せない。

男が意識を取り戻したとき、男は男でなくなっていた。

男の名はサンチョ・ボブスリーと呼ばれ、サンチョ・ボブスリーはドラゴンヌと呼ばれていた。いつのまにか自分の肉体から心と記憶が交換されていた。交戦の末、友から手渡された羊皮紙だけは取り戻すことはできたが、肉体は取り戻すことはできなかった。

魔法をかけたのは自ずと誰なのかはわかった、あの邪悪な男だ。

これは明らかに罠だった。『ロアゾン』殲滅なら自分も例外ではないはずだ。影のなかで聞いた会話、そもそもあれ自体が辺境伯の罠だった。自分が踵を返すことにより、本当の意味で『ロアゾン』殲滅になったのだ。もしあのとき踵を返さなければ、少なくても友の仇は討てたかもしれない。

この日、ロエスレル・ドラゴンヌはサンチョに、サンチョ・ボブスリーはドラゴンヌとなった。モン・サン・ミッシェルにぶちこまれたのは肉体はサンチョ、心と記憶はドラゴンヌと呼ばれる『カメレオン』、無実の男だった。

これが九年前に起きたロアゾンの裏切りの真相である。

「第三者の僕とロエスレル・ドラゴンヌさんの話にそう違いはない。これで僕の推理が正しいと君たちは認めざるえないわけだ。ある真実がそれまで辿ってきた事実と食い違えども、その真実は別の角度から解釈できる。推理は科学、現実のうえに起こりうる事柄を論理的に解釈、証拠ともに解き明かすパズルだ」

テルは「嘘くせえ」とボソボソ呟いていたが、またロロも信じるかどうかをためらっているようだ。だがナオミは警察署や美術館でのアグリの推理を知っていたため、彼の推理はおそらく間違っていないと直感した。

「…私、アグリさんの言葉を信じる…」

やがて彼女の心の霧はゆっくりと晴れて、かすかながらに事件の真相がみえてきた。

ロアゾン殲滅の理由、アグリによればピエモンテ・コ・クーボ夫妻暗殺の理由とさほどかわらないと推理するものの、どうも合点がいかない。自分の両親、ロロの両親が殺された原因は共通の秘密、ある高貴な人を助けるがために殺されたというのだから。

ナオミはまるで金縛りにあったようだった。テルは何がなんだか分からず、そこにただ突っ立っていた。

高貴な人とやらよ、お前は多くの人々の人生を狂わすほど、それほどお前は身分が高貴だというのか？　お前は一体全体、どこの誰なんだ？

ナオミはドラゴンヌに目をやった。

「…あ、あのとき冥界の…そのガルムから私たちを助けてくれた、ドラゴンヌさんって…」

少女の声は震えていた。今度は怒りではなく、戸惑いだからだ。

「…正真正銘、この私だ…」

ドラゴンヌどことなく歯切れが悪い。しかも男はロロをチラッと見つめると、気のせいかもしれんないが、目を背けた気がした。

「目を覚ませば、俺は聖ハレルヤ病院にいた」

そう植物人間のための、匿名病棟で彼は昏睡状態にあった。

「昏睡状態から目を覚ました俺は、看護婦の影に隠れ、病院を抜け出そうとした。そのとき運命の女神は俺に味方した。誰か男の子の料理を食べて、二度目の食中毒になり、入院しているサンチョ・ボブスリーとすれ違った」

そしてその夜、殺意をみなぎらせ、彼はボブスリーのもとにやってきたのだ。

「僕、知らずしらずのうちに人殺しを手伝っちゃったよお！」

ドラゴンヌの言葉にテルは呻いた。

「…君に罪はない…」と男は無気味にいった。

時の砂はサンチョ殺害の前夜までさかのぼる。

ひとまずベッドにもどったドラゴンヌは、病院が静まり返るまで待った。カリヨンの鐘がカランッ、コラーンと午後十時を告げたとき、病室巡回にきていた看護婦の影に潜み、サンチョの部屋をまで息を潜めた。

サンチョの病室巡回が終わったとき、ドラゴンヌは隙をみて、サンチョの影に乗り移った。そして誰もいなくなった頃、男は目的をはたすため、影からぬけでた。

「ボブスリー、起きろ！」

寝言ともに男は目を覚ました。

サンチョは自分の首にナイフが突きつけられ、ようやく事態を呑みこんだようだ。さすがに観念したらしく、九年前、パパティーノに命令されて、ピエモンテ・コ・クーボ夫妻を殺し、ロアゾンを迷いの森の一味に売ったことをついに暴露した。

「断われば俺が殺されていたんだ」
サンチョ・ボブスリーは体を震わせ、無様に命乞いをしている。
「お前はあの人の恐ろしさを知らないだけだ」
「悪に染まりやがって！」
どこかで聞いた言葉と思えば、父の言葉だ。
九年間、無実の罪で生きながらえてきた、ドラゴンヌは正義を貫く。

復讐に燃える男が隙をみせた、その瞬間だった。
サンチョはベッド下に隠し持っていた散弾銃を枕にかまして、男に向けて一発撃った。銃弾はドラゴンヌの首もとすぐ下に命中した。

ビチャッ――と嫌な音とともに部屋に鮮血が飛び散った。

ドラゴンヌの魂がはいったサンチョの肉体は、本来あるべき魂と巡りあい、共鳴したというべきだろうか――彼の魂は、いや精神は硝子のようにいきなり割れた。一方、サンチョの魂も粉々に割れて砕け散った。
「このとき俺は死を覚悟した」
ナオミもロロも、テルもコクッと頷いた。
二人は瞬間的に気を失い、割れた硝子がもう一度、再構築されたのを感じたとともに意識を取り戻してみれば、不思議なことが起きていた。
「俺はベッドのうえにいた」

もがき苦しむドラゴンヌの魂がはいったサンチョの肉体は、サンチョの魂がはいったサンチョの肉体に戻っていたという。この夜、サンチョはサンチョとなり、ドラゴンヌはドラゴンヌとなった。どうやら運命の女神に愛されたのは、最後まで正義を貫き通した者だ

った。

正義を貫き通すとは一一一そういうことなのだ。

サンチョは何がどうなっているのか、わからない顔をしていた。時間の経過とともにサンチョは、ゼーッ、ゼーッと肩での呼吸が目立ってきた。

「ボブスリー、何か言い残すことはあるか…」

サンチョは許してくれ、ドラゴンヌ一一一そういうと意識が混濁しはじめた。

「ロ、ロア…ゾンと、と…もに」ボブスリーは胸に拳をやった。

「バカ野郎が！　誓いを口にするなら、最初から裏切るんじゃねえ」

臆病のあまり、運命に挑むことをやめた男の最期に、ドラゴンヌは運命の恐ろしさを改めて知る。運命に立ち向かうために必要なもの、それは勇気だ。この男は勇気がなかったせいで、襲いかかる運命に翻弄され、宿命に泣いたといえよう。

「今、楽にしてやる」

ドラゴンヌはサンチョ・ボブスリーの心臓を、ナイフで一思いに突き刺せば、男は両手で空を掴むしぐさをみせて、かすれた呻き声とともに痙攣して息絶えた。耳を澄ませば、カリヨンの鐘がカランッ、コラーンと午後十一時を知らせる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5367v/

ブルトンの騎士候補生

2011年9月27日09時38分発行